南紀德川史

第十三册

南紀徳川史第十三册總目錄

南紀徳川史巻之百十六

軍制第三

親征出兵二

南紀徳川史巻之百十七

軍制第四

親征出兵三

一

南紀德川史卷之百十八

軍制第五

親征出兵　四

目　次

南紀徳川史卷之百十九

軍制第六

軍制改革一

目次

南紀德川史卷之百二十

軍制第七

軍制改革 二

目次

南紀德川史卷之百二十一

法令制度第一

目次

南紀德川史卷之百二十二

法令制度第二

目　次

南紀德川史卷之百二十三

法令制度第三

目次

南紀德川史卷之百二十四

法令制度第四

制度 三

目次

南紀德川史卷之百十六

臣　堀内信　編

軍制第三

親征出兵二

長州征伐二

一慶應元丑年閏五月廿二日大坂御滯陣は一統陣羽織着可致旨總軍へ布告せらる

一六月十九日御在坂中御先備之人數幷に右に附屬の者共石屋村御影村住吉村へ出張嚴重取締通行の旅人を改め怪敷もの見掛次第召捕へき旨閣老より被達

十一月十一日御人數石州路へ御差出に付御影村（一本ナシ住吉村）出張の御人數は引揚へく旨閣老より被達

一是月長州糺問之爲毛利淡路吉川監物松平安藝守家來附添上坂すへき旨幕府より達せらる

一七月廿日幕府より軍目付阿部進太郎御人數へ差添被　仰付

一同月廿五日西條公より御陣見舞として御人數被遣御出陣之節いつ迄成共御供御召連あるへき樣にとの事なり

一同月廿九日　將軍家御當家御人數の押前銃隊調練　上覽あり

一八月十八日幕府より毛利淡路吉川監物若病氣にて押ても難出節は毛利左京讚岐幷大膳家老之內申合來九月廿七日迄に上阪すへき旨再ひ松平安藝守へ被達

毛利淡路吉川監物或は病氣と稱し或は延期を請ひ召に應せさりし也

一九月十五日　將軍家御上洛長防處置之儀末家幷大膳家老共今以登坂之儀模樣無之此上違背に及ひ候はヽ最早寬宥之道無之付旌旗を進め伏罪可相糺旨御奏聞之處被　聞召屆廿三日夜大坂へ御還城

此の時に當て英佛米蘭四ヶ國之公使軍艦九艘を率て兵庫に入り九月十七日大坂へ入港兵庫新潟江戸大坂の兩都兩港先期開市を要求す幕府肯せされは直に入京　皇帝に請求をなさんと迫る頑固の攘夷家は是を機として外夷を殲滅せんと飽迄暴論を逞ふするに四ヶ國公使は日を刻して益切迫既に兵を率て京に入らんとするの勢ひ幕府は世界の大勢到底外交を拒絶すへからす無謀の干戈は眼前皇國の安危萬民の塗炭に關する理由得喪等明說辨疎條約の　勅許を奏請すと雖も聽かれす內憂外患一時に迫て危機一髪を爭ふの時一日も早く外國軍艦の攝海退去を謀るより策なく止むなく閣老より書を公使に贈て先期開市を諾す　朝廷憤て閣老阿部豐後守松前伊豆守の官爵を剝き蟄居を命せらる幕府は　朝廷既に其重臣を恣に進退せらる最早將權を奪はれし也と將軍辭職の表を奏し直に大坂を出發東下の途に就く一橋尾張會桑の諸侯單騎伏見に馳て苦諫入京を請ふ　朝廷其辭職を停め遂に條約　勅許あり尙天下之諸侯を會して兵庫開港と長州處置との前後を議せしめ給ひ薩土等上京之四藩も同意云々との　勅文ありし迚執拗不遜の難問を奏し假面に鎖攘を裝ひ右に逆ひ左に戾り陰險無量幕府の政略に妨害を加へ以て倒幕の素志を遂けんと謀る然れ共幕府之を制するの實力を失ひ譜代の諸侯用をなさす八万の旗下亦處女の如く帑藏は頓に空耗至難極窮蓋し此時より甚しきはなし大軍を率て曠日彌久遂に奏功に至らさりしも別なき也

一十月五日幕府より住吉村及ひ大坂市中取締方被　仰出

（當時［一本ナシ］外國人渡來住吉村邊へ上陸も難計萬一粗暴の擧動に可及胡亂の者徘徊も難計候間取締可申且長防御處置御取掛り間近に相成間諜潛入も難計大坂市中其外巡邏之面々持場の儀嚴重取締へきとの事なり）

一同月十七日京都閣老より左之通り藝州へ達す

毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑之廉有之に付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川鉡三郎松野孫

八郎陸地其地へ被差遣候間最前相達候通り末家幷家老之内且奇兵隊中重立候者も三四人十一月限り廣島表へ罷出候樣大膳へ可被相達候尤自然末家幷家老共同所へ差出候はゝ大目付御目付到着迄可被留置候

一十一月六日石州路へ御人數出張之儀左之通り閣老より書付渡る

毛利大膳末家幷家老共之内且奇兵隊之中之者も廣嶋へ呼出承糺之上模樣に寄總人數被差向候間御先鋒御總督之御心得を以十二月十日限り石州路へ御人數被差出御沙汰次第御出張可被在之爲軍目付落合監物阿部金太郎被差遣候且又攻口之儀別紙之通被　仰出候此段可申達旨　上意候

別紙　藝州口討手

一之先（安藝守は人數差出 近江守は出張）

松平安藝守
軍目付 松野八郎兵衛
安藝守に附屬 松平近江守

御中軍先鋒

一之先

藝州迄出張

井伊掃部頭
軍目付 黒田五左衛門
掃部頭に附屬 井伊兵部少輔
榊原式部大輔
軍目付 建部德次郎

御中軍先鋒

松平三河守

二之見　差圖次第出張

御中軍先鋒

二之見　二番差圖次第出張

大坂迄出張

應援

差圖次第出張

石州口討手

一之先

石州路へ出張

二之見

人數は差圖次第出張

應援

軍目付 能勢惣右衛門

松平兵部大輔

軍目付 柳生主膳

松平越前守

同 酒井數馬

松平備前守

同 田中一郎右衛門

脇坂淡路守

軍目付 長坂血鑓九郎

阿部主計頭

軍目付 山岡十兵衛

松平右近將監

軍目付 奥津富太郎

龜井隱岐守

軍目付 石川八十郎

松平因幡守

軍目付 城隼人

差圖次第出張

松平出羽守
軍目付 諏訪左源太

先鋒總督

御人數石州路へ被差出

紀伊中納言殿
軍目付 落合將監
同 阿部進太郎

上之關口討手

一之先

松平隱岐守

差圖次第出張

松平式部大輔
軍目付 曾我權右衛門
伊達遠江守
軍目付 竹尾戸一郎

二之見

松平阿波守

同斷

軍目付 水野小左衛門

應援

奥平大膳大夫
軍目付 森川主税

差圖次第出張

松平壹岐守
軍目付 金田靱負

下之關口討手

一之先
小倉へ出張
左京大夫は人數差出

二之見
差圖次第出張

應援
同斷

細川越中守
軍目付 覓助兵衛
立花飛驒守
軍目付 安藤治右衛門
小笠原左京大夫
軍目付 松平左金吾
小笠原近江守
小笠原幸松丸
軍目付 齊藤圖書

松平美濃守
軍目付 小見山又七郎
松平肥前守
軍目付 酒井岩之助

中川修理大夫
軍目付 小笠原彥大夫
松平主殿頭
軍目付 溝口官兵衛

萩口討手

一之先　松平修理大夫　軍目付 大岡鉞太郎

差圖次第出張

二之見　有馬中務大輔　軍目付 有馬式部

同斷

右之通り被　仰出候尤松平安藝守松平右近將監龜井隱岐守小笠原左京大夫は人數而已差出銘々國邑相守居臨機之取計可致旨被　仰出候事

一十二月二日閣老小笠原壹岐守より海陸出張割合左之通り之旨書付渡す

御中軍之內一番隊幷井伊掃部頭榊原式部大輔等藝州へ出張二番隊以下御先列之面々引續出張之等と被　仰出

陸路出張之分

初日	二番隊	四番隊	
二日目	五番隊	六番隊	
三日目	七番隊	內藤若狹守	稻垣信濃守
四日目	八番隊	酒井河內守	
五日目	御中軍	拾番隊	
六日目	松平伊賀守	牧野河內守	

七日目　拾六番隊

十六番隊出立後　松平丹後守　內藤備後守　松平讃岐守　德川玄同殿

三　番　隊　拾壹番隊　拾二番隊

拾三番隊　拾四番隊　拾五番隊

海路出張之分

右海路出張之分

御中軍御日限被　仰出次第夫々割合出船之積

一陸路出立之面々荷物等見計船廻し之積

右之通り被　仰出候事

一幕府之大小監察於廣島長州家老を糺問す

大目付永井主水正御目付戸川鉡三郎松野孫八郎廣島に到り長門の家老を召喚したるに正使宍戸備後介副使井原主計小田村素太郎出頭により此三名に向て十八ヶ條の糺問をなし夫々答及ひたるを以て十二月廿八日大坂に歸着復命すと云

第一當春內輪爭論いたし候に付大膳父子愼中なから鎭靜として出張いたし候段一應の屆有之候得とも委細の事實分明ならさる事

答　當春內輪爭論致し候儀は政事向之儀に付藩中より起り候事にて（愼中なから〔一本ナシ〕其節御屆申上通り鎭靜として）出張致候事相違無御座候

第二當春の爭闘已に鎮靜に及ひたる上は大膳父子前の如く萩へ引取愼み罷在へき處一昨日申上候
趣にては今以て山口に罷在り所々巡行致し居段如何之事

答　爭闘は已に鎮靜候得共尙ほ懸命の儀も有之候に付山口に罷在り暴行の者も無之や取締の爲折々巡行仕候事最も逗留中は萩表に罷在候通り謹愼罷在候事

第三舊冬破却の山口當春以來再築の評議致し其修理武器を加候事

答　山口儀は　權現樣より其儘後世に殘し置候樣先祖輝元へ御遺言も有之且つ先年攘夷御振興に付ては要害の地故屯集所に仕置候はゝ可然と申合せ草木を切拂ひ候處自然と城跡相顯はれ候儀にて再築の儀には無之然る處昨今破却仰付られ候に付草木は切拂候へとも武器等間配之儀は更に無御座候事

第四謹中家來のもの下の關へ來船の異人と懇親接待致候事

答　馬關來船の異人と懇親致し候事相違無御座右は近來公邊にて外夷と和議を御結ひ遊はされ候趣に付公邊に對し當地に於て只今攘夷等仕り候ては恐入候に付公邊の御爲と存込み應接仕り且薪水缺乏の品差遣し候事

第五當春所持の蒸汽船亞人へ賣拂方に付村田藏六の花押有之證書差出し長門も其節夷人へ直に應對致し候事

答　所持の蒸汽船釜損し候に付其後打捨置候事ゆへ如何相成候や賣拂候樣の事は存し不申候且長門夷人へ直應對致し候儀は毛頭無御座候既に神奈川に於て先年夷人を望遠鏡にて見候て其望

遠鏡は穢れしとて打割候事も有之候此儀にても御察し下さるへく候

第六大小砲夷人より買入候事

答　大膳家來に於ては夷人より直に大小砲買入候もの一人も無御座候

第七筑前へ引渡し相成候元公卿へ使者幷贈物差出候右答禮として諸大夫森寺大和守長州へ差越候事

答　筑前へ引渡後五卿へ使者贈物等仕候家來一人も無之御座候諸藩脫走のもの長州士と申欺き使者贈物致し候者可有之も計り難く且つ諸大夫森寺大和守と申すもの長州へ答禮として罷越候事一切承り不申候事

第八淡路監物大坂へ御召呼相成候處罷出難き段申立の段有之に於ては其意に任せ外末家幷家老とも の內申合九月廿七日迄に罷出へき旨再應御達しの處終に及延引候事

答　毛利淡路吉川監物出坂仕候へは公邊にて如何樣の御難題を御申掛け嚴科に處せらるへきやと淡路初家來一統氣遣はしく存し居候ゆへ强て出坂仕らせ候へは家來共如何樣の所業可仕やと其鎭め方未た見込付兼候に付一日々々と延引仕候儀は恐入候事

右之廉々父子自判の罪狀申立と言行齟齬致し候に付昨日御尋其節答の趣猶書面を以て事情委細可申立候

答　右之條々御答申上候次第にて別段御齟齬仕候義は無之やに奉存候依之此上寬大の御處置を以て大膳父子官位御稱號元の通り成下され三都の屋敷も元の如く下され候はゝ參勤交代も仕り

幕府へ御奉公仕度奉存候勿論尺寸の地も御切割御取揚等の儀は更に存も寄らす候事
一慶應二寅年（二）一本正月十三日御登城長防御處置之件御建白あり京都之儀一致せす荏苒遲緩に失するを以て也御建白書の全文は世記に揭く
其大要は
此度御糺問も相濟追々御手續も付御處置も可有之候へ共此度は嚴然の御處置を以天下の耳目を一洗し長防之外諸藩之内にも萬一顗覦の念を抱き候者有之共此一擧にて禍心を消滅可致樣恢豁之御處置有之度若し目前の苟安を計り曖昧之御處置有之ては諸藩の誹笑を招くのみならす引續又々干戈を動かさゝるを不得に可至天下の禍患年々深く詰り　幕府の御威勢御氣力共に盡き靡亂鼎沸之世と可相成深く不堪憂慮弊藩の如きは最早引續き再擧の氣力無覺束付何分此度の一擧にて御盪平御座候樣深禱懇願仕候云々
此比一橋公は會桑へ御協議長文之建白書を呈せらる大意は長州家老共申立之趣は全く事實相違只々僞弁を飾り自儘の申立にて此上御沙汰に寄ては一円御請仕間敷氣込十分顯然に付閣老之内一人彼國境迄御差遣大膳父子呼出し病氣等にて罷出されは山口萩迄も踏込詰問に被及其上にて斷然之御處置あるへしと也亦世記に詳にす
一正月廿二日幕府長州の處分決議の上　奏問を遂けらる文に曰く
毛利大膳父子家政行屆かす家來とも一昨年七月父子黑印の軍令狀を所持し京都へ亂入し禁闕に對し奉りて砲發に及ひ候段は　天朝を恐れさる所業不屆至極に付大膳父子を嚴科に處すへき處

益田右衛門介福原越後國司信濃等に於て條々主意を取失ひ非禮非義の暴亂に及ひ候に付三人の首を斬て實撿に備へ幷に參謀の者共夫々誅戮を加へ任用人を失ひ候段深く恐入り悔悟伏罪相愼み罷在候趣自判の書を以て申立て尙其後疑しき譯も相聞候に付永井主水正戸川鉡三郎松野孫八郎罷越し相糺し候處彌恭順謹愼罷在候趣に付大膳父子に於ては朝敵の汚名を除き候乍去畢竟不明にして駕馭の道を失ひ家來のもの朝敵の名を犯し候段その科輕からす然と雖も祖先の大功を思召し格別寛大の主意を以て高の內拾萬石取上け大膳は隱居蟄居長門は永蟄隱居家督之儀は然るへきものを相撰ひ可申付候右衛門介越後信濃家の儀は永世斷絶すへく候此段　奏聞候以上

右に付　朝廷よりの御沙汰に

長防處置の儀決議被　聞食候方今患憂惑亂候ては於國体深被惱　宸襟候間厚く加仁惠至當の處置國內平穩奉安　宸襟候樣被　仰出候事

別紙　長防處置の儀昨日被　聞食候得共自然粗暴の處置有之候ては內憂外患の亂に拘り候儀に付旁以て被爲惱　宸襟候に付人心惑亂不致候樣公明至當の處置可致段被　仰出候

因て幕府にては長州へ其裁許を申渡すへき爲に京都に於て小笠原壹岐守へ廣島へ出張すへき旨を命したり壹岐守は永井主水正其外の役々を引隨へ二月四日を以て大坂より軍艦に乘て廣島に赴きたり

出張役々

御老中　○小笠原壹岐守　　旅館藝州家老關藏人邸下陣は淺野右近邸其外町家共

役職	氏名	人數	宿
外國奉行大目付兼帶	永井主水正	上下廿四人	同本町一丁目御客屋
大目付	○室賀伊賀守	同四十三人	同同三丁目沼田三郎右衛門
御勘定奉行大坂町奉行兼帶	井上備後守	同二十人	同同一丁目桑原儀三郎
外國奉行御軍艦奉行兼帶	○木下大內記	同九人	同紙屋丁山形屋佐七郎
御目付	○牧野若狹守	同二十人	同橋本町世並屋市郎右衛門
同	小林甚六郎引代 岡部三右衛門	同三十八人	同横町二文字屋源右衛門
御使番	酒井數馬	同八人	同細工町伊豫屋武右衛門
同	石川八十郎	同八人	同紙屋町金升屋久右衛門
同	曾我權右衛門	同	同本町四丁目木屋万七
奥御右筆組頭	○片山與八郎	同二人	同同一丁目桑原秀太郎
奥御右筆	○湯淺貫一郎	同四人	同同一丁目富屋喜兵衛
同	○佐久間三藏	同三人	同同　竹野屋喜兵衛
御勘定	○小澤金五郎	同	同同　山城屋万藏
御普請役	工藤錠藏	同二人	同紙屋町猿樂町井筒屋卯兵衛
別手組改役	石川清橋	同三人	同五丁目（竹野屋喜兵衛）一本ハ、屋儀兵衛

外に十八

御軍艦奉行支配組頭
同　取調役組頭　○石川壯次郎　同三人　同墖屋町□皮屋元藏

御軍艦取調役　○村田彌介　右同人方

御軍艦頭取
同　組頭　五六人　同横町二文字屋醬油店

御小人目付　櫻井謙作
内田錥五郎　同四人　同本町二丁目世並屋傳兵衛

同　鈴木安兵衛
○齋藤幾五郎
荻原叶介　同五人　同同　桑原屋千之丞

松平出羽守手組八雲丸船乘組之者兩三人

小笠原壹岐守手組　和達唯次郎　同猿樂町井筒屋卯兵衛

右○印之分は二月七日廣島着其余は同十一日同所着

爾後追々役々出張又は交代増減等あるへしと雖も詳ならす

一四月七日板倉伊賀守より左之書付渡す

毛利大膳父子　御裁許の儀に付末家毛利左京毛利淡路毛利讃岐吉川監物大膳家老宍戸備前毛利筑前廣島表へ罷出候樣先達て相達置候處未た出藝の模樣も不相分候に付ては猶又今般別紙の通松平安藝守を以相達候間此段爲御心得可被申上候事

別紙

毛利大膳家老宍戸備（後）〔本のまゝ前か〕助

毛利大膳毛利長門幷長門總領興丸へ相達儀有之候間來る廿一日迄に廣島表へ可罷出候若病氣候はゝ末家幷一門の內爲名代可差出候右之段早々罷歸大膳始へ可申達候

毛利左京
毛利淡路
毛利讃岐
吉川監物

本家大膳父子幷長門總領へ申渡旨有之に付先達て其方へ相達候儀有之廣島表へ可被罷出旨相達候儀に付若病氣候共押て來る二十一日迄に可被致出藝候尤も押ても難罷出候はゝ重臣の內一人可被差出候

毛利大膳へ
毛利大膳家老

宍戸備前
毛利筑前

右の者へ相達儀有之候間廣島表へ可差出旨先達て相達置候處若病氣候とも押て來る廿一日迄に罷出候樣可被申付候

一別紙相達候期限に至り萬一名代も不差出候はゝ　御裁許違背よりも其罪重く候に付速に御討入可被成候間兼て其心得にて差圖相待候樣可被致候

小笠原壹岐守は着藝之上長州末家及ひ家老呼出を藝州より傳達せしむ藝州は四月二日使者を以

本記の旨を長州へ傳ふるに末家之名代は期限に先ち廣島へ出頭本家之名代は途中に於て病氣と稱し期限より一日後れ廣島へ着せしと也

一四月九日長州の暴徒備中倉敷御代官所へ發砲蒔田相模守陣屋を焼討す諸家の兵之を討ち直ちに鎭靜す

一同月十四日薩州書を幕府に呈して征長出兵之命に抗す

幕府は曩に長州　裁許申渡し期限に至り名代も出さゝれは速に討入へくに付出兵すへしと諸藩に號令したるに既に備中倉敷へ亂妨の事あり此分にては長州は彼の裁許に服すへき哉否やを掛念し益諸侯に向て出兵を催促に及たる處薩州は左之書面を出し斷然出兵を拒絶し明かに反抗の意を示せり

即今内外危急の時節長防御處置の儀其當否に依り　皇國の御興廢に拘り候重事にて實以て容易ならさる儀に候處追々御達の趣も在せられ猶又來る廿一日までに大膳父子等召呼せられ若し此度御請不仕候はゝ御討入相成候間相心得て御差圖を待ち奉り候樣仰渡され承知仕候一昨年尾州前大納言殿總督として差向はれ伏罪の筋相立て解兵まて相成候處却て御譴責同樣の御都合にて就中神速御上洛の　朝命御請無之のみならす却て容易ならさる企有之を以て御再討仰出され御進發相成り終に今日に立至り御討入時日御達相成候へとも天下の亂階を開かせられ候事實明白に御座候　朝廷より時世相應の御處置を以寛典に處せられ候御達の御趣意も在せられ候處御奉戴無之由傳聞仕り天下の衆人物議喧々恐懼に堪へさる次第に御座候征伐は天下の重典國家之大

事後世靑史に恥さる名分大義判然と相立ち其罪を鳴し令を開かすして響應致し候樣に無之ては至當と申し難し尤も凶器は妄に動かすへからすとの大戒も有之當節天下の耳目相開け候へは無名を以て兵機を作すへからさるは顯然明著なる譯に御座候決して國人不可討之と謂ふに却て撥亂濟世の御職掌にて動搖を釀し出され候場合に相當り候前條天理に相戾候戰討は大義に於て御受仕り難し假令出兵の命令承知仕候とも止を得す御斷申上候間御聞屆下され候樣奉願候京都重役共より申上候樣申越候に付此段申上候以上

長州再征之事は尾張先總督府より三度迄呈書其不可を切諫せられ肥後越前因備の諸藩も非擧也とし薩州は長州初征の比よりして漸々前日に變り窃に長州と同盟の約を結ひ西郷吉之助福岡藩に同意し頻りに討幕論周旋を勉め　將軍家御親發の比となりては小松帶刀大久保一藏等一致し薩長合同の說大に行はれ藝州陽に幕府を奉するも其實薩長に與みし其他の列藩亦遲疑傍觀の地位に立ち容易に出兵に應するの色なし而して幕閣迂濶其實を知らす板倉伊賀守は大久保一藏を呼んて征長の事は　朝命なれは速に出兵あるへしと諭したるに一藏は討幕の　朝命なりと聞取の体を爲し　朝廷幕府の罪を討し給ふと雖も薩藩は兵を幕府に加ふるに忍ひす然と雖も　朝命とある已上は其旨を修理太夫に傳へ申すへしと答へけれは伊賀守は大聲にて否征長の　朝命也と言はれしに一藏は聾の体を爲して退きしといふ正しく閣老に對し此愚弄を逞ふす幕府の威權地を拂ふといふへし

一同月御先備安藤飛驒守附屬之內殘り居候分此節早々御差出可被成との書付於藝州小笠原壹岐守相

渡す

一五月朔日長州裁許を申渡す

小笠原壹岐守は五月朔日宍戸備後介を廣島の國泰寺へ召したれ共所勞を申立て出さりけれは末家毛利左京名代毛利伊織毛利淡路名代福間式部毛利讃岐名代平野鄕右衞門吉川監物名代金田靱負を國泰寺へ呼出し裁許之旨を申渡し早々歸國之上主人へ申達來廿日迄に請書可差出旨を命す

毛利大膳
毛利長門
毛利興丸

毛利大膳毛利長門家政向不行屆家來の者黑印の軍令狀所持京師へ亂入　禁闕へ發砲候條不恐天朝所業不屆至極に付可被處嚴科所任用失人益田右衞門介福原越後國司信濃於出先條々の主意取失及暴動候段罪科難遁深く恐入三人の首級備實撿猶參謀の者共斬首申付寺院蟄居相愼罷在候旨自判の書面を以申立其後御疑惑の件々相聞候に付大目付を以御糺問の所彌恭順謹愼罷在候由申立の趣は　御聞屆相成候得共元來臣下統御の道を失ひ家來の者至犯　朝敵の罪候段其科不輕不埒の至に候乍去祖先以來の勤功被　思召格別寛大の御主意を以　御奏聞の上高の內拾萬石被召上大膳は蟄居隱居長門は永蟄居被　仰付爲家督興丸へ貳拾六萬九千四百十一石被下候家來右衞門介越後信濃家名の儀は永代可爲斷絕旨被　仰出

名代毛利伊織初は四日中に出立早々歸邑主人へ可申聞と命したれは直ちに出發然るに四人の者途中より再應書を藝藩手筋

へ寄せ兼ての國情に付追々主人共より歎願之品も可有之或は國內人心に關係疑惑を生し道路相塞き歸邑不容易高森驛に滯在辛苦之情狀を憐察此後追々不得止情實歎願も可致此儀差含上達依賴之旨申越し藝藩之を壹岐守に呈出したるに御裁許に關係の儀は決而取次間敷と却下に及ひたり

一同月九日宍戶備後介小田村元太郎を拘禁す

兩人へ申渡之儀有之に付明九日五つ時國泰寺へ可罷出樣松平安藝守を以昨八日達したるに本日罷出す依て御徒目付河野大五郎橋爪正一郎立合御小人目付瀧田正作中川由太郎を備後介等旅舘へ差向左之趣申渡し直ちに召捕たり

宍戶備後介　小田元太郎

其方共不審之廉も有之候間松平安藝守へ御預け相成候

此時警衞として別手組二十五人宿寺外廻り門內警衞として御持小筒組貳小隊兩關門手配して步兵一大隊を差向たりと云ふ

一左之三通之趣松平安藝守を以傳達せしむ

毛利興丸家來

宍戶備後介

小田村元太郎

備後介儀は最早名代之御用無之候兩人共御不審之廉有之候に付其方へ被成御預候間得其意取締向厚可被申付候

宍戶備後介

小田村元太郎

右兩人附屬幷召連候者共は御用無之候間早々當地出立歸國致し候樣可被相達候尤右之趣毛利興丸へも可被達置候

宍戶備後介

小田村元太郎

右備後介儀は最早名代之御用無之候兩人共御不審之筋有之候に付其方へ被成御預候旨毛利興丸毛利左京毛利淡路毛利讃岐幷吉川監物等へ可被達候

兩人家來共七十人計有之此者共御用無之早々歸國可致旨を申渡したるにいつれも神妙に卽時歸國したりといふ

一五月廿四日長州討入期限左之通口々討手一の先二の見之面々へ相達候付ては紀伊中納言殿にも右

日限迄に先藝州廣島表へ御出張被成候樣との書付稻葉美濃守より渡す
去る十九日於藝州表吉川監物より差出候書面幷松平安藝守へ相達候書付寫相達候間得其意來る廿九日期限に至り請書不差出節問罪之師被差向候間彌來月五日諸手一同討入候樣可被致候最も請書差出候はゝ速に相達するにて可有之候
吉川監物より差出たる書面には闔國士民の情狀中々容易に說諭行屆方無覺束猶毛利左京始へ申合度儀有之候處名代之者歸邑途中不都合之儀も有之漸此節罷歸道路懸隔之場所柄迅速申談之都合も難出來痛心に付當月廿日迄之期限を同廿九日迄猶豫被　仰付度　公邊向へ取成歎願之旨五月十八日付を以松平安藝守迄出したるなり
松平安藝守へ相達たる書面とは吉川監物歎願之通廿九日迄猶豫承屆右期限迄請書不差出節は速に問罪之師可被差向との書
小笠原壹岐守は十九日を以件之通安藝守へ達し即日田澤對馬守を大坂に遣す對馬守は廿四日夕刻大坂に着言上せしにそ閣老一同登城直に評決打入期限發表に及ひたるなり
一五月廿五日閣老松平伯耆守差添被差遣候旨被　仰出明廿六日大坂發足廣島表へ相越且京極主膳正事四國討手之面々爲取締被差遣候旨稻葉美濃守より書付渡す
一同日於廣島御軍事奉行より打入手順等之儀を小笠原壹岐守へ左之通問合す
當今之形勢に付左之五ヶ條相心得置申度奉存候間否早々被　仰聞候樣仕度奉存候事
一紀伊殿此表へ出張被致毛利家本末より御裁許御請不差出節は廣島表へ本陣御先手總督之廉を

以攻取萬端指揮被致候儀藝石兩道之諸藩一圓に被相心得候儀と申見候右は其通にて可然御座候哉之事

但因雲二藩未た出張之樣子無之右は　公邊より御沙汰に相成候儀に候哉又は紀伊殿より申達候儀に御座候哉之事

一右進入之節佛坂口野坂口兩道に有之佛坂口は萩城へ仕寄之便宜に有之野坂は山口へ之險道に有之處前條一二三等之各軍右兩道へ分配等之義是迄之御見込如何樣相成御座候哉之事

一紀伊殿出藝之儀は蒸汽船にて被參大躰二番船之筈に候處左候ては聊之人數にて當分手薄に付可部表人數之內を以警衛致し候より外致方無之左候ては跡人數參着迄石州口へ之繰込無據相後れ可申右は其通にて可然御座候哉之事

但本文之通に付ては固より敵境へ數日程之山路懸隔有之儀に付來月五日期限後速に討入候儀彌以手順相立兼候事

一御裁許御請申出候後若又過激之浪徒共窮鼠之暴荒有之節は豫備出張之人數無之石州へ突出間敷にも無之右樣之節も矢張御定之通順次に救應候儀に候哉又は臨時應機之御差圖等御座候哉之事

但右は萬一暴荒候共無根之浪徒に候得は毛利家征伐之人數を以討鎭等之儀名義に於て如何相心得可然御座候哉之事

右答

初ヶ條書面之通可相心得候二ヶ條應援之諸家は臨機救應之豫備に候間時之緩急に寄進退可有之筈に候尤中納言殿御出張之上は先鋒御總督之任を以其邊御斟酌之上御差圖可被爲在事に候條御人數は二の見之次に御進入と可相心得候三ヶ條兩道分配之儀山口へ仕寄之方に候得共是以中納言殿御出陣之上は御指圖可被爲在候四ヶ條着藝之上跡御人數參着迄は可部へ出張罷在候御先備之內引分當分御警衞に被充候儀は無余儀候得共一二之討手に引續御討入相成候樣御手配可有之事に候五ヶ條過激之者共境を越暴動いたし候はゝ石州口に不限兼て最寄出陣之人數にて討鎭可申事

一五月廿七日再ひ左之趣問合す

一貳ヶ條應援之諸家は臨機救應之豫備に候間時之緩急に寄進退可有之筈候得共中納言殿御出張之上は先鋒總督之任を以其邊斟酌之上差圖可被致事候條人數は二之見之次へ進入と可心得と之儀右は初ヶ條御指圖之通紀伊殿廣島表へ在陣藝石兩道之諸藩指揮被致候付ては二之見之次に進入と相心得候儀は可部出張先備之人數に可有之順次前後之儀は兎も角相心得可申候得共紀伊殿此表へ出張之儀旗本後備等之總人數海陸押立繰込候儀に付中納言殿着陣被致候儀は期限切迫之五日迄に所詮難被參と相察候に付夫迄之內因雲之指揮無之石州路は一之先二之見紀伊殿先備之二手を以三ヶ條山口仕寄之方と心得候付ては野坂口より攻入候儀に付佛坂口之押を初應援之跡勢も無之濱田津和野は敵境接近之小藩攻守相兼有之事故紀伊殿出張前因雲之應援繰出に相成不申ては後顧之念有之深進之勇決如何可有御座哉と相察候に付今一應御談判有

御座度事

右答

二之見次へ進入候儀は御先備之御人數と可相心得候且又石州路應援之儀は中納言殿御着陣前にても應援之心得にて出張候樣松平因幡守松平出羽守へ相達候間其段相心得可申事

一五月廿八日御出陣に付御登城　將軍家へ御對顔　上意有之左之通御手自御拜領外に御杉重一組御側衆を以御拜領

御麾　　御陣羽織

一同月廿九日小笠原壹岐守小倉へ出張松平伯耆守御差添被　仰付

左之兩通討手之面々幷軍目付へ可達旨大目付御目付へ布達之旨伯耆守より書付渡す

壹岐守事九州路爲指揮明後二日當地出立小倉表へ相越候條可被得其意候

一伯耆守事紀伊殿爲御差添致藝着候條可被得其意候尤壹岐守小倉表へ出張中當地御用向伯耆守相心得候間可被得其意事

一六月日不知御出陣期限之儀左之通板倉周防守より書付渡　於大坂

紀伊殿御出張の儀期限後御着藝に相成候ては何分にも御不都合に有之候間御手船着船候はゝ

一刻も早く御乘組御出藝被成候樣可申上候事

一六月二日京極主膳四國討手取締被仰出　板倉周防守より

京極主膳正事四國討手の面々爲御取締被差遣候付ては指揮の儀も相心得候樣猶又相達候尤同

八儀今二日當地出立藝州廣島表へ相越夫より四國へ出張の事に候爲御心得此段可申上候事

戊辰始末に曰く若年寄京極主膳正高富殿は四國に渡りて南海の軍務を督すへしと定めて各々其方面に向われたり就中若年寄を以て四國の諸藩を指揮せしめたるは失策にて阿波藩の如きは若年寄は麾下の士を督すへしと雖も諸侯に號令すへきものに非すとて出兵せさりしとは聞えしと云々

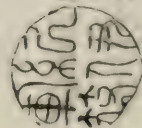
六月三日朝六つ半時御供揃にて大坂幸橋邸御出發木津川口にて明光丸へ御乘艦九つ半時御出艦同夜淡路嶋ごげ浦に御一泊四日曉七つ半時比御出帆藝州御洗浦に御一泊五日朝六つ時御出帆廣島宇品へ御着同市松平安藝守濱屋敷にて御休息夫より城内生田某邸御本陣へ御宿陣也

六月十六日布達

一非常の節於追手門近邊寄せ貝立寄太鼓打候時は一統御本陣へ駈付可申事

但到着屆之儀は御軍事方御目付方へ相屆候上別紙繪圖面之通夫々相詰可申事

繪圖面之外御役々は御本陣へ相詰候事

右の如く口々柵を構へ番兵守衛す
如圖印鑑持參の外は一切通行を禁す

一六月五日長州へ問罪使被遣　大目付より提出

此程御達申上候別紙之趣左之兩人問罪使被　仰付昨夜乘船岩國表へ罷越申候此段御達申上候

以上

六月五日

問罪使　御徒目付此度御勘定格被仰付　石垣武兵衛

副使　御小人目付此度御徒目付被仰付　瀧田正作

御案內　松平安藝守家來　立野六郎

別紙

一昨子年家來の者共京師へ亂入　禁闕へ發砲候條於大膳父子其罪難遁嚴科にも可被　仰付候所恐惶謝罪三家老臣の首級備實驗其後彌恭順謹愼之趣に付　天幕の御主意を以て格別寛典の御裁許五月朔日申渡中略御裁許違背不屆至極に付問罪の師差向候間此旨可被相心得候尤抗命の者を御誅鋤被成候旨意に付無罪の細民末々の者は猥りに動搖致間敷候右の趣與丸幷末家共へ可申聞候

右問罪使歸次第直樣御討入に相成候筈

君上には藝州口石州口兩道御指揮之所石州の儀は安藤飛驒守御名代を勤め此節濱田へ出張の筈にて七日可部へ引取る

遂に問罪使を向けらるゝに至りたる次第は世記に詳悉せる如し此篇は戰爭に關する記を主さするか故に煩雜を省くさ雖も結局長州の國論は幕軍を引受け防守すへしさ決したれは固より請書を出すへき筈なし唯名義を失はさる爲に飽迄公式の恭順を裝ひ其順序を践み以て時期を遷延せしむるに在り而して幕府の寄手は先吉川監物より延期を請ひたるを以て九月廿九日迄には請書を出すへきかさ思ひて望を屬し居たるに彼れは長州士民中さ題し　禁闕發砲の犯跡は主人の冤罪を雪む爲の出來事幕府の横暴は天理人道に有間敷儀此上は寸地を削り一小責を受くる如きは誓て奉命不致さの書面に家老共添書して藝州へ出し五月廿九日には長州末家の家老毛利伊織初九人廣島の新港に來り藝州藩に面會して國內奉命の譯には參らす士民一統封境を守り幕府の沙汰は國界邊にて可相待さ斷然の書面を渡し又諸藩へは奸邪蔽明冤枉再生さ雖も最早冤枉を辨解せす又救護を乞はす二州の士民君子の分を盡し死以て主恩に報すへく早く奸邪を誅鋤し忠良を登庸天下をして正邪判然名義相立人心一致すへき樣盡力ありたしさの檄文を廻達したり

右之趣小笠原殿より急報ありければ此上は追討を加ふるの外なしさて一橋公松平越中守殿六月七日參內ありて　朝命遵奉不致裁許違背の條大典不相立れは無余儀問罪之師を差向け征伐可致旨奏聞を遂けられしに二條關白尹宮其外國事掛りの兩傳奏出座群議あつて奏聞の趣　聞食され速に追討の功を奏し　宸襟を安し奉るべく討手諸藩へも可申聞旨御沙汰の事さ被仰出たり

一六月九日於藝州粮米三千俵御拜借

御先手總督として昨年來御出陣且御先手人數可部驛へ繰出し尙又廣島へ御出張紀州は平常迚も國內飯料不足他所買入米を以市民食料取續せ有之方今之形勢他所米入津無之其上多人數之長陣粮米莫大にて必至と手支へ困難至極に付當分之處廣島御用米之內月々二千石つゝ拜借致し度或は於大坂此節壹萬石程御渡置有之度と松平伯耆守へ請願之處此節柄不容易儀に付在米之內三千俵御取替可取計跡石數の儀は於坂地被　仰立候樣にと差圖ありたり

一月日不明左之兩通閣老爲心得被相渡

小笠原近江守初の軍目付齊藤圖書御免大岡鉞太郎へ被　仰付

一　牧野備前守 軍目付大島虎之助　內藤豊前守 軍目付　酒井勵吉

藝州口討手被　仰付候間應接の心得を以急速出張致し松平三河守井伊掃部頭附屬井伊兵部少輔松平兵部大輔松平備前守榊原式部大輔松平丹波守內藤備後守脇坂淡路守牧野豊前守可被申合候

一六月八日より幕府の軍艦防州大島郡久賀村へ發炮戰爭を開始す

討手之河野伊豫守戸田肥後守より廣島永井主水正大(一本東平)鑛次郎へ報告

今曉嚴島未明より乘船御軍艦廻船取交乘組出帆可致處廻船差支不都合嚴島海岸十時出帆大島郡久賀沖へ五時前着富士山翔鶴之兩艦より久賀村へ及發炮候處人家も相應有之候得共皆立退候哉家々戸締り等にて激徒等相見へ不申尤騎馬にて陣羽織着用之者一人其余家並之間に常服にて少しは見請申候右之模樣故敵方より發砲無之靜なる事にて却て一策も可有之歟海陸申合久賀へ上陸可致處及黃昏候に付碇泊鶴船を待上陸之積然に舟兵粮其他差支出來明九日朝前嶋へ上陸德山鋼太郎始一大隊小筒大砲着揃之上久賀村へ上陸可致候

一時限遲刻に相成候譯は廻船人足等之差支此上共船之差支には甚當惑御承知之通旭日丸出帆前山は御軍艦方計來臨翔鶴八雲之二艘にて陸軍四大隊小筒六小隊大砲二坐騎兵組幷附屬品等運送可致處八雲丸も追々損所出來之樣にて彌以心配極候何卒紀伊殿御艦明光丸暫時拜借

被　仰付候樣仕度厚御評議被成下被　仰立可被下候左も無之ては急速四大隊合兵難仕敵深く攻入候には兼ても申上候通壹番隊計にては手薄く奉存候此邊御賢察御工夫可被下候云々

六月八日於翔鶴艦第一時認

廣島出發割見込

八　日　河野伊豫守　戸田肥後守　城　織部
歩兵一大隊　小筒組一中隊　大砲半坐

九日夕立　德山鋼太郎　歩兵一大隊　小筒一小隊
大砲半坐

十　日　竹中丹後守　久世下野守　井上啓次郎
高尾惣十郎　歩兵一大隊　小筒組貳小隊
大砲半坐

十一日　深津彌左衛門　歩兵一大隊　小筒組一小隊
大砲半坐

中澤又十郎佐倉桐太郎より永井主水正へ之書狀

以書狀啓上仕候然は富士山翔鶴旭日丸八雲丸船其余小船數十艘へ歩兵奉行始役々并御勘定方等夫々乘組昨八日六半時頃より四時比迄に藝州嚴島出帆八半時比周防國八代嶋之內久賀浦沖へ着直に富士山翔鶴兩艘にて同浦之民家を除疑敷見受候森林へ大砲二十發余打掛候得

共更に答砲も無之且民家六七百軒も有之候得共動揺之氣色も無之五六人奔走いたし候樣子に見受候丈けにて多人數逃去候樣子も無之候に付陸軍方上陸可致之處薄暮に及無是非御船へ一泊今拂曉より上陸可致處小船等少く人數繰上け方差支兵卒も一大隊丈けにて深入仕敵之策略無之共難申若敵之計策に陷り候樣にては全軍に差響き候間同嶋沖之前島と相唱候小島へ河野伊豫守戸田肥後守始何れも今朝より上陸相成候間右爲警衞旭日丸御船は同所沖凡七八町程之處へ碇泊罷在候

一富士山御船は大江丸御船之方如何にも大砲少なにて心配仕候間同船爲應援朝五半時比前島沖出帆いたし夕七時比同所へ立戻り候に付早速大江丸御船之模樣相尋候處昨八日拂曉に由宇浦幷安下庄浦へ押寄發砲いたし候處更に答砲も無之候に付松山勢押上り候處敵兵逃去候と見へて大小類其外捨有之候に付分取致し伊豫國へ引揚同所に罷在候趣富士山御乘組之者申聞候

一翔鶴御船は八雲丸船を曳一大隊爲迎嚴島へ只今御錨仕候右兵隊乘組次第直に出帆陸軍之二大隊久賀浦へ上陸之積御座候此段申上度如此御座候已上　六月九日

此外帶刀越中守兵次郎（御目付か）より八日付永井主水正初四人へ之書面の中に

松山藩至極奮發既に八日卯中刻八代島村へ討掛り可申旨昨夕約定致し先手之者今曉奥居島出船之由定て御地陸軍方と同時に大島郡へ討入之儀と遠察致し候

一長崎丸御軍艦壹岐守殿差圖にて一昨夜小倉發昨書室津幷八代島内上の照邊にて五六發試に發砲致し候處敵方より答砲も無之さして動搖之樣子も相見不申由

一宇和島未出勢先手のみと申事隱岐守父子にて配慮不少主膳正殿にも御心配例之者三一昨日宇和島へ遊說に遣し置候阿州も未た樣子不相分心配仕居候是も聊周旋致し置候間行屆候はゝ不日繰出しにも可相成と推考致し候

偵察書

十一日巳の刻より大島久賀港へ發砲村落を燒拂ふ敵山上に逃去跡にて大砲六挺糀三千俵分捕敵山上より大砲を發したれ共味方へ中らす軍艦より山上へ發砲す敵凡四百人計

山上の敵を幕兵と松平隱岐守人數と千五百人計上ケ之庄と申所と久賀庄より挾み打に攻登り敵敗走し大砲四挺分捕〇十三日曉七半比敵軍艦を襲來前島大島へ發砲軍艦より砲戰す六時頃敵下之方へ向け逃走ろ軍艦敵よりの發砲にて少々損す〇十四日早天より幕兵松山兵と山岳に潛伏の賊を砲擊す

一按に大島郡戰爭の事記類傳ふる者少く詳ならす偶舊松山藩長屋某の（日記を得たれは附記す）一本日記と云あり左の如し

慶應二年四月廿六日軍目付荒川（鉄）一本鉄太郎松山着〇同六月六日四國勢指揮御老中代若年寄京極主膳正松山着〇六月八日拂曉防州大島郡八代島の內由布村伊豫田村迄押寄せ一時上陸島兵退去續て家室安下庄へ進軍〇六月十日八代嶋普門寺の方向敵兵屯集の情報に接す〇同十一日巳刻安下庄を發し普門寺の方向に進軍す敵兵既に退散す　普門寺に於て幕府の陸軍隊に會す〇同十六日總進軍

右翼	普門寺越	二の手
中央	源　命越	一の手及二番大隊
左翼	家　室　越	一番大隊

當日死傷の概略

戰死士分	三名	倍臣及足輕	九名
負傷士分	六名	徒士	一名
砲手	三名	皷手	一名
足輕	十二名		

一松山奥居島灣より進軍の際幕府軍艦二艘を以て兵船數十艘を牽引す

幕艦（大江丸）船將　肥田濱五郎　　富士山丸は暫時淀泊の後出艦す

長崎丸　　同

一松山出張
　若年寄　京極主膳正　　大目付　田澤對馬守　　御目付　松浦越中守
　御使番　木原兵三郎　　軍目付　荒川鏆太郎

一松山軍隊一の手
　侍大將　菅五郎左衛門長彌　　番　頭　山田四郎兵衛　　番　頭　遠山美濃
　物　頭　戸田九郎右衛門　　物　頭　遠　山　環　　山中設樂
　徒士頭　二人　　軍監察　二人　　軍事役　一人
　使　番　一人　　旗奉行　一人

二の手
　侍大將　長沼吉兵衛朝彜　　番　頭　中川兵衛　　河部市左衛門
　物　頭　柳田市太夫　　山中設樂　　檜垣七三郎　　徒士頭　二人
　軍監察　二人　　軍事役　一人　　使　番　一人　　旗奉行　一人

一番大隊長　蜂須賀彦助　　軍監察　藤野立馬
二番大隊長　吉田惣右衛門　　同　　長屋義一郎
十六日戰死士分三人は目付佐久間大學　大小姓來宮傳左衛門　同佐伯彌兵衛と云へり
三人の（一本ナシ）碑松山市にある由にて碑文を揭く曰
（佐久間君、祿百石爲馬廻、後任目付、（中略））丙寅再討、前軍入大島郡、敵據嚴明嶺、扼險固守、我軍分爲三隊、一當其前一繞向其右、亦屬一隊、橫擊其敵、拒戰甚力、未易碎破、我乃將收軍、會有敵操長柄鎌、鈎我銃卒者（一本作久間大學）（君）挺進斃之、來島冬廣亦進刎之、遂偕馳敵陣、揮槍奮躍從橫、敵相顧駭瞻莫敢當其鋒、乃叢銃雨射、二人皆死之、我得其間、全軍而退實爲慶應二年六月十六日云々）
（冬廣は（一本ナシ）即ち傳左衛門也同人及佐伯の碑文あり略す
彌兵衛戰死も同時の由文中其間を得軍を全ふすとあれは大島郡追擊もはかく〱しからす遂に引上けしならんか）（夫れ（一本アリ）大衆三方より孤軍を攻擊し僅に三人奮戰の間を得て全軍退くを得たりと云松山軍亦不利振はさりしを知へし）

一六月十三日夜松平伯耆守より諸藩へ布告

今十三日紀伊殿御先手引纒水野大炊頭廿日市迄繰詰且伯耆守幷附屬役々共同所迄可相進引續き中納言殿にも御進被成候旨被　仰聞候間可被得其意候

一六月十四日曉井伊掃部頭榊原式部大輔防州境にて大敗

兩軍防州へ可討入と進軍之處逆擊せられ大敗を取り兩手共廣島へ退去す

彥根藩屆書

此程御屆被申達候井伊掃部頭人數去る十四日於防藝國境戰爭之節味方死傷

鉄炮疵	隊長	貫名筑後
同	戸塚左太夫隊 母衣役	大塚與一右衛門
敵陣へ爲使參り罷歸不申候	木俣土佐隊 使番	竹原七郎平 曾根佐十郎
討死	戸塚左太夫 隊戰士	只木次郎右衛門
鉄炮疵	木俣土佐隊 物頭大久保藤助組	椋本竹次郎
同	西堀才助組	中野房之丞
討死	陣場方手代	一本小(北)川貫之丞
同	戸塚左太夫隊 物頭吉川軍左衛門組	藤田源三郎
同	河手主水隊 物頭澤村左平太組	山本金吾

鉄炮疵　貫名筑後隊 物頭黒柳孫左衛門組　一村由太郎

討　死　河手主水隊 旗指　中村千太夫

同　木俣土佐家來　北村宗太夫

手　負　北村要輔

討　死　澤田利八

鉄炮疵　貫名筑後家來　宮川鎗吉

討　死　河手主水家來　木川梶兵衛

即　死　戸塚左太夫隊　軍夫　一人

手　疵　同　四人

即　死　河手主水隊　同　一人

手　疵　同　一人

鉄炮疵　貫名筑後隊　同　一人

即　死　同　一人

右之通御座候此段御屆申上旨申付候以上

六月廿二日　井伊掃部頭内　内田源太夫

井伊榊原兩家より戰爭の屆書筆記存せす散逸したるものか

右廣島迄退去之儀伯耆守承屆たる旨幕府監察大（平）（一本原）鑛次郎御本陣へ注進す不都合之至りに付御

使番を以左之通り兩家へ達せらる

口上覺

過刻榊原式部大輔家來村上彥太郞を以井伊掃部頭申談廣島迄繰引候旨申聞候付承屆中納言殿へ申上候處廣島迄引取候ては甚不都合之次第に付何れへ也共陣取差圖相待候樣可申遣旨被　仰聞候付此段可被申達候

榊原藩より達書

防州岩國へ討入之儀に付去る十一日掃部頭陣營廿日市に於て陸軍奉行竹中丹後守御目付大平鑛次郞掃部頭附軍目付朝倉藤十郞幷掃部頭家老拙者家老共等一同軍議之節丹後守鑛次郞より件々申談候趣も有之取極の上去る十四日曉討入候得共示合之通丹後守儀人數不差出候に付夫是手筈相違致し甚不都合之次第に有之且賊兵之情態地形之模樣等共砌重役共より巨細度々申述候通之次第にて十四日一戰之如く未た諸手攻口一同討入にも不相成候內唯々岩國口計取掛候共人數而已損傷致し御勝利之見居無之候間此上御討入之儀は兼々申述置候通　上樣速に御動座被爲　在諸軍御指揮被　遊候て海陸兩道脇道間道等迄も御實備嚴に相立御手筈重々御行渡之上御勝算確と御掌握被爲候て御討入相成候樣致し度無左候ては御討入相成候共御成功之見込更に無之哉と存候就ては諸方攻口討手之諸藩最早着到相揃候儀に御座候哉未た着揃不相成候はゝ早々相揃候樣御沙汰被在之候樣致度存候

一去る十四日一戰之節器械多分損失致し候に付在所表より取寄可申之處何分二百數十里懸隔候

在所之儀急速間に合兼候に付人數出之義容易に難致段度々申述置候得共廿日市邊へ賊兵罷越候樣子に付地之御前へ人數差出候樣永井主水正より相達且紀伊殿より被　仰下候趣有之候に付不足之器械等夫是差繰不取敢分隊致し一手之人數地御前迄差出置申候就ては地形見分爲致候處左右山海に挾まり候村續きにて多人數可差置所に無之且應援等可相成地利に無之趣に御座候勿論守禦之義は盡力可致候得共右地模樣等兼て御承知置下度存候以上

六月廿四日　　　　榊原式部大輔

按するに德川四天王の隨一と呼れし井伊榊原進軍の上は如何なる堅軍鉄城も瞬時に破碎長防平定は掌を反す如くならん今にも捷報到るへしと待構へたるに豈計らん未た敵境へたに入らさるに所謂風聲鶴唳に驚き譯もなく崩れ立一敗地にまみれて世の嗤を取りしそ是非もなし畢竟太平の武士戰爭といふもの元和年來子々孫々之か初めなれは旌旗堂々威風凛々は名のみにて大將たる君侯は駕籠の行列拾も平素街道旅行の躰にて軍律軍謀の皆無押して知るへし武運の衰頽獨り兩家のみにあらす石州周布村の戰は井戶釣瓶の落聲に驚き敗走せりと聞へたりされは小倉の陷落濱田の落城其敗報は續々絕へす德川氏の運命爰に極まりたり全軍色を失て殆と爲す處を知らさりし也

井伊榊原の兩手敗北廣島へ退去により水野大炊頭には繰詰昨夜已來大野村へ陣取相固め候廣宮嶋より陸軍方御人數援兵に出廣島よりも爲援兵大御番頭松平六郎右衞門一組御持筒頭山口熊太郞一組大砲二門出張す

十二日暁七ッ時此玖波駅ヨリ
長人発砲玖波小方共ニ焼失
神原陣四十八坂迄退ク
神原宿陣
玖波駅
小方村
十三日夜長人
間道ヨリ此所ヘ
出ル
玖ノ坂
チキリ
明神
木ノ村
玖ノ坂ヨリ
小瀬迄凡廿丁
小瀬村
小瀬川
関戸
長兵陣所
此辺畑道
アリ
十四日暁六ッ時前
大竹村彦根陣ヘ玖ノ坂
小瀬ヨリ発砲井伊軍
大敗四十八坂ヘ退ク
大竹村
廣島ヨリ
六月十三日
彦根宿陣
芸州ニテハ木ノ川ト云
此辺ヨリ
長人発砲
東

一六月十五日賊石州津和野領へ侵入同藩支ゆる能はす

龜井隱岐守より屆 六月十九日着

長防御征伐に付隱岐守人數分配之儀は御總督御名代濱田表御着之上御指揮も可有之尙相伺可申心得に御座候然處隱岐守領分は長防境界二十里余有之候に付山陰道御討手御軍配被爲在候て御應援迄悉御參集無御座候ては小藩之人數迚も難行屆候に付兼て御軍目付へも申出御討手御參集御軍配御座候迄は態と平易之姿を顯し敵兵不致動搖候樣人數揃置候迄にて繰出し等不仕尤境界へは夫々爲差押番兵不目立樣差置候處六月十五日夜四つ時比城下より五里外黑谷村內土床と申所之境界より長州人三百人程通掛候に付番兵之者達て差留候處一圓聞入不申押て罷通り横田と申所へ罷越候趣猶跡より追々多人數罷通候模樣申越候右に付即刻追手之人數且防禦之人數繰出し候積りに御座候處城下至近之領境野坂口より何時押出候程も難計且孰れの口より押出し城下へ相廻り候程も知れ不申小藩小人數難行足若城下にて不行屆御座候ては恐入候次第に付弊藩處置之儀御軍目付へ相伺候處敵地至近之城下故領內へ人數分配之儀は差止城下を專務に致守衞候樣御差圖御座候依て兵を差向候儀は差止早速御應接差留候樣申付家來之者差遣申候然處横田にては先達濱田表へ爲使者差遣候家來之者歸掛致止宿候に付直に應對嚴敷差止候得共一切承引不致押て罷通大木原境界弊藩番所にても差止候處烈敷致發砲濱田御領へ罷越候旨申越候尙又十六日曉七時頃城下より九里外戶田村と申所之人家も無之海岸へ長州人船五艘にて罷越貳百人程上陸高津村と申所へ罷通候に付同所にて差留候得共押て越畔境界より濱田表御領へ罷越候に付急

速濱田表　御總督御陣屋へ御屆且松平右近將監樣へ夫々使者差出尙濱田御領益田出張之阿部主計頭御人數へも近隣之事故以使者申遣候儀に御座候尙此後之模樣は追々御屆申上候得共不取敢右之段申上候樣申越候

按に　津和野は四万三千石之小藩其城極めて長防國界に接近城下市中離れより十町廿町内外は即ち敵境攻口にして野坂よりは眼下に城下を瞰下し螻蟻の集散迄も瞭然たりと云且平素領民の食料諸物之交易物產の積出し皆之を長州に仰き海路亦常に交通然に征長以來長州は國境要所々々に關門を搆へ砲壘を築て嚴に守兵を備へ津和野を屠るは朝食前の事絕へて齒牙に掛けさるの勢なり津和野は固より力足らすさなきも敢て抵抗せはいよ〳〵怨を結て他日如何なる妨害を加へられんやな畏怖し進退窮縮國論更に不立唯沈默因循頻に他の應援助勢に依賴するのみ也と云

一六月十六日十七日賊軍石州益田を襲擊寄手大敗軍目付三枝刑部戰死す

諸家及ひ幕府監察等より廣島本營へ之注進狀左の如し諸家逡巡の情見るへし日次前後ありと雖一所に集錄す已下是に傚ふ

拙者儀今般御討入御達に付先手人數石州益田迄繰進み去十三日備後國三次表出馬仕候段及御屆置候通今十五日石州糟淵驛迄相進候處元來先達て中より脚氣症にて跗上腫氣有之手足麻痺致し出馬前より步行不任心底候處御期限も御座候儀押て駕籠にて出立仕糟淵迄相越候處腫氣は余程消散候得共手足之痲痺攣急は却て相募り差向步行甚六ヶ敷行掛の儀には御座候得共於當驛暫時滯在治療專一に差加へ聊も快方候得は速に相進み候樣仕度奉存候依之側廻り之人數許召連罷在其余人數一隊幷大筒隊共繰越爲相進申候此段御屆申上候以上

六月十六日　　阿部主計頭

長防之者共高角邊へ去十六日朝より押來候樣子に付宿寺勝達寺少し退き唐田峠へ左右先鋒陣取候處濱田境目關門迄押寄津和野關門打破り(奇)[寄カ]兵隊千人計致通行右關門番人五六人出居候處三四人即死漸一人相助申候其後追々近寄候報道も有之候午刻頃益田驛へ押寄濱田藩よりも一之手唐田峠へ繰出候に付右藩へ打合人數は裏手より不意に勝達寺へ押寄夫々嚴重陣取居候處敵二道より押寄終に二手共發砲に及候付當方よりも二手より打出し互に炮戰致候得共彼者萬福寺藪之向より打候に付當りも相分不申暫く砲戰勝敗不決敵引退致對陣候事に御座候人數之內兩人手負之外別條無御座候只今以益田驛へ戰陣候間何刻尙又砲戰相始り候も難計御座候間尙々嚴重手當致し罷在候旨益田表家來之者より申越候に付先此段御屆申上候以上

六月十九日　　阿部主計頭

主人松平右近將監人數一の手二の手領分津(野)[一本田]村薗田村迄差置候處去る十六日長州人津和野領横田と申處へ多人數押寄候趣領分界多田村關門より注進有之候內右關門へ押來り致炮發候に付關門詰之者防戰仕候得共何分多人數之儀にて被打破候內右近將監人數上本鄉村へ相進戰爭及大小炮打掛候處敵兵散亂仕候に付其邊へ陣取居候處又候敵勢領分益田村迄押參り同所阿部主計頭樣御人數と互に野外に對陣仕居翌十七日に至り主計頭樣御人數同所寺院へ御陣替右近將監人數も同斷之處夜に入敵方所々山々に陣取致四方より炮發仕候一同必至を極め戰爭仕候得共何分多人數に取圍れ三枚刑部樣御行衞未相分右近將監用人山本半(彌)[一本助]初余程之討死遂に引色に相成候處長州人勝に乘し追々進候に付右近將監人數紀州樣御人數追々引退實に防戰之手配相盡申候今

以主計頭樣御着陣無之松平因幡守樣松平出羽守樣御應援之御人數も未相見不申只今之姿にては一家中擧て居城守衛仕候外手段無之因て因幡守樣出羽守樣之御人數早々相進候樣使者差立候得共何分隔地之儀に付其模樣相分不申甚苦心仕候何卒早々御(一本無出)勢御援助御座候樣仕度且又御當地よりも御援助御出勢被成下候樣仕度奉存候一刻も早く御沙汰無御座候ては居城守衛之處も如何哉と右近將監初め一同心痛罷在候此段奉願度右近將監不取敢申付候間此段申上候以上

六月十九日

松平右近將監家來　永井鉠太郎
岡尾(一本明之助)(朋之丞)

以書狀致啓上候然は征長に付阿部主計頭人數先隊夫人足共凡千五百人計も可有之濱田領益田へ入込罷在候處一昨十六日曉七つ時比之由長州人凡千人計津和野領高津へ押寄午刻比より右人數と炮戰致し其砌は先相引位にて分れ長州人は同領山手へ引退候處津和野口より新手二千人計押出一手に相成夕暮より益田へ押掛海岸よりは軍艦にて大炮打掛け福山勢共大敗に相成生死曾て不相分同所は一圓火炎之由濱田領も至て危急之段主計頭より使者田邊昌六郎を以只今申聞候御地に於ては最早御承知之儀には御座候得共尙拙者共も不取敢御通達に及候其筋宜被　仰上可被下候

一主計頭儀は當月十五日拙者支配所石州粕淵村迄繰入候處脚氣にて行步不相叶由にて同所に滯留治療罷在候趣に御座候

一松平右近將監人數は千五百人計三隅へ出張罷在候由相聞紀伊殿御人數も貳千人計濱田へ入込右

之内三百人計是又同所へ御繰入相成候趣に御座候安藤飛驒守昨十七日濱田着相成候趣に御座候

右之段可得御意如斯御座候以上

六月十八日酉之上刻　　鍋田三郎右衞門

中島利右衞門様

本藩より幕府へ之屆書

一紀伊殿先備六月三日より追々石州濱田表へ繰込候處同十六日一之先阿部主計頭二之見松平右近將監人數於益田賊軍と取合及苦戰候に付加勢之儀數度使者を以申越候に付濱田へ到着之分大砲隊小銃隊夫是三百計急卒駈付候得共同所より益田へ十里余之遠路且峻嶮阻隘之山路大炮兵粮等之運送自由不相成漸夕七時鎌手峠と申所迄押出候處最早益田表之合戰相果兩家及敗走追々引取候場合に付無據人數三隅迄揚取申候此段申達候樣被申付候

軍目付より

一昨十七日晝九つ時過高津邊より長州人多人數上陸益田村邊山々其外所々へ潛伏及發炮候に付阿部主計頭先勢夫々間配防戰致候尤松平右近將監人數も益田村內万福寺へ出張兩手にて炮戰致候處同八つ半時比長州人其陣所內へ山手より嚴敷打掛散亂致候に付兩手申合鎗釼合隊一時に押出候に付引續三枝刑部幷拙者御徒士目付御小人目付共罷出候處兩手にて長人六七人討取兩家討死五六人見受其外は見請不申且砲火も有之次第に陣所散亂致し難立置一と先三隅迄引上可申旨主計頭人數と打合候處主計頭出張先程進にも相成居候間一と先本隊迄引上候旨同人家來三隅村に

於て申聞候間拙者幷御徒士目付御小人目付は濱田表迄今十八日引上同所へ宿陣罷在候間此段御

總督幷伯耆守殿へ被仰上可被下候以上

六月十八日　　　　　　　　　　　　　　　　山岡十兵衛

岡部三右衛門殿

大平鉄次郎殿

御徒士目付より

一昨十七日益田村萬福寺へ陣營を構候内晝九つ半時比より長人共人數定かならす所々山々へ潜伏致居發炮に付當手よりも大小砲共嚴敷打出し暫砲戰仕防禦致候内阿部主計頭人數は萬福寺隣勝達寺陣營に付右人數來り濱田勢と打合之上兩手一所に相成據合見計鎗釼隊一時に押出候山岡十兵衛殿三枝刑部殿出張に付私共御小人目付同樣引續罷在申候節敵徒五六人即死之者見受申候其内次第に發炮烈敷故軍隊離散に相成一同前後立挾之樣に相成何れも苦戰中三枝刑部殿鉄炮に當り深手其儘にて被相倒申候其折家來三人附添介抱致居候其節私御小人目付附添罷在候間致方も可有之儀に候得共何分鉄砲夥敷打ち懸候に付其所を引揚申候夫より刑部殿と御同道被致候十兵衛殿へ附其後本陣へ罷越申候處陣場混亂其上放火盛に相成何れも所々へ紛亂致候十兵衛殿へ私共進退相願刑部殿家來居合候丈け引纒御同役へ引續今朝四半時過濱田迄引揚申候此段御目付衆へ被　仰上可被下候以上

六月十八日　　　　　　　　　　　　　　　　藤田助藏

右三枝刑部へ差添御徒目付藤田助藏より廣島表へ差出候注進寫差上申候以上

阿部進太郎

一昨十九日御屆仕候後益田驛にて十六日終夜對陣仕候處翌十七日曉七時頃敵方驛之南山手へ松明を以登候得共謀計と推察一向取合不申候に付敵驛之西梅村村邊へ人數引揚申候然る處尙又敵二千人程津和野口より押來四五百人程は高津沖より上陸押寄候風聞有之其後追々敵方人數川端へ布列仕候間味方にても夫々手配仕午刻比より双方砲發及戰爭敵は撒兵を以廠舍等繁み之內より多人數入替り新手を以發炮仕當手は至て少人數殊に昨十六日より引續戰爭仕炎暑之節別て疲勞仕候得共種々手配及防戰候處未刻頃に致り候て者疲勞相極申候に付勝達寺威光寺二ヶ寺より發炮敵陣益田驛へ及放火漸燃立候頃敵不意に裏手へ廻り後之山手より勝達寺宿陣を目懸け打下し候に付萬福寺へ屯集之濱田人數と一手に相成防戰仕候得共援兵も無御座孤軍深沒之姿に相成力究候に付鎗刀を以敵陣益田之方へ突入申候其後死傷之程は相分不申候尤敵方にも死傷有之趣に候得共此邊も聢と相分不申候旨益田表より右迄見屆本營へ爲注進罷越候者申聞候猶委細取調之上御屆可申上候得共不取敢此段先御屆申上候以上

六月廿日

阿部主計頭

一去廿日御屆仕候通り先手人數於益田驛敵軍多勢に被取圍救應も無之孤軍深沒之姿と相成衆寡難相敵候に付必死を極め以槍刀敵陣へ突入候處彼之不意に出忽八九人斬倒候勢辟易一旦狼狽散走致候得共尙又被取圍嚴敷致打炮候付難相支一纏に相成打退き申候追々人數も相損し夫卒者大抵

散亂候間無據大小砲輜重等余程相殘置先濱田迄引取(一本ナシ之)處同藩より應援被相賴候に付其儘滯陣罷在候人數之內討死之者戰士二人足輕四人手負之者戰士計二人足輕五人都合死傷二十三人有之敵方銃砲討取之外追打相掛け短兵接戰之節は余程斬殺も有之趣候得共死傷幾人と申儀相分不申候且敵今に益田へ屯集居候旨追々本營へ爲注進罷歸候家來之者申聞候間此段御屆申上候以上

六月廿三日　阿部主計頭

此程申進候通防長勢高津へ押出し益田に有之阿部主計頭殿先手津田に有之松平右近將監殿人數等へ押寄參り其余跡勢無之付不取敢御人數繰詰度段三隅驛大小砲隊等へ申越候處拙者罷越て相進可申旨申出に付此節强て都合致し十六日夜半過より早駈にて出立同所へ未明に致到着直に頭二組繰續之儀をも申運ひ直樣木部邊迄繰進候處夕七時比木部より少し手前かまち峠と申坂邊へ差掛候處益田戰爭相破れ福山濱田之敗兵手負死人等追々行逢ひに付是非追討等可有之思慮致候付尙々御人數相勵右坂之下り口相固早速用意米を以焚出し取計大敗軍之向之內へ支度爲取計此所は當手にて相固め候間心靜に引上候樣申聞夕七つ時より八つ時頃迄相固居候得共追討候者も無之然る處右同所之儀は濱田より是迄之內にては至極之地勢に付長州境迄も一眼に見渡益田へは一里余之處に付討入にても可然候處前件之通火急之出張僅之人數と申其上道中筋六七里之間人家盡く立退人足一人も無之大砲隊大砲無之兵粮米用意無之跡御人數之儀も急々參着無覺束候に付御使番等を以飛驒守殿へ申上三隅驛は別て地勢不宜候付一旦長濱迄繰戾し拙者儀は濱田表へ揚取飛驒守殿へ之御談向は勿論雲州之先勢蒸汽船を以參着致候福山之人數も今明日に參着致

候に付海陸兩道に手を分ち相進み候掛合等最早大躰相濟候に付此程長濱より繰出し置有之候周布村大御番頭初を尙又相進め續て飛驒守殿手勢をも早速繰續の筈致治定候事有之候先此程中手續申進候以上

六月廿三日　　平九郎

主水殿

三郎兵衛殿

平九郎は藩之御軍事奉行小出平九郎なり

一長州御征伐に付山陰諸手之人數追々繰詰候處彼より石州高津濱田邊迄も人數押出し及戰爭討手利なく福山濱田勢共引退候趣長州勢此上如何相働候哉不相分候得共海上へ軍艦も差廻し候哉之樣子にも相聞え候處全躰石州口之討手は一昨年抔と違ひ此度は大に御手薄に被存候私方人數者應援之場を以追々繰詰居候得共領國は三方海岸至て敵地にも近く如何躰の越働も難計自國之固も勿論肝要之儀と存候依之此上石州路へ多分之出勢も難相成候間何分應援之兵御手厚に御差向に不相成候ては自然機會を失ひ人數退縮之氣を生し候儀も難計甚以御大事之儀と奉存候間深御洞察被下早々御評議有之度差懸り御急務と奉存候に付此段申達候以上

六月廿三日　　松平出羽守

一長防人追々押來候趣に付濱田表御出張之紀州樣御先備御人數三隅驛迄御繰進尙又追々御繰出に付主計頭本隊人數も急々繰出可申旨中納言樣より被　仰出候趣安藤飛驒守樣被　仰聞候旨御達

之趣早速主計頭陣所へ申遣候處奉畏候旨申越候以上

六月廿四日　　阿部主計頭家來　島田虎太郎

別紙之通り御請申上候得共主計頭儀は兼て申上候通病氣にて急速出馬難相成候に付馬廻り人數少々相殘し其余人數は盡く重役之者爲相纒爲繰進置病氣快方次第早速跡より相進可申候間此段御屆申上置旨主計頭申付越候以上

六月廿四日　　同上　右同人

一出羽守人數先手之勢追々石州路へ繰込候に付去る十九日出羽守も出張致候旨申越候此段御屆申上候以上

六月廿五日　　松平出羽守內　長尾順之丞

一右近將監人數一の手貳の手領分津田村薗田村迄繰出し置候處去る十五日長州激徒津和野領高津浦幷横田村へ多人數押寄候趣十六日注進有之候に付一の手人數は津田村へ向繰出候內領內境多田村へ押來り候に付同所關門にて相拒候處致砲發候に付關門詰之者防戰仕候得共多人數にて終に被打破申候夫より阿部主計頭樣御人數陣所へ押寄暫時及砲戰引去り申候右に付主計頭樣御人數へ打合之上右兩手之人數共十七日未明益田村へ屯集仕候處巳の刻頃より追々長人寄來陣所々々裏表人(數)(家カ)或は藪等へ潜伏砲發仕候に付從是も及發炮段々大小炮烈く打出人家等燒失仕長人よりも陣所邊人家へ放火等仕候處砲戰のみにて勝敗決兼候內に主計頭樣御人數と一手に相成槍隊を以突出左右へ追打夕刻迄及血戰候處遂に長人迯去候に付一旦陣所へ引揚け候得共何分人數

相疲れ後詰之勢も無御座不得止津田村邊へ引揚候積之處不計道路々々より長人發炮仕候に付人數纒り兼且又海陸より濱田城相襲候体も御座候に付無據追々退陣仕一の手人數は此節周布村邊へ屯集罷在候趣從在所表申越候間此段御屆申上候以上

六月廿八日　　　　松平右近將監家來　永井鉄太郎

一三枝刑部殿御儀御徒目付御小人目付御附添にて別紙御屆申上候通り去る十七日益田村戰爭之節御出馬之處於同所刑部殿鉄炮に被中候体之處御介抱之儀は御同人御家來差添被居候故家老松倉丹後初めは精々指揮仕敵方へ向致砲發相防せ申候其節之儀は殊更砲發烈敷手分相働候故刑部樣御樣体如何被成御座候哉と安心不仕召連候彼方之者差戻相尋候得共混雜中相分兼候旨罷歸り申聞候然る處其處にて被相終候由承り驚入早速探索之者差出相尋候處今以相知不申深心配仕候猶嚴敷相糺居候趣不取敢從在所申越候間此段御屆申上候以上

六月廿八日　　　　松平右近將監家來　永井鉄太郎

一六月十七日賊軍豐前田浦門司を襲撃小笠原勢敗北す

昨十七日朝六つ時比長州下關より毛利大膳家來共異國形手船五艘にて豐前國田浦門司邊へ砲撃致候付兼て出張有之候小笠原左京大夫人數より應砲及戰爭賊艦一艘討沈め殆沈沒之体に相成候處蒸汽船を以下之關之方へ引去今一艘にも彈丸數ヶ所相中り候由に候得共さしたる損所も無之哉に相聞候長賊より相發候散彈之爲田浦邊人家一圓延燒門司邊も散彈之爲燒失其內賊徒上陸に付手詰之戰爭に相成小倉之人數一同苦戰追擊致候得共火勢烈敷且同所邊は地理も不宜何分同所

にて接戰難相成候に付左京太夫人數幷近江守幸松丸共一先內裏邊へ引揚滯陣罷在候尤味方死傷も少々有之彼方には多少は慥と難相分候得共死傷も有之趣に候

內裏邊へ長賊共不罷越田浦門司へ上陸之人數凡貳百人余にて同所露營折々砲發罷在候右に付早天より諸家在合之人數不取敢繰出し應援候樣相達候得共何分未た着到も揃兼種々人少故應擊も難出來小倉よりも應援人數早速差出候得共門司以南賊軍屯集其火勢盛にて容易に難進入殊に小倉先手人數大砲は過半被奪少數に相成候間一同內裏邊滯在罷在候

一昨夜內細川越中守先手人數繰詰到着に付不取敢爲應援出張爲致有之有馬中務大輔人數も先手之內五百人程到着致居候に付是又爲繰出順動丸幷小倉手船一艘海上內裏へ相廻し合擊之積夫々手配申付置今十八日諸軍疲勞も致居候に付戰爭先見合攻守之手筈嚴重申付置候何分にも一時不意に掩襲に逢ひ候儀故墨々敷勝利にも難相成候得共不日諸家人數到着次第早速討入候筈に有之候此段申進候大坂表へも御申越可有之候且京極主膳正へも爲心得御申越有之樣致度候以上

六月十八日　　小笠原壹岐守

松平伯耆守樣

猶以長州人豐前地へ上陸之人數未引揚候注進は無之候以上

一以飛遞拜啓仕候大暑之砌各位益御淸迪奉拜賀候當鎭壹岐守殿御初役々一統相變り候儀無之御降心可被下候陳昨十七日曉七つ半時比より下之關邊に當り（頻りに）[一本ナシ]炮聲相聞え戰爭有之樣子に付所々承合候處慥成說は（未た）[一本ナシ]無之藝州より御軍艦御廻し相成長府邊炮擊致し候抔申噂にて何分

不取留次第尤兼て申進候通り此程之霖雨にて九州邊川々相溢諸手人數着到延引致候に付責て一の先相揃候迄は討入見合候樣當藩へ御達に相成候付當家人數より彼を攻擊致候には有之間敷彼より暴發致候にあらされは道路之說之ごとく大嶋郡邊より御軍艦相廻し元山又は長府最寄攻擊致候にも可有之と存一同壹岐守殿御宿陣へ罷出曉來之炮聲に付何歟御屆等も有之候哉相伺候處田中孫兵衞罷出居御軍艦御廻し相成り長府城下御燒打相成候趣承り込候て大悅之躰右に付多分は相違も有之間敷存居候處朝七時廻り過田浦出張軍目付齋藤圖書御宿陣へ乘付長賊大擧襲來軍艦五艘（大船二隻帆船三隻）にて門司（小倉家老澁多見新陣所）田の浦（同家老嶋村志津馬陣所）楠原（小笠原近江守陣所）庄司（小笠原幸松丸陣所）等砲擊防戰行屆兼候趣御屆申出候其後追々注進有之今曉霧深にて咫尺を不辨敵船近寄候を更に存不申誠に我不意に出候のみならす最初長府之方へ向ひ數發射炮致候に付兼て噂に聞及候富士山翔鶴丸抔參り敵地打破り候事と味方大に氣力を得討入候用意等致居候處豈圖ん艦之左舷より五艘連發盛に打防戰度を失ひ併なから嶋村志津馬之手にて彈道中に踏止り大炮應發軍艦壹艘打沈め壹艘は大に疵を爲負するーぷ貳艘兵士人數十名つゝ程乘組參り居候を打破り候內煩手矢島四郎左衞門藪近左衞門彼の彈丸に中り一人は深手（近左衞門）一人は卽死かゝる處に楠原小笠原近江守陣屋燒彈の爲に放火せられ門司田の浦陣所は中斷之形に相成長賊端船にて多人數上陸門司田之浦之人數挾打に相成海上より艦に備る所の大砲盛に打出し迚も防戰行屆兼島村志津馬其外諸手共間道より大里に引上申候長賊は追々上陸門司（七十五軒程）田の浦（百五十軒程）楠原（百六十三軒程）於所々放火陣所之大砲廿門海岸に繫置候手船（關船之類）三艘小舟（漁舟）八百艘皆彼に奪掠され申候火之手は追々烈敷前三ヶ村皆燒失田の浦近邊へ八百

人程も上陸屯集之趣に御座候大里邊へも押寄可申勢之處軍艦相損候故かして晝後より軍艦皆下之關へ引退半は沈沒之船も曳船にて同所へ引戻し大里之先白木崎沖へ帆前船壹艘繋り居折々砲發威を示し居黄昏に至り止み申候大里も甚手薄にて當藩よりも御人數を以御援兵被下候樣願出候處御承知之通り千人隊別手組のみにて御宿陣之方御警衛引足兼候程にて殆當惑仕居候處熊本勢千六百人程到着致候に付右を大里へ繰出候樣御差圖候樣に相成且大里沖之方は順動丸飛龍丸にて防衛致候樣相達當藩も少々氣力を得候事に御座候小倉は積年之私怨も有之擧藩殊之外憤發には御座候得共器械に乏敷大砲はぼーとほーうゐつする多く小銃は火縄炮多く甲冑小具足重藤の弓抔にては實に埒明き不申候右に付纔に二三百之奇兵隊に破られ殘念無此上候久留米も五百人程出倉致居候得共是又尊王攘夷之兵隊熊本も大凡同樣扱々困却之至に御座候併孰れも接戰には長し居る兵士に付富士山翔鶴等にて下之關長府等燒拂上陸之道を開き當藩を初め多人數所々より上陸決戰致させ候はゝ長府城清末營は半日之間に乘取可申右を足溜りと致候へは二州可計奉存候昨日急便を以御軍艦御廻し越之儀申進候間明後日迄には御船も到着大勝利有之候事と一同相樂み居候前文にも申述候通銃隊甚乏敷且砲隊も不十分に候間壹岐守殿御寸書にも被　仰進候儀には候得共歩兵二大隊大炮半座急速御廻し有之樣是非共致度右兵隊差渡し方は馬關長府等炮撃之後は運送船之分御廻し申候ても差支無之候間急使にて御申越可被成候呉々も昨日之戰爭器械無之銃隊等に事欠候より門司田の浦敵の有と相成實に不堪憤激候尤當藩軍事掛尾形繁右衛門と申仁血戰の後田の浦山上へ遁れ大松樹へ攀上り昨夜より今朝迄敵之樣子目撃致し立歸り申

聞候には上陸之長賊八百人程有之岸に繋き有之候小舟等奪去且味方立退候節取殘置候大砲類は
ぶりんてほーさ釘（火門）打置候間急速用立兼候故に哉其儘に致し有之右人數昨夜半頃より追々長地
へ引退只今は一人も不罷在候趣に候併田の浦邊は只今之處にては先敵地同樣に付樣成義は未た
相分り不申候先は昨日以來之事情荒増申進候草略閣筆余は後鴻に讓り候以上

六月十八日

謙　次　郎　印

大　內　記　印

但　馬　守　判

主　水　正　樣

三　右　衞　門　樣

鑛　次　郎　樣

尙々時下折角御自重專一に奉存候官軍御廻し之儀は壹岐守殿に於ても呉々も御懇望之事に
候間可成丈早々御差廻奉願候

藝地戰爭之樣子上之關へ注進も度々可有之候間早々御飛船御申越可被下候御地之動靜更に
不相分種々空說の爲め驚かされ且諸藩より新聞を得五七日後に御書狀相達候樣之儀にて甚
不都合に御座候尤此方よりも申進候儀も延引致御不都合之儀と存候間精々差急き申進候樣
可仕候也

圈点の廉のみ御取計被下度候

一六月十九日曉賊軍藝州口大野村水野大炊頭陣を襲ふ我軍討て大に之を敗る

松平伯耆守へ屆書左の如し

紀伊殿先手人數幷水野大炊頭手勢共當國大野村へ出陣罷在候處十九日曉七半時比大炊頭陣所前大野村へ賊兵押寄候樣子にて山々松明夥敷相見候旨兼て城ヶ峯京越邊に差出置候見切之者より注進有之間も無く同村民家に火をかけ雄瀧間道山上より鉄炮一發續て三ヶ所烽火之合圖に隨ひ山々峯々より頻に砲發賊兵漸々山麓へ下り大小砲幷火矢等十四五ヶ所より打出し就中大炊頭本陣目懸嚴敷打懸候付不意に敵を相受候儀には候得共兼て手配之人數より大小炮嚴敷打立候內本街道よりも賊兵尙又一と手押寄民家を燒立賊兵凡三百人餘炮發襲來候に付紀伊殿人數よりも大小砲頻りに相發候處賊兵俄に散亂致し候就夫山々幷本街道共追討四時比賊兵玖波邊迄敗走致し候に付敵之番兵追拂四十八坂より大野村へ人數揚取候旨尤味方討死手負且賊兵討取分捕相知候分別紙之通に御座候此段申達候樣被申付候

別紙

一討死　大炮隊長中島欽一郎隊　永田宗十郎

一同　同　尾關信楠

一同　中島欽一郎家來　富永貢

一鉄炮深疵手　中島欽一郎隊中　倉橋竹之助

一鉄炮深疵手　同隊中　井口善之助

一同　同人家來　岩橋十次郎

一即死　雜卒　四人

一討死　水野大炊頭手勢之内　印東新十郎

一討死　橋本角兵衛

一討死　中村半兵衛
一鉄炮疵淺手　榎本木酢
一同淺手　兒玉(唯)[一本順]次
一同　大西常三郎
一同深手　林駒三郎
一同深手　山家足輕 山川清作
一同淺手　雑卒二人
一生捕　二人

一鉄炮疵深手　松(下)[一本本]太郎助
一同深手　西米藏
一同淺手　弓場儀惣兵衛
一同　同心 小野田久五郎
一同淺手　同 澤崎佐一郎
一同深手　雑卒二人
一討取　長州遊撃隊第七銃隊 宇山宇作

分捕品鉄炮刀彈藥箱雑具十八点略す

水野大炊頭屆書

去る十九日明け七半時大野村入口之方合圖と見へ火之手上り候に付人數相揃手配候内大炊頭陣所西敎寺裏手左之方に當り候山之半腹より小銃打掛同山裾より多人數押來松ヶ原村へ之間道也大炊頭陣所を目掛臼炮を交え打立候に付山々へは夫々番兵差出置候得共半腹より忍入不意に打立候に付頗難儀之合戰には候得共銃手之者陣所前往來左右へ伏置敵之進むを相待間合三四十間に相成候より發炮に及候處陣所左右に敵之砲玉如雨飛來り左之方山上へも取上り後口を取切候樣子に付大炊頭には兼て間道之敵不意を襲候はゝ取上り候手筈に定置候右之方の山に相對し候小山へ取上

り近習之者幷銃手少々召連横矢を打候處敵も此所を大切と存殊に嚴敷打掛候に付大炊頭にも自
手筒を以爭戰に及候程之儀近習之者にも兩人程深手を負候へとも陣所左右よりは大小砲を以烈
敷打掛左之方山上に差置候銃手よりは眼下に見下し打下し候に付敵は少々ひるむ樣子其内近邊
兩三軒へ火をさし燃上り暫は相支候へとも三方より打立候に付難敵覺え候哉間道より松ヶ原村
をさし引揚尤狼狽致候と相見へ持參之品々捨置迯去申候其節陸軍方歩兵隊には右之方之山へ取
上り候へ共最早敵兵逃去殊に嶮阻之山道二十丁余も逃登候に付其儘追留申候其前陸軍方大炊頭
陣列左之方へ繰込往來に散し打合候處歩兵差圖役頭取初歩兵四五人怪我一手之歩兵隊には本道
より四十八坂之方へさし敵之後ろを取切候樣に見せ少々臆し候樣子に相見え候はゝ直に右之山
上に取掛追打可致旨手筈に取計候處如圖敗走に及候ても足早に迯延申候紀州樣御人數大炊頭相
備之儀は陣所左右幷本道山傳之敵に相當り戸田助三郎殿人數も間道山敵に相當り各苦戰致し本
道間道共敵不殘追拂申候其後陸軍方には本所紀州樣には御人數大炊頭手勢迄小隊は間道より松
ヶ原村夫より玖波へ押寄申候大炊頭手勢之内手負戰死別帳之通御座候
一敵方には手負死人とも持去り候由松ヶ原村にては人足持運候死骸菰包三十一之旨庄屋より申出
候事に御座候本道之筋は相分り不申候以上

水野大炊頭内　西　九右衛門

討死手負姓名書は前の通りに付略す

一此時幕府陸軍方死傷は左之如し

一戰　死　　　　友　成　求　馬　　　一戰　死　　　歩兵組二人
一負　傷　　大炮差圖役下役一人　　　一負　傷　　　歩　兵　六　人

一右戰捷に付即刻幕府より酒肴を賜はる
大野村へ賊兵爲誅伐御人數出張之處今曉俄に賊兵より及發炮候處夫々手筈行屆一同不惜身命格別勇奮苦戰速に勝利之段一段之事に候依之出張之者へ御酒肴被下候間夫々爲戴候樣可被成候此段可申上候
一六月十九日松平左京大夫樣御家來番頭代り伊達覺左衞門御人數百余人引纏御陣見舞として廣嶋へ出張いつれにも御差圖次第出兵可致旨被　仰進に付大野村水野大炊頭陣所へ爲援兵出張を被命
一同日松平安藝守家來二川主税大隊引纏草津驛へ出張之旨屆出差圖次第いつれへ成共出兵可致旨申出により大野村水野大炊頭陣所にて申合いつれへ成共可致出張旨申聞る
一六月廿日松平伯耆守人數賊を川津原に敗る
兼て申上置候爲巡邏差出置候伯耆守人數昨村相固め居候處一昨十八日津田村へ激徒八百人計り罷越胸壁樣之處補理候形勢に付今午中刻比物見之者差出候處先方も遠見之者出居出會に付討掛候處討洩何れへか逃散申候右に付人數繰詰三町計り前より三手に分け凡半時計り及砲戰候内一手は敵方後ろへ相廻り頻に討詰一手者山中へ分け入是又及砲戰追々及追討候處何方へ散亂致候哉相分り不申候右屯集致居候草家四軒破裂彈落候哉燒失致候討取人數怪我人等之儀は取調之上可申上候且又器械損しも有之候に付一先引揚候樣申遣し候不取敢此段申上候以上

○六月十九日大野村戰爭畧圖
自暁七半時至四時比
歩兵隊
廣島道
廿日市
五日市
幕軍
紀軍
賊軍
大野村
村治
偵察方矢野伴五郎小山田小太郎見取圖追々賊ヲ追討シタル処ヲ示ス
山上ノ朱線ハ賊ヨリ乱射
此辺宮島
海
大垣大砲
大炊頭ノ頭ヲ越シ敵ヲ打
畑
城ヶ峯
公辺歩兵
江戸銃隊
江戸大砲
江戸小隊
江戸隊
御墓山
入江
江戸隊ト云ハ江戸常府ノ武藝者及地士寺御警衛シテ大坂在勤ノ処本年五月十日大夫水野大炊頭ヘ附属出張ヲ命セラレ殺手隊ハ妹尾宇平治砲隊ハ遠藤忠外引率六月十五日大野村ヘ出張終始大炊頭ニ附属毎戦奮テ勇戦ス栗生兵助ハ江戸御用人ニテ総括出張ス又紀州和歌法福寺住職北畠道龍モ壮士三十余人ヲ率ヒ来テ大炊頭ニ属シ能ク戦トニフ

○六月十九日大野村戦争畧圖
自暁七半時至四時比
歩兵隊
大炊頭同心
大炊頭同心
大炊頭本陣
江戸大砲
江戸銃手
小山色
大炊頭自身発砲
大砲
大垣陣所
村落
幕軍
紀軍
賊軍
大野村
廣島道
廿日市
五日市
偵察方矢野伴五郎小山田小太郎見取圖追々賊ヲ追討シタル処ヲ示ス
山上ノ朱線ハ賊ヨリ乱射
海
大垣大砲
大炊頭ノ頭ヲ越シ賊ヲ打
此辺宮島

六月廿日　　　　　　　　　　　　　　　　　松平伯耆守家來　福田要助

一昨廿日申上置候爲巡邏差出置候伯耆守人數畔村之要路に固候て激徒事情致探索候處去る十八日津田村へ八百人計り罷越一昨十九日は川津原と申處の山手に寄り追々人數相進め胸壁樣之處造築致候由相聞候に付彼の要害全備不致內不意に是より進可申と申合昨廿日午中刻比怠歸之時刻を伺ひ物見之者先に進め引續味方之人數進め候處既に敵地近く及ひ彼の物見に出會候に付味方物見之者直馬上筒を以て一發致候處討洩候得共大に狼狽致し何れへ逃去候哉相分不申候無程人數を三手に分け山手に向ひ前と左右より打入及炮戰申候其內味方之大炮利を得候事に哉敵より打出し候炮聲少く相成候右三手に分ち候內一手敵之横より顯出打出し候處敵は追々逃去申候に付兵士鎗入仕候今一手之兵は敵之後ろへ相廻り逃去候跡より打出申候に付敵兵散亂仕候右屯集之藁屋燒彈の爲に候哉致燒失候素より敵之地理を弁へ人數之多少を明かに知りて進み候儀には無之候に付何分味方小人數之儀若敵之別手に後ろを絕切られ候儀有之候ては及難儀候に付打首分捕等を禁し打捨之儘速に人數引揚申候討取人數討死怪我人等之儀は別紙之通りに御座候此段申上候以上

六月廿一日　　　　　　　　　　　　　　　　松平伯耆守家來　福田要助

別紙

六月廿日藝州川津原屯集之激徒討取伯耆守家來討死手負等左之通

一討取　　三十五人

右之外大小砲にて打取候分相分不申候

疵	役	姓名	疵	役	姓名
鉄炮疵深手	武具奉行	湊孝治	同淺手	兵士	岡本亘
鉄炮疵淺手	徒士	河野藤治	鉄炮疵深手	徒士	平田友藏
鉄炮疵深手	同	吉田房藏	同	同	乘(一本船)(松)順藏
鉄炮疵淺手	鼓手	有吉三七	同	小荷駄方	中村權七
打死	徒士	松尾兵治	鉄炮疵深手		角田瀧藏

右之通御座候以上

一六月廿一日大嶋郡陸軍不殘引拂

幕府御徒目付より届書之趣

大島郡戰爭勝利には候へ共元々攻口外之場所に有之且藝州口手薄にも有之候間同郡に罷在候陸軍不殘引拂藝州廿日市迄押出候旨

一六月廿五日賊再ひ大野村を襲ふ我軍亦之を敗る

幕府へ御届書

紀伊殿先手人數幷水野大炊頭手勢共當國大野村へ出陣罷在候に付十九日戰爭之次第其砌被申達候其後同月廿五日朝六半時前街道より賊兵押來り大小砲打出し候に付陸軍方大小砲にて暫く支へ右手之山へ相開き候に付紀伊殿人數繰出し嚴敷防戰致居候内紀伊殿手船(砲臺船)三艘賊兵之後ろへ乘廻し砲發致し候に付賊兵大に敗走致し候同時瀧之口之間道へも押來り候に付紀伊殿人

數幷大炊頭手勢左右之山上より砲發致し候に付賊兵散亂兩方之山腹へ馳登候故猶又頻に砲發致し賊兵稍色めき候處味方玉藥相運ひ兼無是非山を下り候賊兵其跡へ登り大野村を見下し大小砲頻に發し味方大に奮戰致し漸く八時比賊兵及敗走候に付四十八坂峠迄致追討夫より大野村へ人數引揚取候旨尤賊軍全千余人襲來候內死傷凡百人計も有之候得共打合中畚にて運ひ逃去候段敵地近邊之士民等跡より追々注進申出候且又味方討死手負幷分捕相知れ候分別紙之通御座候此段申達候樣被申付候

別紙

戰死　大番 三浦平右衞門　鉄炮疵淺手　同 辻長大夫

鉄炮疵淺手　飯村泰次郎　同　大番同心一人

同　深手　先手物頭同心一人　同　淺手　水野大炊頭足輕（十八）人

同　淺手　雜卒二人

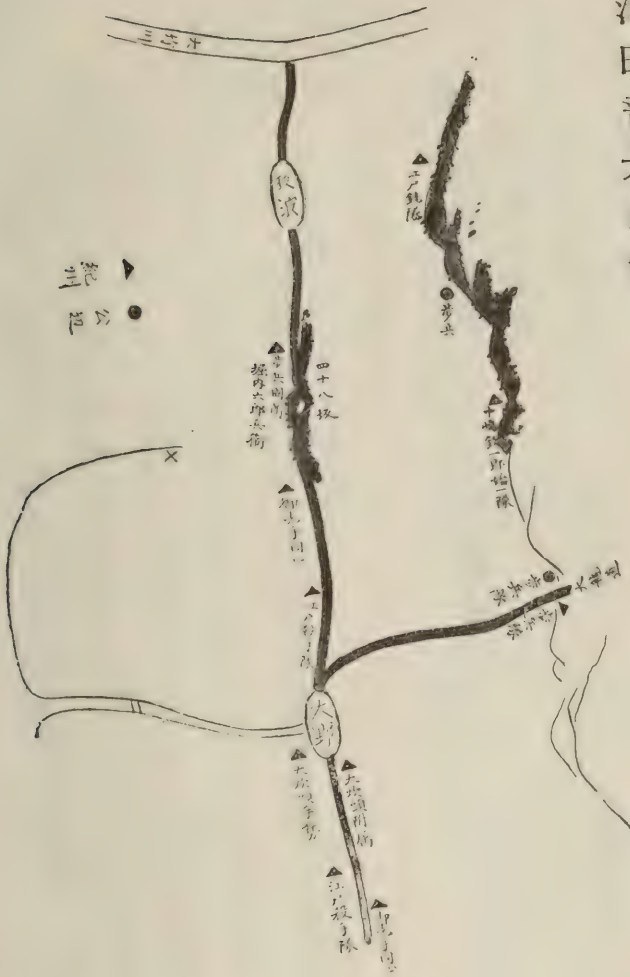
分捕品ミニー銃刀等雜具

幕府御徒士目付之書狀

一端作り然者昨廿五日明六つ半時比より四十八坂下迄長防押參り此方にては坂上に步兵晝夜共固め居候に付右場所にて打合に相成候內先方にて合圖火を上候と山中へ相廻り山上より打下し候に付水野大炊頭陣所後ろ之山岸之方は大炊頭人數にて打合其外紀伊殿御人數戶田助三郎人數幷大炮方にて打合候處晝九つ時過頃退候間追打仕候處不殘四十八坂之方へ逃去候間追打致候內紀

伊殿御人數より濱手へ船三艘へ大砲を掛け相待居打出候處右に付不殘玖波村より先々之方へ引取候樣子に御座候八つ半時比此方引取申候分捕物等之儀は追て申上候尤今日之風聞にては六七百人程集り猶又押參り候趣風聞承り申候此段申上候且又當節之樣子にては私一人にては手廻り兼殊に將監殿にも心配被致候に付尊君樣には早々御出張御座候樣御同人御申聞られ候間早々御出張御座候樣私共に於ても此段奉願候

六月廿（一本六）（二）日　　宇佐美喜三郎

津田晋太郎樣

戸田藩屆書

今廿五日朝六半時炮聲相聞候に付宮糧御焚出の所へ早速人數繰出し護衛罷在候然る處賊兵西北之方山々へ相廻り大小砲烈敷打掛候に付此方より同樣打出し防戰仕九つ時頃賊兵追退申候依之官糧聊御別條無御座候尤彼我死傷之儀は未た不相分候得共不取敢先此段御屆申上候以上

六月廿五日　戸田助三郎内　戸田權之助

一右勝利之趣早速大坂へ言上之旨にて左の書付松平伯耆守より渡す

紀伊殿家老衆へ

長賊爲誅伐水野大炊頭御人數引纏藝州大野村へ出陣罷在候處同人陣營へ再度犯來及發炮候處其節々大炊頭初出張之御人數格別奮發勇戰兩度共御勝利就中此度之戰爭別て苦戰之處速に御討伐之段諸藩之龜鑑にも相成一段之事に候此旨大炊頭初へ御申達可被在之候畢竟紀伊殿格別御盡力被爲在候段大坂表へ申上入　御聽候はゝ嘸々　御滿足可被　思召候此段可被申上候事

（一本斷て）
（一右戰捷之御賞左之通）於大坂（も）（一本アリ）板倉伊賀守を以て被　仰出

紀伊中納言殿

大野村戰爭之節出張御人數格別奮發勇戰度々勝利相成候段畢竟御指揮行屆候故之儀達　御聽御滿足被　思召候猶御盡力御指揮被在之候樣にと　御意候

水野大炊頭

大野村戰爭之節格別奮發勇戰度々勝利相成候段達　御聽御滿足被　思召候猶盡力勉勵可有旨
御沙汰候

一六月（失日）副元帥御差向之儀御使榊原耿之助を以幕府へ御請求同人早駈にて大坂表へ出發事情親しく
陳述に及ふ

御先鋒總督之儀乍不及段々盡力仕候得共兼て不肖之上攻口も手廣に有之甚痛心之至りに御座候
就ては一昨年尾張前大納言へ總督被　仰付候節松平越前守へ副元帥被　仰出候御振合を以何卒
可然仁へ副元帥被　仰出早々御差越御座候樣仕度左候はゝ万端申合猶此上盡力可仕と奉存候右
御許容被下候はゝ松平大藏大輔へ被　仰付被下度奉存候猶委細は使之者より御聞取御座候樣致
度候事

一六月（廿六七日比か）幕府軍勢を增發す

六月廿一日大坂出帆同廿七日着藝

講武所奉行　遠藤但馬守　（一本講武所頭取兼）（同組頭）　杉浦龍次郎
同炮術師範役　榊原（一本鐘）（庄）次郎　同調方出役　野間錄太郎
村田篤藏

小銃一大隊
講武所下番二人

六月十五日大坂出帆同廿六日着藝

講武所頭取　伊東哲之助　同大炮師範役　飯田庄藏
同調方出役　相川房之助　同　田中幾之助

大砲半座 小銃二小隊
講武所下番二人

石州口應援に　藤堂和泉守軍目付　市岡左太夫

上の關應援に　松平讃岐守軍目付　小出大學

右早々出張候儀於大坂相達す

松平右近將監軍目付に 三枝刑部討死に付　奥津富太郎

松平因幡守

藤堂和泉守

長防賊徒石州路へ進み松平右近將監城下近迄襲來同家人數は勿論松平出羽守南部主計頭人數共度々苦戰之趣相聞候間早々出兵救應可致旨

石州路爲討手被差遣

歩兵頭並　淺野隼人

歩兵一大隊

御持小筒組二小隊

大炮半座

軍目付　有馬式部

一六月失日 石州口討手之面々指揮可致旨松平因幡守へ被　仰出候旨於大坂板倉伊賀守より書付渡す

本記病氣と稱して辭退により頓て免せられたり

一六月失日蓋月末か 松平伯耆守獨斷を以賊四宍戸備後介小田村(一本元素)太郎を放還之由藝州口賊徒より先鋒水野

大炊頭へ左之一書を贈致す

紀伊侯前鋒閣下に白す前役　幕府御問罪之師四境へ被差向候に付弊藩士民一統不奉得其意如何樣之御樣子に候哉奉伺度隣境借地推參候處不圖も井伊榊原二侯御陣拂に相成愈疑惑罷在候に付再度大野御屯所近邊不憚嚴威罷出候次第に御座候然處此度松平伯耆守樣御寛大之御處置を以是迄御拘留相成居候宍戸備後助御差返し被爲成候に付ては國情巨細御了解之御事と相考最早改て平隱之御沙汰可有之哉と奉渇望候處道路之風說先夜以來御襲來之御樣子承り不堪恐愕素より下情欝塞匹夫不獲其所よりして今日之形勢に立至り候得共前段伯耆守樣万端御聞取被爲在之上又候　皇國之騷擾万民之塗炭を釀候ては何歟私闘之姿に相當り上は奉對　明天子賢將軍恐縮之至に奉存候万願は從來柱石之御任を以明良御遭遇之御場合に被爲當候御事に付早々平常之　御沙汰被　仰出候樣御盡力之程奉懇願候

七月二日　　長防士民中

件之始末不容易儀全く總督を無視したるものと御激怒あつて直ちに御家老有本左門御使を以總督御免を幕府へ御出願四日夜左門出發す(一本ナシ)(左門十五日夜歸着復命)

私儀不肖之身を以忝く　御先手總督之　命を蒙り實に負乘其任に不堪儀に候得共方今切迫之時勢乍相弁只々退讓而已仕候も奉恐入再應御辭退之上愚陋を不顧今日迄奉　命仕候儀に候得共元來若輩之私衆望に不相副總督之任有名而無實軍之進退并敵之重囚を放遣等別紙之通之大事件に付ても往々預聞不致儀多分有之諸藩進戰之兵士へ對し何共無面目次第に立至り候も全

く　公邊御趣意を不奉辨一己之鄙見を以明りに重任を犯し居候故之儀と深く悔悟仕此上廉恥を忍ひ強て勉强仕候共此分にては往々罪を重ね可申と深く奉恐縮候に付何卒總督之職は今日より　御免被成下候樣仕度其上にて如何樣共努力可仕と奉存候此段何分　御許容被成下候樣伏て奉懇願候以上

七　月

右に付左之通伯耆守へ達し藝石兩道討手諸藩へ心得として御軍事奉行より通達す

別紙之通大坂表へ被相願候に付ては今日より藝石兩道共紀伊殿には指揮等無之樣被存候此段可申達旨被申付候事

七月廿五日

伯耆守如何なれは獨斷以斯の處置に及ひたるかと云ふに同人より七月五日を以在坂之閣老へ贈りたる書に曰く

（前文略）本文の説得人差入候見込は何分當今の御場合兎も角も平伏御請に及ひ候へとも總ての御都合一筋に存込候處より差入候事にて猶は備後介素太郎を遣し候事は是迄も説得の筋も有之候處何分にも不屆候間此賊にて毒より毒を制し候理も有之儀と存候間遣し候事に候壹岐守殿初め御役方へ不相談候儀は調へは宜く不調の時は一同御咎めも蒙り候儀と存し相談も不致事に候何分防長の力責は迚も長引可申候其間には不思儀の御不都合も出來可致哉と恐入候御地にては此の如き激徒可有之とは淺見にて不存候處此度の一條にて愚考候に長防之二州九分過激の境界にて加之薩英の激論助之蒸氣船等は借之候やの風聞有之薩人は内實多分入込居候やにも相聞え右等之儀ゆゑ此末の見込甚以て六つかしく存し今に九州四國石州藝州の應援は出兵致さすたま〳〵に出兵の藩は糧米等相願ひ或は暫時御取替の金を相願ひ其人數多く候にも夫人許りにて戰士甚た少く鉄炮大筒等は古風にて渡り始めの通りの容体にて然も砲隊にても多く候やと存候處其上砲隊は無數外にも當時

砲隊の開け候は先つ第一公邊之陸軍講武所第二薩州第三大鍋島皇國此三口計みにげーるを好み候位實用に渡り直に用立候事變に長防の徒は殘らす農兵みにげーるにて穢多兵まて同樣にて困り入候の一つにて夫是合考致し候に容易には御平定見据無之然れとも佛に談判に及ひ三十艘も軍艦を借出し世上の評論は顧みす異人を遣ひ候はゝ夫ならは速功も可取其他は更に無之夫等承服御請に及ひ候を最第一と愚考致候事にて暗曇短見恐入候得共心底の處奉申上候頓首多罪

七月五日　　伯耆守

板倉伊賀守様

稲葉美濃守様

時況如此伯耆守の意中憐むへし後年水野忠幹(元大炊頭)信に語て曰く備後介を放還せしは其罪伯耆守と予に在る也此事今日迄口外せされ共今や妨けなかるへし伯耆守家は我か伯母之嫁せし方にて姻戚の間なり伯耆守は頗る才幹ありて事に處する最周到備後介放還の事を竊かに予に謀る予曰形勢爰に至る幕府の衰運挽回の道なし備後介一人を斬て何の益あらん他日怨を買ふの資とならん斷行贊成すと伯耆守曰我意決せり割腹以て罪に任すへしと遂に決行す實は伯耆守怜利にて余りに苦惱に堪へされは一つは閣老を遁れん爲もありし也と

前記建白書に對し七月十日板倉伊賀守を以左之通被　仰出

被　仰立之趣委細達　御聽候處御重任御痛心之程は申迄も無之處此度伯耆守不都合之取計等有之別て御苦慮之段深御察被　思召候得共同人儀に付ては已に申達候次第も有之且は是迄御人數其外にて數次捷報有之候も全く御盡力故と段々　御感稱被爲在候儀に付猶此上も御奮勵御成功相成候樣厚御頼被成度との御沙汰に候間其旨可被申上候事

右一通　　紀伊殿家老衆へ

毛利興丸家來宍戸備後介小田村素太郎儀御不審之筋有之松平安藝守へ御預相成居候處此度藝州廣島表に於て伯耆守全く一己之差略を以竊に歸國爲致候段以之外儀に付伯耆守早々大坂表

へ御呼寄御糺問の上至當之御處置可有之積に付聊無疑念諸事是迄之通可被心得候
右之通口々討手之面々へ相達候間爲御心得可被申上候事
猶御陣所へ御使牧野若狹守を被遣左之御書被進たり
伯耆守事如何之取計におよひ候聞え有之絶言語驚入不取敢牧野若狹守を以可申入とそんし候折柄大久保帶刀歸坂委細事情をも承り以之外之事に候當人は早々呼戻し糺問之上急度申付方も有之候畢竟右樣之ものを申付候事全不明故之儀深く恥入候事に候此儀不被懸心頭不相替御盡力賴入候尙委細は若狹守より可申述候不備

七月　家茂

中納言殿

尙不快中故代筆申付候

伯耆守は御不審御尋之儀有之間早々歸坂可致旨被命右に付ては役々の儀は當分紀伊中納言殿へ御附屬と心得へき旨大坂より差圖に寄在藝役々へ達したる段七月十五日伯耆守より上申す（一本ナシ 伯耆守十六日曉廣島出發す）

一七月廿五日伯耆守御役　御免御糺問中牧野越中守へ御預被仰出たり

南紀徳川史巻之百十七

臣　堀内信　編

軍制第四

親征出兵　三

長州征伐　三

一慶應二寅年七月二日廣島御本陣に於て銃隊を編成す

此回御出陣の兵制時勢に随ひ西洋銃隊應用の事ありと雖も元來の兵制は古式に基きたれは刀鎗旌旗は無論戰陣に不可缺者と覺悟したるに豈圖らん大野村の實戰刀鎗更に用をなさす殺手隊は皆銃手とならさるを不得旌旗は敵の目標となるのみ又敵は旋條銃の利器なるに我はゲウェールに銃乃至和砲等にて到底當るへからす實地の經驗忽ち固執を破り君側を初め上下の兵士悉く銃隊に編成せられ本日より御本陣内馬場等に於て西洋式銃隊操練を開始す

是所謂捕盗縄の談と雖も全然初ての戰爭勢ひ止むを不得也長州は曩に馬關に外艦に敗られ兵制頓に改正且つ密かに外人より利銃を購求したる也

○御徒島本泰次郎は六月廿六日俄に長崎行を被命幕府の軍艦にて出發すミニヘール銃購入の爲めと聞えたり同人は江戸常府勝野流炮術の上手なり

○七月十七日ミニヘール銃五百挺大坂より廣島へ到達諸隊へ配付せらる

○仝廿五日都て隊長の旗を廢す

（）仝廿八日戰死者葬式の事及士官戰死者へ謚號忠字を賜ひ目下忠字を稱する者は改名可致旨發令世記に詳也且戰死者は其場にて御目付立合火葬遺骨は御座所へ廻し御親筆の忠字を添へ自家へ送致せらるゝとの事

一七月（御）（一本ナシ）總督御辭退の處御採用無之御再任に付左之趣御家老橋本六郎左衛門を以　幕府へ御建白同人即刻上坂す

御先備總督再任被　仰付候付ては紀伊殿見込之趣左之條々何卒御採用被成下候樣仕度左候はゝ內諸藩を約束し外長防を追討仕　大旆御進征之御前路を開き賊徒を折衝　御威光を挽回可仕右御採用之御模樣に寄紀伊殿存意之品も御座候間早々御評議之上　御沙汰被成下候樣仕度旨被申付候

七月　　橋本六郎左衛門

一大膳父子幷三末家吉川等實に悔悟謝罪軍門に降參候節は　御差圖可相伺候其外長防臣民歎願等總督之手を不經ては一切御取揚被下間敷事

一藝州口寄手指揮之諸藩建白等是亦總督取次之外は御取揚無之樣仕度事

但征長に不關諸藩も長防事件に付ての建白等總督の是非を申上候筋は格別其餘は時々御示被下度事

一精兵合て三万悉皆三兵隊に御編成早々御差向被下度事

右は藝州口諸藩寄手も有之上格外之申立と可被　思召哉に候得共諸藩も相應盡力の樣子なから銃隊少く銃手も多分火繩銃故三兵精練之敵に向ひ候ては利鈍懸隔に候依て　公邊三兵

をは敵軍も殊の外恐れ味方も専ら依賴仕候儀に有之紀伊殿人數も乍不行屆出張之兵は悉皆銃隊に致改制候右　公邊御勢に諸藩の人數を合せ候へは攻擊進入自在に可相成且諸藩も公邊に見習ひ兵制改革彌振起可仕候抑寛永中島原烏合之賊徒　御追討諸軍合て十萬余の兵を以時日を經漸御成功相成候況や長防二州累年撫育一致之敵に候間寡兵にては徒に歳月を經戰士を疲勞し金穀を費し疲弊困頓に至り可申候然則今日大軍齊進速に成功無之候ては其間不意之儀變も難計候是迄寸功無之抑て逡巡致候は指揮不行屆之故に候へ共一つには兵數不足後詰無之故一兩度之小勝も其場限りにて更に進入之機無之空く長陣に相成候而已ならす今日之形に至候儀殘念之至り深く心配被致候へとも國力有限寅早十分繰出候間此上は堺表御固御免被下右人數をも繰廻し申度其余は致方無之事情御賢察被成下右御人數早々御差向被下度奉存候

一右御人數御差向迄之所差當り在坂御人數の内二三千急に御差向可被下候事

一御軍艦五艘早々藝州口へ御差向被下度事

　藝州口は險隘之地多く候故海陸並進奇正互に用不申は難進候事

　七　月　　　　　　　　　　　　　　　橋　本　六　郎　左　衞　門

閣老より指圖

　初ヶ條被　仰立之趣都て御聞屆之事

二ヶ條御指揮中諸藩申立等御取次之外御取揚無之は勿論其他防長事件關係之書類御差向之儀

委細御承知之事

三ヶ條四ヶ條之儀は三兵御編制早々御差向可相成に付坂地は勿論江府にても出格之御英斷にて兵隊專御編制相成候儀に付追々御差向可相成尤堺表御固御免の段切迫之御時節柄無余儀御儀に付御聞屆相成候事

五ヶ條御軍艦早々御差向可相成筈に候處即今何分御船少に付差向被　仰立候通には相成兼候得共猶精々御繰合追々御差回し可相成候事

右之次第逐一可被申上候事

一七月十三日賊石州那賀郡内田村を襲ふ

御軍事奉行小出平九郎報告

一筆啓上致候今十三日四つ時過別紙表狀之通近村内田村へ敵兵押寄參り候に付曲子存見之者一昨日急飛を以申遣有之通止戰之書面差越なから右之通所業不埒千万に付御供番小川楠大夫差遣し一通爲及應接其上致砲戰候共不遲と存見其段飛騨守殿へも御談申上候處至極可然旨被　仰聞候に付其段楠大夫へ申聞候處同人儀兼て憤發致居候間不及一議承諾致し早速馳參候處其内宜早敵方より和田村菅沼九郎兵衛固所へ及砲發候付同手より百目之砲等打出し飛騨守大砲方よりほうと打出し候處敵兵近くにて破裂散亂致候趣然處敵兵東之方長濱へ向押出凡三百人計雲州福山等之陣所へ襲來候處同陣より討て出相互に砲戰雲州勢勝利有之川（此川は周布川に有之和田村より少し東に當る）を南へ追まくり敵兵之足溜り内村へ放火致し和田村之當手と挾んて打立候間敵兵遂に散亂七（一本絶）曲りと中山

坂を越引退候間右より內に敵壹人も無之相成候段小川楠大夫幷役人小笠原彌太郎鹽路長次郎書役木村久楠岡崎大助等間近く相進み遲々見切罷歸薄暮比雲州福山共收兵致し申候前件雲福之樣子は戰爭中彼方より注進申出候事にて有之尙又明日迄には委細聞取其段相運候樣致し可申候三宅村本道も手楠根引て待掛居候へ共折居邊へ貳百人計り參り候注進のみにて押寄不參事に御座候乍去太麻山之西之方二ヶ所等に屯集致し糧道を絕れ候ては持こたへかね候付其段頻出有之候事に御座候諸手共殊の外憤發致し前以菅沼九兵衞幷組頭一組共一和憤發至極宜く中々安心致し候事に御座候今朝諸方馳廻り間には諸藩之應接等にて漸く只今得少閑候間燈下乍亂筆今朝より の荒増不取敢相運ひ申候猶今夕一詭計を出し手配中に御座候書外跡より可申進候因て如此御座候恐惶謹言

七月十三日　　　　小出平九郎

右に付　幕府へ御屆

紀伊殿先陣石州周布村滯陣罷在候處七月十三日朝四時比同所より巽に當り砲聲相聞候付不取敢安藤飛驒守初人數和田村へ繰出し砲擊に及ひ數發之內賊徒集中へ破裂彈打込死傷之程は難計候得共賊及散亂內村と申所へ逃込候處松平出羽守勢阿部主計頭勢長濱裏手山上より打下り頻に發砲遂に內村燒拂候付賊はいつれへ歟逃去申候然處日既に沒し山間見切相付不申追討も難出來に付其夜は陣所を相固居申候此段申達候樣被申付候

（原本ナシ）
（濱田藩より之屆）

一去る十三日朝五つ半時比長人龜井隱岐守樣御領分井野村邊より右近將監領分周布川向內村へ追々進來候に付松平出羽守樣阿部主計頭樣御人數右川手前內田村へ出張炮戰相成并右川下も紀州樣御人數宿陣所川向へも敵勢來候に付紀州樣御人數よりも發砲有之候由右近將監人數は右戰地引離太廐山を取切罷在候に付戰爭無御座候敵人數凡四五百人も可有之追々注進も御座候に付松平因幡守樣御人數分隊右近將監人數差添領分上田村邊へ致出張候處夕刻に至り內村農家出火敵勢右井野村へ致退散候尤右途中領內にも潛居候体も御座候付無油斷致探索候得共何分追々城下へ相迫形勢不容易趣在所右近將監より申越候間此段御屆申上候以上

七月十六日　　松平右近將監家來　永井鋹太郎

一七月十五日十六日賊頻りに石州路を襲擊諸藩及安藤飛騨守等敗走す

一一昨十四日申上候石州那賀郡內田村同所內村邊砲戰相止居福山勢探索旁內村邊へ押寄候趣申置候通り同日夕刻內田村邊へ押寄山手へ陣取人數殘置長濱村へ引揚候者も有之候處昨十五日曉右少人數の場所へ長人押寄來り候に付福山勢同村之內引揚防戰及引續六時頃長濱村へ引揚候人數も繰出し雲州勢因州福山勢にて晝九時過迄烈敷炮戰有之且去る十三日炮火に燒殘候內村人家五六ヶ所一時に砲火に相成其後時々炮發致し居昨夕より炮發相止申候此段　御總督并伯耆守殿へ被仰上可被下候以上

七月十六日　　軍目付　山岡十兵衛印

松平謙藏殿

大久保帶刀殿
岡部三右衛門殿

一松平右近將監人數兼て門田村三宅村の內雲雀山邊貳番手は周布村之內堂林幷日脚村邊迄出張致居候處右村々より一里余先太廰山は高山にて激徒通路要遮之地に付去る五日より殘同所へ進軍致し居候處一昨十五日朝六半時比より敵徒山下叢林へ潜伏四方より俄に大炮打懸候に付一同奮戰防禦致候に付敵徒一度散亂仕候得共何分にも一手にて獨絕之山上持兼晝後に至り繰引に致し內村邊へ引揚同所にて福山勢其外炮戰中に付援兵に相成防禦仕候內敵兵引去り候間同所邊山々へ屯致候處昨十六日朝五つ時比より周布村へ激徒押來り同村放火に相成申候同時比內村邊へも敵兵押來り候に付夫々諸藩手分致防戰仕候內紀伊殿御人數も周布村より一同被引揚候に付內村邊炮戰之者も追々引揚申候且一昨十五日長人共より差出候書面之趣不分明之件々有之候に付四藩申合一と先應接致候趣にて炮發相止め申候濱田人數之儀は熱田村邊へ爲押出張致居り候尤應接之次第柄相分不申候得共濱田城近に追々切迫致不容易形勢石州路は究竊存亡之秋と被存候間先不取敢御注進申上候右之段　御總督伯耆守殿へ被　仰上可被下候以上

七月十七日　軍目付　與津富太郎

宛名前同斷

一昨十六日申上候石州那賀郡內田村同所內村邊へ去十三日より阿部主計頭人數出張長人共と日々砲戰有之昨十六日にも少々砲發致尤雲州勢因幡勢も出張有之候處周布村邊にて砲戰有之紀伊殿

南
大麻山
東
内村
本陣
濱田道
西原井村
冨永平十郎一組
岡見庄兵エ一組
松平三郎太郎一組
日脚村
福山藩
上宅村
大砲半隊
御先手物頭
二組
北
海

御人數幷安藤飛驒守同所より濱田表へ引揚相成候に付ては內田村邊前後敵に相成候に付無余儀
晝九時比主計頭人數濱田表へ引揚申候且私幷附添之者共同所へ引揚申候此段　御總督幷伯耆守
殿へ被　仰上可被下候以上

七月十七日　　　　山岡十兵衞　印

宛名前同斷

追啓主計頭人數格別奮發致候得共本文之通り無余儀引揚相成申候

十五日十六日の戰爭　幕府へ御屆書

一紀州殿先備人數石州周布村に滯陣罷在七月十五日朝四時比同村より東南に當り見大平山と申處
へ繰出し山上より內村幷同所邊谷々へ屯集之賊兵と大砲小銃にて夕刻迄及砲戰候處遂に賊兵敗
走いたし候歟發砲も相止且嶮岨之土地にて夜戰之儀無覺束旁同所引揚け和田村と申所にて相固
め申候此段申達候樣被申付候

一紀伊殿先備安藤飛驒守初周布村滯陣罷在候處太麻山へ松平右近將監人數松平出羽守人數相固め
罷在候處七月十四日朝雲州勢引揚同十五日濱田勢も引揚候に付同十六日未明賊徒米ヶ辻と申所
より押來り四方に突出致し紀伊殿人數三宅村津广浦門田村相固め候勢へ賊徒砲發致し候に付諸
手防戰候得共未明より九時頃迄之戰にて彈藥相盡且何れよりも應援無之實に孤軍を以苦戰致し
候に付一旦引揚長濱迄罷越候處雲州人數宿陣にて道路之混雜甚敷所詮人心落付策略難相立候付
濱田迄揚取軍議仕候折柄濱田城混雜致居候に付同十七日雲州街道郷津迄罷越候處兵粮等に差支

候付無據揚取申候尤前段十六日戰爭之節味方手負左之通御座候此段申達候樣被申付候

淺手　大番頭　旗持同心一人　同　雜夫一人

深手　安藤飛驒守大砲隊士分二人　薄手　雜夫一人

一七月十八日石州濱田落城す

一一昨十八日曉濱田表へ長人共襲來如何之掛念之次第も有之候に付私幷附屬之者一と先引揚候處共後同所城下砲火致落城にも相成候趣に付諸手引揚相成候に付ては粕淵村滯陣阿部主計頭にも病氣且先手は未た當所へ引揚に不相成候得共先日中之戰爭にて何れも疲兵當地には可然人數も無之且万一領分賊徒共通行可致も計難左候ては如何にも恐入候次第殊に當地形も不宜何時襲來候ても後詰等も無之候に付福山表へ引揚候由尤人數は然可場所へ差置候旨同人家來申聞實無余儀次第に付私幷附屬之者共備後路へ引揚申候此段　御總督幷伯耆守殿へ被　仰上可被下候以上

七月廿日　山岡十兵衞印

宛名前同斷

一七月失日出羽守事紀伊中納言殿爲差添藝州表へ被差遣候旨被　仰出候との書付於大坂閣老板倉伊賀守より渡す

一七月失日石州口守を失ひ　將軍家御不例之聞へあるを以出張諸藩之意見御諮問

征長之儀に付ては從　天幕追々被　仰出之趣も有之御討入相成候處不計も彼是御手違之廉不少頃日賊勢猖獗石州口等守を失ひ候段痛心之至に候然處今般於坂城　御不例被爲　在候趣右

に付ては兵氣沮喪人心危疑之際此余如何樣之異事出來候哉と爲國家致苦慮候併今日之勢一步を退候得は終には天下之事不可救之場に立至り候も難計候に付此上は成敗利鈍を不論大義に仗て今一際勉勵盡力致し速に征討之奏功相立天下後世へ對し不都合無之樣致度見込に候猶一統了簡之趣致承知度候間國家之大事精々無伏藏被申聞候樣致度候事

一七月口(失)石州路指揮松平因幡守代り早々被　仰付度旨幕府へ被　仰立

(一本ナシ)(安藤飛驒守及附屬番頭等七月廿二日可部迄揚取來りしを以て直に若山へ歸軍を命せられたる由)

石州路指揮松平因幡守　御免相願候付てはいつれ成共早々指揮被　仰付候樣致度右被　仰付候迄之間は石州路へ爲名代安藤飛驒守被差出有之儀に付相心得被居候との品被申達有之候處飛驒守敗軍人數揚取候に付別紙に被申達候通被申付候就ては同人代り出張可被申付之處追々被申達候通石州路迄は難行屆候に付宜御關置有之樣被致度此段可申達旨被申付候事

七月

(一本アリ)(一七月廿二日安藤飛驒守殿幷附屬番頭等阿部迄揚取來りたるを以直に若山へ歸軍を命せらる)

一七月廿六日戶田助三郎人數之內分隊左之通藝州五日市へ進軍之旨家來市川元之助より屆出る

家老　戶田式部　番頭一人　撿使用人兼一人　留守居用人兼一人　(一本槍)(旗)奉行一人

大砲頭　一人　先鋒砲頭　二人　使番　三人　目付　二人　士組　六十五人

小役人十七人　銃隊卒幷大炮組先足輕旗同心迄百四人　中間幷從小者持夫共　三百二人

〆五百七人　外に程遠之處へ出進之節圖ひ彈藥等の持夫百人余廣島表に差置申候

戸田助三郎は釆女正嫡子にて釆女正大坂表巡邏勤務中病死依て助三郎相續之處未た任官せさる故助三郎と稱す即ち大垣藩也長州征伐に付ては寡少の人數なから釆女正遺志を繼き相當の任に當り度旨願候處藝州出張御中軍一番隊附屬の小荷駄護衞を去年十二月被命たる也

一七月廿七日藝州宮内戰爭

御軍事奉行より幕府へ屆書

紀伊殿先手人數幷水野大炊頭手勢共六月廿五日當國大野村にて戰爭後一旦廣島へ揚取御座候處猶又當國五日市迄出陣罷在七月廿七日右人數之內二小隊宮内村邊へ爲巡邏罷越候處明石村畑口之間に屯集罷在候賊兵に出會不計及戰爭候處賊兵散亂に付追討爲手負且右賊兵之內左の姓名之者二人討取幷分捕品左之通御座候前段首級二つ廣島へ差越申候尤味方討死手負無御座候此段申達候樣被申付候

長州先兵　下（一本屋）村（一）國太郎　小川國輔

分捕品は脇差小銃裁付袴等四点也

注進狀

今日晝頃より新宮一小隊幷法福寺宮内邊へ巡邏に差遣候處宮内村本街道より北へ分れ石州街道の方四五丁入込山上村家賊兵入込有之由蹤と聞付法福寺隊の內寺田三郎星山証玄市川敬助木本新助へ新宮藩川本周藏加り都合五人右の山へ入込手分致し右村家へ川本周藏銃を打込候處七八人逃れ出山脊を傳ひ逃去候を寺田三郎追懸連發三人討取候內一人は足へ中り山下へ落入貳人は

其所に倒れ候付星山証玄走り進首打に懸り候處賊兵兩人立戻り証玄目懸打懸り候處へ法福隊之内跡より進み來り候岡本巳之助初四人行懸け銃を差向候に付右賊兵逃去り二人の首を擧け候折柄街道奥より騎馬の賊一人駈來候に付五發打懸候へ共不中して逃去り候由然處右砲聲を聞付三面山へ數百人の賊繰上け候付輕く引上け八半過頃罷歸右首級を新宮侯實儉に備へ申候

一七月廿七日賊豐前門司内裏邊を襲撃す

小笠原壹岐守より報告

別紙寫之通大坂表へ申越候間爲御心得中納言殿へ被申上出張御役人へも一覽爲致置候樣可被取計候且又別封大坂表同列への書狀は御目付へ相渡し御目付より騎兵役を以急速坂地へ相達候樣可被取計候已上

七月廿八日　　小笠原壹岐守

安藤飛驒守殿

水野大炊頭殿

昨廿七日朝六時頃長賊蒸氣船へ乘組門司邊より上陸炮發に及ひ引續追々多人數上陸長領炮臺よりも頻に發砲致候に付赤坂邊一圓相固候細川越中守先手人數幷小笠原左京大夫同幸松丸近江守人數も出張嚴敷砲撃富士回天幷小笠原左京大夫所持之蒸氣船飛龍丸よりも砲發致し海陸相挾嚴敷砲撃いたし候得共賊徒多人數にて必死決戰彼の軍艦臺場よりも應撃致し賊徒一手は新町一之橋邊迄侵入一手は延命寺下本道通一手は大谷邊迄相廻り散兵に相成木蔭谷間より小銃相發し味

方之勢を爲惱候得共越中守人數一同格別奮發相戰ひ小倉一手之人數も及砲戰且千人隊をも引分出張爲致俱々相戰終に賊徒敗軍之色を顯し候間御軍艦を以賊軍之歸路を遮り逆徒鏖殺の手筈にて富士艦は長領砲臺を砲擊し回天は賊船を打飛龍丸は上陸の賊軍を砲擊し陸路よりは味方全軍相進賊軍に相迫り候に付賊徒共大敗績何れへ歟散走致し門司浦邊より小舟にて遁亡の者も不少手負等にて行步不相成者は內裏邊潛伏致居候哉に相見え候引續追討可致處日暮に相成候間要地のみ人數爲配置總軍一と先引揚申候自分儀も昨朝より出張海岸山間等踐涉致し海陸之指揮相加へ戰爭之樣子熟覽致し候處海陸諸軍何れも勇戰就中回天御船は拔群の氣力にて勇進いたし夕刻は下の關地迄相廻り攻擊いたし瀨戶筋乘拔上筋へ繫船休息の上引戾り攻擊の手筈に有之候肥後人數にて討取は多人數にていまた不相分首級は三十八九程討取候由右之內首級十六今日實驗致し候其余首級之儀は見苦敷實驗難相備旨にて差出不申候小倉人數之儀も今日實驗いたし候筈小倉人數之儀も討取余程有之趣に候得共いまた相分り不申候同藩貝津孫左衞門と申者討取之賊徒首級一つ昨日出陣先へ持參候間實驗致し候首級の樣子雜卒には無之樣見請候得共姓名相分り不申候肥後小倉人數の內手負討死も有之候得共是又いまた難相分候間追て分り次第可申進候以上

七月廿八日

小笠原壹岐守

大坂同列二名宛

尙以昨日上陸之賊徒多くは長府家來幷奇兵隊等にて戰士凡千人程も上陸是非共小倉城迄も打入候手筈にて來り候哉之風評に有之候

一賊徒逃亡之餘いまた小倉領山々に潜伏之者も有之候に付肥後人數にて今日駈逐致居候處猶又長賊再擧軍艦幷小舟にて上陸に付追討中に有之勝敗之模樣猶跡より申進候以上

下ヶ紙　回天御船は此程長崎にて御買上に相成候蒸氣船にて候事

有馬中務大輔軍目付梶淸三郞より御軍事奉行小出平九郞へ報告

一小倉表出張罷在候細川越中守人數は赤坂村邊より長濱邊持場立花飛驒守人數儀は(堀 一本城)野村邊持場有馬中務大輔人數儀は平松門外より筑前國境迄之處持場被　仰付夫々嚴重相備罷在候處去月廿七日明六つ時比より長州赤臺場幷左右山上より大砲相發蒸汽船三艘下の關邊より赤臺場下通にて發炮致し双方討合申候得共夜中故何れの船に御座候哉相分り不申候得共赤坂延命寺備罷在候細川越中守人數備より右船へ發砲致し追々夜明に相成大里邊へ小舟にて賊徒共上陸致右蒸汽船大里へ附追々上陸人數相增新町と申所百姓家へ放火仕赤坂村へも同斷放火致候小笠原左京大夫人數幷小笠原近江守儀も出張戰爭致候得共賊勢强く兩家人數次第に繰引相成赤坂邊迄押寄候に付細川越中守先手戰爭致し大小砲を以討合次第に味方勝利と相成其節壹岐守殿御出場尙以味方勇氣相增晝八つ半時比にも御座候哉全く細川越中守人數勝利相成申候討取候首貳拾九討捨難計由に御座候小笠原左京大夫人數も首壹つ生捕一人右生捕相糺申候口書別紙を以申上候右に付諸家持場々々嚴重相備罷在候處長州賊兵共よりも味方備嚴重故に御座候哉押寄も不仕候得共味方勇氣一同相增罷在候

別紙　七月廿七日戰爭之節小笠原左京大夫人數へ生捕候者口書

今廿七日夜半凡八つ時過比より庚申丸より合圖を一發致し候はは夫より總勢押懸り候手筈丙申丸癸亥丸にて小倉を打なげ腰赤の軍艦は専ら　公儀之御軍艦を目當是は討合は專に不申早々切込乘移り候て我船に致しそれを以て猶又小倉を一時に打潰し可申手段尤小倉をば成丈不燒立樣致置小倉を荒ごなし致候はゞ多分中津往來を差て可逃出に付曾根邊に勢を廻し置其逃行所皆殺可致計略

一筑前若松之方へは小瀨戸の方より小船にて押寄一旦は道路を通し吳候樣斷を申自然不相用時は同所を討取小倉へ押寄候手筈

一小倉を攻取候上は五卿を小倉へ迎へ取候手筈

一長州異船へ總人數奇兵隊五百人程乘組候事

一大里へ出張尻を固め置候事

一小倉を攻取候上は小倉勢筑前の方へ落行候共器械其外所持致候はゝよもや通し申間敷と內評仕候事

七　月

原書は八月七日付にして七月晦日細川越中守人數引揚小笠原壹岐守逃走等之報告と合記しあれとも廿七日戰爭に係る分を爰に割載す

一七月廿八日藝州大野村戰爭

進軍手配

曉六つ時五日市出發 大野村へ發向　陸軍四大隊　井伊人數　紀伊殿人數

古江村より廿日市迄出張　榊原人數　己斐村より五日市迄出張　兵部大輔人數

宮の内に　紀伊殿人數半分　陸軍一大隊

地之御前へ向ひ　紀伊殿御人數凡半分押す

又本道貳筋　陸軍三大隊井伊人數押す

又大野中山に至り陸軍一大隊峠に向ひ止る

又大野へ着後　陸軍二大隊　紀伊殿人數凡半分　井伊人數

夕刻迄に大野へ繰込　宮の内の紀伊殿人數半分　同陸軍一大隊

右跡は榊原人數榊原人數跡へ兵部大輔人數繰上け

大野中山一大隊も大野へ引上

翌日瀧の口間道　紀伊殿御人數半分　井伊人數　陸軍二大隊

大野村跡へ榊原人數繰上け

外に江波浦詰　當藩人數 大砲五挺　公儀別手組 上下百人余　左京大夫人數 大砲二挺

當藩とは藝州の事なるへし

一右進入に付本藩役々配當左之通

歩兵　貳小隊　御先手同心　一小隊

第一大隊第七小隊　御目付　御使番　御供番　御軍事方　御醫師

右

第一大隊第六小隊　同第五小隊　同第四小隊

御目付　御使番　御供番　御軍事奉行　御醫師

右

第一大隊第八小隊　臼砲一挺　第二大隊第五小隊　大炊頭一小隊　御目付

御使番　御供番　御軍事方　御醫師

右山手

但地之御前より大野へ繰込候事尤御軍事奉行は服部五十二永田隼人引纒に御座候

第二大隊第一小隊江戸　同第二小隊江戸　大炮方遠藤忠介、西岡其右衛門、南條幾之助

御目付岸和田八十郎　御使番日置玄蕃　御供番　御軍事方　御醫師

右本道

但大炊頭は別に行軍之事御軍事奉行草野錠之助にて候

幕府へ届書

紀伊殿先手人數幷水野大炊頭手勢共當國五日市へ出陣罷在候處七月廿八日　公邊陸軍方幷井伊掃部頭人數申合陸軍方幷掃部頭人數本道より大野村へ進入紀伊殿人數は地の御前より山道を散兵にて三手に分け大野村へ進入大炊頭手勢は明石村へ向け進入候處同日八時頃陸軍方於大野村戰爭相始り紀伊殿大砲方は本道より相進候付陸軍方と入替發砲紀伊殿（海軍）〔一本ナシ〕手船明光丸より玖

波小方邊へ及發炮且地の御前より夕七（半）時比進入之三手も本道へ駈出し戰爭半は勝利に相成候處追々日暮に及ひ地利惡敷陸軍方も引揚候村紀伊殿人數も引揚大炊頭手勢と一と手に相成地の御前迄揚取申候尤賊兵手負死人等夥敷瀧之口と申間道を持歸り死人凡四十人余御座候由尤紀伊殿人數手負討死等は無御座候且又同日陸軍方之內幷紀伊殿人數之內幷大炊頭手勢之內より明石村に罷在候賊兵之砲臺へ取掛り砲戰賊兵討取候得共死傷難相分大炊頭手勢之內増田淺之助手負申候此段申達候樣被申付候

井伊家屆書

一井伊掃部頭人數草津驛に兼て滯陣罷在候處御差圖之通り七月廿八日曉天出發陸軍隊に引續宮之內村迄繰込木（俣）土佐隊戸塚左太夫隊河手主水隊小野田小一郎隊山手本道へ夫々分配大野村へ向け押寄申候途中にて（西之方）山上に賊兵（多勢）屯集之樣子に付大炮相備候處大野村に於て既に陸軍隊炮戰相始り候に付直樣繰込候樣御達に付即主水隊引續小一郎隊相合し山上へ突出頻りに砲擊大砲は本道相進み陸軍隊に相加り砲發賊兵潰散致し候折柄續て貫名筑後隊繰込候得共薄暮に及ひ總勢引揚に相成候に付一と先串戸村迄引揚申候趣出張家來共より申越候此段御屆申上候樣申付候以上

八月三日　　井伊掃部頭內　田中三郎左衞門

歩兵奉行歩兵頭より上申書

一七月廿八日宮內村山上にて戰爭手負討死之者

腰かすり疵　歩兵差圖役下役並勤方　下村善次郎

左脊より脇腹打抜翌日死　松平主計兵賦　清藏

一本ナシ
（左臂打碎　石川伊豫守兵賦　國藏）

右膝の下骨打碎き　久世内藏助同斷　利兵衞

左下腹より臆骨へ打込戰死　御天主番金藏弟御持小筒組勤方　小林歸太郎

一本ナシ
（右腕より掛け左脇腹へ打抜　久永石見守兵賦　佐七）

右耳上より左肩へ打抜戰死　曲淵安藝守兵賦　直次郎

左脇後口より打込玉留　森川肥後守同斷　良三郎

一七月晦日藝州宮内村大岩山戰爭

注進狀

大炊殿宮内へ御殘の品今朝申進候儀に御座候然處大野中山邊迄御繰出しに不相成候ては糧道之妨を相防き候業合難出來と申見陸軍へ懸合之上井軍繰出し跡へ引續き中山迄繰出し候處前軍本道間道無事に大野へ入込候段注進有之且官糧も運ひ込に相成候に付其儘夕刻大野へ到着已前の寺院へ御着陣相成申候追々當村の者の沙汰承り候處一昨日之戰爭賊に死傷多く有之七十人程之頭たる者も被打候に付大に力を落し即夜兵粮をも燒拂ひ釜打破り逃去候處味方揚取候に付昨朝より追々死骸を擧取に罷越昨日來三十人程之死骸を持運ひ歸り候由猶擧殘り之死骸も一兩人有之然處今日味方突入に付大に狼狽瀧の口へ逃去候に付無難當地へ入込に相成申候

今日途中にて宮内と大野との間の山上に敵二十人計徘徊致し候を井軍之者見受道端より山上へ登り右敵へ向ひ候樣躰見受候て打過候處右山を後口に致し候比合双方より砲聲頻りに相發し候

に付不取敢大炊殿御人數之内一中隊幷法福寺組を應援として殘し置大野へ御入込に相成申候然處右戰爭は日暮且雨天にて無程相引に相成候由井軍も此度は中々奮發なる事に御座候

彥根藩屆書

一井伊掃部頭人數七月廿八日於大野村左右山上之賊と炮戰に及ひ串戸村迄引揚同晦日六つ半時揃にて同所出發陸軍隊に續木俣土佐戸塚左大夫兩隊は大野村へ繰込河手主水小野田小一郎は未行進中竹中丹後守樣より御差圖有之候に付即刻宮内村へ離れ右之方山上徘徊之賊を目懸け小銃之各隊山々へ分配貫名筑後隊は官糧護衛當日相兼候樣丹後守樣より御談に付諸隊より相離れ行進致候所右砲戰に付同所離れ西の方間道より大岩の山上へ全隊押上候所賊勢より發砲に及ひ候に付味方よりも嚴敷發炮戰ひ半に及ひ賊進み來候處河手主水小野田小一郎等援兵として山上へ繰上三隊相合大小砲にて烈敷打立河手主水隊より攻擊及ひ候破裂丸賊勢屯所へ數箇着發賊兵潰散彌進擊可致機會に及候處既に日沒風雨强く且嶮岨之地形に付無據番兵差置其儘人數串戸村迄引揚申候右に付賊兵死傷の者は多分可有之候得共見究兼候段出張先家來共より申越候味方手疵之ものは取調跡より可申上候此段不取敢御屆申上候樣申付候以上

八月三日　　井伊掃部頭内　田中三郎左衞門

一本アリ（七月晦日大岩山にて戰爭手負）

鉄砲疵薄手　使番　林田縫殿　　鉄砲疵深手　使番　本間九左衞門

鉄砲疵　物頭組　飯沼鍵次郎　　同足　物頭組　鳥居猪助

同　股　同　　柳　瀬　織之亟　　手足　手薄　騎馬役　内木彌左衛門

同　太股　　軍夫一人

（右之通御座候此段御届申上候以上）（一本ナシ）

八　月　　井伊掃部頭内　鈴　木　權　十　郎

一七月晦日豊前小倉表出張之熊本勢柳川勢共突然無斷にて陣拂歸國す

一八月朔日小笠原壹岐守逃走小倉城自燒續て久留米藩人數引揚け歸國す

軍目付梶清三郎上申書

一筆致啓上候　中納言樣益御機嫌能被遊御座恐悦至極奉存候然者小倉表出張罷在候細川越中守人數去月晦日俄に陣所引拂國元迄引取申候に付立花飛驒守人數右同樣引拂申候有馬中務大輔人數儀は兼て被　仰付候持場翌八月朔日未明迄嚴重相備罷在候處壹岐守殿何之御差圖も無之何れへ歟御引揚相成御目付始御本陣詰一人も無御座右に付有馬中務大輔人數持場引揚一ト先國許迄引取申候に付拙者幷支配共附屬去る四日久留米表へ着いたし候尙巨細之儀別紙を以御注進申上候間可然御披露可被下候恐惶謹言

八月七日　　梶　清　三　郎　正　長　書判

小　出　平　九　郎　殿

又同人より報告

（前文は廿七日戰況報告也）　然るに去月晦日何の次第に御座候哉是迄細川越中守人數奮發罷在候得共俄に大切

之持場人數不殘引拂即日國許迄引揚申候趣に付立花飛驒守人數にも同樣引拂申候殊に御屆之儀は引拂後差出申壹岐守殿深く御心痛被成御直書を以細川越中守士大將長岡監物備頭溝口藏人へ御使番石川八十郎幷隊村長坂血鎗九郎兩人へ御使被　仰付兩人本陣へ罷越御直書相渡申候處兩人共早速御本陣へ可罷出旨御請申上候段兩人罷歸申上候後夕七つ半時過にも御座候哉長岡監物溝口藏人兩人罷出候に付右壹岐守殿へ申上に相成居候得共余り御逢も無御座候に付又々申上候と奉存候然るに壹岐守殿には御本陣裏川より直に富士山丸御船へ御出被成候由御目付衆並御附添役々始何れへも御沙汰無之存不申大に驚入右樣相成候ては有馬中務大輔人數儀も無覺束存候間御本陣より直に有馬中務大輔人數備場へ罷越候處相變義無御座候間附添尙又夫々へ嚴重手配り爲仕未明に至り壹岐守殿何れへ歟御立退之趣風聞陣所へ相聞え候に付有馬中務大輔士大將有馬藏人初隊長之面々より如何之筋に御座候哉承知仕度由申聞候得共何分拙者儀も存不申儀故答兼申候乍併先刻壹岐守殿御立退と申兼全く流言之事に申置御本陣へ使者之者差出御目付衆へ問合可申樣申聞候に付早速罷出候處最早御本陣には一人も罷居候者無之由罷歸り申聞候有馬中務大輔家老有馬藏人始隊長之面々大に驚き且壹岐守殿よりは何之御達も無御座細川越中守立花飛驒守兩家人數引拂申候ても乍少人數長防討手被　仰付候上は一應御達御座候ても可然筋と深不平相成御指揮被成候壹岐守殿御立退の上は最早無益故一先國許へ人數引揚此上御達之程相待可申旨申聞翌八月朔日朝五つ時頃陣拂致し引揚申候に付拙者幷御徒目付御小人目付共附添久留米表へ去る四日引揚申候右御注進早速申上度候得共壹岐守殿幷役々何れへ引揚相成候哉何分相分

り兼探索致し候處壹岐守殿御儀は富士山丸御軍艦にて長崎表へ去二日御着相成候趣御目付衆初小倉表出張罷在候役々は日田御郡代所へ去二日着翌三日鶴崎長崎へ向出立相成候由に御座候立花飛騨守軍目付安藤治右衛門儀は筑前國黑崎之宿にて面會仕松平肥前守軍目付水上鏡太郎儀は是迄人數筑前國木屋野瀨宿に宿陣罷在候處同所より國許へ人數引揚申候軍目付兩人右人數へ附添同所より國許迄罷越申候小倉表風聞小笠原左京大夫人數にて城下廻り不殘自燒いたし或は城へ火を懸山手へ引揚申候共何れにも燒失致候小倉領百姓一揆仕商家燒立候風聞も御座候最早落城仕候儀と奉存候今日迄は中津表其外共相變候風聞不承候尙風說等承り探索致し御注進可申上候荒增御注進此如御座候以上

八月七日　　梶　清三郎

小出平九郎殿

久留米藩陣拂屆

當表へ出張罷在候肥後柳川人數引拂候に付ては弊藩小勢にて防戰之儀無覺束候に付差出置候人數一と先引拂申候尤諸手相揃候上は早速繰出可申候此段御屆申上候以上

八月朔日　　有馬中務大輔內　有　馬　藏　人

今般豐前國小倉表諸家之出勢引拂候に付別紙之通小笠原壹岐守殿へ小倉出張之家來より屆書差出候處最早御陣拂に相成候趣に付軍御目付梶淸三郎へ申達一同國許へ引拂今四日爰許へ到着致候此段御屆仕候已上

有馬中務大輔

八月四日

小倉藩援兵請求書

一小倉表去る廿七日戰爭後長州人同領大裏へ入込炮臺を築造屯集致し候趣然るに如何之御趣意に御座候哉小笠原壹岐守樣小倉表御發船尙肥後御人數其外追々引拂候由既に昨朔日小倉城幷市中人家は不殘自燒最早落城之体此上は大膳大夫領分へ襲來候は必然之儀左樣之節は盡力防戰は勿論之事に候得共元より小藩微力且應援無之孤城共可申哉落城等に押移候ては誠以恐入候次第歎敷奉存候何卒早々御援兵被　仰付被下候樣仕度今日にも如何相成候哉と大膳大夫初一統心痛寢食不安罷在候此段不取敢歎願仕候樣大膳大夫申越候已上

八月十一日　奥平大膳大夫家來　鈴木力兵衛

按に　小笠原侯は閣老を以九州討手の總督たり然るに遽然軍を捨逃奔走行く處を不知擧軍大愕然たり是何等の訝怪ぞ今に至て其由を知るものなし竊かに察するに　將軍實は七月十九日を以薨し給ふ蓋し此比初て其密計に接したるならん此大變を百里遠征の外に耳にしたる小笠原侯の心裏恐らく寸前闇黑進退度を失ひ德川氏既に泯滅天下土崩征長復た顧るの地なしと絕躰絕命小倉城を自燒せしめ以て此擧に及ひたるもの歟若し然らすさせは徒らに疑團万斛を永劫に遺さんのみ他日幸ひに識者の說を聞くを得は其解說を加へんとす

一八月朔日將軍家御不例追々御疲勞被爲增に付此上御危篤之時は一橋中納言卿へ御相續被　仰出且長防御追討は至急に付爲　御名代御出陣可被成旨被　仰出

將軍家茂公初夏以來御染疾御治術を被爲盡爲に御輕快之處七月初旬より御再感御病勢被爲募により此上御危篤之上は慶喜公へ御相續被遊度且長防之儀は至急に付爲　御名代御出張　勅許有

之様との御奏問被爲遂しに直ちに　勅許被　仰出則本記之趣於大坂被　仰出たり巨細世記に詳なり

謹て按に　家茂公には天資英邁卓絶に被爲遂も芳紀僅に二十一剩へ天下騷擾を極め內憂外患迫り來て千艱万難を御出征の華城に被爲忍其御苦惱は今更申すも愚ならん夫かあらぬか本年五月廿八日　我公廣島へ御出陣御暇御登　營之際も既に御不例に被爲遂たり然を強て御對顏ありて懇々の　上意あり　我公竊かに見上給へは御兩眼に御涙をたゝへさせらる　公は御胸張り裂く計りに堪へかね給ひて御手自の御酌に托せられて特に數盃を過し給ひ御酩酊の中に御訣別御下城ありしと事の御次第を　公親しく信に語らせられ世にも心苦敷覺へしは此一事也しと仰ありき夫れ兵威は振はす外藩は幕命に抵抗し賊の侵掠は日に益猖獗宜也　將軍百歲の壽旦夕に迫る天何ぞ　德川氏を捨るの酷なるや加之天下又諒闇の事あり實に天軸裂け地維（一本缺る　崩るゝ）の秋なる哉

一八月二日大野村苦戰

注進狀

陸軍本道四十八坂より一手は京小屋山より登り同所之賊を追拂ひ松ヶ原へ一手は井軍と具に玖波へ向ひ我軍幷新宮大夫勢は瀧口間道より松ヶ原へ正五時出發之筈申合打合ひ候處松ヶ原より半里計手前山上に賊兵多人數取切防戰に及ひ新宮手勢細井八郎左衞門師ひ西の方山へ上り法福寺一隊東の山へ上り中道は步兵幷永田隼人隊出中右中隊堤嘉市隊等相進み及砲戰候處賊兵中々強く必死防戰に付味方余程の苦戰步兵抔も格別之働きにて凡四時比より八つ時比迄之戰爭殊に敵筒は纔三十間程之距離にて嚴く打合多く打候筋は八九十發も打候よし乍去敵は高見より打下ろし候に付中道之兵追々討死も有之こらへ兼引揚候に付敵砲不殘細井の方へ相集り其上京小屋

山よりも敵兵下り來り側面を打立候に付三面よりの飛丸霰の如く同人隊は別て苦戰に候得共兼ての巧者に付打死兩人手負兩人位にて引上參り申候陸軍一手京小屋山へ上り候筋今朝(三日也)七時比迄一晝夜之砲戰勝負不決引退候由陸軍一手玖波へ進み候筋も二三ヶ所打破り玖波へ入込候處玖波西の方山上に堅壘を築立防戰海岸よりは明光丸朝日丸等より頻に發砲海陸共に右臺場を相攻め候得共堅守不落候付昨夜(二日也)玖波へ放火井軍陸軍共引揚申候宮内にても井伊榊原勢にて戰爭有之此度は賊も大擧出張必死防戰中々手強く味方大に疲れも有之先暫く休戰之積りとの趣申來る

幕府へ御屆書

(一本ナシ)〔紀伊殿先手人數并水野大炊頭手勢共八月朔日當國大野村へ繰込翌二日松ヶ原と申所へ一中隊瀧之口と申所兩方山傳ひに三小隊瀧之口より本道へ一中隊進入四時比より戰爭に相成候處賊兵高山に陣取嚴敷發砲致し候付味方よりも烈敷打立七時比迄及接戰賊兵數多討取候得共彼は高野に居り地の利を得益嚴敷打掛候故甚苦戰に相成候處松平左京大夫一と手之人數爲援兵馳加り直樣入替り大小炮打立候處賊兵大に致散亂引退候付一統大野村へ揚取申候同日旭丸御船并紀伊殿手船明光丸よりも發炮及戰爭海上より陸地へ打込候得共掛隔有之賊兵死傷等難見留御座候且又同日紀伊殿人數并大炊頭手勢之内討死手負左之通御座候此段申達候樣被申付候

戰死　第一大隊第五小隊　中川三四郎

同　第二大隊第一小隊　松島常次郎

同　同　同　松永徳之助
同　歩兵五人
即死　雑夫一人
手負　第一大隊第七小隊　松井岡吉
高木忠次郎
同　第二大隊第一小隊　松永鉛太郎
同　歩兵二人
同　水野大炊頭　春田庄之助
小島作太郎
戰死　同　足輕二人
手負　同　同一人
即死　同　雜夫一人）

去る二日八つ時比より原村奥へ屯集罷在候長賊宮内へ襲來彦根様高田様御人數及戰爭候間直様榊原丹波隊之右手山上へ弊藩人數繰上け賊は八丁程近寄候に付弊藩藤田竹右衛門隊より三發程及砲發候へとも少し賊兵退き候樣子にて脇平良村之味方の後を斷切候色相見え候に付同所山續き別手組横山半右衛門殿隊戰爭有之然處右平良村へ賊兵相迫り候間大砲人數繰下上平良村山上へ繰上け及防戰候樣別手組御打合之上高田侯附建部篤次郎様より御談に付大砲隊繰上け平良村

へ相廻り候賊兵へ又候貳番手河村藏主隊より及炮戰候處賊兵山上へ退き候躰に相見え申候然處高田侯の內榊原丹波隊を目懸賊兵追々進來敵勢及切迫候に付弊藩人數爲應援差出吳候樣丹波より賴談申來り候に付直樣貳番隊之內潮田覺衞人數大砲等引率差向候處最早夜に入敵兵原村山上へ指て敗走致し候樣子相見え申候前條の通及砲戰賊兵即死怪我等も可有之と奉存候得共何分夜に入委細の儀は見留兼申候尤軍御目付柳生小膳樣御出張始終御附添にて御座候此段不取敢御屆申上候樣戰地重役共より申越候以上

八月四日　　松平兵部大輔家來　松村勇藏

幕軍戰死負傷御屆

左横腹淺疵	歩兵差圖役並勤方	庵原德次郎
右乳上より腰へ打拔戰死	歩兵差圖役下役並勤方	小牧助次郎
右股打拔	同	前島七兵衞
左脇腹より打拔戰死	同	石塚淺太郎
左藥指打碎	同	山崎義太郎
小銃にて右肩先より三寸程下り右より打込左肩先にて留り骨打碎	御持筒頭水野主膳組同心 大砲差圖役下役並勤方	五郎藏養子 塩野榮之進
左眼上鉢鉄上より彈打込	御持小筒組	岡村昇太郎
小銃にて額より後口へ打拔戰死	御賄六尺兵吉弟 大砲組勤方	齋藤庄三郎
同上膊より打拔咽喉へ通り	御天守番の頭 河野孝之助組	傳右衞門二男 福井染次郎

御賄六尺富三郎三男
大砲組勤方　岩倉八十七

破裂弾にて右の手
打破り左の手指打落

歩兵差圖役下役直之丞弟
同　粟野勘七

小銃にて腰へかけ右よ
り左へ一寸程打抜

手負　兵賦　十八
即死土工兵　一人

右之通に御座候猶追々取調可申上候得共先不取敢申上置候以上

八月

彦根藩屆書

八月二日玖波攻撃之節戰死手負

肩先鉄砲疵　隊長　戸塚左大夫
天窓鉄砲疵　河手主水隊戰士　津田十郎
眼鉄砲疵　同　松原庄七郎
左肱鉄砲疵　同大筒方手傳　西田善八
肩先鉄砲疵　木俣土佐隊物頭　大久保藤助
討死　同大久保藤助組　古川治右衛門
肩鉄砲疵　同上　永田吉太郎
足に鉄砲疵　同上　西川本太郎
肩先鉄砲疵　同上　塩谷大藏
討死　同物頭西堀才助組　椿居吉右衛門
深手　同物頭三浦省右衛門　加藤左太夫
薄手　同物頭同　伊川淺次郎
鉄砲疵　又者鎗持二人
手負　軍夫四人

右之通御座候此段御屆申上候以上

八　月

井伊掃部頭内　鈴木權十郎

右に付閣老より左之褒狀を達す

井伊掃部頭

去る二日玖波驛へ討入之節家來木俣土佐戸塚左太夫河手主水隊先鋒に相進格別及烈戰候條一段之事に候猶可被勵忠勇候右之段早々大坂表へ申上候

八　月

一八月六日藝石兩道討手勢左之通被　仰付により御心得として上申すへき旨於大坂閣老より御城附へ封物渡す

牧野豐前守

兼て藝州口討手被　仰付候處御都合も有之候に付石州口之方へ討手被　仰付候間雲州松江へ早々向進可被致候尤保科彈正忠同所へ出張致居候間得其意松平因幡守藤堂和泉守松平出羽守松平右近將監阿部主計頭可被申合候

牧野（備[豐カ]）前守

內藤豐前守

大坂表御警衛被　仰付候に付藝州口討手應援御免被成候

牧野豐前守

石州口討手應援被　仰付候處在所表家來より申越候趣も有之候に付早々在所へ罷越實備相立候

樣可被致候依之藝州口討手應援被成御免候

右一通は八月九日に渡す

一八月七日大野村高馬ヶ峯戰爭

御使番言上

今曉六半時比より賊徒瀧口へ押寄發砲仕候處行者山幷瀧の上莫山三ヶ所之御人數防戰本道よりも大炮打掛只今迄戰爭終に味方勝利申候尤手負討死等も有之候得共尙取調可申上候本道四十八坂之方よりも賊軍押寄戰爭之處陸軍方防戰終に打勝追打して大砲二門分捕仕り宮内にも戰爭有之候處井伊家にて防戰是も打退申候今日之戰爭御人數いつれも奮發大事之持口を不去必死烈戰仕候事

幕府へ御屆書

紀伊殿先手人數幷水野大炊頭手勢共當國大野村に出陣罷在兼て哨兵同所山々へ人數間配御座候處八月七日朝六半時頃高馬ヶ峰より瀧の口へ向け犬一疋馳來候に付賊兵共の業と相察し右犬へ小銃一發打試候處直に賊兵兩人立出候に付引續小銃相發候處高馬ヶ峰へ賊兵追々相顯候付紀伊殿人數行者ヶ峯瀧之上等より一時に發砲其外所々より大小砲頻に打掛け大砲柘榴彈等程能破裂賊兵兩三度も及散亂付ては小銃隊々も勢に乘し頻に連發致し候處賊兵大敗走に及ひ死人等夥敷相見え候得共何分同日之戰爭大雨中にて如何程との儀難見留九時比賊兵悉敗散致し申候且又同日紀伊殿人數幷大炊頭手勢之内討死手負左之通御座候此段申達候樣被申付候

手負　隊長　永田隼人　　同　第二大隊第五小隊　近藤角兵衛

同　秋月内藏太　　同　武井忠次

戰死　出島助之丞　　同　谷吉次郎

手負　第二大隊第三小隊　吉田用右衛門　　同　小谷久吉

同　日根幸之助　　同　第四大隊第三小隊　本多嘉兵衛

同　本島藤六　　同　鳥居平次郎

同　養田善三郎　　同　原龜之進

同　金原武八郎　　同　喜多野楠之丞

同　遊擊隊　野山主儀　　戰死　第四大隊第四中隊　先手同心一人

手負　第四大隊第五小隊　同一人　　同　雜夫三人

同　水野大炊頭家來　大矢友三郎　　同　兒島作太郎

同　楠田桂藏　　同　北見虎之助

同　芝田彌八　　一本ナシ（同　雜夫一人）

右之通御座候也

彦根藩より屆書

八月七日明六時過石州口間道へ賊兵貳拾人計山手より下り來り候趣物見の者より急報仕候に付

高砂山に在陣仕候貫名筑後隊小銃相備待居候處榊原式部大輔殿人數にて既に砲戰相始り高砂山向山間道よりも賊兵追々繰詰來候に付大小砲にて烈敷防戰仕本道石州口岐路へも同樣に付小野田小一郎隊幷同姓兵部少輔殿人數是又大小砲を以防戰仕候處式部大輔殿人數持堪兼候哉追々引揚候に付賊兵氣を得大勢繰詰高砂山左右麓より雨注のごとく彈丸打立如何にも難支御座候に付貫名筑後幷小野田小一郎隊共四つ時比一と先串戸村迄引揚猶一策反戰可仕と軍議仕候處兼て勢兵に付救應も願出居折柄に有之且第一之彈藥も竭果候に付式部大輔人數と申談御軍目付附御徒目付長谷川又市殿へ屆置草津村迄引揚申候尤烈敷中賊兵數多打斃候へとも難支場合に付其儘打捨置申候味方死傷も有之別紙に申上候此日大野村にても賊兵襲來候に付陸軍方幷　御屋形樣御人數水野大炊頭殿人數等にて砲戰相始り候に付早速木俣土佐隊河手主水隊廣瀨鄕〔一本右〕(左)衞門隊等夫々べふ村宿陣前後之山々へ兼て申合置候通り人數手配仕何方へにても應援可仕心得を以嚴敷防禦仕居候處賊兵追々逃去候趣猶其內に宮內之炮戰も相止み候趣に付夫々人數宿陣迄引取申候此段御屆申上候以上

八月　　　　　　　　　　井伊掃部頭內　鈴木權十郞

八月七日宮內村戰爭之節手負討死

討死　　木俣土佐隊母衣役〔一本太〕　增田雅(四)郞　　同　　貫名筑後隊使番　武藤信左衞門

同　　同目付　澤村益次郞　　戰死　　同　　小瀧主計

同　大砲方　村田豊次郎

同　同物頭藤田四郎左衛門組　石居佐次右衛門

鉄砲疵手首打拔　同戰士　淺見三左衛門

鉄砲疵即日草津にて死　小野田小一郎隊物頭小泉彌一右衛門組　曾我次郎大夫

左手へ玉打込　同　同　苗村作右衛門

左股後口より打拔　藤田兵藏

即死　大筒方軍夫一人

同　同大筒方手傳　畑中久藏

鉄砲疵肩先打拔　同上　田中巳之助

同足打拔　同上　武藤辰之進

同左目之上へ拔る　同上　伊藤繁右衛門

右足へ打拔　同上　村田乘次郎

肩先打拔　青山五左衛門

右之通御座候此段御屆申上候以上

八月　井伊掃部守頭內　鈴木權十郎

井伊兵部少輔より屆書

兼て差出置候私人數同姓掃部頭人數へ差加り宮內村本道石州へ岐路之方へ小野田小一郎隊一同出張置在候處去る七日拂曉賊兵襲來致貫名筑後相備候高砂山續き西之方山上より俄に及炮發候に付即大小砲にて防戰候內石州口岐路よりも同樣襲寄候に付是亦盡力炮戰多時支居候得共諸方之味方追々引揚候樣子何分烈戰手負不少且元來少人數之儀如何共難致無據掃部頭人數同樣一と先串戶村迄引揚軍議之上草津村へ引揚申候委曲掃部頭より御屆申上候通に御座候此段御屆申上

候尤賊兵數十人撃斃候得共烈戰之砌捨置中候人數死傷の儀は別紙之通に御座候

八月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　井伊兵輔少輔

深手玉疵　物頭　小野十右衛門　　同上　士分　眞砂竹次郎

同上　士分　西堀助九郎　　淺手玉疵　同　畑　弁次郎

深手玉疵　同　金居幾次郎　　同上　徒士　町田文大夫

淺手玉疵　大炮方　小澤雅次郎　　同上　鉄炮足輕　山崎万吉

即死玉疵　軍夫一人

右之通御座候以上

八月

按するに八月七日以後は藝州口に戰爭なく遂に大喪によつて休兵となれり抑長州は歷然たる朝敵四隣敵を受るも孤軍四年を支へ　將軍の親征毫も屈せす却て逆襲濱田城を落し小倉を蹂躙宣戰第一に井伊榊原を敗て藝州口亦一歩を入れしめす動もすれは廣島を衝かんと屢大野宮內に我軍を悩ます故に攻守轉倒實は征長に非すして被征長の姿を現出せり大野の守り固からされは天下の大事頓に去んとす是水野氏の大に努めたる所以なり水野氏剛膽沈勇而して江戶隊終始之に屬し常に若山隊に卒先して能く戰して能く戰へり若山隊中長屋喜彌太法福寺之如き亦奮戰す水野家家老細井八左衛門能く主人を助けて努力し加之幕府の陸軍奮て應援す故に孤軍能く久しきに堪へ僅に幕府　親征之体面を保つを得しは全く我大野の軍の堅牢による嗚呼危哉時の實況

信直接聞く處あり因によつて爰に附記す

齋藤櫻門語て曰く水野大炊殿は井伊榊原の大敗を事ともせす其跡を引受ひたもの進みたるに敵は大に勝ほこり我手並の程を見透して徐々に繰出し來り遂に大野村にて端と出會ひ對陣となりて兩軍頻に戰爭ありされとも味方の後陣更に不進全く孤軍の姿となる廣島御本陣には幕府の陸軍奉行竹中丹波守初諸藩へ援兵且糧道の事共必至に盡力す此時江川左金吾は君側に在て事を執りしか苦心至らさるなく職外の事に迄自ら奔走晝夜一睡をも交へさりしは今語り出しても誠忠の働き感するに余りあり扨拙者其時大炊殿への御使を被命せめては聊なりとも陣見舞として物携へ行かんとするに市中物切れにて調はす漸く晡魚と酒少し計を馬丁に脊負はせ唯一騎大野へ至る彈丸雨飛の途中幸ひに負傷もなく着陣すれは村中の庄屋と覺しきあやしき小家を本陣とし門外は山上の敵と砲戰最中にて堀内六郎兵衞細井八左衞門（大炊殿の臣）なんと勇を奮て防戰す其内我隊長永田隼人手負眼前に打倒るゝ抔隨分物すこかりし扨屋に入れは大炊殿は六七疊もあらん座敷の床柱によりかゝり居眠りありき樣子如何にと尋れは軍は勝利に相違なし必す御安心あるへき樣復命せらるへし如何にと云に是見られよ今の今一つの彈丸屋上を貫き來て此座前に破裂四方如此予は彈丸とも何とも覺へす唯霹靂一聲を聞のみにて寸分の負傷もなしかゝる危殆を遁るゝ吾か幸運を目前に感得したる上は精神一層の爽快を覺へたとへ百万之敵も恐るゝに足らす軍は全く運命一つのものなりと語らるあたりを見れは彈丸の寸片座上に散亂梁柱屏障微塵に破碎せり拙者曰扨々愉快なりいさ一服を点して大勇を賀せんと腰なる茶箱を取出すに菓子なし嗚呼忘れしは臆したるかと云に大炊殿はあり〱とて琉球芋のむしたるを捜し出して數碗を喫し左も喜ひに堪へかたきさま膽略の程呉々感入たりき夫より拙者は尚進み四十八坂邊迄物見して復命すと

一大炊子信に語て曰く予が孤軍久しきに堪へしは遠く斥候を放ちたるに利多し斥候の任衆皆逡巡す仍て平素活氣剛膽御しかたき者一人を擧けしに一人亦進んで行かんと請ふあり此二人に若し急あらは何事をも打捨逃け歸るへし事なけれは必らすいつ迄も歸るへからすと命せり故に歸り來らさる間は安閑日を送りたりと又曰後援續かさりしは淺野は頻りに牽制術を取り我亦彼れが逆襲を深く氣遣ひし爲也

長州は四境の守りに兵力足らす故に藝州口迄格別之事には非す又特に武勇勝れしにも非す狼狽全く我に同し唯目下大臣をもなす位の山縣狂介の指揮なれは智惠の我々に勝れしは當然なりしもし井伊榊原如きに似す眞の戰爭をなす積りにて討入りたらんには易々たりしならんと思はれたりと

（一本アリ）一宇都宮三郎經歷談に曰自分か廣島に着すると丁度井伊榊原の兵か長州の兵と戰て小瀨川と云川の手前て敗軍し藝州に引揚て來た然るに先是紀州の水野はミニー六百挺を持つて來たから直く其筒を持て大炊頭自ら二三中隊程の歩兵と大砲（ホートホウヰツワル）二門を率ひて井伊榊原の兵と途中で摺れ違つて進んて往つた而して大野と云處に陣を取つた是と同時に兼て伯耆守殿の護衛として陸軍の歩兵一大隊と大砲（四ポンド）六門とが廣島に居つた夫が船にて出發宮島に着二日程滯在し尙進んで水野の隊と一所になつたそこで此隊と水野の隊のみ遠く進み廣島との繫ぎがなくなつてしまつたので打捨てはおかれぬから兼て廣島に出張して居る陸軍の兵隊を速に繰出さうとした處が其隊の士官等は人足か不足たの病氣たのと種々の事を申立て中々出陣する樣子かない此事は其以前より起つた事で陸軍奉行（川勝縫之助）其他の將官より說得中てあつたか彌此場に臨んてもなか〳〵出る樣子かない總督（紀州公）ても色々苦心されたかなか〳〵出ない其時自分は紀州家の重役の所にゆき是は迚も一通りの事にてはない若之を其儘差置く時は以後危き場所に出る者はなくなる是は將來の爲彼是申立て出張せぬ者は斷然切腹仰付らるゝか至當たといふて度々迫つた處か人名は忘れたか紀州の御用人のいふには色々評議を盡し

たか縦令總督ても御旗本の士官に切腹を仰付らるゝたけの權力はないといふ事て評議の末總督より右等の士官に御役御免永蟄居を仰付けられて江戸表へ歸府申渡された

一前の如く上等士官は夫々罪せられて下士官等を繰上夫々上等士官並等に仰付られ漸く少し後れて出張し大野に着の上此隊は專石州口の方に向つた其前後共日々あつたか双方より出て戰ひ夕刻になると双方か元の陣所に歸り互に進んて芝居を踏まへた（進んて其地に陣取こと）者はなかつた勿論多少の勝敗はあれとも先つ双方に勝敗はなかつたといふてよろしい後には進んて四十八坂を越たるもあつたか其比には既に休戰になつた時てあつた

又水野大炊頭は頗と戰には平氣な人ていくら彈丸か來ても少しも動搖しない家臣か倒れたりすると自分か差圖して淺手たから決して心配するな氣を慥にもてなとゝ云て勦りよく世話をした又敵と戰ふ際に近侍の者なとか前に立て衞らうとするとミニーの彈丸か中る日には二人ても三人ても衝き拔てしまふそんな事はせすとも銘々に働けといつて誠に沈着拂つて居つたといふ事又水野の兵か戰つて居るとミニーの筋（ライフル）の中に鉛か埋つて打ことか出來なくなつたそれから筒を臺から外して燒て鉛を溶して用ふると云事を報して來たから自分は藝州に出張して居る御鐵砲奉行の役所に往つて水野の隊は敵地に入つて戰鬪中小銃の巣中の筋に鉛か溜つて打ことか出來ない若之を捨ておゐては勝敗も覺束ないからミニー千挺彈藥一万發拜借したいと申た處か丁度其折同奉行は矢張大野に出張中て其下役の山縣儀三郎と云者か今奉行の友成郷右衞門は留守中てそふいふ事は出來兼ると云つたそれは治世ならは兎も角今味方か深く敵地に進

み戰爭の最中に小銃をうつ事か出來ないと容易ならぬ事てはないか若間違へはお前と自分か腹を切つても宜いてはないか何にせよ今直くに出して呉れといつた處かやはり全く下役の事たから計らい兼ると云つて居る然し此場合に躊躇しては居られぬお前に迷惑は掛ぬ自分かどんな責ても引受る是非して呉れといふてとふ〳〵ミニー千挺に當坐の爲に彈丸一万發を請取つて水野の隊は此筒を以戰ふ事か出來た後日にきけは此ミニーは水野に下されになつたといふ事此事も自分か關係したから序に申ておく

以上は宇都宮の經歷談也三郎は尾藩の人藩を脫し浪人となり西洋學を修め理化の學に達す此比籍を水野の藩におき幕府開成所調役に出仕す長州征伐に際し幕府の平岡越中守の內旨をうけ紀州に來り兵制改革の事を遊說し紀勢郡々をも巡廻して農兵組織をも說得了て藝州御陣中へ來り次第を言上せし也詳なるは軍制第六卷に記するか如し）

一廣島御本陣へ細川家より陣見舞旁密使を差越し御手配り等完備は無論なから万一御用あらんには弊藩軍艦を以一手之人數御加勢に加はるへしとの內意を通す此旨齊藤櫻門より言上したるに該藩は從來緣故深く且當家を德とする事久し故に此儀に及ひたるならん御譜代の家筋ならは格別今や外藩大に猜疑を抱く世評考ふへしとの仰に御尤之次第と畏り閣老へも內申辭して使を歸へしたりと也

細川越中守宗孝君の室は　大慧公の御女也宗孝君延享四年八月十五日營中に於て板倉修理の爲に刺さる　大慧公竊に御盡力家恙なきを得たり依て同家にては紀州の方へは足を向けて寢ねすといひ傳ふよし

一藝州は竊かに長州へ通し表面幕府を奉すを裝ひ百事因循遲緩飽迄牽制伎伍せしめんとす我兵憤

灘に拠へす寧ろ廣島城を落して後長州を征せんと突然大砲を城門に配列今にも討掛らん勢ひを示す廣島更に備へなけれは大に恐れ辻將曹馳せ來て深く謝し城内の審圖を示して入城を請ひ二心なきを示す淺野公亦自から御本陣に來て謝したれ共遂に御入城なし或は策に陷らんかの疑ひありし也

一征長の事曠日彌久いつ果つへしとも見えされは幕府の永井主水正竹中丹後守等切齒して頻りに御出馬を促すにそ軍議の上いさ 御出馬あらんと 猶屋橋の邊にて 御馬に召さんとする際幕府の

一本御使番前田五左衛門（備前國へ御取締として出張當時靜岡縣士族五門と稱す）

（監察某 名逸す松平さか稱せし由）一さんに馬を驅り來りて御馬の轡をしつかと執へ今や大將の御出馬あるへき時に非すと血相替へて堅く止めけれは遂に御引返しと成りたり其翌日解兵の令發す

末の三項は君上の御直話被爲在たり

一八月（一本ナシ 十一日）十七日豐前小倉領狸場山に於て戰爭

中津藩宮澤新兵衛小倉へ出張偵察之趣肥前筑前藩への通牒中

私儀船中無滯十三日夕着船仕候扨種々探索仕候處壹岐守様何方へ御轉陣に相成候哉其外諸役々も豐後日田長崎にも御落行とも承候得共事實相分り兼候小倉藩は御幼君御後室様は肥後へ御落行御城は自燒後田川郡香春と申處へ轉陣同所にて專ら防戰之軍議士氣も相奮ひ居既に十二日四里程押出し同御領狸場山邊（小倉城より東三里海濱也）にて長人と戰爭有之物聞指越候處別紙書面之通に御座候九州一体之情態は啶と相聞へ不申私儀も明日乘船又々出藝被申付候云々

八月十六日　宮（一本津 澤）新兵衛

筑州様御内
花房孫大夫様

肥後様御内
福地六郎左衛門様

別紙　卯平

右之者當月十二日小倉御領へも參候處迄罷越見屆仕候處左に申上候

一當月十一日小倉御領狸場山へ澁田見勢小宮勢矢嶋勢都合二百人程相詰居長州人湯川村へ百五十人程集り居右狸場山下にて四時前より戰爭に相成候由之處小倉勢にて大砲壹挺野戰筒貳挺にて頻に炮發之處右大砲打損し小倉勢引取候由

一同日同樣四時前小倉嶋村勢南の方德力と申所へ參り長州人湯川へ交代に參り候百五十人の者と戰ひ有之黑原と下夕松原にて長州人敗走の由にて大里表へ引取前島村勢長州人湯川へ指置候火藥等奪取罷在候長州人六人打取小荷駄小屋燒拂山手へ引取候躰にて狸場山押寄候處長州人三十人程は濱手へ逃去候由尤湯川に罷在候長州人を挾み討之手都合に御座候得共澁田見勢引陣に相成候由にて嶋村勢も其儘引陣致候趣にていつれも又々戰ひ有之候模樣に御座候

一澁田見勢引陣に相成候處長州人三十人程苅田宿へ押寄せ參り左之通り燒失致候趣

一苅田新町廿六軒燒失

一同本町東入口より西出口迄六十三軒同斷

一狸場山三軒共同斷

一同所南之方畑へ仮臺場仕構之所へ小倉勢より野戰筒貳挺持行有之所長州人奪取湯川へ引取候趣に御座候

一與原と申所松原へ死骸一つ有之姓名書左之通

小笠原出雲内　柳田廣太郎

一曾根土手唐戸近邊へ參り所長州人五六人參り桐油にて日除けを致し往來に罷在候

一唐戸へ參り候處首一つ高竿に突立有之候同所に五六人罷在候何者之首とも相分り不申候

一曾根村燒跡殘の家へ長州人廿五六人程參り居一軒に五六人つゝ罷在候

一湯川村手前池之端迄宮地へ赤之鉢卷同し帶を致候長州人五六人罷在候

一湯川入口迄參り候處同所へ長州人大勢罷在通路六ヶ敷由右村之者申候に付夫より引返し罷歸候

一長州人は湯川村へ相集り居候て三十人つゝの隊五備にて都合百五十人罷在候趣尤大里表より五日つゝ之交代の由に候

一長州人白鉢卷に同し帶を〆る者は士分の由白鉢卷に赤帶を〆候者は農兵の由赤鉢卷に同帶を〆候者は穢多の由に御座候

右之通に御座候

八月十三日

右戰爭之事小笠原左京大夫より屆出たる趣なれ共其書存せす左記あるのみ蓋し大坂にての屆なるへし

一去る朔日御屆申上候內尚取調別紙之通申越候間此段各樣迄申上候已上

九月十日　　小笠原左京大夫家來　三津十太左衞門

手負討死左之通

八月十一日狸場山戰爭之節

討死　小笠原出雲家來　柳田彥太郎　　村上彌十郎

同月十七日右同斷

討死　本陣備伊藤唯之丞組　浦野端藏　　薄手　同山崎靭組　岩永房太郎

討死　同　小澤理右衞門組　松永兵次郎　　同　小笠原鬼角備平士　加藤勘之亟

淺手　小笠原織衞備大池三郎右衞門組　栫田半兵衞　　薄手　林郡兵衞

薄手　中野一學備番頭　海野紋右衞門　　同　同平士　柴山淸右衞門

同　杉生募組　古賀喜平　　同　溝口勘三郎

去月十七日戰爭之節賊手負討取の數村里之者見聞之處四五十人と相認め候處其後彼か間者左五郎と申者召捕申立候には十七日之手負討取百人余り之由申出候此段爲御承知申進候以上

九月二日　　名

一八月廿日　將軍家茂公於華城薨去一橋中納言慶喜卿へ御相續被　仰出

本日於大坂閣老稻葉美濃守より左之兩通を被渡

紀伊殿家老衆へ

公方樣御不例御養生不被爲叶今廿日卯上刻　薨御被遊奉絶言語候此段可被申上候

紀伊殿家老衆へ

兼て被　仰出候通　一橋中納言樣御相續被遊今日より　上樣と奉稱候此段可被申上候

一八月廿三日米金御拜領且藝石兩道幕府之海陸軍御附屬被　仰出

左之兩通於廣島閣老水野出羽守より被渡

紀伊中納言殿

永々御滯陣御苦勞被　思召候依之爲　御尋米千俵金千兩被遣之

紀伊殿家老衆へ

藝石兩道へ出張之　公邊御人數幷御軍艦方御總督御心得中御附屬被成候間此段可被申上候事

一八月廿八日同晦日小倉藩同領湯川葛原沼三ヶ村屯集之賊兵を伐つ

小倉藩屆書

長賊共企救郡の內湯川葛原沼三ヶ村へ屯集胸壁を築沼吉田兩村は勿論長野村邊へ日々入込下方之者共を爲致動搖鷄野菜等奪取致亂妨候旨致愁訴候に付右賊徒追拂下方不爲致安堵候ては歎けしく其上稲作取上之時節に付去る廿八日別紙之通致手配未明より總攻擊致候處彼は大砲所々に構へ頻に發炮此方よりも野戰炮一勢に仕寄候處賊徒小勢に候へ共大砲數挺を以打立候故何分一擧には攻崩し兼尤曾根口よりは余程烈敷攻掛り候へ共味方小勢にも有之且裏手へ差廻候小笠原

八左衞門手始め攻掛り之樣子風並惡く候に付炮聲聞へかね彼是にて一旦人數引揚持場を堅固に相守居申候其外同日は井村高津尾村出張之備にも烈敷及戰爭賊兵を追詰め高坊山邊へ相構へ候彼か臺場一ヶ所乘取申候

一同晦日嶋村志津馬備之內先手物頭二頭深谷小太郎靑柳彥十郞銃隊志津馬召連致巡邏宮尾邊へ罷越候處賊兵共木村千堂邊より出會に付志津馬は本堂木村へ押掛中には鎗の取合にも及ひ候へ共木村河原木布禰社之森より豐後橋之方外曲輪迄押掛致炮戰物別れに相成引揚申候尤賊徒の手負余程有之且鉄炮三挺其外品々分捕致候味方は手疵一人も無之候且また右之外小せり合は日々仕候右之通申越候に付先不取敢申上候以上

九月十日

小笠原左京大夫家來 三津十太左衞門

別紙

小笠原八左衞門　平井小左衞門　山崎 誻　黑部彥十郞　前田重助

右隊は苅田へ乘船山手通りしよけ山追崩之手筈

富永保之助　富永 屯　小澤理右衞門　松下與一(右)衞門 〔一本左〕

右隊は曾根唐戶通りしよけ山前通り葛原

中野一學　小笠原鬼角

右備は貫通り山手傳ひ長野村へ葛原上下より打入

小笠原織衞

右備は湯川の賊徒押懸大原山之模様にて直に横矢にて追崩

八月廿八日曾根戰爭之節手負討死の輩

薄手　本陣大砲打方　小田民之輔　　同　中野一學備平士　飯田所左衞門

深手　同平瀨八郎右衞門組　萩原惣之助　　淺手　平井小左衞門組　嶋嘉次馬

討死　杉生募手　森下保（一本左）（右）衞門　　深手相果る　小谷民部家來　柴崎剛藏

深手　小笠原鬼角備大村内藏助家來　原勝右衞門

一八月（失日廿七八日なるへし）朝廷休兵を被　仰出且御慰勞之　勅使を下し賜ふ

左之通　御所より被　仰出たる旨にて大坂より幕府監察松平謙藏松平伊勢守持參直に　君上へ呈す

大樹薨去上下哀情之程も　御察被遊候に付暫時兵事見合候樣可致旨　御沙汰候就ては是迄長防に於て隣境侵掠之地早々引拂鎭定罷在候樣可取計候事

右一通　　紀伊中納言

爲前軍總督出張之處度々及奮戰諸藩指揮行屆候由被　聞食　御滿足之事候殊に長々滯陣之段太義に　思召候此上尙厚可有盡力旨　御沙汰候事

但出陣諸藩へも同樣可達事

右一通
長防接近之諸藩へも尚精々盡力心得有之樣可達之事
右に付一と先御陣拂之儀幕府へ御屆として廿八日夜御家老有本左門大坂へ出發（出兵諸藩等へ[一本ナシ]
は左之如く御下知夫々幕府大目付を以傳達せしめらる）

井伊掃部頭
井伊兵部少輔
榊原式部大輔

今度從　御所暫時兵事見合之儀被　仰出候に付ては紀伊殿には被仰立之趣も有之御人數當所へ御殘し置一旦御上坂被成候其方にも見込之品兼て中立之趣も有之候間先手人數は當所へ差置側廻り召連上坂可被致候右之趣紀伊殿被　仰聞候間相達申候尤當所出立日限之儀は大目付御目付可被承合候

松平丹波守

今度從　御所暫時兵事見合之儀被　仰出に付ては紀伊殿には被仰立之趣も有之御人數當所へ御殘置一旦御上坂被成候其方には召連候人數引纒滯藝可罷在旨紀伊殿被　仰聞候間此段相達申候

內藤備後守

前同文言其方には召連候人數引纒滯藝可罷在候尤廣瀨口守衞之儀は　御免被成候旨紀伊殿被仰聞候間此段相達候事

脇坂淡路守家來

前同文言其方共には滯藝可罷在旨紀伊殿被　仰聞候間相達候

陸軍奉行
歩兵奉行

前同文言陸軍三兵之儀は昨冬以來出藝之隊は此節一旦歸坂爲致當春以來出藝之隊は御抱歩兵二大隊幷附屬之大砲御持小筒組共當地へ繰込候上交代之心得を以一旦歸坂致し候樣可被取計候尤竹中丹後守には追て致沙汰候迄滯藝可罷在旨紀伊殿被　仰聞候間相達候當所出立日限之儀は大目付御目付可被承合候

横山半左衞門

前同文言其方幷支配向共當春以來出藝之向は一旦致歸坂候樣紀伊殿被　仰聞候間相達候尤當所出立日限之儀大目付御目付可被承合候

戸田釆女正家來

前同文言陸軍大隊十六番隊共一旦追々歸坂相成候間其方共にも右に準し追々歸國可致旨紀伊殿被　仰聞云々尤當所出立日限之儀は大目付御目付可被承合候

按に　長州の兵威は既記の如く席卷の狀をなす之に反し征軍討志なく士卒倦惰强藩は幕命を輕侮し加之大軍暴露歲余爲に國帑殫竭す諸藩亦國力耗盡策如何ともすへからさるに加へて　將軍薨せり　將軍の薨實は七月十九日夜也後事及ひ征長の大事定らさるを以て秘して喪を發せす長州豈に之を知らさらんやもし知らさる爲して大擧討て出は或は百斤の鎚を累卵に加ふるの危きを視るも亦知るへからさりし也然るに如此平々易々休兵之局を結ひしは其故何そや是勝安房守の勳績といはさ

ろへからす房州一橋公の密旨を奉して單騎敵中に使し胸襟を披て至誠を開陳す彼感動之を諒し休兵の事忽諸に締結す此事勝氏自著の斷腸記に記載するか如し後年信氏に面せし時談當時の事に及ふ氏語て曰予の廣島に至る諸藩之有司悉く泣き願し手を合せぬ計りに休兵の事を予に依頼し今十數日を緩ふせは自潰より外なしと歎きたり予は單騎敵境に入らんとせしに藝藩辻將曹は國家休戚の係る處決て然るへからす兎に角某等に任せ給へ万よきに計ふへしと堅く執て聽かす暫く嚴島に休憩せよといふ依て同島に寓せしに待て甚厚し間もなく長州の山縣狂介等兩人(今一人の名聞忘れたり)を誘ひ來る即使命を傳へて解諭僅到半日にして決す蓋他に奇あるなし唯至誠身命を忘れたる一点のみと語られたりき爰に斷腸記を抄出す

使長州冒危記

八月十五日、京師大監察瀧川播磨守。飛騎傳一橋公命、召余入京、雖病勿遲、余抵閣老問故、閣老云。須急遵命也、余即發、十六日曉達京師。抵一橋公第。適公入朝於闕。坐而待之。駕還即賜延謁。命余使於長藩。余懼不勝任、力辭、公曰。是非余命。實由　詔旨耳。余乃受命。直記所見而進曰。臣奉使間關、能用臣謀、操縱裕如、則臣勉竭駑驗。若狐疑猶豫。從中掣制、則臣死不足吝。恐辱君命、公曰、汝計可也。一切措度、任汝專行。即辭發。輕騎屏從。異於平昔。以爲橫行敵境、生死任天、幸達成命、以歸報。榮莫京焉、若有虞危。挺身當之。竊比徇死於前將軍。又何畏哉。勿帶騎從同羅禍機也。路過安藝。視我師。士卒解体、崩離形成。且撫且行。經二十九日。畢事而歸。經兩日無過問使事者。余深自疑惑。憤怨交至。時翻然悟曰。余唯奉使耳。措置大事。有顯要在焉。非敢容喙也。乃上書辭職。經三日蒙允。東歸即日就途。抵江戸屏居於家。竊不勝感慨焉、幕府再討長藩之舉。實類兒戲。强藩侮命、不應徵集。驅羸弱臨虎穴、而暴露蔵餘、勢見形屈。初則恃不可冀之援。以僥倖成功。終則無奇謀遠慮以籌計其後。宜取覆亡、余過安藝。具見列侯主謀者。憂餉不繼。士卒倦惰行間。若再緩罷兵一月。則皆

擅自就封。勢所必然。禍稔潰決。不可轉遡。而幕府用度繁多。賦竭財窮。國步日艱。無可濟止。執政者苦慮殫精。亦可嘆已。

一九月四日御陣拂に付廣島御出發江波浦より明光丸へ御乘艦同六日大坂木津川へ入港夫より御召小早にて同日申刻幸橋邸へ御歸着

但四日曉七ッ時御供揃にて四時比廣島御發駕九ッ時比御出艦同夜藝州御洗浦にて御一泊五日朝六半時比御出帆六日未明大坂天保山沖へ御着艦なり水野大炊頭は十日夕大坂へ着船す

慶應二寅年九月四日藝州廣嶋表御引揚け

御軍艦明光丸へ御乘組之節廣島より江波浦迄之御行列

○印之面々　御乘船迄御供相勤江波浦迄御警衛同所にて雇船へ乘組直に若山表へ揚取候筈

△印は増御供にて御乘船後御警衛相濟廣嶋へ罷歸り候筈

為御知
御使之者

御小人目付
御徒目付
御小人目付

御先へ
一番貝にて撤兵二小隊繰出す
二番貝にて撤兵二小隊繰出す

御右へ小旗
○撤兵二中隊

口騎馬
○御供番
栗生勘右衛門

口騎馬
○御使番
長谷川甚兵衛

同
御目付

同
○大隊令
森　藏人
右黒丸以下同斷

△鼓手長

第四大隊小旗
○第二小隊
丹(羽)五郎兵衛
一本波
初

○第二大隊
○第五小隊
澁谷九左衛門初

○第四大隊　御紋御旗
○第六小隊
西端政之助初

○第二大隊　旗手士官
○第六小隊
羽端五左衛門初

○第二大隊
○第四小隊
田中唯次郎初

○第二大隊
○第三小隊
廣井與右衛門初

○第四大隊
○第七小隊
水野十大夫初

○第四大隊　小旗
○第二小隊
榎本安次郎初

○同
○第八小隊
玉井八太夫初

御長刀

御同朋

御側向
御側向

御奥御供方二人

常御供
御醫師
御目付

御小鎗

丸印御雨掛
御挾箱

角印御雨掛
御挾箱

御手傘
御雨掛
御挾箱
御床机

大隊令
御軍事奉行

△鼓手

第二大隊　小旗
第七小隊
田口亀次郎初

同
第八小隊
堤嘉市初

二御旗　旗手御旗同心

○第三大隊　○第七小隊　稲葉司書初

○第五大隊　○第一小隊　堀田右馬丞初

○第四大隊　○第八小隊　玉川伊右衛門初

小旗

△中島欽一郎初一小隊　御用人　御小姓頭　御目付　○御徒押

御左行　○御徒押

御年寄騎馬

一曩に水野大炊頭に附屬し大野村に出張の江戸隊は八月廿四日草津驛迄引揚廿九日廣島へ歸陣し九月朔日同所出帆九日大坂へ着十月廿五日同所出船廿八日江戸へ歸着す同隊にて戰死したるは松島常次郎（大御番格小普請）松永鉉太郎弟同苗德之助の兩人なりし

一御出征御長陣に至りしを以江戸　御簾中樣より御陣見舞且援兵として江戸常府の士及ひ武藝者子弟等一隊を派遣せられ松原一郎兵衛文武場頭取筒井房之丞等引率して八月廿日廣島へ着す然るに　將軍薨去の發布間もなく解兵に至り事に及はさりしなり

一九月十五日御先手總督御辭退且長防討手の諸藩不殘揚取休養等の御建白書渡邊主水を以閣老板倉伊賀守へ差出す

私儀不肖之身を以　御先手總督之重命を奉蒙元より不堪負荷次第に付再三申斷候儀候得共段々

御論も有之且は切迫之御時勢只々退讓而已も難仕出張は仕候得共元來諸藩を指揮致し候樣之威德共無之儀に付彼是徒勞致し候內此度の事情に立至り候段全く私儀奉職無（一本備）（狀）之故と深く奉恐入伏て御譴責を奉待儀御座候就ては此度　御廟算御立替と之儀に付ては右之次手に總督之任も何卒御人撰之上被　仰付度所詮私輩にては往々大に重任を辱しめ可申と是迄迚も甚心配仕右之任御免之上にて如何樣共努力仕度至情至願に候處出張先にて中比御辭退も難仕日夜憂慮罷在候處此度止戰被　仰出且長防之方も大躰平穩之見留も相付き候付不取敢前件謝罪且情願之趣等奉申立度上坂仕候處　上樣には此程より　御上洛に付ては直樣上京可仕筈發艦以前より喘痰差起り船中養生難行屆着後痿弱相募り候付不取敢乍恐家老共を以右之段奉申上候宜御聞取被成下且情願之趣何卒御許容被成下候樣奉深禱懇願候

九月　紀伊中納言

右一通

長防之儀大躰平穩之見留も相付不日御申通しの復命も可有之付ては廣島へ出張諸藩之內には長々滯陣之筋も有之國元之疲弊被察且新規出張致し候筋にても止戰之間無益に座弊爲致候ては後圖之御爲にも不相成樣乍恐奉存候付敵境之處は藝藩へ御委任に相成屯兵は御止に相成候方却て敵情をも平穩に致し可申旁御便利之方と奉存候付出張諸藩出張之者不殘御揚取らせに相成り一旦休養致候樣被遊度此段分て御談申上候樣被申付候事

九月　渡邊主水

右壹通
竹中丹後守幷戸田釆女正家來此度藝州口戰爭之節格段盡力御用向に付ては永井主水正致盡力候儀に御座候其他歩兵奉行御目付等夫々盡力振も可有之右は自然陸軍奉行大目付等より御達可申候間格段御取（扱）一本扱御座候樣先不取敢際立候分御達申上候樣被申付候事

九月　　　　　　渡邊主水

（一九月十九日藝石兩道之征討軍不殘引揚被　仰出）一本アリ

閣老板倉伊賀守より相渡す

藝州口石州口出張之御人數幷諸家人數共不殘引揚候樣可致旨被　仰出候此段可申上候

於是兵事全く止む朝廷には長防の處置を籌議せしめんか爲め同月廿八日を以て尾州以下二十藩を召さる依て　御入朝あるべき處御發藝前より御喘痰の故を以一旦御歸國御休養の儀を　天朝幕府へ御出願之上十月三日大坂御發途明光丸へ御乘船即日若山へ御歸城あり爾後　御入朝を促させられしにより十二月七日御上京同十八日御歸國なり平時に屬するを以て略す

一十二月四日安藝飛驒守の敗軍を罸せらる

安藤飛驒守は御名代して石州路へ出張之處敗軍之上人數揚取不束之至に付不取敢若山へ被遣謹愼を被命八月に至り處分之如何を閣老へ御伺之處敗走の次第篤と糺問之上御見込を付られ伺はるべしとの事なり然れ共戰地之事情は軍目付阿部進太郎より疾に言上を遂けあるべきに付是非に御差圖ありたしと尙又申立られしに平常と違ひ御總督の上は　公儀御人數の賞罸をも御委任

有之儀軍律も可被爲在御總督御意見之趣被　仰立其上にて御沙汰可被仰出と十一月廿六日答あり依て左之趣於京都板倉伊賀守へ御家老より提出差圖之通に付卽ち執政職を免し謹愼を被命たり

安藤飛驒守儀石州表へ爲名代被差遣候處不束之儀有之大事を誤候段　公邊へ奉對被恐入候に付軍律を正し嚴重被申付度候得共　昭德院樣御新葬之御砌にも被爲在候に付格別之　御宥恕を以役儀差免屹度愼罷在候樣被　仰付度被存候事

十二月

四日伊賀守より差圖

御書面之通御申付被成候樣可被申上候事

一慶應三卯年正月廿三日長州討手解兵被　仰出

主上には去年十二月十七日より疱瘡に罹らせ玉ひ同廿五日に　崩御あらせらる卽ち本日於京都閣老板倉伊賀守より御城付へ左の書付渡す

從　御所被　仰出之趣も有之候に付長防討手暫時兵事見合候樣相成候處此度　御國喪に付一同解兵被　仰出候此段可被申上候事

一解兵に付ては御總督は無論御解任たるへしと雖も何等之辭令も不出不判明なるを以左之伺書閣老へ提出之處二月十三日次筆之通被　仰出

長防御征伐　御先備總督　御免之儀紀伊殿より奉歎願御座候處此度　御國喪に付一同解兵可致

旨被　仰出候付ては如何相心得可申哉爲念相伺候樣被申付候事

二月　　　　　　　　　　　　　　　橋本六郎左衞門

紀伊殿家老衆へ

長防御征伐　御先備總督　御免被　仰出候間其段可被申上候事

南紀德川史卷之百十八

臣　堀内　信　編

軍制第五

親征出兵　四

一文久三亥年八月廿二日正親町少將殿守衛五十人長州へ派遣すへき旨　御所より被　仰出

警備出兵

正親町少將殿守衛

正親町少將殿は本年五月長州にて亞國船炮擊の際監察使且褒賞の　勅使として下向の處此回朝議一變により御召戻之迎の爲也京師御守衛人數の內劍鎗等の武藝者五十人出張す彥根松山小濱中津藩にも十人つゝ出張を被命たり

一同年十月七日大坂城へ御入城

大坂御入城

當八月廿二日若山御發駕御上坂廿五日御上京御滯京之處　幕府より大坂へ御入城御守衛且海岸防禦筋被　仰出に依て也

一元治元子年三月十六日幕府より大坂御守衛被　仰出

大坂御守衛

去年來將軍家御上洛且京師騷擾等にて度々京坂へ御出馬隨て京(師)[一本坂]守衛として多人數派遣の處本日更に大坂表御守衛し[と脫カ]て早々御下坂被成右御守衛は昨年以來引續之儀と御心得可被成且當節浮浪の徒徘徊之趣相聞候に付御取締筋嚴重に可被仰付と被　仰出たり

依て三月廿二日京師御發駕廿三日大坂幸橋邸へ御着

一右御守衛方法ヶ條書を以閣老へ委細質問之處大坂御守衛之儀は　御城内而已御守被成候筋には無之海陸を不論御人數を御帥ひ防戰之主將御勤被成候儀と御心得都て御委任被成候事之旨差圖其外每條（答之趣）（一本ニアリ）世記に詳なり

右に付一層多人數常に若山より交代在勤と雖も職々人員等不詳

一五月十六日將軍家大坂御發艦江戶へ還御に付差圖に依り同月廿三日より御入城

堺海岸臺場警衛

一同年八月十九日堺表南之方海岸臺場警衛をも兼御取計可被成旨大坂御城代より達す

大坂御守衛御免

一元治二丑年四月十六日大坂御守衛御免被　仰出

征長御進發御後備被　仰出に付御免之旨也依て大坂出張之人數揚取方取計之

石屋村等取締

一同年六月十九日御在坂中御先備之御人數幷に右へ附屬之者共總て石屋村御影村住吉村へ出張右村々取締向嚴重可取計旨　幕府より被　仰出

右同年十一月十一日御免御人數引揚へく旨差圖あり

住吉村取締

一元治二丑年十月五日當節外國人渡來居候付万一住吉村へ上陸等致し候節胡亂之者粗暴之擧動可及も難計に付取締向嚴重御心得被成候樣於大坂閣老を以被　仰出

大坂市中取締一際嚴重可取計旨大坂城代より達あり

日御門御守衛被免

一慶應三卯年十二月十三日日御門前御守衛之儀被免候間明朝人數可引拂候事と參與衆より書付渡す

本記初發之被　仰出記載なし蓋し御上京中一時御奉命なるへし

國分寺今宮邊警衛

一同四辰年正月三日於大坂閣老より大目付を以御人數二大隊國分寺今宮邊警衛幷近傍巡邏可致旨書

付渡す

右は正月二日前將軍御上洛君側の奸惡を可被拂旨布告と同時に出たるものなるへし然れ共　前將軍大坂御退城瓦解により自つから消失に至りし也

國力相應人數可差出

一同年正月十月於京都參與衆より到今日形勢之間大分令御趣意相心得國力相應人數可差出旨被達

出東海道先鋒

一同年二月六日於二條城軍務掛を以今般　御親征被　仰出に付東海道先鋒被　仰付候國力相當人數可差出　御沙汰之旨被　仰出

右に付三輪三右衛門（大隊長）一隊引纏十五日迄に桑名着御總督之指揮を可受旨達す

二月十日中隊長和佐類之助徳田數馬小隊長堀内伊右衛門戸口與（六）（一本吉）兵衛中隊引纏京都へ出發す

同月廿六日第九大隊教頭白井金之助關東へ二の手援兵として第九大隊左半大隊引纏駿州沼津御總督御陣所へ出發す

蒸汽船御用

一慶應四辰年二月十三日於太政官代非藏人を以今般奧羽鎭撫使總督被差下候に付持合之蒸汽船一艘御用に付來る廿五日迄兵庫港へ廻著候樣　御沙汰之旨被　仰出

右に付ニツホール艦廿五日迄に兵庫へ廻航之處三月朔日鎭撫使京都發途直に大坂より乘船に付同所へ廻船可致人數二百五十人計り乘組可相成旨尙又達しありたり

外國公使參朝に付き市中巡邏

一同廿七日英佛蘭公使上京參　內被　仰付候に付藩主滯京中市中巡邏被　仰付候條旅宿外廻は勿論通行之節之警衛嚴重可取締旨辨事より之廻狀達す

御親征御留守中京都御警衞

一同年三月朔日　御親征御留守中京都御警衞別て肝要に付嚴重可致守衞　御沙汰之旨於京都被
仰出
同日來る五日　御親征行幸之節御小休鳥羽城南離宮境内兵士二百人御守衞可致旨被　仰出
五日は御延引廿一日に被　仰出御道筋自城南離宮淀迄御守衞可致旨廿日に被　仰出
閏四月廿九日京都市中取締被　免

英佛公使參朝下阪警衞

一同月三日英國公使參朝に付當日往來筋境町御門内より日御門迄引受嚴重取締可致旨於京都被　仰
出
一同月四日佛公使下坂に付相國寺門前へ騎馬警衞五人可差出英國公使下坂に付巡邏人數差出伏見表
迄途中嚴重巡邏可致旨弁事より被達

關東先鋒二之手

一同月廿三日關東先鋒二の手之援兵として銃隊三百人早速繰出し候樣支度可致旨軍防局より被達
同廿四日弁事局より大總督不日入城にも可相成付ては關東御取締向尚奥羽等速に平定に至り候
樣指揮可有之に付早々出發東下被　仰付候旨被達
右に付京都詰合之内白井金之助初百六十四人廿六日出發不足之分は金森震太郎（大隊長）右半大隊
引纒四月三日出立駿州御總督御陣所へ罷越隊中組合總計三百十四人に相成
一閏四月廿九日宇都宮へ出張被　仰付置候處先暫時可見合旨於江戸總督府より被　仰出

下京中取締

一慶應四辰年四月八日下京中取締被　仰付候間蜂須賀阿波守へ引合行屆可相勤旨軍防局より被達

還幸御道筋御警衞

一同年閏四月五日來る七日淀城御一泊八日卯刻御出輦　還幸被　仰出候間御道筋御警衞　行幸の節

蒸汽船御用

出兵人數届

同樣可相心得旨軍務局より被達

城南離宮御小休所に相成候間　行幸之節通り諸事相心得人數差出候樣との事なり

一同月廿九日所持之蒸汽船御用相成候間早々兵庫へ差廻し可申旨軍務局より被相達

蒸汽船之内ニッホール艦は修復中に付出來日限見積次第可申達旨五月七日に届る　ニッホール艦六月朔日兵庫港へ廻航之處阿州へ御貸渡に成り二日阿州へ廻し人數乗込江戸へ航海す

一同年五月十一日　朝廷へ左の届書を出す

出兵人數

在京

總人數八百六十五人　銃隊

内　百八十六人 御先鋒へ出兵／三百六十八人 二の手出兵

殘る二百八十五人　在京

一役人　貳十五人

一大砲　貳門

東國　軍事奉行初士分　百十四人

輕輩夫方之者共　百七十三人

京師　家老初士分　貳百人

輕輩夫方之者共　百人余

東國　銃隊　四百八十一人
役付　七十三人
京師　銃隊　二百五十六人
役付　五十四人

一同年六月廿九日在京の兵員關東へ出兵の員數等左之通軍務官へ屆出る
一銃隊　五百人　同役付　五十四人
右は一の手二の手兩度に東國へ出兵當時江戸表へ滯在
一銃隊　二百八十一人　同役付　五十四人
右は當時東京人數外に關門守衛等被　仰付無之

關東出兵手負討死屆

右は軍務官より取調書可差出旨達しに依て也
一同年七月關東出兵手負討死之屆書軍務官へ出す
五月十五日大川橋邊にて戰爭之節
戰死　和佐類之助隊兵士　龜井（宇）吉（一本卯）
手負　養生不叶六月八日死　堀田伊右衛門隊兵士　嶋本龜右衛門
戰爭之節何れにて討死候哉相知不申　同　兵士　山崎熊八
五月十六日曉大川橋固所に於て上野敗走の賊兵森光太郎と申者召捕於同所梟首

奥州白川へ出兵

一慶應四辰年八月二日東京に滯陣人數之內二百人奥州白川へ出張可致旨從　大總督府被　仰出候に

高割徴兵差出

非常之節伏見口へ援兵

會津追討褒詞

白川戰爭始末書

付追々出張之旨申來候段軍務局へ屆出る

一同月廿日先達て高割徴兵被　仰出に付御願之上左之通御差出軍務局へ屆る

高四十八万三千石
万石に付三人の割

紀伊中納言

徴兵百四十五人

内二十九人病氣に付國元へ差遣し代り四五日之内參着之筈百十六人今日差出可申處内（十）[一本七]人俄に病氣差起當分之儀に付全快次第差出可申事

八月三十日右徴兵第三十番隊へ繰込大宮御所桂御所今出川御門御警衛被　仰付

翌明治二巳年二月三十日東北平定に付更に兵制御一定の御詮議も有之に付一と先歸休被　仰付旨軍務官より達あり

一明治元辰年九月廿五日柳原大納言殿を以左之通被　仰出

非常之節伏見口へ援兵繰出候樣被　仰付候事

右十二月廿八日に被免候旨被　仰出

一同年十月奥羽出兵へ總督府より褒詞を下付せらる

此節會津追討に付速に出兵致し合圍數十日盡力候處遂に賊徒降伏に及候始末感悅之至候仍て褒詞如件

明治元戊辰年十月　白川口總督　正親町中將花押

紀州藩隊長中

白川口戰爭始末書

奥羽出兵隊長三輪三右衛門精兵貳百人隊外士官上下三十人余引卒七月廿日東京出立十一月朔日

東京へ凱陣の節大總督府より達により差出たる始末書左之通り

一當七月十九日弊藩兵隊二百人奥州白川口へ出張被　仰付同廿九日白坂驛迄到着候處彥根兵隊到着迄忍藩と致交代同所警衛可致旨被　仰付山手其外所々巡邏致し番兵等數日無間斷相勤罷在候處八月十四日より白川表石川口初所々警衛被　仰付候に付白坂屯集兵隊之內二小隊余白川口へ分配番兵等相勤申候

一八月廿一日探入之米人壹人東京へ護送可致旨於白川御達に付弊藩兵隊十人附添右米人　鎭將府へ護送致し其段御達申上候

一同日白坂滯在之人數白川へ繰込永沼おゐて尾州藩と合併會津へ進擊可致旨　御沙汰に付同廿四日於永沼同藩と申合勢子堂﨑より進入候處賊徒は何れへ歟散走致し一人も無之候に付途中無滯翌廿五日十二時比若松城下へ到着同日より土州藩と交代いたし二本松街道并在口所々間道警衛可致旨被　仰付右邊巡邏斥候番兵等相勤候

一九月五日越後勢之官軍會津表へ進入之等之處越後路於舟戶邊賊徒道を妨け難入込相聞候哉にて各藩兵隊右舟戶邊へ進擊之節弊藩兵隊之內二小隊差出合併にて進擊致し候處賊徒逃去途中無滯舟戶表へ差越後勢と出會候付各藩申合之上翌六日若松城下へ揚取申候

一同八日瀧澤村出張尾州藩各所警衛相成候に付弊藩之內より二小隊同所警衛可致旨被　仰付相勤申候

一同廿二日松平肥後守父子謝罪降伏に付兵器差出候節各藩隊長申合右器械受取申候

一同廿四日城受取に付各藩より兵隊差出候節弊藩よりも半小隊差出申候

一同日田島邊賊徒追討して日光街道本郷村迄各藩兵隊進撃之節弊藩一小隊差出合併にて出張數日滯陣致し候處賊徒降伏致し候付同村より直に揚取申候

一同廿六日會津降人七百人余猪苗代へ引退候節弊藩兵隊廿人護送致候樣御達に付同所へ送り屆申候

一同廿九日二本松へ出張形勢に從て仙台應援可相勤旨　御沙汰に付十月五日二本松へ出張仕候

一十月七日仙臺既に降伏之由に候得共未た御所置振等不被　仰渡盛岡一隅等順逆之情實不相分故一先當方より進軍彼手之官軍と調合候筈に付出張被　仰付候處御都合之品有之暫出立見合候樣　御沙汰に付其儘滯陣罷在候處同十日福島へ致出張守山藩と交代　御本營御門御警衛可相勤旨被　仰付候付同日より御警衛相勤申候

一同十三日阿部美作銃器護送東京へ凱陣被　仰付候處道中人馬差支候に付護送器械之分福島藩へ預置兵隊而已凱陣可致旨同日御達に付同廿一日同所出立當月朔日東京へ歸陣仕候依之御屆申上候以上

辰十一月四日　　紀伊中納言内　三輪三右衛門

一明治元辰年十一月二日滯京兵員取調可屆出旨軍務官より達により左之通り屆る

非常之節伏見口援兵　　兵員　貳百人

滯在　　同　百八

一同月十三日奥羽へ出兵左之通軍務官より被相達

紀州

藩兵千五百人奥羽の間へ至急出張申付候事

右之通の處先精兵五百人丈致出兵跡千人の分國所に備置不時の出兵相成候樣十一月廿八日更に被達たり

一右に付家來津田監物御雇を以軍監被　仰付旨も達監物病氣にて辭退に付小出和泉へ同樣被　仰付同人も病氣辭退遂に有本從へ被　仰付たり

一左京大夫樣よりも御人數を右出兵之内へ御差加へ被成度と御依賴により其趣弁事局へ御願之處二小隊本藩へ合併奥羽之間へ至急出張可致旨軍務官より達せらる

一同月十五日左之兩人出張之儀於京都被　仰付

奥羽出張兵隊監察として可罷越　御目付　村井清

右御人數へ差添可罷越　公用人差添 他藩交際　木村喬一郎

一同月十七日一大隊大砲一分隊役人共都合五百人大隊長佐々木盛彥引卒京都出陣大坂へ發向洋艦へ乘組廿八日安治川口出帆す

一右兵員東京着之處同地警備可相勤被命十二月廿三日軍務官へ左之通屆書差出す

弊藩兵隊并西條藩兵隊合併御當地滯在人員別紙之通御座候

右兵隊は於京都今度奥羽之間へ出張被　仰付御當地迄出張仕候處春來御當地所々へ御警衛

之兵隊と交代可仕旨被　仰出候に付當時夫々御門等守衛罷立申候此段御屆申上候以上

十二月廿三日

別紙

一撒兵隊長　二人　　一同小隊長　八人
一同半隊長初稗官共　四十四人　　一同兵隊兵卒　三百四十六人
一大砲隊分隊長　壹人　　一大砲隊砲車長　二人
一兵卒　廿人　　一西條藩兵隊　五十人

〆四百七十三人

内

撒兵隊小隊長初兵卒共　百人　　大河内右京亮邸在陣定詰差出置申候
同　五十人　　神田橋御門御警衛定詰差出置申候
同　五十人　　常盤橋御門同斷
同　五十人　　兩國橋見張所同斷
同　五十人　　柳橋見張所同斷
大砲隊分隊長初兵卒廿三人
并西條藩五十人　　淺草御門同斷

殘百人　　遊兵非常用意宿陣に罷在候分

隊外人員左之通

京都滞在之兵隊交代

在京常備兵員届

精兵一大隊大坂警衛

一軍事奉行　一人　　一軍事方　三人
一同附属　二人　　一目付　一人
一徒目付　二人　　一小人目付　三人
一小荷駄支配　三人　　一小荷駄方　七人
一陣屋方　六人　　一醫師　二人
一器械方　三人　　一夫方取締　一人
一刀指小者　二十人　　一又者　二十人
一夫方之者　二百七十七人

一明治元辰年十二月四日春來京都滞在之兵隊令歸國是迄御門等御堅め引請場所之儀は新着之兵隊を以守衛可致旨軍務官より被相達

一同二巳年正月五日旧臘御願之通御歸國に付ては在京常備之兵隊左之通之旨軍務官へ届書出す

　一銃隊　百廿九人　　一右役付之者　二十一人

一同年二月十四日精兵一大隊大坂爲警衛迅速可差出旨軍務官より被達

　三月六日大坂御警衛被　仰付候處右は海陸要衝之場所御留守中別て重々の事に付緩急の節は不及申平常取締方精々嚴重可取計旨行政官より被　仰出

右一大隊出兵之處兵制改正之都合も有之付當分半大隊を以て交代爲致度旨五月十九日軍務官へ伺之處聞届不虞之節は指揮次第出兵最兵制改革の上は出張可致旨同廿四日指令ありたり

勢州御通輦御警備銃隊御供御願

關東へ出陣之賞罰

一右警衛の儀海內鎮定相成殊に差向御用無之付御免之儀十月御願立之處休兵被　仰付たり

一同月廿五日　御東幸に付勢州御領分　御通輦之節御警衛銃隊御供御願之處銃隊供奉に不及嚴重辻固可致旨廿八日差圖ありたり

一明治二巳年三月廿七日去年關東へ出陣之面々賞罰を行わる

虎之間席並中隊長　德田數馬

金壹枚　代り金七兩二歩

先役中去年關東出張之節隊中取締宜會津進擊に付ては格別奮發御都合に相成候段達　御聽一段之儀　思召候依之爲御褒美被下之

中の間席銃隊左嚮導　藤井庄吉

金五兩

去年關東出張之節心得振宜隊中敎導振等能行屆候段達　御聽一段之儀　思召候依之爲御褒美被下之

門大夫總領炮術稽古料被下中隊長　根來武藏

金壹枚　代り金七兩二歩

去年關東出張之節心掛宜隊中をも能取締實地に臨み兵士分配等行屆格別骨折候段達　御聽一段之儀　思召候依之爲御褒美被下之

以下役銃隊稗官　中村伊八郎

以下役出役幸左衞門忰稗官　高橋種次郎

金三兩つゝ

去年關東出張之節隊中世話格別行屆一段之儀に付爲御褒美被下之

井關彌五助隊　第七小隊第八小隊

金三百兩　　三輪忍隊　第一小隊第二小隊
第三小隊第四小隊

去年關東出張之節會津進擊に付ては格別奮發御都合に相成候段一段之儀に付爲御褒美被下之

金壹枚　代り金七兩二歩　虎之間席並中隊長　和佐類之助

金五兩　同小隊長　堀内伊右衞門

去年關東出張中大川橋にて戰爭之節格別相働候段達　御聽一段之儀　思召候依之爲御褒美被下之

金百兩　非關彌五助隊　第五小隊第六小隊

去年關東出張中大川橋にて戰爭之節格別相働候段一段之儀に付爲御褒美被下之

三月廿七日

一去年關東戰爭之節手負右疵にて相果候者は討死同樣之御取扱相成候事

同月同日

一　堀内伊右衞門隊にて致討死候　亀右衞門從弟　岩吉

關東大川橋にて戰爭之節其方從弟龜右衞門儀致討死候段神妙之至に付其方相續申付格別之譯を以第六等兵卒申付之

和佐類之助隊にて致討死候　宇吉弟　嘉藏

東京大川橋にて戰爭之節其方兄宇吉儀致討死候段神妙之至に付其方幼年には候得共格別之譯を

以第六等卒申付之

同月同日

一

其方儀去年關東出張中不心得之品有之趣相聞に付小隊長 御免銃隊被 仰付候差扣可罷在候

堀内伊右衛門

富永文三郎

田中長兵衛

岡崎於菟三

右同文言銃隊 御免差扣被 仰付之

以下役

原源十郎

林市左衛門

右同文言銃隊 御免押込申付之

彌平次養子 石川小彌太

其方儀關東出張中不心得且不都合之品も有之趣相聞候に付屹度可被 仰付候得共奥羽進擊之節盡力致候廉も有之候に付格別之 御宥恕を以差扣被 仰付之

同月同日

一兵卒にて右同斷に付等級下り候者貳拾九人暇出之者貳拾二人有之候事

中隊長

小　隊　長

去年關東へ出張致陣中身持不宜其上不束之品有之向夫々御咎被　仰付候右等は其方共にて厚く取締可致處其儀無之而已ならす其方共之內にも却て不行狀之筋も有之趣相聞候に付御糺之上屹度可被　仰付候得共此度は御用捨被遊候條以後能相心得可申事

三　輪　忍

去年關東出張中士卒共之願に依り每々過當之金子被下取計候趣右は白井金之助之不行屆より相生し候儀には候得共大隊を總括致し候身分申付振も可有之處無其儀不節制之段不都合に付屹度可被　仰付候得共奥羽進擊之儀に付盡力致し候廉も有之候に付此度は御用捨被遊候條以後屹度相心得可申と之御事候

白井金之助へ申渡書欠帳にて難分

一六月に至り行政官よりも左之通り御賞被　仰出候付七月二日御金跡相續之者へ被下取計龜右衞門初供養等入念可取計旨達す

元堀內伊右衞門隊　龜　右　衞　門

元和佐類之助隊　宇　　　吉

德　川　中　納　言

戊辰之春東方に出兵戰爭之段奇特に被　思召候旨被　仰出候事

但死傷之者へ別紙目錄之通金子下賜候間夫々分配可致事

徴兵歸休及賜金

（己巳六月）[一本ナシ]

金貳百兩

行政官

一明治二巳年四月十日徴兵歸休之者へ軍務官より金円を賜ふ

先般徴兵歸休被　仰付候就ては長々勤勞も有之に付金子若干軍服等被下之候事

四月

軍務官

金七十七兩貳朱　岩谷重次郎初十八人　姓名略

金三百七十七兩[六ヶ月半]　兵士百十六人

金五十四兩　（兵士十八人）[一本ナシ]

總計金五百八兩貳朱

重次郎初十八人は兵隊補備彈藥方分隊半隊小隊等勤月數に應し金員差等あるなり略す

神戸警衛出兵

一明治二巳年四月廿二日神戸表警衛として出兵被　仰出

（徳川中納言）[一本アリ]

豫備兵隊之内精兵三小隊至急神戸表爲警衛出張申付候事

但松平三河守兵隊と交代可致候事

四月

軍務官

明治三年六月七日自今三小隊を以て神戸戍守申付候旨兵部省より被達

但岸和田藩是迄之警衛所請取可申一小隊は六十名の割を以可差出旨達あり

東京御門々警衛御免

一本ナシ（一同年七月三日東京御門々警衛御免被　仰出）

常盤橋御門淺草御門兩國橋柳橋警衛申付置候處被免候事

和歌山藩

但常盤橋御門は福岡藩淺草御門者西條藩と可致交代兩國橋柳橋は警衛自今被廢候事

七月　　軍務官

一明治三年年六月七日神田橋御門兵隊警衛被差免候旨兵部省より被相達

但福岡藩と可致交代旨

國防

國防
國防概略

按に和歌山城郭の固めは御城代之を主管し御留守居番頭本町御門番之頭御本丸番之頭御天守番之頭御天守常番御留守居物頭御留守居番砂之丸番之頭等部下同心を率ひて各所屬の櫓郭門を守り御家老大御番頭御先手物頭亦守る處の城門あり大普請奉行は國中の地理山川要害間道等の事を司り御旗奉行御鎗奉行御具足奉行御留守番御鉄砲奉行塩硝奉行は兵粮塩噌弓銃彈藥刀鎗甲冑旌旗干盾等の准備修治乃至時々新陳交換を擔任し蓄積の粮食兵器は所在の武庫櫓に充滿所謂三年の蓄整然缺くる處なし（弘化三年年七月天守閣雷火之時彈丸庫炎燒す彈鉛溶解して庫形のまゝなる一大鉛塊を造り兩三日間近寄りかたく後一尺角斗りに截斷一ケ月余を費し漸く除去したりと又信著山に在りし時常に鶴の谷より御玄關に出つ道塩庫の下を過くるに石垣の腐蝕露骨を見る是數十百年積蓄の塩氣自然に漏泄せし爲也といへり）殊に　有德大君にはたとへ予が一代たりとも不苦とて軍資金糧穀刀脇指矢玉煙硝梅干田螺の類迄年々數を定め增積を怠るへからすと嚴令し給へり爾來世々愼重を加へられしは無論と雖も治平の世概ね旧貫によりしものか筆記存せされは詳ならす

海陸地形要害言上

將軍修城の銀を賜ふ

而して軍謀軍略に係る國防之事は總して御書物方頭取之所管なりしならん事秘密に屬するを以て知るに由なし唯散見之ものを錄して大略を示す

一初て御入國之時山中驛より山口驛を過させらるゝに道嶮岨にして難所多かりけれは　公も是はと思召す御氣色に見へけれは安藤直次進み出て一旦事あり候時御家を持ち全ふせんは此國に及ふものなし險難此通りなるは帶刀の最希望の處に候と因て海陸地形要害の樣を委しく言上せしにそ公は欣然と勇ましく御進み被遊と（安藤家旧記）

一元和七年　將軍家より銀貳千貫を賜ふ紀府城あさまなる樣に被聞召候間石垣等　思召まゝに御普請可被成旨也御城南の丸繩張は後に藤堂和泉守紀府に見廻に被參たる時帶刀と相談ありしと云々

御譜略

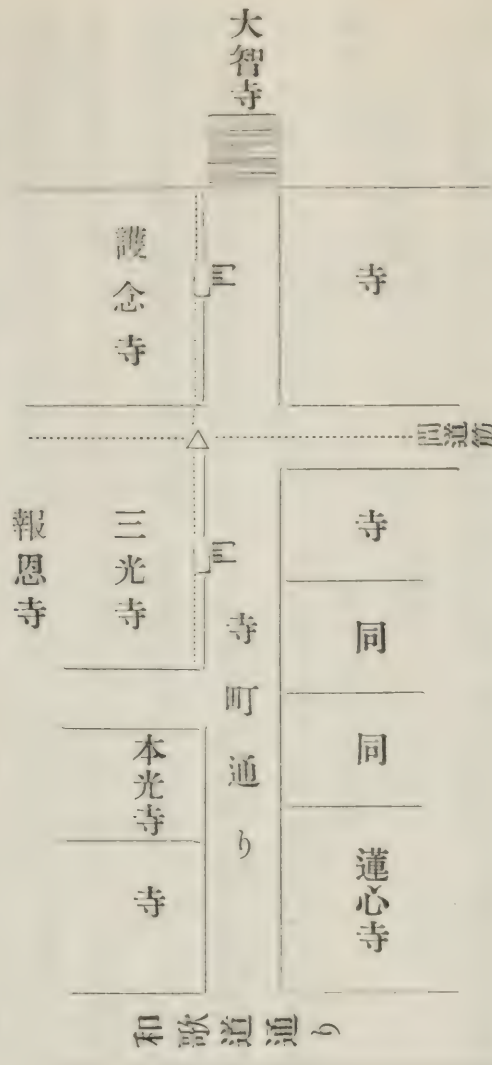
一若山城西南の石垣を御增築（即高石垣の事）御普請之事江戸へ御願ひあり公儀にては御異志もあるへきにやと疑ひ安藤直次を召し下す　賴宣公直次之邸に臨ませられ近頃大儀なからよきに賴也と被仰けれは直次は家來に物を言ひ付るとて其樣なる事を被　仰物かと被申上扱御歸被遊けると早速に駕を出せとてこれに打乘り從者に行く先をも告けす其儘江戸に下り扱被申上けるは今度の御使賴宣卿よりも御城普請の事を　公儀へ御願被遊候處御願の遲滯致しける故帶刀を被遣ける也此度城普請の御願之趣は紀州は一揆所にて御座候故一揆の要害の爲に致さるゝ儀にて毛頭公儀御氣遣被遊候事にてはなく候若又逆心の存立も有之候得は若山にては不仕大坂の城へ取籠て可仕なれは此度の城普請の儀は達てと被申上ける所に事故なく濟て帶刀へ賜り物被　仰しと

云々

井原町大渠を新鑿

一井原町の北より西の街道まで大水道を被　仰付（一に正保中とあり）御普請奉行は加納角兵衛佐野平藏也大方首尾致し候時分御在江戸より宇佐美左助を召し御尋ありけれは左助委細を言上致し候其時被　仰聞候は大水道に付柴薪の舟の運送よくさそ新吹上の上下悦ならん扨汝は獅子といふ獸を知つたるか獅子は百獸の王にて壹度嘷は其聲の聞ゆる處百獸震怖と聞か獅子に勝る猛獸なし然れ共此獅子己か栖家には數千丈の嶮岨に穴を掘て臥すとかや獅子を可咀殺獸外になけれは用心はすましき事なれ共如此天下に聞たる大將も城郭は堅固にするもの也武田信玄は武勇に自慢し甲州に堅固之要害居城なかりしゆへ勝頼代に信長に被取懸一日の防戰不叶山中に落退てやみ〳〵と滅亡せし也北條氏政は勝頼には武勇劣りたれ共に小田原に籠城し秀吉廿六万の大軍を引受四月より七月まて持こたへしは要害の故也然るに家中の奴原の內大納言殿の吹上に堀をほらせ要害をめさるゝは扨は不器量なる大將也大將は城下を出て野合戰にて功を立てこそ可有に二万の大將の身にて敵を城へ引受ては運は被開まじと嘲笑ふ由我は聞し也雲雀めが鶴の心は知まし推參なる今の奴原かなと思召共夫程の事を申も外の奴原の小歌三味線女小姓の踊りのみにかゝりて居るより增と思ふて咎もせぬ也因利制權は兵家の妙所なれは時により敵により軍は定めなき事也と被　仰聞候云々

按するに　高石垣より東堀の止りに不明門といふあり往昔より閉切りなり夫より往還を隔て高石垣の下向ひに竹林あり御留め藪と稱し御趣意ある處とて敢て手さしもならぬ事とす誰いふとなく聞傳ふるに万一之時不明門より之間道也と又不明門の內には隧道の備へありしともいへり是等之事極めて秘密なれは當職之者固より口外する不能推窮したる者も亦なかるへし（齊藤櫻門之話に不明門の內隧道はありし也少しく入て見たれ共闇黑歩すへからすいつれに通する共何の（一本道）（爲）

さいふ事も絶て知る人なかりしさ語れり）
穴太役は總て石垣築造を業さし壹人役にて津村八左衞門之家代々相續す八左衞門か竊かに洩らせしさ云說に不明門より濱中長保寺への抜け道あり即ち岡山よりして寺町通りに至る其証は如圖護念寺三光寺之處……印は歩厚の土塀なれども兩寺之境目△印之處一間半計之間三光寺之境内なるに往古より土塀を許されす手輕き薄板を以左右の土塀に連續外構をなせりさ今に其如く也さすれは間道の用意さして穴太役の秘密にもありしやさ想像せらる

又入口に膾炙する處吹上の新堀は外堀の計畫さして海に迄疏達せらるへきを何等い所故かありて中止に至る故に今に堀留の痕残れりさ蓋し憚り給ふ所ありしにもあらんか彼の寺町通間道より新堀に出海路によらんさの事にてありしやも知るへからす

一宇治の元寺町の御廐前より小笠原與左衞門屋敷迄之土手に並木の松あり元は淺野幸長取建られしか其後御入國已後は彌々高く被築立竹垣を被　仰付犬をも此土手へ不上樣に被　仰付候此土手に

紀州は口々多し

勝野五兵衞防備の內旨を奉す

は　頼宣公御工夫有し處なり江戶にて若山の繪圖を立花右近將監宗茂眞田伊豆守信幸二人の老大將に御見せ被成要害の御異見御尋有ける處に兩人共に此堀端には土手を被成候へと被申上けれは頼宣公聞召我工夫を仕當たりと御滿足ありしと也

一或人紀州は口々多くして其口々へ手當の人數を遣しては御人數不足と申上候へは　頼宣公御笑被成我武備盛なれは百口有ても不苦敵か恐て紀州へ手出は不致武威か衰たれは一口にても防戰成かたし只國中万人を和睦させ武威を丈夫にするが要害の第一也と被　仰ける

一或軍法者御國境に口々多く山途なり此手配りを致し見るに御人數中々足不申と申上候へは　頼宣公能考候奇特に思召との御挨拶にて其後被仰は我武勇の盛なる時は隣國の輩當國へ仕懸候事は思ひもよらす候へは境國の口々多ても氣遣なし唯一國を治る大將は自分の軍勢を丈夫に致し士卒人馬の用意兵粮以下慥に致し隣國に侮られぬ樣に致し候へは口々は如何ほと有ても其恐れなしと被仰ける

以上大君言行錄

一國防之事軍學者たる宇佐美橋爪名取三家の如きも內旨を奉し所謂御趣意と稱し相傳の條ありしならんも固より秘密知るへからす又砲術家勝野五兵衞の先祖平左衞門吉里は　國祖より御城構へ大手本町田井の瀨其他切所々々防禦之方策等內旨を拜命代々一子相傳の秘事とし相承すといふ家藏の御趣意被仰出書といふに

先祖平左衞門は戶田金左衞門へ緣も有之事に付同家へ呼寄候樣被　仰付罷越候儘浪人にて薩州

へ被遣同所秘事捨か（一本また）りの術探索して同所に五ヶ年程罷在歸國之上御秘事出來被仰付御切米
五十石被下置御役被　仰付御城下町々近在迄御秘事御出來

埋め火野雷　野來　矢來　㢊來　馬來

右二文字之内御書物方頭取を司辻と申右より申越候得は仕懸場所相分る等

捨馬來　乱くい　埋火　ひし　小鉄炮　楯
半月　大引　入違　開　車取　全働
包進　軸　屯　吹ヶ垣　和滿離

右火業仕掛之名稱也

備立人用　貝役は山伏へ被　仰付太鼓鐘途中にて手に入候術被　仰付御座候

一俵龍人之儀は敵に取切る中押通之術御使堅め斥候役敵間近へ爲踏込慥成見切爲致及言上候術被
仰付御座候

一想瑞之儀は御意畏り仕方にて拾人罷出九人引壹人殘り候て業仕此儀を以拜領仕候稽又は下民と成
て諸道具は火に入引申候

一治乱其製頭（政府也）司辻（奥掛御用人也）を元とす　其内治は製頭專らに御任せ戰意は司辻に御任せ
君製一同成とも於司辻此意を堅め依て子孫類々たりとも少しも別條なしと被　仰出候

一御城下騷動と見請候はゝ役人中差圖無之とも極御人數通にて一手を以一備を可（一本相）（打）破との御定御
役に不拘（物カ）其人を撰み伺に不及揚取事　御免被成候

右等之記載あり原書甚不文且隱語充字ありて不了多し御秘事々々とは防禦之設計法矢來の文字數種に區別したるは施術法の暗号なるへしやらい。がまり。とは兵學家之通語にて防戰法の代名詞ならん
所記畢竟漠然と雖も當時防禦程度の略を概知せんのみ
一勝野流のみに限らす外十三流の炮術家にも　龍祖の御主意御秘事一子相傳抔唱ふるもの各自に傳へ自負の姿なりしゆへ多少　内旨を奉し計畫の事ありしならん既に佐々木流の如きは稍留流長炮狹間配りの事擔當のよしも聞及へり總して秘密口傳に埋沒し了りたれは今に至て考査の料なし

邊在防備

一邊在國防之事亦所記なしと雖も各郡に六十人者初地士を配置し人馬兵具を蓄へ所謂土着の士たらしめ平素は農事に服し事あるの時は急遽變に走て若山の出兵を待たしむ又根來に根來同心を置き有田日高兩郡勢州川俣等の山阪に山家同心を置き地理通曉内外偵察乃至嚮導に驅使せらるゝものとす此他在方役人在々御仕入方役人二歩口役人の如きも應援の數に充られたるなり　國祖之制定大略如斯と雖も世治平にして國初已來絕て干戈の事なく偶々元祿安永の高野騷動文政の百姓一揆ありしも一時士民の蜂起意とする處にあらされは兵事は殆と忘れたる如し故に世々の記に於ても國防の事見る處なく唯　國祖の遺法を口授の形式のみに傳へし處文久三年に至て初て大和騷動出兵の事あり出兵の部に記する如し

若山城守備

一若山城守衞の職々は左の如にして所管の常備は無論樓櫓多門倉庫に塡充せる弓銃彈藥甲冑旌旗刀鎗干盾兵粮塩噌等一切之兵具粮食を保管修治常に怠らさりし也
　御城代　千二百石高　與力三騎　同心六十人

御留守居番頭　四百石高　同心六十人

御本丸番之頭　二百石高　同　二十人

本町御門番之頭　三百石高　同　二十人

御天守番之頭　二百石高　同　二十人

御留守居物頭　三百石高　同　五十五人

御留守居番　二十石高　同　五人

兩役にて御弓藏　御武具藏　御麥種藏　御馬具藏　御道具藏　御簞藏　御水帳藏等を預る

砂之丸番の頭　五十石高　同心十八人

御天守常番　五十石高

本町御門　本町御門番之頭預

京橋御門　水野土佐守 安藤飛驒守　預

市の橋御門　御先手物頭　預

市中御門　大御番頭　預

北中御門　三浦長門守　預

湊橋御門　久野丹波守　預

廣瀨御門　加納平次右衛門預

三木町御門　御城代　預

岡口御門　御先手物頭　預
同中御門　御留守居番頭預
西丸中御門　御城代　預
追廻し御門　砂の丸番之頭預
西丸外御門　御留守居物頭預

此の外切手御門御長屋御門鶴の谷御門御勘定御門不明御門御臺所前御門中之口番所等詳ならす御本丸御門松の丸御門御天守二の御門は其頭々の守衛なるへし

海防

紀州沿海殆と一百里皆大洋を受く故に海防の事　國祖之御時より最も重きを置かる然れとも海外交通嚴禁之世なれは僅に英吉利和蘭陀の名を聞知るも夢にも見たる者なく海外人といへは唯一と口に毛唐人と通稱せし程之事なれは後世稱する海防の如きと日を同して論すへからす扨其海防といふは先つ左の遠見番所に見張り番人在番狼烟所を設く

海士郡大川浦　加太田倉崎　雜賀崎　同　大崎浦　有田郡宮崎　有田郡御崎
日高郡白崎　口熊野塩の御崎　口熊野朝來歸（番人安藤家より置く）　口熊野瀬戸（田邊與力三十日代り）
同上上野　奥熊野楯ヶ崎　奥熊野九木崎　口熊野太地　田丸田倉崎

津々浦々には鯨舟獵船を準備し若し外國船之駛走漂着を見認むれは其遠見番所にて狼烟を擧け順次受繼て忽ち若山に報す又浦々村々は此合圖に應して地方役人地士帶刀人舟子夫丁直ちに其

處へ馳集り船舶亦輻輳警備をなし若山より有司之出張を待ちて其指揮に從ふの組織とし豫てより何浦事あれは何村何處より地士帶刀人何人船何艘水主何程人夫何百人何處々々へ可馳集との手配りを定め置く之を浦組と稱し年々調査を嚴にし不虞に備へ別に炮壘臺場等之設けありしに非す浦組帳且組織之細則等今傳はらされは詳なるを考へかたし唯二三海防に關する記類を集錄して大概を示す以て時の狀況を察すへし

條々　郡方手鑑記載

一異國之大船參候節は遙の沖に有之內より可相見間新宮へ早々注進可仕則小船を壹貳艘つゝ順々遣し漁船之ごとく仕たはかり寄樣子を見追々注進可申上其內に貳三艘は替る／＼番船と成て彌彼に不見咎樣に仕樣子可申越也若し鉄炮なとはなし近邊へ不被寄時は遠間にても及見之通注進可申事

一右にて組之船ともは勿論其左右之組も異國船之着く浦之近邊へ物陰を取詰寄可伺居見へ渡り之處ならは近所之湊々に船を双へ指圖を可待幷に其續之村にも大船小船ともに其浦へ集り浦切に用意水主船頭之儀は不及言兵粮等迄致支度一左右次第乘出し候樣に仕可罷在事

一日本船にても唐人乘來る歟勿論異國船來候時縦むり申は氣遣仕候とも此方より成程ゆるやかに仕かけ或は商もの或は遊ひものをも遣はし心安逗留致候樣に仕かけ可置其內には注進之御返事可有間御下知を可待磯遠く船をかけ彌氣遣之体見得候はゝ猶以人多不出物陰より伺其內に早船拵置出船致候はゝ後より付させ參り所を可見屆磯傳に參り候得は他之組迄付參他の組之船出候はゝ相渡し候旨慥に申斷可罷歸もし其近所に罷在助を可致又沖へ直に參候得は其浦々より十里十五里或は

二十里にても送り船之通路成候所迄付參り沖へ出候か見屆候て可罷歸事

一漁船にても商船にても若沖中にて不審成舟乘通候を見付候得は壹艘有之時は其船印を上て可付參沖間に罷在船は印を見候はゝ番所へ早々注進可仕候貳艘とも有之候時は壹艘は付參壹艘は早々番處迄注進可致旨常々堅可申付事

一異國船參候時之意得第一あらたてす心安逗留仕樣に仕掛其內に何とそたはかり一人にても陸へ呼上け候樣可仕また可成ならは楫を預り出船不成樣に仕御下知を可待無御下知內に卒爾之働仕間敷事

一ヶ樣之時分浦々之舟集所尤地形によるへしといへとも物蔭にかけ置向へ船數不見樣可仕事

一若彼船より使船なと差越事有之は此方より其使船よりは船少くこきむかひ遠間にて樣子承彌使船におゐては磯近く連來り使を請取扱番船を置漕戻り使之樣子可申達事

一異國之船來り陸へ上り兵粮を取行歟或は在所に到て狼藉をなす時は急に狼烟を上(を)[不明]船の通働押合を掛けて被取間敷也左右之組も聞付次第に可助之又切支丹小勢にて盜取なと致候時は壹組之可成程之儀ならは他之組は近所へ詰かけ居若し不成時之働を可致事

一他の組之もの助に出候時一々入交り不可騷動一組々別に集居其所之ものと申合或は助或は疲ものにかわり是をすくふへし

一船手之ものを兼て申付彼れか船を取候才覺可仕勿論此方之船を遠ふのけ置彼れに被奪申間鋪事

一若彼大勢來要害之所なと取堅候て所之人數にて難叶時は卒爾之働不仕早々注進申上此方之加勢を

可待事

一ヶ様之節は調略之作り文なと郷送りに指越事可有之然間郷繼之者三人より少なく不可出之また庄屋等指圖無之私として半途に次中間敷事

一不審成船來り陸へ上り所之ものをたはかり或は金銀をあたへ候はゝ其金銀を請同心之躰に仕能くもてなし逗留仕候様に仕掛早々新宮へ注進可仕候其上近郷へ通し人を集遣間に番を置にかし申間敷事若氣遣ひ致し掛出し候はゝ御下知なしとも押寄て或は[illegible]或は取捲可置五人三人小舟に乘參候ものたりとも右之心得を以て先和らかにあいしらい留置候て搦捕若右之通に不成時は壹人も不逃様に打留可申事

一不審成船陸へ不上直に乘通候はは早々狼煙を上け順々に心を付浦傳いに送り可届若急にて船數無之時は一艘にても付參り他之組に相渡罷歸候段は右は記通り

附浦々より船數多出候時は此方之船には相しるしを立右之ふねと見分け安き様に可仕幷に狼煙の相圖を兼て定置心得させ可申事

一日本人五十百參（一本ゟ）（り）分はいか様とも所之もの壹組にても可成間もし陸へ上り候得は常々御法度之旨如此番仕候頓て何方へも可送遣間其内相待候こと申聞取卷置注進可仕無理に退き候はゝ勿論打留可申候同は陸へ不止船に置候て四方を堅め陸地無き處へ船數をも出し取卷置注進可致事

一常見馴たるふねにても乘手不審に存候はゝ留置早々注進可仕事

一沖に繫り島なとへ上り休み候におゐては番所之ものは不及言木樵獵師に至る迄常に申付置見出し

次第注進仕湊へ呼よせ番を付不出樣に可仕若油斷致し不見出候はゝ在所之越度たるへき事
一總て人家なき處または船着にても無き浦にふねを掛置候はゝふしんを立船之穿鑿油斷有間敷事
右先年自　公儀被仰出御法度之趣度々申渡候得とも彌詳可存此旨者也
萬治四年五月　日　　三浦長門守
　　　　　　　　　　安藤帶刀
一異國船之事書付別に有注進次第貳つ印也先若山鷲尾御目付へ申遣其上にて早速大庄屋召連彼地へ參り承屆段々若山へ注進可仕事
　但注進次第大庄屋より新宮へも貳つ印也注進可仕事
一筆申入候然は不審成船相見候節注進之儀大島奧は新宮若山へ早々注進可仕候串本より日高和田迄は田邊若山へ注進可致との儀兼々御定之通百姓とも相心得無相違樣に郡奉行衆へ申渡候間各も右之通御心得可有之候爲其如此候以上
二月廿九日　　玉井八大夫
　丹羽七郎兵衞殿
　東德與七兵衞殿
一郡方手鑑に
　浦組人數幷に諸色增減品替帳例年浦方組より出候に付役所元帳直し置右組々帳面若山へ相達す
　原書年月欠記蓋し享保元文前後ならん（一本ナシ郡制歷世郡治大概之部にも揚く）

浦組帳增減

浦々船數米麥等準備

在々鉄炮

一祖公外記に曰く御領分浦々之船數を定其内他國へ廻候聞は別船にて欠を補水主之糧米も用意爲致候樣被　仰出又一には鐵炮廿挺以上玉藥共丈夫に貯農業之間には百姓共々殺生爲致鉄炮達者に相成候者へは御褒美を被下候又村々に麥米雜穀幷草木之根葉海草乾魚等爲貯御家中にも分限に應し知行所へ夫馬を一二疋つゝ爲貸遣候故百姓悅候

一南陽語叢に曰く熊野勢州浦々には夫々人數舟數御定有之舟具共分限に應し常々損失無之樣造作無油斷仕粮米等も入念可申付との思召にて嚴重の御定あり（是浦組御定と言）又常々　御意に工夫は人々の胸中にあり氣根は銘々の養ひに有隨分氣根を出し工夫をこらして一器一物にても世の爲に成事を拵出す心得有へし入用は御藏より可渡遣との思召也依て無益の道具迄も巧作して下々より無遠慮差上たる事多し又兼々山方野方之在々へは鉄炮廿挺以下御免にて玉藥を被下置農事之暇には猪鹿狐狸等可打取との御事也修練者之者へは銀錢被下置候也

一強ち海防のみに非す國內警備の爲め在々地士帶刀人等へ銃炮所持を免せられ常に山野銃獵に服して武事を習はしめ給へり蓋し國初より之法ならん元祿六年紀勢在々地士等所持銃炮の調査を行われたる調書あり詳なるは郡制の部地士錄に記す爰に唯銃炮の總計のみを摘く

三千拾壹挺	おとし鉄炮	三千八百九十三挺	獵師鉄炮
百四十七挺	稽古鉄炮	壹　挺	寄進鉄炮
百五挺	商賣鉄炮	八百五十六挺	取上鉄炮

おとし鉄炮とは猪鹿の防害攘しの義也取上鉄炮とは銃獵禁制場にて密獵乃至鉄炮所持を免さ

鯨船を備へ船軍操錬

有徳公浦組法を御修正

れさる者所持發覺等にて沒收したるものをいふ

一紀州熊野古座浦（一本アリ太地浦）慶長十一年より鯨獵を始む寬文四年より丹漆五彩之塗舟を作り艪八挺立疾走矢の如く常に數百之壯丁を養ひ進退驅引旗（一本ナシ幟）を用ゆ其動作恰も船軍を操練する如く詳なるは郡制物產の條に記する如し蓋し海防の一に備へられしならん大君言行錄に記あり曰く

田邊湯崎の御構所に四五百艘の鯨船を集られ其組其手の相符を定め小旗を銘々思ひ〳〵に拵へ具を以て相圖を立日々夜々に鯨を見度に船をはせ引さなから舟軍に不異此段審に江戸へ聞へ御老中何れも紀州の御城附に向て　大納言殿には湯崎といふ所にて船軍の鍛錬ならしを仕給ふと　上聞に達し候此事如何と被相尋御城附早速御年寄御用人に達し候に二印の御飛脚にて湯崎へ申來りけれは賴宣君御披見に申入此事如何可有之とあり三浦長門守爲時渡邊若狹守直綱一同に兎角鯨船の御遊具を御停止御尤と申上る　賴宣君仰には江戸の注進にて此遊を停止せは是船軍の稽古ならしと可謂停止せすして舟遊して又昔め有らは船軍の稽古にて非すと言譯して濟事也すこしも不可止と被仰ける處に和歌山より加納五郎左衛門參着せしかは江戸よりの旨を被　仰聞けるに曾て御止不可有御止あらは船軍の御ならしを被成たるに成へし不相替可被成と申上候へは　賴宣君の思召と一途にて彌鯨船の御遊ひ有けれは　公儀より何の別條もなかりける

一有德公には特に浦組法を御修正ありて正德之度在中浦村へ　仰出たる由なれとも原文傳わらす唯左之記あり

明德秘書に曰く御領分浦々へ異國船參り候はゝ可追拂若及手向其浦にて手に余り候はゝ隣鄕の浦々へ注進（此注進手札出來候事也）人數を呼寄せ共上彌手に難及候はゝ遠境より人數集候事右同斷その上にて難及候はゝ狼煙を三本上け若山へ暫時の內相達候樣共節御出馬被遊との事有普右趣意にて組々纏挑灯等いろはの印右浦組帳出來村々は男の人數十五歲以上六十歲已下たとへは百人有之村は內五十人出五十人は居殘馬何疋船何艘弓鉄炮鎗長刀有合之武具右浦組帳へ具に記每年改差上候異國船に不限謀反人等急に起候時速に御踏潰可被遊云々

御船手御船頭水主稽古怠り候ては所作あしく成候に付鯨船共五艘勢州松崎にて突方被　仰付候夫々の家職の者の致方と万事の違有之付凡一ヶ年に金四百兩つゝ御償金入候事然れ共其御損を御厭ひ不被遊被　仰付候は艜手の稽古に依て也其後　公儀

御仕入二分口役人浦組に補す

右浦組之制は世々遵奉ありて文化度より邊海詰御仕入方二歩口役人も組入欠員補充等常に調査怠らさりし也即ち左の記あり

一文化八未年三月

御仕入頭取　　二分口奉行

一此度浦組筋御增補被　仰出候に付御仕入佐八二歩口勤人共兩熊野幷田丸領海邊へ相詰候者共浦組御用相勤候筈に候勤方之儀は御代官開合急事之節諸事御代官差圖を受させ可申候云々

一文化七午年二月御仕入方にて侍具足百領を調達兩熊野御代官所へ五十領つゝ差遣し置

一同八未年二月御仕入にて侍具足四十領番具足百領を調達御城御武具藏へ預り　以上は財政御仕入方の部に詳なり

有司へ海防の實備を命す

如此と雖も鎖國之禁嚴にして外船敢て來らされは實際に用ひし事絶てなし唯時として淸國商船熊野浦へ漂着の事あり亦浦組によつて地士等出張警衞をなしたるよし

一牟婁郡口熊野古座組中湊村地士王川玄龍醫師は熊野の地時々異國船漂流人等あるを以て譯官に命せられ世々月俸を賜ふといふ是淸國漂流人等の爲め少しく文字ある者筆談に備ふるの意なるへし

海防議を建白せしむ

一嘉永二年之比より外艦頻りに近海へ出沒同三年六月十一日蘭人加比丹より近來米國艦江戶近海に入り通商を乞ふ企あるよしを告く依て幕府海防の事を諸藩へ令す本藩にては七月十七日を以て左の命あり是殆と海防議起るの嚆矢なり

御勘定奉行
奥　　掛
御書物方頭取

海岸警衞等之品に付從　公邊追々被仰出有之事候　此御方にても兼々厚く御世話振も有之儀に候へ共猶御國初以來守衞向之御制度殊更　有德院樣御厚　思召を以正德の度在中浦村へ委敷被仰出之御趣意且以來も段々守衞御手當向被　仰出有之趣を以て向々へ厚く心得させ臨時の防禦手支不申實用永久御備堅固に相立候樣猶念入可申付との御事

右に付左之職々へ海防之儀に付存念之趣も有之向は無遠慮可申出尤警衞等彌無怠慢相勵非常之心得振行屆可申合樣組支配有之面々は配下の向へも可申聞旨被命

大寄合　大御番頭　御勘定奉行　大組　小普請支配　御先手物頭
御目付　御使番　御勘定吟味役　寄合　御供番　御代官

一嘉永六丑年六月果して亞國軍艦突然浦賀へ入港國書を呈し和親通商の事を逼り明年正月再來を約して去る於是俄然武備海防之論盛に起て四方騷然たり本藩旣に其令ありしも何人も如斯急に迫るを不覺時に海士御代官仁井田源一郞長群は同年九月建議する所ありしに同年十一月御書物方勤務宇佐美三郞兵衞山田九助と共に紀勢海岸巡見を被命同六日出發十二月八日歸着巨細を復命して策を献す議の適否は敢て論するの限りに非され共是に因て略從來の成規慣例を見るへく又時の世況事態考察に足るへきを以て左に輯錄參照に備ふ源一郞是歲十二月十五日海防御用掛りを命せられ

仁井田源一郞海防策

たり

海防議

外寇御備之儀は當時國家第一之御重事に付私共容易に可奉議儀には無御座候へ共承之郡令員海郡支配罷在候儀に付不顧恐愚意之趣無腹藏申上伺試候御國海防御備之儀は　南龍院樣　有德院樣舜恭院樣御三代段々御世話被遊嚴重之御備に相成御座候へ共其節御備之旨趣は邊裔を相伺候邪蘇賊幷諸蕃海賊を防禦之御備に付外海を主とし兩熊野之内木本古座周參見に炮臺を御定候より外寇と申候へは人々唯兩熊野に限候心得相成御座候然る處當時外寇之模樣其比と大に相違仕英夷合衆夷等軍機熟練之强虜

皇國四邊を乘廻近海を測量し我形勢事情を詳察し江戸御膝元へ渡來不法に難題申立候其爲体邊裔伎掠仕之小寇と同樣に可見者に非す其禍心を包藏し大望を覬覦之萠相顯れ有之事に候へは如何成意外之業仕出し候も難計候就而は萬一蒸氣船南海より浪華へ乘附大炮を打掛直に　禁闕を衛候樣之儀御座候へは誠に天下之御一大事と奉存候次に若山近海へ近寄大炮を打掛亂妨等仕候は是亦誠に御一大事と奉存候右兩樣共其御備乍恐未無之樣奉存候若山之御備は大崎雜賀崎松江荒濱等臺を御取立可然哉に奉存候浪華に乘込候は右防禦加太浦友島此究意之御場所と奉存候友島之儀城崎より地島へ其間二十町地方を傳へ廻船此處を通行す右は深山之濱に炮臺を築可然哉に奉存候地島沖島其間十町此處大船通行不相成候嶋淡路國由良と相對大船此處を通行す沖島にて炮臺に可相成場所兼て探索仕見し處嶋之西端嶋尻と申處に嶋尻池と申池有之大旱にも水干不申後は谷開け池

堤は海に臨み長凡二三十間自然之臺場に相成有之此處由良と其間僅に四十町余淡州へ御掛合兩國より炮臺を設候へは實に天險之御固めと奉存候當時諸國防禦之備追々相立候折柄に付淡州にても右等之儀心附候へは何れ此御方へ掛合有之何卒御受に不相成内々此御方より淡州へ御掛合に相成候は御國御備之御手厚き諸大名欽服可仕此今日之御急務と奉存候右御備之場所何れも私支配之地に付日夜心痛仕罷在候儀に御座候

一諸國大名衆には年々軍事調練陣立等有之由何卒於御國も御家中調練は勿論在中にても地士帶刀人共初浦々にて軍事調練被　仰出浦々を固候には農兵之制新に御定可然哉に奉存候

一若山初松坂田邊新宮田丸御備之儀は西洋法を以御増修益嚴重之御備に相成候樣仕度奉存候沿海各郡之御手當は多人數を不用守衛相立候樣仕度奉存候乍恐當時海防御備之制を以相考見候萬一洋虜蒸氣船にて外海内海氣隨に颿廻諸方にて大炮を放臺妨（元ノマヽ）等致候へは一二三之手夫々へ御差向け可相成左候へは若山之騷動は不及申海郡は夫々多人數浦々を相固め陸郡は夫々在夫兵粮等にて御國内一面に騷立其上下疲弊之程恐察仕誠長歎息仕候遠洋諸國干戈打續兵學日新如何成大戰にも大軍を不用唯火器にて道具責に付此方從來之戰法にては唯人命を損する計にて難防儀に先賢段々論究仕殊其鑑は間近く英清合戰之模樣にて明白に御座候何分今日之海防は大炮第一に付守衛振御改め西洋法の如く致し守衛嚴にして上下疲弊せさる此肝要と奉存候西洋諸國之俗此方と大異なり萬事唯利より事を起候事に付熊野之如き邊鄙僻地へ數艘改奇及大戰候儀は決て無之縱令渡來致上陸候ても詰處一時臺防位之事故右邊警には遠方より之集兵にては何れ不足應急と奉存候其守衛には海士

より白子迄之間要地之場所大抵二十〔余〕ヶ所可有御座右要地に炮臺を築大炮を相備諸士之内を右要地へ在住被　仰付堀内主膳仲楠之丞山本才兵衛同様士着にて大炮打方武備修練仕前條申上候農兵を統炮臺を掌猶御仕入口前役人地方手代其外在中出役之輩にも平素炮術稽古武事修練右に差加へ候へは　御城下より多人數御軍勢を不及御差向御國中不及騒立防禦事足可申哉と奉存候

一兩熊野勢州沿海夫々御大夫方御受御坐候哉に候海士有田日高沿海も御受有之可然哉に奉存候殊に海士は江戸表之浦賀に付猶更嚴重に有之度奉存候

一海防之第一は大炮に付大炮御鑄造是亦今日之御急務と奉存候御傳來之御大炮何れも結構之御筒之由相伺候併御筒數少く其上御天守にて入子御筒夥敷燒損候儀に付何卒右燒損候御筒此度は西洋大炮に御鑄造直し猶多分西洋大炮御新造御坐候様仕度奉存候右御入用莫大に付不容易御大造事と奉存候就ては御國政今日之姿其儘にて唯々右之用途耳講求仕候ては所詮十分之御鑄造は乍恐無覺束奉存候何卒此度　公邊より被　仰出候御趣意通五ヶ年之間際立に御儉約被　仰出猶　公邊へも被仰立非常之御業御雄斷に相成候は如何様御大造之御儀に候共不相成と申儀は決て無之奉存候　舜恭院様御在世には御臺所も多殊御高年に被爲在候折柄に付跡切〔候〕御了簡督思召通御評議も難被成御姿誠無據御儀に御座候へとも當時　上には御幼年之御儀は如何体御省略にても聊御嫌疑無之御時節に付何卒御雄斷非常之御業御取計十分に御鑄造被成前條申上候件に御取用之一端にも相成候は上下疲弊之大患を免れ可申哉と奉存候右之通大砲御鑄造武事御調練に相成候へは在中累年之弱込には候へ共私共論厲仕候へは御國中一統御趣意に感激仕若干之大砲下にても鑄造可仕奉存候

浦々之御備へには差掛先木筒にても可然哉に去未年亡父愚意之趣申上儀に御座候へ共木筒之儀は上野九郎左衛門打試候處實用に不相立御備之御間には合不申趣に付何分にも西洋炮御鑄造之儀奉申上候事に御座候

丑九月十八日

仁井田長群

謹上

海士御代官　仁井田源一郎

有日兩熊三勢海防議

私儀蒙　仰去霜月六日出立御書物方宇佐美三郎兵衛山田九助と爲申合紀勢浦組御備且浦々地理形勢見分仕當月八日引取候儀に御座候海士沿海之儀は頃日見分仕愚意相達當時御備向御評議中に付此度は大崎以南有日兩熊野三勢沿海見分取計相互に防禦之品論究仕鄙裏無腹藏奉申上候僭越之忘言實に奉恐入候

一御國領洋路一同三十里海岸屈曲幾致相倍候右防禦誠御大造之御事に御座候へ共海士日高田邊新宮松坂白子之外盡嶮巖峻岸如何成鐵艦にても寄付候は忽破裂し縱熟測量上陸仕候ても鋭閣重關一村一城是長々驅決て不相成實金城之御固と奉存候就ては我南邊急警と申は諸蕃之海賊共不意に乘付一村位を蹈荒し聊之米穀を掠取意之事に付右防禦浦組御備にて御備之大意は相立有之樣奉存候實は御城下近海且畿內海門御大切之御備とは事替り强て不及御配慮儀と奉存候全上下不疲弊嚴重之

豫備此上緊要之地に大炮之御守を御加へ候て御十分と奉存候若山より一二三手御差向之儀は於業三難事有之土地不案内難用立一也嶮遠を馳付難間(二)[にカ]合二なり難澁所へ多人數入込上下疲弊三なり可成丈御代官引受致指揮浦組御備にて防禦相濟若山より御人數不及御差向相濟候樣仕度奉存候
一浦組御備は古之土着農兵之制に御倣候事に候寛政以來文化天保段々厚御世話振有之猶又當年は各郡々令一際手詰仕候に付御定通至極嚴重に相調御座候此上之處廣御仁惠を施し民力を御弛め勇武之風を御勵之地士帶刀人共初へ稽古入用等御下け大砲打方武事出精御備人數等急警の調練仕武卒之業爲心得候は土着農兵之實用相整可申此今日之御急務と奉存候
一海士有田日高御代官見習平常出在不仕候に付地理不案内に御座候へは兩熊見習同樣浦廻り致兼て地理熟量可然奉存候
一固場之儀其邊之要地守衞に付大炮御備可有御座道理に候へは天保度　公邊書上には臺場と相認有之候へ共固場と臺場と一所には難申候元來固場へ多人數相備陣を張人數進退自由に相成其邊諸備を指揮仕候場に候處固場之内湊口出岬嶮狹之地或は負峻嶺俣一方口之地御座候右等之地の敵船潛中に乘込或は上陸等之時固場より臨時防禦之場所と奉存候以前は夷賊共之侵掠は畢竟我隙を伺候事に候へは多人數海岸へ出張形勢を盛に示候へは颺去と之御備振に可有御座候へ共當時洋虜之振合致相違右備模樣にては此方より彼之的を構候に相當り可申若敵船より大砲一發仕候へは鹿金に相成申此度見分仕右樣之場所は夫々替場所申詰候事に御座候
一炮臺之場所當時兩熊野に限り候儀御趣意爾々難辨御座候先恐察仕候處海士有田日高三郡御城下近

海に付御威稜に畏れ夷虜共參ぬと之御決着且は急速之節若山より驅付臨時御取計之儀と伺り候へ共洋虜駈引迅速之事に付臺場も先は善鼎山掛之湊に限り且必用之場所とも不奉存場所も御座候又周參見古座木本三役所に御差置候御筒十匁以上四十八挺右を御定の炮臺ヶ所に配當振存候者も無之御筒數と炮臺ヶ所と其數も不喰合且臺場より三役所入は險路數里を隔打入も若山より參候ては俄之御間には合申間敷右にては先名目而已之御備に相成り元來炮臺場之儀は異船之可乘入地可上陸地には兼て大炮居場所相定置可然奉存候へ共其期に臨機變に應し可申土地柄も御座候へは御筒置場之儀は固場に相定其地理に應し御筒之大小且員數等致配當御差置可然哉に奉存候打(入)[入カ]之儀兼て其地に其人を御定(師)[指カ]南役被差遣打方稽古業合熟練御させ可然哉に奉存候（天保度炮術家を兩熊野へ御遣地士共へ傳授も御坐候得共其節も御出方に抱候被仰付引續稽古願出候者も無之以來相止有之事に候）

此度旧來御定之臺場得失申詰猶又緊要之地兼て臺場に御定置可然處夫々見定丁數之遠近海路之淺深も穿鑿仕候事に御座候

有田より白子迄固場二十(七)[一本ナシ]ヶ所（此度省き可然と申詰候固場を除候數々候）右之内旧來炮臺場定置有之ヶ所新規に相定可然ヶ所固場之外にて舊來御定有之炮臺ヶ所其内御省可然ヶ所又新規相定可然ヶ所都て炮臺場に相定候場所新舊二十五ヶ所一通し固場十九ヶ所合御筒配場所四十四ヶ所に相成候右へ御筒配備振其筋之者と地圖を以熟と申談決定仕候樣仕度奉存候固場之外端浦御備筒之儀は浦組御備之外は上より御下け無之とも御代官より各村を相諭し候は其村柄に應し候守炮夫々自力に鑄造相調可奉存候四十四ヶ所に御配之筒へも(炎)[盡カ]上より御下け無之とも是又下にて若干之大炮は鑄造相

調可奉存候

一猨烟場は以前は注進に候處當時注進は通札に相成猨烟者隣組へ相圖組內之相圖は小相圖を用候等之御制夫々見分取計候處業合至極能相立有之遠見番所も御場所何れも至極宜別に愚意可申上品無御座候

一地士帶刀人共初大庄屋村役人共へ浦組御備に本き候心得振農兵之業合夫々申付武事修業大炮鑄造兵糧買園等論勵仕且急藝之節防禦御手配迄之內夷虜理不盡に付手荒き振舞等に可及哉にも見切候は老若幷女子等不致狼狽樣開場等各村にて兼て定置畢竟一時之塞放不致足留事に付余り遠方に無之近き谷合等可然右引經人等之儀迄夫々申聞置候事に御座候

有田郡海防

一有田郡浦組湯淺宮原兩組也宮原組北湊を固場とす其(他)(地カ)有田川海口にして北之方海士郡椒大崎ヶ濱中に相接し要地と奉存候湯淺組湯淺を固場とす其地若山以南田邊以北繁華之地要地と奉存候椒村廣村並　龍公御趣意有之地と承及且北湊に山本才兵衛を御差置被遊候儀等全要地故之儀と奉恐察候當郡浦組御備至急相整別奇申上品無御座候此上炮臺を廣御殿跡小豆嶋辰之濱に御取立可然哉に奉存候軍事總領之儀は近郡に付其期に臨み御代官駈附可然平常相詰候にも及申間敷と奉存候
大炮鑄造且打手操練等之事は栖原村獨禮格地士菊地絲助引受甚行屆夫々申出之品等至極相詰有之樣奉存候先當郡御手宛之儀は差掛御差支御座有間敷候

日高郡海防

日高郡浦組志賀入山天田南谷四組なり其地理形勢を通考仕候に志賀入山海岸峻巖荒磯南谷海岸大

抵暗礁絶壁差て可豫備土地柄無郡中之要地は日高川海口天田組と奉存候小松原は湯淺氏之城蹟且此邊　龍公之御趣意有之地と相伺至極御最に奉存候右海口嚴重之砲臺御定可然哉に奉存候當郡若山を距事稍遠し御代官兩熊野同樣に相詰可然哉に奉存候郡中固場は六ヶ所之内神谷柏三尾三ヶ所其形勢固場には不宜樣奉存候　神谷柏兩所は由良輪内左右之土岬に付場所狹隘に候右は固場を横濱へ移し一所となし神谷を砲臺之場に定め可然哉に奉存候（神谷柏其間海上僅六七町海深さ十四五間）三尾之地三方負山一方荒磯傳一條路通する耳に候此又和田へ固場を替へ可然哉に奉存候

口熊野海防

口熊野浦組周參見江田古座三組なり三組之地理形勢を相考候に瀨戸周參見大島古座最要地と奉存候周參見に御代官相詰古座に御目付相詰炮臺場を數ヶ所に相定且瀨戸浦　龍公之御趣意有之地と承合候至要地故之儀と恐察仕候浦組に付別に申上候品無御座候（文化度古坐を海防出張所に相定又大嶋奉行等の事御評議御座候へ共當時洋夷之模樣にては強て實務とも奉存候）

當郡砲臺六ヶ所（御筒數中三挺）有之候右之内二ヶ所（御筒數十二挺）を相廢し新に四ヶ所相定可然哉に奉存候勘考之趣夫申上候

一瀨戸二座小名權現宮西裏　此砲臺場所嶮岸荒磯波立候節人行不通候に付馬目谷と申所に所替之儀御聞屆に相成有之候へ共右馬目谷山を負至極之地と共に難申候今少し西の方岬濱と呼候地に相定可然に奉存候又此地北之方田邊之海門にして同領江川と相對其間大灣五六里深處廿尋淺所八尋大船泊繋自由右之處所謂牟婁津是なり要地と奉存候江川と相狹炮臺御設可然哉に奉存候

一周參見浦四ヶ坐小名浪之脇
右炮臺場所山際之磯區域甚狹し大炮打場と不奉存候右は湊之眞正面濱之土手に場所を替可然哉に
奉存候土兵ともの了簡には灣中に乗入さゝる樣に灣之出岬へ相定度申出候右は臨機出張は兎も角も峻嚴絶壁素定之場に無之候
一有田浦二坐小名高見浦
右炮臺場所山を負且在所よりは山越樹木無之むき出し候灰挾之地に候右は浦内谷川之海口之岸へ
所替可然哉に奉存候
一出雲三坐東磯端濱
此炮臺は大島之湊へ乗入候を打留候御備と被伺大嶋之湊は天下廻船之善鼻山に付御最至極之御備
へに候此地大島湊西口にて其海を大口と云大島之内に小名獅子喰鼻と申所と其間海上僅に六七町海深さ三十尋至
極之場所と奉存候併炮臺場所低に過毎々浪に被取候右は今少北之方山麓巾五間余囲に相成自然之
狹間をなし候處に小名を清六ヶ濱といふ移し可然哉に奉存候此御筒居場所寛政調には二ヶ所と有之候當時三ヶ所に相成有之相違之品相糺候處留扣等無之候へ共村中老人の申傳にては文化度相
革候樣相見へ候
一大嶋浦五坐小名大石鍛冶屋敷行者堂惠比壽前
此炮臺は大島湊へ掛け候船を打候御備と被伺候元來大島御備之儀は前條出雲にて西口防き下條に
申上候橋杭にて東口を防くは實用之業合事足り此地之炮臺は御不用之樣に奉存候此臺場五ヶ所之内四番杭木折有之小名大
石と申所は先ヶ成に臺場にも可宜哉にも奉存候へ共其余りの場所は何れも絶嚴を仰き海岸を瞰き且狹路にて打入之出張候事不相成地に御座候
一串本浦七坐皆東濱にあり

一番二番三番四番地之小名を笠嶋と云
五番其地之小名中地と云
六番其地之小名を矢隈と云
七番其地之小名を切立と云
此御備大島浦湊内へ舟掛せんとするを打候御備と被伺候此御備は前條申上候大島御備同樣御不用之樣奉存候　七ヶ所爬列之形勢見掛は嚴重に相見へ候へ共白濱之備實用如何可有御座其上七ヶ所共寛政度迄は笠島に有之處當時東之方切立迄段々に臺場を寄せ候事文化度に可有之哉に山際に相成場所猶更不宜樣奉存候

一橋杭　西向　二色　日置

右四ヶ所は此度新規に申定候炮臺場所御座候先橋杭は大島之東口之防禦無て不叶地と奉存候橋杭より大島迄其間十一二丁　海深さ三十尋　此處にて喰留候へは舊來之大島串本兩所之御備は廢し可然哉に奉存候西向は古座之防禦に候此地古座三尾川西組之海口古座は此邊繁花之地にて何にも炮臺場御定置可然哉に奉存候　古座之地山際地面狹候付固場も西向に相定有之旁臺場も同村に御定め可然哉に奉存候事　二色は有田より優候善臬に付有田に準し候へは御定可被成地と奉存候右は串本之西濱へ御定可然哉に奉存候左候得は串本之御守にも相成候日置は日置川海口にして周參見四番兩組之門戸に付此邊之要地と奉存候右は同浦之内小名廣小路と申邊に御定可然哉に奉存候

奧熊野海防

一奧熊野浦組木本新鹿尾鷲相賀長島五組なり五組之地形を通觀仕候に沿海凡二十里海灣善臬數ヶ所有之其大体を論候へは非常之統治は木本計にては難守樣奉存候以前は尾鷲に御目付所御座候處實

厯度御取拂古座にて口奥御目付を相兼候樣相成候無事之御時は夫々事濟候へ共右は以前に御引戻し尾鷲へ奥御目付御取立可然哉に奉存候 右にては御目付今兩人不被仰付候ては業不相成候當時之御姿にて差掛候御守中見候へは御代官木本役助共兩人當分在番致木本長嶋兩所に相詰當分口奥御目付兩人共詰切奥御目付尾鷲へ相詰可然哉に奉存候 當郡炮臺唯一ヶ所猶新に七ヶ所御定可然哉に奉存候 固場も所替致可然場所四ヶ所御座候其品組にて申上候

一木本組　新鹿組

右兩組平常は一組に御座候へ共場廣之地に付浦組は兩組に相分れ候木本組固場木本浦船無之候へ共北山入鹿兩組且和州北山邊山物仕出し場所にて新宮以東尾鷲以西繁華之地且御代官所之地に付大筒居場を兼て相定置可然哉に奉存候場所之儀は小名地尻と申所之濱可然哉に奉存候新鹿組三灣をなし有之候其一灣を輪内と云灣中九ヶ浦其兩出崎盛松梶賀兩浦を組し固場に御定り候へ共兩所共其地險絶峽隘に付右は固場を賀田へ移し一所となし 三木里も可然哉に候へ共下文兩灣へ遠く相詰地士鉄炮打入等も木本北山入鹿木宮等より出事に候三木里にては何れも不便利に御座候 兩浦を炮臺場に相定可然哉に奉存候 兩浦共間海上相距二十四丁文化度海岸見分之節亡父備此兩所を炮臺場に致可然哉に見立御座候兩所共高岸に付十分之地には無御座候へ共外に（空）〔一本宜〕地無御座候 今一灣は新鹿遊木二ヶ浦之灣也此地和州北山姥ヶ峯通之門戶太古　神武天皇御東征浪華より大和へ御（改）〔攻カ〕入之時賊虜河內之固手强く御兄君御戰死に付南大洋へ御廻り此地より姥ヶ峯通大和へ御（改）〔攻カ〕上被遊候御地と奉存候是又炮臺場を御改置可然哉に奉存候場所之儀は村之西端に（空）〔一本宜〕地御座候今一灣を二木嶋湊と云灣中に三村あり天下之善巣に付御筒居場十（一）〔一本宜〕座御定有之候 其地之小名を宮崎鼻と云室古明神之境內なり

右一番二番居場所山岸に有之其餘海際に有之右之內九番十番十一番は湊口にて浪除石に有之候右

石垣之處至極之御場所と奉存候

一尾鷲組　相賀組

尾鷲組固場行野相賀組固場引本兩所共負山臨海狹隘之地に付固場には不宜候行野は南浦へ引本去古本へ移し可然哉に奉存候尾鷲は郡中第一之繁花之地引本は相賀組之門戸兩所共兼て臺場御定置可然哉に奉存候場所之儀は小山浦海濱に御念入候炮臺御取立に相成候は兩組守衞嚴重に可有御座哉に奉存候（尾鷲海灣之口に鷄頂嶋佐波留島之兩島あり行野と鷄頂嶋との間舟不通行鷄頂島佐波留島共間七十許暗礁有之四百石以上之舟通行不相成小山浦佐波留と相對共間二十六七丁小山浦と須賀利之鼻と共間僅六七丁）

九木須賀利兩浦各別に區域をなし家居宜郡中之善縣に候へ共兩所共海門狹候に付異船乘込候は燒打之致方如何体にも策可有御座兼て郡令素講致置可然奉存候

一長嶋組

當組沿海九ヶ浦之内長嶋浦之儀は和勢南邊之門戸尾鷲以東志州境迄之內之繁花之地要地と奉存候二郷に御番所を御置且非常御備には　龍公御趣意有之地と承及誠欽本之まゝ仕候事に御座候當時固場に御定有之候へ共引本同樣之地に付固場は二郷に移し候方可然哉に奉存候炮臺場所之儀も兼て湊之西之方小名松崎と申所高岸に御座候へ共向之岸（小名棚木鼻と云）と其間僅六丁（海深さ十二尋）此處に御定置可然哉に奉存候

田丸領海防

一田丸領浦方唯慥柄組なり組內場廣に付組之儀は一番二番三番三組とす海岸之模樣兩熊野同樣にて盡峻巖嶮絕に候へ共地理長嶋と一般にて一坂を踰候へ共勢地之沃野に御座候へは海防には要地と

奉存候萬一洋房伊勢内海之福地を目掛鳥羽海より乘込候は東之方は寥地より上陸西之方は當地より上陸し椅角之勢をなし可申哉も難計候此地沿海十有余里海岸屈曲余其大形四灣なり村落大邑は無之候へ共作間に山海之稼を業と致候に付家居相應宜四灣之内古和神前慥柄五ヶ所村柄最宜候故に古和慥柄五ヶ所を三組之固場に相定志州堺には五ヶ所番相詰邊蘂には浦組之上にも田丸侯之御持場に相成候儀等御備至極嚴重に存奉候併當時田丸御代官田丸五十人物頭田丸御目付異船渡來之節は山田援兵に相成御座候段如何に御座候右御代官御目付御援兵御免に相成可然奉存候又兼て四灣に炮臺之場所御定置御座候彌嚴重に奉存候右は近年田丸侯三ヶ所御定（神前鼻 礫田曾）田丸御代官（小杉仙右衛門）私に六ヶ所取極（古和元神前贄阿曾利二ヶ所相賀）合九ヶ所御座候一々見分仕候處愚意には神前之鼻（出岬に付嶮絶且つ地下より遠し）阿曾里小名しうか（人家無之大洋に相對嶮山を負候小濱）相賀浦小名には（絶壁高岸且地下より遠し）之三ヶ所を省き其余六ヶ所にて四灣之御備相立候樣奉存候右六ヶ所之品左に申上候

一古和浦小名御濱　此備新桑等四ヶ村之灣之備に相成候御濱は高嚴に付右は新桑領之内小名ほてみと申所へ相定可然哉に奉存候（灣渡り二丁海深九間）

一神前浦小名元神前　此備神前等四ヶ村之灣之備に相成候場所至極之樣に奉存候（灣渡り三町海深九間）

一贄浦小名贄崎　阿曾利小名しゝらみ　此備慥柄等八ヶ村之灣之備に相成候しゝらみ至極之場所に可有御座候贄崎は地下より遠く且嶮難之地に付右は小名曾根鼻と云所可然哉奉存候高岸に候へ共外に宜敷地無御座候（贄浦阿曾里其間海上二十余町深十二三尋）

一礫　田曾　此備五ヶ所等十三ヶ村之灣之備に相成候兩所共至極之場所に可有御座併田曾之方遠

見番所邊にては山巓に付村内に相極候方可然哉に奉存候 礫田曾兩所海深十五六間

松坂領白子領海防

一松坂白子海濱之儀は內海之事に付以前は浦組御備無之天保度初て御備相立候松坂領浦組東岸江新松ヶ嶋兩組也白子領浦組小船江平野園應寺白子四組なり右沿海津城を挾て白砂長濱凡九里余海上より望候へは只一條之松林聊も他之異觀なし荷船可泊繋之地津次に松崎浦耳也浦組御備向に付別に懸意無御座候へ共遺漏之樣奉存候儀は松坂諸有司は松坂城且市中之御備に付松坂領海防唯松坂御代官而已に候右は松坂領沿海挾候て御代官一人にて守衛事足可申哉には候へ共同斷は今一人助役御遣置可然哉に奉存候白子領には白子御代官白子五十人物頭白子御目付異船渡來之節山田援兵一之手に相成白子海防後段々相成有之候同領には白子御殿有之且津領を隔一志郡有之儀右は御代官御目付山田援兵御免に相成猶其上にも今一人御代官助役御遣置可然哉に奉存候扨炮臺之儀は遠淺之事に付格別之大炮等御備には及申間敷候へ共他領入更之地御外見も有之儀兼て臺場之處御定置可然哉奉存候場所之儀は何れも先固場可然西黑部にては櫛田川西堤海口三十町沖海深十二間計大口にては小名三十松三十町沖海深十間松崎にては南堤角三十町沖海深六間余星合笠松兩所之內幷白塚大別保にては皆固場濱三十町沖海深十間白子にては寺家村堺堤出岬角三十町沖海深六間余可然奉存候右之通定置候ても沙濱之儀淺深無常候へは於業は臨機可取計と奉存候北長太村之儀他領之中へ一村飛地之事に付大筒居場等も相定置可然哉に候へ共當濱之儀殊之外遠淺に付三十町沖海深僅五六間余右等御備には及申間敷奉存候

田丸白子兩所御代官御目付山田援兵御免に就ては右援兵兩所五十人物頭許に相成候右は御書物

方了簡之品宇佐美三郎兵衛山田九助より直に可申上候

嘉永六年癸丑十二月

仁井田源一郎

海防雜策

此稚策去秋異船渡來之後存附候件々に御座候當正月相認見候處唐船事　公邊巡見衆の事與熊野の事等にて奔走に取紛れ其邊相成御座候處此度海防筋猶御尋に付最早跡に相成候儀も御座候得共舊藁之儘上呈仕候愚衷の程御笑覽被爲成下候はヽ難有仕合奉存候以上

七月廿五日

去甲寅之歲亞墨利加軍艦江戸內海に乘入又下田に渡來魯西亞軍艦長崎に渡來又浪華に碇泊又佛良察等下田に渡來其難題申立輕蔑之爲体實に國家之患と奉存候詩緯權度災曰戊午革運辛酉革命甲子次辛酉一元之始王者改代之際會所謂鼎新之義右を　神武天皇紀に相考候に　天皇甲寅之歲兵を日向に起し舟師東上し戊午之歲浪華に至り夫より熊野に抵り大和に攻上り長髓彥を平け給ふ革運之時に當り辛酉之歲大位に即き元年となし給ふ革命之時に當る甲子之歲　皇祖天神を祭り天下之政を一新し給ふ革政之時に當る去年甲寅之歲即天皇兵を日向に起し給ふ年に當る今年より四年目革運之厄七年目革命之厄十年目革政之厄に當る（緯書は先儒之論も有之候へ共上世之書には相違なし確書たき事に御座候　皇國人希世之吉凶總て此を神武以來）と申當時之時運斯如御時に當り緯書之厄災に出合候事大時と奉存候猶歷代を通考仕候に馬子殺　帝聖德太子起佛法之時　天智帝中興之時桓武帝延（曆カ）（歷）之時寬平延喜之政　後三條帝白河帝院中之政鎌倉三

將軍時　後醍醐中興之政義滿將軍之南北合一信長將軍之數與元和大平皆此運に當る延喜之朝には三善淸行辛酉革命之議を上に菅相左遷之時也村上帝之朝には天文博士賀茂保憲甲子革令議を上る將門偃反謀反伏誅之後なり當時天下之大厄に致際會候事所謂天仁之時にて天下緒厲萬事を沒却し大戒嚴すへき時と奉存候去に秋海防にて愚之趣申上候處夫々御用ひに相成難有仕合奉存候就ては猶又愚意之趣大小思附次第一つ書に仕申上試候

一弘安度北條宇宙無敵と稱する蒙古之使節を由比之濱に被伐棄其か猛威天下之人をして皆奮起扼腕して立しむ人事如此伊勢之神風ある所以なり當時水老公異論御排却蠻夷防禦之御業多幾之御苦心被遊候處讒によりて御退隱自から敗軍之將と被仰候處時變推移り　上様を御輔翼御深遠之御廟算天下大小名初御下知を欽仰申上候折柄滊波烈風魯夷之軍艦を沈沒し弘安神風と一般之事天人合一之機實に天意神意と奉存候此　御方様には乍恐　御幼君之御儀御兩卿御初め幼君を奉輔翼　御三家御一体之大綱を御維持　公邊を御補佐諸大名之模範に被爲成候御苦心之程萬々奉恐察候就ては諸府諸局夫々事を執行候職は縱小吏たり共其業は同樣にて何も人物を御選み其任に堪候人を御用被遊其職々之者一心に忠勤仕　御兩卿御初之思召を能く奉行仕候是今日此　御方様にて天意神意を敬奉仕儀と奉存候

一私儀海岸防禦御用筋相畏寸功無之誠に恐縮仕候自今急務軍艦御製造舟軍調練是第一と奉存候其業中々數年を重不申候はては不調迂濶之至に候へ共夷狄防禦之業此より外無之と奉存候洋夷焚夷之策先輩段々論有之候へ共當時之姿にて大洋に出鬪戰し又海岸に上陸させす必勝之儀何れも先無覺

束と奉存候愚意には海岸之御備は唯一通に致御決心之處は海濱之人をして家居を打棄遠立退せ今之海岸浦方之地を野原と見なし嚴重之御備を海岸より跡へ退け海岸上陸之處を必戰場合と御定候防禦此必勝之御守衛歟と奉存候此處厚御勘考御座候樣仕度奉存候

一海防にて莫大之御出箇司農府必至と困窮此上生財之業別に妙策も無之實に慨歎申上候事に御座候何れも功利之業は樣々名目替候とも畢竟聚斂事にて失人心之第一一切御取上無く何分今一際嚴敷御儉約被　仰出候より外無他事と奉存候海防御用凌方之儀何れも非常之御雄斷無之ては所詮筋不相立と奉存候右は五ヶ年之間御務半減之制被　仰出可然哉に奉存候御國御收納大數正米二十九万（分カ）貳石（寛政戌より未迄十年平し）　內御家中俸祿二十九万六千石右を引本計御藏入三万六千石外に諸納八品二(万)茶口（米淨置米糯）（藏米補貸利米小物成米御家中免過米御普請役米）　九万二千石上の御藏入高合十二万八千石右上之御藏入高と御家中俸祿高とを中分仕候へ共上は六万四千石御家中は十二万八千石也右を合十九万貳千石也五ヶ年にて正米九十六万石に相成申候上下一致に右を以武備に相用候如何なる御事にても相調可申哉と奉存候

本文之趣御時勢難相成儀に御座候は貴年は御儉約之儀今一際嚴敷被　仰出候樣仕度奉存候御儀式之事先暫御止衣服も御役人向初重役迚も肩衣御止三日之肩衣も御止綿服紬之外御禁し嫁入聟等文化度御定に復し背御定候者屹と科御申付倡妓之禁を御弛なし都て公私虛飾形容事例格に不拘外見をも不恥當分一切相省き至誠至信を以て上下互に感奮して何事も實用を主にし專一に武事に身を入候樣仕度奉存候也

一畿內海口友島御備之儀は加太之瀨戶は猶良々嚴重之御備相立候は片打にても可然（藻崎御台場御入用積一万五千兩右は御不）

用に被成右御入用を以て大炮御鑄造に相成候樣藻崎に是非御臺場御出來立候事
に候は同所砂濱之處に御役に相成候ても可宜何れにも山を切には不及と奉存候　又鐵鎖にて絶切候ても可然中戸も保
古良に嚴重之御備相立候歟又鐵鎖にて絶切可然西之戸は淡州と申合嚴重之御備は何れ大艦御製造
無之ては臺場而已にては防禦不成と奉存候（大谷之御臺場を廢し淡嶋之神幸所へ移し田倉御臺場も神幸所より出張に致し藻江之御臺場も廢し可然奉存候）又（一本和歌）若山之
御守は湊之御備と雜賀崎大島之御備嚴重に相立其上和歌之戸に大艦御備候て是又防禦事是可申奉
存候右之通畿内海口若山海口に力を專にし兩所御備嚴重に相成候は其余之御備は唯其地に上陸さ
せぬ御守に付炮も格別大炮に不及御入數も減し大抵に被成可然哉に奉存候左候は御入用も相輕可
申奉存候

一海防御備御國中沿海一□（欠字）に候へ共海士は近海に付八大夫方之御持場出來候儀緩急之勢には御座候
へ共萬々一有田を乘取られ候は藤白峯通より以南有田兩熊之道絶候姿右は比井御崎邊に嚴重之御
臺場築立是を御城下海面之大門に被成先達て差出候海防儀に申上候日高郡濱濤邊に嚴重之御備を
相立（平常御代官相詰）有田郡廣小豆島に御臺場を築當時は大夫方の御持場加太を主にして大川田倉に至外濱
を主にして磯合に至川口主にして古川口に至雜賀嶋を主にして洲先より毛見に至田野を主にして
塩津椒に至有田郡に御一人日高郡に御一人凡御七人猶其上に海上御遊軍兩大夫方經御備にて御防
禦御嚴重と奉存候當時之御備忘に愚意申上候儀恐入候へ共國家之御一大事にて不包申上候事

一武備之第一兵糧にあり當時米價引下け候儀は諸大名御旗本諸藩家中一体之困窮にて一年之蓄を得
不致其上　公邊御世話振にて豪商共私（一本貴）（賣）の（一本アリ）（候）者を嚴重御制道有之故と奉存候米價高直にては窮
民難儀に候とも下直にては士農一統難儀に御座候今當時之姿た百目内外至極と奉存候直段之下直

を幸に一年之御蓄御買入に相成候樣仕度奉存候此儀は御勝手御六ッケ敷節迂遠成限りに候へ共萬一凶年等には米價俄に躍踊仕候へは是非共無據右等御世話被成候事に御座候へは（去る(巳)〔一本丑〕年高直に付上下一統買圍被仰出候事）唯今下直を幸に凶年と見て買入候樣御家中にても一年之飯料一時に買入させ在町も村役人丁役に申付一年之飯料を見詰身元に應し買圍之儀嚴重に命を御下し夫々買入米相改凶年之御取扱に相成候樣下直米買入候へは跡は高價に相成候は自然之勢に候縱令萬一高價に不相成とも上下一体に飯米有之此武備之第一と奉存候高價に成買圍被　仰出候へは誠之不都合之至りと奉存候

一兩熊野勢州御備之儀は有田日高御備相立候上は猶又勘考振も可有御座哉に候へ共當時之處にて先達申上候海防議の外に先差掛可申上品無御座候

一去年魯西亞渡來に付御人數御差向に相成御國中上下之費弊先達申上候通に付向後之處申上之通成丈御人數御差向に不相成浦組農兵にて防禦相立候儀御勘考振も御座候樣仕度奉存候何れにも浦組農兵を强兵に仕る事炮術調練素搆第一に付私とも十分奮勵は仕候へ共農民共之儀に付所詮自力計にては不致長久多少御出備無之ては實々之業不相立と奉存候

一海岸御用にて乘船之多分船氣有之甚敷致吐血候御家中は不及申在中農兵之者舟上風波になれ候儀此調練之一と奉存候又非常之節雇人足賃錢高價右は嚴重町方へ御下知惡弊御革可然哉と奉存候又御舟手雇舟手御作方御普請方雇人足非常之節無支候間兼て其品申極有之樣致度候事

一浦組出入之儀銘々得道具を持駈集り地士帶刀人引纏御代官指揮之防禦之業相働候事に御座候へ共固場諸人足諸雜用にも遣候事に候然に一概に共卒と而已心得居り候人も有之又心入を人足と心得

地士帶刀人を人足廻し之樣に心得紛れ候人も有之又御代官を唯兵糧方と而已心得居り郡奉行を相兼候儀を不相辨人も有之樣に奉存候地士帶刀人鉄炮打人等炮術調練近日相初候積に候就ては心入之內にて得手之藝有之者を選立防禦之手組勘考可仕奉存候事

一御國中皮田之奴浴太平之御恩澤追々繁榮生產豐に相暮し家居等美麗に相構萬金之富を成し候奴も有之其部兩熊野にて皮田村落凡五十余ヶ所御座候右奴此迄　上之御金御用立等之御用相勤候事無之右は當時海防御手宛之折柄彼奴迚冥加不相辨儀は有御座間敷彼奴等之內身元宜者取調鹽硝造り土幷皮類冥加爲差上候は彼奴等金銀自然融通可仕哉に奉存候他國にては皮田之寺異宗も有哉に候得共御國內皮田不殘門徒宗に付上より彼之金銀融通之道御附不被成唯々彼を度外禽視被成置候は彼之金銀詰番本願寺へ被引上可申哉に致愚意候

一大炮鑄造之儀諸部にて地士帶刀人身元之者共へ私鑄之儀申論度勘考罷在候へ共御用立日錢等被仰出候折柄に付強て押付難申論候當時武事御勵し之時に付在中にても有志之翟農事之暇炮術等心掛帶刀等望候者多少有之事に御座候然る處當時以金銀帶刀等御免之儀御停止に相成御正論に御座候へ共自今之御時節平常無事之時とも違候事に付大炮鑄造國家之御武備を助候者共格別に御褒賞御品付等被遣候は追々鑄造可仕奉存候

安政二年乙卯正月　　仁井田源一郎謹上

一嘉永六丑年十一月十五日執政久野丹波守渡邊主水初御用人御書物方頭取御勘定奉行御目付御勘定吟味役御作事奉行御普請奉行奥御右筆御勘定組頭學習館督學御代官御書物方勤御鉄炮奉行御作事

海岸防禦
御用掛

海岸防禦持場

久野丹波守勢州領分持場

見廻役御徒目付組頭等廿三人海岸防禦御用掛り被　仰付内三名は十二月十五日拜命なり
江戸にては十月五日以來御勘定奉行御用人御勘定組頭御勘定御勝手方同樣に拜命爾後江紀共樞要の職拜任の者は人撰を以該係職を拜する事通例となれり

一嘉永七寅年正月廿五日左之通御家老へ被命
異國船渡來之節海岸防禦持場

和歌邊	三浦長門守		久野丹波守
加太邊	菊の間席詰 水野丹後守	松江邊	金森孫右衛門
荒濱邊	岡野平太夫	大崎邊	戸田金左衛門
日方邊	加納平治右衛門	塩津邊	佐野伊左衛門

右兩人は閏七月廿五日に被　仰付

翌安政二卯年九月に至り各自變更あり水野多門朝比奈舍人は和歌邊山高左近は塩津邊伊達源左衛門日高邊警衛に成りたり

一嘉永七寅年二月晦日久野丹波守領分勢州海岸持場之儀左之通り丹波守へ達す
勢州田丸領奥熊野錦浦より志州境迄之海岸十一里余之所非常之節是迄持場に有之候處近來異國船之模樣も有之右數里之場所人數引足かね時に臨み混雜も可致哉に付以來毛柄組三組之內一組丈け一年之持場に相成候樣との品御談之趣評議之上及取計候處右は先規よりの持場には有之候得共內存之趣無余儀次第に付向後右三組之內三番組海岸一手之持場に相心得万一之節浦組人數

等諸事申合行屆致指揮彌無油斷防禦取計候樣との御沙汰に候事
万一之節差掛り竹木等伐取らせ且出船之都合も可有之に付右之趣田丸御代官へ心得させ之儀
御勘定奉行へ申聞有之事
右は十一里余之海岸田丸詰家來人數にては防禦行屆間敷万一之節手拔有之ては不相濟且又非常之節白子領及山田奉行支配所へ家來差出之儀も時に臨み人數引足不申何と歟取扱方有之間敷哉將又若山表家來を勢州へ後詰可差出時は出馬も可致心得其砌人數不足も難計に付大御番頭一人幷一組物頭一人一組共拜借致し度旨書付を以談出依て御書物方頭取へ評議遂させ江戸表へ伺濟之上取計相濟本記之如しといふ

中軍船製造

一嘉永七寅年八月廿五日於御仕入方中軍船壹艘製造之事を御勘定奉行へ達す
去年公邊より大船製造御免被　仰出此御方にも大船製造可被成候へ共不容易御出方に付先中軍船一艘を製造軍艦に候へ共平日は御仕入方仕出之產物類積入運漕に用ひ又海防一廉之御備に可成製造費は御仕入方にて取計可申旨御仕入頭取への達しあり
翌安政二卯年九月小浦惣內同年十二月夏目源二郎へも御軍艦製造御用御仕入頭取申談勤むへき旨達しあり

若山近海へ異國船渡來

一同年九月十六日若山近海へ異國船渡來に付即刻大御番頭初役々雜賀崎へ出張警衛す
大御番頭一人　大御番四十人　同心二十人（一本ナシ 御先手物頭一人同心二十人）
寄合組頭一人　寄合四人　御弓役弟子十三人

大筒方弟子二十八人　　　　炮術家弟子三十六人
御鎗役弟子十六人　　　　　御目付御使番一人つゝ

一三浦長門守よりも一の手二の手人數繰出し加太浦は水野丹後守人數等固す

一十九日大坂よりの注進に該異國船天保山沖へ繋りたる旨申來る依て俄に村上與兵衞大寄合大御番頭組中召連れ小普請支配小普請之面々御書物方頭取御先手物頭御目付等爲加勢大坂へ出張す右は魯西亞船一二艘大坂へ乘入らんとして通行したる也去年亞國軍艦浦賀へ入湊以來天下騷然人心恂々之折柄突然異形之大艦日高沖に顯れたりと雜賀崎沖稼漁夫の注進に打驚き遽に警固人數の繰出し兵器武具の運搬上を下へと動搖隨て流言浮說百出今にも戰爭に至らんかと市中は家財を持運ひ老幼は立退かすといふ有樣にて既に若山城天主閣の白壁は異船より砲擊の好標的なれば黑幕を以て覆ひかくさんと云說さへ起り後に迄一奇談として傳へし程なれば其狼狽亦（押）して知るべし魯艦は十七日加太沖繋り夫より大坂へ入港十月五日退帆事鎭りたる也此件の事は昭德公の世記に詳なり爰に略す

一同年九月廿三日御勘定奉行町奉行御目付へ此後若異船渡來の時は應接之上可爲乘留兼て勘考致し其節に至り差圖及ふへき旨又儒者督學初丸山健齋へは應接可致と命せられたり
從來漢人朝鮮人等へは漢學者接し筆談を試し事あるより歐米人にも此筆法を用ひんとせしか元より洋學者なく通詞譯官もなけれは勢ひ不得止とはいへとも迂遠之程度量り知るへし丸山健齋は蘭醫の稱ありたれとも洋語歐文に通せしに非す飜譯書學に止りし也

初て友ヶ嶋の常備を置く

一同年十一月十日初て友ヶ嶋奉行御目付御番等を置き島中に在番せしむ

友ヶ嶋は攝海之咽喉海防之要地警備嚴重の急務なるは時の一問題たる折柄魯艦突然大坂へ入港の事あり彌以忽にすへからす炮台新築等の議あつて則奉行兩人に番士二組同心五十人つゝを屬せしめ御目付兩人醫師を置かる奉行は壹人つゝ加田へ交代在勤其他は一同島中に移住在番す京都今出川邸の官房を移して其役宅に充られたり（圖末に掲く）奉行初の職制章程役料等は職制之部に詳なれは爰に略す而して該奉行初は（去年）[一本ナシ]六月土州大夫の件にて嚴罰せられたる權職又は不行跡或は醫員家業不精等にて一旦嚴譴を蒙りたる者のみ撰に當り内十人は江戸常府之者とす友ヶ島は加太浦より海上僅に一里許の孤島と雖往昔より人跡絶へ惡獸毒蛇の巣窟と唱へ魔所と懼れて誰一人到る者なきの處なれは刑余の人を以英斷を行われしは時に取ての政略なるべし

海防造船に付日錢

一同月廿日海防之爲大船製造に付紀勢在町へ日錢積金を賦課して費用を徴集す

異國船近海へ入航に付海防之爲大船製造之儀　公儀より嚴令之處頻年國費多端加之魯艦入港に係るの濫費亦巨大を極むるの際該製造之費支へ難き旨を以て不得止紀勢在町寺社に至る迄男女人別五ヶ年間日々積金をなし上納すへしと一般へ布令す事は當時の世記に詳なり

在町一日一人壹文つゝを積ましめ大社大寺等は賦課最過多なり時人之を日錢と唱へ大に人心を失ひ物情恟々世評紛々たり事遂に果さすして万延元申年七月に至り收むる處悉く還付せらる大船亦製造の事なし

紀州西田浦海防

一嘉永七寅年十二月廿八日紀州西田浦邊海防之事　幕府より被達

紀伊殿領分紀州西田浦邊は大坂湊之要所に付兼々被仰立も有之候通右最寄要害之場所へ臺場等御新築防禦筋之儀今一際手厚に御世話有之候樣可被成候松平阿波守領分淡路島由良港幷岩屋邊松平兵部大輔領分播州明石邊も同樣之場所に付臺場取建防禦筋之儀厚被　仰出候に付右之趣可被申上候

友ヶ島砲臺築造

一安政二卯年五月廿五日友ヶ島砲臺築造を大砲家佐々木浦右衞門一手に被命

右に付同島地理を撰定砲台築造及ひ流儀秘術之大砲を設置し防禦嚴重之法を可立旨浦右衞門へ達し尙伴頭稽古料被下之菅野直右衞門へ補助を命せらる此比は百目玉以上を大筒と唱へ最大のものも漸く一貫目の鐵炮に過きす且浦右衞門(不學)(一本ナシ)海岸臺場築造之法等絕て知る處に非す時の情況想ふへし

バッテイラ二十艘新造

一安政三辰年八月二日紀州加太浦備船としてバッテイラ形二十艘新製之儀幕府より被達

紀州加太浦淡州由良湊之儀は大坂湊之海門要所に付防禦筋之儀兼て被仰出も有之臺場等御取建警衞向夫々御世話有之趣に候處友ヶ島之內沖之島より由良湊大本松(邊)(ニカ)迄は海面場廣に付大炮玉利無之場所之由にも相聞候に付此度大坂表爲御備製造被　仰付候蘭名バッテイラ形御船に倣ひ備船凡二十艘程も製造被致大砲等据付被相備置候樣可被成候尤御備船之內壹艘當地にて製造之上大砲等据付追て大坂表へ相廻し其余は右御船形に倣ひ於彼地町奉行引請製造被　仰付候事に候間委細之儀は大坂町奉行へ御承合被成候樣可被申上候松平阿波守へも備船製造之儀相達候間可被得其意候

信嘗て子爵長岡護美氏に聞く處あり氏は熊本細川家の支流なり嘉永癸丑亞船浦賀へ渡來之時細川家は浦賀邊之守衛を被命て千百の兵員を派出し海防に備ふ同藩は從來水練堪能之士多きを以特に撰拔隊を組織各自鑿を携へて潛水該軍艦の船底に穴を鑿ち沈沒せしめんとの謀略をなしたり是實事也と舊幕府史談會に於て一場之昔語りをなせり林子平が海國兵談に喋々せしも概ね此類にしてバッテイラ船に大砲を備へ何千百噸といへる山の如き巨艦に當らんとするも無理ならす當時の海防たる想ふへし

友ヶ島防禦の勅命

一文久二戌年十二月十八日朝廷直接　勅書を下し賜ひ紀州海岸就中友ヶ島防禦肝要之場所之趣防禦之筋心得可有之　思召候得共今度更被　仰下候心得方幷手配等精忠之人躰早々上京委細言上可有之旨被　仰出

右に付十二月廿九日御家老を以癸丑外夷渡來以後友ヶ島初防禦一際手配候得共何分手廣にて行屆兼候場所も有之處近比攘夷御一决にも開候付尚以防禦嚴重に可仕と御請書を捧けられたり

久野丹波守へ海防の勅命

一文久三亥年二月　朝廷より久野丹波守へ海防之儀を被　仰出

久　野　丹　波　守

蠻夷之儀深憂且誠忠報國之志願之由神妙　思召候斯御時節總て海岸之備可有之候得共紀淡邊就中樞要之場所嚴整可爲專務候先比渡邊主水正以下三人上京之節申渡有之候得共各一致猶精々爲國家盡力可有之御沙汰候事

如何なれは此事ありしといふに伊達五郎横井鋏叟國事を患へて脫藩京都に走り薩長土三藩の

將軍友ヶ島御巡覽

海防守備充實の勅命

加太浦へ監察使參向

有志に就き國政改革密訴の事を謀る其周旋により中川（宮）[一本ナシ]の密旨を得て江戸に下り薩藩岩下佐次右衛門に依る佐次右衛門之を越前春嶽侯に介す五郎等依て水野土佐守專横暴戾安藤飛驒守亦之を助く國政改革せさるへからす國事を委すへき人材は久野丹波守岡野平太夫水野多門三人のみと訴ふ此比諸藩士脫走國政改革を唱へ攘夷を喋々するは世の流行なるに紀州は是迄一人他藩之有志と交り國事に鞅掌之者なく腰拔之如く見做されたる折柄なれは該二人は春嶽侯乃至三藩之徒頗る歡迎有志家と見做され（言）[一本是]亦採用遂に本記の　勅命あるに至る時に春嶽侯は御政事總裁職なれは幕府よりも丹波守へ國政改革海岸防禦之事等命せられたり

一文久三亥年四月廿九日　將軍家攝海々防之形勢御巡視に付順動丸へ御乘艦紀淡海峽より友ヶ島御巡覽として加太浦へ御上陸あり　君上同所にて御奉迎御對顏あらせらる

一文久三亥年五月　勅書を以て海防守備充實すへき旨被　仰出

紀伊中納言

自國海岸之儀は咽喉要衝之地に候間防禦筋兼て　御沙汰も有之追々可相整候得共尙又精々盡力守備充實可有之被　仰出候事

一同年七月廿日監察使東園中將殿紀州加太浦へ到着　君上御出會之處左之　勅諚を渡さる

紀伊國加太浦は南海緊要之地に有之候間猶更兵備嚴重に致夷艦渡來候は無猶豫可掃攘被　仰出候事

本年五月十日長州は赤間關通航之外國船を突然炮擊攘夷之實行を舉けたりと云よりして京都之攘

夷論徒之氣焔猛烈を極め頻りに　勅諚をふり廻し外國船と見れは有無をいわす掃攘せよと諸家の
墓場を脅迫す又幕府よりは外夷拒絶は當時横濱にて談判中にて未だ手切に不至然るに猥りに砲撃
は國辱を可取以之外之次第決て麁忽之擧動不可有と嚴重に布令あり然るに東國は長州初浮浪之暴
徒多人數引卒し來り加太砲台に臨む折しも洋艦の能航を認めけれはいざ　勅命を奉すべし斷行せ
さるは違　勅なるやと親から砲身に打胯り暴威狂犬の如く我有司等持てあまし止なく目當違ひに
發砲して漸く其場を濟せしと也該艦實は日本艦にて有しとて永く和歌山にての一笑談に遺れり

非常相圖定

慶應元丑年閏五月布告

一非常相圖之儀向後左之通相定候事

非常相圖

御領分海陸等へ賊徒襲來の儀抔有之　御城下へも相廻り候節急速御人數寄相圖の儀於　御小天
守早太鼓打續て岡山幷本町にて早鐘を撞せ候等候事

當月廿日より本文之通に候事

一右相圖聞付次第出發具足下にて銘々得武具は勿論腰兵粮幷糒等用意致し出張所は御近火御定の
振を以夫々役々の固場所へ相詰時宜に寄一の火請大御番頭は支配引纒塩屋村塩硝御藏邊へ相詰
二の火請大御番頭は支配引纒め雲蓋院へ相詰非常請小普請支配は一組配下引纒傳法御藏邊へ相
詰嚴重に相固候事

一御門請御年寄は夫々の請場所へ御手勢にて相固時宜に寄御人數配當の上押出し候儀も可有之事

京都今出川の藩邸建物を友ヶ嶋奉行初の官舍に移築の圖　總坪數七百九十五坪程

一說に今出川邸は空邸にて建物なしと云者あれとも蓋し友ヶ島へ移築後空邸になりしならんか

●此色土間、

友ヶ嶋海底測量図

一御城代大寄合初諸頭々は　御城へ相詰居時宜に寄出張の儀相達候はゝ支配一組且同心等引纒速に押し出可申事

一諸藝術者は習武場中夫々の稽古場へ相揃射藝門弟は堂形へ集可申事

但諸藝師家は肝煎伴頭一兩人同伴　御城へ出居可申事

一出張先は勿論御人數集之場所にても時宜に寄兵粮焚出し相渡候筈候事

一相圖の早鐘岡山本町兩所にて撞出し候と外々寺院にても同樣早鐘受續せ候筈之事

一右相圖にて浦組備の輩兼て定の受場所へ相詰嚴重に固居可申事

但時宜に寄　御城下へ繰込候儀も可有之事

慶應元丑年十月二十五日

瀧畑村へ柵門新設

一此度瀧畑村へ新規御出來相成候柵門明六半時より小門開暮六時限〆切出入共姓名承屆鑑札相改候上通行の筈尤年寄衆は開門御役人向重役以上は片扉開右以下は小門より出入之筈候事

但牛馬幷高荷等小門通行難出來分は片扉開候筈

右瀧畑村は大坂街道紀泉の境に在り關門は境橋の西川岸數歩の處に新設す大和騷擾以來浮浪の徒横行世上物騷により如件

賊船とみれば速に可打碎御沙汰

慶應四辰年二月六日於京都軍務掛りを以て被　仰出

苫ヶ島臺場之儀海門第一之要地に付一入嚴重致手當賊船と見受候はゝ速に打碎可申　御沙汰の旨被　仰出（一本アリ）（但賊船とは旧幕府軍艦等を云ひし也）

南紀徳川史巻之百十九

臣　堀内信　編

軍制第六

軍制改革　一

銃隊編成

嘉永癸丑亞國軍艦渡來以來は　幕府初諸藩に於ても高嶋流下曾根流抔唱ふる西洋式銃隊（操練）［一本兵を］開始す御家に在ては水野土佐守熱心に奬勵專ら下曾根流を用ひ江紀練兵を勵みたるは學制武術之部に記する如し然れ共元來の軍役は其儘にて職名職掌も皆其まゝなれは如何に西洋式練兵を督勵なす共職掌外の課役稽古を勸誘せらるゝ如くに思ひ兎角に不平不滿の色あつて服せす征長出陣に當り旗指物無用の雜人等こそ省略すれ大體は從來御定の軍役を用られし故に番頭物頭初甲冑に身を堅め麾を揮て組子同心を指揮先鋒銃戰刀槍之に續て接戰をなす事恰も元和大阪陣の如くならんと想像出陣せしに豈計らん甲冑は無上の厄介物となり刀槍又毫も用をなさす之に反し賊は筒袖細袴身輕に出立猿猴の如くに山谷を跋涉出沒自在而かも毎戰必す炮擊に限れり爰に先見あつて利便を得しは幕府陸軍の步兵隊のみ斯る實況を眼前に目擊の結果舊法は到底用をなさゝるものとの事上下擧て自悟自覺に至り軍制の改革最早一日も猶豫すへからさる場合となり御出征中なから於若山銃隊編成を布告せらる實は事既に遲しと雖も勢ひ止むを得さりし也

宇都宮三郎か口述經歷談に紀州兵制改革の事を遊説盡力せし趣を詳記す少しく齟齬の点あるへしといへとも事實は全く相違なき事にて既に此の刺激ありしに加へ實地の戰況と機運投合して改革の擧行われしならん時の情態を詳悉せん爲め全文を次に揭く

三郎此頃鑛之進と稱す尾藩の人少壯泰西の學を修め理化學に達す背て西洋砲術修業の爲め他國行きを請願之處許されさるより意を決して藩を脫走浪人となり四方に流偶其内水野土佐守新宮にて西洋形帆前船丹鶴丸製造の失敗を救護したる緣故を以て暫く籍を同藩中に置けり後幕府の開成所調役に雇仕大に用ひらる幕府再三直參に召さんとすれ共辭して就かす長州御親征の時も特別の閣議を以て水野大炊頭家臣の名義にて御供を被命大阪へ出張といふ事歷談

○御親發の御供を仰付けられ大阪に居ると紀州公か總督て旗を立て鎗火繩筒等を持たせ陣羽織を着なとして和流の陣立法を以て大人數大阪に繰込んで來たそこて將軍か大阪の講武所て其行軍を上覽に成つたかさて和流の軍法て調練したのて陸軍の將校は之を見て大に困つた紀州家の事たから叱言も言へす併しなから是ては不安心といふので

信曰く本藩にては水野土佐守執權の時安政二卯年御家中西洋流調練修業を壓制的に嚴令し若山和流砲術家の面々を江戸に下し下曾根金三郎に入門を命す爾來江紀共西洋式を盛んに擧行ゲーウエール銃鑵打を用ひ御出陣三軍部署にも西洋銃隊從軍せり然れ共土州大夫貶黜の後は西洋銃隊督勵も嚴ならす左なきたに一般の好まさるに加へ元來の軍法は古式に準據所謂軍學者なる者軍師に當り武官の番士等は刀槍接戰の覺悟にて從軍又ゲーウエール銃も實は物の用

にたらさる稽古筒にひとしきものにて有しかは幕府の將校不安心に思ひしは無理ならぬ事也

平岡越中守（歩兵頭後に御勘定奉行維新後準藏と稱す）か一寸と來て呉れと云ふので往くと紀州公か今度和流の軍法を以て出陣せられたか甚た不安心に思ふお前は紀州に緣故かあるか工夫はなからうかといふ相談てあつた夫れは工夫の無いても無い但自分一人て脊負ふと云ふことは出來ないどんな事か起つても必す貴方て後援をして下さるならは遣つて見やうどんな後援てもするから遣れるたけ遣つて見て呉れといふので夫から自分は水野大炊頭（紀州家の御家老）の所に往つて今度紀州家は和流て御出陣に成つたか何れは何ういふ譯かと尋ねた其時水野は實に仕樣かないので己れも旗を立て火繩筒を持て來て居るか到底役に立ぬから內密ミニーを六百挺持つて來た併し表面は旗を立て火繩筒を持つて來た譯たと云ふ事てあつたどうか夫れを改正する事は出來まいかと云ふた自分は役目か上過きて自分の方からは何とも云ひ出されぬ必す下より申出す樣にすれは素より自分は承知た奥御右筆に田中善藏（後に暗殺されたる人）と云ふものかある是れは忠臣て御爲になると思へは何ても遣る併し儒者てなか／＼頑固なもので飽くまて自分の意見を立てる此人一人たに道理か解れは改正か出來る上の方はどうてもなるか下から勸めて來なれは事は成らない夫故先つ此田中の處へ家臣の細井八左（用人）を連れて往て漸々に說いて見て呉れといふのてあつた

夫れから二人て田中の處へ往つた細井か此男は兵學の心得もあり西洋の事も砲術の事も心得て居たから御話相手にして下されと大炊頭よりの詞てあると紹介した田中氏は大に重く取扱て機嫌か宜しい夫から每晩話に往く中に其項万國公法か始めて來てまた大阪に一冊しか無いそれは

漢文てあつたそれを持て田中に見せた其前から色々西洋の話はしてあるも福澤の西洋事情のまた出版にならない前の寫本抔を見せたさうして先方は漢文學者此方は無學たから聞に行く万國公法抔は自分には解らぬかとんな事か書て有るかと申たら田中か彼れは實に大著述た驚き入つたものた日本なとは耻入つた事た豪いものた福澤の西洋事情も見た西洋は感心なものたといふ事になつて最う充分に此方の物になつて來た

そこて火繩筒なとは雨降りには不可ミニーと云ふ小銃かあつて其小銃は(巢)〔本ノマヽ〕中筋か有て彈丸か長くて空氣を摠み拔て往た樣な仕掛て遠方に達して命中も好い實際は夫れでなければ戰は出來ぬ左樣か夫ては夫にしやう横濱に在るから幾らでも買うかよい無ければ公儀の彈薬方に澤山あるから之を拜借しても宜いと此方は後援かあるからとんな事ても言はれる〔平岡越中守か申た後援の内意は恐らくは重なる將官等の協議の上ならん〕扨こそ遂々ミニーを買ふ事に成た又陣營も敵と距離の遠い間は舍營と云つて人家に陣を設けるか是は大將と士卒と別の家に在て危いそこて敵間か少し近くなると幕營と云てテントを張て大將と士卒と連絡のつく樣に陣營を作るもつと近くなると露營と云て陣取た儘雨にも露にも濡れて居るのた先つ第一にテントと云ふものを拵へなければいかぬ夫は早速拵へたい殊に紀州公は總督て是から戰さをするに就ては少しても好くしたいと思つている場合たから總ての事か忽ちに行われる都合て調練の稽古陸軍方へ御頼みになれは幾らても來て敎へて呉れると云ふと早速それも願ひたいといふので多勢の下士官か往つて新式の調練を敎へ何百人と云ふ人を仕立たそこて大方改正か出來た

信案に本記多勢の士官か往き新式調練を教授さいふは下記慶應二年八月布告而講武所教授方堀岩太郎櫻井六十郎野邊建之亟等御雇に成りし事を指すなるへし

處て自分は一度紀州に往きたいと田中にいふた夫れは往つて貰ひたいと云ふ事てそれかより紀州樣か宇都宮鑛之進を暫時紀州に拜借致したいと云願書を御直に御老中に御渡しに成たすると御老中から彼の者は御用か有て御願は相濟みかたい此段を申上る樣にと紀州の御家老に達した然るに此事を陸軍奉行始め少しも知らなかつた全く御老中の手限りて取扱たと云ふ事か分つたそこてさうした事たらうと內々聞て見ると今度は同人か紀州へ往けは再ひ歸るまいと云考て紀州公の御願を許さなかつたと云事か知れた其譯は前々申した通り伯耆守殿より精巧の火藥試製の事を自分か依賴されて居つた故てあらうと推察して此事を奧御醫師の竹內醫仙院松本良順の兩人に話しすると兩人か伯耆守殿の旅宿に往つて宇都宮を紀州へ御貸しに成る方か宜しいと慫に說き勸めたのてさうゆふ譯なれは最う一度御願に成る樣にといふ事て紀州此度は御家老よりから再ひ御願ひか出ると忽に濟んて紀州に往く事に成たそこて田中に申には今度か紀州に往くに就ては名目は紀州の產物を見に往くと云事に致し到る處有志者は何れも出て質問せよと云ふ事を達して置て貰ひたい最ふ一つは水野大炊頭の家臣たから紀州樣に御目通りは出來ない筈たか歸坂したら必す拜謁を御許しになる事御褒美は一切下さらぬ事若し御褒美を下さると慾て往つた樣て行はれか惡いから御料理位て御金は一切下さらぬ事又紀州に往く旅費も公儀より下されて居る費用てゆくから紀州家から旅費を被下に及はぬ何んても人は一文にも成ない事をするのか一番行

われ易いと云つた處か田中は委細承知した夫から水野に往つて斯ふ云事にして來たか自分は一文もないどうかして貰ひたいと云ふと水野は金五十兩を出して之を持て往て來て吳れと託したいよ〳〵大阪を出發し紀三井寺の在る所名草郡とか云ふ處に往つて產物は附けたりたか何か其類の話をしさて紀州樣は總督公方樣は紀州家出の御方てあつて同國人は大さう尊敬して居るからそこて公方樣はまた御年も往かせられぬに今度の事件には御心痛も一方ならす爲めに御不例てあらせらるゝのて御醫師抔も心配して居る誠に恐入つたことたといふと聞て居るものか皆落涙をした其時自分も思はす落涙しました漸々話を進めて自分も德川家の下に屬いて先祖代々御厚恩を受けて居るから德川家の御爲に一命を棄るは當(前)[然カ]の事と思ふて居る貴所方も德川の下に立て先祖代々安樂に生活して居る二百何十年の御恩澤を思へは德川家の御爲に骨を折ると云ふ覺悟をしては如何た平素は勉强をして自分の稼業を勤めなければならぬか德川家の一大事の秋には皆死を以て御奉公をしては如何といふと御尤千万御役に立ぬか不及なから一命を棄て盡したいと云ふそこて最う一つ話か有紀州樣は五十何万石と云ふ大層な御高か有て御金も澤山有りそうに見へるか何々もありはしない御家來を大勢御養ひに成て御用途か多いからお前達か今度兵隊に成るにしても紀州樣から金を出すといふ事は到底出來ない夫故德川家の御爲に盡さうと云ふ精神なれは自費てしたら宜からう鉄炮も軍用金も自分て出し戰さに出て歸つて來ても別段に御褒美には及はぬと云ふ事て遣れは此上はない而して若い者は申に不及爺さんても婆さんても毎日自分の稼業に精を出して日か暮れたら繩の一束も綯い草鞋の一足も拵へて上の御費用

を一錢も願はないて衆一同擧て遣れは大した者たと云ふとそれは遣りませうと云て一同自費て兵となる事を承知した

○夫から直に和歌山に往つた和歌山には學習館といふ學校かある其學習館の講釋の濟んた後に出て話をして吳れろと御家老より申て參つたそれから同館に往くと御家老か四人正面に座を構へて居る右側には万石以上菊の間の人か三人左側には大御番頭御目付等か着席し其中央に自分を入れた其後には儒者か十人斗り控へ其後に有志の人か三百人程居る其處て自分は西洋の兵法を說き和流は到底今日の役に立ぬといふた

○水野多門と云ふ極西洋嫌ひの人か自分か十匁筒五十挺注文して置いたか今御話を窺ふとそれは廢めにしてミニーにしやうと言つた此頃丁度大阪の有樣は櫛の齒を挽くか如く每日注進か有て人心か昂て居つた時てもあり西洋嫌ひの水野多門迄かミニーにしやうと言出した故他の人も皆之に賛成した（信按に水野多門は此時學習館奉行也）そこて尙話すには名草郡に往つた處か自費を以て兵になりたいと云つて居つたか彼等かもし願ひ出たら御採用になる樣にしたい勿論只敎師を送つて敎へるたけて費用は先方か出す事に成つて居ると云つた夫れは好い事たと賛成されて夫から有田日高熊野勢州松坂白子の方迄今迄の樣に巡廻をして貰ひたいと云ふ事て有つた

○岩橋轍助（同姓謹次郎氏の親父）の弟か儒者の中に居つたか其處に出て先刻から色々兵法の事に就て御話を伺ひ至極御尤と思ふか孫子抔は役に立たぬものかといふたいや夫は役に立ない事はない結構な書物てある併しあゝ言ふ種類のものは西洋にも大將達の著書か澤山にある是は先つ將師學と云ふ

樣なものに屬して居る元來西洋の兵學は幾つにも區別してあつて城を築くには築城學かあり馬を飼養するには其方法の學かあり又砲術抔といふ學問も亦別れてある將校の讀む將帥學と云ふ樣なのは成るへく廣く目を通して考へなければならない尙其上に孫子の樣なものを讀んだら尙更結構故自分は誠に好い書物と思ふと言つたそれて岩橋も頗る納得した先つ滯りなく濟んで其日は宿に歸ると今般和歌山表へ相越し諸事御都合宜しく候に付御褒美として銀五枚を下さるといふ辭令を以て目錄之通下された

○其處て中口周平村瀨薰と云ふ二人の醫師か（元より知人）あつたか兩人共に和歌山に滯在して居つて兩人共に心配して宇都宮か學習館に往つてとんな樣子て有たかと彼方此方聞ひて歩行き其の内にも中口か某儒者の處に行て今日の學習館の話は何ういふ事てあつたかと聞くと彼は何たか小僧の樣なまた若い奴て（三十四五位）其小僧か一人來たのに大藩の者か言籠められたと有つては不都合たから己れは風邪て氣分か惡かつたか推して出掛たか然しあゝ深切て叱言のいひ樣もない何ても德川氏の爲なら生命も惜しまぬと云ふ有樣て叱言もなかつたと云つた又村瀨は外の喧しさうな人の處に往て聞いたか今日の人は始から終りまて議論をする處にとんと憎い處かなかつた所謂あれは君子の弁と云ふもので他邦に使ひして君命を辱めすといふはあゝ言ふ人の事たらうと云つて褒めた

○先つ何處に往ても評判か好から斯ふ云處に長く居ると種々の人か出て來て終には酷い目に遇ふかも知れぬから寧今夜立つた方か宜からうと直く立たうと出掛ると果して岩橋（孫子の事ないふ人）か一人儒

者の仲間を連れて旅宿まで附て來て夜の明ける迄此人達と議論を致した

信曰く中口周平は舍密學をなす水野大夫の臣也村瀬黨は少壯江戸に來て伊東玄朴の塾に入り蘭學を修めたり

○此旅宿は和歌浦の法福寺といふ寺てあつた此寺の住職北畠道龍といふは前日學習館に有志の一人として出て居つて必つ自分の寺に一泊して呉れいと云ふ事て參つたか玄關に百目筒か十挺許り其横の欄下に十匁筒か二三十挺飾てあつた（此人は後に藝州にて一方の大將と成て大に戰た人である）又久野丹波守（御家老）にも出立の時一寸遇つたか有田の郷士某（後大參事）か承知をすれは何事ても行はれる自分から手紙を遣つて置くから其人に會つて話をするかよいと云ふ事てあつた夫から往て其人（此人は學者）に會ひ先つ產物の話を始めそれから名草郡て話した通りの事を申た其時公方樣と云ひさへすれは必す膝に手を附いて愼て聞いて居る他の話になると膝に手を置いて聞く誠に謹直な人て此人も亦同意した今日は實に德川氏の危い時てあるから德川氏の爲に盡さなけれは成らぬと云つて此處ても自費て兵隊を造る事に決した

○夫から日高口熊野奥熊野勢州の松坂白子迄に都合五十五組を皆遊說した處か悉く同意して自費て兵隊になると云ふ事に成た而してそれ等か追々右の趣を願出たさて紀州家ては大阪て養成した調練の教師を九十人許り各地へ送つて教授した一大隊或は一小隊と云ふ樣に各組に兵隊か出來る事に爲つた（此遊說晝夜二十日）先つ自分の望みも足りたから又東海道を經て大阪に歸つた處か紀州公は既に藝州へ御出陣になつた後てあつたから晝夜兼行（駕籠）藝州に往つた自分か兵制の事に就き意見を述へた事は多く用ひられ他人の手を借らす自分一人にて僅か三ヶ月內外に成就した然し此

間は晝夜此事にのみ掛り切てあつた而して紀州はついに全國皆兵となりさあと云へは出る事か
出來る様に成つた以下畧す

鐵之進藝州に着後十一日目に拜謁を許され御前に出紀州巡廻の次第を悉く言上凡二時間計兼て田
中善藏と約束の通り御本陣にて御料理を被下たり此時の君公は即今日の　茂承侯也との記有

慶應二寅年六月廿七日於若山布告

一追々西洋銃隊相開け候付ては御軍制銃隊に無之候ては難相成との儀は追々御世話振も有之候へ共
兎角不服之筋多候處此度藝州にて合戰之節敵方は大小砲にて打立味方には大小炮少く殺手之筋多
く二三丁も向より打立候に付味方進軍難相成容易手を束ね居却て銃手動之節障りに相成候由既に
此御方御先手戰爭之節も右同様に有之候付殺手隊の面々自得致し夫々手銃拜借申出御貸渡相成候
實地右之通りに付てはいつれにも一等銃隊に不相成候半ては難相成事に付一等銃隊に相成候様被
遊度　思召之旨年寄衆被　御聞候事

按に征長戰端は當年六月八日幕府の軍艦防州大嶋郡久賀村砲擊に開始同十四日井伊榊原の軍防州境に敗北之と入替り水野大炊
頭大野村に進軍數回之戰爭をなすされは戰況の注進日々若山へ達する車輪の歯を挽く如し加之前記宇都宮鐵之進の遊説あり旁
遂に此布告あるに至り是より先西洋銃隊行われ從軍も尠からすと雖も本來の軍制改まらす番士等從來の頑習銃隊は同心輕輩の
所作刀槍の接戰こそ已れか本分也との氣風を脫せす殊に西洋といへは穢らはしと蔑視の者も多かりし也征長の戰況續々江戸へ
も達したるより後援として江戸の士類一隊を募り御用人引率出張す此時信か兄皆川三郎助も撰に加わり甲冑指物を携へ行かん
とす信堅く其不可を止むと雖も一行皆然りとて肯せす必定厄介物となるの笑止とよといひしか歸來の談に悉く大敗に遺棄して
出陣せしと語り一笑を吃せし事あり時の情態察すへき也

一慶應二寅年八月十二日於若山布告

一別紙之通り從　公邊被　仰出候間　御手前にても右に準御編制に相成候筈候間右御趣意銘々篤と相心得可申旨年寄衆被　仰聞候事

本文御編制振之儀は追て相達候筈

別紙

此度銃隊御組立相成右銃隊の儀は向々元身分は其儘居置にて諸向併合隊伍に編制相成總稱遊擊隊と唱へ候樣被　仰出尤身分に付御用向は本組頭々にて取扱候樣可被致候

右に付布衣以上之者も布衣已下之場所へ被仰付儀も可有之其外右に準し可被仰付候間其段兼て向々へ可被達置候

右は御書院番頭御小姓組番頭新御番頭御徒士頭小十人頭へ之達面にて同役々の內六名遊擊隊指揮被　仰付たり

慶應二年八月十七日於若山同

一別紙之通從　公邊被　仰出候間　御手前にても右被　仰出之御趣意に相成候樣相辨居今日にも出張等有之節は從者等召連振之儀兼て勘考致し置候樣年寄衆被　仰聞候事

別紙

此度一橋中納言殿爲御名代御出陣被成被召連之万石已下之分不殘銃隊に御組立相成戰士は單身にて銃隊之外無用之雜人從者等總て相省候樣被　仰出候就ては万石以上御供之面々も右に倣ひ古今形勢之異同厚相考實備に不涉分は悉く相省候樣被　仰出候委細之儀は掛り大目付御目付可

被承合候

一右御召連に相成候分は身分之高下之無差別單身獨步之心得にて從者之儀も銃手に可相成見込之分は格別其余無用之雜人は一切召連申間敷候尤慶安度之御軍役之御定に不拘實用專一に可被相心得旨被　仰出候

慶應二寅年八月十九日於若山布告

一昔之合戰は重に鈒鎗を相用ひ候故軍勢之多少によりて勝敗を決し候得共近頃は鉄炮之取合に相成候故軍勢之多少に不寄して武器之手輕く便利なるによりて勝敗相分り候事現に今度防長御征伐御手初之御勝利も御軍勢之勇氣に可有之は勿論に候へ共ミニヘールと申鉄炮之助けなきにしもあらす右鉄炮之儀は玉延ひ別て宜しく至極便利之品に候譬は十丁玉延之鉄炮と五丁玉延ひ之鉄炮と打合候節は五丁之方如何成勇者にても所詮勝利には不相成儀明白之事候依て向後專らミニヘールを御用ひ可被遊御趣意に有之且は　御留守を相伺ひ何時賊徒不意に推寄候も難計油斷致間敷御時勢に付在町心得振宜敷者右ミニヘール如何樣にも都合致し成丈け買入夫々手許へ所持いたし候樣可心掛候(一本ナシ)(左候はゞ)御國恩相辨候儀　上にも深く御滿足可被遊間此段厚く下々迄不洩樣可申聞との御沙汰に候事

慶應二寅年八月於若山布告

一西洋銃隊之儀於　公邊格別御世話振も被爲在付ては今度一橋中納言樣爲　御名代御出發之御軍備も銃隊に被　仰出候　御手前にても銃隊之儀は專御世話も有之御軍制之儀御改革被遊候筈に有之

就ては三兵調練之儀尙此上盛に御取立有之等に付　公邊講武所敎授方堀岩太郞櫻井六十郞野邊建之丞御雇に相成候事故銃隊調練之儀一統彌相勵時機に達候樣心掛可申旨年寄衆被　仰聞候事

本文敎授方御雇に相成候付ては稽古之節々かさつヶ間敷儀無之樣禮節を相守可申候

右御雇之三名は幕府之奥詰衆にて講武所出役にて堀岩太郞は千五百石高櫻井六十郞は大御番三百石高野邊建之丞は小十人格といふ三名は若山に來り湊片原長覺寺に寓居岡山操練所に於て英式銃隊を敎授す

按に若山にも從來西洋銃隊訓練を心得たる者無きには非す然れ共悉く征長に從軍僅に殘れるは堀場精一郞抔一二人而かも若年未熟の徒のみ該宇都宮鑛之進か田中善藏へ勸誘內話の件もあれは旁於大阪　幕府へ請求本記の三名を雇聘ありし也

慶應二寅年十月廿六日於若山布告

一御出陣御供銃隊之面々幷此表にて御組立相成候筋は向後左之通相唱候等候事

陸軍方　大隊　　同　礮隊　　同　併合隊

同　新成隊　　同　步兵隊

按に九月四日征長御陣拂にて六日大阪へ御着艦十月三日に御歸國也依て藝州にて組織之隊さ合併此令あり編成の組織等詳ならす礮隊併合新成隊等之隊名爾後見る處なし蓋し一時之編成に止り頓て改正ありしならん

慶應二寅年十月廿六日於若山布告

一銃隊追々御世話振被爲在候に付學習館操練所西松原和歌道限り柵出來右柵內にて銃隊稽古近日より相初候等候間右稽古中柵內往來不相成尤稽古無之節は是迄之通往來不苦事

是迄學習館下堂形にて操練の所狹隘により追廻し馬場目鏡池邊總体の松樹を伐採池を埋め堂形

と共に一面之操練所に構へたるなり

慶應二寅年十二月五日於若山

一従來之武職冗官を全廢し上下之士卒壯年兵役に可堪者を以て銃隊を編成兵制全く一變せらる事は職制之部に詳記の如し內軍制に關する大略左之如し

新たに大隊長を被置十大隊を編成每隊中隊長小隊長を被命大隊長は資格御役人に准し御門々々制止をなす其拜任左之如し

第一大隊長　森　藏人

第二大隊長　大崎金十郎

此隊は無足子弟を以て編成す

第三大隊長　薗田彥太郎

第五大隊長　金森震太郎

第九大隊長　井關彌五助

第十大隊長　三輪三右衛門

大隊長　松平　八輔

同　下條伊兵衛

同　海野九郎助

同　佐野良之助

松平八輔以下四名は第四第六第七第八之四大隊たるへしと雖も隊芳今詳ならす毎隊之中小隊長八名も詳ならす第九第十の二大隊は專ら兵卒則ち伊賀以下同心御中間乃至地士等之農兵を以組織といふ維新後關東先鋒二之手及ひ奥羽へ出兵被命たるは即ち此二大隊也と

一隊中諸士名義は向後左之如く可認旨を布告す

何之誰隊何之間席　　何之誰

慶應三卯年正月廿五日

一兵卒身分左之通等級相立各給扶持取極候事

第一等兵卒	切米八石	二人扶持
第二等同	同　七石	同
第三等同	同　六石	同
第四等同	同　五石	同
第五等同	同　四石	同
第六等同	給銀三百目	同
第七等同	同　同	一人半扶持
第八等同	同　二百目	同
第九等同	同　百五拾目	同

慶應三卯年正月廿六日布告

一伊賀以下諸同心等代番之儀當時銃隊組立之折柄老人病人等追々代番願出候村ては是迄之如く代番之途狹く候ては差支に付當分在中出離れ不差支分は百姓町人にても（三十歳已下十六歳已上にて）身躰强壯成者は代番相濟候事

國初以來之軍制軍役を廢し西洋銃隊を編成したる秩序大略記述の如しと雖も記類更に傳はらされは巨細は詳ならす更に其因緣の概略を綜言すれは征長役の實驗により從來の軍制用をなさゝるを覺悟廣島御出陣中六月の候より於御本陣佐々木盛彥（嘗て江戸に來り下曾根の門に入り又は森本岡右衛門に從ひ西洋銃隊を修行す）中嶋鉞一郎等を敎員とし銃隊訓練を開始す然れ共御出征先き一時彌縫の事にて未た大隊編成等に至らす征長解兵傾て御歸國專ら兵制改革に汲々たりしも再ひ御上京の事あり加之兵馬倥偬の余百端繁劇を極め調査に暇あらす元來銃隊編成之曉には千石の士も二三十石の士も其用均一なれは抑祿制よりして改革せさるを得さるの道理なれ共先祖代々世襲の祿罪なきに遽然削減の如きは至難中の至難到底行わるへきに非す依て日尙淺しといへとも雇聘敎員三名の訓練する所粗其體をなしたるを以て從來の武職を全廢諸士初伊賀以下同心の輕翟に至る迄强壯兵役に可堪者を上下一列の銃隊に編成し老廢の徒は都て勤仕並と稱し閑散に就かしむ而して暫く俸祿は從來の儘に据へ置唯番頭物頭番士等の稱を廢し銃士となし內可成從來の長官高祿より撰て隊長乃至中小隊長を任す（森藏人初は祿千石內外大御番御用人又は御家老家筋之者也）未曾有之大改革なれは隊中威信の便宜等あつて未た俄かに門閥廢止の斷行は機運の許さゝる處也

農兵組立

按に國初以來津々浦々に船組人數配りを定め所々に見張番所狼烟所を構へ或は地士帶刀人等へ小銃を配付不慮に備ふ是を浦組と稱し　有德公之時特に整備を仰せらる然れ共畢竟異國船漂着（異國さは唐天竺和蘭位の意にて歐米各國等は知らさりし也支那の小船熊野浦へ漂着の事往々ありたり）又は村民暴動の警備に不過太平無事には之にて事足りしも近世の狀態と成ては舊制は頓に兒戲に屬し絕へて用ゆるの地なし於是津田楠左衞門は憂ふる處あつて私に農兵組織の事を計畫せり爰に又和歌浦法福寺（一向派）住職北畠道龍なる者は佛門に似けなく武事を好み國家多事之秋に當ては緇徒と雖も軍事に服すへきは我門之宗義也と檀徒有志之者と謀り農商舟子馬丁を問はす强壯活氣の浮浪をも集め一の團隊を組織す蓋し楠左衞門と謀る處ありしか時に文久三年八月突然大和天誅組之亂起る楠左衞門道龍は征討人數の外別に部下の團隊を率て高野山へ馳せ登り嶋の首に於て賊と勇戰諸士遜色あり於是農兵組織せさるへからさるの議あつて事平くや否左之如く命せられたり

文久三亥年九月十六日

農兵總裁可相勤格合之儀は追て可被　仰出等　　津田楠左衞門

栗山俊平

駒木根又助

以下普請　岸彦輔

格助養子　岸　喜一郎
御手筒同心　秋月善之右衛門
丸栖村同心　山本弘太郎

津田楠左衛門差圖を受け農兵組立之儀相勤可申旨

是農兵組立之根元にして其方法の如何措置の巨細詳ならされ共郡中の地士帯刀人及ひ子弟有志之者に武技を習はし西洋銃隊を訓練漸次各郡に擴張せしむるに在りしならん津田楠左衛門は後御書物方頭取となり元治元子年九月征長に際し新たに御軍事奉行に任し軍政改正の事を被命備後楠左衛門に代りし者あるを聞かされは栗山俊平叢担當しつゝありしか不詳

一慶應二年十二月兵制洋式銃隊に改正に際し在々地士にも銃隊操練修業を命し地士の内人撰若山へ召し湊操練場にて傳習の上卒業之者歸村一般へ傳へし趣又同三卯年四月にも在々農兵取立を命すこの事郡制地士の部に記する如しされは此間に於て農兵之躰技漸を備りし如し明治二巳年三月奥熊野民政局へ就任之時郡中組々一小隊つゝの農兵を備へ常に英式銃隊の操練演習しつゝ在たり

一法福寺隊は別派をなし長州再征之時も出軍道龍隊長となりて大野村へ出張數次勇戰をなし法福寺隊之名頗る喧傳せらる其徒多くは勁悍強暴常に長刀を帯ひ短袴揮腕氣を遣り威を示し殆と御し難きを道龍能く之を統御其指揮に從はしめたり明治二巳年春江戸佛式傳習隊若山へ召されし時法福寺隊は其傳習を受け爾來一般と均しく歩兵隊に編入せらる道龍頗る津田大參事の知遇を得國政大改革之後遂に大隊長に抜擢せられたり

兵制改革を幕府へ申告

慶應三卯年二月三日於京都閣老板倉伊賀守へ

一兵制改革之事幕府へ御達

今般　公邊にて追々御改革被　仰出候付右振合に准し紀伊殿にも兵制等改革被致度付ては諸事自然是迄之振合一變致し可申尤　公邊へ之勤向に相係り候品は其節々御差圖相伺可申候得共其餘は便宜に隨ひ處置可仕候付兼て御承知置被成下度此段分て御達申上置候樣被申付候事

同年二月十一日於京都閣老へ橋本六郎左衞門を以提出

一軍事奉行堀内六郎兵衞を江戶へ差下し西洋兵制承合して橫濱且陸軍所及ひ開成所へ出頭爲致度右兩役所手行之儀可然取計方江戶表へ通知有之度云々

江戶兵制改革

同年三月十六日於江戶

一大寄合初諸番頭諸頭役平士已下役共武役悉皆廢止一同無役たるへく勤方之儀は追て可相達旨を布達す

同日

一陸軍奉行同並及ひ銃隊頭撒兵頭を新置表方武役平士已下役共銃隊に編成諸同心手代等輕輩は撒兵隊に編入子弟二三男十五歲已上之者悉く隊々へ編入せられ舊兵制を全廢一切西洋式銃隊を構成す

右御役廢止銃隊編成之兩條は職制之部に詳記す概ね若山に準し改正と雖も便宜少しく異也從來之御書物方頭取を廢し新たに陸軍所を置き軍務之事は一切陸軍奉行之管轄に屬し小谷老之助元大組服部五十二を擧て陸軍奉行並本役は御家老の職なるを以て並となすとし從來之番頭頭役等壯年器能ある者を撰て

銃隊頭撒兵頭とし余は上下一列銃隊に編入し老輩又は服役しかたき分は悉く勤仕並と稱し非職たらしめ執政司農參政監察等之事務官及ひ諸局諸司之僚屬筆生等は旧に因て變わらす又子弟の輩は元來無足と稱し銃隊操練に編入しつゝも勤仕に準せす自己修行之姿にてありしを爾來公然之隊付となりたり

慶應三卯年九月廿九日布告於若山

一西洋銃之儀は當時戰陣必用之品に付是迄鎗具足相嗜候心得を以御家中　御目見以上之面々一同自分物入にて所持致し可申候乍去當時歩上け中之儀に付一時に所持致候儀難儀可致に付多端御入費之折柄には候得共未た所持無之面々へは左割合之通年賦納にて壹人に一挺つゝ御下け相成候間一同厚心掛面々手備所持可致事

一西洋銃所持致居候面々は品柄筒數等書附に致し來月十日迄に御軍事方へ差出可申事

一以下役にても所持致度向は奇特成事に付　御目見以上同樣年賦を以御拂下相成候間其段可申出事

五百石已下
三百石已上　二年賦　　二百石已上　三年賦

知行百石
御切米四十石已上　四年賦　　御切米廿五石已上　五年賦

右以下　七年賦

下け紙

本文之通候得共陪卒差出候筋は陪卒人數丈け主人同樣年賦にて御下相成候事

但右之通に付ては陪卒給米納之筋は右米納之外に筒幷玉薬代相納させ候筈に候へ共御用捨を以不及其儀事

本文所持筒は平日稽古に不相用實地御用之節持參之心得にて成丈け損廢不致候樣大切に可致置事

一江戸に於ても右同樣之趣同年十二月二十二日を以布告せらる但し下け紙之條なし

按に銃隊編成さ雖も利器によらされは其詮なく長賊既に施線ミニヘール銃を用ゆ故に該銃之必用目下に迫るさ雖も頻年之大費用之征長之爲め國帑殆さ空耗を告け數千の銃俄かに辨すへからす去りさて時勢は日一日に迫りて大破裂を來さんさす有司必至に苦心惨憺を極め遂に本月岩橋轍輔長崎へ出張（本年四月茂田一次郎明光丸にて長崎へ航海之途中土佐の伊呂波丸さ衝突の件にて一次郎之失策を回復せん爲め出張せし也轍輔時に御勘定勤也）之次を以て英商コロウルより短エンフイルライフル銃二千挺（附屬品共）同ガールド商社より長短ライフルインヒユール銃（同上）一千挺を購求（堀内六郎兵衛横濱商館より小銃六千三百挺購求の約をなしたる由なれ共結局不詳）せり依て本記の布告ありし也又各郡農兵地士帯刀人等へも勸誘し購求之者へは其奇特を賞し背嚢一個つゝ下賜せられたる者多し

於江戸佛式練兵傳習

一於江戸佛式歩兵操練傳習を命せらる

幕府に於ては慶應三年春以來は佛國の陸軍士官を雇聘於横濱佛蘭西式練兵傳習を盛んに開始せらる

宇都宮三郎か口述經歴談に幕府軍制改革の事を記して曰く公儀に御軍制改革と云ふ事か起り軍制を西洋流に改むる事になりそれ／＼掛り役人か出來た其掛りの内桂川主税（桂川甫周の弟にて後に藤澤家の養子さなり歩兵頭藤澤志摩守さ稱した人也）と云親友もあり倉橋幾之助（後騎兵頭長門守）といふ懇意な人もあつて内密に其評議を聞く事か出來るので自分の喜は實に譬へ樣もない位て殆んさ毎日の樣に桂川を訪ひ其事にのみに心を用ひて居つた然るに追々評議も進んで先つ第一着に歩兵四レジメント（八大隊）さ之に相當する砲兵騎兵抔も出來て幕府の一部は全く西洋流の軍制に改まつた余所なから自分の喜ひ

は實に天にても昇つた樣な氣か致した又其後軍制改革の事か次第に進んで今度は佛國より教師を雇ふ事になつて（是迄は和蘭人の傳習）佛國より陸軍士官シャノソン始め十五六名の教師か來着して橫濱て傳習を始め其數は慥に覺へて居らぬか精選の兵七八大隊斗夫れに相當する砲兵騎兵工兵等も出來て之を傳習兵と稱した又既に陸軍所も出來てあつたか新規に海陸軍兵書取調役出役といふものか出來た其取調役に出た者は村田藏六（後に大村益次郎）大鳥圭介（後に一道）原田吾一大槻保太郎米田慶次郎鵜殿團次郎と自分とてあつた

前記兵制調査して出府を命せられたる堀内六郎兵衞は同年夏紀州より着によりかねて京都にて請願之如く該傳習操練參觀之事を　幕府へ請求せられしに閣老撿閱之次參觀すへきを許さる於是六郎兵衞（御軍事奉行）服部五十二（陸軍奉行並）及ひ信（奥御右筆）三人命を受け同年七月（日失）共に橫濱へ出張陸軍奉行藤澤志摩守に紹介佛國教師の新兵取立躰操執銃の訓練を初大隊の動作撒兵の繰縱戰隊開展進擊吶喊の狀等執覯するに紀律嚴粛勇猛活潑さなからの大軍變化迅速縱橫無盡なる實に一指を使ふに異ならす從來の西洋調練とは雲壤万里如斯にてこそ初て戰陣に可用を確信發悟措く事能わす畢て志摩守教師シャノソンヤフスケ等の招に應して會見諸揃質疑をなして歸て巨細復命を遂く於是我か兵制一つに是に據らさるへからすと該傳習の事を幕府へ請願之處追ては一般へ傳習の見込と雖も未た　幕府の親兵すら捕きかたき際なりと容易に允許なし依て我藩既に征長の事あり兵制改革の至急を要するは同しく幕府に盡すゆゑんと切に請求と雖も兎角荏苒に過きしか漸く十二月に至り僅に三五名を限りて許可を得たり即ち左の面々を撰拔せられ佛式步兵訓練傳習

を被命たり

元大組　高千石　小谷老之助

元御供番　高六百石　阿部清兵衞

元御書院番　御切米三拾石　大森安次郎　後久次と改む

同　斷　同　二十石　管田銃藏　後直輝と改

右四名は同月初旬より神田小川町士屋采女正邸趾傳習操練場へ日々通學す此時佛人教師二名（内シブスケ在り同人は大尉の由外一人名を失す）助教下士官三名也名失　幕府傳習掛りは歩兵差圖役頭取沼新二郎（上長官なり後沼守一と稱す）外一人名失同差圖役杉江精一郎櫻井三平外一人（名失す共に士官なり）指圖役下役若干名（下士官也）なり老之助初は是等に付幕府の生兵と共に柔軟躰操器械躰操生兵小隊運動及ひ撒兵初歩等の科目を心力限りに奮勵修業之内年既に暮れ明て戊辰正月三日には伏見の變起る傳習凡六十日間將に卒業に垂んとして時勢日一日に切迫幕府の陸軍殺氣を帶ひ傳習顧るの暇なき場合に至りしか尚隔日之傳習を維持しつゝありしも頓て各隊脱走の勢に及ひ果ては全く瓦解に歸したり然れとも該四士は必至に奮勵遂に其業を卒へたり

一時勢既に如斯傳習練兵を一般藩士に普及せん事一日も猶豫すへからされは同年二月を以左の如く命らる

銃隊頭に　小谷老之助

同差添役に　菅田銃藏

撒兵頭に　　阿部清兵衛
同差添役に　大森安次郎

銃隊は去年上下之士類又子弟拜命し撒兵は諸同心手代等服役邸內青山觀光館にて日々傳習開始銃隊凡三小隊撒兵凡一小隊を編成合せて略半大隊となし强て傳習教師沼新二郎杉江精一郎櫻井三平を請し訓練夜を日に續き雨雪倚廢せすと雖も如何せん形勢日に彌切迫官軍は東下幕臣諸藩士は續々脫走遂に沼新二郎初も大鳥圭介等と共に脫走續て大城明け渡し又上野戰爭となり都下惑亂人皆狂の如し是に先ち三百諸侯の家族藩中は地を拂て國邑へ移住せしも獨り我か　御簾中の君及ひ藩士は一人も動かす剩へ觀光館にては三兵訓練愈盛なるより深く官軍の疑ふ所となり移住督促之嚴令日毎に下り結局一日も遲々すへからさるの急に陷る依て　御簾中の君には六月十九日御發輿江戶常府三千之藩士家族は其前後十日を期して引拂ひ紀勢兩地へ移住に決せり依て三兵も悉く勢州松坂へ移住之事に定まる

一佛式步兵傳習之日淺きは前記の如し故に特に必要たる撒兵の活動大隊の動作に至ては全科傳習の暇なき事知るへし大森安次郎は痛く之を遺憾として百端苦慮の處獨り櫻井三平は未た江戶に潛居市ヶ谷左內坂にあるを探知し直ちに同人に就き飽迄其蘊奧を叩かんと欲す時に官軍都下に充滿最幕臣の擧動に注目すれは三平の身危き事薄氷を踏む如し而かも此間に潛伏去就常なければ之に親近するは共に危險を不免も安次郎は日々三顧四問其隙を窺ひ朝暮深夜の論なく經隨密會大隊動作の口授を請ひ算木を以て撒兵運動の說明を受け（書冊筆記は秘して傳へさりしと）家に歸ては終夜復習傍

ら諸式兵書に鑑みて明日之疑問質義を考究すされは吾か旦夕に迫る擧家移住の處理旅装も妻孥の狼狽轉倒も一切顧みす唯滿腔傳習の事に汲々たりしと後日若山に於て歩兵大隊操練の完成を得しは全然安次郎の苦心勤勞に外ならす而て人之を知る者なしといへり

一炮兵傳習於江戸

兵制改革に付ては歩騎砲の三兵備具せさるへからす西洋流開始以來砲隊なきに非され共唯銃隊操練の副具の如く見做し簡單無論漸く翻譯書等により和洋折衷の想像的組織に止り拙劣いふへからす現に征長の實地に試み發悟撤からされは結局專門家に就き傳習を要するより他なしと夙に其定議あつて慶應三年三月武官廢止に先ち同月二日を以て左の命ありたり

大御番格小普請　豐田九右衛門
同　岡崎第三郎
同　臼杵隆吉
同　岡本柳之助
同　大崎五郎次郎
御小納戸倉之助養子　田中吉郎次
御臺所目付幾右衛門養子　山崎庄藏

砲軍操法修行被　仰付候事

三月十六日武官廢止銃隊編成之際既に炮隊は組織せられ服部永三郎元大組八百石炮隊頭なり井田甚

右衛門安達庫之助元新御番大御番格小普請等之番士十九人炮隊に任し御中間諸局ノ尺之者等三十人は炮隊卒となれり然れ共節制之如何操法訓練の事漠然手を下しかたし暫く從來之操法に因襲彌縫しつゝ傳習生之卒業を渇望し居るの姿なりし

此命ありしも世間未た洋式傳習之專門家あるを不聞就學すへき目途なきの處山崎庄藏兼て交代寄合小出家之臣大島万兵衛に兵學を學ひ且高島流練兵修業しつゝありしゆへ万兵衛に謀りたるに大砲操法は當時唯鳥居丹波守臣友平榮一人あるのみと依て一同は同人へ入門を申込尙官よりも依囑せられ既に入塾せんとするに諸藩より來學の塾生充滿して入る能わされは深川万年橋邸御仕入頭取山崎主馬之周旋を以御出入町人上總屋友七之龜井戶村別莊に下宿して本所四ッ目なる友成方へ日々通學山砲十一寸半英式野砲和蘭式之操法及ひ製藥等之傳習を受け精勵刻苦一と通り學術を修熟せんとするに際し形勢不穩事情切迫に付歸邸を命せられ同年十一月十七日左之如く砲隊更迭を行ふ

炮隊頭を被免　服部永三郎

炮隊助炮兵頭心得に　岡本鉚之助

炮隊助炮兵頭差添役に　山崎庄藏

炮隊に　大崎五郎次郎

豊田九右衛門

此他小更迭ありしよし不詳

組織緒に就くに隨ひては屯所亦なかるへからす銃隊編成以來山屋敷文武場は要なきの姿なれは暫く之を騎炮隊之屯所に宛るに決し同年十二月廿五日より（酒井左衛門尉人數三田薩邸の兇徒を討ちたる翌日なり）兩兵之に屯營一途操練に從事せり

一慶應四年正月の比幕府の佛蘭西式傳習炮兵は其傳習を終り横濱より江戸へ引取來る差圖役頭取（今の中隊長）關廣右衛門（大久保百人同心後丹也と改め又迪數と改む）は豐田九右衛門知己之間なるを以藩へ傳習允許之事を竊かに謀りたるに　幕府の旗下初への傳習寸刻を爭ふの時貫徹如何あらんなれ共兎に角表之閣老へ御願ひ試然らんとの事則閣老へ切に御願立之處當時之御間柄殊に征長御盡力等不外儀と特別に允許せられけれは左之輩を撰定佛式砲隊傳習を命せられたり

岡本鉚之助
豐田九右衛門
大崎五郎次郎
山崎庄藏

此時西條侯よりも御依賴あつて三四名本藩に籠り傳習を受くといふ

右數名は日々神田小川町講武所へ通學公廐之馬匹をも牽行専心修業す炮隊正式之傳法を受け馬匹架炮之操法をも取りしは全く之か嚆矢なり然るに春來伏見戰爭の事起り　將軍御東歸頓て官軍東下せんと都下さなから鼎沸惑亂四方脱走の徒は日々相續き危急旦夕に迫るの場合講武所亦瓦解に歸しけれは關廣右衛門乃至太田某稻垣某等（共に砲兵差圖役下役）を赤坂邸中に請し更番文武場に來て熱心に敎

江戸三兵傳習隊を若山へ召す

授科術一と通りは修得したる處江戸城は官軍に引渡され程なく上野戰爭起て闔藩遂に榎本武揚等と共に函館に走り藩亦江戸總引拂の嚴令に迫まられ六月を以三兵悉く勢州松坂へ移住爾後同地に在て江戸に於ける如く訓練怠らさりし也

一士工兵傳習於江戸

江戸常府御徒押近藤清次郎は頗る才幹伎能あり時世の切迫に打たれ炮術等之事頻りに研究御徒嶋本泰次郎と共に御鉄炮奉行となれり佛式傳習の事ある又自から奮て幕士教師（姓名を失す）に就き士工の傳習を受けたり依て三兵組織せらるゝに際し當分士工兵頭兼勤を命せられ御作事御中間初諸御中間を以て工兵隊を編成（人員等巨細は不詳）夜を日に繼て訓練に熱心せり是本藩工兵隊の開始にして江戸瓦解の時三兵と共に一隊を牽ひて松坂へ移住す

江戸三兵傳習隊を若山へ召す

明治二巳年正月廿二日江戸より勢州へ移住したる佛式傳習の三兵隊悉く和歌山へ在勤すへきの命あり辭令人名等次記の如し

按するに江戸傳習隊は宗家轉覆の慘狀を目前に睹て悲憤激欝洩すに處なく口いわさるも隣鄉藤堂家二心之怨は人々骨髓に徹せり男子安眠の秋に非すと松坂移住以來將卒寺院に屯營して私家に歸へらす盛に兵勢を示して氣焔を逞ふす時に或に血氣勁悍の徒は暴行の事なきに非す元來松坂は士類に乏しく市在見馴れされは其兵威擧動に畏怖して頗る針小棒大の巷説を傳へり此事若山に聞へ勢州は他領犬牙の地就中津藩とは從來葛藤不尠必定注目せらるゝ處とならん万一不穩

の事あらは國（一本害 家の大事）也と懸想且兵制改革の時幸に江戸隊は佛式三兵の傳習を受く之を和歌山に移し漸次一般に擴張すへしとの計畫ありて旁爰に至れりと傳へたり

御用有之間兵隊引纏若山へ罷越可相勤　早々出立之事

同　斷　但兵隊引纏との事なし

勝助鉄助は書物等爲取調大阪へ立寄可申

御用有之候間兵隊引纏若山へ罷越可相勤　早々出立之事

御用有之候間若山へ罷越可相勤　早々出立之事

孔雀之間席並撤兵頭銃隊頭たも兼勤　阿部清兵衛

虎之間席並銃隊頭同樣勤　遠藤勝助

勘兵衛總領 當分銃隊頭同樣勤　原鉄助

虎之間席並 砲兵頭同樣勤　岡本錬之助

清兵衛甥 當分銃隊頭之勤心得　阿部林吉

中之間席御鉄炮玉藥奉行 當分土工兵頭之勤兼勤　近藤清次郎

直三郎養子　古田鈒次郎

虎之間席 銃隊頭差添役　大森安次郎

撤兵頭差添役たも兼勤　菅田鋭藏

虎之間席並銃隊　淺見又左衞門

同　村松勝次郎

鑑橋弟　門奈又作

義太郎叔父　馬場鎌吉

虎之間席銃隊　栗原新平

外十五名
此内砲兵騎兵あるへし

御用有之間此節若山へ罷越可相勤支度次第出立之事

助右衛門總領　上月楠太郎
虎之間席並銃隊頭差添役撤兵頭差添たも兼勤　三毛八郎兵衛
虎之間席並銃隊　松本庄五郎
同　同　武光彌一郎
同　同　鳥淵三藏
同　同　近藤彌太郎
同　同　出嶋金吾
同　同　藤野昇之助
中之間席　同　楠山鎗太郎
任藏總領　里村虎之助
亘三郎同　辻定次郎
彥兵衛同　木野伴助
亘次郎同　志富田保太郎
榮之丞弟　阿部鎮藏
與八郎弟　小笠原啓次郎

御用有之間早々若山へ罷越可相勤

以下役の上銃隊　小池十藏
以下役　同　原田定五郎

氏名	役	備考
松尾作次郎	同　同	
志富田岩次郎	以下役の上同	
上田鎬太郎	同　同	同斷　但此節と認
森田平四郎	虎之間席並 陸軍方調役	同斷早々出立 兵隊より先立可罷越
松村新平	蘇鐵之間席並 陸軍方認物勤	同斷同 砲兵局士官之心得にて
下條半藏	虎之間席並銃隊	
服部霜八	五十二弟	同斷 早々出立
山本長順	奏庵總領 陸軍方翻譯勤	
酒井箕市	中之間席一志郡御場掛 當分陸軍方調役勤	同斷
石川民之丞	林藏總領 當分陸軍方認物勤	同

右之如く三兵及ひ士工兵共悉く若山へ出發初は湊御殿に屯營之處追て騎兵砲兵は京橋口安藤の邸（今番町）歩兵は同水野邸（同上）工兵は湊元學堂跡へ分營せり

一此時陸軍奉行並服部五十二も若山へ在勤を被命遠藤勝助亦陸軍奉行並申合勤となり服部と共に三兵の事を担任統理す頓ては從來之英式を佛式に改習一般に普及一定せしむへき等にて同年三月十四日より奥詰隊より將校下士を撰拔して三兵隊へ編入尚有志之者を募り又は法福寺隊を編して傳習を行ふ人員概ね五百人計にて一大隊を組織遠藤勝介阿部林吉原鎮助か大隊長となり遠藤は專ら主裁をなす

一大隊に三大隊長ありしゆゑんは三名之者互角之資格を有して下すへからす追々諸隊へ傳習擴張之時は其大隊長に分任なるを以て暫く其邊に据へ置かれしなり

一大森安次郎は歩兵指揮長官となつて傳習の事を主管す嘗て佛英兩式の優劣得失を實驗(一本あらせ)んと湊邸練兵場に於て兩式大隊比較運動の觀覽あり大森安次郎は先きに江戸に在て櫻井三平に就き惣倅の隊伍薪膽苦辛を以て傳法を受領せしは今日あるか爲也と奮躍氣を皷し精を勵しあらゆる伎倆を演せしにそ操練殊に人目を驚かし大參事諸有司初大に喝采する處となれりといふ後田井の瀨河原に於て佛式傳習大隊の運動を演する時大參事始鳥尾小彌太(後陸軍中將となる)等撿閲したる事ありと鳥尾は維新前に是程の熟練兵ありしならは今少し仕事は出來しならんと嘆賞せしといへり鳥尾は戍營へ雇聘せられ副都督次席へ出務參謀たりし也

一前記の如しと雖も若山編成之英式隊は既に十大隊あり之をして江戸隊の傳習を受しめんか全然江戸隊に壓倒せらるゝ如き一種の感情を害すへき慮なきにあらす然らさるも江戸隊は兎角自負剛强の色をなし相互自つから確執を來たし圓滿の完成如何んを計り暫く佛式傳習は一大隊に止め國政大改革陸軍編成に當ても先つ其儘に据置かれたり故に改革後も英式と佛式と別派兩立しつゝありし也然れ共兵制固より一定せさるへからす依て更に方針を轉し悉皆孛式に準據すへき旨令せられ孛人カツピンを請して之か傳習を可受に決せり於是一人異を唱ふる者なくして兵制全く大成を告るに至る

砲隊始末

江戶佛式傳習砲隊亦若山に召されし事前記の如し記事少しく前後に涉るの嫌ありといへとも事の關連に續き其始末を示さん爲め爰に記述す該隊若山へ移住之處若山固より專科の砲隊なく故に明治二年二月兵制大改革にも砲隊は都て江戶傳習隊によりカッピン雇聘と雖も砲隊に至ては喙を容るを得す故に依然佛式を因襲更に擴張を謀り五砲隊を編成せり一砲隊は四(斤カ)山砲六門將校卒總計百五十四名馬十八頭とす明治二年十二月晦日に於ける將校初の人名左の如し

聯隊長勤　岡本小隊長正徳

山崎小隊長成高　　多田傳令使

大崎一等分隊長　　中井一等分隊長

三宅二等分隊長　　松村二等分隊長

堀江二等分隊長　　佐々木二等分隊長

功刀聯隊計司

杉原下司長　　寺井下司長

大橋下司長

小谷下司　　中村下司

內藤下司　　神野下司

山本下司　　秋月下司

小松崎下司　　西澤下司

中西下司　　　　豊田下司
小幡下司
井口聯隊史生
小隊史生　上松健治　　同　　富上愛之助
雜務係　西岡伍長　　　山崎伍長
森喜代楠　　　岡崎吹角長
吹角手　志賀彥太郎　　屋代三穗楠
井田槌楠

第一分隊

右砲車　大崎分隊長
小松崎下司　　石井伍長
須山近之助　　梅本宗三郎
本田甚助　　　白樫甚一
小山藏之亟　　福島芳之助
山室伍長　　　浦口楠五郎
森藤右衞門　　池田種楠
左砲車　秋月下司　　間宮伍長

森徳之助　貴志米吉
岩橋槌楠　江川榮太郎
岡本清兵衛　湯川英之丞
小島久太郎　西田伊兵衛
川口猶三郎　青木俊助

第二分隊

右砲車
堀江二等分隊長
山本下司　栗生伍長
中村恒助　川口榮輔
鎌田市之進　高橋十左衛門
廣瀬勇藏　大谷恒之丞
今井伍長　山田安次郎
上野九郎右衛門　林捨松

左砲車
中西下司　安村伍長
井田甚左衛門　角谷熊楠
山田貞助　津谷藤左衛門
西村虎吉　楠見勘兵衛

寺澤友楠　座植清次郎
淺山音五郎

第三分隊

右砲車　中井一等分隊長
西澤下司　樋口伍長
田中廣助　川崎恒助
森德橘　井上善之助
石井榮藏　田村金之助
吉井伍長　貴志壽次郎
山本久之助　山口幸之助
左砲車　小谷下司　塩崎伍長
小野熊次郎　岡前捨吉
宮本藤之助　山本民三郎
內藤榮吉　鈴木惣次郎
島德兵衛　渡邊次郎吉
平野熊太郎

第四分隊

右砲車

松村二等分隊長

豊田下司　桂　伍長

原　甚之助　塚原周藏

竹内榮吉　山本常吉

大岡常次郎　中野楠之丞

田中角五郎　岩井重右衞門

木村千代楠

左砲車

神野下司　伍長助　山本吉藏

岡本爲助　貴志楠七

秋田小十郎　井邊房吉

關　虎之助　高山瀧次郎

大屋守楠　和田善十郎

神前民五郎

火工掛

三宅二等分隊長

內藤下司　中村下司

石井伍長守正　伍長助　貴志榮次郎

加藤七之助　竹中信次郎
中島多喜藏　貴志源太郎
三尾芳三郎　岩橋幸馬六
中尾延次郎　岡本模一郎
大森權兵衛　鷺森佐吉
須山安之助　木下繁之助
神の下一治　嶋久之助
貴志和田助　西本信太郎
和中角藏　杉原集藏
杉原由藏　兒玉万太郎
山本幸次郎

馬掛

蹄鉄掛
爪髪掛

小幡下司　高井安次郎
堤仲助　東次郎吉

食堂掛

西岡伍長　山崎伍長
森喜代楠

雜卒

嘉八　米吉
勝次郎　吉村嘉十郎
文平　瀧藏
中島八次郎　松浦七三郎

に此比は都て職名を通稱する之慣例なりし岡本小隊長は即ち鉚之助にして後直ちに免職謹愼を命せられ四年一二月の比戍兵砲兵聯隊長となりたり山崎小隊長は庄藏と稱し後成高と改む明治二年三月砲兵副指揮長官に拜し此時小隊長となり同四年二月十日砲兵隊長に任す大崎一等分隊長は五郎次郎と稱し後長寛と改め村井に復姓す（初め）副指揮官に拜し後指揮官に進む（今の大尉に當る）當時陸軍少將たり多田は彌吉と稱し西南之役に戰死す三毛は禎吉と稱し松村は新平と唱へ寺井は欽之助小谷は乙次郎豐田は九右衛門と稱す共に皆江戸の人なり中村下司は雄次郎と云今の陸軍次官也此他尙江戸の人多し若山の如きは詳にするを不得

後偶々大垣戸田藩の陸軍奉行田村丘八（後累覽と改陸軍少佐となる）同武學校生徒淸水元次郎（後敬義と改陸軍少佐となる）可兒惇藏（後春琳と改今陸軍中佐たり）を從へ鹿兒島藩の兵制を視察薩州より之歸途若山へ來り關廣右衛門（後丹也又迪教と改む）より山崎へ宛たる添書を持參兵式一覽を請求す

廣右衛門は幕府大久保の百人同心にして佛式砲兵傳習を受け慶應四年の春江戸にて三兵佛式傳習を被命たる時山崎初へ佛式を傳習したる敎師なり幕府瓦解の時函館に脫し五陵郭に戰ひ負傷

之處榎本武揚初降服共に囚虜となつて大垣藩に幽せらる後赦に遇て免さる大垣藩は其伎能且人となりを惜み更に靜岡藩に請ひ砲隊傳習之教師に聘す故に山崎へ添書したるなり

山崎は厚く遇して去らしめ闕か未た世にある事を初て覺知し方今砲隊教授の者天下彼れ一人に限る幸ひに大垣にあり之を藩に聘し砲隊の改新完備を期せん事を建議す言大に納られ左之命を拜せり

砲兵業前之儀に付大垣藩に罷越闕廣右衛門へ質問可致旨被　仰付候事

明治三年九月二十九日　　和歌山藩

山崎は直ちに出發大垣藩の武學館に到り目付等に就き藝術質問と稱し闕に面接せんとするに偶々私事あつて東行不在也依て兩三日滯在該藩の兵式を視察闕を追蹟して東京に到り具に來意を傳ふ廣右衛門大に悦ひ大垣予を遇する薄きに非す然れ共小藩力を用ゆる詮なし紀州に盡さん事固より希望に不堪と於是東京に出張せる大垣藩大參事へ廣右衛門歸垣之次十日間を期し伎術上疑問の爲紀州へ立寄り吳れん事を要求遂に其諾を得て誘ひ歸へりたれば直に砲兵頭を命し月俸五十兩を給ひて砲隊改新完整の事を一任せられたり

此時大垣藩へは更に辻藤藏を使せしめ又東京出張之參事濱口儀兵衛を以ても廣右衛門申受之事只管懇請せられしに元來靜岡藩より讓り受たるゆへ直接讓與成りかたし元藩へ戻すへく其上は隨意との答を得則其手續により更に御宗家へ御請求本藩へ入籍せしとなり

爾來廣右衛門は己れか得る處を熱心に傳習操法訓練は勿論器具馬匹一切を整頓せしめ嚴然無比の

砲隊を完成す是本邦に在ては我藩を以て砲隊の開祖とする偶然に非さる也

如此改新に付ては幾多の山砲野砲乃至砲車器械馬具等の完備を要するを以て山崎は再三東京へ出張百方斡旋經理大に盡す處ありしといふ

一工兵隊長近藤清次郎亦隊中を率ひて松坂より若山へ移り續て隊長となりて江戸隊の外に尚志願之者を募集井口(來輔、一本采、江戸、常府)之に屬して傳習擴張を謀れり隊中組織人員等詳ならす後孛人築城家マイヨイ雇聘の事あれは渠等に就き一層講究する處ありしならん

一説に小菅知淵筒井義信等工兵之敎師たりしと傳ふるあり然れ共都て詳ならす

軍政大改革

明治二巳年二月十五日國政大改革の際軍政悉皆一新更に軍務局を置き職制を定む詳なるは世記及ひ職制之部に掲る如し短日月の間に兵制整然起立徵兵を起し洋人を雇聘孛式を傳習戍營を置き兵學祭を設る等着々改進長足の勢ひをなせり隨て百般處理措置之條項枚擧すへからすと雖も書類多くは欠逸今や詳述の便なし僅に遺記殘編を拾錄す且年月日欠記のものあれは或は前後を混したるものあらん暫く大略を述するのみ

記事都て日次の順序に隨へは事項紛雜一事に付ての畢竟を見かたし故に交代兵設置孛人雇聘の事等一所に集錄爲に日次前後するものあり

一明治二巳年二月十五日發布

職　制

軍政大改革

軍務局　凡軍旅の政令此より出つ陸軍海軍演武三所を管す

知局事一人　海陸軍の制を立て隊長に規則を授くるを掌る凡兵を出す政府の符節を受け隊長に令するを掌る海陸軍の操練を督し將士の勤惰を察し政府へ達し賞罰するを掌る
城郭陣砦營繕の事を掌る
輜重の運輸を總括し各隊に分賦するを掌る
國内及他邦地理城砦等を諸知するを掌る
軍令を刑法民政二局へ布告するを掌る城門及外廷の守衛を令するを掌る

判局事　知局事を佐け軍制練兵營繕輜重兵器等の職を分て各一職を督するを掌る
國内諸門關出入の政令を掌る
城門營繕の事を掌る
局中の會計を掌る

書記

職表

軍務局		知局事		判局事			書記	童徒
陸軍所	一等陸軍將	二等陸軍將	三等陸軍將	大隊長	副長 敎頭	小隊長 砲隊長		
海軍所	一等海軍將	二等海軍將	三等海軍將					
演武所					敎頭		助役	

一右に付左之通任命あり

軍務知局事兼帯に　執政　津田又太郎

同副知局事に　孔雀の間席　服部五十二

孔雀之間席並軍務判局事に　虎之間席並銃隊頭同樣勤教頭勤諸事陸軍奉行並へ申合勤　遠藤勝助

此外左之面々判局事に拜任以下僚屬任命差ありといふ

兼帯　下條直澄

同上　伊達源左衛門

岡本兵四郎

小池文右衛門

佐野蒼太郎

佐々木盛彦

遠藤勝助は後歩兵隊長となり軍務副知局事兼帯を被命長屋喜彌太も判局事兼務せしといへり

總て役料は當主幷子弟厄介に至る迄無差別衣服食料履等自費之事

松坂より相詰候兵卒は元給扶持其儘御役料等被下衣服食料履等自費之事

右之外諸兵卒は御役料無之入寮御賄振左之通

御切米四石貳人扶持以上戎服幷履は自費にて相凌き食料は被下候事

右以下戎服幷履食料共總て御賄被下格合は下等兵と相心得可申候藝術出精昇進致し上等兵之格被仰付候はゝ米貳俵相増猶又役々被仰付候節は陸軍御役料附次第の通一格に米貳俵つゝ相増

	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六
砲兵寮			寮長「二百四十俵」	副寮長「二百俵」	隊長「百八十俵」	第一等「百五

陸軍職祿制　朱書は役料也（本書「」を以て示す）

陸軍	砲兵寮	騎兵寮	歩兵寮	工兵寮
第一級				
第二級				
第三級	寮長「二百四十俵」	寮長「〃」	寮長「〃」	寮長「〃」
第四級	副寮長「二百俵」	副寮長「〃」	副寮長「〃」	副寮長「〃」
第五級	隊長「百八十俵」	隊長「〃」	隊長「〃」	隊長「〃」
第六級	第一等副隊長「百五十俵」	第一等副隊長「〃」	第一等副隊長「〃」	第一等副隊長「〃」
第七級	第二等副隊長「百三十俵」	第二等副隊長「〃」	第二等副隊長「〃」	第二等副隊長「〃」
第八級	上軍監「七十俵」 指揮長官「〃」	上軍監「〃」 指揮長官「〃」	上軍監「〃」 指揮長官「〃」	指揮長官「〃」
第九級	副指揮長官「六十俵」	副指揮長官「〃」	副指揮長官「〃」	副指揮長官「〃」（火工長器械長共）
第十級	指揮官「五十俵」	指揮官「〃」（馬以官共）	中軍監「〃」 指揮官「〃」	指揮官「〃」
第十一級	副指揮官「四十俵」	副指揮官「〃」 旗手「〃」	副指揮官「〃」 旗手「〃」	副指揮官「〃」
第十二級	下軍監「三十俵」 下長官「〃」	下軍監「〃」 下長官「〃」	下軍監「〃」 下長官「〃」 副旗手「〃」	下軍監「〃」 下長官「〃」
第十三級	副下長官「廿八俵」 第一等雑務官「廿六俵」 第二等馬醫「〃」	副下長官「廿八俵」 吹角長「廿六俵」 第一等雑務官「〃」 第二等馬醫「〃」	[illegible] 副下長官「廿八俵」 吹角長「廿六俵」 第一等雑務官「〃」	副下長官「廿八俵」 第一等雑務官「廿六俵」
第十四級	第二等雑務官「二十四俵」 第三等馬醫「〃」 吹角伍長「二十二俵」 砲兵伍長「二十俵」 吹角手「十八俵」 上等砲兵「十六俵」 下等砲兵「十四俵」	第二等雑務官「二十四俵」 第三等馬醫「〃」 吹角伍長「二十二俵」 騎兵伍長「二十俵」 吹角手「十八俵」 上等騎兵「十六俵」 下等騎兵「十四俵」	第二等雑務官「二十四俵」 吹角伍長「二十二俵」 歩兵伍長「二十俵」 吹角手「十八俵」 上等歩兵「十六俵」 下等歩兵「十四俵」	第二等雑務官「二十四俵」 吹角伍長「二十二俵」 工兵伍長「二十俵」 吹角手「十八俵」 上等工兵「十六俵」 下等工兵「十四俵」
第十五級	雑卒「十二俵」	雑卒「十二俵」	雑卒「十二俵」	雑卒「十二俵」

候事

但砲騎兩兵長沓幷諸兵冠り物之儀は相渡候筈

副指揮長官

指揮長官

一一小隊を摠括し部下之事に付萬事首長より被咎無申譯落度無之樣平常所置可致事

一士官兵卒之行狀其外諸務に付萬事氣を着守戒軍律公務衣裳戎器教令勘定等之事を申解し可申事

一一週間當番相定め當番中寮内を離るへからす無據罷出候節は代勤を置き可申事

但し交（替）一本番之時刻は規則之通り

一當番之指揮長官は大隊中之守戒軍律整次を監察するを任とし中軍監下軍監を指揮し事を執る目擊したる事を屆書に添記す其略左之如し

押込部屋　何年何月何日より何日迄

何日之人員撿査

朝何字	何番部屋	伍長某	不出會
晝同	同	兵卒某	
夕同	同	兵卒某	何度不在
晩同	同	兵卒某	今朝何字に歸參

寮中巡撿第一二三四五六等之部屋

第何番部屋中臥床整修せす此伍を帥ゆる伍長某と某二人二日押込部屋へ罪を受く

賄方

肉は鮮良或は否らす

衆兵賄方算計を知る

分給

飯は悪品なり受くへからす

病院

第何房之病者醫官より何々を飲食するを許されて未た得す

牢舍

何々

押込部屋

何々

總屆

一當番指揮長官副指揮長官十一字人員撿査之後指揮官兵卒取調書持參候へは其節會議之趣を可申合事

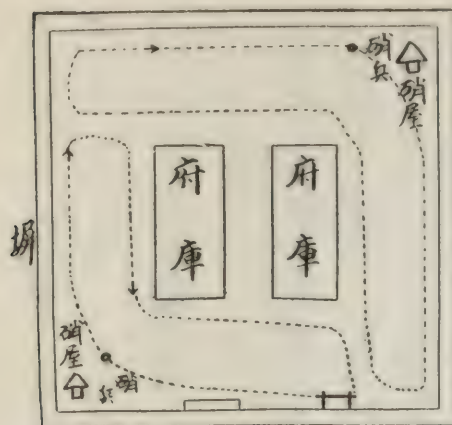
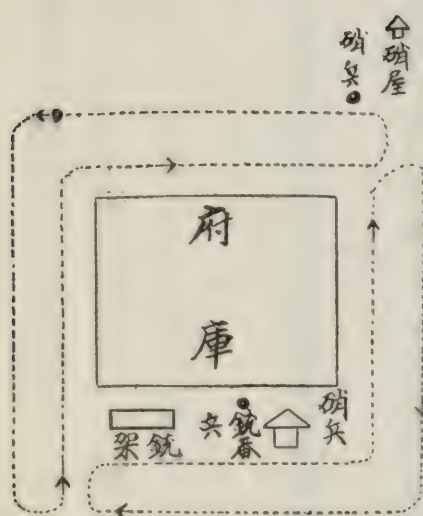
但し演習其外之臨時なり

一下長官留守に相成候節は副下長官中にて可然者相撰み代任を命し可申事

一毎朝下長官届書を持參候得は相調候て調印可致候事
一病院又は押込部屋等より歸り參候者罷出候はゝ病院取扱振又は咎命之ヶ條委細相尋可申事
一日々預り之局を巡按すへき事
一下長之内材幹ある者を撰ひ賄方主宰を命し又伍長よりも之を助くる者を撰ふへし
一月々盡し賄方之帳を撿し其名を認む則大隊之賄方之出す者を概算して之を上軍監に達すへし
一十四日毎に庖厨之雜卒及其他小隊之賄方より金を受る者之請取を撿し以て賄方過失を察す

金府穀倉番兵規則

番兵之人員は伍長一人兵士九人「カレ ハクトル」壹人にして交代は外番兵と同樣毎日十二字とす
番兵所一箇所を置き手銃は銃架に架し而して銃番兵一人を出す左の圖の如し

周圍に塀等ある府庫なれは圖之如く哨兵を配布す

周圍に塀等なき府庫なれは圖の如く外面に配布す

哨兵夜中は右之虚線の如く絶へす府庫之周圍を巡行す晝間と雖も時々巡行する事とす若し巡行中巡察之伍長に逢へは其所に止り禮を爲し事件之有無を演述す故に哨兵交代の時哨兵巡行中にて哨所にあらされは其巡行せし所に至り交代す硝所に歸るに及さるなり然れ共巡行中に静止し休憩を爲すを許さす

哨兵若し賊或は渉疑人等を見れは直に集れと發聲す番兵之を聞は一員の兵士をして哨所に至らしめ其事件を尋問し而して處置をなす

番兵之伍長は時々哨兵之勤怠を正さんか爲哨所を巡行す其時は必す一員の上等兵をして己の代員となし番兵を取締らしむ

哨兵は一時間毎に交代す

番兵夜間は人員之半を醒覺せしむ府庫の近邊に出火あれは直に集合し伍長其出火之箇所を認め速に戍營へ達す此時戍營より命令を下し熟練兵百名をして消火の爲に府庫を守衛せしむ

衆多之賊等來るも亦是に同し

番兵哨兵は晝夜之區別なく守銃に鎗を附着す

獄舍之番兵も凡そ上條之規則に同し只常に手銃は裝塡を爲し獄舍中へ哨兵所を置くの異なるのみ

手銃に裝塡をなすは番兵四人之脫走する等を見れは止れと令す若し止らされは直に火擊を爲すの爲なり

右之外總て之規則はガルニソン番兵の規則に同し

陸軍禮式概則

一禮式は海陸士官兵卒之無差別軍裝を着候はゝ總て禮を行ひ可申事

一貴き印を付候人は假令知らさる人にても法の如く先に可禮事

一立留り人と咄せし時は噺を止め禮すへき方に正面して禮すへし若し座する時は起上りて禮すへし

一庭内等散歩する時一度禮すれは再ひ繰返さす

一[一本註](注)進狀は禮儀を盡し持參るへし銃を不持節は禮をなし左手にて狀を出し一歩退き正敷身構にて差圖を待つ長官右を受取候得は再ひ禮を爲し右轉回を爲して立去候事

一長官に咄しを爲す時は二歩隔り禮を行ひ明に噺し無益に多言せす返答待ち退去の法は前と可爲同斷事

一隊伍を組み途中運動中上長以上に逢ふ時は肩銃になして通行す

一首長に逢ふ時は行進の儘捧銃にして近接せし時些しく行進し止め首長の先頭より四五歩過られし時行進し見計ひて擔銃にすへし

一武器を執る兵隊出合し時は右へ避けて肩銃にすへし乍去甲隊は旗を持ち乙隊は旗無之節は旗の無き方は戰隊に列し銃を捧け士官劍にて禮し吹角手第二行進を吹くへし

一右之外番兵見張番之禮は別に出す

兵卒

一兵卒互に行逢ふ時は六歩前にて右手を閉ち冠物に當て掌を前に向け可申事

但冠物無之時は頭の邊に擧候事
一銃を持候得は互に銃を肩にし左手を一の帶金の邊に當て可申事
一下長に出逢ふ時は六歩前にて右手にて冠物無きときは如前手を擧候事銃を持候時にても前の如し
乍去總て先に禮すへき事
一伍長に禮するも前の式に準すへし
一上長に逢候時も前の如く但三四歩前にて少し立留るへし
一首長以上に逢ふ時は冠物を取り手を擧る前の如し銃を持候得は銃を捧く最三四歩手前に扣へ居三四歩行過きて歩行すへし

下　長

一兵卒に向ては兵卒の禮を爲すに應し冠物の邊に手を擧く冠物無き時は頭の邊に擧く銃を持時は銃を肩にすへし
一上長に逢ふ時は兵卒の下長に禮する如くなす
一首長に逢ふ時は兵卒の上長に禮する如くなす
一元帥に逢ふ時は兵卒の首長に禮する如くなす

上　長

一兵卒に逢ふ時は纔に冠物に手を掛け禮を受く
一下長に逢ふ時は冠物に手を掛け少しく脫す

一首長以上に逢ふ時は下長の上長に禮ずる如くなす
一國王血統之太子見分を爲時の禮式は戰隊編制之列及□[一字不明]なれは旗を以て禮し士官は鎗を以て禮し兵卒は捧け銃をなし吹角手は行進の譜を吹くへし
一隊伍を組み途中運動の節長官に逢ふ時は行進を止め左の方に寄り長官の方を向き鎗を捧くへし
一乘馬にて器械不携して長官に逢ふ時は馬を止め左方に寄り冠を取りて禮すへし
一同等の者逢時は行進中にて手を頭の餝まて擧けて禮すへし
一銃を持徒歩にて長官に逢ふ時は銃を捧けへし
一同等の者に逢ふ時は肩へ銃を爲すへし
一砲軍繰練中長官に逢ふ時は炮手左右轉同をなし士官一歩前へ進み禮法を行ふへし
一途中乘馬運動之節長官に逢ふ時は騎兵禮式之如し

明治二巳年五月十七日布告

騎　馬　所　勤

一
右廢止被　仰出

同　日

一騎馬所勤廢止被　仰出候付向後騎馬所之唱相止候事

交代兵設置

一按に國初より之軍制は上下の藩士祿の高下に應して騎歩弓銃の兵賦を負擔す之を軍役と稱せり故

に千石の士は戰士廿六人を出すの割にしてたとへは藩士三千あれは實際戰闘力ある士卒數万人を出すへし平素の俸祿は此徒卒を可養爲にして敢て自奉のみに非す然るに治平數百年上下偷安に流れ驕奢是事とし從士隷卒は所謂一季半季の奉公人のみにて一も戰陣の用をなさすされは千石の主人も二三十石の主人も其實一士に過きされは軍役の兵賦は全く有名無實の空制となれり極治の流弊勢ひの然る處獨り我藩のみに非す識者夙に論ありと雖も時機熟せされは改革論却て奇禍を生す曩に田中善藏面扶持を議して刺客に倒るゝ如し然るに維新大勢一變削祿の氣運方に熟し戰法亦舊（一本時）(制)に大反す故に　君上先つ御自奉十分の一に御削減隨て藩士之祿を大減上下通して一箇士たらしむ於是兵賦を全國に募らさるへからすして農工商悉く兵役に就しむ所謂徵兵之法也此法發布せらるや各郡々民政局に於ては管內の民籍中滿二十歲なる者を調査準備をなし翌三年の春季各大隊長郡々へ派出模寄寺院に於て民政參事郡吏立會撿閲を遂く其法一人每に裸體となし醫官其强弱寸量を初め一切を点撿合格を撰定すること略今の徵兵撿查に於ける如し應募者は若山報恩寺を假營に入營せしむ初發は人員半大隊斗り之を基礎として第三大隊と唱へ岡本兵四郎大隊長となり功刀達三郎(後榮殖)之に屬して取轄せり夫れ當時に在ては世未た徵兵の何物たるを解せす陸軍省徵兵の發布すら遠く數年の後にあり方法措置の粗密整頓或は今の徵兵令に及はす不完全の点免れ難かりしも天下に卒先徵兵之實を擧けしは實に我藩を鼻祖とすへし大書以て紀念となさゝるへからす

明治二巳年十月布令

一此度農工商子弟當年二十歲之者を以て交代兵御組立常備兵は四大隊と定め定限相立候處藩士幷右

子弟及兵卒無役是迄銃隊にて當時離隊又は銃隊御免に相成有之候者之内猶武職にて御用立度所存之輩も有之に付右等之内より御人撰之上交代兵規則に准し今二大隊御編成相成候等に候間年齢四十歳以下十八歳以上身體強壯にて入隊願度者は姓名年齢等短冊に記し當月中軍務局へ可申出事

雛　形　半紙四つ切

何年何月銃隊被　仰付何隊にて相勤

何年何月離隊又は銃隊　御免

何席何等兵卒

何　之　誰

己何十歳

兵卒も右に準し隊付にて相勤候年月認入可申

同年同月五日政事府より軍務知局事へ

一此度交代兵之規則に準し今二大隊御編制之儀別紙之通被　仰出候處交代兵規則は別紙之通に有之此度御編制之筋は下け紙之通相成候筈に候間本文幷下紙之趣共篤と相心得候上入隊之儀可願出事

交代兵要領

一管内人民農工商を不論其子弟當年歳二十にして無妻之者より可撰取事

下け紙
身分幷年齢等之儀は別紙に被　仰出候通候事

一屯集中諸事規則を守り殊に遊歩日たり共酒店遊里等へ立寄候儀は堅禁制可致事

但暇中も平常は禁酒と相心得時宜に寄り隊長より免し候儀は格別之事

下け紙
皆屯集には不相成等に候得共若し便宜に寄り一小隊つゝ繰廻し屯集致候はゝ屯集中本文之規則に可隨事

一毎月朔望之日隊長より父母狀を讀聽可申事

一角打操練未熟之間は兵書を讀申間敷課目の兵書を不了間は都て他書籍を不可讀事
本業之學術其職に叶ひ候上は傍ら和漢西洋之書を讀んで知見を擴充せんと欲する者は諸科之學問何に不寄職務之餘暇研究之儀は非所禁事

一役料拾二俵幷爲積置宛外に三俵被下候事
下け紙
勤役中役料本文同様十二俵被下候事
但し屯集不致候はゝ別段積置米は無之事

一役料之儀都て隊長へ差出し衣食等賄を受殘餘之分は寮中へ積置可申事
下け紙
役料之儀は銘々へ相渡可申就ては若し一小隊つゝ屯集致候はゝ諸賄私費之事

一三年乃至五年之年限相勤職を免し候節は各々郷里へ歸り產業に就き可申尤年限無故障相勤候規模として勤役中渡置候胸牌も其儘賜り其身一代苗字帶刀差免し候事
免職之節は勤役中積置之金を一時に下渡し產業に有附せ方之儀郷里之父兄親族幷市長郷長等を呼出し隊長より懇切に申聞粗略無之様厚く世話致し可遣候尤品有之年限不滿内免職之者は積置は不被下等に候事
下け紙
在勤之期限本文同様之事

一無役高幷元給扶持有之者は免職之節も被下候事

一勤役中隊長士官に昇進致候者は前條之例にあらす兵士たり共格別御用立候者隊長之願に依り年限

を延へ候儀も可有之事
下け紙
本文同様之事

明治二巳年十月五日執政府より交代兵隊長へ可申聞旨軍務知局事へ達

一此度交代兵被　仰出候付ては是迄被下候御役料十二俵は屯集中衣食等諸賄に宛尙又免職之節被下候積金宛として御役料之外一人前年々米三俵つゝ被下候筈に候事

同日同職より名草民政知局事へ達し

一此度交代兵被　仰出候付ては勢州三領之外諸郡民政局常備兵之儀も向後右規則に立替佛式英式に不拘先一郡兵士四十人之割を以て取立可申候委細之儀は軍務局にて承合可申事

明治三年年正月二十九日布達

一國の軍備あるは其人民をして公憲を固ふし土地を保ち各自産業に安んせしめんか爲なり故に全國の人民其少壯の時に當り强幹にして兵役に可堪者は數年の間悉皆兵藉に錄し以て不虞に備ふ皇國の古及ひ今時海外諸國苟も文明の化行はるゝ域に於ては皆此法に據らさるはなし今や　皇政日新藩治一變之時に當り古今を斟酌し兵賦を改制する事別冊之法之如く乃ち知事幷諸參事初農工商に至るまて凡そ管內之士民子弟之其撰みに當る者を取り今年より兵籍に可加旨被　仰出候事

本文兵賦を取るに父兄の身分を不論ものは卽ち前日門閥を廢せらるゝ御趣意に候

別　冊

兵　賦　略　則

此度交代戍兵取方相改向後毎年二月徵兵使各郡民政局へ出張致し管内の男子士農工商之無差別當年二十歳に相成候者を取調撿査之上兵役に服せしめ候事
本文之通りに候得共兵員繰替の御都合も有之付今年年に限り二十一歳二十二歳の者も取調させ候筈
一二十歳の男子にても左之ヶ條有之者は御取調之上兵役を被免候事
第一　一家之主人たる者
但し一家の主人たり共父猶存し兄弟有之者は服役可致筈
第二　身材格段矮小なる者且つ天性虚弱なるか或は宿痾ありて兵役に不堪者
但二十歳にて撿査の節此ヶ條に屬する者は二十一歳にて撿査し尚同樣なれは又二十二歳にて撿査其節強壯に相成候はゝ御規則之通兵役に服し候筈
第三　獨子獨孫
但其年の兵賦若寡少なる時は服役致候儀も有之事
第四　父兄存すれ共病氣もしくは他の事故ありて父兄に代り家を治へき者
五　若兄弟悉く戍兵の籍にある者は其中一人を免し長兄豫備籍に入る時に至り初て役に可服事
一交代戍兵服役年限且唱振左之通
二十歳より二十二歳に至る
三ヶ年　　交代戍兵と唱各營に屯す

二十三才より二十六才に至る
四ヶ年　　豫備兵と唱へ家に歸り一ヶ年一度若干日入營し演習を爲す
二十七才より三十才に至る
四ヶ年　　補闕兵と唱へ豫備兵の豫備にて家に居住す
都て十一ヶ年にして全く兵役を被免候事
但し常備年限中に兵學又は技藝に達し行狀方正にして士官隊長にも昇進致し候者此例にあらす
本紀年限且唱へ振業前に於て差支の廉あるを以て明治四未年二月十五日戍兵都督より落廳
「（一本ナシ）明治四未年二月十五日」
へ伺ひ出向後左之通改正に相成る
二十歲より廿二歲に至る　　三ヶ年　　交代常備兵と唱へ各營に屯す
二十三歲より廿五歲迄　　三ヶ年　　第一豫備兵と唱へ家に歸り一ヶ年に一度若干日入營して演習をなす
廿六歲より廿八歲に至る　　三ヶ年　　第二豫備兵と唱へ第一豫備の豫備にて家に居住す」
一在役中諸長官交代戍兵俸米左表之通下賜候事
但戍兵積置米は歸家の節一時に被下歸家之後は御役料無之豫備年限中入營之節は御賄被下候事
一兵役差免左ヶ條の外に猶不得止事情有之可差免者は其實情を地方官熟察之書取を以て徵兵使へ申談し徵兵使是を戍營へ達し都督聞屆地方官へ相達し候上差免し取計候筈

	歩兵	騎兵	砲兵	工兵	輜重	俸米
従七位	聯隊長					百七十苞
	大隊長	聯隊長	聯隊長			百三十苞
正八位	小隊長	小隊長	小隊長	小隊長	小隊長	八十苞
従八位	大隊傳令使 一等分隊長	一等分隊長	聯隊傳令使 一等分隊長	一等分隊長	一等分隊長	五十苞
	二等分隊長 大隊計司		二等分隊長 聯隊計司	二等分隊長		四十苞
正九位	下司長	下司長	下司長	下司長	下司長	三十苞
	下司	下司	下司	下司	下司	廿五苞
従九位	上等伍長 大隊史生	上等伍長	上等伍長 聯隊史生	上等伍長		十九苞
	下等伍長	下等伍長	下等伍長	下等伍長		十八苞
大初位	上等戍兵 小隊史生	小隊史生	小隊史生	小隊史生	小隊史生	十七苞
少初位	下等戍兵	下等戍兵	下等戍兵	下等戍兵		十六苞

一交代戍兵俸米の内積置米の法左之表之通候事

一ヶ年	上等戍兵	下等戍兵
衣服冠履飲食諸賄料	十二苞	十二苞
營中諸雑費	一苞	一苞
積置	四苞	三苞

	二ヶ年			三ヶ年		
	衣服冠履飲食諸賄料	營中諸雜費	積置	衣服冠履飲食諸賄料	營中諸雜費	積置
	二十四苞	二苞	八苞	三十六苞	三苞	十二苞
	二十四苞	二苞	六苞	三十六苞	三苞	九苞

明治三午年二月朔日

歩兵大隊長　　　　兵學一等教授

徴兵使をも可相勤事

正月廿九日を以て大隊長長屋喜彌太同阿部林吉同法福寺道龍教授岡本兵四郎へ徴兵御用に付此節出在可致傳習中に付大隊長は一人つゝ繰廻し出在致し御用筋不差支樣可申合旨をも命せられたり

明治三午年二月朔日諸郡へ可申合旨名草民政局參事へ左之通申聞（諸郡へ可申合旨も戍兵都督へも書付渡す）

一此度被　仰出候交代戍兵撿査之品に付當月十五日より徴兵使郡々へ差向候筈に付同月迄に各管下今年二拾歳之男子取調置き徴兵使罷越候はゝ諸事不都合無之樣可取計事

兵員繰替之御都合も有之に付當年に限り二十一歳二十二歳之者も取調可差出事

交代兵に關する布告

明治三午年三月朔日布達

一此度兵賦御規則御一定に付ては左之條々之通被　仰出候間末々に至る迄心得違無之樣可致事

一市在共他之府藩縣管轄所等へ養子に罷越候儀無緣にては不相成事

一他之管轄所等へ出稼之儀は兵役年期相濟候迄出願不相成事

一管內にて奉公稼等に罷越候儀は不苦候得共常備年期中廿歲より廿二歲迄は不相成事

明治三午年四月三日布達

一交代兵御組立に付此度檢査相濟候者之內兼々和漢西洋等之學問執心にて修行致し特拔之者試之品有之候間是迄研究致し候書付相認め夫々支配仕差出し可申事

但し名草海士兩郡は來る九日迄其外遠郡は來る廿五日迄に差出し可申事

同年同月二十三日

一交代戍兵御組立相成候付ては千人有余の士官等追々御任用可有之筈に付從來常備戍兵之內年若之者は勿論年長し候者にても兵學操法精練致し行義方正之者は身分に不拘御拔擢可相成筈尤常備戍兵は不斷交代戍兵之模範とも可相成儀に付此上一際勉勵充分之制度相立候樣心掛修行可致事

明治三午年十月九日戍兵都督より家令へ通牒

一元第一大隊此度合併して藩廳常備兵と唱替相成候得共正三位樣御護衛之儀は當分是迄之通元第一大隊にて爲相勤右隊長法福寺聯隊長相心得候に付御都合之品は同人へ御達し有之樣

明治四未年二月三日

一交代兵賦之儀は國家之重事に付兼て御定之五ヶ條を除く之外父兄之身分を不論都て兵籍に被加決て他之事故を以兵役を免さゝるゝは勿論に候得共若し其父兄財本富有にして本人之才性に寄り他之技術を專らに仕込度者は左割之通り兵役代り納金願出候はゝ別段之御詮議を以右役を除かれ候間此段相達候事

除役納金

常備三ヶ年之間　一ヶ年に金六拾兩つゝ

第一豫備三ヶ年之間　一ヶ年に金二十兩つゝ

第二豫備三ヶ年之間　一ヶ年に金二十兩つゝ

明治四未年二月四日

一交代兵々賦略則に無之廉々別紙之通猶取極候間其段可相心得候也

別紙

一交代兵撿査之節病氣等にて不參之者輕症者檢査場所へ爲差出重病者醫生召連徵兵使致巡察候筈尤檢査後臨時病氣之者は快復次第入營爲致候事

一父幷弟有之者父六十歲以上弟十六歲以下之者は除役之事

一父幷兄弟有之者父廢疾兄又は弟廢疾之者は除役之事

一兄弟の內他之常備兵に入隊之者有之共其兄弟等交代兵期(限)(一本年)に當る者服役は勿論之事

一兵役年限中父沒し主人となる者は入營六ヶ月にして成業之後豫備籍へ入へし兄弟之內沒し獨子

となる者は服役期限を相終候事

一父母大患なるに依り看病願出候共不相濟末期面會願出候はヽ往來之外左日割之通歸村差免候事

十里以內　往來の外　二　日

二十里以內　同　三　日

二十里以外　同　五　日

一父母之忌中には遠近共往來之外一週間之日數を免許し歸村致させ候事

一一時面會等にて歸村致させ候內父母相果候得は直に其日より御定之日數を免許致候事

但歸營後は服飾を改め忌は定式之日數を相受操練可爲致事

一祖父幷兄弟等相果候時は服飾を改め營中にて定式之忌相受操練等可爲致事

一一時面會且忌中等にて歸村致し候內病氣等相發し歸營難出來候はヽ一週間迄は其地方醫生容躰書を以其出廳へ屆出延日之義同廳より戍營へ可申合猶延日致し候はヽ病院醫生差向診察致させ候事

一忌中且病氣養生或は除役等にて歸村之者は其聯隊長より免狀差遣し歸村爲致其旨可相達事

但末期面會一時歸村等之節は其隊長より免狀差遣し歸村致させ候事

明治四未年二月十八日各郡出廳へ申聞戍營へも書付渡す

一交代兵服役人員取調之儀昨春は御布告後無間合徵兵使向在且は初年不手馴之儀に付聊遺漏之廉も可有之候得共今年は前以て期限相定有之付右取調之儀別て巨細行屆候樣可致候若し追て遺漏之儀及露顯候はヽ其地方官人之可爲越度候間此旨相達し候事

孛人を雇聘兵制孛式に改む

二月　　　　　　　　　　　　　　　　藩　廳

孛人を雇聘兵制孛式に改む

兵式固より一つに歸せさるへからす佛式可と雖も傳習尙淺く合營輕重工兵其他の規律成法欠如たり眞に兵制之完全を期するは到底目下歐米強國兵式之直傳を受るに勝さるへからすと既に兵制大改革發布前二月七日を以て英國人二名を銃隊敎師に雇聘し願書を京都辨官へ提出せられしに追て御規則相立候迄評議難被及旨之指令ありたり然るに孛國は佛蘭西と戰ひ全勝を得て兵威旭日之如く銃砲亦新發明之最良器を用ひたりとの聞へあり依て神戶外商に因み該小銃を購入幷て傳習敎師雇聘の事を謀るに當時大坂に在留之孛國人カツピンなる者元同國之陸軍士官にて學術技藝共に拔群一切之兵制に通暁せりと遂にツナンールゲールと稱する鍼銃數千挺購買とカツピン雇聘の事を結約す該銃は元込にして發鑵を用ひす鍼打なれは利便遠くミニヘール銃に勝り本邦未たあらさる利器と傳へられたり

一カツピン雇聘之事明治二年十月十八日左之如く於東京外務省へ提出せしに十一月四日書面承屆候間雇方之儀大坂府へ可申立との指令を同府外國事務局より被達依て本人早速藩内へ召連度旨をも即日許可を得たり

今度當藩普國より鍼銃多數買入候處所用のハトロン製法幷火藥精製之法等相辨へ不申候付ては實用に難相成當惑仕候間右製法傳習之爲め普國人左名前之者此節雇入れ申度此段可奉願旨國許より申越候付何卒早々御許容被成下候樣譯て奉願候以上

大坂在留プロイス商社元同國歩軍小隊長

カッピン

右月給貳百ドル雇入日數六ヶ月

右に付傳習掛り其他令達之件左之如し

明治二巳年十一月十四日

此度普人御雇に付逗留中
傳習御用總括可致候

塩路嘉一郎

松見斧次郎

孛人此表逗留中傳習御用
筋總括申談相勤可申候

岸彦九郎

遠藤勝助

岡本兵四郎

長屋喜彌太

阿部林吉

法福寺道龍

孛人滯留中傳習御用掛り
相勤可申候

數見俊助

小田切彌三

嶋村清五郎

右三人

此度孛人御雇に付止宿所へ
晝夜一人つゝ相詰可申候

一晝夜交番にて一人つゝ止宿所へ相詰洋人且兵士等禁令に觸さる樣監督致し其他洋人他出之節哨兵
引纏ひ途中之監督をも可致事

孛人此表逗留中傳習御用
總括指圖を受兼相勤可申候

開物判局事試補　楠見長右衛門

同日御用掛總括へ

一此度孛人御雇に付ては敎授を受け候儀は其差圖通り可致儀勿論に候得共敎法禮讓等之儀は我　皇
道自ら存するあれは彼萬一異樣之行狀等有之候共其風習に惑溺不致樣兼て相心得置可申事

一掛り役人立合無之節は傳習不相成事

一傳習所之外私に旅宿へ出入致し飮食等は勿論私之交り堅く禁止之事

右一通

一禮節は我國兵制の本に候間言動相愼み兵士と不相狎樣

一傳習掛り役人之外は一切不相交樣

一公私共出門之節は常に警衛人附添へ候筈隨意に他行且つ人家へ不立入樣

一日曜日之外は遊步不致樣

一日曜日たり共遊步之節は總括之免許を受候樣

右孛人へ心得させ候樣

一一晝夜交番にて十人つゝ相詰め洋人他行之節々五人は警固五人は止宿所警衛之筈

一洋人止宿所へ出入之向は掛り役人たりとも總括之鑑札持參之筈に候間無鑑札之者は一切出入不爲

致候樣

一公私とも洋人他出之節は警固致し道路之行人等不作法無之樣且洋人妄に人家へ不立入樣隱に制止可致事

右哨兵へ申聞候樣

一洋人逗留中止宿所へ哨兵十八つゝ相詰させ同所警固爲致可申事

同月十八日軍務局參事へ

一此度孛國カッピン御雇に付ては諸隊とも追々傳習可被　仰付候得共常備兵之儀は粗精練之場にも至有之儀に付差當新兵士官より先傳習爲致候等に候間不都合無之樣宜取計事

同年十二月七日傳習掛り總括へ

一此度孛人御雇に相成操練傳習爲致候儀は華法虛套を省き實地之業令精熟度との御事に付修業之面々右御趣意篤と體認致し實意に可相學は勿論之事に候もし右等心得違之筋等有之候ては第一御趣意に相背き且つ外國人に對し御國辱に相成以之外之事に候間此段篤と相心得可申候就ては右修學に堪へさる向は强て相學ひ候に不及候間其段申出候樣可相達事

但本文之通に就ては傳習振取締之儀御用掛にて今一際嚴重行屆かせ萬一不束之筋等有之候はゝ修行差免之儀無用捨即刻申出候樣御用掛へ可申聞事

爾來傳習に着手之處カッピンは本國陸軍に在ては僅に下士官（曹長）に過きさるよし然るに才能學識に富み能く一切に了達新兵取立士官傳習大小隊聯隊操練より土工輜重之事營舍戍兵之紀律火藥

製法器械修造に至る迄通せさるなく自つから手を下して教示傳法最も勉むされは衆皆其人を得たるを喜ひ　君上御親任も淺からすして特に優遇を賜へり於是一つに孛式に基き實際に施行し得らるへきの法を咀嚼攻窮以て諸般の紀律成規職制服章に至る迄着々改新規定し遂に完成之美を致せるなり

一右傳習等多端怱慌の間早くもカッピン雇入之期限既に迫らんとするを以て明治三年年二月十八日於東京外務省へ左之趣請願之處翌十九日願之趣聞屆大坂府へも申立置へく旨指令あり

火藥製法等傳習して孛國人カッピンを去年十一月より本年四月迄六ヶ月間雇入相濟傳習之處右製法は含密術研究を要し一朝に練熟難致且操銃法をも引續相學せ度依て今一ヶ年雇置度云々後明治四未年三月十日に伺又來る四月より十二ヶ月之間雇增致し度段願立之處三月十三日願之通と許可ありたり

一同年六月カッピン私用有之本國へ立歸り歸省す

此節商人津田正之助津田伊兵衛崎山元吉の三人商法見習して同人に隨行獨逸國へ渡航爲致度との旨外務省へ出願許可ありたり

軍務局を廢止更に戍營を置

明治二巳年十二月十七日政事廳より布告

一此度軍務局を被廢改て戍營を被置戍兵取立候筈就ては是迄の常備軍四大隊幷第一大隊附屬之炮兵且隊外之副長小隊長銃隊等は被廢候事

軍務局を廢止戍營を置く

騎兵砲兵工兵交代兵哨兵是迄之通居置候事

右公用局參事へ申聞戍兵都督へ書付渡す

同日左之數項政事廳より戍兵都督へ達し公用局參事へも書付渡す

一　元第一大隊附屬　哨　兵（一本長）

右當分戍營直支配之事

一　第一大隊　第二大隊　第三大隊

右常備戍兵と相心得可申事

但第三大隊之內半大隊は交代戍兵之事

一　第一大隊

知藩事樣護衛是迄之通り相心得可申事

一御城御玄關幷元中奥御番所へも御番相勤可申事

一從前軍務局にて取扱候御用向は以來戍營にて取扱候事

一　騎兵　砲兵　工兵　交代兵

右戍營支配之事

同月十八日同

一戍兵御取立に付ては是迄之常備軍御廢相成候得共松坂出張之常備軍是迄之通り候事

同月廿八日同

一御都合之品有之付第七大隊は被廢候事
（右（一本ナシ）戍兵都督へ申聞公用向局參事へも書付渡す）

同月晦日同

一兵制御變革に付是迄之砲騎工三兵隊幷演武所教校初は被廢候事
（右（一本ナシ）之通）

一按に此時戍營都督同副都督は左之如にして戍營は初め城中中の間に置かれたる處後西丸下渡邊主水邸に移轉す（今の七番町市役所の處なり）

戍營都督兼任　大參事政事廳勤軍務總裁心得　津田又太郎

戍營副都督　少參事政事廳勤軍務局兼勤　塩路嘉一郎

陸奥陽之介も戍營都督同樣勤に任したりと云へり

一隊數隊長及ひ兵營は左表の如し

此表原書年次なし或は戍營新設當時の分には非るも知るへからす

江戶佛式傳習隊も戍營新設に際し解隊し一般孛式の組織となりて兵制一に歸したるなり

一聯隊と稱したるは兵員三分之二は平時鄕里に歸休せしめ戰時には二個大隊分出府三個大隊を以て聯隊を編成するの法にて全く聯隊の實力を有するもの故大隊と稱せす聯隊稱を付したるなりといふ

隊名	屯營所	隊長名
第一聯隊	丸之內元三浦屋敷	中川審六郎
第二聯隊	寺町無量光寺	右同人兼る
第三聯隊	眞砂町報恩寺	岡本兵四郎
第四聯隊	元湊御殿	鳥居源三郎
第五聯隊	丸之內元水野屋敷	阿部林吉
第六聯隊	鷺之森御坊	村井清
第七聯隊	元百軒長屋	栗原一郎右衛門
第八聯隊	道場町海善寺	大森次久
砲兵隊	丸之內元安藤屋敷	岡本錚之助
騎兵隊	岡山丁元岡野屋敷	阿部林吉
工兵隊	湊紺屋町元學校	近藤清次郎
輜重兵	丸之內元御代官所	田中麟吉
兵學寮	岡山	寮長 岡本兵四郎
戍營病院	元安藤中屋敷	院長 久下純庵
火藥兵器司所	高松火工所	司長 佐藤蒼太郎

一輜重隊以下の事記錄傳わらされば詳ならす輜重隊初は奥村立藏（元學習館教員也後尚柔と稱す）隊長被命同人字人カ

ツピンに就き質問諮詢便宜構成の由により同人に書通詳報を需めたれとも當時の記類散逸したる旨にて唯其勤書を送致せるのみ之に依て見れは隊長は田中麟六にして奥村は其組立法及ひ監督等の任に當りたるなるべし

奥村立藏勤書

明治二年十二月十七日任和歌山藩戍兵一等分隊長輜重隊にて可相勤事

日々戍營へ罷出可相勤

同日輜重隊組立之儀御雇孛魯西人へ質問之上可取立事

同日牧牛之儀總括可致事

同月五日官船等をも支配可致事

同年十月十八日兵學寮へも罷出生徒敎授可致事

同月廿日工兵隊をも取締可申事

同四年二月三日工兵隊をも取締候得共內存之通不及其儀事

同年三月七日任都督傳令使

同日輜重隊をも取締可申事

同月九日是迄之通兵學寮へも罷出可相勤事

同年七月十八日輜重隊をも取締候得共內存之趣も有之に付不及其儀事

同月廿七日戍兵病院御用筋をも可相勤事

南紀徳川史卷之百二十

臣 堀内信 編

軍制第七

軍制改革 二

戍營職制略

○戍營職制略

○戍營 戍兵の政令此より出つ

三兵初兵學寮及兵器火藥の二司を管す

○戍營都督 大參事兼之

戍營を總轄し軍事の諸務を總裁す

○戍營副都督 權大參事兼之

掌都督に同し

○步兵聯隊長 列細綿多に 一人

○同 大隊長 抜隊竜に 一人

○騎兵聯隊長 列細綿多に 一人

○砲兵聯隊長 仝 一人

戍營に出勤し軍務を商議し及所轄隊中の庶務を總理す

○都督傳令使

都督に屬し戍兵の傳令及軍事の制度を掌る

○歩兵小隊長　抜隊竜に　四人

各小隊を管括し屯營中の諸務を總理す

○騎兵小隊長　粤斯加獨竜に一人

小隊を管括し屯營中の諸務を總理す聯隊長缺れは之に代り戍營軍務の商議に參預す

○砲兵小隊長　抜丁令に　一人

小隊を管括し屯營中の諸務を總理し兼て三兵の器械及火具を總管す聯隊長缺れは是に代り戍營軍務の商議に參預す

○工兵隊長　亜親隊竜に　一人

工兵隊を管括し諸建築舟艙及營繕の事を掌り戍營軍務の商議に參預す

○輜重隊長

輜重隊を管括し粮食病者彈藥及軍事須用諸物の運搬を掌り戍營軍務の商議に參預す

○

○歩兵大隊傳令官　抜隊竜に　一人

大隊長に屬し隊中の傳令及制度を掌る

○歩兵一等分隊長　抜隊竜に　四人

○騎兵一等分隊長　都禹保に　一人

小隊長に副し各隊中の諸務を裁判す

○砲兵一等分隊長　抜丁令に　三人

小隊長に副し一人は隊中の傳令及制度を掌り一人は隊中の諸務を裁判し一人は三兵の器械及火具を總理し三兵附屬の鍛工を管す

○工兵一等分隊長　亞貎隊竜に　一人

隊長に副し隊中の諸務を裁判す

○歩兵二等分隊長　抜隊竜に　八人

○砲兵二等分隊長　抜丁令に　一人

小隊長に副し隊中の諸務を裁判す

○工兵二等分隊長　亞貎隊竜に　一人

隊長に副し隊中の諸務を裁判す

○歩兵大隊會計官　抜隊竜に　一人

大隊長に屬し隊中の金貨衣食の資給を掌る

○

○歩兵下司長　抜隊竜に　四人

各小隊中の庶務及金貨衣食の資給を掌る

○騎兵下司長　都禹保に　一人

分隊中の庶務及金貨衣食の資給を掌る兼て傳令の事を掌る

○砲兵下司長　抜丁令に　二人

一人は小隊中の庶務及金貨衣食を掌る一人は三兵器械の修繕及火具の製作を掌る

○工兵下司長　亞貌隊竜に　一人

工兵隊中の庶務及金貨衣食の資給を掌る

○輜重隊下司長

隊中の庶務及金貨衣食の資給を掌り輜重兵の諸務を監督す

○都督史生

都督に屬し戍兵一搬の書記を掌る

○歩兵下司　抜隊竜に　十六人

所屬隊中の事務を掌る

○騎兵下司　都禹保に　二人

一人は隊中の事務を掌り一人は騎砲兩兵馬匹の治療を掌る

○砲兵下司　抜丁令に　二人

○工兵下司　亞貌隊竜に　二人

○輜重下司

　所屬隊中の事務を掌る

○歩兵上等伍長　抜隊竜に　十七人

　一人は吹角長を分掌し十六人は下司に副し所屬隊中の事務を掌り輪次に給餉使及旗手を兼掌

○騎兵上等伍長　都禹保に(不明)人

　下司に副し隊中の事務を掌り給餉使を兼掌す

○砲兵上等伍長　抜丁令に　二人

　下司に副し隊中の事務を掌り輪次に給餉使を兼掌す

○工兵上等伍長　亞貎隊竜に　二人

　一人は下司に副し隊中の事務を掌り給餉使を兼掌す一人は器械及舟楫を管す

○歩兵大隊史生　抜隊竜に　一人

　大隊長に屬して隊中の書記を掌る

○歩兵下等伍長　抜隊竜に　十六人

○騎兵下等伍長　都禹保に　三人

○砲兵下等伍長　抜丁令に　三人

○工兵下等伍長　亞貎隊竜に　三人

　下司に副し所屬隊中の事務を掌る

○

○歩兵上等兵　拔隊竜に　十六人

○仝小隊史生　仝　四人

○騎兵小隊史生　都禹保に　一人

○砲兵小隊史生　拔丁令に　一人

小隊長に屬し各隊中の書記を掌る

○工兵隊史生　亞貌隊竜に　一人

○輜重隊史生

隊長に屬し各隊中の書記を掌る

○歩兵下等兵　拔隊竜に　六百五十七人

十六人は吹角手一人は鍛工を掌る

○騎兵下等兵　都禹保に　十七騎

一人は吹角手一人鍛工及蹄鉄工を兼掌し一人騎砲兩兵革具の修繕を掌る

○砲兵下等兵　拔丁令に　四十九人

二人は吹角手九人は御者一人は鍛工及蹄鉄工を兼掌す

一工兵下等兵　亞貌隊竜に　八十二人

二人は吹角手十人は坑工十人は鍛工三十人は水夫三十人は木工

解説	聯隊長	聯隊傳令使	醫生	聯隊計司	聯隊史生	吹角手	鍛工	總計
	スタツフ							
何月朔日在員								
一 増員								
二 減員								
三 何月朔日在員								
四 歸家する者								
五 兵役に服する者								
六 上條の區分 病氣								
七 上條の區分 公事他出								
八 上條の區分 免許他出								
九 上條の區分 四獄								
總計								
何月朔日現在人員								

肩書

和歌山藩戍兵何十番隊

明治何年

何月朔日

第一何の誰何拜任
第二何の誰減員
第三何月幾日在員
第四何の誰歸家す
第五兵役に服する者
第六　病氣　何人
第七公事他出何人
第八免許他出何人
第九　四獄　何人

何番隊

隊長	一等分隊長	二等分隊長	下司長	生徒	下司	伍長	吹角手	上等兵	歩兵	新兵	總計
一	二	二	二		二	九	五	八	卌	卆	何十人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何十人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何十人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何十人
何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何百人

和歌山藩

何月朔日

何隊長印

番兵屆書

何月幾日
何屯營

當番　哨所　第何聯隊何番歩兵隊

當直
何隊長
何分隊長
何伍長
吹角手何人
兵何人
小使一人

番兵	一番	二番	三番
銃番兵	何の誰	同	同
何番兵	同	同	同
何番兵	同	同	同
一等告命所入	何の誰		
二等告命所入	同		

何伍長

何番隊

操練所　當直　何伍長

課業勤惰表

區分	出勤	病 療中	氣 入院	忌中	免許	獄囚	總計
分官	何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃
下司長	何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃
伍長	何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃
上等兵	何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃
下等兵	何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃
吹角手	何人	〃	〃	〃	〃	〃	〃
計	何人	〃	〃	〃	〃	〃	何百人

何月	朝 何字より何字迄	晝 何字より何字迄
幾日	躰術生兵復習	雨天に付休業
同	同	同
同	同	同
同	同	同
同	同	土曜日休業

	人員	一 病氣	二 他勤	三 免許	四 獄囚	五 缺員	六 在員
分官	何人	何人	何人	何人	何人	何人	何人
下長官	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
吹角手	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
成兵	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
新兵	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
總人員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	何百人

一 何の誰
二 何の誰
三 何の誰
四 何の誰
五 何の誰
六 何の誰

姓名	巡察す土地及ひ時刻所	他より來る斥候の時刻
一番斥候誰	何字何れより何の通り至り夫より何字に歸營當直令官何れより逢	何字何れより來る
二番斥候誰	同上	
	何隊長 昨夜何字巡察す 何分隊長 昨夜何字巡察す	何月幾日 何屯營番兵 何伍長

刑罰表

番號	姓名	咎命所	入牢中時間		罪科	罪科を裁判する人の姓名
			入	出		
一番	何の誰	一等	何月幾日晝何字	何月幾日晝何字	何月幾日何屯營番兵の節不行屆	戍營
二番	何の誰	二等	何月幾日夕何字	何月幾日夕何字	同上	戍營
					和歌山藩 何月幾日 何隊長	

戍營諸布告

明治三午年二月二十一日

一兵制御變革に付是迄之第五大隊第六大隊第八大隊は被廢候事

第五大隊之内東京へ相詰候兵隊は其儘是迄之通候事

同年四月九日

一兵制御變革に付是迄之松坂常備兵被廢候事

同年八月二日

一此度戍營へ病院を被置

同四未年正月十二日

一武官散髮之儀先達て御布告相成候處斬ゞけ等之儀長短不同にて見苦者も有之候付當分前額二寸漸次に後方は一寸に致候樣相心得此段宜取計事

同年同月十四日

一向後上等兵下等兵吹角手中付候節一名つゝ書付下け渡候事

同年二月三日

第一通

三兵聯隊にて可取扱罸法向後左之通候事

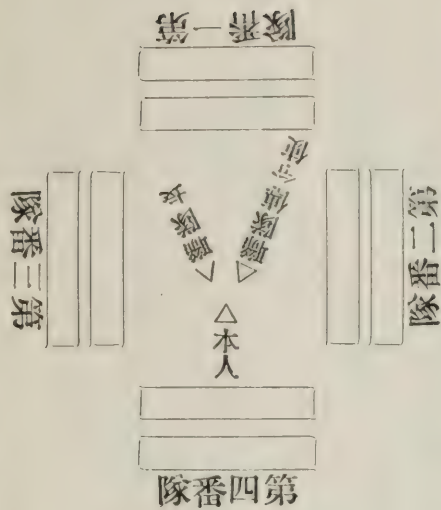
一總て隊中各官之勤務幷に約法等を怠り或は相背き候者之輕罪は隊中にて處斷可致事

一前條之通候得共一般之國律に涉り候罪科に於ては輕罪たり共隊中にて處置不相成第二等幽囚申付候上其情狀を記載し速に戍營へ可相達事

一聯隊長は上長官へ三日以下之禁足を處斷可致下長官以下へ八日以下之幽囚を處斷可致事

一番兵伍長或は番兵等に於ては其聯隊長等處置不可致必す番兵取締當直之隊長より戍營へ相達戍營より番兵所屬之聯隊へ相達處置爲致候事

第二通

一下長官以下品有之貶黜之節都督之書付を以隊中にて可申渡等其式在圖面之通候事

聯隊を圖の如く列し本人は其所屬之隊に對面爲致聯隊長之に臨み聯隊傳令使申渡し畢て下司長服章を奪却致候等拜任之御書付は即日爲相納候事

但し本人は始終重禮之事

第三通

工兵隊輜重隊兵器司火藥司病院に於ては下長官以下へ三日以下之幽閉之處斷可致上長官之處置は本日當直之聯隊長へ相達可受其處置事

但下長官以下貶黜之節も右聯隊へ相達同役并に聯隊傳令使出張之上申渡等取扱候事

同年二月三日

一別紙之通藩廳より被　仰出候事

戍營

武官之面々へ可相達事

公務に付往答文格精細之儀は追々御取極之筈候得共當分別紙略表之通御定相成候間此旨相達候事

文格略表

	「相當從三位」	「同正從五位」	「同正從六位」	「同正從七位」	「同正從八位」	「同正從九位」	「同大少初位」
相當從三位							
同正從五位	第一等「第三等」						
同正從六位	第一等「第三等」	第二等「第二等」					
同正從七位		第一等「第三等」	第一等「第三等」				
同正從八位		第一等「第三等」	第一等「第三等」	第二等「第二等」			

同 正従七位				第一等「第三等」	第二等「第二等」	
同 大少初位				第一等「第三等」	第二等「第二等」	

表中文格等級之下官より上官へ書面差出候節は第一等の文格にて何官（御中 御許）苗字何官殿御許と可相認事

御用召文格

黒書は往
朱書は答書

奉書半切
「之義御座候付」
御用候條明幾日
何時式服着
「可仕」
藩廳へ出頭可
「旨承知仕候以上」
有之候也
月　日　知　事
「官苗字名」
「知事御中」
苗字何参事殿

上包
美濃紙

上に同
苗　字　官
「之義御座候付」
右御用候條明
幾日式服着
「可仕旨」
藩廳へ出頭候様
「承知致候以上」
可相達候也
「官苗字名何官」
月　日　知　事
「知事御中」
苗字何参事殿
何官御中

御受

三等文格

第一等	第二等	第三等
申差上候以上 承知仕候以上 共御許 私 可被成奉存候以上 殿 御中	申差進候以上 致承知候以上 御自分 拙者 可有之候以上 殿 中	相達候也 差遣候也 令承知候也 共許 我等 可取計候也 可相心得候也 殿中

一都て往答端作無之奏判共同任之向は互に第二等文格可相用候答候得共自分長屬之分有之筋分隊長之隊長に於ける兵之伍長に於ける如之類は假令同任同官たり共一等上之文格可相用事

一進達書は第一等文格相用〆封之分は是迄之通印封之分を雛形之通可相認事

進達　苗字官
又は何官

一〆封書通は廳帑并何掛宛等に、往復不苦候得共印封之分は苗字何官（一本ナシ）（又何官）と可相認事

同年二月八日
一此程相達有之候祖父母并父母兄弟病死之節營中にて服飾を改め忌相受候就ては右服飾之儀近々被仰出候迄是迄之通可相心得候也

成營

同年二月十三日
一諸隊質地演習等にて臥床時刻相過歸營致候節は下司長以下新兵迄夜食一度被下候筈候事

同年三月七日
一敎授初向後左之振に一二等上下等之差別可相認事

何等敎授　何等大醫生
聯隊傳令使　何等分隊長
聯隊計司　何等少醫生
何等助敎　聯隊史生
上等伍長　下等伍長

右

同年同月十三日
一番兵哨兵禮節振先般御布告相成候處猶又別紙之通御改正相成候間其段相心得候との旨廻文
番兵哨兵諸官ハ通行之節禮節振左之通相心得可申事

凡番兵所之法は長官下長官若干之兵を率ひ其所に屯集し其內若干兵をして哨兵となし擔銃せしめ若し禮すへき官人通行するを見受る時は哨兵直に番兵を促し出して其景況を告し番兵皈りて之を長官下長官に告けて禮する（一本ニ事）左の法の如くすへし

一從六位以上の文武官人通行する時は其人兵隊を率ゆると率ひさるとに不拘長官下長官兵卒を適宜の地に集合して之を一列ならしめ己れ其右翼に占位し劍を拔き一步前進して左向し氣を着けーの令を下し自から右足より故位に復し劍尖（さーべるのさき）を地上に着け其距離從三位以上三十步從六位以上二十步に迫ふ時己れ復前の如く一步前進して左向し肩銃捧銃の二令を下し自から捧劍之禮を行ひ右足を半斜に右に退け左足を接して故位に復し劍尖を地上に着け而して士卒と共に之を目送し其過行同前距離に至れは己れ復一步前進して左向し肩銃建銃休めの三令を下し休憩す若し伍長兵を率ゆる時は之を適宜の地に立て正面せしめて己銃を肩にしなから一旦其右翼に占位し其時の宜きを見て一步前進左向して肩へ銃の令を下し正く行禮の時に至り捧銃の令を下し己れ右の足より故位に却復するなり其間哨兵も長官下長官の號令に因て動作すと雖も唯最後建銃を令する時擔銃を爲を以て度となすへし

但從三位以上へは其通行の間パラーテマルス半曲を奏すへし

一正從七位の向通行之節は哨兵のみ捧銃をなすへし正從八位へは哨兵のみ肩銃をなす

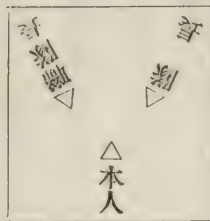
一從六位以上の官人は晝夜の無差別行禮の筈正從七位の向へは夜第十字迄は禮を行ふへし右以下の向へは夜中行禮に不及事

一官人微服の節は都て行禮に不及候事
一官人答禮は兵隊を率ゆる者と禮する法の如く相心得可申事
一番兵取締當直隊長には晝夜の無差別集合し肩銃の禮を爲す同分隊等には集合し建銃の禮をなすへき事

同年四月七日

一先達て布告有之候罰法の内第三通之部別紙之通尚又相改候付此段相達候也

第三通

工兵隊輜重隊兵器司火　司に於ては下長官以下へ三日以內之幽囚を處斷可致上長官之處置は本日當直之聯隊長へ相達可受其處置事
但下長官以下貶黜の節は當直聯隊長立合之上隊長司長にて可申渡事

一兵學寮にて可取扱罰法等都て聯隊之通にて下長官已下貶黜之節寮長相臨み分隊長にて可申渡事
一病院にて可取扱罰法等右同樣にて下長官以下貶黜の節院長相臨み大醫生にて可申渡事

同年五月五日

一各隊之内地方官へ可差出諸願是迄一旦戍營へ達出候へ共向後は聯隊長にて聞屆其段可達出事

組隱居家督幷新規之品又は定例之疑惑に渉り候品は可談出事

一諸兵之内聯隊長無之分は其長官當直聯隊長へ差出同官にて聞屆可申事

一各隊々にて諸事取極振等少々つゝ斑々に相成候儀も有之不都合に付以來聯隊長節々集會之上諸万熟と申合聊不平等之儀無之樣猶入念可致事

同年同月七日

一戍營幷バラーデ當直は是迄之通相心得戍營當直は監軍席次之間へ相詰可申事

一産穢中引籠候筋御用繁にて差支候節は乍産穢出勤之儀及取扱候事候へ共當時諸隊共別て繁務中之事に付當分都て乍産穢爲致出勤候等に候間其趣を以宜取計也

同年同月十五日

一諸兵隊長以下拜任之外諸達之儀向後其隊長へ書付相渡し各屯營へ差出申渡取計候事

一士族初無役之筋へ爲申渡之儀有之節各屯營への呼出は戍營にて取計候事

一聯隊長無之隊々等は當人戍營へ差出し當直聯隊長にて爲申渡候事

但其長官出營列居之答

一戍營にて拜任有之節當直聯隊長列居致候事

一兵學寮病院之儀にも右に准し候事

同年同月十六日

一各兵隊之内諸事隊中にて相賄候筋は都て日割を以職俸會計相立候事に付向後免職之節右日割會計相立若渡り過に相成候はゝ返納可致事

同十七日

一　御脊張

書面諸兵初夫々へ可申含事

三兵聯隊長へ

聯隊長より自隊の隊長分隊長へ達之品有之節二等の文格にては差支候廉も有之候付當分の内自隊に限り三等文格相用可申事

但兵學寮長戍兵病院長之儀も中院寮中に限り右に准し候事

一　脊張

同文言

三兵聯隊長へ

一番兵取締當直隊長諸屯營番兵巡撿之節は其構内たりとも馬上の儘通行不苦事

一聯隊長并隊長兵隊を率ひ候節は馬上にて屯營門出入致し不苦事

但其他之節は自他を論せす屯營門前にて下馬致候等候事

同年同月二十四日

一拜任其外賞罰を初諸達等有之候節諸兵隊へ布告之儀共是迄悉皆戍營より取計候へ共此度諸達之儀

は其長官へ書付相渡申渡爲取計候筈相極候付ては前條諸兵隊へ申合之儀も書付相渡候分は直に其長官より取計可申候就中賞罰布告之儀は勸懲之御趣意にも有之不輕儀に付末々迄心得させ之儀をも總て聊遺漏無之樣入念取計可申事

同廿五日

一向後聯隊中にて申渡し候諸達之儀上長官は聯隊長申渡下司長以下は聯隊長より呼出し聯隊長臨席にて隊長より爲申渡候筈下長官以下のスタップに屬し候分は右之振合にて聯隊傳令使より爲申渡候筈に相極候間此段及申合候事

同二十八日

一向後都て進退に付ての申立書付等扣書不及差出其外之書類は是迄之通扣書差出候筈之事

同晦日

一諸兵隊長以下拜任之外諸達之儀向後其聯隊長へ書付相渡し各屯營へ呼出し申渡し候筈聯隊長無之隊には當人戍營へ差出當直聯隊長にて申渡其長官出營列居之筈之旨先達て相達候へ共右は向後聯隊長無之隊々等にても其隊長聯隊長に代り候筈就ては諸達書付當直聯隊長より右隊長等へ相渡させ候間各屯營にて申渡等取計可申事

同年六月三日

一諸隊之面々諸書付美濃紙等半切へ相認差出候向も有之右は一体不相成候はては差支之品有之候付當人諸書付は半紙へ竪に相認書振は系紙へ相認候振り合に小口天地等明け置候樣可致候長官等添

書系紙へ相認候儀は是迄之通り可相心得事

但寫も本文同樣可相認候且又差扣申込等幷身分之品に付地方出廳へ可差出諸願書等美濃紙半切へ相認候廉は是迄之通可相心得事

本文申込寫は系紙又は半紙へ可相認筈之事

同年六月五日

一向後監軍申渡之節都督出席之廉は聯隊長列居致し都督出席無之廉は列居無之事

上等兵下等兵吹角手差免候節は書付相下け候間各屯營にて聯隊長可申渡事

上け紙　本文上等兵等差免之儀聯隊長無之隊々等は此程諸達之品に付相達之通に候事

同年同月八日

一諸隊雜卒代り近比差替繁く其節に出廳等へ申合取計等手數多く候付入柄等取調容易に不差替樣可致候就ては前以一應誰雜卒代り申付度との儀可談出事

但厩卒代り之儀も本文同樣之事

同年同月十三日

一岡山下操練所元追廻し馬場幷元扇之芝榜示内にて操練中の外は尋常往來と相心得官人等通行の節御定之通禮節を行ひ可申騎馬之節は早乘不相成事

一元追廻し馬場幷元扇之芝にて操練致候儀は歩兵隊に限り候事

一下等歩兵途中にて官人に行逢候節は當分姿勢爲習熟獨歩にて洋禮行ひ可申事

但上等歩兵以上は御定之通禮節取行ひ可申事

同年同月十九日

一諸兵の内死去致候者ある節此表にて埋葬且宿下け等之儀に是迄御料簡相伺候（一本ナシ上取計候）得共右は向後御料簡相伺候に不及其都合に取計候て其趣達出候樣可致旨都督御中御申聞被成候旨當直聯隊長中より申來候事

一同年七月五日戍營より左之趣諸向へ布告す

各隊操練を初諸事字限取極一定爲致有之處戍營初め夫々時辰儀異同有之甚以差支規則立兼候間向後日々十二字大砲一發つゝ空發爲致右砲聲にて夫々之時辰儀相正し可申明十二日より於岡山兵學寮空發爲致候等

同年同月八日

一護衞勤之面々向後狙擊隊と相唱候事

同日　　　　　　　　　　　　三兵聯隊長へ

一番兵分賦且罰典等總て致委任候間精細申合可相勤事

本文之通に付都督傳令使パラーデ場へ出張之儀相止候事

同日

一左之件々是迄戍營にて取扱候處向後各聯隊へ致委任候間精細行屆取扱可致候事

但跡方無之品は其節々可談出事

一常備豫備共總て交代兵身分に關係致候品は其隊にて地方係り下司長と直に掛合可申事

但毎月末一集に屆出可申事

一下長官以下之褒貶黜陟は其長官にて取扱可申事

但拜任書付は聯隊傳令使戍營へ押印に出可申申渡相濟候はゝ即日戍營へ申屆且出廳及會計懸り屬へ其聯隊等より直に可申合文躰之儀は今日某へ別紙之通申渡候付此段參事中へ御達可有之との趣相認可申事

一上長官へ拜任之外諸達申渡之廉も前同樣に取扱可申事

但前同斷

一刑罰之儀も前件同樣に取扱是迄之通月末刑罰表相達可申事

一死失又は病院出入改名屋敷差上且拜借養子緣組聞屆等之類總て其節々屆出に不及毎月末に束ね可相屆事

一兵器彈藥受取且兵器繕幷輜重隊へ元斷等總て各長官之証印を以直に受取渡し致し可申事

一錢四拾貫文以下の小營繕は手元にて取計可申事

但毎月末一集に可屆出事

一無役人へ役儀申付候儀は地方出廳にて申渡候事

但毎月末に賃錢下け渡可申事

本文に付前以身分調等其聯隊等より地方掛下司長へ可申遣事

一衣服等は戍營會計方にて直に受取渡可申事
一聯隊長日々戍營當直は向後相止候事
右之外小細之儀は猶追々可申聞各々にても勘考之上存付候儀は早々可談出事
同年同月九日
一各隊身分に關係致候品は其隊と地方掛下司長と直に掛合可申段昨日相達候右は各隊等士官初藩廳常備兵も右に籠候事
一聯隊長申渡濟等總て戍營へ申屆候廉藩廳へ上申をも仕組取添戍營へ可差出事
但戍兵都督と口書可致事
同月十日
一上等兵以下及無役等より下等伍長以上に拜任取計候はゞ姓實名戍營へ相達藩廳への上申且會計掛り初へ申合之儀宜取計候也
但實名は假名付致可申事
同日
一常備幷交代兵等都て身分之儀に付各聯隊等長官より各郡出廳處兼下司長且會計掛り處等へ往復之儀右は都合之品も有之趣に付何出廳且會計掛りと夫々廳名宛にて往復致候樣就ては參事中へ御達可有之との儀には譯は認込に不及事
一父母等大病に付一時面會幷に忌中引宿下け之儀は差掛り之品に付手數を經候內機會を失ひ候儀も

有之事に付向後其地方郷市長副市長より直に各聯隊等長官へ相達させ候儀も有之候間其趣を以宜
取計候也

同月十四日

一申渡濟等會計掛及名草出廳へ之屆振諸隊班々にて不都合に候間左の振に相認可申候尤狙撃隊幷兵
器火藥取締之類は其支配致候名前にて相屆可申事

申渡濟屆

會計掛

名草出廳

第何聯隊長

右之通申渡候依て御達申上候以上

月　日

戍營より下け渡し候刑筋申渡濟屆

會計掛

名草出廳

第何聯隊長

隊中何之誰へ左別紙御書付之通申渡候依て御達申上候以上

月　日

隊中何之誰左別紙申込書付へ御附札之通申渡候依て御達申上候以上

隊中限り刑取計濟屆

會計掛
名草出廳
隊中何之誰へ左別紙之通申渡候依て御達申上候以上
月　日
第何聯隊長

同年六月八日
一交代兵は寄留の例に從ひ各郡管轄地より入營せんとする者は第十二則の通り其本貫管轄廳の鑑札を持參せしめ名前書を添へ其到着する處の屯所長官へ差出させ長官取調濟戍營へ達戍營の鑑札下引替ふへし歸家の節は元の鑑札と引替可申事
六月八日

右一通
先般相達候戸籍取調條件中交代兵取扱振幷第八則添達但書別紙之通相成候間此段更に相達候事
七月十日
藩廳初諸役邸幷戍兵交代兵常備諸屯集所等は一ヶ所を一區となし官吏之内にて副戸長を立入籍取締の儀は都て戸長に可依準事
第八則添達但書
但藩内限區別之送籍は戸長互に之を送受すへしと雖も出廳遊ひの送籍は戸長鑑札へ出廳証印可相用事

同年八月二日

一諸隊之面々忌中引籠候節差支候儀有之候はゝ下長官以下は當分其隊長官にて午忌中出勤之儀可取計候上長官以上午忌中出勤之儀は可談出事

但下長官以下にても父之忌中は此例にあらす父隱居致有之候はゝ本文之通候事

同月十五日

一交代兵期年前兄弟二人の内他家相續養子願を初取扱別紙之通懸廳へ申上當五月御了簡濟に相成有之候旨戍營より達

交代兵期年前兄弟二人之内他家相續養子之儀願出候へは二人共忽ち獨子孫に相成候付兵役に差支候故右等之願は豫備籍に入候迄不取扱筈に候得共右にては致迷惑候者も可有之候付向後續之有無に不拘他家相續爲相濟候筈就ては二人共獨子孫に相成候も必す服役期年に到り無滯入營可致旨双方父及親類幷伍組証印之書付取置可開届事

但分家之儀は本文同樣之事

一前條之通候へ共期年に至り父死去致當主と相成候者は除役之筈候事

一未期養子之儀は御定續の者は証印書付等に不及致除役右續外之者は親類幷伍組願を以篤と取調候上可開届事

但兄弟之内實家に有之者獨子と相成候ても服役致候者證印可差出は勿論候事

一常備在營中養子取極置度者も前條証書相添戍營へ可掛合事

一子弟等にて文武官員之列に在職中他家相續致候者免官之上兵役年限に相當り候はゝ服役可致旨證書を以出願致候儀は前條同樣の事

但實家に有之者獨子と相成候ても服役致候者證印可差出は勿論に候事

同年九月朔日

一此度人籍御改正に付各屯營一ヶ所を一區となし官吏之內にて一人副戶長を立人籍取締可爲致等に付右樣相心得各隊にて一人つゝ人撰右姓名至急に可申出候也

八月廿九日　戍營

一戶籍編制別冊之通被　仰出候付其旨相心得左之條々本書と照準し處置可致事

第一二則

戶長副戶長の儀在中は鄉長庄屋に申付市中は市長町役人へ可申付事

第三則

藩內在町共一組を一區とし名草郡を始とし順序番號を可定事

第四則

每區內の戶籍幷戶籍表職分表各四通つゝ戶長より差出させ一通は戶長へ下遣一通は出廳に留置二通藩廳へ可差出事

第五則

每區內の出生死去出入等は其時々其副戶長へ屆させ副戶長より戶長へ屆戶長は人員の增減等を

加除して戸籍表を改每年十一月十五日限り出廳へ四通差出させ候儀等第四則之通の事戸籍專任は屬史生へ可申付事

第七則

戸籍順序は從前之通彌嚴重取扱せ屋敷地住居の官人役宅士族屋敷等へも番札掲させ可申事

第八則より第十三則に至る

本籍轉移出入して双方戸籍除加等無之者此節早々取調證書鑑札等爲取替自今右等不締之儀無之樣可取計事

但管轄内之送籍は戸長より之を致すと雖も甲出願管轄より乙出願管轄へ引移るか如きは他の管内へ移の例に從へき事

第十五六則

無鑑札の者止宿せしめさる樣旅宿は勿論一般に心得させ都て送留人は着發共其節々屆候樣可取計事

第二十則

氏神守札の儀は從前寺送りの振に可相心得事

第二十二則

六ヶ年目戸籍改は來申年より相初候儀に付同年二月一日より五月十五日迄戸籍出入差止め候筈に付此旨即今可相達置事

但不得止分は此限りに非さる事

第二十三則

來申年戸籍改方取計戸籍表等六月中藩廳へ差出候儀は第四則之通候事

第二十四則

寄留者は出廳にて出入人員增減を撿査し隔月末藩廳へ可差出事

第二十七則

戸籍の用紙藩廳へ可差出分公用の罫紙へ認させ候等に付兼て戸長へ下け渡し置可申事

右之外各則書面之通可相心得事

同年十月廿九日

一上長官下長官之内是迄父母之忌中たり共御用多候節は出勤致させ候得共向後父母之忌中は出勤不相成事

同年十一月八日

一交代兵之者嫡孫承祖之類或は一家を治め候兄病死之節は父母に准し候廉を以歸村差許候等に付其段相心得宜取計候也

同年同月九日

一先達てより左之ヶ條をも月末に屆出之樣相達有之候處右にては差支之品有之付向後は其即日に可屆出候事

一死失　　　　　　　一改名
但養子願(一本出 濟)出之品

兵學寮設置

兵學寮設置
明治三年年二月布告
一此度兵學寮御開業候付ては不日右場所御取建に相成候筈に候得共當分於塩路少參事宅教授爲致候付修學有志之向は二月十五日までに身分姓名幷に年齢等巨細短冊に認め兵學寮へ可差出事
本文開業日限幷課業書目教授規則等は兵學寮へ張出し有之事

課　業

數　學　　地　理　　究理學　　暦　學
練兵學　　諸兵規律學　　諸兵警備學　　建築學
兵法學　　軍律學　　給用學

明治三年二月四日津田大參事より達
一此度兵學寮爲置候付ては是迄之洋學所は被廢候事
右學校公用局會計局之參事へ申聞る

兵學寮規則

右兵學寮は岡山(今の師範學校の處なり)に設置遠藤勝介岡本兵四郎教授に任す
和歌山藩兵學寮規則

兵學寮官員

寮長　一名　計司　仝　下司長　仝

同補助官（下司或は伍長之を勤む）仝　給餉使（下司或は伍長之を勤む）仝　史生　二名

右の官員は寮長の部下に屬し奉職

學官

第一教官　一名　第二教官　仝　第三教官　仝

第四教官　仝　第五教官　仝　第六教官　仝

教授士官

步兵士官　騎兵士官　砲兵士官

同下士官

步兵下士官　四名　砲兵下士官　一名　騎兵下士官　二名

右の官員寮長の部下に屬せすと雖とも勤務中は寮長の命に服從す

庖厨官　一名

右各隊の下司或は伍長輪次に勤む勤務中寮長の部下に屬す

同炊卒　一名

右各隊の兵卒にして輪次に之を勤む

使部

右同斷

厩　卒

寮長之心得へき一二之條件

一寮長は寮中の事務を總轄し且下條に記載する官員を管轄するを以て一般の心得は更に記載するに不及故に一事一言といへとも必す規律に法り生徒をして學術成業せしむるを目的とすへし故に勤務職掌は自ら遵守し諸官をして遵奉せしむるの規範となる可し

一勤務規則或は寮中の規則考定するに至りては十分衆議を盡し取捨裁判し入員に適當し規則を施行するに容易ならしむ可し

教官之職務

第一教授　一名

教官の總轄にして下條の學科に通達し生徒を督す

第二教授　一名

（タクチーキ）（ストラデギー）を教導す

第三教授　一名

皇國一般の地理學天文博物學を教導す

第四教授

測量學數學圖線學及ひ地圖を教導す

第五教授　　　　　　　　　　　一名

書籍上及事業上に於ける兵事の勤務を教導す

第六教授　　　　　　　　　　　一名

日本一般の學問數學手跡を教導

教授士官職掌

一教授士官は則六名にして二名は馬術二名は躰術及ひ器械躰術銃鎗劔法二名は操練及ひ勤方を教授すへし此の如く各科目を分て教授するを以て教授上の事件は熟慮の上取捨し生徒誘導の捷徑に備ふへし

一教授士官の職掌は己れ生徒の軌範となり專ら教導に注意し從て生徒之に服從し刻苦勉強速に演習及行狀も熟達し遂に士官たる事を得せしむるを主務とす故に居常に自ら方正謹直にして誠意を盡し生徒をして直に兵士の精神を得せしめ同輩の際も交情禮節を盡し一切卑劣の所業等勿らしむへし

一上條述るか如く寮中の大任は則士官にあるを以ての故に能く溫恭嚴正にして生徒の性質を洞知し其能不能に從ひ之を教育す可し

一教授士官は其和一致し互に各自の巧拙を論する事なく只管生徒の裨益となるへき事件を考慮すへし譬へは學寮の規則嚴重に守るへきは當然の事と雖も一種特別言語に難述情を以て之を活用し寸分にても生徒の爲に勉勵の道を開くへき事

一生徒中性質に於て各不同ありと雖も之を能く誘導し假令演習と雖とも實地に臨む如く謹愼嚴肅に心得させ父母の國に對し忠節を盡すを目的とし敎導す可し
一生徒の爲嚴法を設け敎戒を加ふるは只生徒をして遊惰浮薄の弊習に陷らさらしむる故なり
一敎授士官は始終奉務中の事件又生徒に關係の事務等時を以て寮長へ達し或は時々敎授官會合し寮長と共に彼是の事件を討論し決議の上裁斷施行する事あるへし
敎授士官は一員つゝ一週間の當直相立生徒各室中の事件悉皆注意し裁斷をなす可し若其當直の士官事故有りて出寮する時は其旨寮長へ達し他の士官を以て當直相立退寮をなす可し
一當直の士官は每朝の起床を掌り其他日々演習の刻限等を指揮し就中夜間各室を巡視し生徒の勤惰を檢査し而て生徒病氣等あれは容躰書差出させ隊伍取締の者に命して其事を書記せしむへし
一演習刻限每に生徒人員及遲速を檢査し若し欠席遲刻の生徒あれは階級上等の者をして書記せしむ可し
一每日（アペル）を爲さしむ可し
一（アペル）は勤務職掌を整正し其他命令を通する爲にして寮長より命せられたる時限に當直の士官生徒を集合すへし生徒自修の刻限は嚴重に遵守せしむ可き事
一生徒の室中は兵隊の屯營同樣の規律を遵守せしめ時宜に寄適宜の法則を以て裁判をなすへし
一總て各室より勤務上の事件を達し出れは一纒にして寮長へ差出すへし
一糺命所の鍵は當番士官預り置へし

一當直中は寮内の諸事務は明細に取調交代の時刻則ち日曜日午後新當直士官へ演達す可し

教授下長官職務

一教授下長官は各科演習時間中各隊長の命令を受け兵學寮に出張し生徒へ藝術を教導す故に演習時間中は寮長及寮中教授士官の命に隨從す

一歩騎砲下長官七名輪次に一名つゝ一晝夜交番に當直す十二字より翌晝十二字まで總て寮長より出る命令を下司長より受け寮中に布告し其他毎夜生徒の室内を巡察し下司長の指揮に隨從すへし

兵學寮官員職務

一第一會計官

總て寮中の會計を掌り隨意に金錢を出納するを許さす逐一巨細に計算し簿帳に書記し月末に至り金錢の出納を考閲し寮長へ達す可し

事務の緩急に因り副官一名を使役す

第二給翩使（ふりーる）

職掌總て寮中の器械書籍及ひ生徒へ賦與の衣服臥床其他物品の員數を檢査し毎事各室を巡察し破損の物品あれは速に寮長へ達し許容の上修繕す

第三下司長

職掌生徒の俸給を配賦し日々演習の課目を筆記し及ひ生徒の進退等を檢察注意す演習の節生徒の齊整に注念し藝術に關渉の事件は寮長の命を受け布告す

總て寮長の命令は教官たりとも此官より演達す
毎夜生徒の室中を巡行し檢査す演習中生徒の勤怠を正し行狀不正の者は寮長に達す故に藝術演習の時は演習場へ出張す
下司長の副官として下長官一員從屬す職掌本官に同し

第四史生　二名

職掌寮中の書記を掌る故に怜悧にして速に筆記する者を選擧す

庖厨官員

一下長官一名兵卒二名一ヶ月毎に交代し庖厨に從事す故に勤務中は寮長の部下に屬し會計官の命に服す

使　部

一兵卒二名章服を着し毎朝七字より出寮し寮長の役使を爲す故に寮長の局の近側に占居すへし
一日交代にして夜は要務終り寮長の許容を請て退寮す
一寮中士官以上之者は章服を着する兵卒一名つゝ役使す
（一本ナシ一寮中諸掃除の爲め四名の兵卒を備ふ）
他の者を以て之に代るも可なり
寮中の使部は總て章服を着す故に章服を着せさる者は寮門を出入するを許さす若し章服を着せさる者出入する時は番兵檢査し印鑑を持する者而已許す然とも章服を着する士官と同伴する

時は許す事とす

一各大隊より輪次に當直する兵卒は各室掃除及温室器等の用に供すへし

一生徒の衣服革帶及手銃掃除其他の用に使役す故に通常俸給の外寮長の見込を以て生徒中より若干の金を集め賜與す

檢查規則

檢查は各隊中入寮すへき者の材幹智識を試驗し生徒と爲す可き者を採撰するものなり

檢查に當る者は各大隊中年齡十七才以上廿三歲以下の者にして既に六ヶ月練兵演習に熟達せる者なり故に檢查の時當人在職中の勤書を書記し之に小隊長及大隊長調印せる書面を出す可し

其勤務書の中には下司或は兵卒其職任に堪へき者にて成業の上戰地に用ゆべき躰格材幹あるを書記し且服役の時間其者の才能智識の淺深をも書記すへし就中其智識淺深中勤務上に關係の事件を主とし且當人職掌の勤務而已ならす他の官職の勤務も辨知する事を記すべし

一入寮すへき者の學識を檢查するには其者修學せし學校よりの證書を按すへし然らされは檢查の時の景況作業に隨て檢查す可し

一故に教官は上條に揭くる事件を能辨知し且皇國の歷史等に達したる者を選取すへし

一生徒たるへき者學術に熟達すと雖とも士官に登用せられさる氣質の者并廢人則耳目口鼻の不具なる者は除去すべし

一入寮を許すには左に揭示する條件を了解識知する者を取る可し

第一皇國普通の文學を辨解し手跡も相應に書記し交際上の消息等も遲滯なく書記し且支那文を辨知し皇國文章家の派脉をも辨解する者

上條の事業聊も欠れは士官の任に堪へさる事とす故に右等の事件は檢査士官試問の答書を以て衆議し一定すへし

第二洋學に通する者少くも文字の綴續を知り數字を讀み得る者

第三皇國の算術一通り心得且(マテマテーキ)をも辨解する者

第四地理學の要領を知る者則水理高山大河等皇國は勿論万國に渉り其他皇國中の地形を暗記し地圖を引山岳其他要害の地を知り諸府藩縣の地形人口戶數村落の地形人口戶數水源港口等就中本藩の事を辨知する者

第五皇國古昔よりの記事及ひ沿革　帝王侯伯の變遷古來英雄の姓名事業可成は世界記錄の大凡譬は何年何人あめりかを發明し何年何人火藥を發明し或は何國とは皇國と何年より條約交際を始めしにや或は何國とは交際最も厚き等なり　就中日本近代戰爭の記錄其時の軍陣都督及策略勝敗等

第六圖學圖線學畫學

上條の科目中に欠たりと雖とも又他の學術に熟達する者あれは其學術を檢査し以て其欠たるを補ふへし都て往々士官に成業し奉職の心掛けある者は逐一具さにヶ條を檢査すへし又檢査の景況に依て士官に成業すへき人才は檢査官の証書を以て裁斷すへし若し十七才以下にて檢査試問を望む者は政府の免許を受くへき事とす都て檢査を望む者は其所屬の本隊より當寮檢査官へ達

すへし當番に於ては戍營へ達し戍營より檢査官へ達する事とす撿査官は其者を試驗し及第せしかを衆議し一決の上戍營へ達すへし

若し第一試驗の時落第する者は再ひ三ヶ月或は六ヶ月の後試驗す第三回に及ひ尙及第せさる者は是を廢棄すへし

及第せる者は檢査官より戍營へ達す而して戍營より之に生徒を命す生徒の命を受たる者は直に入寮すへき事とす

兵學寮生徒入寮免許之規則

一入寮は各大隊長より直に寮長へ談す而て生徒入寮の式は一ヶ年に一度則十月朔日と相定む故に入寮の者は右日限より四週間（廿八日）前迄に其旨を達し（出可し[一本ナシ]）若一日も遲延すれは其年の入寮を相省く事とす

入寮を許す生徒は左の條件を記述す可し

第一　隊名　　第二　其者の位階

第三　姓名　　第四　宗門

第五　誕生の地名　　第六　年齡及誕生の年月日

第七　兵役に入るの月日　　第八　（フエンリヒ）拜命の月日

第九　鄉學校の場所及稽古の課目且何年間學校にて修學せし等

第十　父母の姓名及在不在

第十一　生徒月給の外學費何程の金を父母等より受取へきや其他借財の有無等
但借財あれは月給の內より積置を爲し之を以て辨する等の裁判爲すを以てなり

項目	記載
兵種	歩兵
位階	フエンリヒ
姓名	何の何某
宗旨	何宗
出所	和歌山
誕生日	何年何月幾日
服役日	何年何月幾日
フエンリヒ登科日	何年何月幾日
鄕學校の地所	何郡何村師匠姓名
稽古の長短	何ヶ年間算筆漢書修行致し
同科目	何ヶ年何地へ罷越同所にて修行
父　父の位階及ひ在不在	何格式或は何商賣人存生

母	母の實家在不在	何國何所何の誰娘存生或は病死
月々資費		月俸　何俵
負債有無		負債　何十兩
備考		同人添書 第一勤務中行狀書 第二兵役中勤務 第三フェンリヒ登科後藝術書 第四附屬裝具調書 第五學費蓄財調書 何小隊長　何之誰

右の外尙一二取調へき條件左の如し

第一當人勤務中行狀書

第二當人兵役中の勤務書是則大隊長より此者は修學を爲さしめ可然等の見込を書記せる者

第三（フェンリヒ）登科後藝術書

第四生徒に屬する衣類軍裝武器悉皆の調書

第五學費蓄財の調書

總て右の書付は小隊長及大隊長にて檢し其大隊の調印を爲す可し

第一勤務中行狀書雛形

此の者何ヶ年相勤行狀宜く兵學寮へ差出候而も何等故障等無之當人勤務中何々の罪或は罪狀無之との事等を書す

何大隊何小隊戍兵　フエンリヒ　姓　名

何月幾日　和歌山　大隊長　姓　名　印

第二勤書雛形

此者性質敏捷にして勤務中兼々勉强術上大に熟練致し候者にて（フエンリヒ）の任に堪へき者也

何大隊何小隊戍兵　フエンリヒ　姓　名

何月幾日　何小隊　小隊長　姓　名

大隊長　姓　名　印

「原書第三雛形を脱す」

第四生徒附屬裝具雛形

何大隊何小隊戍兵　フエンリヒ　姓　名

此者に附屬の裝具は

第一　新き章服　一具　第二　章服但稽古着　同

第三　沓　内一足新き　二足　第四　木綿服當時新兵着用の筋に似たるもの

第五　新編作　　二通り　　第六　革帶胴亂附　　一具
第七　帽子内一つ新き　　二通り　　第八　鉞機銃　　一挺
（ハヨ子フト）并に附屬具悉皆乃ち三つ又一つ（ナーテルロールシロッセル）一つ（ラインケル）一つ鉞一本
第九　背嚢　　一脊　　第十　白革手袋内一つ新き二組
第十一羅紗雨衣　　一具　　第十二手帳給金請取渡及諸雜費ひかへもの　一冊
第十三謠曲本　　一冊
以上　　和歌山何小隊長　姓　名
何月幾日　　大隊長　姓　名　印

生徒之區分

一兵學寮生徒習熟の者は兵種に從て隊伍を編成し敎導すへし乍去隊伍の人員は多少に關係せすと雖も二十名より多かる可からす而して二十名の者可成丈一室に居住せしめ演習も一同に爲さしめ而して右隊伍は學術同等の者を主として撰み且其隊伍は敎授士官へ配與し管轄せしめ而して右隊伍中より三名の者を撰ひ各取締の任を命す
甲老熟の者を撰み其隊伍中生徒の勤務を悉皆管轄せしむ
乙室中の古參の者を撰み室中の事務を悉皆管轄せしむ
丙各階級中上等の者を撰ひ學問上の管轄せしむ
右兵學寮長の思慮を以て撰擧すと雖も可成丈古參の者より撰擧すへし其他乙丙も同樣たるへし

一生徒退寮の時免許書へ前件甲乙等の勤務を逐一書記すへし是れ則生徒一の稱譽となる事とす

隊伍取締の職務

一此職掌は自己總管の隊伍中生徒の勤務上に關係の事件は十分注念し士官に代り勉勵すへき事
　但隊伍の者も其人に對し勤務上の事件は長官同様に心得へし

一（アペル）或は（ハラーデ）或は技術操練の時には生徒の人員或は病氣等の事を夫々其場に在る士官へ達すへし

一演習中は自分の居室を明るとも苦しからさる事

一自分は勿論生徒章服を着け劍を帶ひ衣冠を正しくし其外食堂の世話并廊下階子等規則の通爲相守若し不都合の事件あれは自分の權を以て裁判をなすへし

一毎朝生徒を悉く檢査し若病人等あれは其旨書記し巡察の士官來る時演達すへし

一食堂の使部庖厨方等不取締或は食味不良等あれは其旨士官へ達すへし使部料理人等へ直に談判する等決して相成さる事

室中取締の職掌

一此者の職掌は室中にて談論交際等都ての取締を爲すへし

一右之外一室生徒中の行狀禮儀等に就中注意し卑劣の動作を禁し生徒室内の出入に注意し兼て自分は最も方正にして室中の軌範たる事を銘記し生徒中万一不行狀の者あれは訓戒し之に從はされは法律に從ひ處置をなすへし

一日々時刻を定め室中を掃除せしめ其外器械等を兼て整置し使用の後は元の位地へ片付へき事

一生徒等使部へ對し不理の所業なき様注意すへし

一士官巡視の時は室中の生徒の人員幷傷損の件々等巨細に演達すへし

一各室入口毎に生徒組合の姓名を奇麗に書記し掲示すへし

一生徒轉室の時は其事件逐一敎授士官へ達すへき事

一室中の帳面幷表等は兼て規則の通り致し都て器械等も規則通整置し若し不都合の事あれは其旨敎授士官へ達すへし

學科取締之職掌

一此者の職掌は授業の時生徒各階級に從ひ定位に居るかを檢査し若し定位に居らされは逐一敎授士官へ達すへし

一講堂に於て敎官出席前には生徒をして別して靜正を爲さしめ若し遲く出る等の者あらは其姓名を書記すへし

一授業中は生徒をして能規則を遵守せしめ書籍繪圖雛形等都て稽古の器具を整置し傷損なき様注意すへし

一躰操稽古の時刻前後には生徒を整頓し進退すへし

一此者は取締の任なるを以て自分無據事故ある時は其旨當直敎授士官へ申達し代人を相立つへし

生徒一般之心得

一兵學寮へ寄宿修行を許されたる者及ひ兵學寮にて試問檢查の上及第せる下等士官等は自己の本隊を離脱する者にして其者の一身は全く敎授士官及學官の管轄にして其部下に屬する者と心得へし故に入寮中は全く本隊に關係なく都て寮中の規則を遵奉する事本隊に在りし時の勤務同様と心得十分勉勵すへし

刑典は寮一定の律ありと雖も又本隊に在りし時の律をも遵守すへし

一入寮中學術演習は自己の勤務職掌に銘心し且學官の講義等は隊長の號令と心得嚴然勉勵し遵守すへし

一生徒敎育の爲に士官を置くものなれ共悉く行屆き難き件々もあるを以て生徒中相互に注意し學術研究を爲すへし

一生徒は就中群集の時或は式立たる時には不正の行狀無き樣心を掛くへし故に生徒中相共に輔佐し若し一人不行跡のものあれは速に異見を加ふへし

一行儀正しく温順なるは殊に生徒に於て銘心すへき事とす

一勤務職掌殊に交際上に於ては常に心掛居るへし生徒交誼を結ひ往來する者の內不正等の者あれは異見を加へ用ひされは速に達し出へし

一（アッペル）の時は寮中の者悉く章服を着す

衣冠を正し革帶を〆履沓を清淨にす

一都て願達の事件は（アッペル）の時爲す可し

一金錢賭物勝負事一切嚴禁す

生徒雜則

一生徒の衣服は上品の物を以裁製し配與すへく乍去其裁製は規則の通り致すへし

一生徒外出の時のみならす平日演習の時といへとも兵隊勤務の法則に從て進止し衣服も從て整正すへし乍去演習時宜により鈕鉦を解脫せしむ

一生徒室外にては一切隨意の服を相用ゆるを禁す乍去已の室中には規則外の服を用ゆるも可なり

一(マンテル)は只雨天及寒天の時のみ用ゆへし

稽古必用の品則ち筆紙墨幷必要の書物は私費を以て相求むへし

但燈油炭等は官費なり

圖線學或は地圖學傳習の爲めの手本は敎官より之を與ふへし

一兵學寮附書籍文庫へは日々時間を定め勝手に出入を許す拜借すへき書物あれは証書を出し自分室中へ持參するを許す

一拜借書籍は四週間迄は許す猶其余拜借せんと欲せは其旨願出免許を請ふへし

生徒食事

一食事は健康軀を養ふ爲め十分に厚味滋養物を食はしむ乍去兵卒たる者は過常の奢に不流總て簡易なるを尊むへし

一生徒の食事は寮長より定たる食堂に於て食すへし右一所に食はしむる主意は兵卒は國家の爲め同

心協力し奉公する者なるを以て生徒の時より一和をなさしむるなり

一右に諭する事を生徒に能心得させ一同共和せしめ教授士官中より一兩名或は不殘始終一所に食事すへし教授士官一所に食事すると云は行儀を教ゆるのみならす少しも裨益の事件を說聞す爲なり

一食事の儀は上條の如く爲さしめ寮長は始終能其事を心掛第一金錢上に注意し而て折々食味も取替簡略にして厚味滋養の物を與ふべし故に兼て此旨趣を食事に關係の者へ心得さすへき事とす

一寮中酒を禁す乍去非常臨時慶祝には用ゆるも可なり

罰　律

一寮中の刑罰の所置は寮長步兵聯隊長と同樣の權を持し裁判す右以上之刑に至ては逐一都督へ達し處置すへし

一總て生徒學寮の法に背く者は一應糺命所の規則を以て之を罰し重て法を犯す者は退寮を命し之を本隊に返すへし

一上文に諭する通り相互に助け若一人の者惡事を知りて之を隱し外より發顯する事あれは犯罪の者と同罪たるへし

一總て生徒は寮長の免許無して借財なせは糺命所を以て之を罰す重て法を犯す者は本隊に返すへし

一糺命所は三等に分つ

室中謹愼　　寮中謹愼　　番付謹愼

一寮外禁足は尋常の演習幷食堂に於ての飲食は差止むへし

一室中幷寮中に禁足の者は演習を止む故に代りの學課を與ふへし
一總て罪に處せられたる者は糺命所出入之節取締の者立合取扱ふへし
一番付謹愼の者は戍兵の糺命所へ送るへし

生徒病氣の取扱

一生徒病氣の時醫者の診察に因り快復なし易き病氣の外は十二時日本より永く寮中に止るを禁す速に病院へ送るへし若寮中に於て治療爲す事を得は兼て一室を設け十二時間以上と雖も室中へ差置くへし

教授士官操練及勤務演習教授の定則

一實地に於て勳功を顯はさんと欲するには兼て粉骨勉勵を爲さしむ可し而して生徒成業の上士官と爲すには總て學科の基礎より十分に研究せしめ年齡相當の知識見界を廣め之を以て活用するに注意せしむへし故に書物上の勉强より最も術業に於て之を施す事十分に勉勵せしむ
一術業に關係する演習を第一と爲し而して書籍上の(タクチーキ)及勤方規則を修業せしむへし都て兵隊たる職掌及精神を練磨し此に於て書物上修學之外に少くも兩度つゝ規則に從て十分術上の演習せしむへし演習は兵卒普通の演習より伍長及ひ令官の演習をも爲さしむ
一術業操練演習
第一銃を執ると執らさるとの操練演習最も規則を守り教授すへし
第二小隊運動則ち小隊の整伍の運動進退是も亦同く規則を守り教授すへし

第三操練を書籍上にて研究せしむ

第四細索操練を教授すへし

一騎兵の操練演習は馬術の教授士官之を教授すへし

一騎兵の生兵教導は略歩兵の生兵教導に同し故に器械躰術騎兵に要用の術は教授すへし其他の演習と雖も生徒の人員多少に従て歩兵操練をも一と通り演習せしむへし

一歩兵の操練演習は則歩兵操練規則過半飜譯あり第一第二編を基礎として教授す其他演習は撒兵運用を主として教導すへし

一射的演習は最精密に教授し就中姿勢照準法を主とすへし故に空發を尤分演習せしむへし

一操練演習の衣服及武器等は教授士官最も注意し演習は豫め一二名つゝ教導し而して隊伍に編制すへし

一(タクチーキ)に關係の術業演習は則生徒諸學科終業の上教授すへし故に右終業までは勤方を十分修業すへき事とす

一生徒行狀及交際上の事は教官より漸々に教ゆへし故に生徒退寮の時は寮中にての勤務行狀の免許狀は巨細に認むへし

一教授士官は方正謹直生徒に對し温和にして嚴肅に流るゝ事なく生徒に禮節慈愛を盡すへし若し失事ある時は教授士官互に友情を以て之を戒諭すへし

一手銃解脫は則ち射的の教授士官及繰練の教授士官注視し寮長も亦注念すへし

一銃の掃除は初め生徒をして之を爲さしめ其事を了解すれは兵學寮當直の兵卒をして爲さしむ然れとも銃不清拭等の事あれは生徒の罪となすへし

一生徒若日曜日毎の（バラーテ）を演習の爲（バラーテ）場へ出勤せんと欲せは寮長より戍營へ達し免許の上許す事とす

教授科目

一學科は左の四科に區分す

甲日　武器學　　乙日　（タクチーキ）學

丙日　築造學　　丁日　（テレーン）學及地圖學

其外勤務職掌軍事に關係の書法（手紙或は（ラホールレ）等）馬術銃槍并釼法躰術器械躰術此外一般の文字を教ゆ

元來勤務職掌に關係の事件は（タクチーキ）の學官之を掌るへし

但し當番に於て之を取捨す

其外甲乙丙丁の學科は夫々學官へ配當し教授せしむ

於孛國甲乙丙丁の學科は學官二名則ち一名にて二科を教授す

躰術之教授は六人の教授士官之を掌り術上勤務の教導に於ては之を輔助せしむ

一寮中の教授は二個に區分す乃ち口授及ひ實驗而して實驗は又術上の演習と（アフリカトーリセ）（術上に關係せる事を筆紙上にて學ふ）との二箇に區分す而て術上の演習は口授と相共に並ひ教ゆるを得故に書籍上にて口授し終れは則ち之を試驗せしむ是術上の演習とす

一總て教授の目的は生徒の爲に日課を立適當の學科を分配し教導を爲し終に成業し士官たらしむる事を要す

一順序を以て教授の日課を取捨し授業の後は復習を主とし一概に先進せしむへからす

一都て學官開業の時に當りて日課を定め寮長と討議すへし

一一週間の日課凡左の表の如く分別す

註此の表あり照考すへし

一馬術器械躰術及躰術劍法を學はしむるに一週間に右の各科中へ二字間を課すへし自修の時間は休息の時間と參考し寮長より適宜に之を課すへし日課の區分は寮長の見込を以て時宜により一週間毎に變革する事あり口授躰術馬術劍法等は午前に於てし其他操練等は午後自修は夜間を以てするを可とす

一夏時長日には自修の刻限を極て早朝に課す事あり

學課教授の區分

一武器學

第一武器の種類各種の組立及ひ用法

武器一般古來の沿革の概略

第二火藥の制法火藥の害を醸す原因火藥の試驗法火藥善惡を知るの徴候

火藥製造に注意すへき條件火藥搬運の心得

發火の理及ひ火藥雷管（コロール酸）（カリ）（トントル）摩擦管綿火藥

第二に載する處のヶ條を敎るに通計五週間を要す

第三大砲戰車及ひ大砲の種類鑄造砲の檢査收藏法其他砲車等之を敎ゆるには通計四週間を要す

第四（モニチヲン）之基論

（モニチオン）の功力彈丸裝塡法燒彈狼火花火（モニチヲン）の操作及ひ運送注意之を敎ゆるには通計五週間を要す

第五發射彈道無氣中有氣中砲丸運動の說點放及ひ戰地の功力之を敎ゆるには通計六週間を要す

第六大砲の使用及操練凡二週間を要す

第七手銃小銃「ヒストール」の類 檢査法及ひ用法掃除法解脫方彈道の距離裝塡照準法引金の引方点火消滅の注意備の操作法

（フランケ）武器類 劍刀（ハヨネット）等なり 此武器の功及製造法通計六週間を要す

一（タクチーキ）學

第一戰爭幷戰爭の事件

都て策略等一般の誘導（タクチーキ）及ひ（ストヲテキー）の概論及ひ右之二學に用るの言語キンストウオルト兵力の多少（タクチーキ）の各論兵隊の整伍運用 陣營組立の置き方 戰規解隊の規則撤兵及ひ構兵の戰略戰闘遠近の差異軍備の性右を敎ゆる通計大凡四週間を要す

第二三兵（タクチーキ）の狀態

右を教ゆる通計大凡四週間を要す

第三（テレン）の戰爭上に關係せる事件及ひ兵備の編制（テレン）の鑒定法及（テレン）一定上運兵の規則

進軍の心得戰爭の準備行軍の規則順序（カルチール）の心得舍營野陣の心得給育法蒸汽車道運漕及ひ馬車運送　右は大凡四週間を要す

第四警衛兵幷に探索兵行軍警禦兵の勤務（ホールポステン）の勤務斥候兵巡邏兵等の心得

右は大凡三週間を要す

第五軍學防禦及ひ進襲の心得

敵勢の監察（テレーン）戰略戰爭を始むるの概論

右は大凡五週間を要す

第六三兵戰闘の景情重歩兵輕歩兵或は鍼機銃を持たる小隊の運用歩兵騎兵を防禦するの心得上に反對の心得

砲隊の用處三兵一器と爲すの概論戰場規則

右に述る所と第五に示す學科と參照交錯し教授すへし

第七戰地の形勢に隨ひ進退法

高凸地所即ち丘岡の防禦及ひ進襲の心得

低凸の地小川泥土濕地森林村落（テヒレー）圯橋堤戰闘の心得

右は六週間を要す

第八小戰鬪

小戰の編成運用法行軍（テタセマン）の戰鬪彼我の侵襲潜覆兵（テタセマン）の指揮戰場の動作兵隊の運輸人馬生活物の掠奪

一近世火器機關の巧良及ひ戰略上に關渉する事件其他電信機の用法等參考の爲め授くる事とす

勤務規則

勤務敎授は（タクチーキ）の學官之を掌る如何となれは勤務は（タクチーキ）の基礎となり始終連續するものなれはなり

第一　勤務に就ての敎授の法は則ち兵役の建制軍兵の區分全軍の多寡强弱

第二　徵兵の法服役の心得徵に應する者の區別

第三　隊伍の進退軍の準備　屯營地方の勤務

一築造學

第一　築造學一般の凡例及ひ築城の目的　之を敎ゆるに三四日を要す

第二　戰野の築造土砂及ひ樹木を以て胸壁を築造する操作　凡四週間を要す

第三　戰野胸壁築造の法則及ひ器械胸壁築造の時間算法

第四　天然固有物（墻堤橋林）を以て守禦と爲すの法及破壞法天然物補修の築造法　凡三週間を要す

第五　防戰及攻戰に對し胸壁の築造法　凡一週日半を要す

第六　野戰の道路車道渡津橋梁を破壞し又敵の破壞せるを造作せる法　凡六週間を要す
第七　宿營の建制法
　譬へは天布を張り厩を建庖厨場を取建る法
第八　野戰の築造法及び砦城造營法の區別
一テレン學及地圖學
第一　圖線及ひ地形の描寫是(テレン)學の基礎にして之を熟練せしめ漸々地形の利不利を分別するに至るへし
第二　描寫圖線の口授即器械用法角度の用法書法の演習彩色料の用法
第三　縮圖の算法描寫の種類區分の目的
　軍務書記の法則
一此(一本溢利科)に屬する者は武官の願達書訴訟書隊長への傳達書或は布令書表面等悉皆の日々勤務上に關係する書法
一左に掲示する所の者は生徒に授くる書籍上の學科なり
　消息文　支那文　皇文派脉　日本算
　皇歷史　オクム　ラリフ　サウ
敎師見込
此度は始ての事に付其ヶ條全備の者得難く少し假すへし併往々漸次に右規則にすへし就中人柄も上等の家族より壯年にして上に論するヶ條に達したる者より取るへし譬へ術熟するも書籍上

不達者は士官の位に難堪に付書籍上にも達する樣にすへし

徴兵として服役せる者は現在の士官より學問上に於て達したる者のある樣にては不都合成へし

兵　數

一 兵制既整頓各隊將校人名の如き時々更迭轉遷あつて詳ならされ共明治三年三月　朝廷へ之届書記する處左の如し以て大數を知るへし

戍兵十二大隊　隊長初總人員　五千七十六人

但一大隊四百廿三人

內　隊長士官　九十三人　兵三百三十人

外に政事廳常備三大隊　隊長初總人員　千百三十七人

內　隊長士官　百四十七人　兵九百九十人

騎兵一小隊　隊長初總人員　百六十五人

內　隊長士官 十五人 馬 百六十五疋　兵百五十人

砲兵一聯隊　隊長初總人員　二百七十九人

但四小隊

內　隊長士官 六十三人 馬 九十五疋　兵二百十六人

工兵隊　隊長初總人員　五百七十二人

內　隊長士官　五十六人　兵五百十六人

輜重隊　隊長初常備輸夫共　八十九人
　内　十九人　兵七十人六
　　外交代輸夫無定員
合計　七千三百十八人　内隊長士官　三百九十三人
　馬二百六十頭

和歌山藩兵制獨立

一明治三年年二月廿日兵部省より天下兵制一定の儀左之通發令により次項之如く請願之處遂に獨立を許されたり

　　和歌山藩の兵制獨立を許さる
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　各　藩

兵制は天下一途に無之ては不相叶は勿論之儀に付先般兵學寮被設置追て各藩へも入寮被差許一定之制式に相歸し候樣御運ひ相成候得共即今常備之處編隊員數別紙之通御規則被相定候條此段相達候事

　二　月　　　　　　　　　　　　　　兵　部　省

　定

歩兵隊六十名を以て一小隊とす二小隊を以一中隊とす五中隊を以て一大隊とす則十小隊
　但嚮導以上諸有司右定員之外たり
砲兵隊　野戰山用　砲二門を以て一分隊とす三分隊を以て一隊とす則砲六門

一兵士年齡は十八歲より三十七歲迄たるへき事

但是迄之通隊士中三十七歲以上と雖も其人により强壯之者は格別之事

一練兵式之儀は先つ是迄相用來候式にて不苦候事

一石高壹万石に付一小隊之割合を以可相定候事

一士族卒族之外新に兵隊取立之儀被相禁候若万石一小隊之割合に不足候はゝ其旨兵部省へ伺出差圖を受可取計事

右に付左之書面提出之處三月十四日上け紙之通指令あり

今般天下兵制御一途に相成候樣之御趣意を以て追て兵學寮被設置一定之制式に可被相歸候得共先以即今各藩兵制編隊員數之御規則御布令之趣奉敬承候勿論當藩に於ても御趣意遵奉仕候儀は申迄も無之然るに右(御)[一本ナシ]規則中に士族卒族之外新に兵隊取立候儀御禁令に相成候儀定て深き御趣意柄も可有之歟に奉存候得共元來昨年來府藩縣三治一躰之御制度被爲建候砌より當藩政向追々改革兼て被　仰出之御趣意も有之舊來之門閥も相破り士農工商之四民同權一途之振合を以万事藩政向取扱罷在候夫に付當藩兵隊之儀は强ちに士分より撰擧仕候には無之別冊兵賦略則之通右四民中其年行に應し身躰壯强兵賦に相構候者を撰擇仕兵役に服せしめ候儀に御座候尤四民同權一途之趣意は兵賦のみには決て無之文武吏員之撰叙市在伍組之編籍に至る迄別段士卒族と他三民之區別無之樣に仕候に付今日に至り兵賦は士卒兩族に相限候樣相成候へは唯今兵賦編制に差支而已に無之一般御治躰之御趣意にも相響き甚以難澁仕候事に御座候

且今年之兵賦は最早大抵相揃候事に有之候に付當藩兵賦之儀は何分にも是迄之通別冊規則を以四民合一に兵賦兵役に相服候樣仕度候前件無據の情實御洞察被下候樣奉願候已上

三月十二日　　和歌山藩公用人　兩　名

兵部省御役所

上け紙　別冊之規則至當之事に付是迄之通編制可然候事

一明治三年五月十五日武官式服平服之制を定む服制之部に詳なり

屠牛所を設く

兵隊食料の屠牛所を設く

一明治三年六月左之通り大藏省へ請願之處翌年正月十八日を以て願之趣聞屆たる旨附札を以指令ありたり

於當藩管轄内牧牛場取開繁殖爲致候生產牛を以兵隊爲食料屠牛所相開度候間御許容被成下度奉希候已上

庚午六月　　和　歌　山　藩

火工術革細工之外國教師を雇聘す

火工術革細工之外國教師を雇聘す

一明治三年七月四日左之外人教師六名雇入の事を假條約書をそへ於東京外務省へ出願之處願之趣聞屆本條約取結之節は右寫可差出其上免狀可相達旨同月十三日指令ありたり

普魯生國火工家　ブーク　ワーゲネーヨ

同　革細工師　ワルテー　ブラットミドル

同　築城家　マイヨー
英國　法律家　サンドル

假條約

一孛漏生國火工家ブーク氏と條約取結候事左之通
尤雇入之儀は同國より呼寄候事
第一ヶ條　同人儀火工術爲教授和歌山藩へ可罷越事
第二ヶ條　同人儀右敎授に就ては宿料食費一ヶ月金百元之外に爲月給金貳百元可相渡事
第三ヶ條　右之外往來路用金六百元可相渡事
但參り掛け路用金は和歌山藩着之上相渡り歸り掛け路用金は歸國前可相渡事
第四ヶ條　右條約は往來日數之外日本神戸港着船之即日より日本神戸港出船之即日迄日數一ヶ年半十八ヶ月と相定候
併し同人敎授不行屆に候節は三ヶ月限にて暇可差遣事
第五ヶ條　病氣等にて七日以上休業之節は條約日限之内に算入不致若し三十日以上平癒難見留節は破約致し足下へ可引渡事
第六ヶ條　日本の法律は堅く相守幷に万事當藩之差圖に爲相背間敷事
第七ヶ條　同人雇入中當藩之差許無之候はては日曜日たりとも他行等爲致間敷事
第八ヶ條　密商ヶ間敷儀は一切爲致間敷事

西暦一千八百七十年七月
日本明治三年六月
ガールカッペン足下

本條約取結ひ候節右假條約に漏れ候ブーク年齢幷名前は横文にて爲相認猶又當人身分之儀は其國岡士へ問合證書取置可申事

カッペンより鹽路へ宛たる右同文言之假條約を取る

但文中可相渡を可受取と主客之差あるのみ尤寫しは和文なれとも本書は歐文なるへし

一革細工師ワルデー幷ブラットミトル兩人雇入之假條約書も前記同文言にて双方取替す年月日付前同斷

但宿料食費一ヶ月金五十元つゝの外に月給金百五十元つゝ往來路用は金六百元つゝ其外雇期限等は都てブークに同し

一火工術家ワーゲネーヨ雇入誓約爲取替書も右同斷日付同年二月西暦同年三月なり

但第二ヶ條に同人儀火工必要之小器械を撰み相求持參可有之事

第五ヶ條條約は往來旅中日數之外一ヶ年と定候得共万一同人教授振不行屆に候節は三ヶ月限りにて暇可差遣事

第六ヶ條日本之法律堅く相守幷に當藩に滯在罷在候カッペン氏之差圖を受且逗留中可致護衛事

第七ヶ條前件路用金之外往來旅中一ヶ月に金五十元可相渡事

右之條項を加へ總計十ヶ條とす宿料食費一ヶ月凡五十元之外に爲月給金貳百元可渡且出精相勤

教授行届候節は右給料一ヶ月凡二十五乃至三十元加增可致とあり外異ならす
一築城家マイヨー雇入誓約書取替書都てワーゲネーヨ同斷日附同斷
但土工術教授工兵必要之小器械を撰相求持參可致との外皆同し
一法律家サンドル雇入假條約書左の如し
假條約
今度法律學講授及ひ英語日耳曼語傳習の爲和歌山藩に於英人サンドル氏を於神戸雇入へき條約を取結ふ爲左之條々を取定めたり
一雇入之期限は先つサンドル氏和歌山へ着日より百八十日間を限りとすへし若期限後双方の中にて故障有之同藩の都合により雇入相斷候歟又は同人和歌山に滯在を斷候歟又は互に故障無之其後之續期限を增すとも何れにも期限二ヶ月前可申出事
一月給は洋銀二百七十五枚と相定め三十日毎に大坂及神戸之時相場を以て正金又は金札にて相渡し可申事
一同人和歌山藩雇入中は同藩より家屋一軒貸置可申事
但家具幷食料は相構ひ不申事
一傳習幷講授一日間六時之間は吃度相勤可申事
一怠慢又は病氣たりとも一ヶ月以上課業相怠り候節は縱令雇入期限中たりとも相斷可申事
一國內之法律外國人にても相守り可得丈けの各條は相背き申間敷則當時已に和歌山藩に於て雇入有

之候孛人同様たるへき事
右之通双方に於て違變無之ため假條約相定め置候事
明治三年庚午三月　　和歌山藩野口少參事
サンドル氏足下
本條約取結ひ候節右假條約に漏候年輸并名前は横文にて爲相認猶又當人身分之儀は其國岡士へ問合証書取置可申事
右同文言之約定書サンドル氏よりも出させたり
本條約取替の事筆記見へす詳にしかたし

西洋沓製法傳習を許す

西洋沓製法傳習

一雇入之孛人西洋沓製作及なめし革製法を商會所に於て開業之處往々盛大擴張の計畫を以て該業傳習受度者は商會所へ可申出藩内牛馬皮初諸皮類商會所へ買入へくに付賣渡すへく直段難引合節は勝手次第に可捌旨明治四未年四月四日市在へ布告す本邦にて洋沓の製造は之か開基にて後來益盛大に至り大坂鎮臺の需用をも一手に供給紀州沓の聲譽を博したり

諸兵解隊

諸兵解隊

此件は廢藩置縣により既に東京御移住後に係ると雖も因により兵制の結末を示さん爲に附記す
一明治四未年十一月二十二日兵部省より本縣及ひ田邊新宮兩縣一紙にて布達
兵隊常備豫備共來る十二月廿五日限り解隊原籍へ可復候最他方出張之分は追て歸縣之上同

様可取計此旨相達候也

右に付鎭臺召集幷縣下常備一小隊之外都て解隊可致生徒も可癈旨戍營及各郡出張所幷諸掛りへも布達す

一同十一月廿八日左之通達す

召集兵一統へ

此度召集兵被　仰出に付可罷越事

一同十二月廿五日左之通布告

今般從兵部省解隊候樣御達し相成候付戍營被癈候事

一朝廷は此時を以て初て陸軍省を被置し也故に諸縣之兵員を召集せらる我か歩兵は東京へ一大隊召集大隊長遠藤勝助少佐に任し已下將校任命あつて同年十二月廿七日和歌山出發和歌浦より千里丸に乘艦同廿九日東京鎭臺則辰之口舊歩兵屋敷に入營翌五年正月十八日鎭臺十五番大隊と可稱旨被仰出大坂へは半大隊召集大隊長茨木惟昭少佐となり已下拜任大坂鎭臺へ入營せり
砲兵は一大隊東京へ召集となり十二月十三日山崎成高初左之如く拜任砲兵等二百七十人を率ひ四斤山砲八門フロードユル砲四門駄馬三十八頭乘馬十五六頭（將校へは若山出發の際良馬を撰抜一二頭つゝ附與せられたり）器械全具悉皆準備若山出發海路同年十二月晦日東京に着す闕廣右衞門は是より先き九月に東京へ徵され砲兵大尉に任し尋て少佐を拜したりと云ふ

大尉之心得にて可相勤事

元隊長　山崎成高

二等大尉之心得にて同上　同　大崎長寛
中尉之心得にて可相勤事　元一等分隊長　三宅敏德
同　中井應義
中尉會計掛之心得にて同上　元聯隊令傳使　大橋永信
二等中尉之心得にて同上　元一等分隊長　松村恒久
二等中尉衣服掛之心得にて同上　元二等分隊長　寺井行篤
少尉之心得にて同上　同　草野可孝
副馬醫之心得にて同上　元一等分隊長　稻垣正幸

陸軍省にては未た全く砲隊之設備なかりしかは紀州の訓練隊一式を以て砲兵に充られ三番砲兵と稱し翌明治五年一月七日神奈川砲臺守備として横濱大田陣屋へ轉營同七年二月佐賀の變同年四月台灣の役に出陣續て熊本鎮臺を守りありしか同八年三月陸軍省組織改正により下士以下解隊せらる夫れ陸軍省有て以來砲隊は悉皆紀州隊のみにて他に一卒をも交へす砲隊の開祖たりしは歴史上赫々滅すへからす實に　我公國家に盡し給ふの結果と謂はさるへからす
前記將校之内中井大橋二名の他は江戸より松坂へ移轉したる佛式傳習之者也
騎兵は召集せられす單に解隊せしといふ

南紀德川史卷之百二十一

臣　堀内信　編

法令制度第一

法令

御條目總言

按に御條目と稱するは一國憲法の大綱にして細大一切之行政皆之に基く故に歷世御治世の初に於て諸士一同に正服登城乃至出殿を命し執政席々にて演達之を御條目席達と稱せり而して上下諸士よりは堅く遵奉違背すへからすとの誓詞を捧くるの法とす此御條目は元來　幕府の武家諸法度に準據せらるゝ也武家諸法度は天下御一統即ち元和元年七月　神君台廟兩將軍より初て天下に令せられ後猷廟の時寛永六年少しく改正を加へ給ひ同十二年六月御先代の法令年久しきを以て損益せらるゝの台命あり　嚴有公には御幼年なりしを以て寛文三年五月に至て發令此時大に潤色改正あり　常憲公には天和三年七月發令亦修正を加へられて法文全く完備に至る爾來　昭德公に至る迄御九世の間一つに天和三年の成文に據り一字の除加なし唯　溫恭公の時大船製造の一條を加へられしのみ我か御條目に在ては　國祖の御時寛永十八年の四十一條を初め寛文三年壁書十五ヶ條同八年二十七ヶ條を發令あらせらる（古へ典範の事を通して壁書と稱す蓋し官廳の障壁へ粘付掲示し遺忘を戒めたるなるへし）　清溪公には貞享二年初て十五ヶ條を令し給ふ蓋し天和の武家諸法

度に基き御先世の條目等參酌潤色を加へ給ひしものか爾後世々の御代替りには此貞享文を襲用せられ毫も增減なきのみならす近世に至ては御條目御制法其外諸事　御代々被　仰出の趣に不替樣との思召故御條目も先規之通其儘御用被遊旨執政席達諸役人末々に至る迄誓詞之儀も改誓詞に不及　先御代の誓詞を御用ひ被遊之旨演達して御條目法文を別に示さゝるの例となりたり

一御條目は終始武家諸法度に基かれたるもの故元和元年以降　幕府數世の武家諸法度を末に揭け參照に備ふ

寛永十八年條々

「寛永十八年二月」條々

一兵具之外無用之道具をこのみ私之奢幷嫁娶之奢いたすへからす萬儉約を可用事

一振舞之膳木具幷盞之臺金銀之さいしき堅停止也但御客之時は其(御)[一本ナシ]馳走之程にしたかひて面々私宅にても木具等可出事兼て横目中へ可申也

一音信之禮義馬代銀一枚或は靑銅百疋迄はくるしからす諸色此積りを以可用之酒肴等其分限にしたかい可爲輕少事

一徒黨をむすひ或は荷擔或は妨をなし萬一味致候事堅停止之事

一跡目之儀養子は存生之内に可申上也及末期に筋目なき事申においては御許容被成間敷也たとへ實子たりと云共筋目違候はゝ遺言御立被成間敷事

一改易之者幷立退候者江戸之儀は言におよはす洛中洛外大坂堺に罷在間敷也其外之所も其科輕重に

したかひ不可居住之旨可被　仰出候也

一手負并科人之儀其よしみたりともかくしおくにおゐては曲事たるへき事

一本主にたいし罪科ある者不可召抱叛逆殺害盜賊人之屆あらは急度可返之其外かろき科のものにいたつては侍は屆次第におひ放つへしこもの中間は可返之於難澁者番頭組頭令相談可濟之番頭なきものは年寄中へ達し可受差圖也もし他國之人よりかまひ有之由申來候者其品により或は返し或はいさまを可出事

一總別御暇不申上して他所へ參候儀かたく可爲停止事

一當番不參之輩其年之知行可被召上事

一番所あけ卯之刻以前に罷出候儀可爲曲事事

一番所請取渡し之儀番之多少に隨ひ其頭之差圖次第相手替りに可仕也相番之内是又可爲同前於違背者可爲改易事

一番頭組頭諸法度之儀不念に申付若(一本相違)背之輩有之時者其頭より可出過料但事により可被處罪科事

一樂書落書おとなは曲事少人はおいはなすへし本人しれさる時は其座敷之當番可出過料但番之多少によるへし

一諸侍中嫁娶之節其外事によりちかき親類之外は翌日見舞可申也

一丸之内たとへいか樣之事情有之共組頭下知なくして私に外より內へ入候儀堅可爲停止事

一科人御成敗之節は被　仰出役人之外出合へからさる事

一喧嘩口論堅く制禁畢若有之時令荷擔者可爲曲事

一けんくわこうろん有之時は近所之者之外一切不可出合事

一於殿中喧嘩口論有之時は其所へ近き輩寄合可相計之但其所之番之者を指置不可相計事

一物見或は大勢(伺)[一本祇]公之時何事有之共遠き座敷より猥に立さわき申間敷也總て事にも成間敷儀を見なから不可致惡事事

一火事番として番頭之内二人宛兼て相定置火事之所へ出合下知可仕也奉行目付使番(町奉行)[一本ナシ]者可出合也大火事之時は各別之儀也

一火之番之同心頭者其所々の前後を堅め役人之外火本へ參候ものを通し申間敷候付荷物のけ申者を留置其主斷次第可相渡事

一番頭物頭屋敷火事之時其組たりと云共役人之外不可出合事

一(待)[侍カ]屋敷幷町中火事有之時役人共幷其町之者之外一切不可出合但親類は不苦於相背者或は過料或は可爲討捨事

一諸役何事によらす被　仰付候時縦其身に不叶儀成共隨分相勤其上におゐて斷可申上替り之役人不被　仰付以前に態不調法に仕なし御用等闕候者可爲曲事事

一組中幷與力同心他組と申分有之時は其組之荷擔不可仕也若於相背者可爲曲事事番頭組頭互に及相談可濟之若滯所有之候はゝ年寄中へ達し可受指圖事

一知行所務諸色相定年貢所當之外非法をなし領地亡所に不可致之事

一知行境野山水論幷屋敷境何事におゐても私之諍論不可致之申分於有之者其番頭に可申也若滯儀在之者年寄中幷奉行に可受其意事付り番頭組頭無之者は年寄中奉行より可受指圖事

一百姓公事在之時地頭一圓不可構之郡奉行其子細を聞屆け滯儀有之は其地頭之番頭寄合奉行と致相談可濟之番頭組頭無之ものは奉行に達し可受其旨事

一男女抱置事年季十ヶ年を限るへし拾ヶ年過は可爲曲事事

一人之賣買一圓停止たり若猥之輩於在之者其輕重をわかち或は死罪或は可爲過料事付り口入可爲同罪事

一江戶或は御上洛之時御供に被　召連候衆は其分限にしたかひ人馬を令用意御歸國迄者萬事深く愼み下々に至る迄急度申付可致覺悟御供不仕候衆は彌堅く御留守を勤へし御用之時被成　御召候者共之外一人も私に拔懸に參り騷動之もとひと成へからす付御召無之に臨其期參勤仕度と企訴訟時之障に不可成事

一何事によらす訴訟かましき義在之共　御留守中におゐて身をひき家を明け候はゝ縱理分たりと言共可爲曲事事

一御留守之時者御留守居頭之可從下知事

一御弓御鉄炮之者家中步若黨の衣類(ひの)(一本ナシ)つむき木綿布紙子可着之也
但他國にては有合之衣類たるへしこもの中間はぬのもめん紙子可着之也若相背の輩有之は衣類をはき取へし其上其主人より過料として銀子一枚可出之事

一朱さや長柄目にたち候大かたな大脇指此外かふきたる拵堅く可爲停止也
但刀は二尺七八寸脇差は一尺八寸迄不苦若於相背者見合次第刀脇差を取其主人より爲過料銀子一枚可出之事
一於城中若黨幷小者不依何事背御法度不行義之族有之時は可誅之見のかし候はゝ其所之番衆輕重により可爲過料事
一門立辻立仕るへからす幷ほうからけ、ひさしひたひ、下ひけ置申間敷候事
一若黨小者俄山伏或はこもそうなとをいたし候はゝ前之主人見出し次第ふだひに可召仕事
一不申上して不叶用之儀は時節を不計可致言上事
右可相守此旨者也
寛永十八年二月十三日

「南龍院様御壁書」

可遵守之條目

一孝行を專とし忠義を勵み文武之藝を勤習へき事右件は士たる者の常之事也今更事新敷不及言といへとも彌無懈怠可相守との　公儀御敎訓也然は下々忽に不可奉存事
一罪人及刑罰之時其役人之外不可出向　公儀之御法度如此也彌其旨を守問見廻をも堅不可仕尤可愼事
一徒黨之事　公儀先御代より御法度にて當時猶以堅被　仰出所なれは彌以能可相守其上先年御國に

ても此段は御壁書にて親切に被　仰聞候定て何も失念は仕間敷と　思召候故今更委細に被　仰聞に不及猶以向後専一に可相守事

一私之諍論は大方自他之是非を辨る事不成によりて起もの也私として諍論に及者尤禍之端也諍論に可及程之儀を下として面々贔屓〳〵に不可致批判必其頭々に達して上よりの御裁判を可受也末々に至る迄其身に應し或人返し或は知行之境論或は山河之公事其外何事にても諍に可及事於有之は自分として是非を不可付其組々之頭指引仕所又は達奉行所其裁判を可受事

一諸頭之緣組上へ達して相定事前々之通也公家との緣邊は今度　公儀之御法度なれは不及言縱僅之者にても公家のゆかりと承る者をは組頭番頭に知せ其上にて可受裁判私として相定におゐては可爲曲事也

一諸事儉約に可仕事前廣より被　仰付候通彌以可相守其上今度従　公儀御法度如此有之時は一入可敬愼事嫁娶之儀衣裳之品音信贈答之禮參會膳部之程其外諸事に付尤懈怠不可仕者也

一乘物之儀踈に不可存御家中面々前法之旨能々可相守事

一構有之者前々より之御定之通也若走籠之者有之時深く賴といふとも其罪を能承て少も有罪者を不可置此旨を堅相守　公儀如此天下へ被　仰出候上は末々迄も能可相守義也其者の過のみならす御家之御法度をも妨申事に有之なれは深愼可申事

一知行所務之事御家中彌正路に可申付油斷仕間敷事

一吉利支丹に疑敷者於有之は無油斷可申出實吉利支丹に無之者を卒爾に申出候分は不苦間隨分聞付

見付次第可申出事
一不孝之輩可處罪科と今度従　公儀被　仰出候上は彌以孝行を専一に勤可申事
一殉死之事今度従　公儀御法度被　仰出候誠以御尤至極御代長久之善政と被　思召候其上内々御家中頭共迄は前廣に被　仰聞候儀も有之事なれは此段は御家中之者共は一入他家よりは殊に不愼して不叶儀也何も末々迄向後能相心得愼可申事
一面々之知行所往還有之所は往來之人々迷惑不仕様に念入可申付若往來之人遺失仕候物有之は何物によらす拾ひ次第早々其人を追付返辨可仕也或は程をへて追付候事不叶は庄屋へ相達し飛脚を仕立可差遣之庄屋は大庄屋に相談して御代官郡奉行へ達して追付返辨可仕事
一面々之知行所にて少之事にても私之法不可立尤小社小寺等に至迄猥に私として不可爲廢立御代官郡奉行に相(達カ)(遠)して可受指圖事
一家業を専一に務不慮之幸を不可願家業を不守して博奕色欲等に溺るは愚蒙之至罪尤難許能々可相嗜事

卯十一月

右者寛文三年に被　仰出御壁書也

寛文八年
御條目

「寛文八年九月」　御條目

一文武之道を勤義理を専にする事諸士兼て相守る所也殊御條目に詳なれは自今猶末々に至る迄不可懈事

一不勤家業而不應其身行跡をなし或好遊宴溺亂醉色欲等之類可深愼宸博奕停止之事
一兵具之外無用之道具を好私之奢不可仕嫁娶之儀式衣裳之品音信贈答之禮參會膳部之程其外諸事兼て相定候通彌儉約可相守事
一結徒黨成誓約之儀禁制之事
一殉死彌可爲停止事
一耶蘇宗門に疑敷者有之は早々可申出宗門にて無之者を卒爾に申出る分は不苦疑敷者を暫も不可隱置事
一諸士他國より之嫁娶之儀は不及言於家中も諸頭之緣組は可達家老事
一跡目之事養子は存生之內可相達及末期於申出は不可許容縱實子たりといふとも筋目違たる遺言立間敷事
一不依何方他行之時供之諸士隨其分限人馬可令用意何國にても法制可相守事
一不依何事訴訟有之共留守中に身を引家をあくるにおゐては縱理分たりといふとも可爲越度事
一斷なくして他國は不及言領內たりといふとも遠所へ不可參事
一喧嘩口論制禁訖若不慮之仕合にて及口論時不可令荷擔總て近所之者之外其場へ不可立合事
一城中縱何等之儀有之共定置役人之外城內へ不可入事
一於城中喧嘩口論有之節は其所之番之者可計之但番之者少時は其席近き者寄合可捌之其外之者不可出合事

一不依何事諍論に及事於有之は其組頭可致指引幷組中與力同心他組と諍論有之時其組之荷擔せしむへからす番頭組頭互及相談可濟之(若滯所有之は家老へ相達可受差圖事)
(一咎人之儀)其好身たりといふとも不可隱置若し咎有を不知して拘置といふとも自國他國に不依本主より叛逆殺害盜賊人之屆あらは急度可返其外咎之輕重に依て或は返或は可爲追放事
一行刑罰者有之時役者之外其場へ不可出合尤見廻をも停止之事
一下人及令斬戮者先組頭へ可相達頭無之者は横目へ可斷之若及事急誅之者早速右之所へ可達其旨事
一百姓公事有之時地頭一圓不可構之郡奉行其子細を聞屆滯所有之は其地頭之番頭組頭奉行と令相談可相濟之頭無之者は達奉行可受其旨事
一知行所にて少之事にても私之法不可立尤小社小寺に至る迄不可廢立若有由緒て及廢立者代官郡奉行に相達可受其旨事
一總て出家に成におゐては其頭或は其支配人之方へ可相達陪人は其主人へ可達事
一下々奉公を厭俄に形を替身命を貪る族有之は本主見合次第其者之一生可召仕事
一斷なくして當番不可令不參事
一當番之面々指當急事有之といふとも番頭横目に不斷して不可退出事
一於城中落書爲停止本人不知時は其席之當番之者可爲越度事
一家中立退者江戸は不及言洛中洛外大坂境に暫くも不可住居事
一訟申度事有之時は時節を不計可相達事

右二十七箇條准　公儀之御條目又依領內先規之所定而斟酌之者也若違背之輩於有之者依輕重之科可論其罪者也

寛文八年九月　日

「貞享二年十月」　御條目

一公儀御條目之旨家中末々之輩に至る迄分に應する儀は堅可相守事

一耶蘇宗門に疑敷者有之は早々可申出宗門にて無之者を卒爾に申出る分者不苦疑敷者を暫も不可隱置事

一不依何方他行之時供之諸士隨其分限人馬可令用意何國にても法制可相守事

一諸士從他國之嫁娶は不及言於家中も諸頭之緣組は可達家老事

一城中縱令何等之儀有之共定置役人之外城內へ不可入事

一於城中若喧嘩口論在之節者其所之番之者可計之但番之者少時は其席近者寄合可捌之事

附り總して不限何方喧嘩口論有之共近所之者之外其場へ不可出合事

一當番之面々何等之急事雖有之番頭橫目に不斷して不可參幷當番之內無斷して不可退出事

一不依何事及訴訟事於有之者其番頭組頭互に及相談致指引可濟之若滯所有之者家老へ相達可受指圖事

一總て咎人雖爲其好身不可隱置事

一於知行所少之事にても私之法不可立幷百姓共公事有之時地頭一圓不可構之御代官其子細を聞屆滯

所有之は其地頭之番頭組頭奉行と令相談可相濟頭無之者は達奉行可受其旨事

一不依何事訴訟在之共留守中に身を引宅を去るにおゐては縱雖爲理分可爲越度事

一無斷して他國は不及言雖爲領內遠所へ不可參事

一下人及令斬戮者先組頭へ可相達之頭無之者は横目へ可斷之若事急にて當座に誅之者早速右之所へ可達其旨事

一面々抱置者之內若於有出家之望者先其頭或は支配人之方へ可相達事

一訟可申事有之者不計時節可相達事

右之條々若違犯之輩於有之者依輕重之科可論其罪此外細雜之儀は前々定置通彌可存其旨者也

貞享二年丑十一月　日

參　考

武家諸法度

一文武弓馬之道專可相嗜事

左文右武者古之法也不可不兼備弓矢是武家之樞要也号兵爲凶器不得已而用之治不可忘亂何不勵修錬乎

一可制群飮佚遊事

令條所載嚴制殊重耽好色業博奕是亡國之基也

一背法度輩不可隱置於國々事

法是禮節之本也以法破理以理不破法背法之類其科不輕矣

一國々大名小名幷諸給人各相抱士卒有爲返逆殺害人告者速可追出事

夫挾野心之者爲覆國家之利器絶人民鋒劍也豈足允容乎

一自今以後國人之外不可交置他國之者事

凡因國其風是異或自國之密事告他國或以他國之密事告自國倭媚之萠也

一諸國之居城雖爲修補必可言上況新義之構營堅令停止事

城過百(雉)國之害也峻壘浚湟大亂之本

一於隣國企新儀結徒黨者在之者早可致言上事

人皆有黨又少達者以是或不順君父或乍違隣里不守舊制何新儀乎

一私不可締婚姻事

夫婚合者陰陽和同之道也不可容易睽曰匪冦婚媾志將通冠則失時挑夭男以正婚姻以時國無鰥民

也以緣成黨者是姦謀之本也

一諸大名參勤作法之事

續日本記制曰不預公事(姿〔一本恣〕)不得集行云々然則不可引卒多勢百万石以下二十万石以上不可過二十騎十万石以下可爲其相應蓋公役之時は可隨其分限矣

一衣裝之科不可混雜事

君臣上下可爲各別白綾白小袖紫袷紫裏練無紋之小袖無御免衆猥不可有着用近代郎徒諸卒綾羅

錦繡等之飾服其非古法

一雜人恣不可乘輿事

古來依其人無御免乘家有之御免以後乘家有之然其近來罪家郎諸乘輿誠濫吹之至也於向後者國大名以下一門之歷々は不單御免可乘其外昵近之衆幷醫陰之兩道或年六十以上或病人等御免以後可乘之家老從卒恣令乘者其主人可爲越度也但公家門跡諸出世之衆者非制限

一諸國諸侍可被用儉約事

富者彌誇貪者恥不單俗之凋弊無甚於此所令嚴禁也

一國主可撰政務之器用事

凡治國之道在得人明察切過賞罰必當國有善人即其國彌殷國無善人則其國必亡是先哲之明誠也

右可相守此旨者也

元和元年乙卯七月　日

「右は天下御一統後初て天下に發布せられたる德川幕府憲法の根本也後三代將軍　大猷公寬永六年法文の趣少しく改正を加へられ同十二年六月三親藩初め大小名を大城へ召し御先代之法令久しければ今度之を損益して觸示との親命あつて林道春之を讀渡す即ち左の法令是也是時よりして諸侯の誓詞を徵するを廢せられ參勤交代之制未た確定せさりしを永世一定の法を立總して大一統之制令完成に至りしなり」

一文武弓馬之道專可相嗜事

左文右武古之法也不可不兼備矣弓馬是武家之要樞也号兵爲凶器不得已用之治不忘亂何不勵修鍊乎

一大名小名在江戸交替所相定也每年夏四月中可致參勤從者之員數近來甚多且國郡之費且人民之勞也向後以其相應可減少之但　上洛之節者任教令公役者可隨分限事

一新儀城郭構營堅停止之居城之湟壘石壁以下敗壞之時達奉行所可受其旨也櫓塀門等之分者如先規可修補事

一於江戸幷何國假令何篇之事雖有之在國之輩者守其所可相待下知事

一雖於何處而行刑罰役者之外不可出向但可主撿使之左右事

一企新儀結徒黨成誓約之儀禁制事

一諸國主幷領主等不可致私の諍論平日須加謹愼也若有可及遲滯之儀者達奉行所可受其旨事

一國主城主一万石以上幷近習物頭者私不可結婚姻事

一音信贈答嫁娶之儀或饗應或家宅營作等當時甚至華麗自今以後可爲簡略其外萬事可用倹約事

一衣裳之儀不可混亂白綾公卿以上白小袖諸大夫以上聽之紫袷裡練無紋之小袖猥不可着之至諸家中郎從諸卒綾羅錦繡之飾服非古法令禁制事

一乘輿者一門之歷々國主一万石以上幷國大名之息城主暨侍從以上之嫡子或年五十以上或醫陰之兩道病人免之其外禁濫吹但免許之輩者各別也至諸家中者於其國撰其人可載之公家門跡諸出世之衆

者制外事

一本主之障有之者不可相抱若有叛逆殺害人之告者可返之向背之族者或返之或可追出之事

一陪臣質人所献之者可及追放死刑之時者可伺　上意若於當座有難遁儀而斬戮之者其子細可言上事

一知行所務清廉沙汰之不致非法諸國郡不可令衰弊事

一道路驛馬舟梁等無斷絶不可令致往還之停滯事

一私之關所新法之津留制禁事

一五百石以上船停止事

一萬事如江戸法度於國々所々可遵（一本守）（行）事

右條々準當家先制之旨今度潤色而定之訖可相守者也

寛永十二年六月廿一日

「四代將軍嚴有公」　武家諸法度

一文武弓馬之道專可相嗜事

一大名小名在江戸交替之儀毎年守所相定時節參勤可致從者之員數彌不可及繁多以其相應可減少之但公役者任教令可隨分限事

一新儀之城郭構營堅禁止之居城之湟壘石壘以下敗壞之時達奉行所可受其旨也櫓塀門等者如先規可修補事

一於江戸幷何國縦何等之事雖有之在國之輩者守其所可相待下知事

一雖於何處而行刑罰役者之外不可出向但可任撿使之左右事

一企新儀結徒黨成誓約之儀制禁之事

一諸國主幷領主等不可致私之諍論平日須加謹愼若有可及遲滯之儀者達奉行所可受其旨事

一國主城主一万石以上近習幷物頭等不可私結婚姻事

附り與(一本アリ力)公家於結緣邊者向後達奉行所可受差圖事

一音信贈答嫁娶儀式或饗應或可用儉約事

一衣裳之品不可混亂白綾公卿以上白小袖諸大夫以上聽之紫袷紫裏練無紋之小袖猥不可着之事

一乘輿者一門之歷々國主城主一万石以上幷國大名之息城主暨侍從以上之嫡子或年五十已上或者醫陰之兩道病人免之其外禁濫吹但免許之輩者各別也至于諸家中者於其國撰其人可載之事

一本主之障在之者不可相抱若在叛逆殺害人之告者可返之向背之族者或返之或可追出之事

一陪臣質人所献之者可及追放谷刑時者達奉行所可受其旨若於當座有難遁義而斬戮之者其子細可言上事

一知行所務淸廉沙汰之不致非法國郡不可(一本ナシ令)衰弊事

一道路驛馬舟梁等無斷絶不可令致往還之停滯事

一私之關所新法之津留制禁之事

一五百石以上之船停止之但荷船者制外之事

一諸國散在寺社領自古至今所附來者向後不可取放事

一耶蘇宗門之儀於國々所々彌堅可禁止之事
一不孝之輩於在之者可處罪科事
一万事應江戸之法度於國々所々可遵守事
　右之條々準當家先制之旨今度潤色而定之畢堅可相守者也
　　寛文三年卯五月廿三日

　　口上書

　殉死者古より不義無益之事也といましめ置といへとも被　仰出無之故近年追腹之者余多在之向後左樣之存念可在之者には常々其主人より殉死不仕候樣に堅可申含之若已來在之におゐては亡主不覺悟越度たるへし跡目之息も不令抑留儀不屆可被思召者也

「嚴有公は御幼年にて將軍御襲職御十一歲故を以て法令被　仰出なかりしか既に御成長御二十三歲被爲成を以て本日諸大名を大廣間に引見御先代の法令に潤色を加へらる今後彌嚴に遵守すへき旨　台命有て林春齊之を讀渡す右發布に先ち　我龍祖尾水御兩公松平肥後守初閣老中と御會議春齊等舊文と新文とを對讀殉死停止の事法令條數に加ふへきやとの議もありしか御三卿種々御會談の品あり遂に口上にて示諭すへきに定まり　上裁を經て本記の如く發布せられたる由詳には　龍祖寛文三年の條に記す」

　　條々

一忠孝をはけまし禮法をたゝし常に文道武藝を心懸義理を專にし風俗を亂すへからさる事

一軍役如定旗弓鉄炮槍甲冑馬皆諸色兵具幷人積り無相違可嗜之事
一兵具之外不入道具を好私之奢不可致萬儉約を用へし知行損亡船破損或火事此外人も存せる（一本天大）なる失墜者各別件の子細なくして進退不成奉公難勤輩者可爲曲事事
一屋作り之思召不可及美麗向後彌分限に應し可爲簡略事
一嫁娶之儀或不可及美麗自今以后彌其分限に應し可省略縦大身たりといふとも長柄つり輿三十丁長持五十棹に不可過總て以此數量分限に應し可沙汰事
一振舞之膳七五三等之饗應之外者木具幷盃之臺金銀彩色糸のつくり花停止之但晴れ之會合嫁娶之時木具盃之臺者用捨すへし總て振舞之儀輕く致酒亂醉に及へからさる事
一音信之禮義太刀馬代黄金一枚或銀十枚分限にしたかひ以此内可減之或銀一枚青銅三百疋禮物百疋に至迄可用之幷小袖十如右可減少之雖（一本ナシ爲）大身不可過之總て諸色以此積り可用遣之國持大名と禮義取かわしの時も此上之美麗いたすへからす勿論酒肴等も可爲輕少事
一行死罪者有之時者役人之外一切其場へ不可懸集事
一喧嘩口論堅制禁之若有之時者令荷擔者其咎可重於本人總て喧嘩口論之刻一切不可馳集事
一於城中萬一喧嘩口論有之節者其相番中可計之猥他番より不可寄集番無之席者其所へ近き輩可取扱之令油斷は可爲越度事
一火事若令出來者役人幷免許之輩之外不可懸集但役人之指圖之者は可罷出事
一本主之障在之者不可相抱叛逆殺害盜賊人之者あらは急度可返之其外輕咎之者に至ては侍者肩次

第可追拂之小者中間者可返之於難澁者番頭組頭其並之輩可致談合若有滯所者達役者可受差圖事

一於諸家中大犯人あらは縱雖爲親類緣者直參之輩取持相かこふへからさる事

一何事におゐても不可致私之諍論若申旨あらは番頭組頭可令相談之頭なきものは其並之輩に及談合可濟之滯義あらは達役者可請其旨事

一百姓訴論之事双方之番頭組頭遂穿鑿其組之荷擔不致之相互令談合(令)[一本ナシ]可捌之頭なきものは其品之輩寄合可濟之滯儀あらは達役者可請其捌然上は勿論番頭幷其列之輩不及出於評定所事

一知行所務諸色相定年貢所當之外非法をなし領地亡所に不可致事

一新地之寺社建立彌可令停止之若無據子細有之は達奉行所可請差圖事

一跡目之儀養子は存生之内可致言上及末期雖申之不可用之雖然其父年五十以下之輩は雖爲末期依其品可在之十七歳已下之者於致養子は吟味之上許容すへし向後は同姓之弟同甥同従弟また甥幷従弟此内をもつて相應之者撰へし若同姓於無之は入聟娘方之孫姉妹之子種替り之弟此等は其父の人からにより可立之自然右之内にても可致養子者於無之者達奉行所受差圖也縱雖爲實子筋目違たる遺言立へからさる事

一嫁娶幷養子之儀付貪たる作法不可仕事

一結徒黨致荷擔或妨をなし或落書張文博奕不行儀之好色其外侍に不似合事業不可仕事

一徒若黨衣類さやちりめん平島羽二重絹紬布木綿之外停止之事

付弓鉄炮之者絹紬布木綿之外不可着之小者中間衣類萬に布木綿可用事

一物頭諸役人萬事付て不可致依怙幷諸役者其役之品々常吟味いたし不可油斷事

一家業無油斷可相勤事

右(之)[一本ナシ]條々依先制之旨損益之今度定之畢堅可相守之若於有違背之族者糺(罪)[一本科]之輕重急度可處罪科者也

寛文三年卯八月五日

「右條令は武家諸法度の細目を立てられたるものにて次記寺社の制と共に永く定法に極まれり」

寺院御定

定

一諸宗法式不可相亂若不行儀之輩於有之者急度可及沙汰事

一不存一宗法式之僧侶不可爲寺院住持事

付立新儀不可說奇怪之法事

一本末之規式不可亂之縱雖爲本寺對末寺不可有理不盡之沙汰事

一檀越之輩雖爲何寺任其心從役僧侶方不可相爭事

一結徒黨企鬪論不似合事業不可仕事

一背國法輩到來之節於有其屆者無異儀可返之事

一寺院佛閣修覆之時不可美麗事

附佛閣無懈怠掃除可申付事

一寺領一切不可賣買之幷不可入于質物事
一無由緒者雖有弟子之望猥に不可令出家若無據子細於有之者其所々領主代官へ相斷可任其意事
右條々諸宗共可堅守之此外先判之條數彌不可相背之若於違犯者隨科之輕重可沙汰之猶載下知狀者也

寛文五年七月十一日

寺院下知狀

一僧侶之衣躰應其分限可着之幷佛事作善之儀式檀那雖望之相應輕可仕事
一檀方建立由緒在之寺院住職之儀は爲其旦那計條目本寺遂相談可任其意事
一以金銀不可致後住契約事
一借在家構佛檀不可求利用事
一他人者勿論親類之好雖在之寺院坊舍女人不可拘之但有來妻帶者可爲格別事
右條々可相守之若於違犯者隨其科之輕重可在御沙汰之旨依仰執達如件

寛文五年七月十一日

大和守
美濃守
豐後守
雅樂頭

神社御定

定

一諸社之禰宜神主等専學神祇道所其崇敬之神躰彌可存知之在來神事祭禮可勤之向後於令怠慢者可取放神職事

一社家位階從前々以傳奏遂昇進（輩）〔一本ナシ〕は彌可爲其通事

一無位之社人可着白張其外々裝束は以吉田之許狀可着之事

一神領一切不可賣買事

一神社小破之時其相應常々可加修理事

付神社無懈怠掃除可申付事

右條々可堅守之若違犯之輩於在之は隨科之輕重可沙汰者也

寛文五年七月十一日

「五代將軍常憲公」武家諸法度

一文武忠孝を勵し可正禮儀事

一參勤交替之儀毎年可守所定之時節從者之員數不可及繁多事

一人馬兵具等分限に應し可相嗜事

一新儀之城郭構營堅禁止之居城之湟壘石壁等敗壞之時者達奉行所可受差圖也櫓塀門以下は如先規可修補事

一企新規結徒黨成誓約幷私之關所新法之津留制禁之事

一江戸幷何國にても不慮之儀在之といふとも猥不可懸集在國之輩は其所を守り下知を可相待也何處にて雖行刑罰役者之外不可出向可任撿使之左右事

一喧嘩口論可加謹愼私之諍論制禁之若無據子細在之者達奉行所可受其旨不依何事令荷擔者其咎本人より重かるへし幷本主之障在之もの不可相抱事

附頭在之輩之百姓諍論者支配へ令談合可濟之有滯儀は評定所へ差出之可受捌事

一國主城主一万石以上近習幷諸奉行諸物頭私に不可結婚姻總而公家と於結緣邊者達奉行所可受差圖事

一音信贈答嫁娶之規式饗應或家宅營作等其外万事可用儉約總而無益之道具を好不可致私之奢事

一衣裝之品不可混亂白綾公卿以上白小袖諸大夫以上免許之事

附徒若黨之衣類は羽二重絹紬布木綿弓鉄炮之者は紬布木綿其下に至ては萬に布木綿可用之事

一乘輿者は一門之歷々國主城主一万石以上幷國大名之息城主及侍從以上之嫡子或は年五十以上許之儒醫諸出家は制外之事

一養子者同姓相應之者を撰ひ若無之においては由緒を正し存生之內可致言上五十已上十七歲以下之輩及末期雖致養子吟味之上可立之縱雖實子筋目違たる儀不可立之事

附殉死之儀彌令制禁事

一知行之所務淸廉沙汰之國郡不可令衰弊道路驛馬橋舟等無斷絕可令往還事

附荷舟之外大舟者如先規停止之事

一諸國散在之寺社領自古至于今所附來者不可取放之勿論新地之寺社建立彌令停止之若無據子細有之は達奉行所可受差圖事

一萬事應江戸之法度於國々所々可遵行事

右條々今度定之訖堅可相守者也

天和三年七月廿五日

「常憲公は延寶八年八月將軍御拜任後三年を過き本記の法令を仰出さる御先世の法文を潤色し一層整頓を期せられたる如し此法文一定の成規となり爾後百七十六年十四世將軍　昭德公の安政六年九月發布之法令に至る迄世々皆同文言にして變更ある事なし唯嘉永六年九月大船製造解禁の發令により十三世將軍　溫恭公同年の法令には第四條新規の城郭構營云々の次へ左の條を加へられ第十三條知行の所務云々の附荷舟の外大船は如先規停止の事の十五字を削除せられたり」

一大船製造可言上事

「右の如くにして　昭德公安政六年九月の法令も無論同文也而して結文は右條々堅可相守者也とし新儀之城郭の儀の字を規に改め乘輿の條儒醫諸出家の五字を醫師僧家の四字に改塡せらる是等は天和以后の成文となりしならん

慶喜公には法令發布に至らせられすして御辭職なりたり」

御普請役定

一朝は日之出より前に御普請場へ出可申事
一晝之休竹貝次第幷晩に上り候事も竹かい次第たるへき事
一町場わり之時小頭之外脇より出合申間敷事
一御普請に人之遣樣さし引万事彌小頭之下知相背不申樣に可申付事
一着到にはつれ候はゝ一人に銀一匁五分宛過錢可取事
一御普請場へ刀指參間敷事
一御普請仕候內小頭木やり之外は脇差も指申間敷事
一脇差諸道具之番まへ〳〵のことく一組に一人宛置可申候但水野平右衛門組は二人たるへき事
一石垣之時御奉行より無指圖石我儘に其丁場へ取申間敷事
一大雨ふり候とも無差圖あかり申間敷事
一於御普請場喧嘩口論在之共面々之丁場より一人も出申間敷候他之組は不及申傍輩成共出合申間敷候但小頭は出合候て事なき樣に可相嗜事
一萬事當人之外同組成共指出候はゝ當座に成敗可仕事
一もつこ數鍬數其日定指圖程出し不申候はゝ其組之小頭より過錢として百文出し可申事
一坪詰を以日切日數に相渡候丁場之內未進仕候はゝ夜普請に可仕事
一江戶へ一年替りは前廉四十日之用意戾り候て六十日之休若御先へ歸り候はゝ何時によらす四十日之休半年替りは前廉廿九日之用意戾り候て四十日之休若御先へ歸り候はゝ不依何時に三十日之休

才領同御使は歸候て廿日之休京伏見は歸り候て七日之休此積りを以遠近は小頭堅可申付事

一虫くわくらん俄之煩急用於在之は小頭より御奉行へ斷候て越可申候其斷なきにおゐては一人に一匁五分つゝ出可申事

一御普請に付何事によらす下知を背き不行儀に候はゝ急度成敗可申付事

一石垣堤何事によらす大き成御普請之時者御丁場不明樣に御組頭衆御相談候而可有御出事

右之條々足輕御普請之次第相定者也

亥九月廿七日

安藤飛驒守

水野淡路守

按に安藤飛驒守は寛永十三子年九月卒すれは本令は寛永十二亥年なる事知るへし

定

一六十人衆役之儀は正月十一日より三月晦日迄七月廿日より八月廿日迄十月朔日より同晦日迄食燒は十人に一人宛引可申御普請場にて食たき可申事

一堤川よけによらす大きなる御普請有之時は御番頭中へ相談之上小組頭へ(二之)[不明]高下をならし丁場渡し可申事

一御普請場遠近之高下於有之者一二之くぢ取を仕其帳次第にて可申付事

一御普請肩積り坪石土共に道之のり積りさため來候通所々にて可申付事

一御普請道具仕來候ごとく其組々にて手前より可仕事

一御普請之者食燒十三人に一人つゝ引可申事
一小組頭衆は五百石より下は奉行一人宛出し可申候それより上は役人出可申事
一千石より上は役人之内に下奉行一人相渡可申候其內は下奉行可爲無用事
一方々御使之次第京へ立歸之御使は歸候て十日之休名古屋筋御使歸候て十五日之休江戶立歸り之御使歸り候て三十日之休但御用にて逗留候はゝそれに隨て休御上洛之御供は前廉四十日之用意御歸候て六十日之休若御先へ歸候はゝ何時によらす三十日之休江戶へ一年替り之御番は前廉六十日之用意歸候て九十日之休若御先へ歸候はゝ何時によらす四十五日之休江戶御供も江戶御番と同斷江戶半年替りはまへかと五十日之用意歸候て五十日之休若總なみに御先へ歸候はゝ何時によらす三十日之休其外他國之御使何之御用に御役引候共右之積りを以往來日數無相違樣に組頭より御普請奉行へ書付相添役人出引可仕候若日限於相違者可爲未進事
一割付之丁場余組におくれ候はゝ夜普請にも可仕候付無割御普請之時は着到之上にて未進有之分は一日一人に一匁五分宛改帳之上にて小組頭請取預り置可申候下奉行之仲間にて出入萬紛於有之は爲過錢百文宛取り可申事
一御普請中御法度はくち之たくい門立村在々にてなりくたものせんざい取候はゝ爲過錢五十文つゝ取り可申事
一下奉行役人より禮物を少も取申間敷候出し候ものも取候者も可爲曲事也何事によらす下知を相背候はゝ成敗可仕事

一御普請之者宿錢一人に付一泊二文つゝたるへき事
一五節句幷和歌御祭は三日六月土用は十日ぼん十日右之通休其外永雨は見合次第若御急之時は可爲各別事
一御普請春は三月四日より暮は霜月晦日迄但仕候はては不叶御普請之儀は御定之外も可申付事
一御公儀御普請之儀は各別也
右之條々堅可申付者也
亥の九月廿七日
安藤飛驒守
水野淡路守

上使御越之事

一上使被成御越候に實説相定候時は可爲各別　上使とさたかに不知して俄に被成御越候時は不及得御意先使番一人田井瀨迄可罷出番頭は町はつれ迄走り出へし年寄衆一人三之丸外迄可罷出右之者共　上使之懸御目候時爲御案内御迎に罷出候と申其剋實正之御注進可申上事
一物頭之當番之者は面々番所之（一本ナシ）御門之掃除以下雖不及言萬事念を入可申付夜中之時は挑燈等支度仕相待其外むさと人々出入無之樣に法度可申付當番之外之者は早々　御城へ可罷出舟橋或道橋之奉行人なとに可被　仰付候間承次第に其處々へ參り急度申付若相煩候時は橫目迄其段相斷可申手前組之者共御用等遲々不仕樣に相心得可申事
一御家中之者自然在鄉なとへ罷越居候共早速宿所へ罷歸或御使或道奉行其外何樣之御用にても番頭より申來候はゝ早速罷出無油斷心懸可申候　上使御歸迄は面々之屋敷中僮僕以下に至迄作法正に

可申付　上使之儀は不及申晴かましき御客來之時も相愼可申付事

一總て御愼被成候時も其品に應して主人は不及申召仕以下に至迄諷謡高聲不仕振廻等をも相止　公儀を敬可申又御祝之時は何方も御祝儀に應し賑敷可仕事

一道奉行之輩は掃除念を入可申事

子の十二月廿七日

「右は若山上使なり子とは寛永十三子年ならん後世若山へ上使被遣の時は先前より御沙汰被　仰出て突然の事なし往昔事簡易且御間柄等により臨時唐突の事ありしものか」

御家中大坂へ罷通候事

一御家中之衆大坂へ罷通候時かへ馬其馬かた次第かへ可申事

一さかいへ參候時は駄賃北南致約束馬つき可申事

一御公儀御定之貫目より荷物おもく仕間敷事

一他國にて奉公人抱置出入在之時は御年寄衆へ御斷申先へ可申達事

一御家中より欠落仕候もの有之時分大坂堺へ尋に遣し候はゝ組頭へ斷可申候組頭無之衆は御目付衆へ斷可申事

一御家中より御使之者夜通し大坂町を通間敷事

右之趣御年寄衆被仰渡候間如斯候以上

江戸御供御留守居身持

江戸御供三番被　仰付候間御留守罷在候ものとも身持之事

一武具之外物すき道具このみ不可仕事然者世間奉公人すくなきにより面々分限より家僕をも減少い

たすへし自然之時御供に慥成人も召連よりは可然かと御用捨之上は御供之節應分限に人馬をも持
申様に可仕事
一御切米二十石三十石通り之もの替りは二番に可致也それに付路銭駄賃銭迄可被下之間二年宛可相
詰事右之段は面々勝手に可然由に付如斯也雖然人により一年替にも仕度と存もの於有之者是又勝
手次第たるへき事
一御小姓衆常詰之衆家僕之事親在之者は勿論無親ものは親類縁者致才覺年季之時分はかりおきかへ
さし下可申事
一諸奉行諸役人之品々被　仰付被爲置候上にて其者埒明不申儀も脇よりさし出色々之趣取持又は被
賴さゝはりに罷成候儀堅可爲無用事
右此旨可相守者也
子の三月十五日
一公儀之儀家中之儀國之儀萬事年寄中番頭奉行何れも其組々は不及申存出し次第申上又は申付おち
之無之様に可申付縱其役儀にて無之共存寄之儀は可及相談事
一用番之衆一人用人之衆と客人又は御禮之儀或は其外萬事前かとに相定可申也談合不究儀は年寄中
をせつき急度相定横目に可申渡油斷仕其日に至て急に指たる事無之儀を用かましくなといたすま
しき也殊能合点も不仕おほつかなく其場にて行當御指圖計を承るはかりにて侍共之きひにもかま
はす指引仕ましく事總て書付大たゝいを心得可申ため也同朋友先後を不苦と相心得可申也

諸役人之品々脇より差出無用

公儀家中之儀云々

一國中之儀何にても遲々不仕樣に奉行衆可致言上又は品により可申付也縱へ其役義にて無之共存寄之儀可及談合事

一當番之頭は城中何樣之儀迄も心にかけ所之番又は不審成者を聞出し見出し不定之事横目に急度可申渡也奉（行か）之儀は用番用人へ申遣へし但當番居さる時は其次之頭可申付事

一總て番頭衆は常々侍共之ためにも成儀又（御遣りやう）（本のまゝ）の道に入からを吟味致可申縱仁躰も才覺も惡候ても御影くらくなきもの御影にての御奉公振能存合由御尋之時可申上萬事御爲之所被　仰出ほつくによはす存出し次第可致言上事

辰七月七日　「蓋寛永十七辰年ならん」

振舞之事

一汁一つさい三つの内引物組合可爲無用候外にかうの物酒は三返肴一色たるへし（附り）祝言他客之時も右之通但汁は二つ乍去他客により其分限にしたかひ可有多少事

一鶴白鳥鴈靑鷺雲雀鯉生鮭生鱒此外にても珍物肴遠來たりといふとも可爲無用候幷木具可爲停止事

一御茶上け申時御供之衆中振廻之儀可爲同前事

右之條々若於令違背者過料銀一枚可出候其上にて言上可仕者也

辰七月十日

牢人御奉公望とも不被許容

一御意之趣は此以前より如被　仰付候何方より縱へ譽之浪人御奉公望之由申來候共今程新參に人を被召置御知行も無之間一圓許容被成ましく候若御知行之余慶も有之者御家中之子共それ〳〵に可

被　仰付候間何事も御用は不圖義候間且者御抱被成間數候此度江戸にて無據被　思召候衆又は殿樣御幼少之時より被掛御目候衆より事を分被申越候儀有之間もたしかたく　思召數多被召置候兎角向後は不立　御耳樣に年寄共番頭共其外之者共も此趣を存縦へ逃難き浪人御家中へ御奉公之望有之共其者に能々申含一切取次言上仕間敷候との儀也もしやと存し爰元に逗留仕候者もはやく有付申爲に候間右之旨可申聞との昨日之　御意にて候以上

辰の暮

一筆申入候然者先年より度々相觸申通諸浪人彌御抱置有間敷候併親子兄弟むこしうとは御用捨に候然共何樣之筋目を以抱置候由御斷共迄御斷可有之旨御組中へ可被　仰渡候

右之段御老中被　仰渡候間如此候以上

條々

一年寄中用番之儀一ヶ月に相定万事承屆其上長門守に相談仕可相濟之淡路守病中之間は輕少をは指置重き事計相談可仕事

一寄合日之事只今迄如相定一ヶ月三度宛懈怠仕ましき事

一急用等於有之は三度之寄合之外當番之所にて寄合可仕事

一當番之内請取候用所等不相濟共次之番ゆつり申間敷事いつ迄も請取申者埒明可申事

一就公用年寄中より方々へ遣候狀并返狀當番之者其外何も相談仕認可遣案文共當番之所にて留置可申也付方々より來狀皆々披見以後當番之所にて可集置事

右此旨可相守者也

一御家中今迄之御貸金は一年二年或は三年を限相濟可申候其内知行所之内相應に御代官預り置庄屋に申付物成相場に賣之上け可申事

一御供又は何方へ御使に被遣候とも前廉御貸金有之仁には請人正敷候共貸申間敷候に付先々に相詰候時も右同前但借り金無之仁路錢借度と有之は相應にかし可申事

一御切米取候衆も右知行取衆同意之事

一御意にて之御貸金は奉り之仁御黑印可被申請事

一知行并質物書入候共貸申間敷候事

一右之通に定候へ共自然急に請りたる仁有之は請人を立　御姫樣金子利分を以相應知行并質物等書入かし可申事

寛文十七年辰霜月廿三日

條々御定之寫

一侍之道無油斷軍役等可相嗜事

一諸事上を不恐無筋目取沙汰私にまかせ惡行跡仕間敷事

一身躰之儀勿論無筋目儀申たてむさと取沙汰にも仕間敷事

一諸役人其役之品々常に吟味いたし油斷有間敷事

一嫁娶之儀式は小身之輩に至迄諸道具以下向後分に爲過結構不致可用儉約事

一諸奉行物頭依怙於在之は可爲曲事者也

一喧嘩口論或はいしゆきりなと有之時は其組之與力同心一切荷擔仕間敷事まして其組頭召連罷出間敷事

一於御留守中人をあやまり立退候者在之時は少も用捨無之打留可申者也但其品により留置致言上又は何も相談之上にて相究事もあるへし其品々能々可有吟味事

別紙之御書出

一御留守中も毎月三日宛之寄合無恙相勤諸色御用之儀致相談早速埒明可申事

一御領分郡之仕置之儀は兼々郡奉行代官に申付置其上にて奉行共能々吟味いたし可申付不能分別儀は年寄共致相談可申付總別万端に付余人に無延慮存寄候通於在之者奉行共相計可申付候付公事沙汰之義者奉行共双方不審をうち其上にて何も致相談理非を分さはき可申罪科に相究時又相談之上にて吟味をいたし可申付事

一町中諸事可申付不及分別儀は年寄奉行共致吟味其上にて高下無之様に可申付事

一家中役人御普請之儀は薗田伊勢存之通余人に無遠慮相計可申付不及分別儀は年寄共相談仕可申付事

一二分口之奉行も右可爲同前事

巳三月十六日　　蓋寬永十八巳年當春御參府也

條々

寛永廿一年條々

一奉行人用人町奉行は十五日替に當番を相定万事申付可達公用但隙番之者も相談可仕事

一目付之面々は十五日替に當番を相定万事可申付也但番には前々之ことく可仕事

一目付之者常々寄合にて前々之ことく二人宛可罷出乍去用所之樣子により不殘可出事

一番頭常々寄合にて如前々二人宛可罷出公用之樣子により不殘可出事

一諸色之總帳より目錄を仕奉行人用人町奉行之所に所持仕公用有之時は約書を可見出也總帳は御藏に可納置也

右此旨可相守者也

寛永廿一年十月十一日

他國にて奉公人抱置

一他國にて奉公人抱置出入有之時は御年寄衆へ御斷申さきへ可申達事

一御家中より欠落仕候者有之時分大坂堺へ尋に遣候はゝ組頭へ斷可申候組頭無之衆は御目付衆へ斷可申事

一諸牢人彌御抱置有間敷候併親子兄弟聟舅は御用捨に候然共何樣之筋目を以抱置候との儀頭衆迄御斷可有之旨御組中へ可被　仰渡候

徒黨之事

徒黨之事

一凡罪犯有之者死刑或は改易および其親類或は緣者或は師弟或は因親因子之故を以罪人徒黨を結ひ猥に家中を不可逃去若違犯之輩於有之は可處重科者也

詳に右之條を按するに日來俸祿を受重恩を蒙り其（一本友）（支）親類師弟因親子のために受義にあらす然

を一旦親類の子細によりて日來の重恩を忘れ親類に被引主君を背く其罪不謂之輕於處重科道理甚明白也縱雖爲親子兄弟可依其首尾者也

慶安二年十一月十日

御船藏川口御番所へ御定書

一御老中侍衆御暇申上湯治又は他國へ船にて罷出候時は御普請奉行衆御供番頭衆御使役頭衆夜居番頭衆御葉込頭衆御小姓頭衆大小姓頭衆中小姓頭衆通番頭衆御手弓御手筒頭衆十人組頭衆御歩行頭衆大寄合御留守居番頭衆御旗奉行衆御槍奉行衆物頭衆御鷹匠頭衆御腰母衣衆御使番衆迄は竹元丹後所へ其仲間より書狀にて斷可申事

一其外組外之衆は御用人衆より丹後處へ斷可申組付之衆は其頭より丹後處へ斷可申事

一殺生に罷出候衆は兩川口御番所の下を通り不申候夜に入候ては御番所へ相斷可申事

一侍衆より船にて他所へ人遣候時は其主人之手形を以通し可申事

一出家衆舟にて被出候時は町奉行衆手形を以通し可申事

一町中幷浦々之舟に乘出候ものは問屋の手形にて通し可申事

一他國より町へ參候船に乘人有之時は竹元丹後處へ問屋相違判を取右之手形を御番所へ相渡し通可申事

一大組御番頭衆奉行衆御用人衆町奉行衆は川口出候時は自分より丹後處へ相斷申筈御座候

一出家衆他國より川口入申時は町宿歟又は手持之手形にて入可申事

明暦三年酉六月十一日

一川口御番所之前船にて通り被申候節笠頭巾ほうからけ取可被申候右御番所の川通り之外一切通り申間敷由御老中被　仰渡候以上

亥四月四日　　御目付中

御家中召仕之者定

口上之覺

一御家中召仕之若黨小者先年之御定の通召抱申時分に暇を出し可被申候右之通は來年より

一道具持馬取草履取小者等迄近年は其役々一篇之望仕女之供仕間敷候よし申物好み仕候向後は萬物好不仕等に候間左樣に堅可申付候若違背仕者有之は請人又は宿主方へ急度相屆可被申候今度は町在郷へも可申付候間請人宿主違背仕間敷候間左樣に相心得可被申候

一中居下女之儀前廉相觸申通に堅可被申付候若違亂申者有之者年季者は請人半季者は宿主へ是又急度相斷可被申候右之趣に被申付若男女違背申者有之候はゝ御目付中へ相達可被申候右之通猥に無之樣に主人相心得可被申候以上

寛文五年

出家致者定

定

一自今已後出家仕候者不依何人其由可相達　公儀私と不可仕諸士は其頭陪臣は其主人百姓は代官郡奉行町人は町奉行迄必可申達事

寛文五年巳十一月

會所にはらせ候定

覺

一寄合場へ罷出候諸役人朝五つ時分に出揃可申候事
一年寄中御用相談之内次之間にて高聲仕間敷事
一御用相談之内に無用之雜談仕間敷事
一年寄中以　公用何も近寄候へとの時誰私之時宜及辭退事還て尾籠之儀也此等之輩本より不可有とはいへとも彌遠慮不可仕事
一御用相談之節指當存寄之儀有之は無遠慮可申達事
一諸役人勿論以怠慢陰所に退へからす各夫々の座に相詰諸事に付御用之妨に不可成事
一御用有之者は當用相濟次第早々退出可仕事以上

寛文六年午八月

以上は　御法令定法書及ひ監察府遺存之記錄即ち國初の法令を集記したるものに據る該記中尙市在に係る法令衣服の制度緣邊祝言道具の規定火事の定等數令あり何れも國初の立法にして世々の法憲制度之に基かさるなし是等の法令は今分て各制分類の首に編綴す每部沿革の通觀を便にし錯雜混合の煩なからしむる爲なり

市在法令は郡制歷世郡治大概に衣服の令は服制の部緣邊祝言道具之規定は本編嫁娶の部火事の定は同水火警備制に記述す

正徳法令

有徳公御自記政事鏡に

家中領地書替

一當家代替の節家中の朱印是迄先規の通にて相濟來候得共左に候へは先祖より代々万代不易之領地と心得候故別て難有忝共不存唯榮むと存武士の嗜も由斷に相見え候間當年より改て家中の領地寺社領朱印共に書替可遣候又小高帳にて遣し置候分は以先例家老共印形にて書替可遣候此末子孫代々共代替之節書替定法と相心得へし領地は陪臣は不及言諸大名共に時之將軍より預り物と心得可然事也既に天下は一人の天下にあらす万人の天下也又　天子は一人の天子也此事如何となれは天子は王孫を以繼給ふ故に一人の天子とは申也將軍は左に非す武功次第の天下なれは萬民の天下とは申也是故を以由斷不可有也世の盛衰はあり内の事なれは能々心得へし諸大名の家中勿論の事なり

按に爾後御代替に御朱印書換の事記載の者見えす　香嚴公の御時御條目御制法其外先規之通御用被遊との記あれとも是は御代毎に被　仰出例也領地書換の事傳へ聞されは或は一時の事に止まりしならん

家中召使夜中提燈之事

一家中召仕町人其外共暮六つ時より無挑燈にて歩行致し候者有之候はゝ見廻之者名前聞屆向々へ相屆可申候万一胡亂の者見當候はゝ召捕其向へ屆可申候

家中及町人百姓家藏普請

一家中の家作は分限相應に可致候手廣き普請致候て者物入不相續に可成候間右之心得にて丈夫を重に可致候

町人音曲勝手次第

寺院修験社人其他金銭貸付無用

家中之者金銭貸付停止

家中隠居願

百石以下の嫡子之外町人百姓勝手次第

一町人共家士藏作事之儀は勝手次第何程も宜普請可致候町家は見世の取飾勝手次第可申付候

一遠近之百姓共家作普請は手廣き普請無遠慮致し候儀尤火之用心第一に可申付候

一町人共商賣取組他所者出會可有之候間馳走にも致度候はゝ晝夜共小謡上瑠璃琴三味線勝手次第之事に候間其段兼て可申渡置候

一左之者共夫々の職分を守り致出精事肝要也金銭取扱候ては金銭之方計り重々に相成職分の方麁略に可成事故申付る事に候

　領内諸寺院のもの金銭貸付此末無用に申付候

　修驗社人社僧共に金銭貸方は無用に可申付候

　座頭は諸方万人の助情を以相立身分の者なれは是又金銭貸方無用に可申付候

　醫者も金銭貸方は已來無用に可申付候

一家中の者共金銭貸付等は不宜候子細は威勢を以金銭無躰に責取時は其人により至て難澁迷惑可致政事をも預る身分の侍に不似合武士の本意を失ふ事也依之此末代々家中名前貸付停止に可申渡候

　然共深切を以利なしに貸遣し候事は勝手次第の事に候

一家中の者隠居願は年五十以上より願出可申候五十以下にても病身に候はゝ格別に候此事如何となれは年若にて致家督候ては其勤の筋に寄學文稽古難成自然と懈怠候事故兎角家督前諸藝出精可致爲也

一家中大勢之内には百石以下のもの手廻り余慶有之勝手難澁にて不相續勤の障にも相成事可有之候

間嫡子之外は町人百姓共成共銘々勝手次第片付可申候女子は勿論の事なり右之通申付候ては心外に存る者も可有之候へ共大勢扶助いたし居候ては万一不似合の事にても致時は其親不及言主人迄の恥なり總て侍之牢人末々は町人百姓共可成事なれは恥にて恥ならす治世には人餘る事故年闌けふら〳〵として居時は大勢の中には悪敷事をも可仕出事也

按に四民同權となりし維新後より見れは更に何等の感觸を起さゝるへしと雖も農商を蛆虫視せし武士時代殊に正德の昔士氣旺盛の時に在て此發令は實に奇怪千万心外と思ひしは必然なりしならん然れとも公の御卓見は毫も違はす固より養子の數は子弟增殖の數を塡るに足らす少祿の番士家眷多きものは終身負債に沈み衣食殆と方なく廿五菩薩の綽名（大番士は並高廿五石也貧困の骨頂なれは貧困者を總て如此綽名せし也）を得農商却て之を齢せす故に往々高野山等の寺小姓に住み込口を糊したるも尠からすといへり

盆中の燈籠花火

一雖儉約中も盆中三日の内夜中燈籠切籠一つ二つ花火三本つゝ出し可申候無益の費には候へ共年中其時々の儀不致候へは人の心窮屈に成もの故右之通り可爲致候畢竟年中儉約致す事も其時々の事を可致爲也諸人悦ひ慰をも一向に差留候事は木石同樣の事也元來諸人の悦は當家の祈禱と可致事也

年中料理法

一年中料理之次第定法左之通

一正月元日より三日迄雜煮三獻　三汁九菜

一同四日より五日迄　二汁七菜

一六日より晦日まで　二汁七菜
一參勤下向之節　三汁九菜
一五節句　三汁七菜
一毎月朔日十五日廿八日　二汁五菜
一平日　一汁三菜
右之通代々定法立置可申候
　右定式儉約計にて無之不斷美食給候ては短命なるものゝよしに候又平日菜數給候ては不珍品へは箸をも不附品も有之候間已來定法立置可申候時として好之品は別段の事に候
一正月十一日具足餅にて相祝候事は武門第一の祝に候是迄は表勝手の外は諸役當番計り祝來候由に候へ共格別重き祝儀に有之候間來る正月より總家中相祝可申候大勢にて同日相成間敷候間十二日十三日迄相祝可申候右兩日は十一日より肴は減可申候十一日は是迄之通兩日は肴三種に限可申候馬廻り番士へは目付役兩人罷出宜頂戴可致旨及挨拶引取可申候何れも宜（一本爲敷）給候事也勝手小身之者共へは平目付罷出可申候非番の者まで無殘相祝可申候請之儀は相祝候後直に殿中にて爲相名代と二三人目付所へ罷出可申出候勝手の者共も同樣心得可申候門番之者共へは早番晝番共に吳可申候三日共に右之通吳可申候
一格別重き祝儀に有之候間雖儉約中右之通申付候此末代々具足餅相祝候定法心得可申候
　按に此御祝儀御歴世御遵奉維新に至る迄被爲行たり然共近世は十一日一日にして當番詰合之頂

戴に止まる御鏡開き御祝と稱し正月御祝の御鏡餅を小截し小豆を添へて賜る御小書院に御召の御甲冑を陳列し拜觀を命せらる是日初て武官の拜任あり之を御用初と稱す此前には何等の拜命もなき也

參勤下向之節家老初へ申渡

一自分參勤下向之節安藤水野へ先に出逢次に家老共一列用人共一列表役人番頭一列諸物頭諸奉行一列右於居間留守中の事無油斷相勤候樣可申渡候事代々定法心得可被申候

按に維新に至る迄如斯御遵奉ありたり典禮御禮式の部に詳也

有德公御自記政事草に

御當家の江戸若山の勤

一御當家之勤之儀は江戸表にて月次登城病氣無之樣相勤候を第一とする也國元にては家中之者月次請候事又は佛參第一の勤なるへし大体の事右不快にては右兩樣可勤也次には社參是又專可相勤ものなり

諸法度觸書度々無用

一諸家中幷諸寺院領内中共に諸法度觸書等度々差出候義無用之事也子細は度々指出ては事多く相成其役筋之者も確と覺留無之却て間違も可有事也　公儀御觸書等は格別の事也領內切之儀爲差事も無之には可爲無用唯古法の可然儀也

親不行跡之者褒美可遣

一城下幷領内之町人百姓親不行跡之者有之候はゝ得と承り置無遠慮向々より可及披露候右之者へ褒美可遣候家中は勿論之事なり誠に珍敷故申付候親孝行の者は數多有之不珍事なり

普請酒被下

一城内之普請は不及言領内中諸普請出人足一日に五十人以上に候はゝ一人へ酒二合五勺宛毎日吳候樣可致尤年十七より五十才迄の者計指出候樣可申付候唯貰遣時は不早俄取日數懸り耕作仕付に指

支不熟の實取にては諸民困窮たるへし左候へは上への收納不足其上普請も成就致す間敷事也依之日々酒等喫相働候はゝ難有存出精可致事也總て物不入事は取〆も有間敷事也金錢入候ても至以損毛不成事却て耕作仕付早儀行下々勝手に相成は當家の爲なるへし

叙族式

叙族式は文化九壬申年八月

舜恭公公族に關する諸般の法規を御制定永世之模範を被爲立たるものにて即ち　公家の典範也元政府に存置之處廢藩置縣の際和歌山縣廳へ引渡し追て德義社へ受續き保存之分を謄寫したるなり

目　錄

少將樣方御定銀米　同

御二男樣御三男樣御定銀米　同

御四男樣より御末男樣迄御定銀米　同

一御實母樣御取扱　享和元酉十月

大奥向之儀　御簾中樣不被成御座とも御部屋樣へは不奉伺品

御實母樣は樣文字認之事

御誕生有之御屋登に相成候女中御品付先輩を踰候儀不相成

御部屋樣御定銀米　男女御附人

御內證之御方御定銀米　女中御附

一御嫡子樣御誕生より御髮置迄御附女中御切米等　享和元酉十月

御髮置より御元服迄御附女中御切米等　文化七午九月

御元服後右同斷　同十三子七月

御嫡子樣御誕生申上候女中同斷　同年

御姫樣御誕生申上候女中同斷

一御聟養子被　仰出御祝儀（一本ナシ爲）御取替之品　文化十三子六月

一御本家女中御方々樣女中打込順　寛文十三酉年御定以上叙族式

一方々樣御定銀米

一左京大夫様御合力米定

右兩條は叙族式の記載に非す御勘定所根元覺帳所記なれ共類集爰に編入す

叙族式被　仰出

叙族式之儀者　御當主様　御隱居様御嫡子様御簾中様奉初御連女様御男子様方御實母様御部屋様等御順御附人御定銀米其外總体之御規定永世迄御立置被遊候御儀に有之　上々様方之御規則相立不申候ては御政事向等万端御取締之元難相立松平越中守殿（御老中勤役中）寛政四子十月四日左之御書付年寄共迄御渡し御規則之儀は　公儀御振合に御准可被成との事にて有之右御書付之通に付彌御規則後世迄慥に御立置可被遊　思召にて追々御穿鑿之上此叙族式之通之御規則に被　仰出候御儀にて有之　御手前之　思召計にて御定被遊候御品にては無之前件越中守殿御渡し候御書付之趣も有之旁永世之御規則に被　仰出候也

叙族式之儀者先達てより追々御定被遊候へ共越中守殿被仰聞候品も有之旁御取調被遊候との御趣意顯れ無之候に付叙族式序文へ認出し候様此節被　仰出候也

越中守殿御渡し候御書付

太眞殿御入用向御取かはしの類等も御取締かくへつに有之候哉何とか左様にも無之哉之様にも承及候總て表向之御取かはし類ともに御規則は可有之儀に候尤右御規則之處　公儀に御准し可被成儀にて御當職右より御隱居と申御順にて御隱居之御實母等は重く御取扱可有之とても上々向之御次に御順可有之儀にて万端右様之御規則に可有之處是迄左様にも無之哉之様にも承傳候總て御儉

約御取締之儀も右様大(一本方立)候處より御規則相立御政事向等万端御當職之御任に有之候儀等申迄も
無之儀に候得共宜く其御品相分り幷取扱候もの區々に不相成一致に御取締いたし候様に不取計し
ては難相成事に候是等之趣能々相心得紀伊殿へも被申上候様にと存候依之無急度覺書差進し候事
但越中守殿御渡し候御本紙は　上之御紋散御掛硯に御入置被遊有之候事
文化九壬申八月　奉り

水野飛驒守
安藤帶刀
渡邊主水正
村上伊豫守
伊達但馬守
村松鄕右衛門
加納平次右衛門
戸田金左衛門

件之通格別之御趣意にて永世之御規則に被　仰出候御儀に付時之　御當主様万一　思召之品も被
爲在候共御手前之　思召計にて御定被遊候御品にては無之候付何分御規則通り御居置被遊候様我
々共より奉申上時之執政も御規則通りを違背仕間敷者也
上々様方御順

以來　上々樣方御順

御當主樣　御隱居樣　御嫡子樣　御簾中樣

御嫡子樣の御簾中樣　御息所樣

政所樣　攝家御簾中樣　淸華御簾中樣

御姫樣方　御男子樣方　御實母樣

御姫樣方之內

尾水樣方へ御入輿被爲在　御家御簾中樣との御順は御續之御遠近に不拘御先方御官位次第

御順被爲立候事

右者　御入輿後之御順にて御緣組被爲濟候ても　御手前に被爲入候內は御內外共　御姉妹之御次第に被爲立候事

上々樣方御定銀米

以來　上々樣方御定銀米此御規則之通被進不時御入用別段には不被進筈尤　公儀御勤向之不時御入用者別段に被進　御手前御大禮に付ての不時御入用格別之御出高に候得は別段に被進其余之不時御入用者不被進筈付平年御定銀にて御余金有之樣取計不時之御手當に致置月御入用共御淺出來候樣可取計事

一御實母樣御表立被遊候後も表向御附屆は

一御當主樣　御隱居樣　御嫡子樣　御簾中樣計其外一圓表向より御附屆無之大奧取扱にて爲御取替

是以甚御手輕に取計可申事

一御附屬此御規則之通御附被遊御供其外御人數入候節者御表方より相勤平日御側廻り其外御番方役所向等極御人數にて相濟候樣可取計事

寛政五年丑九月

「大殿樣　御定銀　七百五十貫目　御定米無之」

御隱居樣　御定銀米　三百貫目　三百石

○印之分は不被　仰付さも可相濟哉之事

御附屬　大目付は不被　仰付事

御老中一人

下げ紙　本文御老中　思召にて被　仰付候儀に付御老中不被　仰付節は　御本家より御用兼相勤候事

「附屬二三印に本文之品委細留あり」

御用人四人内二人奥掛り　御廣敷御用人二人

同格一兩人　御納戸頭一人

「○」中奥頭役八九人　御目付二人

御小姓頭取四人　御小納戸頭取三人

御小姓八人　「御小姓御小納戸御人數等之品附錄四印に記す」　御小納戸十四人内六人御膳番奥之番二人宛

「〇」中奥平士八九人　　御醫師二人内一人御匙

御針醫一人　　奥御右筆組頭留役内一人御表方より繰廻し

調方御右筆三人奥御右筆兼帯　　御臺所頭一人御賄頭兼帯

御同朋一人　　御小人頭一人御駕籠頭御道具支配兼帯

御勘定二人御金奉行御臺所吟味役兼帯　　御廣敷御用達二人

御廣敷番六人　　御納戸二人

御用部屋書役三人　　御小姓目付二人

御徒目付四人　　御用部屋吟味役一人

御廣敷書役三人　　御臺所人八人内一人組頭

御賄人六人内一人組頭御廣敷御賄方兼　　御勝手書役三人支配勘定御金手代大納戸手代兼

伊賀二組廿八人内二人組頭　　坊主三十人

御廣敷御錠口番十人　　御小姓同心七人

小間使十一人内一人組頭　　御駕之者十六人内一人組頭

御小人卅七人内一人組頭　　御廣敷陸尺十人内一人人廻し

御臺所御中間廿三人　　御附女中御人數極別帳附録にあり

御嫡子様　御定銀米　御目見以前　百廿貫目　八十石
　　　　　　　　　　御目見以后　三百貫目　百石

「大殿様御目見以前御定銀米　百廿貫目　八十石

御前御目見已後御定銀米　三百貫目　百　石

但御目見以前は相分兼申候付大殿様御振合を認出申候」

○印の分上に同

一別御住居に不相成内御小姓御小納戸部屋之儀に付心得振り

御小姓頭へ別紙「△」印之通被仰付有之事

△印は奥に留あり

御附屬

御誕生之節より

御傅一人

奥掛り御用人一人御表方兼帯

御小姓頭取三人　御髪置之節より御小納戸なも被　仰付候付
其節は御小納戸頭なも兼

御小姓三人

御伽三人

御匙醫一人

御傅方書役一人

御草履持二人

御駕之者六人

御小人五人

御髪置之節より御増人

○中奥頭役三人

四人増　御小姓都合十人内頭取三人
御小納戸頭取兼

御小納戸八人内二人奥之番

新御番三人

小十人三人

御徒勤三人

坊主六人

　御目見之節より御増人

御傅都合二人　一人増

中奥頭役五人

御膳番勤之　御小納戸二人

調方御右筆一人

御駕之者都合十二人　外に組頭一人　六人増

御小姓同心六人

奥掛り御用人都合二人　一人増

御小姓都合十一人　内頭取三人　一人増

御膳奉行二人

御小姓目付二人

御小（一本姓 人）都合卅七人　外に組頭一人　三十二人増

　御目見後別御殿へ御移後より

　但前條之御人數御増又は新規共全左之通相成候事　大目付は不被　仰付事

御傅二人

御用人四人内　二人奥掛り　一人御表方より

御納戸頭一人　御表方より

中奥頭役九人

御小納戸十七人内　三人御膳番　四人奥之番

御匙醫一人

御膳奉行二人

大御番頭部屋勤四人　内一人御表方より

御廣敷御用人同格共三人　御表方より

御目付三人　内一人御表方より

御小姓十四人内頭取六人　内三人御小納戸頭取兼

御小姓組二人　御表方より

奥御醫師　御表方より繰廻し

中奥平士四人

新御番三人御表方より　遠待御番四人寄合より
奥御右筆一人御表方より　表御右筆一人御表方より
調方御右筆一人　調方御右筆見習一人
小十人十四五人内組頭二人御表方より　御台所頭一人御賄頭兼帯
御小人頭一人御駕頭兼帯　御勘定一人御金方兼帯
御傳方書役一人　御用部屋書役三人
御小姓目付三人　御徒目付三人
御徒廿人内組頭二人御表方より　御台所見廻役一人御台所目付大納戸見廻役兼
御用部屋吟味役一人御殿見廻役兼　御台所人八人御表方より
御賄人六人御表方より　坊主四十三人
御數寄屋坊主御表方より繰廻一人宛　御金手代二人
御小姓同心七人　御駕之者十六人内組頭一人
御口之者三人　御小人三十七人
御草履持四人　小間使十人御表方より
御臺所御中間二十三人御表方より

一御廣敷向下役は　御簾中樣被成御座候得は右御附屬にて御用相勤　御簾中樣御入輿以前は御表かた御廣敷御用達を初末々迄都て御表方より繰廻相勤候事

但繰廻差支候向は人を定御表方之内より可相勤事

「△」　卯年江戸にて極之内書抜御小姓方

御小姓　　御小納戸

右之役々　御當主様　御嫡子様　御隠居様御別殿に御住居被遊候節は夫々様相勤候者共同役之儀には候得共都て相互に　殿中にても出會等一切不仕候様若又同　御殿御住居之節は部屋等一所に可有之候へは全右之通にも難相成儀候へ共前段極り之趣意相心得相勤候様尤夫々様へ被爲　思召候儀も御互に不被遊候筈　方々様へ被爲　思召候儀は猶更不相成候右之通に付　御嫡子様本初御幼年之節御伽に罷出候儀者勿論不相成候乍併　御當主様より被　仰付候儀は可爲格別事

但右兩役諸稽古事等仕候節　御覧被遊候儀被　召仕候　御方々様之外都て御無用被遊候事

一兩頭取之儀は是迄之振に可相心得候然共一躰は矢張前條之意味相含可罷在事

右之趣意是迄格別之御定も無之候へ共　思召之品被爲在今度御改正被遊候條向後不相紛様相心得可申との御事

一御膳番奥之番之儀は是までの通之事候乍併右之趣を兼て相含罷在候様との儀も申渡す

御大小御留緒之儀御九歳迄は御留緒御用ひ御十歳よりは御留緒御止被遊御早留御用ひ被遊候品文化九申（五）[一本十]月張紙帳へ委細留有之候事

下け紙に御嫡子様には御留守にても　御當主様御同様御錠口御通行被遊　御二男様よりは御留守年には御廣敷二枚戸より御通行被成候事

但本文之通には候へ共　御嫡子樣御通行に付御錠口明き有之候はゝ御二男樣にも矢張御錠口より御通り被成候事「附錄一印に委細留あり」

御簾中樣　御定銀米　貳百五十貫目　三百石

「明脫院樣　御定銀米　三百貫目　四百廿三石」

一御附屬は別段に不被　仰付御廣敷御用人を初江戶表御廣敷向之御役人一統　御簾中樣へ御附被遊尤御表方御用をも其儘兼相勤候事

一左之分別段被　仰付候事

御臺所頭一人御賄頭兼帶　御臺所人四人

御賄人四人　御小人七人

仕丁十五人　外に組頭一人　御下男八人

一御玄關御番者當時之御廣敷御玄關御番にて相濟候事

一御門番同心御表方より繰廻し相勤候事

一御別御殿に被爲成候時は右御廣敷向兼勤共差支候付其節は左之通御附屬被　仰付候事

御附御用人二人　「△印附紙」御廣敷御用人內より持格にて被　仰付候事

△御用達二人　御進物預并御〆り役御金方勤共兼帶御客應答は御表方より相應之向二人程可被　仰付哉の事

御醫師　御表ナより繰廻し兼勤人數不極　御針醫同斷

御臺所頭一人御賄頭兼帶　御廣敷番六人御客應答も相勤也

書役三人　一御玄關御番は御廣敷御玄關御番之內より繰廻し相勤

御臺所人四人（內一人御臺所吟味役より兼帶）　御賄人四人

御臺所吟味役は御賄人より兼候方可然候猶其節中見御都合宜方へ可取計候

小買物役二人　坊主三人

御金手代二人　御賄方二人

御廣敷御錠口番八人　小間使八人

御小人七人　仕丁十五人外に組頭一人

右者京都なとより　御入輿之　御簾中樣之御定に候事

一公儀より　御入輿之　御簾中樣御附屬は左之通別段被　仰付御用人も御役順御書院番頭之上へ出候事

御用人二人　公方樣御成又は御立寄等之節に御用人二人共　御守殿御門外にて御目見之事

御臺所頭一人（御賄頭兼帶）　御用達二人

御廣敷番八人　御廣敷添番五人

書役三人　御臺所人六人

御賄人六人　御賄方一人

御賄方勘定手代二人　坊主五人內三人（公儀より御附之御用人兼附）

御廣敷御錠口番卅人內一人組頭　御下男十人

御小人五人

一左之分御表方之御役より出役

御守殿表御門御番

御弓十張　御鉄砲二十挺　御長柄二十本猩々緋袋

御先手物頭但同心共

御守殿中御門御番

御長柄十本　　五十人組之頭但同心共

御取次　　表頭役寄合　内三人

御玄關御番　　御廣敷御玄關御番

右之通御表方より繰廻し相勤但繰廻しにては差支候向は人を定相勤候様可被　仰付事

文化十三子八月

一御當主様之　御簾中様奉稱振跡々御名を奉稱御振合に候へ共向後　御手前様にては　御名を不奉稱

御簾中様と奉稱候事

公儀より　御入輿之　御簾中様は是迄之通　御名可奉稱事

一西丸に　御簾中様被爲在候節にても無御構　御手前にては　御簾中様と奉稱候事

一御嫡子樣之　御簾中樣は　御當主樣に　御簾中樣被爲在候へは　御名を奉稱右　御簾中樣不被爲
在節は御手前にては　御簾中樣と可奉稱事

御嫡女樣　御二女樣　　御定銀米　四十貫目　二拾石

「鍇姫樣豐姫樣　　御定銀米　四十貫目　二拾石」

「但鍇姫樣には當時御定銀五十五貫目被進御座候事」

御三女樣より　御末女樣迄　御定銀米　三十貫目　二十石

「普現院樣　　御定銀米　三十貫目　二十石」

右は　御入輿以前之御定銀米也

一御入輿以前は前々之通男子向御附屬無之「御婚姻前御手當金被進之品附錄に記」

御廣敷番二人　　御廣敷御錠口番一人

右之通御定銀米筋取扱候事

但御用少之内は御廣敷御用達より兼勤御勘定之節は御廣敷御錠口番より勤

御連女樣御入輿後　御定米　二百石

京都へ御入輿之節は　御定金　千兩　御定米　三百石

「政所樣　御定金　千五百兩　御定米　三百五十石

轉心院樣　御定米　三百石　外に御内々金二百兩」

御附屬

御用人一人　　同差添一人

一御目付は無之等但御先方之御樣子に寄御目付無之候て差支候節は可被　仰付事

御醫師一人　　御臺所頭一人御賄頭兼

御用達二人御金方兼

一御役順は　御連女樣方御臺所頭之次

但御役順へは被　仰付候砌御書載可申事

書役二人　　御台所人御賄人兼四人小買物役をも兼

坊主三人　　御廣敷御錠口番

乗物添三人　　御下男三人

御小人七人　　仕丁十二人外に組頭一人

右之通候へ共御先方之御樣子次第御定米并御附屬之内をも御減被遊或は一円御附人無之又は御醫師計御附被遊候事

一京都へ　御入輿之節は本文之外に左之通御附可被遊尤御先方之御模樣に寄增減も可有之事

御目付二人　　御廣敷番三人

御徒目付一人　　御徒五人

同心十人

少將樣方　　御定銀米　　七十五貫目　七十石

「修理大夫様　御定銀米　九十貫目　七十石」

是は別御殿御住居之節之御定同御殿御住居に候はゝ其節之御模様次第不被　仰付候ても相済候向は不被　仰付事

御附属

御傅一人　御用人一人

御留守居役一人　御目付二人

御近習番頭取三人　御近習番十二人

御供役一人御小人頭兼帯　小十人組頭一人

小十人五人　中之間番三人

御右筆二人　書役三人

御金方一人　御徒目付三人

御徒十人内一人組頭　御台所人御賄人兼三人

坊主五人　御草履持三人

御下男三人　御小人押六人

御小人廿四人　御駕之者十人

紀州に被成御座候は

御傅一人　江戸にて勤　御留守居役一人

御近習頭取平士より三人　　御近習番九人
御右筆一人　　御金方一人
書役二人　　御臺所人三人（一本ナシ御賄人兼）
右に准し末々も減し候事
御二男様　御三男様　御目見以前　御定銀米　二十五貫目　二十石
「修理大夫様　榮三郎様　御目見以前　御定銀米　五十貫目　三十石
勇信院殿御事　鉄之丞様　御定銀米　三十貫目　二十石」
下げ紙に御二男様よりは御留守年には御錠口御通行不被成御廣敷二枚戸より御通行被成候品等
御嫡子様御ヶ條之内に認め有之候事
「附錄一印に委細留あり」

御附屬
御用人一人　　御近習頭取平士より一人
御近習番九人
一別御殿に御移迄は御近習番無之左之通御役被　仰付
（並高御切米廿石江戸被下　金七兩三十石以上は六兩）御膳奉行格六人
一御男子様方附屬御膳奉行格獨禮格之輩之儀別段に部屋出來の筈候へ共出來候迄は御小納戸部屋へ
隔番に罷出相勤候事

御表御住居（迄）〔一本アリ〕は宿り無之

一上は役より持格にて被　仰付

一御誕生之砌より被　仰付別御殿へ御移之節より御近習番に被　仰付候事

一御近習番に被　仰付候後は　少將樣方御近習番之通並高拾五石に相成取來之筋は其儘被下候事

右者前々御抱守と被　仰付候へ共向後御抱守とは不被　仰付事

調役一人御金方兼帶　書役二人

坊主三人　御草履持二人

一御同殿に被成御座候へは一役所にて御用相辨役所勤之者は兼勤致し御人數減候事　御大小留緒之事御嫡子樣の部に有

御四男樣より　御末男樣迄　御定銀米　二十貫目　二十石

「壽德院樣御事　金十郎樣

大外記殿御事　職之丞樣　御定銀米　二十貫目　二十石

御附屬

御用人一人　御近習番六人

一別御殿へ御移迄は御近習番無之左之御役被　仰付

獨禮格四人

並高被下金勤方其外共　御二男樣　御三男樣方勤之通

調役一人御金方兼帶　書役一人

坊主三人　御草履持二人

一御同殿に被成御座候へは前條同斷　御大小御留緒之儀御嫡子様之部にあり

御實母様御取扱

享和元酉十月

一御妃匹を被重御嫡媵を御分ち被遊候　御深意付　御實母様は　御部屋様限にて　御簾中様に比候御取扱に不相成御臣下之御差等相立候様御規定被遊　一之御部屋様に　御姫様御誕生被遊　二の御部屋様に御嫡子様御誕生被遊候共　一の御部屋様を踰不申縱右　御嫡子様之御代に被爲成候てもやはり　一の御部屋様　二の御部屋様と申御順にて御平常　御母子様の御間は格別御式なと有之　御對顏之節は　御君臣の御式にて御敷居を隔　御對顏被遊候様万端右に御准御次第相立候様可仕候　水戸様にては是迄も右之御規則有之至極宜御定に有之候　公儀にてもおまんの方に　淑姫君様御嫡女様　孝順院様若君様御誕生被遊　おらくの方に　敏次郎様御次男様御誕生被遊其後　孝順院様御早世に付　敏次郎様御事　若君様に御弘被爲在候其砌おまんの方　御內證之御方と稱候様に被　仰出おらくの方老女の上被　仰付其儘　御內證「おまんの御方」之御方おらくの方と申御順にておらくの方はおまんの御方より御進めは無之右之通　若君様之　御實母様に被爲成候ても矢張御順を踰候儀は無之候若此以後　公儀にては替り候事も可有之哉縱相替り候共當時の御振合宜候間　御家にては御改不被遊御居置き被遊候　思召に候件之如く一の御部屋様はいつまても上にて二の御部屋様は御次に被居置候方禮讓も厚く穩に有之至極の御法に付永世前條之御規則に御定被遊候

下け紙に　本文御式なと有之　御對顏之節は御君臣之御差等相立御敷居を隔　御對顏被遊候御事には候へ共本行之通御母子樣之御間は格別之御儀にて御親しく御尊敬可被遊は勿論之御事に可有之旣に先年　大納言樣　水戶源文樣へ被爲成御座之間にて

御兩所樣御對顏被遊候節　源文樣御實母知仙院殿より　源文樣へ御物語等被致候へ共御敷居は隔有之候へ共　源文樣御應答之趣は至極御丁寧にて御手を突被遊御尊敬之御樣子有之御尤之被成方に思召候後々若唯本行御作法書に而已泥み心得違有之候ては如何に候間前段之趣能心得罷在候樣　御意被游候事

文政四巳九月

老女へ

大奧向之儀　御當主樣へ奉伺候筋は彼是なく候得共　御簾中樣へ相伺及取扱候御用向　御簾中樣不被成御座御部屋樣被爲在候節は自然右御部屋樣へ相伺候振にも相成候事候へ共御規則相立御部屋樣之儀　御簾中樣へ比候御取扱には決て不相成其御子樣之御代に至候ても御式なと有之　御對顏之節等は御敷居を御隔被遊君臣之御差等を御混不被遊筈に相成候付ては前顯之御用向も御部屋樣には御綺ひ不被成筈に付　御簾中樣不被成御座候節は都て　御當主樣へ可奉伺候其內細雜之儀に至候ては老女相談之上可致取扱事

但御用之品に寄　御當主樣へ相伺候以前に御部屋樣へ老女御相談申御了簡等承候儀は可有之候是以諸事右之手續に不相成樣可仕尤御部屋樣へ伺濟抔と申振には決て不相成樣可仕事

一御部屋樣之儀樣文字相認可申候　御實母樣は是迄樣文字をも相認候へ共此度御規則相立候に付過去之御方は是迄之通樣文字相認向後之御方は　御實母樣にても無差別都て樣文字に相認候事

本文之通之御極りに候へ共　公邊にては　公方樣之　御實母樣は都て樣文字之御取扱に有之御嫡子樣之　御實母樣は樣之御取扱に付　御手前にても右之通に相成候はゝ　公邊御振合御同樣に相成可然候哉

文政七申年九月

大納言樣へ相伺候處　公邊にては右之通にて何等御不都合之御品無之候へ共　御手前にては御緣家樣御出會等之節御不都合之御品被爲在候付　公邊と御一樣には難相成筋故本文之通御極被遊候儀に付以後猶評議等有之節右之御主意故行屆容易に見申候儀者不致樣相心得一通り宰相樣へも申上置候樣との御事に付申上置候事

「⊕」一是迄御誕生有之候へは御やとに相成候女中早速御品付段々御成長に隨ひ御祝儀事之節追々御品付候御振合候へ共左候ては自然に先輩を踰候道理に相成此度相立候御規定も崩れ候儀に付向後は御やとに相成候女中若無格之御中﨟に候はゝ右者御誕生之砌早速若年寄之上に被　仰付其以後は先達て御やとに成有之候女中を踰候義無之御祝儀事之節等其御やとの女中に不限先後之順次を以御品附候等に御規定被遊候事

本文御規定永世御用ひ被遊御先々御振合之通重き御取扱等に不被遊樣との品委く附錄「五」印の所にあり

一御部屋様御定銀米并御附人御人数之儀去る酉子両年に被　仰出御規則相立有之候處右御規則にても猶滞候趣意相見候付追々御精評之上此度左之通に御改正被遊永々之御規則に御定被遊候就ては御嫡腰を御分被遊何迄も君臣の御差等相立候様との品并二の御部屋様に　御嫡子様御誕生被遊候共一の御部屋様を踰へ不申候との品等都て酉年被　仰出候趣彌以御規定に被遊候條いか躰之儀有之候共後々異變無之様堅相守可申との御事

御部屋様

「永隆院様　御定銀米　二百十貫目　四百石」

御子様御部屋住之内并　御姫様之御實母等は勿論たとへ　御子様の御代に相成候ても御差別無之

「清信院様　二百十貫目　二百五十石」

御定銀米　六十貫目　九十石

下け紙　本文之通　御子様の御代に相成候ても万事御差別無之儀に付御定銀米之員數も勿論御差別は無之筈候然共　御母子様之御間にて極御内々御合力被進候儀は格別の御事に付　御代々に被爲成候はゝ右之趣政府より御内々申上　御前より御廣敷御用人へ被　仰出年々歳暮両度程に御内々被進御用と唱へ羽書を以政府より受取被進之取扱及候筈候乍去大躰一ヶ年に九百両を限りに被進候事

一女中之御切米御扶持方は右の外御表渡り

女中御附人本文御人數追て極り奥にあり文政七申五月に

御年寄一人　　　　　　若年寄二人
御次　二人　　　　　　御三之間二人
御中居二人　　　　　　御半下四人

一御老年に被及候得は御介抱も入候儀に付其節之御模樣にて御中﨟兩三人被　仰付候儀も可有之但可成丈け御人少にて相濟候樣

一別御住居に相成候へは左之通被　仰付御人數之儀は其節々相伺且　御本家老女とも申談可成丈け御人數少にて相濟候樣

一御宛行御人數等之儀は其節々相伺格合に准し相極成丈け御人少にて相濟候樣御本家老女とも可申談事

「〇」上﨟但地下上﨟に候事　　　御年寄
若年寄　　　　「〇」御中﨟頭
御中﨟　　　　「〇」御小姓
表使　　　　　「〇」御右筆
御次　　　　　「〇」吳服之間
御三之間　　　御中居
使番　　　　　火之番

御半下

右之通には候得共丸印之分は不被　仰付共先は可相濟事

男子向御附人

一男子向御附人は別段には不被　仰付御廣敷御用人頭取御用取扱御廣敷御用達之內兩人御廣敷之內兩人書役兩人御用掛被　仰付共外御廣敷勤より兼帶

一別御住居に相成候得は

御役順御留守居番頭之次　御用人一人　　御連女樣方同役之次　御用達三人御金方御進物奉行兼

御連女樣方同役之次　御廣敷番六人　　御廣敷御玄關御番の次　御廣敷勤三人御玄關御番兼

御男子樣方同役之次　書役二人　　同斷但御表御台所頭支配　御臺所人御賄人兼四人

御廣敷御錠口番八人　　陸尺　五六人

御下男三人　　仕丁　六人

一御住居之御模樣に寄御人數之內をも可成丈減し候樣

一御門番同心等御表方より繰廻し相勤候事

御內證之御方　御定銀米　三十貫目　拾五人扶持

「法成院殿　御定銀米　金五十兩　十八人扶持

外に年々御內々にて　金四百九十五兩」

「慈讓院殿　御定銀米　金百兩　二十八人扶持　御內々不知」

上げ紙に文政二卯十二月　一御内證之御方御定銀米之儀本行之通候處尙御内證御方（おさえ御方）御品に付
代りとして此節御定銀四十貫目御定米五十石に御加増被成遣候事尤已後迚も本行三十貫目
十五人扶持之御定銀米は不相替御定に候へ共御内證之御方と被　仰出年數等相立候はゝ御
模様次第其節之　思召次第にて別段御跡方通り四十貫目五十石迄には御加増被成遣候等被
仰出候事

下げ紙　文化十酉閏十一月　一當時御定銀米御減中之處御手前抱の筋も有之付是迄被遣候御内々被
下金相減年々金三百五十兩つゝ御内々被遣候但當時一歩減

一御附人之儀本行之通に候處御用向御廣敷御用達は江紀共一人宛御廣敷番其外御廣敷末々之分
は御廣敷御用人にて評議之上取計候等被　仰出
男子向御附人別段には不被　仰付御廣敷御用人頭取御用向取扱御敷御用達之内一人御廣敷番之内
二人御用掛被　仰付其外役々より兼勤
女中御附人　（本文御附人御人數追て極り奥にあり 文政七申五月に）　御三之間一人
右之外は御手前抱

下ケ紙　一御三之間一人にては病氣引等之節差支候付此度兩人に相成以來も兩人被　仰付等
文化十酉閏十一月
御内證之御方と申に無之

御やとに成候　　　　　　　　大上﨟之上
銀九貫目　　十人扶持
諸渡物有之事
御やとに成候　　　　　　　　大上﨟格
金七十兩　　十人扶持
諸渡物有之候事
御やとに成候　　　　　　　　若年寄之上
金五十兩　　七人扶持
諸渡物之有事
御やとに成候　　　　　　　　御中﨟
御切米御扶持方諸渡り物共御中﨟之通

享和元酉十月
一御嫡子樣御誕生之節より御髮置迄御附女中御切米御扶持方御合力
御切米二十石　四人扶持　御合力金十兩　御年寄
御切米金廿兩　三人扶持　御合力金五兩　若年寄
御切米金十八兩　三人扶持　　　　　　　御中﨟
御切米金十八兩　三人扶持　　　　　　　御錠口

御切米十五石　三人扶持　表使
同　上　同　上　御右筆
御切米金十二兩　二人扶持　御　次
御切米十二石　三人扶持　呉服之間
御切米金八兩　二人扶持　御三之間
御切米金八兩　二人扶持　御末頭
御切米金六兩　二人扶持　御中居
御切米金五兩　一人扶持　使　番
御切米金三兩　一人扶持　御半下

右之通

文化七午九月

一御髪置より御元服迄御附女中御切米御扶持方御合力

御切米四十石　五人扶持　御合力金七兩　大上﨟
御切米四十石　四人扶持　御合力金五兩　小上﨟
御切米三十石　四人扶持　御合力金十五兩　老女
御切米金二十兩　三人扶持　御合力金五兩　若年寄
御切米金十八兩　三人扶持　御合力金三兩　御中﨟

御錠口	御切米金十八兩	三人扶持	御合力金三兩
御小姓	御切米金十七兩	三人扶持	
表　使	御切米十五石	三人扶持	御合力金三兩
御右筆	御切米十五石	三人扶持	
御　次	御切米金十二兩	二人扶持	
呉服之間	御切米十二石	三人扶持	
御三之間	御切米金九兩	二人扶持	
御末頭	御切米金八兩	二人扶持	
御中居	御切米金七兩	二人扶持	
使　番	御切米金六兩	一人扶持	
御半下	御切米金四兩	一人扶持	

右之通

文化十三子七月

一御元服後御附女中御切米御扶持方御合力

大上﨟	御切米四十石	五人扶持	御合力金十五兩
小上﨟 老　女	御切米三十石	四人扶持	御合力金十五兩
若年寄 御中﨟頭	御切米金二十兩	三人扶持	御合力金七兩

役	御切米	扶持	御合力
御中﨟	御切米金二十兩	三人扶持	御合力金五兩
御小姓	御切米金十五兩	三人扶持	
表使	御切米十八石	三人扶持	
御右筆	御切米十五石	三人扶持	
御次	御切米金十二兩	二人扶持	
呉服之間	御切米十二石	三人扶持	
盲女	御切米金十二兩	三人扶持	
御三之間	御切米金九兩	二人扶持	
御末頭	御切米金八兩	二人扶持	
御中居	御切米金七兩	二人扶持	
使番	御切米金六兩	一人扶持	
御半下	御切米金四兩	一人扶持	

右之通

文化十三子年

一御嫡子樣御誕生申上候女中若無格之御中﨟に候得者段々御品附之上

御嫡子樣御袴着之節より　御內證之御方と被　仰出御附人等御極之通候事

一御元服之節より御次格女中一人御增被遊尤三字名附候事

一御當主樣に被爲成候節より　御內證樣と被　仰出御附人等　御部屋樣之通に候事

一御姬樣御誕生申上候女中若無格之御中﨟に候へは段々御品附之上　右　御姬樣へ　御養君被　仰出候はゝ其節より　御內證之御方と被　仰出御附人等御極之通に候事

一御婚禮之節より御次格女中一人御增被遊尤三字名附候事

一御養君　御當主樣に被爲成候節より　御內證樣と被　仰出御附人等　御部屋樣之通候事

「御乘物も　御部屋樣之通に相成候事
仕立方等極り文政四巳五月蜜附込にあり」

御聟養子御祝儀爲御取替

文化十三子六月

一御聟養子被　仰出御祝儀爲御取替之節

御當主樣　御隱居樣　御嫡子樣　御簾中樣之外　御方々樣者御口上計御品爲御取替者無之候へ共右御聟養子被　仰出候　御簾中樣を御產申候　御部屋樣　御內證之御方よりは右　御簾中樣御儀に付爲御取替有之節者都て被差上物被遣物等有之筈に付御用人にて取調候事

一御やとに相成候女中其　御子樣之御祝儀事等に付爲御取替有之節は右女中へ被下物幷差上物是又向後御用人にて相調候筈候事

御本家方々樣女中打込順

寬政十三酉年御定

御本家女中　御方々樣女中打込順

御本家　　　　大上臈　　　　小上臈　　　　老女
「△印下ヶ紙」　　　　　　　　　　　　　　　　「△」
大上臈老女之両役を統て大年寄共(一本アリ と)唱候事
「〇印下ヶ紙」
大年寄共唱候事　　　　　御嫡子様「〇」　　　老女「〇」
御簾中様　　　大上臈　　　　小上臈　　　　老女
「△印下ヶ紙」　　　　　　　　　　　　　　　　「△」
右三役之内　思召を以大年寄被　仰付候儀も可有之然共本行御役名は其儘被立置別に大年寄
御役名認出に不及
一老女之内御介添御局被　仰付候儀も可有之然共別に御役名認出に不及
一御嫡子様　御簾中様女中は　上之御順に准候筈付　御嫡子様御官位以前は　御簾中様之大上臈
小上臈老女の次へ　御嫡子様老女出る
御官位後より本行之順に候事
一老女以下も右に准
「△印下ヶ紙」御嫡子様御初　御姫様方御男子様方御幼年之内は御用有之向に計御附被進御九才御
十才之比より本行之通被　仰付候筈
御本家　御嫡子様「〇」　若年寄「△」　　　御嫡女様より御末女様迄　　大上臈
小上臈　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御年寄「△」

「△印下け紙に」御婚禮後御年寄之内御介添御局被　仰付儀も可有之然共別に御役名認出に不及

上ヶ紙に都て老中と申唱は御本家共　御隱居様　御嫡子様　御簾中様附計御年寄を老女とも唱候へ共右之外御年寄は老女と申唱御遠慮可被爲在事　但御入輿後御養子後夫々御先方にての唱は御勝手次第之事

一大上﨟小上﨟　御婚禮以前は御附無之　御婚禮之砌より御附被　仰付本行之順に出候事

一年寄も　御婚禮以前は御傅と唱夫々持格にて出候事

「○」
御本家御嫡子様　御中﨟　御錠口　御二男様より御末男様迄　御傅

御手前に被成御座候内は夫々持格にて出候事

一左京大夫様へ御養子其外他所（一本ナシ「々」）へ御養子之後は本行之通に出右より上段之格式有之筋は夫々持格之所へ出候事

御簾中様　若年寄　御中﨟頭　御中﨟　御小姓

御本家「○」御嫡子様 御簾中様　表使　御右筆頭　御部屋様　上﨟

一當時は不被　仰出候へ共被　仰付候へは其所へ出る尤地下上﨟に候事

「朱書は張紙直し」

御部屋様　御年寄　御嫡女様より御末女様迄　若年寄　御中﨟頭　御小姓
「御本家 御次頭」

御本家「○」御嫡子様 御簾中様　御次

御次男様 御末男様　御中﨟　御錠口　御部屋様　御中﨟　御小姓

御嫡女様 御末男様　御末女様 御部屋様　御二男様　表使

御本家「〇」　御嫡子様 御簾中様　呉服之間　御嫡女様 御末女様　御右筆

御次　御二男様 御末男様　御次　御部屋様　御右筆

御次　御嫡女様 御末男様　御末女様 御部屋様　御二男様　呉服之間

下ヶ紙　御二男様　御末男様　呉服之間先不被　仰付時に寄被　仰付候事

御本家「〇」　御嫡子様 御簾中様　御三之間　御本家　御右筆見習　享和元酉十二月極る

御嫡女様 御末男様　御末女様 御部屋様　御二男様　御三之間　御本家「〇」　御嫡子様 御簾中様　御末頭

使番頭

一御末頭使番頭以下も右之順を見合出候事

一御姫様方御右筆呉服之間等　御入輿以前は無之　御入輿之砌より右之順に候事

一御内證之方御附人は持格に出候事

一大殿様方之女中は是迄之通にて被差置已來　御隱居様之女中は朱丸印之所へ出候筈此度御定置被遊候事

一富宮様御入輿後　御本家女中表使以上計　御同所へ御目見仕候由右者相紛候品にて候處　種姫君様御入輿後も矢張右御跡方を以表使以上御目見仕候へ共既　公邊にても　御本家御目見以上之女中は不殘　御臺様へ　御目見仕　尾州様女中　淑姫君様へ御目見之儀も右御同様に付以來

公儀より　御入輿之　御簾中様にても　御本家　御目見以上之女中不残御目見仕候事

叙族式終

方々様御定銀米之事　（御勘定所根元覚帳に記載する所類に因て爰に編す）

西濱様　舜恭院様御事文政七年御隠居紀州西濱村に御住居

天保元寅九月より御定に相成候事

一万五千兩　　御定金

二百七十石　　御定米

大殿様　觀自在院様御事寛政四未年御隠居大殿様と稱し奉る

壹萬五千貳百五十八兩一歩　　御定金

御簾中様　文政七申年より御定銀貳百五十貫目之一歩減之上猶又二歩減

三千兩　　御定金

文政七申年（三百石之）一歩減（一本ナシ）

貳百七十石　　御定米

豊姫様へ　「舜恭院様御女顯龍院様御簾中」

壹歩減之上猶壹歩減

貳百貫目　　御定銀

壹歩減
貳百五十石　　御定米

大政所様「觀自在院様御女懿君様御事一條關白輝良公へ御嫁し文化十一年より大政所様と稱す」

千五百兩御定金右を天明八壹歩減　寛政九無減享和元一歩減文化八猶又二歩減

千八拾兩　　御定金　　同三百貳拾五兩　　被進金

同百九十五兩　　御定金　　同三百十五兩　　御定金

一條様

天明之度は五百兩被進享和元酉より一歩減四百五十兩相成文化八未年より猶又二歩減にて被
進三百六十兩

御部屋様「鶴壽院様御實母榮恭院様也」

天保三辰百貫目極一歩減之上猶又二歩減

千二百兩　　御定金

百五十石

外に　九百兩　　御入手形出有之

御內證之御方「舜恭院様御妾讓恭院様也」

天保三辰六十貫目一歩減之上猶又二歩減

七百二拾兩　　九十石

外に　四百兩二歩　御入手形出

實成院様「實成院様は顯龍院様御妾菊千代様御生母也」
嘉永六丑年より被進六十貫目之一歩減
七百二十兩　　　御定金
九拾石之壹歩減　　　八十一石
左京大夫様御合力之事　前同帳
一寛文十戌年　左京大夫様御知行所元高二萬石に替候に付戌年より御入用物成にて拂候筈
一同年御知行御拜領に付　御家より之三万石御戻に相成
文化三寅年御勘定所取調之由左之通扣有之候得共此節同役所再調取計候處件之分も據所難相分
由付ては右より已前之儀は猶更相分り不申事
一元祿十一寅より二万俵被進
右同斷此節再調取計候處御書付御證文等は難見當候へとも御納拂帳傳法御勘定帳に同年より相
顯れ有之付發旦に相違有之間敷相見候旨之由
一寶永六丑より一万俵御增三万俵
一寛保二戌年より一万俵御減二万俵
一寶暦十四申年より五千俵御減壹万五千俵
一安永二巳年より五千俵御增貳万俵
一寛政三亥年より一万俵御斷

一同五丑年より先規之通二万俵被進
右之通
右御合力米一ヶ年分差引大様
一米八千石　御合力
一米三十石余　上ヶ米
合八千三十石余
内
三百二十五石　若山御用米
四百五十一石一斗余　同御扶持米
千十三石九斗余　御切米
六百四十七石七斗　西夏貸先貸共
四千五百石　江戸御用米
小以六千九百三十七石七斗余
残千九十二石五斗三升余　畑米直段押平し
此銀九十四貫五百目余
内
八十貫目　前貸

二十貫百九十一匁五分二厘　運賃
此四千五百石　江戸御用米運賃一ヶ年納平し
小以百貫百九十一匁五分二厘
差引　五貫六百八十七匁余　不足
内へ　貳十三貫三百匁　此二百五十石　中之間番料賄方拂立相場
猶差引十七貫六百十二匁余
右過不足納境に差引に相成候事

近世法令變更の大目

享保以降の法令記錄の存するもの各制度に關する分は其部門に編述と雖も無事治平の世一般政令の紀綱は總して國初以來の舊貫に隨順別に新法の發布を見す故に嘉永間に至るの間は記すへきものなし

一嘉永安政以降に至ては世機一再轉爾后追年劇變遂に未曾有之大變革に至る隨て法令亦朝令暮布殆と空日なし就中時勢之變轉と天下制度の大革とにより從來之國法（所謂御條目）の變更と更に新法を創定せられたる大目を擧くれは概ね左の如し（各條皆其制度の部類に詳也）

享保三亥六月　無緣養子を許す
嘉永七寅年二月　御目見以下之跡目を立つ
同年五月　御家中世祿

慶應元丑年八月　世祿廢止

同二寅年九月　御家中指物之制を廢す

同年十一月　御家中十七歳已下にて病死者の跡目を立つ

同年十二月　御役順廢止軍制改正

明治元辰年十月　府藩縣三治に歸す

同年十一月　剃髮之者蓄髮せしむ

同二巳年二月　國政大改革（平均祿　職制　役高無役高　兵制等種々制定）

同年十二月　御家中士族卒と稱し地方官の管屬となる

同三午年五月　文武官人の服制制定

如斯にして明治四年七月廢藩置縣に至る而して右條項は悉く各制度之部に詳記したれは爰に再記を略せり唯分記しかたき雜法數件を次に叙述す

慶應以後法令

慶應以後法令

御家中病死隱匿に付發令

慶應二寅年二月十六日

一御家中之內病死致候を不致發表御宛行其儘載居候筋粗有之趣相聞候右躰之儀無之樣每々被　仰出も有之處不正之至如何之事候以來は御取調之上其品に寄跡式不被　仰付又は格祿減少可被　仰付儀可有之條心得違無之樣可致事

一病氣痛所等にて難相勤隱居相願度向は御出陣　御留守中にても相願不苦候事

一病氣等にて引籠久々勤も不致筋多有之趣相聞候右は當今之御時勢恐入候儀にて畢竟御憐愍にて御沙汰は無之候へ共銘々宜加を辨へ心得振も可有之筈候條此段可被相心得候事

猥に發炮を戒む

同年十一月

一近來御城下端御場所等不相辨猥に發炮致候者有之趣相聞候事候右等之儀見受候はゝ屹度相糺可申候條心得違無之樣可致事

手代小役人病死隱匿に付

慶應三卯年正月廿五日

一諸役所手代小役人之内內實病死致有之儀を不致發表包置給扶持受取居候者有之哉に相聞甚如何之事候向後右等之者有之候はゝ取調候上永之御暇遣跡不召抱儀も可有之候間諸局頭取にて行屆取調不爲包置可被相達候事

山川御留場廢止

同年四月廿一日

一山川御留場且夫々へ之　御免場相止向後御家中一統へ御免可被成下との御事

本文之通候へ共砲發殺生之儀は山分之外不相成筈

一御遊獵之節は勿論殺生不相成年寄衆罷越候節も遠慮可致事

右一通

一山川御留場且夫々へ之御免場相止御家中一統へ御免に相成候付銘々勝手次第山殺生に罷越候節は山馴之筋附添候樣且いつれへ罷越候との品前日御用人へ相屆候上可罷越事

同年五月二日

一此度御留場且夫々への御免場廢止之儀は鳥獸飼付等之品に付自然農業之妨に可相成廉も有之百姓共從來難澁致候趣相聞候付格段之　思召を以て件之通被　仰出候事に付御家中之面々殺生に罷越候節右御趣意篤と相辨不作法之儀無之樣可致事

同月十四日

一山川御留場且夫々へ之御免場相止御家中一統へ御免相成砲發殺生之儀は山分之外不相成候へ共年寄衆幷菊之間詰衆は左之通　御城下より一里之外にて砲發殺生御免被成候事

東は　廣原村朝日出島村岡崎寺內村山東道鳴神村領籠池より栗栖村八軒屋村等を限り

北は　六十谷村より梅原村へ見通し

西は　外濱濱通り小浦限り

南は　紀三井寺村一里塚より布引番所へ見通し

慶應三卯年七月十四日

一山川御留場且夫々へ御免場相止御家中一統へ御免に相成候儀は此度被　仰出候通百姓共難儀不相成樣との思召にて被　仰出候處輕き末々百姓等に至る迄砲發殺生不苦樣心得違自然怪我致し候者も有之趣相聞　御仁惠之御趣意に齟齬致し如何之事に付若向後心得違自儘に砲發殺生致候者有之候はゝ嚴重に咎可申付候條末々之者共へ可申聞事

御留場とは近郷山川の御狩獵地にして他の殺生禁止之處をいふ御免場とは執政初重職高祿之者へ許し賜る遊獵地にして亦他人の遊獵を禁したり諸士一般へも遊獵免許の地ありと雖も多衆共

歌舞妓芝居見物禁止

剃髪職之者蓄髪

金錢借貸民政局裁判

同且良地は多く大夫重臣等に占有せられて自由を得さりし也遊獵の事は山野を拔渉風雨寒暑に堪へ奨武の趣義たるを以て往昔より如斯免許御免場の如きは召狀を發して執政之を申渡し頗る重きを置れたり然れ共猪狩鹿狩等之事を聞かす多く鳥魚遊獵太平之一樂事とし閑散の士類は日々川狩網打に余念なかりし也

同年九月六日御側御用人より布達

一歌舞妓芝居幷右に似寄候場所へ御家中幷勤人之向見物に罷越候儀前々より御制禁之儀は何れも相心得可罷在候へ共猶又此度改て御制禁被　仰出候付役手之外縱令一刀たり共相帶右等之場所へ罷越候者有之候はゝ見附次第相改屹度可被　仰付候條此段能相心得候樣可致事

維新後

明治元辰年十一月執政より布達

一御數寄屋頭御同朋蓄髪致し御數寄屋頭を御數寄屋預御同朋を子供支配と唱候事

一總坊主蓄髪させ子供と相唱可申事

一御醫師一統蓄髪致させ候樣被　仰出候事

一御醫師之向蓄髪被　仰出候付ては衣服其外是迄制外に相立有之候分以來總て諸士同樣に相心得可申事

同二巳年六月名卿民政局より布達

一近年金錢借貸之儀信義を失ひ不作略之者多有之儀は全く粗略之約定致し候より相生し候儀に付向

後總て民政局へ裏判可願出候其上にて若背約之者有之候はゝ屹度御取扱之筈に付右裏判無之勝手借貸之分は不作略之節借主より願出候共御取扱無之事

本文之通御定に付ては貸金高二厘通上納可致事

（家賃裏判等は是迄之通相背候儀無之且又今日より已前借貸之分は裏判無之共筋合御糺之上御取扱有之筈候事）

右之通候處兎角心得違不都合之願書差出候者有之不埒之至に付向後若心得違に於ては願書不取上而已ならす嚴敷處置可有之付末々迄篤と心得可申旨翌明治三年年六月十日再ひ同民政局より達す

明治三年年二月廿四日政事廳より

百姓町人共を手打成敗禁止

一百姓町人共士分之者へ對し無禮不作法いたし候節者各勝手に手打成敗等いたし其段屆出候儀に候得共元來罪之輕重を不問勝手に成敗等いたし候儀は甚以無謂次第に付向後不法之者有之節は其品委細に申出双方是非曲直篤と御取糺之上至當之御處置可被　仰付候間勝手に成敗等致候儀不相成候旨被　仰出候事

諸官人御用取扱之品に付配下之者不都合申立手向等いたし且御用にて途中往來之節不作法之者有之取押方手に餘り候節無據打捨等之及作略候儀は格別之事其品委細可屆出事

右之趣當年二月十二日於東京辨官へ伺之處十三日を以聞置との指令ありしを以本記之如く布告あり

按に　武士に向ひ慮外手向に及ふ者は無用捨切捨打果す事武士道之通義とす故に法令十三條にも下人令斬戮者先組頭へ可相

達云々と示されたり從僕下人のみならす家族子弟の如きも不屆之品有之難差置及手打たる旨屆出る之類不尠尤近世に至ては頗る希有にして天保の比迄は其事實なきに非され共爾後は絕て聞さるに至る

三味線胡弓之音曲禁止

同年四月廿二日政事廳より

一從來樂器之內三味線胡弓之類は別て淫心を導き甚風敎之妨に相成候儀に付向後斷然被禁候就ては樂制御一定之品朝廷より被　仰出候迄先左之音曲を相用可申事

雅樂　謠曲　俗箏(こと)

從來武家に在ては三弦胡弓を用る能はすと雖も若山にては往々婦女子に習はしめ私宴に用ひ就中輕輩之間に專ら行差たり江戶邸中にては嚴禁也

神葬祭を許す

明治三年年七月士民の神葬を許す

一從來宗門改之制度により佛葬に限りたる處維新後排佛論起り神葬流行之傾きあるを以て於東京左之通神祇官へ伺之處末上ヶ紙之通り答あり依て其趣を布達す

當藩士民葬祭之儀神道式に相改度旨願出候者御座候節は願之趣相濟せ候ても不苦儀に御座候哉此段兼て奉伺置候以上

庚午六月九日

上紙（書面士民神葬祭之儀邪敎改規則相立伺之上可聞屆事）

當藩士民神葬祭之儀相伺候處邪敎改規則相立伺之上御聞屆可相成旨御附紙を以被　仰聞之趣奉畏候右改振府藩縣一般之御規則は廟議を以　御沙汰被爲在候儀と奉存候得共先差向當藩に於て

は左之振合を以毎年春初に一度つゝ其地方之民政局にて篤と相改其旨同局より藩廳へ申出させ候様可仕と奉存候依て此段奉伺候以上

庚午六月十四日

神葬祭之者誓紙

私先祖より代々何村何神社氏下にて私初家族共に至迄切支丹類族には無御座候就御改誓紙一札如件

年號干支月　士族は何之誰印

民政局宛　平民は何組何村某印

村役人宛

右之通誓紙爲仕候事

「上紙伺之通聞屆候事」

明治三午年九月八日公用局より布達

御城大鼓打を廢す

一御城御太鼓打候儀廢止候様政事廳より被　仰聞候付今日より廢止候事

南紀德川史卷之百二十二

臣　堀内信編

法令制度第二

制度緒言

前編所記御條目初の法令は永世の國憲にして一切政令の大本也此の大本に基き制定せられたる法制千緒萬端隨て事々の細則曲節亦擧て盡すへからす世の澆季と共に煩益煩を重ね即ち諸士冠婚葬祭の事より一遞揖一文字の微に至る迄皆區々の制裁規程を存し馴致以て秩序をなせり依て左の數門に分類列叙す法令制度元二あるに非す唯細則を區分し考査に便ならしむ

尊稱制

按に公族尊稱の序敬字書樣の別等寛政以前の事詳ならされ共　舜恭公には最も禮文を修め秩序を正し給へり即ち　御歷代世子公御簾中及ひ　將軍家尾水兩公は樣文字（堅（たて）様（さま）と云ふ）　庶公子御連枝方は樣文字（美（び）様（さま）と云ふ）に定め給ふ又兩敬片敬の別を立させらる兩敬とは假令は尾水御兩家等は双方相敬する義にて御互に樣文字被仰被遊思召等の最敬詞を用ゆる也三卿方姫君方（幕府姫君にて諸侯へ嫁し給ふ所謂御守殿と稱）　御連枝は御兩敬なから樣文字にて少しく差別あり片敬とは先方のみ敬し此方は紀伊殿被存被申聞抔稱す幕府日光御門跡等に對する是也御緣家に非る諸侯へは都て紀伊殿と稱し被（られ）文字先方なとも殿と唱ふ是等細雜概言すへからす寛政以降の布達遺存の分を揭て大略を示す

一御家中總して君邊の事を稱するは無論一切の官物官具犬馬に至る迄も悉く御字を付稱す（職名も同し）　文書には　君上御嫡子御簾中は　樣文字大缺行思召　御意御沙汰被遊被仰出被爲成被爲在抔書し小欠字也

庶公子御連枝方は樣文字欠行御申聞御出何々被成抔記し諸侯は通して殿字を書するの成規也

一三卿方御連枝方を稱するは　御官名のみ唱へ　德川松平等の御稱號を付稱せさるの通規とす　文書亦同し

編中方々様とは御嫡子の外男女公子方の事也内庭にては御方(々)抔と略稱せり

一右近將監様は　菩提心公御子にて內藤家御相續下總守様も御同公子にて松平家御相續兵部様とは　大慧公御子矢田松平家(左兵衛督今の吉井家也)御相續にて御隱居也左兵衛督様は兵衛様御子御同家御相續あり加賀越前因州の諸侯一條家及播摩守様讃岐守様の兩御連枝とも女公子方御嫁しあらせられたる御緣家方なり

一上書とあるは執政初め御役人向より捧くる上申書をいふ

一若山にては出御を御成又は遠御成と唱ふれ共江戶表にては　公邊御成と紛敷儀も可有之付(江戶にては)御他出又は何方へ御出と唱へ可然との事文化十一年十二月にあり典禮出駕式御供筋覺書に記す

一御乘馬にて出御を向後御召切と不唱御早乘と唱へ可申との事文政七年十一月布告あり亦前同様右の如しと雖も寬政元年布告の通近時迄出御歸御と唱へたるなり

御供筋覺書に記す

上み向御家門御緣家方唱へ振等

寬政三亥年八月十一日

一御方々様之儀是迄は無御差別都て様之字認來候得共自今　種姬様　兩殿様　淸信院様　慧君様方姬様　從姬様之外　御方々様者御一統様之字認候筈

一右近將監様下總守様(兵部様)左兵衛督様其外御方々之儀御口上振は是迄之通御取扱被成自今殿と

唱候等
一松平加賀守樣松平越中守樣松平相模守樣幷御嫡子方其外御方々共前々之通御取扱にて自分殿と唱へ右之外堂上方御緣家之內當時樣と唱へ候分〔前々殿と唱候筋〕は都て殿と唱へ候等一條樣之儀は是迄之通樣と唱へ候等
同九月十一日
一三卿樣御事幷御方々樣共　公邊へ認出候節且御手前にても都て樣取扱之等
一尾州樣水戶樣之御子樣方自今　御嫡子樣之外は都て樣取扱之等相成候事
寬政五丑年七月六日
一公儀　姬君樣方　公邊御手前共樣之字認候等尤　尾州樣水戶樣へ御緣組被爲在候得は御手前にては樣之字相認候等
一御次男樣よりは勿論樣之字相認候等
同十三酉年九月十日
一於御城　御男子樣方御誕生被遊候節は　御總領樣は　若君樣御次は御次男樣と唱候得共自今　御總領樣之外は何れも御男子樣と唱候等
享和元酉年十二月八日
一江戶若山共　御發輿之儀向後御發駕と唱候等
同三亥年十二月十四日

一讃岐守様播摩守様へ之御口上振是又兩敬にて有之候處向後は外　御連枝様之通片敬に相成候筈

一文化二丑年七月十八日

一尾水様御連枝様方之御當主様御嫡子様御隱居方之御名と同名は向後遠慮可致事當時同名之向は改候筈

同年十一月廿二日

一御由緒之方是迄被文字計相用ひ候得共以來は御之字相用ひ候筈

同五辰年閏六月廿七日

一大納言様御實名之慶之字實名附候向も有之趣に候　公方様　大納言様之御實名幷名文字に附候儀憚候儀は勿論之事にて　御手前　御當主様御隱居様（一本ナシ御嫡子様）御實名幷御名文字　御姫様方御方々様之御名文字實名幷名文字に附候儀是迄も憚罷在候事には候得共猶心得違無之様

同し唱に候共文字違候分は不苦事

一太之字之儀は天明六午年相通候通に被相心得候事

一本文之通に付當時憚可申文字左之通候猶心得に相違候事

齊（なり）　慶（よし）　倫（とも）　寶（とみ）　錯（かた）　豐（とよ）

一御頂戴の御一字は勿論憚り候事

重（しげ）　治（はる）

右之通之處御役人向奥役之向には假令文字違候共同唱之文字實名幷名文字に付候儀は心得も可有之儀と天保六未八月廿四日被　仰出

文化七午年五月十一日
一上書其外都て　兩殿樣　虎千代樣　鍇姬樣幷　御方々樣之儀相認候節是迄御方々樣之御名を　兩殿樣虎千代樣鍇姬樣と並へ相認候事候得共向後　御方々樣御名をは一字下に相認候事
但　政所樣は是迄之通候事
同年十二月廿六日
一大殿樣より被　仰進候付被任思召に自今左之通相極候事
一殿樣　大殿樣との御順之事
一上使之節は勿論　御宮幷和歌吹上　御靈屋　御靈前方御牌前方其外大社へ御一所に御參詣被遊候節なと御座順も前段之通
一御途中にて御出會被遊候節御平日共御互に御行違にて御會釋被遊候事
殿樣　大殿樣との御順に御着座被遊候筈若御同道被遊候得は　御中にて之御順も御同樣之事
一御盃事之節は御向合に御着座被遊御盃　殿樣より御始被遊候事
殿樣より被　仰上候付被爲任　思召に自今左之通相極候事
一御高年にも被爲成候御事に付御規式　御對顏之節御平日　御對顏之節御褥御用ひ被遊候事
一御盃事に付　御双方樣より御肴御上被進之節　殿樣には御進み被遊　大殿樣には御着座之儘被爲成候筈
文化八未年正月廿四日

一上書其外都て　兩殿樣鍇姫樣并　御方々樣之儀並へ相認候節　御方々樣之御名をは一字下けに相認候樣先達て相極有之候得共右は御目錄上包且附札或は御使御上被進候御口上書其外右に進候品は右極之通相認其余は上書調帳等之内へ並へ認候節は譯て一字下けには不及事

同十三子年五月廿一日

一殿樣を御家にては往古より殿樣と申上候事に候處右にては少々御不都合之御儀も有之尾張樣には御前樣と申上候由　水戸樣にては　中納言樣　宰相樣と申上　御嫡子樣をは世子樣と申上候由に付此御方にても右御唱振御改正可被遊之處不計此度　御任官被遊候御儀に候右之通に付向後は是迄　殿樣ヶ樣〳〵と申上候儀を　大納言樣(宰相樣)ヶ樣〳〵(或は　中納言樣に被爲在候節は中納言樣宰相樣にて被爲在候節は宰相樣)と申上候儀も可有之候右に付此度被　仰出候と申にも無之又申通し候品にても無之候得共先心得に御咄し被成候旨御目付中御申聞候事

文化十三子年七月十三日

一日門樣御事向後　日光御門主樣と奉稱候等

同年十一月六日

一向後御式書へ認出候節は　左京大夫殿と相認候等尤平世唱振是迄之通候事

同年十二月十六日

一御家父機御嫡子樣御簾中樣并養珠院樣御牌前向後御靈前と唱候事

一御庭　御堂之儀　御靈屋と唱不申御堂　となた樣御靈前と唱候事

但他所へは祠堂と唱候事

同十四丑年三月廿一日

一御家父様御嫡子様御簾中様幷養珠院様御牌前向後御靈前と唱西　御堂之儀西御靈屋と唱候事

同日

一御尊牌御相殿之　御方様は　御靈前と唱　御一方様之筋は　御靈屋と唱可申候乍併　御相殿にても　御位牌御安置之御場所を申上候節は　御靈屋と唱右　御相殿内之　御一方様充をさし申上候節は　となた様御靈前と唱候事

但御靈前御牌前御相殿に候共御場所を申上候節は重き方へ附やはり　御靈屋と唱候事

一雲蓋院　南龍院様養珠寺　養珠院様報德寺　瑤林院様御尊牌有之御相殿には無之候得共本堂内に御場所有之儀に付右等は御靈屋と唱候筋には無之　御靈前と計唱候事

長保寺　南龍院様御牌前之儀も　御靈前と唱候事

文政七申年閏八月廿四日

一御簾中様御事　公儀より之御書付には　御簾中様と相認　宰相様より御差出し之御書面には　簾中又は品に寄名を唱候共御勝手次第可被成と之趣從　公儀被　仰出候事

同十二丑年九月廿七日

一水戸様尾州様幷右御隱居様御嫡子様御簾中様は是迄御(先)〔一本なし〕方様文字此御方は様文字にて御兩敬之認方に候得共向後御互に御手前御方様をも様文字に認候筈に相成文段も右に准し候事

一右之外　御方々様は御双方共是迄之通候事

天保二卯年十二月廿三日

一御佛供料之儀向後　公儀御代々様　孝恭院様并　御家父様　御嫡子様御簾中様御靈屋料と唱候事

本文之外　御實母様方　御方々様は是迄之通御佛供料と唱候事

維新後

慶應四辰年六月

一御簾中様江戸御發興御届書に簾中倫宮の字除き紀伊中納言妻と可認旨指令あり

同年七月

一御三家の唱相止め諸大名並と可心得旨を布達

明治二巳年七月十日

一於　天朝官位御改正從來之百官被廢に付　中納言様御事以來　正三位様と奉申上候事之旨布達

明治三年六月左之通布達

御參詣御成其外廉々政事廳初局々へ達詞并掛合事等之書面に　正三位様或は知事様と認可申事

右御官名等認無之候ては當時之御模様にては諸局不審之品も可有之に付不紛様本文之通相心得可申事

○左の條類に因て爰に附記す

寛政元酉年十一月

一以來　御出殿御歸殿之儀自今　出御歸御と唱候事

文化四卯年六月廿八日

一年寄衆へ書付類差出候を御達申上ると唱來り候得とも向後は進達と唱候筈尤屹度極りと申にも無之候得共以後右之通唱候筈に申合候事

一年寄衆幷重役之子嫡子と唱候事

一頭役幷平士は總領と唱候事

按に　諸向より政府へ提出の書類、上申書、幷請願書にても定式即ち養子緣組改名の如きは都て進達と唱へ組頭下の昇進願其他總て熟議を要する書類を御談書と唱へ自から區別ありたり

一本記總領と唱るは　御目見以上の長男にて以下役の子は悴と稱する制也且　御目見以上は言上書初任免辭令書自分請願書等都て名籍を書するに姓名のみ記し職名を記さず以下役は何等の書面にも必す何役何の誰と書するの法也　御目見以上は御見知りあると云廉に依てなるへし

文政三辰年八月

一御城書を御沙汰書と唱候筈被　仰出

御城書とは幕府の日記にして日々の行事を一切記載したる今の官報に齊し之を日々御城附持參御用人より觀覽に呈す御覽濟表御用部屋日記と合綴一日の日記となす也

屋敷御長屋之制

若山屋敷地之制度詳ならす蓋し國初之時より執政初諸士一同へ屋敷地を賜り重臣大祿の向は下屋敷をも拜領し諸同心伊賀御小人御駕之者等輕輩は組屋敷に御鷹匠は鷹匠町と云に集居せり又一所に邸地を賜りしならん　集合居住の躰

恰も　幕府江戸の組織に准せられたる如し無屋敷之者新規拜領を願ひ又は上屋敷〔地〕(一本ナシ)を拜領等其許可は召狀を付し執政申渡しにて頗る重きを置かれたり府下數千之邸地拜領拜借上地乃至相對交換貸借等交互變轉遷轉は常に不絶一事一件種々の細則自から規定を馴致し條項煩益煩密愈密遂に一窓の廢置半戸の開閉も私行すへからさるさまにて多端紛雜今や原則の綱領を識別しかたし唯文化以來の記及請願文例等をも押して大概を追想すへし

一維新に至る迄は京橋内水野安藤の兩邸を初め丸之内和歌道筋等總て一二千石已上の邸宅は長屋門兩番所附破風瓦長屋腰海鼠壁の類にて恰も江戸大名屋敷の躰に似たり二三百石の士と雖も嚴然長屋門玄關構書院使者之間數寄屋茶室の一二あらさるはなく宏壯巨室の躰裁は實に意想の外に出たり古老の言に古へは頗る質素長屋門開門等なく概ねごべ玉垣に引戸門にてありしと(引戸門は門の中央に柱あつて一方を出入口さし一方は羽目にて門戸を此羽戸裏へ引き明くるなり)　是文政五年發令以來往々開門に改造し隨て外見躰裁を飾り競て江戸風を擬したるものか名古屋水戸に於ける侍屋敷の躰を察するに到底若山には及はさりし如し然りと雖も無屋敷借地借宅之類も夥敷多くは有屋敷地の長屋に借宅小祿貧困之徒は同心地又は市井近郊の間に散在潜居の者尠からさりしといへり

屋敷規則

文化四卯年

一男子無之及末期養子之儀相願候向屋敷有之筋は死後家内片付候迄之内屋敷其儘拜借仕度旨一類より相願候事候へ共向後及末期養子之儀相願右願書御老中方御請取候へは分て死後に屋敷拜借之儀

願出候に不及事

（十七歳以下及末期候向は是迄之通拜借之儀可願出事）一本ナシ

同八未年

一諸士屋敷之內切上け等致し右地面拜領いたし候面々之內出入口幷玉榜示等無之筋も相見へ屋敷奉行打廻り之節抔差支候趣候

右は是迄出入口傍示等無之向は勿論向後屋敷境等互に早速相糺置輕く出入口等兼て附置可申事

文化十二亥年七月

一都て諸士屋敷有之筋外屋敷へ同居又は不用之所借請罷越候筋幼少若年之無差別前髮有之候はゝ頭支配にて承屆御目付中へ屆前髮無之候はゝ御年寄衆へ進達之筈

一屋敷有之筋外宅は御年寄衆へ進達屋敷無之筋は承屆る

一都て切上屋敷拜領いたし新に出入口附筋

右出入口附申度との品申出候節角屋敷へ住居勝手にて間口裏行振替候筋は以來右書付文面へ出入口勝手に付是迄或は東表にて候へ共南表に致度或は北東に候へ共西表にいたし度との趣認加へ差出候樣との品極る

右は尤司農中より申來有之候事

一屋敷門付替候儀は御勘定奉行へ相屆候筈尤急事口明け幷付替にても同樣御勘定奉行中へ了簡承り候筈候事

一都て屋敷引戸門を向後開き門にいたし候樣尤長屋續へ別に門附或は長屋無之塀等へ門附候分は引戸門にいたし候儀勝手次第尤右等は門丈け沓引戸門に可致事

文政五午年八月

一御家中之向在中へ抱屋敷等取建之節御勘定奉行中御鷹頭匠中へ及掛合候等

同六未三月

文政六未年三月

一屋敷開門にいたし候儀は願之上附候事候へ共都て屋敷引戸門附有之向は向後普請之節開き門に致候等去年相極候付ては右普請之節願は勿論頭支配承屆にも不及候開き門にいたし候と之品頭支配より御勘定奉行中御目付中へ相屆候等

但御用部屋へ相屆候向は御勘定奉行御目付へは當人より相屆候等

一右之通候へ共引戸門を開き門に致候節窓明等有之候へは猶可考事

文政七申年

一長屋普請に付板圍致候節右之儀斷入候哉と問合御目付中へ及談候所右は斷無之ても差支無之旨被申出候事

同八酉年

一屋敷及大破外屋敷借受罷越跡屋敷外之仁へ貸候儀如何可有之哉と問合之仁有之候處不相濟候へ共借受候仁屋敷所持之有無にて可相濟哉と奥御右筆へ承候處右は屋敷有無に不拘不相濟筋之旨答有

同比

一下地之屋敷より相對替之屋敷へ可引移日數之品右は屋敷四方相對替願相濟候付右願濟之屋敷へ可引移之所大破に付修覆迄之内是迄之屋敷に其儘罷在候儀右は七八日其儘住居之儀は願入候哉又は屆等にて可然哉と問合右は願濟日之より十四五日は頭支配にて承屆候筋之旨奥御右筆より答あり

同九戌年

一在中にて抱屋敷買受候付願等之儀問合す右は逗留に罷越候儀に候はゝ勿論前段に取扱有之事に付願入候へ共抱屋敷に仕置候計に候はゝ何等に不及候旨御右筆より答あり

一以下之者諸士之屋敷に差置候儀斷に不及旨極りは有之候へ共猶彌其通候哉と御目付中へ承候處其通と挨拶有之事

一諸士屋敷へ當分御役者差置候儀右同樣

一以下之筋町宅にて致病死候後右悴等は町支配之品町奉行へ承候處左之通答來る

一總体御扶持人末々迄町宅へ罷在候面々相果候て跡絶右妻子其儘町宅に罷在候はゝ是又町支配之筈且又諸士其外より町宅をかり手前支配に致候ものも町支配之筈只今迄紛無之事

天保四巳年

一屋敷破損に付町宅住居奉願相濟有之候處右屋敷不〆りに付當分長屋向不用之處を御目見已下之仁貸置之儀如何と問合す右は不用之所と申ては難相濟長屋に候へは可相濟旨答あり

同六未年三月廿五日

一大組之仁出入口二ヶ所有之右二ヶ所より出入致候趣右は下屋敷にて二ヶ所より致出入候儀は御老中方御側御用人衆之外は不相成尤極りに付其段右大組之仁へ達與候樣司農中より申來留あり

一御目見已下之內拜借屋敷地は御目見以上之拜領同樣之事に付屋敷地差上候付ては追て格式等被仰付候共拜借は相濟拜領は難相濟筋之事

一是迄屋敷無之面々在住願頭支配にて聞屆候筋も有之候へ共向後御城下續在領之外在住願は屋敷有無に不拘都て進達之筈

一隱居別宅願も屋敷有無に不拘進達

井原町　中之島　是は是迄之通不及願其外在中住居願は向後進達之筈

田中町　西濱邊

一隱居別宅は屆にて相濟候事

天保十三寅八月十七日

天保十四卯年七月

一御徒目付屋敷地有之筋當時にて以下小普請にて有之候處兼て勝手難澁罷在候付右屋敷內不用之所を屋敷無之筋へ貸候儀不苦哉之事

右不相濟旨答有之候事

一諸士屋敷內を御目見已下之向借受罷越候儀支配方へ書付差出候筋に候哉又は屆計にて宜敷候哉之事右は願屆にも不及筈との答あり

一町宅願相濟候筋町宅へ引移之節屆入候哉と御目付方へ承候處屆入候旨答あり
一勝手難澁に付屋敷地町家續に付地尻内證にて町人へ貸度旨申出候仁有之候付御勘定奉行中へ申談候處右は不相成筋之旨答有之付此段達す
一何某儀先年屋敷地切上右切上之處當時誰拜領いたし有之候然處右何某屋敷地差上候はゝ右切上ヶ地に罷在候仁一と屋敷にいたし度拜領之儀相願候はゝ一と屋敷之儀に付相濟候筋に可有之哉と司農中へ承合候處右は甚例稀成事候へ共左之筋例有之旨申來候
文政三辰年寛四郎兵衞屋敷地之内切上候て山田善左衞門拜領同八酉年右四郎兵衞屋敷地差上候右を岡本駒之助拜領其後段々相對替等にて右屋敷へ中村惣内移有之候處天保三辰年右屋敷地差上右を山田善左衞門奉願候所元と屋敷之儀に付願之通相濟一と屋敷に相成り有之事候
一右之例を以此度佐々木種太郎祇園直之丞之屋敷を切上け地より相願相濟候事
天保十四卯年十二月
一都て有屋敷之面々御側向之内へ屋敷貸有之筋代替之節御側向其儘罷在候筋双方願進達之筈候間其段支配有之面々へ可相達旨御書付出る
一屋敷差上候筋追て町宅へ罷越候節願に不及罷越候節屆にて相濟候事尤右屋敷差上候日より三四十日程も是迄之屋敷に罷在候ても願且其品屆等不致候ても不苦乍併右等之品表御用部屋にて極り等は無之事爲心覺記す
天保十五辰年

一御役人之屋敷内を續無之御目見已上之向差置候儀も無用と可及挨拶旨文化十一戌年政府より被
仰聞有之旨御目付中より答あり

御役人之屋敷内へ他家相續被　仰付候子弟を同居いたし候儀不苦旨

一添地拜領致し間も無之差上之儀相願候て右は苦しからす

一停止中變宅不相成事

一學校御長屋へ學校（當〔一本定〕）番之筋より續有之筋を同居願尤御長屋に罷在候筋は不苦（御目見以上也）

一養子に遣有之三男屋敷有之處祖母極老妻は幼少外に家内無之家内事取締差支に付當分實父方へ同
居願相濟

屋敷願文例

一屋敷拜領願

私儀屋敷無御座候付此度何の誰差上候屋敷地拜領仕度奉願候被下置候は家作は相對可仕候以上

何之誰

月　或は上り屋敷地と認む

一添地拜借願

私屋敷地何隣何之誰屋敷地之内間口何之方にて何間裏行何間兼て內證にて借受候處右地面此度差上候由に付差上候はゝ私
拜領仕度と認願出る

一拜領之屋敷へ可引移處大破に付修覆迄之內是迄之通何之誰屋敷内借受罷在度誰儀も貸可申旨申候
と願出許可の例あり

一御徒目付屋敷地拜領順之者拜領

御目付中之願に成

何之誰此度差上候屋敷地は元御徒目付致拜領候屋敷地筋に御座候間同役拜領順之者へ被下置候樣私共奉願候以上

月　　　何之誰

一屋敷地差上

私儀兼て勝手不如意罷在修覆等難行屆難儀仕候に付屋敷地差上申度奉存候尤右地面[一本に](二)十坪程之建物御座候付被下置候はゝ何れへ成共相對仕度奉願候以上

月　　　何の誰

一屋敷地之內少し殘其餘差上願

屋敷間口南北何間奥行東西何間有之處勝手不如意にて修覆難行屆付右之內何々にて何間之所殘し餘差上度右地面之內何坪之建物有之付被下置候はゝ何れへ成共相對仕度被願出の例あり

一屋敷御用に差上替地拜領願

私屋敷此度町奉行所御用之由に付差上申度奉存候尤右替地は此節相應之所無御座候付追て奉願候節拜領被　仰付被下候樣奉願候以上

月　　　何之誰

一屋敷地面拜借

何の誰

私儀屋敷無御座候處御手筒長屋續北角何の誰拜借之地面此節差上度段相願候由に付相濟候はゝ何卒右地面私へ御貸被成下

候樣仕度奉願候尤右地面御用之節は何時にても差上可申候御貸被成下候はゝ同人住居之家作は相對可仕候以上

月

右宜取計候樣御用人より司農へ及掛合

一右是迄住居之仁よりも願出候付双方共承届候旨追て司農中より申來猶又引渡候節は司農より役人出候旨申來有之候事

一相對替

私屋敷ゝ何の誰屋敷ゝ相對替仕度奉願候以上

月　　　何の誰

一三方相對替

私屋敷ゝ何の誰屋敷御徒目付（以下に候はゝ）何之誰屋敷ゝ三方相對替仕私儀は何の誰屋敷へ罷越申度奉願候以上

月　　　何之誰

一右願振四方替にも同樣之願振に候事

一寺と相對替

私屋敷地面貳百何十坪御座候處此度覺樹院拜領仕候地面之所ゝ相對替仕度奉願以上

月　　　何之誰

一右之願相濟候上猶又此仁追て左之通相願有之事爲見記合す

私屋敷此度覺樹院拜領地ゝ相對替願相濟候付可引移處家作無御座候付取建候迄之內是迄し屋敷に罷在申度願候以上

月

又は差支之品有之共願出る或は可引移處大破に付修覆候迄當分町宅住居致し度ゝも願出の例あり

一自分拜領屋敷と他某拜借屋敷と相對某拜借地は自分拜領地に相成候樣願出許可あり

一屋敷內貸借願

何之誰

何之誰屋敷無御座候付私屋敷內不用之處借受罷越申度旨申候付私儀も貸申度奉存候以上

右に付かり願

私儀屋敷無御座候付何之誰屋敷內不用之處借受罷越申度奉存候一本右(尤)誰儀も貸可申旨申候以上

月

又有屋敷之處大破に付修覆取計迄誰屋敷內を借宅と云もあり

右借主病死相續人跡目被　仰付たれ共其儘貸借致し度旨双方より申出濟む

一御家老三浦長門守下屋敷住同家來之宅不用之處を借受住居致し度旨

一江戸より立歸御迎に罷越たる者に若山逗留中屋敷內不用之處を貸渡旨

右之類進達に不及頭支配にて承屆る

一町在住居

有屋敷之者大破住居難相成是迄誰屋敷借受之處此度町宅住居致し度願は進達す

一無屋敷之者誰屋敷內借受住居之處此節町宅致し度旨不及進達頭支配承屆

一無屋敷之者御城下に相應之居宅無之當分近在へ住居致度旨右同斷

維新後

明治二巳年九月四日

一元諸同心地子此節御拂下け之等候間望之者は左雛形之通封物にいたし來る九月中に名草民政局へ

可差出事
但御年貢之儀は本文地子代錢之高下に應し元代十分之一つゝ年々上納爲仕候筈に付ては右地子直段之高下に從ひ上納金增減可致候間其心得を以算當相立可願出事

八　月

半紙二つ切

屆書 何所此節何之誰住居　何之誰 元同心地凡何十坪之所 此代錢何百何十貫にて御拂下奉願候 但年々元代錢之十分一つゝ稅金上納可仕候

同年九月五日

一住居不致屋敷地は相對可致明屋敷地は上り地に可成旨布告

諸士屋敷及大破修覆中外宅住居致し自然下た屋敷と相唱住居不致向も有之哉之趣に候右は畢竟屋敷地差上候はゝ以後拜領不相成故之儀に付向後一旦屋敷地差上候ても猶又拜領相濟候間是迄下た屋敷と相唱候地面は元と屋敷之内又は何れ成共相對可致候尤拜領地を差置永く外々へ借宅致し明き屋敷に相成候ては組合にも差支候間當年中住居不致屋敷地は上り地に相成候間屋敷所持致し相對難出來向は坪數取調名草民政局へ可申出事

件之通に付是迄之中之間席以上にて拜借之屋敷地は拜領地に相成別段願替に不及候事

明治二巳年十一月十六日

一元（諸）（一本ナシ）同心地面町並に管轄被　仰付候付町名之儀左之通相唱候筈候事

十一月

新堀北之町は　北之町一丁目　元城代南組は　北之町二丁目

元城代北組は　同　三丁目　元五番組は　同　四丁目

元一番組は　南之町一丁目　元四番組は　南之町二丁目

新堀南之町は　同　三丁目　元六番組は　同　四丁目

元伊賀地は　伊賀町

井戸之町　二十軒町　七軒町　御臺所町

右四町舊名之通

元御手筒御手弓同心組地は湊オかや町東之町　八軒町藪之町は東長町十丁目并桶屋町へ籠る

中の町は舊名之通

南北甚五兵衛町　御駕町　南北御中間町　南北田邊町

御通り町　西要寺門前　久右衛門町　南北土佐殿町

右十二町は舊名之通

同年五月名帅民政局より

一隱居并厄介之兄弟伯父甥等別宅取締を布告

士農工商共兄弟伯父甥等都合に寄分家致候儀は不苦候へ共分家別住之廉屹度相立御制禁之妾宅に紛はしからさる様篤と相心得分家願出度筋は右等不都合之儀無之様親類五人組よりも吟味致し候上相違無之候はゝ其段をも相認左之振に連判を以早々可願出事

但願書へは其家之當主幷親類五人組連判致し且又分家之家主幷五人組よりも同様連判致し双方より願出候筈

一隱居之輩都合により別居致し候儀も本文に准し候事

一妻妾共有之者妻を本宅に差置妾を召連別居致し候儀は其者年齡六十歳以上にて家名を相續人に讓り候者に限り本文同樣聞屆之上不苦事

右之通に付萬一不都合之儀有之或は無願にて分家且別居等致し居候筋有之に於ては當主當人は勿論親類五人組迄御咎有之等候事

明治三年年七月十日政事廳より

一無役之輩職業に付市在住居し自分屋敷を他へ貸渡不苦

士族初無役之輩職業に付て市在住いたし或は勝手暮之都合により自分屋敷を貸し自分外之借宅へ住居之儀不苦事

同年閏十月三日政治廳より

一諸士屋敷地向後地方鄉市長支配之筈候事

本文に付諸官人初士族扶持人等身分之儀も鄉市長支配之筈

江戸御長屋住居

江戸赤坂麴町兩邸他所境周圍は二階建瓦葺窓付の御長屋建續き内殿舘（麴町は御燒失後なし）庭園の廻りに平屋御長屋密接建設江戸常府若山より勤番之者悉く居住す中世已後常府之者極めて增加兩邸にて凡五百戸計あり疇昔は御小屋と稱し陣小屋之義に基き内御長屋は板葺竹簀の床小貫塀（二寸計の杉小板を目透に打ち列れたる塀なり）を規則とす屋根庇外廻り戸締り小貫塀は修繕共官費にて疊建具造作は拜借人自辨也いつの比よりか竹簀床は跡なく板床に替り板葺小貫塀は種々の口實を申立往々瓦葺本板塀に變し又は自費にて改造之者多く近世に至ては相之馬場勤番長屋之邊に小貫塀の遺存を見たるのみにて次第に奢侈に傾き家宅修飾土藏茶室等設備之者も不尠或は地所のみ拜借し家作一切は自辨之分もありたり巨細は殿邸制之部に詳記の如し

一御長屋住居之者は總して次記御法度觸御長屋定同間數定を必す遵守すへきの規定とす該三則年月欠記と雖も往古より之御定なるよし監察府の言也一切此原則に基き多端の細則ある事順次列記の如し

一江戸は三百諸侯の邸宅稠密各藩々士の氣風を正し又は互の爭鬪衝突等を豫制の爲めいつれも門限を嚴にし猥りに藩士の他行を許さす就中大藩國主の如きは專ら勤番侍のみなるを以最嚴峻を極めたり故に御家に於けるも享保寶暦の比迄は僅に一夕の門限を犯すも忽ち法に處せられ御暇を賜りし者不尠嚴格如斯たりと雖も世の澆季に隨ひ且常府之增加により漸次法は寬宥に流れ近世に至ては頗る放蕩反則之者も刑小普請に處せられ賜暇等之事甚稀にして法は自から儀式的に止りたる弊

なきにも非らさりし也

御法度觸

常々御法度之通彌可相守事

一在江戸中御用人以上御目付之外は御暇不申上て他所へ參間敷候御暇申上被參候衆は夜五つ切に罷歸り可被申候若用事有之御定過候はゝ其品罷歸候節斷可被申事

一諸士江戸へ召連相越候悴幷常江戸詰之面々悴御屋敷外へ罷出候儀御奉公不仕者は御暇に不及尤往來之屆も無之筈

但年齡之多少に不依候

一御供に出候無足悴も右同斷

但無足にても親不召壹人立江戸へ罷越候輩は御暇願等御奉公人同前之筈

一左京大夫樣御屋敷幷年寄衆へ罷越候面々右同斷

但　左京大夫樣御屋敷へ罷越候儀平士は頭支配迄往來屆候筈

右いつれも夜五つ時過迄不罷歸候はゝ此段は歸候以後御目付方へ相屆可申候十五歲以下は五つ時過罷歸候共御目付方へ相屆候に不及筈

一麴町御屋敷赤坂御屋敷へ罷越候輩勿論是又御暇願幷往來屆共不及候四つ時過迄不罷歸は歸候以後其旨御目付方へ相屆候筈

一御長屋中窓に新敷簾を掛置可申候但窓半分下に掛置候ても不苦事

一諸勝負停止之總別不行儀無之樣に下々迄堅可被申付事
一下々に至迄遊參見物茶屋旅籠屋湯屋風呂屋へ參間敷候勿論女比丘尼に出合申間敷事
一不斷火之元堅可被申付候幷紙燭燃申間敷事
一御長屋妻子無之者之所へ無子細して女出入爲致申間敷事
一下々御門出入之儀日之內何方へ成とも遣候はゝ暮六つ前に歸候樣可被申付候六つ時分迄も不罷歸候はゝ主人より札之押印形之手形にて五つ迄に罷歸候はゝ入候樣にと六つ過に御門へ相斷可被申候六つ過候迄無斷御門に札殘り候はゝ過料可爲事
但日之內罷出候下々夜五つ迄之斷相濟候者五つ迄も不罷歸候はゝ夜中何時罷歸候共御門入候樣にと共節御目付方へ相斷可被申候右斷相立候者翌朝迄も不罷歸候はゝ翌五つ前迄に相斷可被申候右之時刻迄も主人より斷無之候て翌日四つ過候はゝ可爲過料事
一暮六つ過に主人用事有之御門外へ下々出候はゝ夜四つ迄は札にて出し可被申候四つ過候はゝ御目付方へ斷候て出し可被申事
但暮六つ過に罷出候下々四つ迄も不罷歸候はゝ夜中何時迄罷歸候共御門入候樣にと其節御目付方へ相斷可被申候右斷有之候者又は不叶用事有之御目付方へ斷之上にて四つ過に出候者も翌朝迄不罷歸候はゝ翌朝五つ前後迄に相斷可被申候右之時刻迄も主人より無斷翌日四つ過候はゝ可爲過料事
一御使御使者は不及申御供番頭以上幷御用人御目付通り被申候時は下々腰掛總て往還之人を除け勿

論御屋敷之内にても諸士へ無禮仕間敷事
一下々路次惡敷時分御客御使者は不及申諸士へ行逢申候はゝ木履をぬき(一本ナシつくはい)可申候總て高足駄はき不申候樣に堅可被申付事
一親類好身にても他所之乘下々に至迄一夜も留申間敷候飛脚は斷可被申事
一暮六つ已後他所之者來候はゝ右之通斷可被申事
一御供之時は諸事不行儀無之樣に可仕下々に至迄大下馬腰掛等にても多葉粉給申間敷事
一御長屋に被爲置候者共手前作事奇麗(一本ナシ立)仕間敷事
一御長屋之内例之通鳴物仕間敷事
一御長屋窓より不依何取遣仕間敷候塵捨申間敷事
一御長屋前にて喧嘩口論有之候はゝ見合次第御目付中へ爲知可被申事
一御長屋に於て喧嘩口論等有之節聞合候はゝ其樣子次第兩隣向御長屋之面々は出合可取計
右之外遠所より出合被申間敷事
一赤坂御屋敷相之馬場より田屋敷迄之御長屋に罷在候面々はね屋根幷見隱矢切拵候節挽板にて可致候野根板葭簀等にては一切仕間敷事
右之條々於相背は科之隨輕重或過料或可爲曲事

御目付中

窻に簾敷簾を可掛とは外廻り御長屋をいふ第十二條已下四ヶ條は下人に對する制なり相之馬場田屋敷迄之御長屋は若山より

勤番詰の御長屋とす

一御長屋にて琴三味線は御法度なれ共樂は不若尤　御代々樣御忌日左之日段は不相成
但御平月は暮つ時より不苦御證月は前夜より可愼事
二日　八日　十日　十四日　十七日　廿日　廿三日　廿五日
外に三月廿八日は夕七つ時迄は愼み可申事
右は香嚴院樣迄御忌日也
若子弟之内盲人ありて琴修業爲致度者は願之上彈琴不苦事

一諸士物見遊參等禁制は若山も同樣と雖も江戶は殊に嚴格にて他行之時は葭簀張り茶店に休憩する之外酒食店に立入る事成らす況や劇場等なや唯角力場丈けは許されたり御城附のみは役義上交際の爲めいつれに立入るも不問といへり御目付は鎗挾箱本式之供連にて時々劇場なを巡視し反則之者なきやなを檢す特に本供なを粧ふは不言に警戒なを示すの意と聞ゆ御徒目付御小人目付も巡廻すされは劇場角力場等にては兼て御三家方出張役人之棧敷なを設けありて他人なを容れされる習也し然れ共法は往々寛に失し遊所劇場へこそ到るなを聞かされとも門限さへ犯さゝれは酒食割烹店に入り支度書餐なをなし小身浴室なきの徒は湯屋結髮店へも立入る是等到底制し得へからす勤番輕輩之者は內實惡所に耽るも尠からす竊かに門衞者との間に云々の秘密行はれ巧に法網なを遁る亦勢ひ止むへからさる也

御長屋定

御長屋定

一本屋之貫柱切中間敷事

一二階之口明替申間敷候幷庇口同前之事

一間數多渡候衆仕切之通斷を以明け可被申事

一御長屋之內堀候て水溜申間敷候はしりの水外之水道へ落し可申事

一御長屋之內に馬つなき申間敷事

一御長屋之柱口に土置申間敷候幷掘候て塵埋申間敷候椽之下へも塵入置申間敷候
一總て御長屋之內へ塵芥捨申間敷事
一御長屋窓斷なく明け申間敷事
一大釜へつつい柱際壁除候て塗可申事
一御長屋を離れ建候厩湯殿雪隱又は土藏其外不依何新規之作事無斷致間敷事
一掃除日五日十日十四日十九日廿四日晦日右之日朝五つ迄之內手前之道幷水道共に掃除可申付不斷にも道不掃除無之樣に可被申付事

右之通可被相心得候住居難成儀於有之は御勘定奉行中へ斷之上可被致事

御目付中

二階之口明替申間敷さのヶ條不判明により元治二年小普請支配より御目付へ問合たるに往古之御定文言に付當時へ引當不分明なれ共何れにも間數多く渡したる衆二階庇口等一ヶ所にて差支別段口明け度節は斷之上明可申事之旨答あり

御長屋祿高間數定

○妻子無　二階三間梁　平し一間庇

二階一間半　平三間　二十石より三拾石御馬廻りは二十石より十石迄同斷
二階二間　平四間　四拾石より八拾石迄　同斷
二階三間　平五間　三百石より三百五十石　但馬不持筋は小切米さ同斷
二階四間　平六間　四百石より五百石迄

二階五間 平七間半　五百五十石より七百五十石迄

二階六間 平九間　八百石より千石迄

二階七間 平十間半　千百五十石より千五百石迄

二階八間 平十二間　千六百石より貳千石迄

二階九間 平十三間半　貳千百石より貳千五百石迄

二階十間 平十五間　二千六百石より三千石迄

二階一間半 平二間半　小十人　御鷹匠

二階一間半 平二間　御徒士目付　御徒組頭　御臺所番

六疊敷つゝ　御（一本徒）（步行）

三疊敷つゝ　坊主　同心

妻子持平貳間　御小人　妻子無壹坪

妻子持平一間半御中間　妻子無壹坪

知行高之外頭役御長屋增なし

○妻子持二階 毋有同前半　御長屋三間梁 一間庇

二階三間 平四間半　貳拾石より三拾石迄

二階四間 平六間　四十石より五十石迄

建坪	石高
二階五間 平七間半	六拾石より七十石迄
二階六間 平九間	八十石より二百石迄
二階七間 平十間半	三百石　三百六十石は四百石に　三百四十石は三百石に 三百五十石は二階長屋半間之増何れも如此
二階八間 平十二間	四百石
二階九間 平十三間半	五百石
二階十間 平十五間	六百石より七百石迄
二階十二間 平十八間	八百石より九百石迄
二階十三間 平十九間	千石より千百石迄
二階十四間 平二十一間	千二百石より千三百石迄
二階十五間 平二十二間半	千四百石より千五百石迄
二階十六間 平二十四間	千六百石より千七百石迄
二階十七間 平廿五間半	千八百石より千九百石迄
二階十八間 平二十七間	貳千石より貳千百石迄
二階十九間 平二十八間	二千二百石より二千四百石迄
二階二十間 平三十間	二千五百石より貳千八百石迄

二階二十一間　平三十間　二千五百石より貳千八百石迄

二階廿一間　平三十一間半　二千九百石より三千石迄

二階三間　平四間　小十人　御鷹匠

二階二間　平四間　御徒目付　御徒粗頭　御臺所番

二階一間半　平三間半　御歩行

二階一間半　平二間半　坊主　同心

右御長屋間數定は御作事方の定法にて御長屋拜借之者へは此制によつて御作事方より間數を配當す

細則

有德公御自記事政事草に

一家中の者共江戸神事祭禮之節門札留は不及申其外の祭共に差留置候門札留之外は此末江戸表指免候諸役人共に勝手次第罷出候て諸見物可致候尤先々にて法外の義致候段万一相聞候はゝ詮議の上急度可申付候日勤之事故勤労等も可有之と存候尤歸りは定法の刻限暮六つ時に限り可申候

追記

寶永三戌年

一親類を他所より呼寄願

親子　兄弟　祖父　孫　伯父　甥　聟　舅

右の分は御年寄へ申達奉願相濟候事右の外は不相濟然れ共家來に致呼取置候分は不苦然る時は御年寄へ願に不及支配方にて聞届候也

右は若山に於ての事か將た江戸なるや不詳

寛政十一未年四月

一拜借地住居御長屋住居之面々共玄關前狹く入口之木戸一枚戸にては差支候故哉假に兩開にいたし置候樣子に相見候右は不及遠慮兩扉潜付或は長屋門等勝手次第取建不苦事

文化八未年九月廿九日

一駒場野　御成之節〆有之向通御相濟候へは手前にて明候向も有之哉に相聞候右は如何之儀に候間都て　御成に付〆有之節御作事方之者明に不罷越內猥に手前にては明申間敷事

一御長屋拜借替へ

赤坂麴町兩邸御長屋住居之者都合に寄甲跡御長屋を乙拜借移轉又は甲乙入替り拜借之儀出願の上制限の間數に背かされは允許を得

一差扣中の者兼て願濟の御長屋へ移轉不苦引移届は一類より出す

一外宅

兩邸外に住するを外宅と稱す勝手に依り近傍幕府の御家人地等へ外宅出願許可せらる市中は許されす又外宅之者邸中御長屋へ移住も得るなり右外宅之者多くは四谷赤坂青山權田原邊に居住したり文化七年四月十五日左の令あり

一御家中外宅之面々御屋敷御近所に住居可致處追々致轉宅遠方に住居之向も有之趣に候得共以來兩御屋敷より格別遠方へは轉宅等致間敷候尤是迄遠方に住居之分も此後致轉宅候はゝ御近邊へ住居可致事

御醫師は業も有之儀に付格別之事
一忌中之者願濟之外宅地へ移轉不苦

一同居

御長屋住居之兄弟等近親之者は双方より願之上同居する事を得
同居主之者願之上外宅の者共儘同居移轉之例あり
一右同居之處尚勝手により別居之儀双方願之上濟

一御長屋肝煎

他國御名代御使勤之時留守中は同役又は親戚へ肝煎を托し諸屆等肝煎之者より可致御門札切手等は自分印形相用旨双方より頭支配御目付へ屆出歸着之上は從前之通り可取計段双方より屆出る之制なり

一高見斷

御長屋屋根修覆或は自分建別棟取崩等之時は幾日より幾日迄高見へ人上へく旨御目付へ屆右日限迄落成せさる時は追屆をなす之を高見斷といふ

一御暇願

御法度觸第一條之通り御用人以上御目付之外は勝手に御門外他出を得す故に諸士月々菩提寺又は社寺他所親戚等六七ヶ所を認め當月中右之方へ罷越度御暇被下候樣との願書を出す之を月御暇願と云出行之時は今日御暇之何處へ罷越旨御目付へ屆く
一左京大夫樣御屋敷行は御暇願に不及頭役は無斷平士は當日屆をなす
諸役所等は御用他行もある廉にや特に御暇願不出濟來れり

一御定過歸邸

御法度觸第一條之通り夜五つ時（戌の刻）[一本ナシ]を定時刻とす邸中の火之用心番人擊柝五つ時を御門番人へ報すれは之を界に御小人目付出座其日御家中の出入を改め御定過歸邸の者は其姓名を御目付へ認め出歸邸の者よりは今日御暇之方へ罷越候處無據用

事有之御定過只今罷歸候又は左京大夫樣御屋敷へ罷越候處爾々文言口上之旨屆をなす若し不然れは御目付より手前を糺され法に處せらる

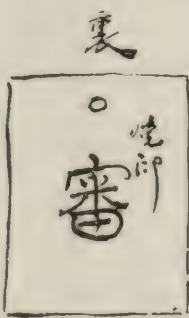
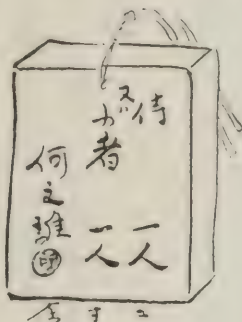
子弟之者同樣之時は父兄より他所親類へ遣したる所爾々と屆る

一麹町邸へ參り御定過に至る時は今日何の誰方へ參候處無據用事有之御定過只今罷歸候とか又は御定過候共何御門通し何御屋敷何御門入候樣と御目付へ通す兩邸互に同し御定過小者を兩邸へ使に遣す時も兩邸御門出入通しの元通しを出す

一日の內町醫師町人等御長屋へ來り夜四つ時にも及ひたる時は何々日之內參候處無據用事有之付御定過候共今夜中何所御門相通し候樣と亦御目付へ達す

一御門出入

御家中一同日之內御門出入は出入共一御門なれは無斷なれ共甲御門を出乙御門より入る時は甲御門出たる旨を番人に斷る是出入喰合調の爲也又暮六時御門閉たる後入る時は御門と呼ひ姓名を名乘り入るなり御定過なれは御目付へ屆る事既記の如し

一若黨小者使して御門出入には兼て御勘定所より受取ある御門鑑札を一人每に持參せしめ出の時之を御門番所の式臺に置き入之時受取り歸る之を御門札と稱す

一寬政十二申年二月三日左之布告あり

御供番頭已下御用人も御門札幷切手共御供番頭已上之通家來印形にて御門へ之書揚も家來よりいたし候事

右御門札は嚴重に可取扱旨主人々々より兼て申付置時々に主人より授受す若し遺失之時は召仕一本ナシ(侍小者)何と申者今日用事有之御門外へ使に差遣候處何御門にて御門札受取候處長屋迄之內にて右御門札落し候付色々相尋させ候へ共相見へ不申旨申出候猶相尋させ否追て可申上候右に付殘り御門札自今二つ印にて通用致し候間夫々御門へ御通し可被下と御目付へ屆る

右發見之時は爾々に付其節御屆申上候處右御門札尋出候付此段御屆申上候右に付已前之通り一つ印にて通用致し候間猶又夫々御門へ御通し可被下さ御目付へ屆る

一御長屋類等にて御門札燒失之時は爾々に付御門札代り相渡候樣さの儀御勘定奉行へ充通しを出す

一若し家來の者無札にて他出止宿等之時は御目付より主人へ召仕之手前可相糺旨申來る其節手前承屆候處別紙之通申出たる旨を達す

別紙は私儀何月幾日無據用事無札にて何處御門出何町何屋誰さ申者方へ罷越候處俄に病氣差發歩行難相成付無據何方にて養生仕候內翌朝に相成止宿仕候段不調法恐入迷惑仕候さ本人名前之書付也

一常々立入之諸商人等は御出入鑑札を申受あれ共不然商人又は他所より御長屋へ來る者は何人に不寄御門切手さいふを授け之を御門番人へ渡して御門を出る也

御門切手

一男　一人
右之者御通し可給候
月　日　何之誰印
御門番所

半切半紙へ認む

一將軍家駒場野御成等本邸近所通御の時は御門札留を御目付より觸出し下人の外出を禁す此時不得止使に差出す時は無據用事有之小者何人御門外へ差遣し度何御門相通し候樣にさ御目付へ屆出麴町邸へ差遣すも同斷

一御使勤等にて早曉出發之時は明何日御使相勤に付曉何時何御門相通候樣且右に付日雇之者何人明曉何時同所御門入相通し候樣御目付へ屆る

一女御門出入　女之御定時刻は夜六時限也

妻娘下婢共都て女子は日之內外出は其度每前同樣之切手を持參す尤女何人さ記す

一他所より客女來り夜六時過に及ふ時は六時前に今日他所親類共より女何人參候處無據用事有之付御定六時打候共何御門相通し候樣にさ御目付へ屆る

歸之節は御門へ計り屆御目付へ斷不及

　右病氣又は用事不相濟止宿の時は再ひ其趣を屆る

一客女止宿之時は今日何方より女何人參り宿り申候と御目付へ屆御門へも同斷

　歸之節御目付御門へ屆る

一女を他へ止宿せしむる時は私方より女(上下)何人今日何方へ罷越宿申候と兩所へ屆る

　歸之節も同樣屆る

　右日歸へりしたる時は先刻爾々斷候處用事相濟今夜何時罷歸候と屆る

一女他へ罷越し夜に入歸之節は私方より女何人今日他所親類共へ參候處無據用事有之御定過只今罷歸候と屆る御門同斷

一女客病死の時は私親類何の誰殿家中何の誰妻幾日より私方へ逗留に罷越候處俄に病氣罷成養生不相叶今朝病死仕候右に付今何時居御長屋より直に何處何寺へ葬送仕候間何御屋敷掃除門出候樣尤出家何人日雇之者何人何御門入掃除門出切に相成候間入帳面消候樣元通し可被下と御目付へ屆る

　女客御長屋より病死直に葬送不苦追々例あり

一女他所にて病死之時は私何々他所親類共へ逗留に罷越居候處病氣罷在候處養生不相叶今曉病死致候と御目付御門へ屆る

一女夜分御城内郭見付通行之時は左之切手にて通行す

　　覺　半紙半枚

　　女何人出入乘物　何挺

　又は

　　歩行女何人出入

右御門無相違御通し可被下候爲後日如斯御座候以上

　何何月　　　紀州　何之誰　印

　　外櫻田御番所

御曲輪内御門々女は酉の刻より卯刻迄出入共切手取之相通し火事之節は切手無之ても見計通す

　寛政六寅正月

一飛脚之者止宿之時は

私內緣何所何之誰と申者方より用事有之今日飛脚之者一人罷越候處用事調兼及暮候に町宿も難申付間今晩居御長屋へ止宿爲致度旨御目付へ屆御門番所へも右之趣屆御目付へも相達候と認む御目付よりは返書來る

翌日も止宿せしむる時は今日罷歸候筈之處未用事相濟不申付今晩も御長屋へ止宿爲致度と御目付及ひ御門へ屆前に同し

右飛脚出發之時屆方都て止宿屆に準す但三日より已後は止宿不相成也

一家來を寺院へ差遣し一宿せしむる時

私召仕侍何の誰幷小者一人無據用事に付今日何處何々何院へ差遣し尤用事手間取候付同院へ一宿爲致候と御目付へ達す

一急病人及妻臨産之節醫師取揚婆々呼寄

寛政三亥年九月廿八日布達

御屋敷內に罷在候面々夜四時過急病人又は妻臨産に付御門外へ醫者或は取揚婆々呼に遣候節御目付方へは追て相斷候間下人御門通候樣にと主人より印形之手形御門へ遣候得は右之者則通し呼に參り候醫者取揚婆々何時にても御門入候儀先年より之御定候處近來病中四時過病用有之御門外へ下人遣候節御目付方へ相斷候上致出入候筋多き趣に相聞右之通にては急病人抔有之節不手行にておのつから療治も後れ及難儀筋可有之に付向後前々御定之通り相心得御目付方へは追て相斷直に御門へ下人遣し可被申候其節無滯御門通候樣猶此度御門々々へ申渡候事

一右に付妻等臨月出産催候節は醫師幷取揚婆々呼に可遣間小者何人當月中夜中不限何時何御門出入相通し候樣醫師取揚婆々弟子共も同樣出入通し候樣にと御目付へ斷屆を出し置臨月に出産無之時は未た出産無之付出産催候節は爾々と右同樣の趣追斷を出す御門番所へも同斷

一臨月屆不出前俄に出産の時は誰々急に出産催候付爾々と都て前段の如く屆る

一取揚婆々止宿の時は其趣屆る歸の時も同斷

一御屋敷內にて手馬放れ又は落ちたる時

拙者手馬今朝厩馳出候付早速小者跡より追次候處青山表御門內馳通り御長屋御門外にて取押罷歸申候尤怪我人等は無之候と御目付へ屆る

一又拙者手馬落候付捨に遣候間青山中段掃除門相通候樣右に付日雇之者何人何御門入右掃除門出切に相成候間何御門入帳面消し候樣御通し可被下と御目付へ屆る
掃除門とは不淨門と稱し總て死亡之者通行之門也

水火防備

出火出水之時は役々出張警戒防備之法嚴格也寛文延寶之法令は記載之如しと雖も爾後世々此制の如くにありしか將た變更する處ありしや安永間迄之記類傳はらされは審ならす若山に在ては火災は往古より概して稀也と雖も水災は紀の川動もすれは氾濫城下へ浸入し宇治邊忽に一面之湖海となり本町邊尙舟行を免れかたき悲慘無限之橫難に罹りし事古來擧て數ふへからす故に水災を懼るゝ火難に數層して警戒之準備頗る整然たりしといふ安永已後之法文も不連續恐らく遺漏あらん暫く記の存するまゝに從ふ

江戶火災之類頻頻は喋々を要せす實に冬季に至れは每夜少くも十回內外多きは數十回に及ひ動もすれは數里延燒火三日不熄の劇慘に罹る故に烈風には到る處手を束ね今や火揚らん哉と待構へて戶々毫も安堵し難きの狀態なりしされは殿中は勿論邸中警戒之法乃至消防人數出張之制等多端繁雜を極む依て別記となす

一江戶邸火消人數組は一の火消二の火消とあつて御先手物頭一人御供番兩名引卒御近火は勿論大城初上野芝兩山我か諸邸又は御守殿幕府姬君方御同族御緣家方の出火近火に出張す此輩火消役と稱し一聲之警報を聞けば火の遠近に不拘速に馬上出殿を職とす故に冬季には身に火事服を解かす馬に鞍

を放さす終夜殆と眠る能はさる躰也

右一二火消之外に三丁火消あり五十八組之頭引率上中兩郵三丁以内近火に出張す又御作事火消ありて御作事奉行率て同しく近火を防く御目付は火消役とひとしく出火毎に馬上出殿總指揮をなし近火には御勘定奉行御用人も現場に臨撿處理畫策をなす諸士一般服務之事は卷末記述の如し

附記

都下出火には幕府の十人火消大名火消四十八組之町火消等一時に集合混亂雑沓名狀すへからす其間消防のかゝり方消口水の手桶手之掛け方に至る迄互に權限可裁行はれ毫も犯すへからす然れ共武門の意氣町鳶人足の任俠等兎角に先きを爭ひ功を競ひて衝突大騒擾を惹起する事珍らしからす御先手物頭御供番等は武官之棟梁最武威を主とする習ひなれは他向に對し微塵も恥辱を取るまじと威を張り權をなす又御抱鳶頭には万右衛門喜五郎（万右衛門は代々御抱）抔ありて江戸有名の俠客顔役なれは一歩も讓らす殊に一派紀州藩の名を謗したりと嘗て永田馬場山王社出火之時御先手物頭に[illegible]左衛門（[illegible]州作五郎門人にて千歳の達人氣象豪東なり尊名惶惧に棧す）人數を引率出場町火消も、ろ、み、の三組と爭闘起る彼は名に負ふ江戸目貫の鳶人足固より命不知の剽悍義徒殊に五百人之大衆十重廿重に折重なり大喧嘩となり双方死傷も尠からす文左衛門は眞先に進み縱横無盡に[illegible]懸らし下知しければ夫れ大將を打殺せと組々梯子を以てひしくと[illegible]圍み前後左右より鳶口を[illegible]集し[illegible]両[illegible]を容れさるに抜刀もせす[illegible]一揆を振て[illegible]倒[illegible]なく圍を破り出し江實に目覺しき[illegible]にしき[illegible]りたる[illegible]は[illegible]の上鳶口壹にて倒る此事永く口碑に存し奬武の談柄となしたり

一安政六年十月十七日御本丸炎上之時火消人數出張す此時御供番熊倉正八郎（今實明と云）は大城中にて野村丹後守に（貫三郎と稱し　昭德公御入城之時御供にて　公の御小姓頭取となる）邂逅す曰く　上樣吹上へ御立退にて先廻より紀州の火消はまた見へさる哉と頻に御掛念なり願くはいつれ也とも一と消口の功を立られしと正八郎感奮諾し鳶頭万右衛門に命して曰延火如此且梯子あれ共屋上石壘の半に達せす高臺一滴の水なし人力の及ふへからさるは勿論然れ共天下の火消大集の目前に於て紀州の火消に一手柄を取らせ度と　將軍の台旨也汝等決心し果よ我固より安穩に氣を去らすと下知す然るに所在火ならさるなく如何せんとするに御樂屋の一棟柱梁悉く火となり會津の人數堪りかねて鼓を鳴らして屋上より人數を繰り下すを見たり

死抔爰に在りと衆を勵まして血か〻り遠く溜水を運て鳶人足のさし子を水浸しになし火中に入て人毎に火柱をこき下ろしめて遂にく〜消口を取りたり幸に死傷は免れしも疾痛に堪へ得す卒倒相續き息切れ口乾くも一滴の水なき苦辛は實に名狀に及へきに非すと正八郎直話なりし消防隊の狀態を示さん爲め贅言を付す

「寛文延寶同一」

火事之御定 「類集の內定法」

一番組二組奉行一人町奉行一人同心頭二人御目付御使番右爲火之番定置早々火元へ可參同心頭は其所之前後を固役人之外火本へ參る者通し申間敷候付荷物のけ申ものを留置其主斷次第可相渡事

一和歌浦妹背山吹上御靈屋報恩寺近邊火事之時は右の火之番之外大寄合之內にて高知之者一人物頭一組可參事

一火之番之者詰着候跡に又別所に火事出來せは火之番之者可務在々の火事には老中無指圖は不及出事

一御隱居御屋敷近邊若火事有之節は御使役頭詰番頭又御持弓御持筒頭之內兩人何も組共に早速可罷出事

一火之本之番

同心卅人　此前戶田金左衛門組被仰付候如く

御中間廿人　御留守の時は御扶持人足を詰させ可申事

右御城中に可相詰大工夫に應し心當可致置事

一定置役人幷其町之者之外は老中無指圖猥に火本へ不可參番頭物頭屋敷火事の節も雖爲其一組一切

不可出合但親類は不苦事

一御城火事等の節三の丸に罷在候諸士は一の橋西の丸の前へ集り丸之外に罷在候者は最寄々々の口々迄集り居御開門次第內へ可入事

一外かは御門より內之溜り迄入申候時諸士召連候下人御城代番頭大組は八人宛其外之諸頭は五人宛平士は三人つゝより外可爲無用事

一三の丸御門は外之火事には打て外よりの注進をは無滯承屆一の橋と西の御丸へ早々可申通內之火事にも尤御門々を打と雖も曾て人を不通と云事計にあらす能御門を守人々出入を吟味仕人を通すとも頭之見合せたるへし頭不居は相頭御目付御使番等の指圖を可受御門開候時分も道具と女は無斷而不可通之老中足輕之時は兼て御定の衆御門差引可仕御定の衆は大寄合之內にて定置一人宛可罷出村老中家來の者は罷出裁判可仕

一御城代御留守居番頭は御本丸二の御丸何も御門當番の外は組を召連　御城を可守夜居番頭組共可罷出人不足の時は老中御城代へ助人を可乞事

一御近習衆御小姓衆御使役衆大小姓衆詰番頭何も御居丸の內へ參面々番所へ可通若夜中なとにて殿中へ不入時は御玄關前の道通をあけ可罷在事

一十八人組頭共定居所へ可參事

一御(一本徒組頭 步行頭組)共に御居丸へ參御玄關前に可在事

一御藥込頭は奥方を受取萬事御城代と可令相談人不足之時は老中へ可申事

一御手弓頭御手筒頭は預りの御道具を出させ手あきのものは或は火消或は御藥込にも可加也又大納戸御小納戸奥之番所をも助可申事

一西之丸　大番頭組共に

奉　行　下知場能所に罷在砂之丸南郭之下知を可仕

御居丸へ不通候諸頭

一御居丸へ　御供番頭組共に

御用人

御小姓頭

中小姓頭

御藥込頭組共に

御手弓御手筒頭組共に

御持弓御持筒頭同心共に

右相詰罷在候老中差圖可受

一一之橋岡口　大番頭組共に

但此内三分一は西之御丸へ可參

御居丸へ不通候諸頭

一西之丸に急事有之時は大番頭は組をよせ置其身は内へ通見計之儀は心次第兎角老中と相談可受指

圖事

一京橋御門脇　　大番頭

非番物頭

御居丸へ不通諸頭

右相詰罷在老中指圖を可受

一加納平次右衞門屋敷之前

物頭一組

右相詰罷在御用人御目付之指圖を以何之御門へ成とも加番可仕事

一大手總門　　同心頭一組可（一本登）（堅）

一廣瀨之橋爪　　本町　吹上

右三ヶ所に同心（一本組）（頭）一組宛罷在其むよりを廻り盗賊狼藉等を可制

右之外物頭

一御城之溜りに來り方々の舟に廻り其時之樣子に可隨御（一本徒）（歩）目付一入宛相添

一浮役之同心頭五十人物頭御中間頭御犬牽頭御城近邊と承り候はゝ兼て申合置早速頭々召連可罷出

頭不出は組頭指引可仕

一總同心頭火之番之外は少之火事には不可構事

一不依火事騷動かましき儀有之時は同心頭兼て心當のむより〳〵の所へ出他國へ出る人の子細を聞

届又は在々へ荷物等にてものけ申ものを可改法に背ものは討捨たるへしヶ様の節他國より御家中へ使飛脚御目付へ不斷而不可入又大寄合人持之出る儀は頭より其沙汰可有事

一大普請奉行は時により火に不構我に相隨ふ役人を集め其時之可入事を可相計也

一奉行一人は火に不構或は會所或は宿所に罷在萬事之本を裁判

一御目付御使番は諸事見計ひ則申付尤御使或は時に至ての證據御目代と成所書裁に不及事

一十人組御目付御歩行目付早く御門々へ馳付人之出入改候樣に兼て可定置人不足の時は誰にても御目付見計可配事

一町奉行一人は宿所に居町中萬事無油斷可申付事若宿所近邊に火事有之て不被居時は何方にても見計所に可有之事

一御藏預り諸奉行は面々預りの所へ早く駈來可相守火近成御道具出に及ては誰に不依有合たる衆を以可出之其上人不足之時は番頭御用人へ人を可乞右之衆不居時は尤御目付御使番何を以成とも老中へ人を可乞總て何に不依御預けのものを專に相守る儀は不及言事

一總兵具奉行は夫々の在所を御城代大奉行御用人と兼て致相談置何もに能爲知御道具可出樣に可相計事

一御書籍奉行是又大事に可心得也

一御鷹匠御鷹の時分は御鷹部屋を可守御鷹なき時は頭に屬て人々の集所へ可參

一御船手之衆は大火事之時は兩方の川口へ番船を出し船の出入を可留舟通の堀筋盜舟等を可改又丸

之打火事にて駈付候所は人溜り之所迄參り内よりの下知を受へし

一（郡）［本郷］奉行御代官は郷人足召連人溜りの所迄參り老中は不及云番頭御用人御目付の下知を可受

一總て御家御道具等及失火節不成所に精を出し怪我なと仕に於ては還て　御意に不可入無詮事に身をやぶるは御奉公に不成と思食間第一に可心得

一御作事奉行大工頭は御玄關前の廣みへ參居御用人御目付之指圖可受付大工頭申付置ヶ樣之節は早々駈付け參候樣に大工に定札持せ置夫を以集り可申次に町中之總大工も方々に細工仕罷有候とも御城近所に火事有之節は是亦可入道具を持早々駈付候樣に常々能可申付置事

一町中より出申火消之者兼て町奉行申含置一町の內より何人宛と人集り候て定其者共は早きを專らと駈着誰に不依指圖次第小事之內に跡先之辨なく消し申樣に可仕其外は何も之通町の年寄召連往來之妨に不成樣に道をよけ作法能駈付火元にては下知之指圖に可從總て本町新町所々組切にいたし置無滯樣に早速罷出候樣に可申付事

大水之節所々へ罷出役人［同斷］

一岩手　番頭　一人　物頭二人組共に
寄合　三人　御供番二人
代官郡奉行

一宮之井　右同斷

一八軒屋　番頭一人　御先乘一人組共に

物頭一人組共に　寄合　三人
御供番二人　代官郡奉行

一八幡之裏　右同断
一傳　法　右同断
一御船藏　竹一本元(本)丹後
御使番御目付總樣肝煎可申事
右は大水出候時分面々請取場へ可罷出事
一役人之外は先年之通大手提其外所々へ可罷出事

以　上

一奉行御用人之儀御役付には無御座候得共罷出候
「右原書年月欠記文中報恩寺且竹元丹後云々とあり按するに報恩寺は寛文十戌年元要寺を白雲山報恩寺と御改瑞林大夫人之御菩提寺に御創立なり又初代の竹元丹後は御船奉行にて承應元年に病死二代丹後吉行跡御船奉行にて延寶五巳年病死すされは本記は寛文十年已後延寶五年前に於ける發令たるを知るへし」

安永九子年三月九日
一若火事之節夫々詰場所役所等へ罷出候輩少し許之出火にても罷出近年は御定之場外遠方火事にても早鐘撞候得は罷出候樣に相成有之候向後は御定之場内之出火にても早速鎮り候儀に候はゝ罷出候に不及尤御定之場外遠方之火事之節は早鐘撞候共罷出に不及

一御城へ御供に揃候輩も右同斷之筈
但御下屋敷御近邊若火事之節之節は御下屋敷へ御越被遊候儀も可有之哉に付御供役之面々御供
に揃候筈
一遠方にても火事之樣子或は風の模樣により罷出候儀は前々之通之筈
一御門々固めに罷出候輩幷火元へ罷出候輩之儀は是迄之通可被相心得候
一御定之場所之儀は先年相極り候事に候得は夫々承知之事に可有之候得共左之通夫々心得申聞候事
御城中御近邊之方角
東は廣瀨川筋を限り南は岡島河原東坂より北南は雜賀町々筋より東北は本町五丁目筋より東西
之内
御下屋敷御近邊と申は大概
北は傳甫橋より內南東は和歌道通より內西南は出口はつれ邊迄
大概右之通には候得共風烈く御城下御下屋敷へ風筋惡敷節は程遠候共罷出候事
安永九子年五月十七日

出水

一紀の川水出之節は增水六尺より有本村水杭場へ御普請方手代大普請宮組大庄屋共相詰水量相改水
勢强弱等相考增水七尺より段々致注進候儀古來より元極候處近年他役之者共水杭場へ立寄銘々相
改夫々支配方へ致注進候に付丈尺之儀區々に有之夜分抔者別て致混雜候に付自今は銘々勝手に相
改不申元極之通御普請方役人へ承り合一致に注進有之樣可被申付尤減水之節も銘々勝手に相改不

申御普請奉行見分之上堤破損等無之哉承り屆一統申合引取可被申事

文化十一戌年九月

一是迄出火之節拙者共爲持候輪達纒此度各幷御作事方海士名岬御代官色分けにいたし爲持候筈相極り候事候附ては拙者共纒爲持候儀は相止め候間其通可被相心得候以上

九月廿四日　　　　豐島五郎左衞門

總御材木奉行中

同日

一總御材木方火消筋之儀取扱相濟候付右一件別紙之通差遣候間書面之通可被取計候尤火消出場所之儀は左之通可被相心得候以上

九月廿四日　　　　豐島五郎左衞門

總御材木奉行中

彌左衞門殿御仕入方元に相成御勘定奉行支配相離れ候向後消防之儀金澤彌(一本左右)衞門殿指圖次第相働き候筈天保六未五月朔日伺相濟候旨頭取衆被申聞候事

總御材木方火消人數出振之儀出火有之節若　御城御下屋敷御近火に候は宜寄へ駈付拙者共差圖次第消防相働かせ可被申事

總御材木方火消人數畢竟

梯子貳挺　　　　持四人

釣瓶持　四人
水籠持　貳拾人
大團扇持　四人
大水籠持　八人
大熊手持　四人
手長槌持　貳人
鳶口持　五拾人
〆九拾人
總御材木奉行
役人　拾人
鳶之者頭　貳人
高挑灯持　四人
纒持　壹人
幟持　壹人
大工　拾人
注進之者　貳人
〆三拾壹人

外に

總御材木奉行家來　五人

總〆百三十二人

本文書付之外に纒幟等之繪圖も來る

火消之事向後此通心得候樣亥五月二日立石千五郞被申聞

左之通書付被相渡候事

一御城下出火有之候者總御材木奉行御作事奉行御代官右夫々火消人足相集兼て御定之集所へ備を相立置可申事

一右三役火消之儀は元より御場所御用意被　仰付有之儀に付御場所柄御曲輪內又は　御城御下屋敷至て御近火之節は無彼是火元へ人數引纒參り御勘定奉行差圖を請消防取切等可致事

但火消人足利器裝之儀大樣組々能相分候樣目立候裝束股引半着にて身輕く致候儀は勝手次第に可致候且人數火消に掛り候節又は引上け候節柏子木等にて相知らせ候儀は勝手次第之事

一市中出火之節は右三役共火消人足引纒例夫々相詰候場所へ相詰可申候右も大火に相成候歟又は風模樣惡敷或は町方火消にて手余り候節は御勘定奉行より同心呼に遣し可申候間早速人數引纒火元へ罷越御勘定奉行差圖にまかせ前條之通消防可申事

一御城下口々に相詰させ候在火消は是迄之通相詰させ御勘定奉行差圖無之候は容易に呼寄申間敷事

右之通大元を相極置御材木方御作事方御代官所組々にて働之手行宜樣申見詰火消利具幷人數下知致

し易き様事に臨んて差支無之様可致事

四　月

下け紙
一總御材木奉行出場所之儀は去戌九月相極候通
御城下屋敷御近火に候は最寄へ駈付候事

一御作事奉行出場所之儀は前々より極り之通　御城下出火之節向寄御作事請場へ相詰候事

一海士名草御代官之儀は去戌九月相極候通丸之内御代官所へ相詰火消人數同所へ相備置候事

一御勘定奉行火元にて知れ易き様何れ風下之宜寄へ出居候事

四　月

文化十二亥十月四日 山中作（右）（一本左）衞門殿被相渡候由にて将監殿より被差越候寫し

御城下出火有之候はゝ御作事奉行總御材木奉行御代官は兼て御定之場所へ相詰候付市中出火之節は火元へは不罷越事故町方にて消防取計候筈先達て極り有之事候然共市中にても大火に相成候歟又は風模様惡敷右三役共火消し呼寄消防取掛らせ候程之儀に候はゝ其時宜に應し差圖の上已來御城下口へ相詰候在火消共呼寄町方火消共と一統跡火消をも取計せ可申事
小火にて三役共呼寄候程之儀に無之候者町方手切にて跡火消取計せ可申事

文化十四年十月 於若山

出水之節極

一出水之節夫々詰所へ罷越候向是迄は火事羽織着用之事候得共向後左之通相成候事

御供番頭以上羽織着用之事
　但野羽織にても勝手次第之事
右以下　御目見以上は野羽織着用之事
右之者家來野服之事
以下役は野服之事諸同心等同斷之事
文政二卯年二月八日御目付より達
一　西濱御殿御近火及出水出役人定
西濱御殿御逗留中御同所御近火之節出役人左之通
　御勘定奉行一人　　御用人兩人
御廣敷御用人一人伊賀共　御目付兩人
御代官　一人
右早速御同所へ罷出可申候
　御仕入方火消
右西濱村外れ見計相集置可申
右之外御役人向は　御城へ罷出可申事
御近邊と申は大榛
西濱村　關戸村　小二里村　水軒畑　栗栖屋

按に文政二卯年二月西濱御殿落成同月廿八日
舜恭公御逗留して御作居あらせられたり

文政三辰年八月廿一日

一西濱御殿御近邊出火之節は早鐘撞不申候得は罷出候に不及事

但風烈敷節は格別之事

文政四巳年三月四日御目付より

一御下屋敷地御近邊出火之節御作事奉行火消人數共相詰其外共當分御同所へは相詰候に不及事

同六未年五月

一出水之節夫々詰場所へ罷出候面々是迄水嵩八尺より罷出候向は向後壹丈より罷出可申事

一西濱御殿之儀も本文に准し罷出べく事

御年寄は一丈二尺より兩人罷出候事

一（一本係類）（緣類）詰御年寄向後詰場所へ罷出候に不及事

一一丈二尺よりは御勘定奉行栗（一本柄）（林）へは是迄之通兩人罷出之事

一御普請奉行御代官出張之儀は是迄之通候事

嘉永六丑年九月廿五日改正　御目付より達

一西濱御殿御近火幷出水之節出役人左之通

出火之節　御勘定奉行一人　御用人一人

御廣敷御用人一人伊賀共　讓恭院樣被成御座日々一人つゝ相詰候儀に付其節之模樣次第罷出可申候
御目付　一人　御徒目付　御小人目付
御作事奉行火消人數共

右之通詰出火之模樣次第御役人向等は見計可罷出事
（出水之節一本ナシ　御普請奉行　御代官　大普請方）
本文御役人向　御普請奉行初出水に付湊御殿へ相詰候向より兼相勤候事
右之通罷出猶水之模樣次第御役人向見計ひ罷出可申事
舜恭老公本年正月薨去に付て改正ありたる也

慶應元丑年閏五月
一火事且非常相圖之儀向後左之通相定候間夫々脇書之趣篤と相心得必取混不申樣可致事
火事相圖
二つ重　是迄御定通りに相心得可申事
三つ重　是迄早鐘御定之廉と相心得可申事
但三ヶ所半鐘も右に准候等
當月廿日より本文之通り候事
出火之相圖は右之通りに相限り　御城下并在中寺院等にて早鐘撞候儀向後堅令停止候事
一在中水火之急事相圖は二つ重に限り可申事

本記と一紙にて非常相圖之定の事をも布告あり軍制海防の部に揭け爰に略す

慶應二寅年十二月五日

一向後出火之節出振之儀左之通相成候筈候間夫々へ心得させ等之儀諸事宜被取計候事

消防方幷見切注進之御役々は都て是迄之通

大手御門　岡口御門　三(一本本木木町)橋御門　吹上大御門之邊

右四ヶ所へ一小隊つゝ隊長引纏罷出御警衛相勤其外一統登城に不及事

御定内之出火に候はゝ御役人向諸役所勤人丈はかねて當番定置右當り之筋計登城致可申事尤宿有之御役々者別段罷出に不及事

一御宮初御寺方へは寺社方勤人湊御殿向御船藏且聖堂學習舘等は右御場所之勤人計相詰可申尤程隔り有之候はゝ罷出に不及事

下け紙　丸之内其外御門々は是迄之通夫々御預同心相詰候事

本文之通候得共御城且御宮初御殿向等御近火之節は格別之事

同日御目付へ
一出火之節是迄諸御役々詰場所へ相詰候得共向後各初配下之外は出張に不及旨夫々へ相達候間右之趣配下之向々へ心得させ注進等之儀も宜被取計事

慶應三卯年二月二十八日

一出火場所へ消防人之外入込不申筈之處近頃市中出火之節右場所へ消防に不掛向帶刀人筒袖羽織抔を致着用入込且雜人等多入込混雜致し右帶刀人之中には理不盡に火消人足を打擲致候向も有之消

防之妨に相成候間向後右場所へ入込候等心得違入込候はゝ姓名且名所等承糺させ可申事

右之趣御家中末々諸士屋敷長屋組地等に罷在候者共心得させ之儀町奉行中より御目付へ申達候事

同年九月廿四日

一出火之節火元へ罷越候御役之外他役之向罷越差圖ヶ間敷儀有之哉にて消防之妨に相成候趣相聞且見物ヶ間敷罷越候筋も有之趣甚以如何之事に付向後右等心得違之筋も有之候はゝたとへ帯刀人たり共雑人同様召捕相糺候儀も可有之事

明治三年年三月十九日

一若火事之節左之方角御定場内出火之節は御供揃候等

但御定場之出火にても早速鎮候得は御供揃候に不及事

御近邊方角

東は屋形町筋を限　西は雑賀屋町筋より

東南は寺町筋より北　北は京橋下川筋を限り

右御定内之出火に候はゝ一統罷出御定外に候はゝ罷出候に不及事

一右御供且出殿之向戎服着用之事

江戸火事諸則　御徒目付記錄に因る

一之火消人數

一御先手物頭　一人　一御供番　貳人

一御徒目付　一人　一御徒　貳人
一御小人目付　一人　一同押　貳人
一同心内組頭一人　十一人　一鳶之者頭取共　廿七人
一御道具持町鳶之者駈付　廿一人　一御徒目付附人　一人
一御先手物頭御供番之下人　貳十七人
右弘化三午年正月十五日加州殿へ被遣候節調へ上

二之火消人數

一御先手物頭　一人　一御供番　貳人
一御徒目付　一人　一御徒　貳人
一御小人目付　一人　一同押　一人
一同心内組頭一人　十一人　一鳶之者内取頭一人　十七人
一御道具持御中間内人廻し一人　廿一人　一御徒目付附人　一人
一御先手物頭御供番之下人　貳十七人程
右弘化三午年四月十五日築地濱町御屋敷へ差出候人數調へ上

火消行列

高張御挑灯　△同心大鳶口鳶之者　同　同　同　紀御挑灯　同心
御纏　鳶之者貳人　鳶頭

高張御挑灯　△同心大鳶口鳶之者　同　同　同　一紀御挑灯　同心

同心　自分挑灯　待　御徒目付　梯子

御先手物頭馬上挾箱槍　龍吐水

同心　自分挑灯　同心組頭　御小人目付　梯子

紀御挑灯　小玄番三組　御徒　自分挑灯

玄番桶貳組　小龍吐水三挺　御供番馬上若黨

紀御挑灯　御徒　自分挑灯

水之手　御道具番　同心　自分挑灯

鎗　水籠　四半幟　蠟燭箱　御供番馬上若黨

莚三十反

手藏

同心　自分挑灯

鎗御小人押

一の火消は纏の馴牙に横一畫二の火消は同横二畫を付す二の火消は大火等火口數ヶ所なる時は出役稀の事也

御供番は屋根上り番と水の手番とを分擔指揮をなすといふ

一眞如院鑑蓮社近火之節御位牌爲守護向後左之通御人數被遣候事

御小姓組　一人　御書院番　貳人

御徒目付　一人　御小人目付　一人

御小人押　一人　御使之者　一人

眞如院へ御中間　貳拾人　　鑑蓮社へ御中間　拾六人

右罷越候節兩山迄之行列大躰左之通可被心得事

御紋付高張御挑灯　持人御中間一人　御書院番

御使之者　御中間四行歟五行程　御徒目付

御紋付高張御挑灯　持人御中間一人　御書院番

御小人目付　自分高張挑灯　御小姓組騎馬

御小人目付　自分高張挑灯

一御位牌御抜き之節御行列

御紋付高張御挑灯　持人御中間　御書院番　御紋付(中場)一本高張御挑灯

御使之者　「御印」持人御中間

同斷御挑灯　持人御中間　此御印兼て兩地へ相渡り有之　御書院番　同御挑灯

持人御中間一人　眞如院鑑蓮社　御小人目付　自分挑灯

御位牌御長持　役僧　御徒目付　(御小姓組騎馬)一本アリ

同　一人　御小人押　自分挑灯

兩山御位牌守護

眞如院鑑蓮社近火之節　御位牌守護御人數揃ひ場所
糀町御屋敷北御門馬立場之邊

右之通

一右兩山へ御位牌附御人數出候節ばん木是迄（一本なしは大躰）廿へん程有之打切候得共向後御人數出候節揃候迄ばん木爲打候等御人數揃候迄仲間致差圖止させ候等相心得候樣にと御目付中御申聞に付御小人目付火之見番へ心得申聞候

文政二卯六月六日

一本文御人數出候節仲間一躰人少に付御徒より假役出候事月々姓名非常割に出し有之繰廻し相勤候事

同卯八月十四日

一上野眞如院芝鑑蓮社近火之節　御位牌爲守護御書院番貳人宛罷越候等に相認候段其節委細御達申候事候夫に付右御書院番十四人へ侍一人鑓持一人平人一人都合三人一人御貸人いつれも法被着麹町御屋敷中之口へ相揃其段相達取次番所へ相斷候樣兼て御申付置候樣

八　月

一出火之節兩山　御位牌守護御書院番中御紋附ふら〳〵挑灯相用且同役御貸人之儀も毛綿黑地白山之字火事羽織着之旨去る巳十二月御申聞被成有之候哉の處右は彌今日より右之通被成候旨御目付中御申聞被成候事

三丁火消

一左之通三丁火消人數引纒火事場にて御目付御使番衆へ相屆差圖有之上は人數御纒之廻りへ堅め置火に掛り候樣にと被申聞候はゝ働其樣子仲間氣附可申尤引取之義　公儀役人中挨拶有之迄は張合可申候勿論掛合候御役人之姓名覺居候て歸候上御目付中へ可申達候事

御纒　貳人

頭取　五十人組之頭　御供番　御小姓組　御書院番之内壹人

御徒目付　一人　同心　五人

御小人目付　一人　高御挑灯　貳人

梯子　貳人　火事にては龍吐水へ可掛

一玄蕃桶　貳人　水之手に懸ろ

龍吐水　三人　內貳人水運ひ一人くり候

蠟燭持　一人　撰人足　一人

〆貳拾六人　內十五人御中間

外に　仲間附人　一人　手挑灯持　一人

火事諸極

一從　公儀兼て左之通被　仰出有之候

前々被　仰出之通若出火之節屋敷廻り貳三丁之間人數早々差出小火之內爲消可申候居屋敷に不

限中屋敷下屋敷にても家來差出し可申尤人數小勢之分は不苦隨分早く駈附候樣兼て急度可被申
付置候人數差出し候はゝ其場所にて之御目付中より子細承屆にて可有之事
一寛政四子二月九日從　公儀左之通被　仰出右節より御中屋敷へ三丁火消別に一組相立候事
出火之節萬石以上三丁駈付人數不足にて其上罷出候段屆置場所に不罷在類も有之義に相聞甚不
埒之事亦能々申付置候面々へは追て御沙汰も可有之事候且又右人數之内龍吐水爲持不來候筋有
之趣に付以來はいつれも龍吐水相用候樣に可申付候
右之通可被相觸候
二　月
御屋敷廻り七八丁之間出火之節いつれもばん木柏子木に不拘御勘定所に集り頭取之下知次第駈付
可申事
一不殘揃不申共大概御人數有らは火之元へ可參候其節出候御門へ御小人目付を殘し置殘り候御人數
申聞させ候筈
一御定二三丁より余程間有之候はゝ　公儀役人へ逢是迄參候へ共御定内無別條候故引取候旨可斷若
御定内へ飛火等或は火之子來候はゝ見合可申事
一御成之節欠附火消罷越譬　公方樣御行列先見候共不構可參候然共　公儀役人より宜早　御成先も
近く候間留候樣申候はゝ差扣可申候外之者より差咎め候はゝ欠附火消と計可有之也
一御定場所より遠く候共大樣十丁程之間は一旦御人數出し前段之通斷候筈

一御旗本衆屋敷幷小屋敷にて案内申込主方より挨拶次第に可致若內へ入不申候はヽ　公儀役人待居候て此御屋敷內火事に付入込可防候共主人より入らせ不申先扣居候如何可致哉と斷其上にては公儀役人差圖に任せ可申候

一若御近火之節風惡敷火消人數も不多候はヽ御臺所向之役人を屋根へ上らせ火之子防候樣にと享保年中被　仰出有之事

一御側御用人御勘定奉行御目付は三御屋敷之火近方へ打廻り諸事可申付

一忌中之者殿中は勿論譬御目通りへ出候ても不苦

右下け紙に

天明八申七月十六日極

一出火之節忌中にて御供幷役所勤之者殿中は勿論假令御目通へ出候ても不苦旨寶永八卯年被　仰出候通彌相心得候樣

文化十三寅正月八日

但御供に相立候儀は其節々御用達御目付差圖請可申事

一所々御門へ相詰候者之人馬は其邊之地主へ御供番頭以上馬上御免之面々は乘馬御大門外に斷置

一御中屋敷中之口御門內供連左之通

御年寄　三人　大寄合　一人

頭役以上　平士以下も　壹人も召連申間敷候

一御中屋敷内にて急事之節は馬上御免之輩左之通

御用人　　御先手物頭

御目付　　火之番受

御先手物頭　　御供番

一外大名衆　御家門様方之火消共右同様之挨拶にてよし

一左京太夫様より之火消中之口前御門より入中之口屋根へ上け防候様其頭取へ可申場所はいつれにても不苦

一青山邊出火にて　御中屋敷御殿向御氣遣無之其邊へ　殿様被爲成候節　御家門様方其外より火消參り候はゝ兼て御定之通御門外へ集め置大御門受は遠侍向之馬持候平士を早く出し　殿様へ可申上右火消を火に懸候節も最初之平士を出し案内致させ候也是は大御門詰之御年寄御差圖にて候得とも心得記

一仲間御長屋（近邊若）[一本ナシ]出火之時心得違其場所へ不出自分之受揚所へ參候はゝ追て申譯不相立旨御目付中急度御申聞被成候

一御扶持方夫金共不被下老人幼少之筋は火事に不遣

一御近火之節西御門外より諸道具幷主人開かせ申間敷候女子供退かせ候儀は勝手次第

（一水野土佐守火消纒は銀之水之字附有之也）[一本ナシ]

一左京太夫様火消之御纒は金笠也

一消口札左之通

紀州人數
消　口

一八丁堀御屋敷近邊出火之節町與力嶋喜太郎御同所へ相詰模樣次第にて町火消をも入込候儀有之事
一右同樣之節與力安藤小左衛門儀も相詰町火消を入込せ候儀可有之事
一御上屋敷當時御明御殿に付殿中向之井戸綱損し候故はづし候て小道具役へ預り有之候等御近火等之節は同所當番之表坊主へ申聞爲掛候等心得に記置候
一至て御近火之節は爲之者早々火消道具取遣し火近き方之御門相詰追々參候人數右場所へ駈付集候樣
一火事場にて三丁火消梯子持二人は龍吐水可掛玄蕃桶持貳人共水汲へし爲口持は火を打消へし水之手三人之內一人水汲二人は可運蠟燭持晝之持參はなし挑灯之火を肝煎すべし
一公儀役人へ渡候手札は兼て左之通認置可申候尤頭役以上にても御小人目付体にても認振同樣

紀伊殿家來
何の誰

美濃紙

一御勘定所赤坂御屋敷山屋敷御門內へ此度出來に付三丁火消右同所へ揃候等伺之上丸山孫四郎御申聞被成候
一御門々に有之候火消道具左之通赤坂御屋敷下馬先御門

水籠　梯子　藁蓆

車御門　切手御門　田屋敷御門

中段御門　青山中段御門　青山切手御門

同南御門　同東御門　山屋敷御門

右梯子何れ之御門にても急火或は手過之節は誰によらすかし置候

一諸御門用心道具享保申年より定附にて三丁駈出し道具も一所に有之候處寛政四子年別段に三丁火消一組相立候故駈付道具は御門へ不差置候定附計に相成候事

一三ツ重打ヶ所左之通火消屋敷に打交候筈

築地御屋敷　濱町御屋敷

澁谷御屋敷　千駄ヶ谷御屋敷

御上屋敷　御中屋敷

青山御屋敷

尤御近火之節は勿論之事

寛政五丑年七月廿七日

一鷹之者之儀は御中間頭支配に付不依何事御中間同様に取扱振り心得居候様御目付中御申聞被成候事

一此度御作事方鷹之者皮羽織襟に作之字附有之其余は外鷹之者同様

一赤坂御屋敷より十丁之內外と相見候所より出火有之候へは爲知太皷打通り呼候事
　爲知太皷五つ打三聲呼候事本文爲知太皷打候上風模樣に寄差圖之上二重をも爲打可申事
一糀町　御屋敷より十丁內外と相見候節も右同樣之事
一赤坂糀町御屋敷之御近火之節は爲知太皷二重に打見計打切候事
　本文大躰四五丁四方と相心得可申候
一赤坂　御屋敷內出火之節最初より太皷半鐘打交打候事
　糀町　御屋敷內出火之節も同樣之事
寛政七卯年四月十六日
一御近火にて御屋敷內馬上致候面々御門出入之節致下馬候得共開き有之御門は馬上にて出入致候ても不苦候事
　但大御門は是迄之通乍併其節之樣子に寄見計有之事
同十一未十二月十七日
一向後火事急事之節御人數他へ被遣於途中　方々樣へ御行逢申候共馬乘之面々下馬に不及行形に通り候樣被　仰出候事
一御時節柄に付一二火消之御挑灯以前之通高張に相成候事
一若出火之節中雀御門前乘馬之儀兩御屋敷共別て御近火之節は御役人見計乘通候筈先年相極有之事に候得は向後早拍子木打候はゝ御役人向幷火消役之面々は見計中雀御門前乘通は不苦事御廣敷中

雀御門前青山御殿前も同斷

右之趣御側御用人衆被　仰聞候事

御近火之節五十人組之頭初三丁火消御人數引續罷越候輩早拍子木打候はゝ御屋敷内馬上いたし候ても不苦候事下馬所内乘通之儀は火之模樣に寄見計可有之候事

右之趣前同斷

一若御屋敷内出火有之候ても十軒四方燒失無之内は出火に不相立義は前々より之事候間假令早拍子木打候ても諸御門開き不申筈先御門之儀は何等不申聞仲間計心得居候樣御申聞被成候

一寅七月五日火消役岡田將監御用人へ逢申度旨にて十助殿罷出候處寛政二戌年松平式部殿御申聞之趣猶又書附持參被致右式部殿之節之通相心得被居候由尤書面には大御門前相詰候段認有之候得共御屋形御近火に候得は右之通に候得共廣き御屋敷の儀故青山權田原向ヶ御屋敷内出火に候得は其筋之御門へ相詰御役人御差圖之上相通候心得之由組中へ得と被申聞候樣御役人御知らせ被置候樣被致度旨被申聞其後九日に火消與力鍋田彥右衞門去月十八日之夜繰合一件内濟御禮罷越將監殿より前段之趣被申聞置候間右樣相心得罷在候旨併火消人數御屋敷へ入被申候節に至ては赤坂火消人數一番に入被下候樣致度旨を御徒目付迄申出候由御目付中被申出候付右之段御年寄衆へも猶又相廻り別紙之通火消役中幷御門へも心得候樣相達旨被申候樣申達候御勘定奉行へも御作事火消へ被相達候樣此方より申達候事

一寛政二戌年火消役松平式部殿御城附へ被申聞萬一巽御門通御守殿御門通外長屋より出火之節は早

速に外より梯子を掛消させ候心得に被有之其外御長屋内之儀は大御門へ相詰被居御役人差圖受其所へ被參候心得之由被申聞有之由被申聞有之候處猶又此度岡田將監殿右之通心得被居候由被申聞有之候尤御屋敷近邊之節は右之通候得共廣き御屋敷之儀故青山權田原邊向ヶ御屋敷御上火之節は其筋之御門へ相詰御役人差圖之上被相通候心得之由巽御門通之御長屋に候はゝ外より梯子掛消防可被致旨組中へ得と被申聞置候旨被申聞候間其段火消役中へ御通達猶又御門々々へも御達置可有之事

文政三辰八月十三日

一御屋敷内若出火之節公儀盜賊改役中向寄之御門より被相越候儀且馬上にて乘込可申と之儀品に寄可申聞儀も可有之左候はゝ其御門へ被扣居候樣及挨拶置其品番人共より御目付方へ申出差圖受可申事

同年八月十八日

一御使番衆火事場見廻役衆御屋敷内出火之節御門通り方之儀被問合候に付左之答候

本文御門通り方之儀は御目付衆同樣取計候事

文化六巳二月廿八日

一左之書付出候事

御屋敷内若出火之節火事場見廻り役衆被相越候共御門へ入れ不申誰殿被參有之との品早々御門番人共より御用人御目付中へ直に可申事

右之通

御屋敷内若出火有之節火事場見廻り役衆被參出火之樣子等被相尋候とも役人共より其模樣申達御門内へ不被相通兼て心得罷在御使番衆同樣に取計候事

二月　紀伊殿　御城附

御用人

御目付

本文之通候得共出火之樣子に寄御使番火事場見廻り役十人火消御屋敷へ入込候樣御目付御申聞被成候事

文化六巳二月廿八日

一若出火之節水之手消防之道具貳組此度致出來候大御門へ差置御先手物頭中預左之通名附有之候御手前にては無之事

・　玉　衝　車

一御近火に付早拍子木打候へは諸役所へ屋根番　殿中にも有之候付以前之通式臺番觸込候事

同八未八月晦日

一此御方御廣敷へ火之見出來候事

同十酉閏十一月十七日

一御屋敷御近火之節是迄中之口前へ駈附人數揃候處此度御模樣御普請に付替り中の口御長屋御門外

馬場面口　御藏地口　馬場奥口
赤坂御屋敷
田屋敷口　森川御茶口　御鷹部屋口
青山新急事口
丸山口　五月口　御厩口　小川口
唐橋口　嘉𡑮　馬場奥口御馬引入口共
青山にて
貫〆御門　鳴子口
一赤坂御屋敷猿樂御門之續に有之御門
南御物見口　同所御厩之續に有之候　板𡑮口を御厩口
一公儀火消役衆出火之節是迄御曲輪内計へ駈附候へ共自今御三家樣御屋敷は勿論　御三卿樣御近所
出火之節も右火消五組とも駈付候樣被　仰出候事
文化十酉二月廿四日
一出火之節　御屋敷内下乘所之外は御先手物頭初火消役之向は一統馬上御免之筈
文政五九月廿三日
一定火消　御三家方御屋敷御近火之節相詰御座候席へ罷出候筋是迄之通腰差挑灯持上り有之候右は
挑灯持上り候趣一同申合候段板倉主稅申出候事

同年二月廿日

一麴町御屋敷御近火之節兩御丸より御小姓御小納戸衆之内又は御役人を以　宰相樣へ　上使被進御義も可有之候旨其段兼て相心得早速御徒番所へ注進可致事

同六未正月四日

一御同所火之見にて太皷打可申筈之處兩御屋敷十丁四方出火之節　御本殿之通打候筈之旨御申聞被成候

文化七午十一月七日

一兩御屋敷拾丁四方之出火之節麴町御屋敷火之見にても　御本殿同樣太皷打候筈去年三月相極有之候出火之節は勿論打交爲打可申哉と相伺候處其通之事候旨御申聞被成候事

一若出火之節一二之火消人數場所東御門内御勘定所前へ相揃候處向後火之見番所脇火除地へ相揃候筈

但御勘定奉行附火消人數は是迄之通候事

一火事に付御人數可遣候節は早速知らせ盤木爲打候事

但知らせ幷御人數出候節青山火之見にても打候筈

一御近火之節は最寄より二重打候事

但本文二重廿遍程打候事

右之趣火消役末々迄被申聞置候事

但青山屋根番へ爲知之義其節に御小人目付より使番之者へ申聞即通達候筈兼て申聞置候事

一中見火元見は例之通御目付方より出候

右之通文化四卯十一月廿八日書附出候事

一若出火之節騎馬役之面々中雀御門外乘通之儀鎮火に付引取之節乘通り不相成候旨先達て極出有之候得共自今引取之節も喰違開き有之節は乘通候ても不苦事

一火事之節外へ御人數被遣候節火消役之面々車御門內にて馬上いたし御門乘出候筈

但し歸り候節是迄之通り御門外にて下馬致候事

於火事場働之次第

一御纏　鳶之者二人何れも先へ立

一大鳶口　內八人火之中へも入

一先梯子持　內四人大鳶口へも可働

一龍吐水　內四人火事場にて龍吐水へ掛る

一玄蕃桶貳組之內水籠八つ入　撰御中間貳人水之手可働

一小玄蕃桶三組　同斷

一跡梯子　鳶之者四人大鳶口へ加り可働

一長鳶口　撰御中間貳人

一四半幟　同　壹人

一竿釣瓶持　　　　　同　貳人
一消口札　　　　　　同　貳人
一釜鋸枠入莚　　　　平御中間四人
一蠟燭持　　　　　　平御中間壹人尤晝は不出
一盤木早拍子木打候はヽ何れにも火之見番所脇火除地へ揃可申馬立之後へ火事役所へ火消道具差置
有之役人之差圖次第爲之者爲持候間　御家門樣へ被遣候尤其節は御差圖有之事
一火事役所へ罷出候共自今居宅合壁等近火にて候はヽ斷を立可歸事
一此度御抱被遊候爲之者へ火消先にてがさつに無之樣喧嘩等不致隨身相愼候樣申聞有之事尙又仲間
方にても心をつけ可申事
一公儀火消は勿論外々之火消等消口之爭ひ不致樣前々より被　仰出候事
一出火之節火消御人數被進候ヶ所左之通
○日光御門主樣　　　　○尾州樣
○水戸樣　　　　　　　逢壽院樣
○左京大夫樣　　　　　攝津守樣
讃岐守樣　　　　　　　大學頭樣
播摩守樣　　　　　　　襲若樣
松平加賀守殿　　　　　松平越前守殿

松平因幡守殿　　　　松平陸奥守殿
細川越中守殿　　　　松平彈正大弼殿
松平和之丞樣　　　　阿部能登守殿
右御近邊出火之節樣子次第御人數被進被遣候事
但丸印御近火之節は早速被進被遣候儀取計可申事
一日光御門主樣へ被進候儀
右は此　御方御近火之節あ之方より御人數參候儀無之候付先大樣は被進無之御使被進候等乍併猶出火之樣子により眞如院へ被遣候御人數を分け被進候樣可取計事
澁谷御屋敷　　　　千駄ヶ谷御屋敷
築地御屋敷　　　　濱町御屋敷
右御近火之節は御勘定所取扱を以差遣候付其節樣子次第猶又定り之火消さし出し可申事
水野土佐守殿　　　　安藤飛驒守殿
三浦長門守殿　　　　久野丹波守殿
右近火之節は御人數被遣候
上野　　眞如院　　　　谷中　　龍國院
芝　　鑑蓮社
右近火之節は早速　御位牌附之者幷火消御人數をも被遣候樣取計可申事

一築地濱町澁谷千駄ヶ谷　尾州様初　御縁家様方へ火消人數可被遣方角に出火有之候はゝ知らせ盤木打候上差圖次第二つ重盤木打大樣御人數出候はゝ打切り候事

但知らせ盤木五つ打三聲呼候事本文之通候得共千駄ヶ谷御屋敷之儀は大躰御近火には御人數差遣にも不及申差圖可致事

一此度火之見に於て盤木太鼓共諸役所へ相觸候儀御近火之節早拍子木打候儀火元へ出候儀且築地御屋敷初　尾水様其外御人數被遣候節盤木御用人中御目付中差圖致し打せ候儀等都て是迄之通相替儀無之候御近火之節夫々詰所へ相詰候儀火消役之面々相揃候儀も是迄之通相替無之候重太鼓早拍子木は同様御心得可申事

一是迄も火之見に方角記有之火之見番共相心得可罷在儀は候得共此度改之通り呼候付ては猶又方角之儀火之見番共常々心得何れ之通且出火之節樣子遠近之所呼候樣可致事

文化十一戌四月二日

一御抱鳶之者駈付鳶之者渡り物は左之通

御抱鳶之者

一金壹兩　壹ヶ年分　一貳人扶持　月々

一はつち　壹ヶ年壹つ　一股引　同斷

一革羽織頭巾共損し候節引替

一出火之節出候ても賃銀被下無之

駈附鳶之者壹人に付

一壹人半扶持　月々　　一はつち隔年渡り

一股引　同断　　一革羽織頭巾共損し候節引替

一出火之節出候ても賃銀被下無之

酉年より相増候駈附之者女四人之節壹人に付

一壹人半扶持　（一本ナシ月々）　一はつち隔年渡り

一股引　同断　　一革羽織頭巾共損候節引替

一出火之節場所へ出候はゝ遠近に不拘銀貳匁つゝ賃錢被下之

一右之内革羽織は兼て鳶之者へ賃渡候事

右之通御勘定奉行中より申越候事

寛政十一未六月六日

一式部卿様御近火之節火消御人数被進候筈

同年十二月十五日

一江戸御先手物頭同心火事羽織之儀是迄丸羽織之處打裂羽織に相成候紋所色合別紙之通に相改候旨年寄衆被　仰聞候付明十六日相渡させ右に付三丁火消へ罷出候同心も右同様之羽織着用之筈候間其段相心得候様

十二月五日

一地太木綿花色染
紋所三つ白上り染拔き　但本金三寸五分
三つ輪　緣茶色素縫襟紐下へ巾五分一文字
一筋白色素縫襟紐筵緣茶牡丹掛
右之通
一尾水樣兩山共外都て　御緣家樣方御近火之節是迄何れ中見火元見歸り候上ならては火消御人數被進且不被遣候得共急度御近火之見極候はゝ早速御人數被遣候儀も可有之候
文政四巳正月十四日
一表火消一二之者肝煎共へ鼠色黑漆にて鎮之字附此節より貸渡し爲致着候旨御勘定奉行より申來候事
寛政六寅十二月廿一日
一去月廿二日御上屋敷より歸候節火消御人數加納大隅守殿へ行逢候處頭取能勢角之丞初一統會釋不致候段御屆候事
但極は騎馬之筋笠頭巾取前輪へ手を掛致會釋末々は蹲踞候筈尤込合候時は用捨本文之通歸り道故頭取を急度御叱り仲間御小人目付へも已後之處御申聞被成候
一寛政五丑年鳶之者御抱有之其後又貳人御抱に相成右平日之處御勘定所にて相働き急事之節は一二火消へ相立候得共御目付中御心得被成候處は此間之出火之節不殘駈付鳶にて有之趣に候一二火消

駈付鳶之者に相成候様有之哉と去七日御申聞相伺候處不相分万右衞門へ承見候處御抱鳶二十人都合十四人にて一二火消相勤候寛政五丑年駈付鳶之者二十人相増御作事相勤駈付鳶之者は一二火消へ罷出御振替に相成候間万右衞門申出其段御目付中へ申達候事

文政四巳年

一火消御人數火事羽織法被等之儀赤坂火消役より問合有之候付相調申出候樣御申聞に付左之通差出候

御先手同心
火事羽織打裂地太毛綿花色染紋三所

御中間組頭
同地黑とろめん打裂紋角取白に水之字

御中間撰人
法被地木綿花色袖印

御中間
同地もめん花色山之字

一他所へ御人數被遣候節は二の火消より鳶之者五人相增候筈外に万右衞門も參り都合廿二人之處六人相增廿八人に相成候事

一左之定書御目付中御見せ被成候

一芝御山内邊　　　　　　　一芝口邊
右之方へ御人數被進候節靑山切手御門出足輕町通足毛八幡宮前迄持出相達御人數相揃差圖之上是迄之通罷越可申候
但足輕町夜分步行難出來候はゝ新坂通り
一山下御門邊　　　　　　　一築地道
一濱町邊　　　　　　　　　一中橋邊
一八丁堀邊　　　　　　　　一吳服橋邊
一鍛治橋邊　　　　　　　　一神田橋邊
一常盤橋邊　　　　　　　　一田安御門邊
右切手御門出赤坂御門外へ相達同斷
一上野邊　　　　　　　　　一本鄕邊
一小石川邊　　　　　　　　一市ヶ谷邊
右切手御門出御長屋下六道町にて相達夫々信濃町通り
一澁谷邊
右同斷百人町にて相達同斷
一糀町邊　　　　　　　　　一赤坂邊
一鮫ヶ橋邊

右出火之節は最寄之御門へ相詰候事
安政元寅四月十一日
一八丁堀御屋敷若御近火之節は是迄築地御屋敷御近火之通り火消御人數被遣候節之趣を以取計候事
本文此度相對替に付
同年十二月廿四日
一御近火幷御使差急候節共大御番頭部屋夕詰之面々御屋敷內馬上不苦事
寬政十一未十二月十四日
一此邊　公邊伺相濟候て拙者共綴付候白張笠をも相用候付火事場へ被差出候御人數へ爲心得御達置御座候樣致度候
火事場見廻り　本所火事見廻り
文化十三酉八月十二日
一出火之節火消御人數揃場所相之馬場火消役所前へ相揃馬上之筋は御門より出候筈
一八丁堀邊出火之節御勘定所より御同所御屋敷へ火消御人數被遣候節向後御小人目付兩人罷越候筈
相成候旨御中間に付同役へ申聞置候
本文往古御屋敷にて有之節
文政十二丑七月四日
一一二火消罷出候御中間共着用爲致候羽飛班々に有之處向後御中間共一統へ花色に山の字白上り染

候衤飛幷淺黄股引着致させ候等年寄衆被仰聞候付此節は着致させ候樣御中間頭へ相達候此段爲心得申進候以上

七月四日

小谷作内

阿部清兵衞樣

久保田源藏樣

安政七申三月十日

一竹橋御門淸水御門田安御門牛藏御門通行止に付同廿四日左之書付御見せ被成候事

此度田安御門等御役人之外通行相止候付若　田安樣御近火に付御人數被進候節通行振之儀　公邊御目付へ伺合させ候處御人數引纏之頭口上を以て田安御門へ相斷通行いたし候等答有之候事

文化六巳十月廿七日

一左之書付出候事

御使番御供番

若御屋敷内に出火有之節右兩役之内壹人早速火元へ罷越火消人數消防之樣子を見屆格別出精相働候筋或は無用に致徘徊火消妨に相成見物躰に見受候者有之候はゝ姓名を承り於場所御用人御目付へ可申達候火消人數之内にも若如何敷樣子及見候はゝ早速右兩役へ相達總て消防には不拘於場所猥成儀無之樣打廻り承り糺候姓名追て年寄共へ相達可申候

附紙　於場所申達候儀御用人御目付其場に無之候はゝ追て可申達事

御用人御目付

若御屋敷内に出火有之候節は御使番御供番之内壹人早速火元へ罷越火消人數消防之様子を見屆格別出精相働候輩或は無用に致徘徊火消妨に相成見物躰に見請候者有之候はゝ姓名承り於場所各へ相達若火消人數之内にも如何敷様子及見候はゝ是又各々へ相達總て消防には不拘於場所猥成儀無之様可相廻旨被　仰出候間各にも猶無油斷万端致差圖他所人數入込候儀に付猥に無之消防之儀行屆候様作略可有之候前段兩役より相達し候外にも精不精之儀及見被申候はゝ相糺追て取調可被申候混雜之中に候得共他向應對別て不束無之様取締各御役之權相立候様相心得可被申候

御近所幷御屋敷内に若出火有之節早拍子木打候得は極之通夫々請場所へ相詰候儀に候處近頃受場所を明火元へ罷越候向粗有之候右は(待)場へ罷越候道筋或は住所之近所にて未た火消人數も揃無之難見捨場合に候はゝ尤先火元へ掛り消防之儀出精いたし可申候其内火消幷役人共も相集候はゝ役人へ相達猶其差圖を受可申候其外方角違之場所より火元へ罷越火消人數に打交り消防いたし候儀は有之間敷儀に候間向後持場を明猥に火元へ集中間敷候往來之外火元を徘徊見物躰に相見候はゝ出役人之者より姓名承之にて可有之候部屋住之面々も同様相心得右消防之心得にて右場所へ參候はゝ出役人へ姓名相斷差圖受可申事

右之趣末々下人迄得と可申付候

出火之節　御本殿於火之見太皷盤木打様之事

文政元寅六月廿六日

一赤坂御屋敷より十町內外と相見候場所より出火有之候はゝしらせ太皷打通り呼候筈しらせ太皷五つ通り三聲呼候事

本文爲知太皷打候上火事之樣子風之模樣に寄差圖之上貳つ重をも爲打候事

一糀町御屋敷より十町內外と相見候節も本文同樣爲知太皷打通り呼候筈

一赤坂御屋敷糀町御屋敷御近火之節は爲知太皷打廻り呼候上直太皷貳つ重打見計打切候筈

本文大躰五六丁四方と相心得可申事

一赤坂御屋敷內出火之節は最初より太皷半鐘打交打候筈

糀町御屋敷內出火之節も同樣之事

一八丁堀澁谷千駄ヶ谷御屋敷　尾水樣御初御緣家方等火消御人數可被遣方角に出火有之候はゝ爲知盤木打候上差圖次第二つ重盤木打大躰御人數寄候はゝ打切候筈

しらせ盤木五つ通り三聲呼候事

本文之通には候得共千駄ヶ谷御屋敷之儀は大躰之御近火には御人數差遣候にも及間敷哉に付其段相心得差圖可致事

一兩御屋敷より十町內外と見及爲知太皷打候上右之出火にて　尾州樣抔へ御人數被遣候はゝ盤木にて之しらせは打候に不及重盤木打候筈

一貳つ重廿篇程打せ可然事

一鎮火と見及候はゝ寬々半鐘五つ打候事
大皷盤木ともしらせ計打候節にても鎮り打候筈
同日
一此度於火之見盤木太皷打方改候得共火消屋敷爲知出大皷共諸役所へ相觸候儀御近火之節早拍子木打候儀火元見出候儀且八丁堀御屋敷を初　尾水樣其外へ御人數被遣候節盤木御用人御目付致差圖打せ候儀等都て是迄之通相替儀無之御近火之節夫々詰場所へ相詰候儀且火消役之向相揃候儀も是迄之通重太皷は早拍子木同樣相心得可申事
本文盤木太皷打候樣との儀は追て御申聞有之筈之旨御申聞候事
文政二卯十二月
一御屋敷下乘所内向後出火之節御目付中馬上　御免之事
同　五午二月九日
一御屋敷火之見番人之儀仮部屋頭御中間へ革羽織革頭巾袴着用之筈に相成候事
同　六未三月九日
一御近火之節御用人中御目付中出場所にて向後床机取用候旨御申聞被成候　以上御徒目付記錄
「書中屋根番とは火之見樓の事にて文化十酉年八月火之見と改稱番人を火之見番と唱ふ通りを呼ふとは出火の所在何所通り日本橋通り市ケ谷通りの類と大呼するを云ふ早拍子木とは赤坂麴町兩邸三丁以内近火なれは兩邸所々の火用心番人各受場所を二つ重ねの早拍子木を打馳廻る也然る時は御家中一

同火事具を着け速に出殿するの成規なり」

火事定

一御近所出火之節人々手前之火之元入念仕廻せ可被申事

一窓之戸并引窓たて可申候尤二階之梯子はつし申間敷事

一火急に候はゝこけら屋根之分へは下人上け置火之子拂はせ可被申事

一庇并其外何にても火之可附當分之圍は早々取崩させ可被申事

一御長屋三間口迄は桶一つ三間以上は二間に桶一つゝ積庇へ上置并わら箒右桶之數程用意可有之事

右之趣常々入念可被申候出火之節役人差遣相改候間相違於有之は主人可爲越度者也

御目付中

「右は江戸御長屋住居の御家中御長屋定と共に遵守すへきの法則也引窓とは御長屋竈烟出しの窓をいふ」

出火出勤の制

一赤坂麴町兩邸近火の時諸士出勤ヶ所は御目付にて殿中諸局諸司門衞守倉の諸職人員等の配當を定め兼て人々へ布達承認せしめ受場所未定の者へは浮にて御本殿御玄關へ可罷出と達す此時に臨み指揮に從はしむる也依て邸中早拍子木を打廻り近火の報あれは速に火事裝束にて面々受場へ出張す鎭火に及て退散す而して三日之内に勤書といふを御目付へ出す則如左

勤書　　　　　　何之誰

昨日何方邊出火に付浮にて　御本殿御玄關へ罷出申候以上

月　日

若し病氣にて出勤せされは即刻眩暈氣罷在出勤致ささる旨切紙を以屆出忌中之者出勤せされは忌中と雖も出勤すへきの處眩暈氣にて出さる旨を屆く出火に限り何病たりとも總て眩暈氣と稱する事通例となれり

御家中類焼

御家中御長屋住居又は外宅共類焼之時は何處に住居之處（昨夜今朝）の出火にて類焼之旨を頭支配御目付御勘定奉行へ屆書を出す

自火は無論にて差扣へ申込書といふを提出し謹愼命を待つ

一類焼に付當分何の誰方（親戚等）へ立退たる旨或は土藏殘り右へ差掛け當分住居之旨も屆る

一類焼之者は左之通休暇を許さる類焼引普請引屆といふを出す普請は三十日を過き追願すれは尙廿日を許さる

類焼引　十五日　普請引　三十日

一類焼渡し金出る之成規故御勘定所へ該金受取度旨之書面を出し御金藏にて受取る半類焼にても出る長屋（門〈一本ナシ〉）厩の焼失にても半焼に准す類焼金之制限は御勘定所にあり

一拜借金も許可を得亦祿高等によつて制規あり

南紀徳川史卷之百二十三

法令制度第三

文格

臣　堀内　信　編

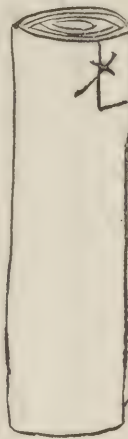
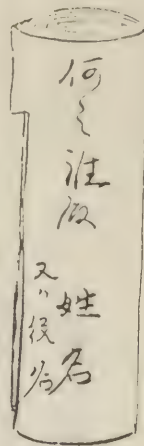
一幕府へ對する奉書御達書御同族御緣家諸大名へ之御書札奉狀御獻上品目錄吉凶御音信御口上書及ひ目錄制札定書御關札宿札箱書付等一切之公文書牘は表御右筆御書方の職掌にして一に山本流の書風を御家法となす其書式文格用紙共悉く作法規範あり蓋し足利家已來武家公文之古實に基き幕府右筆書の式法に則り三親藩一定の書式文法行はれし也

足利以來武家書札法式之事は書札袖珍寶と題する書に詳也該書は慶安四年七月安富幸隆の編述曾我流の秘書と傳へ佐武杉右衛門（佐武伊賀義昌の曾孫）元祿より正德迄二十年間御右筆を奉職書札袖珍を自寫御右筆局に備へ置きしよしなれは是等によつて審査講究する處ありしならん此類之書尙勘からさるへし

然れとも該御書方の文案書冊散逸傳はらされは爰に其如何を示す能はす唯御家中書牘の文格を揭るに止まる

一諸局諸司に於ける書牘文案簿冊登記の法頗る嚴格一字一文の微より畧續き（たとへは御の處にて畧を續き自つから崇敬を示す如し）熟字之書法（たとへは候付との熟字を離行に分つへからすといふの類也）に至る迄悉く成規先蹤に則らさるを不得もし一字の差誤あれ

は古番先進の嚴責を受く表用局の如きは公儀向初他所交通頻煩加之御家中事務總括之局なるを以文書極めて輻輳紛雜時に或は一時に數百通の文書を諸士一般へ頒布するに悉く己人の資格を暗記殿文字を八種に書分け字容文格を區々差別以て筆箇流るゝ如くなるは到底習練老磨に非されは能はさる也畢竟治平繁文之冗弊と雖も自つから規律整然躰裁紊るへからす

一切紙とは書牘を巻き納め上は書名宛の左片を切かけになす故に稱す封は〆封なり

以下役に限り表に名宛を書し裏に局名を書す公用には狀袋を用る事なし

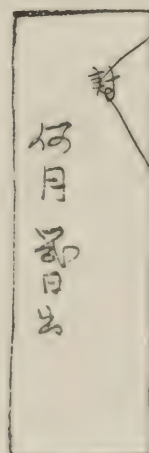
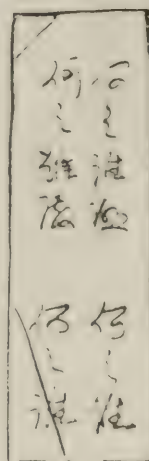
一諸苗片苗といふあり諸苗は苗字を全書す片苗は苗字の一字を書すたとへは水野大炊頭様を水　大炊頭様とする如し最敬の義也執政より頭役へ宛るにも何之誰殿水大炊頭とする也（御目付へも同斷）幕府閣老の例に准したるならん

一端作り（ハシツク）といふは用文之首尾文即以切紙云々依之如此云々等之事也月日の次端書の首に必す何々の字を付す何々の略字なり或は猶々とも書す（俗によし書と稱す）然れとも上官より下官に對しては總して字書粗略を用ゆるの例也御字に御[illegible]の別様字に様樣様[illegible]の差あり皆身分資格の上下に因て用を異にす

一諸局普通の文書皆鼠半切を用ゆ（鹿紙と稱す）召狀は白漉半（一本切紙）也（鹿紙の白色なるもの）御用召の辭令書は水戸半（一本切紙）に

認む（政府より御目付へ渡す）奉書紙は御口上書他向へ之書札本狀且目錄等に限る

一江紀諸局交通之公狀は本狀（君上の御機嫌且局中無異等の事を書す）と追啓書とありて用紙皆麁紙巨細の公務は此追啓書何通にも詳記双方の姓名を書込み折畳み半紙（又はみの紙）にて上は包をなし又油紙にて封鎖す即ち今の郵書也

書狀上は包

御家中文格

「〇」大目付御用人へ

一御城代大寄合大御番頭より　但御役名充之節は中名宛之節は様

以切紙令啓達候依之如此御座候

御切紙令拜見候御紙面之趣致承知候

召狀に進候節は御紙面之趣承知仕候と認名代等之儀相通し候節自分罷出候はゝ私罷出候と認

一御供番頭已上より　名宛之節様書

以切紙致啓達候依之如此御座候

御切紙致拜見候何々之品申達候御紙面之趣致承知候

召狀に進し候筋は承知仕候私罷出候と認

一大目付松坂御城代御勘定奉行御用人取替文格召狀に進し候筋之返書并身分に付申届候類右四役

も本文之通

一寺社奉行中へ之取替文格右四役同様

一兩御番頭より　名宛之節様書

以切紙致啓上候依之如此御座候

御切紙致拜見候御紙面之趣致承知候

一町奉行御廣敷御用人御附御用人より御用向様

以手紙致啓達候致承知候

御附御用人文格一通り頭役之通夫々持格之通之格

一頭役以上より　名宛之節様書

以切紙致啓上候依之如此御座候

御切紙致拜見候御紙面之趣承知仕候

一平士虎之間席以上より　同様書

以切紙啓上仕候依之如此御座候

御切紙拜見仕候御紙上之趣承知仕候

一右以下　御目見以上より　名宛之節様書

以切紙啓上仕候依之申上候

御切紙拜見仕候御紙上之趣承知仕候

片苗に認候得共已後諸苗に追て相極

一諸向より書付等差出候節都て差出候と認

「〇」御目付中へ

一重役以上且御用人より

依之如此候　端作りなし申越候令承知候

御目付中　様

召狀に准候筋は

御紙面之趣致承知候　又は奉畏候

但右之内御役人向も同様

一兩御番頭より　様

以手紙令啓達候依之如此御座候

御手紙令拜見候御紙面之趣致承知候

一町奉行御廣敷御用人御附御用人より御用向は　様書

以手紙令啓達候令承知候

一頭役以上より　様

以切紙致啓達候依之如此御座候

御切紙致拜見候御紙面之趣致承知候

一平士虎之間席以上より　樣
以切紙啓達仕候依之如此御座候
御切紙拜見仕候御紙面之趣承知仕候
一右以下　御目見以上より　樣
以切紙啓上仕候依之申上候
御切紙拜見仕候御紙面之趣承知仕候
一諸向より書付等差出候節都て差出候と認
一兩御番頭中より以下は都て御目付衆中と認之
「〇」松坂御城代へ諸向より
一大目付御用人等之文格同樣
「〇」勢州奉行へ三領諸役人より
一御目付へ之文格に准候樣　享和元酉十二月十八日
勢州奉行より
一勢州住御鳥見組頭等へ
向後　殿付　文政五午五月　根元覺
一勢州奉行文格之儀町奉行之振に可認
文化七午五月廿日

「〇」御廣敷御用人へ

一平士より御目付へ之文格と同樣之事　文政四巳七月朔日

一頭役より御目付中へ之文格同樣に極　文政四巳十二月十六日

「〇」町奉行へ

一頭役平士より各御目付中へ之文格同樣に極　右同斷

「〇」御年寄衆へ文通之節

一大御番頭は

片苗樣　封箱上書　諸苗樣

右以下御供番頭以上は都て

片苗樣文字

澁谷御家老も本文同樣　寛政九巳四月朔日

一兩御番頭以下

片苗樣文字　同十年十一月二日

一都て御年寄衆へ諸向より相達候手紙端作り認返書には被　仰聞儀御座候に付或は御書付落手仕候と認總躰文格麁略に無之樣認候事

但御年寄格之衆へも勿論本文同樣之事

寛政十午十一月二日

一御年寄衆御側御用人へ差出候書付切紙に申上候仕度候相伺候抔と認候樣

同十一未五月廿三日

（一本ナシ「〇」）御用人より諸向へ之文格

一御年寄衆へ
奉切紙之節
以手紙致啓達候依之如此候以上
尙々何々差上申候以上
樣書之節
以切紙啓上仕候依之申上候以上
右同斷
返書之節
御切紙拜見仕候依之御紙上之趣承知仕候以上
尙々何々御差越被成落手仕候以上
差上物之節　樣
以切紙啓上仕候何々御差上被成候に付遂披露候處御喜色之御事候依之如此御座候以上
被下物之節　殿
以手紙致啓達候何々可被下置と之依　御意如此候以上

尙々右何々爲持差上申候以上

一樣側詰御年寄衆へ

御觸之節　殿書

端作り無之何々之品被　仰出候旨誰殿被　仰渡候に付如此候以上

奉切紙之節　殿

以手紙令啓達候依之如此候以上

樣書之節　諸苗

以手紙致啓上候何々差進申候或は申達候相伺候被仰合被仰聞候樣存候依之如此御座候以上

返事之節

御手紙致拜見候依之御紙上之趣承知仕候

何々御差越被成落手仕候　寛政十二未年以前之極

一万石以上之樣側詰へ諸向より之文格加判之列同樣之事　天保五午十一月

一樣側詰にても兩家は御政事掛之通

一御城代より大御番頭迄

奉切紙之節　殿

以手紙申入候依之如此候以上

樣書之節

以手紙申達候何々御心得支配へも御達可被成候
申渡相達儀有之候間只今拙者共御役所へ御出可被成候

右樣書返事之節

御手紙令拜見候御申越之趣令承知候

一重役幷兩御番頭迄

殿書之節

端作り無之依之如此候

樣書之節

何々御心得御支配へも御達候樣存候以上

何々拙者共御役所へ御出候樣存候以上

一布衣以上幷頭役へ

殿書之節

端作り無之依之如此候以上

樣書之節

何々御心得御支配へも御達可有之候以上

何々有之候間只今拙者共御役所へ御出可有之候以上

但殿書之節は可罷出候

一兩御番頭以下頭役以上殿書之節御の字都て除尤御自分抔と認候處は其通り候事
一平士尤素袍以上共 呼出し等は被文字認不申
別紙之通被相心得支配へも可被相達候以上
申渡相達儀有之候間只今拙者共御役所へ可罷出候
一殿文字之事
殿　御年寄衆
殿　椽側詰御年寄御傅衆
　　御側御用人衆
殿　大御番頭迄
殿　兩御番頭迄
殿　頭役迄
殿　布衣以下
殿　平士素袍以上
殿　同以下
「〇」御目付へ御勘定奉行御用人より之文格
殿書之節
以手紙申達候依之如此候
樣書之節

以手紙申達候　御達
御申聞　可被成候以上

返書之節

御手紙令拜見候致承知候以上

召　狀

諸士一同跡目家督初役儀任免格祿昇進總て拜命の時の召喚狀を召狀と稱す勤仕之上に於て最重き事とし身分又は事項により品々區別あり概略左之如し

一大寄合以上へは加判之列御家老より召狀を付す

一右以下御側向奥役之外は以下役に至る迄一般御目付より付す

但組付配下之者は御目付より其頭支配へ付す

御側向は御小姓頭より奥役は奥掛り御用人より付す

一召狀に若し病氣難出候はゝ名代差出誰出候との儀可申出と端書に認加ふるあり之を名代付召狀と稱す左之事項之如き此類なり

養子　緣組　名跡　免不足被下　駕籠御免

諸御用掛り　横須賀組入　病氣御役御免願之者不　召狀不首尾轉役の事を稱す貶黜を意味するもの

一左之類は一旦召狀を付若し病氣引之時は更に名代差出誰出候との儀可申出と達す

十一歲より十五歲迄之者　五十年以上勤務之者　八十歲以上之者

一召狀は通して五半時に限ると雖も懲罰召狀は四ッ時也刑事は只今何處へ可罷出と認む
若山にては評定所江戸は御勘定所也事に寄御家老宅又は頭宅申渡あり
吉凶共に御用有之との一文例なれは何之御用たるは固より豫知しかたきも五半時とあれは安心を
なし名代付（養子緣組等出願之事あれは豫知し得るなり）或は四時とある時は痛慮措く能はさりし也

召狀文格

加判之列より菊之間詰御家老へ

以手紙申入候御用之儀有之候間明幾日五半時袴着御殿へ御出可有之候依之如此候以上

月　日

名代付之時は端書に

尙々若病氣御出難相成候はゝ名代御同席御差出可有之候以上

上

上は書

何の誰殿　　水野土佐守

用紙駿河半切　切かけ〆

同　大寄合以上

御用之儀有之候間明幾日五半時半袴着登　城可有之候以上

月　日

尙々若病氣難出儀も候はゝ名代差出誰出候との儀可被申越候以上

同斷一旦召狀付引之上猶又召狀付之節は

御用之儀有之候間明幾日五半時名代半袴着湊御殿へ可差出候以上

月　日

尙々誰出候との儀可被申越候以上

上は書用紙切かけ封共前同斷

御目付より諸向へ之召狀

御用之儀有之候間明幾日五半時麻上下着出殿可有之候以上

月　日

名代之節は端書に

尙々若病氣難被罷出儀も候はゝ名代差出し誰出候との儀可被申越候以上

上は書

御目付中

何之誰殿

身分により極り之端作り認む江戸にては出殿と書す用紙は白漉半切切かけ封〆

一一旦召狀付引之上再ひ名代召狀之文例前記大寄合之振に准す

一奧掛り御用人御小姓頭より之召狀も都て是に准す

右召狀請書

身分に寄り端作差別あれとも平士一般之例を示す

名代付節は端書に

御切紙拜見仕候御用之儀御座候間明幾日五半時廡上下着出　殿可仕旨御紙上之趣奉畏候以上

月　日

御目付衆中

何　之　誰

引之節は右請書之外別段に

以切紙啓上仕候私儀御用之儀御座候に付明幾日出　殿可仕之處病氣罷在候に付得罷出不申候依之申上候以上

奥掛り御用人連名にて之召狀なれは引届も連名なり

一右之通之處病氣快出勤いたし候はゝ其段可申越と御目付兩名にて可申越然る時は左之通及返事

御切紙拜見仕候私儀病氣快出勤候はゝ其節可申上旨御紙上之趣承知仕候以上

御目付中兩名樣

名代附召狀之節

御切紙拜見仕候御用之儀御座候間明幾日五半時廡上下着出　殿可仕旨若病氣等にて難出候はゝ名代差出し誰出候と之儀可申上旨御紙上之趣奉畏候私罷出申候以上

一右引之時は

前文之通不殘受奉畏候私病氣罷在候に付名代何之誰差出申候仍之申上候以上

一忌中之時は左之通認め名代差出に不及引切之事

右同斷奉畏候私儀忌中罷在候間罷出不申候依之申上候以上

忌中なから出勤之內召狀幷呼出し之切紙到來之節返書振等御目付中へ問合右は召狀幷御呼出しは奉畏候旨返書差出置猶又忌中罷在候處此節御用多候に付御役所（且役所之認）へ出勤仕候段頭支配へ相屆候樣左候はゝ右屆を以差圖可有之由被申聞候事

一組付等之輩請書

御奉書拜見仕候私儀御用之儀御座候に付明幾日五半時麻上下着出　殿仕候樣御目付中より申參候間可奉得其意旨御紙上之趣奉畏候以上

月　日　　　　姓　名

何之誰　樣

但諸苗にて上包半紙自分持參

御請書　　何ノ誰

右請書は用紙總て駿河半切　切かけ〆封なり

改正文格

明治二年二月國政大改革に付從前の文格を廢し更に三等文格を定む

三等文格

第一等	第二等	第三等
申上候以上 差上候以上	申進候以上 差進候以上	相達候也 差遣候也
承知仕候以上	致承知候以上	令承知候也
其御許	御自分	其許
私	拙者	我等
可被成奉存候以上	可有之候以上	可取斗候也 可相心得候也
殿 御中	殿 中	殿 中

一都て往答端作無之奏判共同任之向は互に第二等文格可相用筈候得共自ら長屬之分有之筋分隊長之隊長に於ける兵の伍長に於ろ如きの類は同任同位たりとも一等上けの文格可相用事

一進達書は第一等文格相用〆封之分は是迄之通印封之分は雛形之通可相認事

一〆封書通は廳幷何掛り宛等にて往復不苦候得共印封之分は苗字何官又は何官と可相認事

進達
苗字官 又は何官

奉書半切

御用候條明幾日「之儀御座に候付」

何時式服着藩廳へ「可仕旨承知仕候以上」

出頭可有之候也

知事「官苗字名」

月　日

苗字何參事殿「知事御中」

上包みの紙

御　受

上に同

苗字官

同

同

右御用候條明幾日何時式「之儀御座候に付」

服着藩廳へ出頭候樣可相「可仕旨承知仕候以上」

達候也

知事「官苗字名」「何官」

月　日

苗字何參事殿

何官中「知事御中」

文格略表	相當從三位	同正從五位	同正從六位	同正從七位	同正從八位	同正從九位	同大少初位
「相當從三位」		第一等「第三等」	第一等「第三等」				
「同正從五位」			第二等「第二等」	第一等「第三等」	第一等「第三等」		
「同正從六位」				第一等「第二等」	第一等「第三等」		
「同正從七位」					第二等「第二等」	第一等「第三等」	
「同正從八位」						第二等「第二等」	第一等「第三等」
「同正從九位」							第二等「第二等」
「同大少初位」							

表中文格等級外之下士官より上官へ書面差出候節は第一等之文格にて何官御中御許苗字何官殿御許へと可相認事

一執政參政知局事應答文格

明治二巳年二月公用知局事より執政へ伺濟極

執政衆へ　七局知事より之文格

諸名様　端作り無之　仕候　申上候

參政初七局取遣之文格

諸名様　端作り無之　致候　申進候

一大小參事初取遣文格改正

明治二巳年九月　天朝より被　仰出執政參事知局事之職名被廢是迄之格式席順等之制をも都て

被廢に付同十一月十八日政事廳より達

諸局取遣以來左之通相認候筈

大參事衆中　　何局　參　事

政事廳參　事　中　　何局　參　事

何局　參　事　中　　政事廳參　事

大　參　事　様

以下取遣都て様

一同日公用局參事より達

參事より判事幷同試補へ之文格

相達候　　何判局御中

申達候

令承知候　　殿

參事へ判事幷同試補より之文格

御達申候
承知仕候　　　　　　　　　　　　　　　　　　様
判事幷同試補より書記へ之文格
相
中達候　　　　　　　　　　　　　書記中
致承知候　　　　　　　　　　　　様
（一本アリ參事へ書記より之文格）
中上候
承知仕候　　　　　　　　　　　　様
判事幷同試補へ書記より之文格
御達申候
承知仕候　　　　　　　　　　　　何判局事衆中　様
判事幷同試補より右同役へ取遣之文格は參事同士取遣之文格同樣右以下取遣も同樣之事
一同官同姓之輩文通等の節官姓認方伺の處官名の下へ實名可認差圖ありたる事職制明治三年三月の條に記す

御家中系譜

上下諸士之家筋に於ける駿河にて　神祖より龍祖へ被爲附紀州へ陪從したるを御附人又は駿河越家筋と稱す（御附人に無之とも駿河より御供の家亦駿河越と云）諸家に歷仕武功有名なる又は古來歷々の名家にして御家臣となりしを舊家といひ紀州御入國後　龍祖御代に被召出たるを　南龍院樣御代被召出家筋と稱し御二

世以下新進之家を新家と唱ふ駿河越及ひ　龍祖御代被召出之家筋は子孫容易に斷滅せしめ給はさるの御家法にして特殊の恩典を蒙むる事祿制永世御法に記載の如し　龍祖の御時は無論爾來諸士家筋武功等之吟味頗る嚴格にして國中在々地士舊家の家筋迄普く審査を遂けられし事一再ならす中古　香嚴公には（安永五年也）昇平年久數盛衰浮沈之間には先祖傳來之武器甲冑御朱印感狀系圖舊記の如き遂に遺逸散亂の虞なきに非すと特に駿河越舊家之系譜及ひ舊記の謄寫を徵集し給ひ保管の事共懇々の諭命ありたり又　舜恭公の時寛政十一年閣老松平伊豆守より御三家方へ（神君より）御附屬之萬石以上以下共の家譜可差出旨布告ありて詳細に調査同年六月十五日二百八十一名の家譜を幕府へ提出せらる事は同年の世記に詳なり之に限らす諸士新古に不拘家督跡目乃至懲罰等總て家名に關する審理は必す其家譜に基へき原則とす故に政府には御家中一般之系譜已に家々數代の分を合綴いろは分けとなし悉く保管しありて其容積實に充棟啻ならさりし也

一諸士代替り即ち家督跡目拜命之上は直ちに從來提出しある系譜へ父一代の譜を加記し親類書（新代之親族書也）を添へ政府へ提出する成規なり從來は先祖書と稱し先祖及ひ曾祖父已來の譜に止り簡略なりし處　舜恭公之時より先祖已來代々の譜を明記し系統を朱線し系譜と稱し親類書を付する事になり且つ職名辞令文段等往時々々の現在記に係る分を悉く當時の躰裁に引當て訂正すへきに改めらる（たとへは御藥込頭とあるは御廣敷御用に改め奉行被　仰付とあるは御勘定奉行被　仰付と遣し又何々樣御附被　仰付とある既に過去の御方に屬すれは御謚號に改め書し其他辞令文段に往々新古異同ある分皆當時の躰裁に引直すなり）依て諸士已人の手許にては到底識別する能はさる故先つ案書にて出さしめ政府にて訂正付箋をなし下付す之を美濃紙に淨書し再ひ提出以て政府に保管する法也其書文例巨細一定の式法あつて纏述す

へからさるも大略左記文案を標準としたる也

系譜親類書文案

系譜

何姓　何氏　家紋何 替紋何 幕紋何

何某實名何代

何誰　總領 二男　始某 又某

元祖　本國何國 生國何國　何某實名　隱居仕 某

一遠祖より元祖迄之由緒簡易に書載すへし

一年號干支年何月幾日（或年月日不知）さなた樣へ被　召出知行何程被下置何御役相勤申候（或はさなた樣へ被）　召出知行何程被下置

さなた樣へ被　進何御役相勤申候

一年號干支年何月幾日（御加増御足米）何程被下置候

一年號干支年何月幾日何之御品拜領仕候

一年號干支年何月幾日何御用被　仰付候

一年號干支年何月幾日隱居被　仰付（嫡子總領）某へ家督して（知行御切米）之内内程被下置何御役被　仰付殘高何程爲隱居料某に被下置候

一年號干支年何月幾日病死仕候于時何十歲

某實名　實子 養子
養子に候はゝ
實何某實名幾男

一二代目　生國何國

何　某　實　名
脇書同

一年號干支年何月幾日父某爲家督知行 御切米何程無相違被下置何御役被　仰付候
一或は年號干支年何月幾日部屋住にて被　召出知行 御切米何程被下置何御役相勤申候
一年號干支年何月幾日御加增 御切米何程被下置誰跡何御役被　仰付候
一年號干支年何月幾日病死仕候于時何十歲

一實名二男　何　某　實　名

一三男　四男同例

實名女子　何　某　實　名　妻

一實名長男　何　某　實　名

年號干支年何月幾日部屋住にて病死仕候或は病身に付奉願退身仕候

實名女子　何　某　實　名　妻

一三代目

實名總領實二男
何　某　實　名

年號干支年月日總領被　仰付候

…………

…………

實名二男　何某實名

實名女子　養子何某實名妻

四代目　養子總領 實子　何某實名

年號干支年月日誰養子被　仰付候

此末前文之趣を以親之代迄可相認

〔　〕

系譜　何某〔　〕

認終紙替之方

へ下之通認

年號干支年何月

何某 印判 實名 書判

一御當家御代々樣幷　御家御代々樣へ御奉公之儀は軍功迄委く可相認事

一格別の拜領物　御署等は家之美目に存候儀は簡易に書載除加疑惑儀は先可書出之事

一碑銘幷著述或は格別の行狀等留扣有之分は別帳に可書出事

一総領被　召出部屋住にて相勤有之向は系譜差出候に不及親類書は差出候事

一代替之節親之代之儀認加引替に可差出事

一都て勤書等御役名御改正以前之被　仰付にても當時へ引直り候御役名に相認候事
御方々様御附屬被　仰付之儀も勤向等差出候節之　御稱號を相認可申事
但當時之御役名を相認候儀若疑惑之儀も候はゝ可相伺事

一年號之儀は改元之日限に應相認可申事

一親類相違有之向は其節々不及相違親類書認直し毎年三月中に引替可差出事

一系譜は先下帳にて差出相調候上本　に認直し差出候筈に付下帳は半紙へ認

一本家　公儀又は左京大夫様に相勤有之　御家にては分家にて相勤且本家斷絶分家相續之筋
何代目より分家に相成候とも認振前段に准す

一親類書案
上書

親類書

何役
何　某

親類書

一祖父　何　某　死

實は何にて御座候得共私儀誰（兄と／祖父）承祖と相成候に付祖父或は何之續相成申候

一祖母　何　某死　娘死　或は家女

一父　何　某　死

一母　何　某　娘　或は家女

一妻　何　某　娘／姉妹／伯母

一總領　或は養子　………………

一御目見否

一次男　誰養子　………………

一三男　………………　私手前に罷在候

次男三男他名相名乘候はゝ何故他名相名乘申候

一娘　………………妻

一同　何　人　私手前に罷在候

一嫁

一孫　他家之孫に候はゝ誰總領　………………

一兄
一弟
一姉
一妹
一伯父
一伯母
一甥
一姪
一從弟
一同女

母方

右同例に認
養子に候はゝ

實方

誰養子
誰總領 ……
…… 私手前に罷在候
…… 妻
…… 私手前に罷在候

無足に候はゝ
誰總領
誰養子 ……
…… 妻

誰總領
誰養子
誰幾男 ……
…… 妻娘妹

右同例 ……
妻之外は誰手前に罷在候
…… 妻姉妹
姉妹片付無之候はゝ兄弟手前に罷在候

右同例
父養子に候はゝ
父實方
自分養子にて實父養子に候はゝ
實父實方幷實母方
父も養子其身も養子に候はゝ
養父實方　祖父母幷從弟等有之候はゝ認出す
右いつれも前段同樣
右之通御座候以上

年號月　　姓名印判書判

一妻家之娘に候はゝ養父誰娘と認候事
一緣組願相濟無之妻は家女と認候事
一養子等は何某二男三男弟抔と其節之姿を認候事
一養子等之譯にて兩樣之續に相成候筋は朱丸之趣を以小書いたし候事

御禮廻勤

諸士職務拜任格祿昇進家督跡目相續養子緣組其他都て拜命の事あれは御家老（加判之列）御側御用人（時として欠役也）等之邸宅へ即日巡廻辱きを拜す之を御禮廻勤之一事とす命之輕重によりて次第あり故に此制を設く蓋し幕府御老中若年寄へ廻勤之例に準したる也

月番御年寄とある外はいつれも總御年寄へ廻勤頭支配へは何等に不拘都て廻勤す御役替と稱する廉には總御用人同僚等へも必す廻勤する之慣例也廻勤には上下資格に應したる正式之供連をなし小祿之平士も若黨鎗挾箱草履等を召連親戚知己へ迄悉く巡廻恩命を報し當夜は祝宴を設け僚屬親故を招き盛に賀盃を擧け獻酬狼藉歡を盡す事一般之風習たりしか嘉永安政已後之騷擾と節儉令の屢々なる等にて奢驕の弊風は軟跡を歛むるに至れり

御禮廻勤極

一 御役替格式
御加增御足之高
御醫師法橋被　仰付候節本文同樣
右御年寄衆御側御用人衆其外支配々々へ廻勤

一 父有之輩は父も同斷
但養子に遣し候子跡目等被　仰付候節は實父御禮廻勤に不及

一親結構被　仰付候節被　召出有之子不及御禮廻勤

一子結構被　仰付候節親隱居御禮 隱居たり共當人同樣廻勤之筈

一他國之親　名代を以致廻勤候筈

一嫡孫家督跡目其外御役替等之節隱居致し居候祖父御禮廻勤には不及事

一名代を以蒙　仰候節

御禮廻勤之儀も名代を以申上候と之趣一と通年寄衆へ申上候上御禮申上候筈

右之通候處承屆候上申上候に不及旨極り直候事

一御禮廻勤之名代

御目見相濟候總領差出し不苦事

一但奥役之輩たり共同前之事

一重役嫡子頭役幷平士總領之差別無之

一同樣勤之御禮は月番御年寄衆幷御側御用人衆へ不殘罷越候事

一實父御禮　養子に遣し有之仁御役替跡目等之節養子之實父は御禮に不及

一被召出　御役替同樣

一家名御立　御尋之節一類御禮

　御禮廻勤に不及事

但家名被　仰付候仁は月番御年寄衆御側御用人衆不殘へ罷越候筈

一厄介被　召出厄介親御禮廻勤
　月番御年寄衆御側御用人衆へ罷越
一悴御伽被　仰付親へ被　仰渡御禮
　一御役替之節之通
　　但當人は御小姓被　仰付候節之通罷越候筈
一總領へ御銀御扶持方被下御用部屋書役同樣勤被　仰付候節親子御禮
　御役替之節同樣
一家督隱居　御役替
一親跡目小普請　家督同樣廻勤之上相愼居候筈
一跡目之節助役其儘
　助役被　仰付候御禮分けて不及其儀事
一養子　御役替同樣
　一養子之實父頭役は月番御年寄衆平士は夫々支配へ罷越
　一養子被　仰付候節養父之父勤居候はゝ月番御年寄衆斗へ御禮に罷出
一次男三男を總領　養子と同樣
　一末期養子　養子と同樣
一名跡

名跡等之節養子之實父は御禮に不及

一末期名跡被　仰付候節仰畏り候　御役替同様

一類御禮

但一類御目見以下にても年寄衆御宅へ罷出御禮之筈

一嫡孫承祖被　仰付候向も右同様

一養子内存之者
御尋　御禮に不及

一御目見以下聟養子
頭支配へ罷越

一養子戻し願濟
兩月番御年寄衆へ罷越

一養女　双方共月番御年寄衆御側御用人衆へ罷越
但他所へ之養女願濟は御禮に不及

一御屋敷同士養女願濟は御禮に不及

一實子を養子之養子に願濟
實子有之處虚弱にて養子致し候處丈夫に相成候家之血脉にも候間養子之養子本願候節御禮月番
御年寄衆斗

一他所よりの養女御禮に不及
一緣組　御年寄衆御側御用人衆へ罷越
一緣組願濟にて頭支配申渡
　月番御年寄衆へ計
一以下役緣組願濟頭支配申渡
　月番御年寄衆へ罷越候に不及一方以上にて御年寄衆へ罷越候得共以下役之方は罷越に不及
一初ての御目見　御役替同様
　但總領二男初て　御目見も同様
一御目見致し候者之親御禮廻勤之節も服紗半袴
　但親差合有之名代を以御禮廻勤之節も衣服差別無之
一江戸詰之輩總領若山にて　御目見相濟候節承知之上江戸にて廻勤之筈
一隱居家督跡目之御禮　御役替同様
　但隱居之御禮御勝手濟の節も本文同様
一御役儀之御禮申上候節　月番御年寄衆へ斗へ罷越
　但御加增之御禮申上候節も右同様月番御年寄衆へ斗罷越候て可然旨奧御右筆より挨拶有之事
一御目見以下廻勤　月番御年寄衆へ斗罷越候筈
　但御側御用人衆時に寄欠役に付是迄御同役衆へ斗廻勤之向者は本文之通

一以下役御役替又は御勘定奉行支配小普請被　召出候向御年寄衆御一統へ御禮に罷越候筈

一御目見以下病氣等にて名代にて御禮廻勤不苦事

一稽古料被下

右御目見以上總領并頭役次男三男は御年寄衆御側御用人衆御小姓頭之御用人へ罷越

一平士之次男以下役之忰は御側御用人衆并御小姓頭之御用人へ罷越

一親之御禮　親衣服半袴

御目見以上は月番御年寄衆御小姓頭之御用人へ罷越

一兄之御禮

兄之手前に罷在候弟稽古料被下或は被召出等之節右兄御禮は親同樣

一流儀引立　月番御年寄衆御側御用人衆へ不殘罷越

一家業出精に付御扶持方被下　其身父共廻勤致し候筈

一兼帶　寄合大御番格小普請より出役

出役　御役替同樣

右に付親隱居は御禮に不及親相勤候ても御禮不及

一中合勤　被仰渡之御側御用人衆へ斗罷越

一見習勤より當加番　右同樣

一御用之節御廣敷へ罷出

御側御用人衆幷御用人衆へ罷越御廣敷御用人へは自分心得にて可罷越
　但御用の節御廣敷へ罷出大奥へも罷出右は通し元へ可罷越
一鉄砲之儀肝煎　月番御年寄衆へ罷越
一奥詰　右同様
一取締頭取　御用番へ
一御勝手掛　兩月番御年寄衆幷御側御用人衆へ
一兼帶　月番御年寄衆幷月番御側御用人衆へ
一御庭御用　月番御年寄衆被仰渡之御側御用人衆へ
一當分勤　月番御年寄衆へ斗
　兼帶被　仰付
　候節親御禮　御禮廻勤致候筈
一御書物方頭取　月番御年寄衆へ斗
一御締方　筆頭御用人へ
一大御番頭御供番頭
　披露助　月番御年寄衆へ罷越
一當分御供番組頭助　同斷
一當分御勘定奉行差圖受勤　御禮に不及

一御在府中助勤　　通し元へ罷越

一寄合幷小普請より　　月番御年寄衆へ罷越御側御用人衆へも
加役助勤

一御給仕肝煎　　月番御年寄衆へ

一學校　　御表御側御用人衆不殘へ罷越學校掛り之衆へは勿論罷越候筈
中合勤　　且親も同樣廻勤之筈

一通官助　　學校掛御用人へ

一講釋等儒者同樣　　月番御年寄衆學校掛御用人へ
打込勤

一御供御免　　兩月番御年寄衆へ斗

一奥御供頭役被　仰付　　被　仰渡之御側御用人衆月番御年寄衆へ

一常御供被　仰付　　月番御年寄衆幷御側御用人衆へ不殘廻勤

一嫡子御鷹野御供　　御禮に不及

立歸御供被　仰候面々　　右同斷

一無足地廻り御供　　當人は月番御年寄衆御側御用人衆幷御用人不殘へ親は御側御用人奥掛り
へ罷越

一御使番代り御時宜勤　　月番御年寄衆へ斗

一御褒美　　御用番御年寄衆幷支配へ御禮に罷越

一御供弓之仁鳥射留に付時服被下候節

一及百歲候に付御銀被下　　月番御年寄衆へ

一及八十歳候に付御賞頂戴　御役替同様
御加增被下候付
一知行目錄頂戴　　月番御年寄へ
　但御切米を地方に被成下候筋或は跡目割替目錄も同斷
一知行免不足被下　被仰渡之御年寄衆罷越平士は御年寄衆幷通し元御用人へ罷越
一知行當所務被下　月番御年寄衆幷支配有之面々支配へも罷越
　但名代にても同樣
一御免
一御普請役　御免　御役替同樣
一乘輿駕籠　御免　被　仰渡之年寄衆へ斗
一月切駕籠　御免　御禮に不及
一御番
一皆勤に付御銀被下　御役替同樣
病氣に付奉願
一御番御免　御役替同樣
弟子取扱に付
一同斷　月番御年寄衆幷御側御用人衆へ
一宿御番御免　同斷

一無足遠侍御番　月番年寄衆御側御用人衆幷御用人親は御側御用人衆奥掛りへ

一御役御免

頭役平士御役

御免寄合或は何小普請さ被　仰付候節

但被仰渡は名代へ被　仰渡濟候上當人廻勤之筈

一御目見以下にても同斷

一不心得に付御役御免寄合被　仰付候筋も同斷

一親跡目小普請被　仰付候筋は直に家督同樣廻勤之上相愼候筈

一常詰御免　月番年寄衆へ斗

一御救扶持　御役替同樣

一御赦免

一嫡子相愼せ差置候儀御免　月番年寄衆御側御用人衆へ

一屹度押込　御免　同斷

一悴徘徊御赦免　親御禮被仰渡之年寄衆へ

一雜

一御役替等にて御禮廻勤之節痛所等にて名代を以廻勤候得共追て當人快氣之上分けて御禮廻勤不及事

一結構被　仰付候面々御禮廻勤之儀年寄衆之内御忌中之方へは御禮に不罷出御忌明後も御禮は流

に相成候事

一御用不相達年寄衆へは廻勤に不及筈

一都て御禮廻之向江紀共年寄衆留守屋敷へは罷越候に不及候事

一御用御取次宅へ奥役之輩御禮廻勤有之事

一蒙仰未廻勤不致内忌中に成候得は忌明之上御禮廻勤有之事

但忌明之上廻勤之節其段支配より表御用部屋へ申出表御用部屋より政府へ申上候筈

一被仰渡之節　御目見以上之名代に以下役は不相成御禮廻勤には　御目見以上之名代に以下役不苦事

一御禮廻勤名代親類之無足御目見相濟仁差出不苦

天明二年八月

一以下役之面々御役替之節爲御禮御年寄衆へ罷越節帳前にても刀を帯候由之處自今は玄關にて刀を抜上り候樣御年寄衆被仰聞候

享和三亥年九月十七日

一御法事御用掛り勤番被　仰付　御年寄申渡候向は月番御年寄へ

慶應丙辰年四月十一日於江戸御家老より布達

一當分御役替等之節御禮廻勤に不及表御用部屋へ罷出御禮可申上事

維新後

明治二年年三月晦日政事廳より

一拜任等之節參事以上は知事樣へ御禮申上右以下は夫々支配迄御禮申上候筈候事
　家督跡目諸願濟御禮申上之儀も本文之通候事

途中出會

○傳奏其外公家衆日光御門主途中行逢心得

一攝家親王方途中にて見掛候はゝ成丈脇道へ外し無據出會之節は供を落し駕籠を居會釋に不及事但脇道横町等へ外し候はゝ供廻り操込み駕籠後ろ向爲鉤鑓も伏に不及先方へ見候ても不苦候事兩本願寺も同斷無據通り違之節は片寄御障不申樣致候事

一傳奏衆其外公家衆出會之節稱も無之候得共片寄候て供廻り等相障り不申樣致候事

一日光御門主途中にて御見掛申候節成丈け外し御通過罷在候事

一御三家方御三卿方途中御逢被成候節御規定并扣程合先拂致見合下乘下馬致し先挾箱にて立留長刀にて下へ居御通行之節致御時宜候事

一同斷之節雨天に候得は手傘相用長刀見受候て傘脇へ差置御通行之節御時宜いたし夫より傘相用候事但合羽はぬき申候裏付相用候事川向或は割下水抔之節は下に居御時宜は不致候事御會釋之節鎗箱伏せ不申候事但供鑓箱は下に置候事

○御茶壺日光久能御鏡等行逢心得

一右行逢之節は建場にては見合自然野邊抔之節は乘物居置御茶壺或は御鏡通り過候て罷通り候得共旅行差支に相成候間已來は片寄召連候者笠取罷通り候樣致度旨伺相濟尤道幅狹く或は山坂等にては乘物扣候樣且亦乘掛駄荷等は場廣之處へ相扣右通行過罷通候樣候事

寛政十午年七月被　仰出候

一御客衆其外使者等入來之節歸之節幷年寄衆初御役人往來之節大御門番所にて柏子木打候間往來之者心得柏子木打承り候はゝ喰違外に扣罷在候樣召仕之者へも篤と申付他所より參り候輩へも心得させ候樣可被致事

中之口御門にても柏子木打候間同樣爲心得可申事

江戸表御門御白洲通行路の南北に喰違ひに高坂塀を設け開閉の仮扉を仕付あり柏子木の音を聞けは雜人等は喰違塀の所に扣へ居て通行を見合す所謂制止の事なり

同年十一月十一日

一年寄衆初都て駕籠幷馬上之節行逢候共御目見以上之面々會釋不及事

御目見以下之面々は是迄之通相心得可申事

寛政十二申年三月廿六日

一御目見以上之面々途中にて　尾水樣三卿樣へ御辭儀致し候節鎗伏候儀是迄班々に有之候處向後鎗ふせ候に不及候事御供之節は御互に伏候事

文化二丑年八月晦日被　仰出候

一御目見以上之輩於殿中年寄衆御側御用人衆へ御會釋振之儀於板御廊下は途中にて御會釋いたし候通に相心得上草履用罷在向は其儘にて致御會釋候樣爲心得可申旨年寄衆被　仰聞候事

同三寅年二月九日被　仰出候

一殿中にて御目見以上之輩へ御年寄衆御會釋振之儀以來別紙之通相極候旨年寄衆被　仰聞候

御座敷向にては重役以上御番所之外着座之前にては膝を突時宜いたし候事

一行逢之節先方着座之時宜に不及片寄時宜いたし候事

頭役以上御番所之外着座之前にては一寸折敷疊へ片手附候位に致時宜候事

一行逢之節先方着座之時宜に不及重役に准片寄扣時宜いたし候事

御目見以上御番所之外着座之前にては一寸中座會釋いたし候事

一行逢之節先方着座時宜可致候に付此方にては銘々心次第に致會釋候事

一御玄關向板間にても同斷

都て御番所へ着座之面々は頭役平士共不及兩手を突罷在候事此方も不及

一御前へ罷出候節御次に相詰候面々も前段御番所向に着座之向と同樣之事

一板御廊下にて會釋之儀は去年申極候通

年月不知

一御年寄衆御側御用人中御用御取次中若山にて登　城之節御門にて留り候段申候とも　御目見以上は其儘通行御出合申候節見合扣居會釋候事

安政四巳年三月十四日御家老より於江戶

一近比馬上等にて往來之向も多候處我々共初へ於途中行逢之節自然無禮之向有之候ては他之見込も不宜候間向後左之通相心得可申事

我々共駕籠幷馬上之節とも　御目見以上之面々駕籠にて行逢候はゝ片寄扣戶を引會釋可致事

一馬上にて行逢候節も同樣扣居笠を取り其儘會釋可致事

一我々共步行之節は勿論下乘下馬之上會釋可致事

但御屋敷內外之差引無く忍ひ之節は會釋に不及

一以下役之儀は是迄之通り相心得無禮に無之樣慇懃に可致事

維新後

明治三午年五月廿五日政事廳より布達

一途中乘馬之向向後至急御用幷出火非常之外市中村中にては早乘不相成候事

御用之品柄に寄早地道迄は不苦だ具足は緩急に不拘早乘に屬し候事

右壹通

一近來乘馬之輩猥に市中村中早乘致し往來之者迷惑及はせ怪我致させ候儀も有之以之外之事に候市中等早乘之儀は前々より御制禁に候處猶又此度改て被　仰出候條若心得違早乘いたし候者於有之は可及沙汰事

一徒行與馬禮節

明治三年年七月十二日政事廳より達

一徒行輿馬禮節之儀向後表之通被　仰出候事

七月十五日より九月八日迄習禮中と相心得精々致習熟同月九日より嚴重相心得可申事

一凡て同位の向は互に輕禮を行ふ筈に付彼徒行にて我輿馬に候はゝ下馬下乘可致事

本文之通候得共正從大少之差等有之向は下階の者禮を行ふを見て上階之者之に答ふへし大隊長の聯隊長に於る分隊長の其小隊長に於る下司の其下司長に於る戍兵の其伍長に於る如きも互に輕禮之差候得共我隊に於ては長屬の分あるを以て平禮を行ふへし其之に答るは輕禮之筈

一正九位以下之正從七位に於る下馬不致筈に候得共若一局を總括する者幷聯隊長大隊長に於ては其之に屬する正九位以下之者下馬之筈候事

一駕籠之儀は相當正七位以下不相成候若病氣等にて歩行難相成節は不苦事

但駕籠之節從五位以上之官人に行逢候はゝ偏倚駕籠を居へ病氣之旨家來を以彼之家來迄相斷せ可申正七位以下之向へ行逢候はゝ同樣相斷行逢不苦候事

一諸官試補幷當分勤等之向禮節之儀本官に准し可申事

一若武官兵隊を卒ゆる時は其禮節左之通可相心得事

凡兵隊を卒ゆる者と禮するの法文官武官を不論班位己より上なる者には右手を擧て額と齊す若サーフルを帶する者は捧劍之禮を行ふ下なる者には右手を微擧す若サーフルを帶する者は之を微擧す同等之禮は互に微擧す

但知事の相當正七位以下に於ける之に目肯し正九位以下に於るは之に答禮せす參事の正九位以下に於ける亦之に目肯す

一武官隊を卒ゆる時文武官人之班位己より上なる者に遇時は其人兵隊を卒ゆると不卒とに不拘歩兵隊は肩銃左眼之二令を下し自ら捧釼之禮を行ふ部下之士官之に同ふす若銃を不携時は肩銃の令に代るに準へ之令を以てすへし伍長の下司長に遇時は唯準へ之令を施し肩銃左眼之令を下さす騎兵隊は氣を附の令を下し槍を高擧す若し槍を不携時は右手を直垂す其余歩兵隊に同し砲兵隊輜重隊之禮其法歩兵隊に同し工兵隊は空手を直垂す其餘の所歩兵隊に同し

但知事並戍兵都督同副都督に遇ふ時は本文號令を施す前へ足踏之令を下し自ら其前に到り騎馬重禮を行ひ通行之仔細を述へ教を請ふ其他の文武官人なる時は班位己より上なる者と雖も之を行ふに不及事

一班位同等之者に遇ふ時は互に禮を行ふへし同等にても若小隊長以下にて我れ隊を卒ひ彼れ隊を不卒時は彼我互に禮を爲し部下之士卒禮を爲さす

一班位己より下なる者に遇ふ時は彼れ禮を行ふを見て我れ禮を爲すへし

一武官隊を卒ゆる者皆馬を下らす塘騎（モノミ）令旗（ツカヒバシ）の類軍騎と雖も亦之に同し

一官人微服之節章服を着せる友人に行遇ふ時は位階の高下を不論非役有位之者官人に對する法に依るへし

一非役有位之者途中諸官人に對し都て途を譲り可申候己より上位の者へ對し停歩幷下馬乘之儀は官人禮節表之通相心得可申候然れ共禮節は互に無之筈に候事
一士族初農工商總て藩內の人民途中にて官人に行遇之節扣振左之通相心得可申事

下ケ紙

神職僧徒身分之儀は追て相達候迄是迄之通に付本文同樣相心得可申事

相當從三位以上へ　見通しより偏倚下座可致事

下ケ紙

病氣等にて駕籠乘候節從六位以上之官人へ行逢候はゝ本文に准し偏倚駕籠を居病氣之旨附屬人を以供中へ斷らせ可申事

從三位以上へは見通しより偏倚可申筈

同　從六位以上へ　偏倚可停步事

同　從七位以上へ　途を譲り行違不苦事

一士族士族並乘馬之節は徒行の扣振に準し相當從三位以上へは偏倚下馬下座從六位以上へは偏倚下馬停步正七位以下へは途を譲り行違不苦事

七月十二日

同日
一官人章服着用不致節は行違候共不苦候得共其官人たるを知れは成丈路を譲り不敬ヶ間敷儀無之樣可致事

六等禮節表

目肯	注目也（メナツケル）
首肯	頷也（ナウツク）
輕禮	俯首至膝也（ウツムキテナスネノウヘマテサケル） 騎馬之節 左手併轡右手着膝に俯（タツナナヒトツニモチ） 乘輿之節 手着膝に俯（スコシウツムク）
平禮	俯首手至脛也（ウツムキテテナスネノシタマテサケル） 騎馬之節 左手併轡右手鞍中俯 乘輿之節 指着席中府（ユビナツキナカハウツムク）
重禮	俯首手至跗也（ウツムキテテアシノコウマテサケル） 騎馬之節 左手併轡右手着鬣大俯（タテカミニツケウツムク） 乘輿之節 手着席大俯（テノツキウツムク）
稽首	首習地也（ヘイフク）

徒行輿馬禮節表

墨書行札　朱書答札

	相當正從五位	同正從六位
相當從三位	五歩前偏倚歩を停め正面平禮「首肯」 五歩前偏倚輿馬を停め輿戸を開き平禮 「輿馬不停輿は戸を半開」「首肯」	同前「同前」
同正從五位		途を讓り平禮「輕禮」 途を讓り輿馬を停め輿は戸を開き平禮 「輿馬を停め輿は戸を開き」「輕禮」
同正從六位		
同正從七位		
同正從八位		
同正從九位		

同 正従七位	正従八位	同 正従九位	同 大少初位
十歩前偏倚歩ヲ停メ正面重禮「目肯」 十歩前偏倚馬ヲ下リ正面重禮「輿馬ヲ不停輿ハ戸ヲ微開シ「目肯」	同前「同前」	二十歩前偏倚歩ヲ停メ正面稽首「答禮ナシ」 二十歩前偏倚馬ヲ下リ正面稽首「同前」	同前「同前」
五歩前偏倚歩ヲ停メ正面平禮「首肯」 五歩前偏倚馬ヲ駐メ平禮「輿馬ヲ不停輿ハ戸ヲ微開シ「首禮」	同前「同前」	十歩前偏倚歩ヲ停メ正面重禮「目肯」 二十歩前偏倚馬ヲ下リ正面重禮「輿馬ヲ不停輿ハ戸ヲ微開シ」「目肯」	同前「同前」
五歩前偏倚歩ヲ停メ正面平禮「輕禮」 五歩前偏倚馬ヲ駐メ平禮「輿馬ヲ不停輿ハ戸ヲ半開シ「首肯」	同前「同前」	五歩前偏倚歩ヲ停メ正面重禮「首肯」 五歩前偏倚歩ヲ停メ正面重禮「輿馬ヲ不停輿ハ戸ヲ微開シ」「首肯」	同前「同前」
	途ヲ譲リ 平禮「輕禮」 平禮「輕禮」	五歩前偏倚歩ヲ停メ正面平禮「首肯」 五歩前偏倚馬ヲ駐メ平禮「首肯」	同前「同前」
		五歩前偏倚歩ヲ停メ正面平禮「輕禮」 五歩前偏倚馬ヲ駐メ平禮「輕禮」	同前「同前」
			途ヲ譲リ 平禮「輕禮」 平禮「平禮」

明治三午年七月十四日
一武官章服の節文武官人行禮之儀隊伍にて通行之節に無之候はゝ帽を脱し可申事
同月廿八日公用局より政治廳へ伺之處朱書之通指令之旨同局より布達
一此度禮節之儀被仰出候に付左之條々相伺候事
騎馬之節下馬稽首重禮行候儀若口附無之時は如何可仕哉
「市中村中は口附有之筈候得共若し口附後れ候節又は野合等にては下馬致し口を取扣居可申事」
一五歩前停歩平禮以上之禮を行ふ向（草履相用）へ我木履にて行逢候節鼻緒外し候て行禮可然哉
「御免下駄之外は脱候筈」
一文官之向は洋馬具不相用方と奉存候
「洋馬具不苦事」
一小者は法被に御座候得共長柄傘持は看板着之方と奉存候
「傘持も法被之筈」
一雨衣着用之節御定之笠相用候筈候得共都合に寄手傘相用候ては如何可有御座哉
「當分此通り」
一明治四未年八月家令により左之通政事廳へ伺之處公用局評議之通りたるへき旨指令
家　令
官人衆禮節之御定此度御布告に相成候處私共初　正三位樣御名代乘輿乘馬にて罷越候節官人衆

に行逢候はゝ如何相心得可然哉相伺申候否被仰聞候樣仕度奉存候事

八月　　　　　　　　　　　　　　　公用局參事

今日之時躰公私之分も有之儀に付　御名代相勤候付て途中行禮之儀別に無之樣奉存候尤乘輿之儀不相用御定則に御座候事

駕籠

乘輿は万石以上或は年五十歲以上之外は天下の制禁也（武家諸法度にあり）故に諸士五十歲以上は願之上　御免右以下は月を切出願之上免せらる其制左之如し

文化二丑年六月廿日改正布告

一　　　　　　　　　　　　　　　　重役以上頭役御目見以上

五十歲以上願の上乘物　御免五十歲以下病氣に候得は月切駕籠　御免之事

於江戶は大御番格以上之輩五十才以上願之上　御免五十歲以下月切駕籠は布衣以上に限るなり

一駕籠御免願文例

何之誰

私儀當何何十歲に罷成候處持病に痔疾有之馬上計にては難相勤御座候間駕籠　御免之儀奉願候以上

月

右之如く出願すれは召狀を付け御家老より御免申渡　公儀御目付判元見乘可申旨被達依て誓文狀を出す

一駕籠　御免之誓文　用紙美濃紙

起請文前書

私儀五十歳に罷成候に付駕籠御斷申上候

右之趣僞於申上は　此處にて起請つき也

梵天帝釋四大天王總日本國中六十餘州大小神祇殊伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬神罸各可罷蒙者也仍起請如件

紀伊殿何役

姓　名　書　判

年號何支年何月

御目付衆連名殿

右奉書摺牛王へ

江戸にては　公儀御目付連名若山にては同所御目付連名なり

一月切駕籠起請文　同上

起請文前書

私儀持病に痔疾有之差發候節は馬上計にては難相勤御座候依之當何何月より何月迄五ヶ月之

積駕籠御斷申上候尤其内病氣快馬上計にて可相勤躰に御座候はゝ此起請文中受駕籠乗申間敷

候勿論　御免之期月過候はゝ此方より可申上候

右之趣僞於申上は　此處にて起請つき也

罰文前段同様

年號姓名等都て右に同し

江戸にては兩御番頭以上御使御名代繁勤なるを以五十歳以下皆此引切駕籠を出願す他所勤は躰裁上都て駕籠を用ゆ單に駕籠と云は長捧駕籠なり

一轉役被命は改めて誓紙を出す

細　則

正德に極る

一忌中に駕籠に乗候斷は頭役は御目付へ相屆平士は頭支配方より御目付中へ申遣筈但忌中に駕籠に乗候儀は親子兄弟妻迄に忌には斷次第乗也右之外親類も不相成候事

文化五辰年

一御家中妻娘等乗物之品右は何れへ嫁候とも向後は夫々極に准引越候節は里方へ乗物は不相成筈引越當日は是迄之通候事

同十二亥年正月

一養子引越之節駕籠にて罷越候儀不苦候哉と問合右は御目付中聞屆候筋之旨

三辰年

一從弟達之筋病死葬送之駕籠にて罷越候儀如何右は寺へ見送り勝手次第候得共駕籠にて之儀は何分挨拶難及旨答あり

一和歌　南龍院樣御初　御靈屋方等へ乘輿　御免之向自拜に罷出候筋は四足門前にて下乘可致事

但西御靈屋へ罷出候節は右御門前乘輿之儘にて罷通不苦候事

一三千石以上之大組乘物　御免有之候はゝ誓紙出に不及

一地廻り丸棒駕籠願に不及道中丸棒駕籠も同樣なり尤右は以上以下之差別無之

一地廻り乘物願は　私儀當年五十一歲に罷成候に付地廻り乘物　御免之儀奉願候との願書を出す_{若山なり}

一道中通駕籠は私儀此度江戶表立歸　御迎に罷越候處持病に痔疾御座候に付馬上幷繼駕籠にては道中難參其上養生之障にも相成可申旨醫師申聞候間道中通し駕籠　御免奉願候との願書を出す

他國御用旅行之分も之に準す

一江戶常府御長屋住居之者は門制あるを以て左の如し

醫師を招く節駕籠にて乘通せしむる時は何々病氣罷在何之誰療治受同人明日私方へ罷越候處足痛にて步行難成付駕籠にて何所切手御門幷御屋敷內乘通候樣爲致旨御目付へ屆る

一切棒駕籠にて醫師方へ差遣す時は何々痛所有之醫師方へ差遣候處痛强步行難成難儀仕候に付罷越候節々當月中何御屋敷何御門幷御屋敷內切棒駕籠にて乘通らせ申度と御目付へ屆る

右同斷也御日付より返事來る右請書には不及事

一駕籠には御屋敷乘通之時は私駕籠　御免願相濟候付御屋敷內下乘所之外切棒駕籠に乘往來致度

云々
又は今日御晦之方何所何寺へ罷越候處足痛にて歩行難成付切棒駕籠乗下乗所外　御屋敷内乗中
度と御目付へ屆る
御門乗通度時は御屋敷内并何御門と認む
一緣者の病人御長屋へ呼切棒駕籠にて乗通さす時は何々逗留罷越候處痛所にて歩行難成付何御屋
敷何御門且御屋敷内乗通らせ度旨御目付へ屆る
家族の女を他所親類等へ差遣し切棒駕籠乗通之時も都て右に准す
一紀州より御用にて到來病氣にて歩行難成駕籠にて御門乗通り度者も御目付へ屆る

供(トモ)連(ツレ)

供連とは上下之諸士出仕他行旅行等に召連るゝ供廻りをいふ万石以上及ひ執政等は格別其他役々又は祿高に因て人數多少之差等ありと雖も從來制然たる制限はなく習慣風をなして大寄合大番頭千石以上等は少しく階級あり平素重役御役人向頭役の類は概ね若黨（侍とも云）一兩人中間（小者とも云）二三人平士は一二僕乃至無僕にして式立たる時は（昇進轉職又は吉凶禮式の時を云旅行は別段なり旅行供連の事別に記す）平士にても若黨草履取鎗挾箱持を召具す　醫師は制外にて平素長棒駕籠に乗り藥箱を被(かつ)かしむ徒行一僕にも必す藥箱を携ふ

一江戸にて大御番頭勤之向等地廻り御使御名代之供連は他所に係るを以て概ね乗輿（長棒駕籠）兩徒兩若

黨鎗挾箱長柄傘草履取り合羽籠の類騎馬の向は（御小姓組御小納戸頭取等御使は騎馬也）兩口付兩若黨鎗挾箱長柄傘草履取り沓籠とす又中奥御小姓無足地廻り御使勤（頭役の總領無足にて地廻御役を勤む者を云小名御旗本等への御使常に頻煩也）の供連は若黨一人鎗挾箱草履取なり之を四つ供と通稱せり凡供連之躰裁通常は如此のみ

一供廻りの服裝は若黨は羽織袴股立取兩刀を帶す（規式には麻上下を着す）以下は皆紺無地看板（冬は木綿袷夏は麻單衣若山にては草履取は多く海鼠襟看板と云を用ひたり）尻からげ木刀を帶し（槍持に限り二本余は一本）合羽籠持は法被なり挾箱は着替服火事服を入る江戸にては御役人表役之向は平日出殿にも携ふ合羽籠は供廻り之兩具沓籠は馬沓を納るゝ籠なり又重役以上御役人向は草履取りに革袋かけたる杖を持しむ之を袋杖と稱し顯職表示の一具となれり

一重臣高祿之供連には徒と稱するあり二人徒三人徒と云ふ長羽織（無地揃ひ）袴着供先きに立つ又押と云あり割長羽織（印小紋等）袴着供跡に立ついつれも木刀の大小を帶す多く渡り者也

一供連省略の事は御家中節儉令の出る毎に屢々發令ありたれとも其程度を指摘したるものなし近世半知を行はるゝ時都て半減にすへき旨あれ共尚漠然たり維新後に至て判然制限を定む是非常の英斷にして畢竟大改革に伴ひ初て虚飾の習弊を一掃し得たり

供連規則

寛政元酉年十二月廿四日被　仰出候

一御家中之諸士供に召連候徒并若黨年頭三ヶ日は麻上下着爲致候儀は勝手次第之事

同二戌年

一大寄合以上他所打物　御免

同六寅年
一兩御番頭之總領若黨草履取召連右以下頭役之總領若黨召連之儀不苦
同年
一御老中之列之衆跡對箱に成る
　同十　年より規式之節箕箱　御免
一布衣以上之面々平日袴着之若黨兩人召連右以下にても三百石以上之頭役は若黨兩人召連不苦等
一重役之面々千石以下にても年頭其外表立候節は徒之者召連不苦等
同八辰年
一大寄合以上儀式之節先對箱　御免
文化五辰年十二月御用人觸
一御目見以上向後嫁娶之節途中長刀爲持候儀勝手次第
　但諸士之妻娘等葬送之節爲持候儀も不苦
同九申年九月十八日
一大御番頭之娘宮參り候節打物爲持徒召連候儀問合右は不苦旨答あり
同十一戌年六月廿四日被　仰出候
一町奉行御廣敷御用人御目付向後袋杖爲持不苦候事
同十三子年

一兩御番頭中他所御使其外重立候節供に徒兩人召連候儀御目付中へ及問合候處右は不相成併其節に寄可申談見旨答あり

文政四巳年

一地廻り徒召連候向は對箱爲持候に不拘持鎗を先道具に爲持不苦事

同三辰年

一頭役にて重立候節徒兩人召連候儀千六百石以上に候得は不苦事

一布衣以上之頭役押立之節長柄傘爲持候儀不相成事

天保二卯年七月

一向後頭役以上は鎗挾箱爲持候節は袋杖不苦頭役以下にても侍兩人召連候節は勝手次第之事

「以下年月日不明」

一袋杖爲持候御役人向は勿論其外之向にても御役に寄爲持候儀に候得共頭役以上は鎗挾箱爲持候節は袋杖爲持候儀不苦頭役以下にても侍兩人召連候節は勝手次第

一千石以上之平士杖袋爲持候儀不苦事

但御城内は遠慮可致事

一江戸御屋敷内鑓立候儀御役に寄立候得共向後一等に不苦事

一二千石以上之大組對箱爲持候儀重立候節は右對箱爲持不苦事

一御目見以上之平士重立候節若黨草履取召連不苦事

一大御番頭規式之節跡對箱不苦
一松坂御城代松坂表於ては先對箱不苦
一大御番頭中之妻子病死之節家來鎗爲持候否尤祿高差別も可有之哉之事右は不相成旨答あり
一大御番頭江戸へ御使之節徒相減候儀申出候に付政府へ御談申上る同役中は御役柄之儀に付無用被致候やう挨拶あり
一鎗之鞘羅紗哺平頭之差別無之事
一諸士之妻重立候節對箱幷長刀等爲持候儀御老中方にても家柄にて差別可有之哉其外何役以上は對箱何役以下は何役迄は片箱爲持不苦哉且又地廻り幷他所行之節共承知致度旨問合之仁有之御目付中へ及談候事
右答左に曰
本文對箱爲持候儀重立候節大御番頭以上之妻娘は不苦先對箱爲持候儀大寄合以上之妻は不苦
一長刀爲持候儀は
御目見以上之妻娘重立候節不苦片箱爲持候儀は制も無之儀に付御目見以上之輩之妻娘は不苦
尤地廻り幷他所行とも同斷之事
慶應二寅年九月六日
一此度半知上米被　仰出候に付右年限中供連之儀平日登城之節は都て半減に致可申事
本文之通候得共半減より猶又減少之儀は如何躰にも勝手次第之事

明治二巳年　月十五日執政より布達番人へも爲心得

平日供連人數幷制止之儀左之通御定相成候事

執政　侍二人　小者一人　袋杖持

御對面所席

御對面席並

參政　侍一人

知局事　小者一人

知館事　袋杖持

家知事

大廣間席以上

但無役之向は登　城之節無僕にても不苦

右諸御門諸番所雜人制止之筈

監察　侍一人

判事

大隊長

右之外は都て無僕之筈

制止とは從來重役以上御役人は御門々々幷番所前通行之時は番人聲をかけ（えよう〳〵と通行中聲をかける）雜人通行を制止す雜人は通行を止め片脇に扣へ或は下座をなす也

明治二年八月十三日政事廳より布達

一袋杖爲持候儀は向後相止候事

家　來

譜代之侍初年季抱之若黨小者に至る迄召仕ふ者を總して家來と稱す元來軍役之制により上下之士祿高相應之家來を召抱軍役を可勤筈なり五家之御家老は無論二三千石之者は譜代之世臣多少を有すへきも大平無事之世供連は全く一つの禮裝式具と成り果專ら外見を飾るに不過れは千石内外の徒も漸く用人給人抔稱する外は多くは一季半季の奉公人を召使ふ是幕府の旗下初いつれの藩士と雖も概ね不然はなき爲躰にて万一に可賴家來に非す左れはたとへ千石の士と雖も千石之用をなさす全くは有名無實に歸せり若山にては若黨侍は知行手寄之者又は御家中輕輩者之子弟等を抱へ小者中間亦知行之百姓町方之者等多く國人を召抱といへとも概しては一季半季之渡り者（渡り中間織助と稱し所々方々渡り廻り去就常なきものなり）にて江戸は最甚敷若黨中間共町方口入人より召抱へ其放蕩無賴は論に勝へさる也御使御名代乃至旅行等衆を要する時は輿丁初日傭人足を臨時に雇入る畢竟皆虚裝の具に止るといへとも供連を以貴賤の資格を表示する事武家一般の通式となり時に取ては必用不可欠ものたり家來之事別に制裁あるを見す聊時の情況を陳し且於江戸は門制あるを以て其例規を揭く

天保十二丑年閏正月十五日布告

一御家中家來之內家老と唱振之儀大寄合以上は家老用人と相唱候等先達て相極有之候右以下御供番頭以上御用人は家老とは不相唱用人と相唱候事

一於江戶若黨小者召抱へ屆文例

以切紙啓上仕候私方へ何之誰と申侍一人召抱今日請人何町何丁目誰店何屋誰と申者方より爲引越申候尤御當地者にて御座候依之御屆申上候以上

御目付への屆也已下同し

下女召抱も同斷但名は不認御門へも屆る以下皆同し

一紀州より召抱る節は紀州より何と申若黨小者召抱差下し今日到着仕候と認

一家來暇出し之節

私召仕何之誰と申侍一人無相違暇遣し受人何所何屋誰と申者方へ今日下遣し候尤御當地者にて御座候との趣

品有之暇出し之時は無相違との儀のそく奉公構暇出は其趣屆るいつれも御門へも

一家來江戶にて暇遣し若山へ遣節

私召仕何と申若黨小者紀州何郡何村何所何丁之者にて御座候無相違奉公構暇遣し候間紀州へ遣申候間何郡何村何所何丁何と申者方へ差遣申候以上

一家來病氣に付下宿

私召仕侍何之誰と申者病氣罷在候に付爲養生請人何所何屋誰と申者方へ今日下け申候尤快氣次第罷越候筈候仍之如此御座候以上

一右之節駕籠にて乘通し
私召仕侍何之誰と申者病氣に付今日請人何屋誰と申者方へ差遣し申候處歩行難相成候に付御屋敷内幷何御門駕籠にて乘通し之儀元御通し被下候樣奉存候との趣

一右病氣快罷歸候節
私召仕侍何之誰と申者病氣に付爲養生請人何町何屋誰と申者方へ去る幾日差遣候處病氣快罷成候に付今日私方へ罷越申候との趣

一家來御門外にて病氣差發永之暇遣し候節
先刻御斷申上候私召仕侍何之誰と申者途中にて病氣差發宿何所何屋誰と申者方へ立寄致養生居候處右病氣に取紛其段申越候儀不心附不念迷惑致し候旨申出候尤快氣不致其儘誰方にて致養生度旨申出候に付右之方より永之暇差遣申候尤御國之者にて御座候且又何御門に殘し御座候御門札合札を以て受取申度候間相渡し候樣いたし度候との趣

一家來看病に遣
私召仕侍誰と申者親病氣罷在候に付何郡何村百姓誰と申者方へ看病して今日差遣申候云々

一家來之忰前髮有無に不拘家來方へ引取候節
私方に召仕候侍誰と申者忰何之誰と申者他所に罷在候處此節誰方へ引取申度旨申出候に付右忰

誰儀今日拙者方へ爲引越申候尤御當地者にて御座候との趣

一家來御役人へ下座落

何之誰　小　者　誰

私儀去る幾日主人供仕候て御長屋御門内に罷在候處何之誰樣御上り被成候に付御小人目付衆御制被成候處私一躰老眼に候處此節逆上氣にて耳遠罷在御制聞洩下座不仕候段誠以不調法之至り恐入奉存候依之申上候以上

一家來病死

以切紙啓上仕候私召仕小者誰と申者病氣罷在候處今日病死仕候に付今日何時何所何寺へ爲致葬送候間山屋敷掃除門出候儀尤日雇之者何人何所御門入掃除門出切に相成候間入帳面消候樣御通し可被下候仍之如此御座候以上

一家來欠落

晝札にて御門外へ出たる小者御定過不歸候はゝ暮六時前に先左之通り屆

我等方より侍小者一人今日晝札にて御門外へ差遣候處未不罷歸候御定六時打候共五時迄之內罷歸候はゝ御門御通し可給候以上

月　日　　姓　名

御　門　番　所

右之通斷置不罷歸候はゝ五時前御目付中へ

以切紙啓上仕候拙者召仕小者一人今日晝札にて御門外へ差遣候處未罷歸不申候間御定五つ打候ても今夜中罷歸候はゝ何御門相通し候樣御通し可被下候依之如此御座候以上

但御門へは不相屆

一本文御目付中へ之屆六半時比此方より出し御小人目付番所へは五つ時前差出候樣可致遲り候はゝ過料

右之通屆置夜中何時罷歸候ても其品屆に不及事

一翌朝不罷歸候はゝ翌朝六半時迄に左之通斷

夜前御斷申候拙者召仕侍昨日晝札にて罷出候處今朝迄罷歸不申候間今日中罷歸候はゝ何御門相通札相渡候樣元御通し可被下候仍之如此御座候以上

御門外へ止宿いたし罷歸候はゝ其者手前不屆不調法書付爲差出御目付中へ差出候事

一翌日も不罷歸欠落躰にも無之趣に候得は左之通り相屆

今朝御斷申候拙者召仕侍心當り之所々相尋候得共未罷歸不申候間今夜中罷歸候はゝ何御門相通し札相渡候樣御通し可被下候との趣

一欠落斷

夜前御斷申候拙者召仕侍何と申者今朝に至り未罷歸不申候間心當り之所々相尋候得共相見不申欠落いたし候尤御當地者にて御座候依之御屆申上候以上

猶々何御門に殘有之候御門札合札を以て請取申度候間相渡候樣御通し可被下候以上

一無札にて欠落之節左之通
以切紙啓達仕候拙者方に召仕候小者何と申者今夜五つ時比に罷出候處罷歸不申候に付心當り之所々相尋させ候得共相見不申猶又相尋させ明朝御屆申候尤御門札は貸渡不申候依之如此御座候
以上
右屆曉七つ前に御目付中へ差出候事
一翌朝左之通相屆る
夜前御斷申候拙者召仕何と申者心當り之所々相尋候得共相見不申候欠落いたし候勿論御門札は貸渡し不申候尤御當地者にて御座候との趣
一前段同樣曉七つ時境に屆無之節は左之通
拙者召仕何と申小者今曉より相見不申候に付心當り之所々相尋候得共相知不申欠落いたし候儀と存候尤御門札は貸渡不申候且又御當地者にて御座候との趣
夜前より相見不申と認れは曉七時境斷拔け不念に成可心附事

御家中旅行

「〇」御家中旅行
一御家中之者　公命を奉し江紀且御領内往來乃至他國へ御名代御使又は私用にて湯治或は寺社立寄參詣御暇請願等悉く成規あり左の如し
天明五巳年七月廿三日被　仰出

一諸國御關所御三家方之諸士以上駕籠乘通候節於御關所相改下乘之儀申聞候はゝ御三家方御目見以上之者古來より乘通候儀に付只今迄之通相心得候樣に兼て被申付有之趣及答候筈

寛政三亥年三月

一御家中之面々諸國御關所通行之節諸士以上は只今迄之通り相心得以下役は致下乘可罷通旨先達て相達候事

右は諸士之向にても供之者後れ鎗をも爲指不申罷通候節は致下乘候筈

「〇」道中筋御家中繼立人馬定

一東海道は繼馬五拾疋人足五拾人其外街道は繼馬二拾五疋人足二拾五人之外繼立不相成處天保元寅年道中奉行へ談濟之上一日遣高東海道は人足七拾五人馬二拾五疋中山道美濃路宿には人足三拾八人馬拾三疋天保十亥年迄十ヶ年之間御定賃錢にて繼立候筈に相成有之候處猶又同十一子年より嘉永二酉年迄十ヶ年之間是迄之通人馬高御定賃錢にて繼立候筈に付右之趣相心得諸向へも心得させ之儀宜被取計事

若山同役へも可被申合事

天保十一子年正月廿一日

覺に御用物は右御定人馬之外に相成候筈

右は十ヶ年目御達に相成候事被見る

按に道中人馬繼立之制は正德元年五月幕府より左之布告ありて爾來維新に至る迄之を定法に立

られたるなり人馬賃錢は行路之難易里數により御定賃錢と稱する定額ありて之に應して支出す坊間道中記抔稱する印本にも皆記載ありたり　河津は大井川阿部川新井之如き外舟渡橋梁共概ね無賃なりし然るに後世物價騰貴宿驛難澁等に寄り其驛々より道中奉行へ願立御定賃錢より年限を定めて三五割増を許され其趣天下觸を以て布告あり滿期に至れは亦願繼をなし大躰維新に至る迄通して五割増前後とも覺ゆ維新後に至て遂に十割増に及ふ件之如く日々人馬遣ひ高い制限あるを以て御家中旅行之節は先觸を御勘定所へ示し認定の證印を受て宿驛へ送達する事とす

但御參覲御道中之如き日々數千人を要し一日五十人位之制によりかたきは無論恐らく別に特法ありしか今詳ならす

正保元卯年五月　公儀觸

一駄賃幷人足荷物之次第

一御傳馬幷駄賃之荷物壹駄　さ　四十貫目

一歩持之荷物一人　同　五〆目

一長持一丁　同　三十〆目

但人足一人持重さ五〆目之積り三十〆目の荷物は六人して持へし夫より輕き荷物は〆目に從ひて人足減すへし此外何れの荷物も是に准すへし

一乘物一丁　次人足六人

一山乘物一丁　次人足四人

一御朱印傳馬人足之數御書付之外に多く出すへからさる事
一道中次人足次馬之數たとへ國持大名たりと云共其家中共に東海道は一日に五十人五十疋に不可過此外之傳馬道は二十五人廿五疋に限るへし但江戸京大阪之外は道中に於て人馬共に追通すへからさる事
一御傳馬駄賃之荷物は其町之馬不殘出すへし若駄賃馬多入時は在々所々より雇たとひ風雨之節といふ共荷物遲々なき樣に可相計事
一人馬之賃御定之外增錢を取に於ては牢舍せしめ其町の問屋年寄は過料として鳥目五〆文つゝ人馬役之者は家一軒より百文つゝ可出事
　但往還之翟理無盡之儀申懸又は往還之者に對し非分之事不可有事
右條々可相守之若於違背は可爲曲事
一人馬繼立先觸等之品
道中往來之面々人馬繼立候はゝ其段頭支配より御勘定奉行へ元斷之上人馬先振認評定所へ差出同所押切印取右先觸銘々より問屋へ差遣候答先觸へ泊附をも書入差道中にて川支等有之日割違候節は其所より追先觸差出候答無觸之人馬繼立候儀決て不相成候事
一道中人馬之儀先觸之外若道中て病氣其外無據品にて差掛り人馬繼立候はゝ如何樣之譯にて何宿にて人馬如何程繼立候との儀到着之上早速御勘定奉行中へ可相屆事
一召仕之者共にも差掛人馬雇之儀有之候はゝ主人承屆繼立させ其段着之上同樣主人より可相屆候

若主人へ不相屆內々にて人馬雇之儀決て不致心得違無之樣召仕へも可申付事

一道中繼人足先觸

一寬政十二申年より御家中堺驛通行の節人馬切手を出す

文政元寅年より右切手相止先觸を以て通行之筈

一天保十三寅年江紀往來之節人馬繼立之儀山口宿切手繼立に相成る

但急御用に付早駈等にて罷越候節は斷相廻次第評定所より先觸出候事

一親等看病願相濟罷越候ても右同斷評定所より先觸出候事

覺

一駕籠　人足何人

一分持　人足何人　合羽籠等も此分持之內に籠る

一長持何掉　人足何人

一馬何疋

右は來る幾日紀州若山出立木曾路又は東海道別紙宿附之通江戶又は勢州迄罷越候付宿々人馬無差支樣可被繼立候以上

紀州　何之誰印

家來名宛に候はゝ繼立可給候と認

何の何月幾日

家來宛に候得は何の誰內　何の誰

尤多分家來宛也

紀州山口宿より
武州板橋宿まて
宿々問屋中
荷々右先觸板橋宿に留置拙者へ戻し可申候以上
右道中元極三十九に
宿り附認
宿　附
何月幾日
、、、、
同　幾日
、、、、
同　幾日
、、、、
右之通
「〇」元治元子年四月七日於若山布達
一勢州川俣街道筋左之通七ヶ宿近年及困窮人馬賃銭余荷難凌難澁願之趣無餘儀相聞候に付左之通賃銭割増之儀承届候事
和州御領分
越部　　土田　　鷲我

右三ヶ在當子年より來る辰年迄五ヶ年之間人馬賃錢倍增之筈

但右三ヶ在村人足廿五人之外繼立不相成候に付他領より雇入候得共余荷相掛且又此節雇入差支候趣に付右人數之外余分繼立度向は翌日繼立させ可申事

（一本ナシ勢州御領分川俣）

波　瀬　　七日市　　瀧　野　　大　石

右四ヶ在當子年より五ヶ年之間人馬賃錢四割增之筈

一御勘定奉行證文を以て人馬繼立且在扶持幷小入用附手形にて止宿之儀近年諸物高直にて難澁之趣に付御扶持方手形宿々へ相渡旅籠代に差繼不足は當人より相渡可申事

但御家中往來之向家來且雇人召連候者等人足旅籠代且賃錢等ねたりヶ間敷儀も有之哉之趣相聞不束之事候主人且重立候家來行屆不作略之儀等無之樣可申付事

一先觸出候後出立及延引又は止宿日限狂ひ候節は先觸出し替不申候半ては宿々及迷惑候趣に付不相紛樣觸戻し可申事

一前物貫目之儀は御定も有之處兎角過貫目に相成山坂等持隃及難澁候趣に付東海道筋同樣一人持五貫目持に相定め過貫目之分は賃錢增拂取計可申事

但貫目改所之儀向後左之ヶ所にて相改させ可申事

那賀郡岩出組大庄屋許

松坂領瀧野村大庄屋許

慶應三卯年十一月廿四日御勘定奉行より

一名草郡山口宿之儀從來貧鄕にて別て人馬繼立夥敷難澁之趣願出候

右賃錢之儀此上過當に相成候ては通行之向迷惑も可有之候得共必至困窮にて難取續趣尤にも相

聞候に付下地割增之上猶又十五割增都合三倍增之筈に相成候事

「〇」立寄參詣

御家中江紀往來は東海道日數十四日振之御定也百五十里を十四日之旅行は切詰めたる日數にて動

もすれは過期之恐れあり且つ私用請暇之上は格別不然は容易に京坂一見神社參拜も成らさるを以

江紀往來之次立寄參詣といふを允され日限猶豫木曾街道通行をも得る也之を立寄參詣と稱す

年月不知

一頭有之面々木曾路罷越度向は頭迄願書差出候はゝ右書付頭より御用人中へ差支有無談出候筈之事

尤人足何人繼立候哉との儀は御用人より右頭へ承候筈其上進達相濟候はゝ其段被申出候樣にと申

達置追て進達相濟候段右頭より申出候はゝ其趣御用人中より道中奉行中へ申達候事

文化十一戌年極る

一支配有之面々向後支配の內江戶へ罷越候節願相濟木曾路罷越候はゝ江戶到着次第其段於彼地頭支

配より表御用部屋へ相屆候筈之事

享和二戌年六月

一木曾路罷越候面々は願に其趣意を認入差出候樣勝手に木曾路罷越之儀不相成旨極る

文久二戌年閏八月

一中（山）（仙カ）道甲州道中通行之儀問合候向多有之候一躰右兩街道は農業重之土地にて繼人馬も少く之所近年通行之向追々相增繼人馬遣高相嵩み宿助郷難澁之趣相聞候間向後右兩街道最寄神社佛閣へ立寄參詣之分は人馬相對雇に爲致尤右立寄參詣之外無據次第有之通行之向は問合之上通行爲致候積御老中方へ伺相濟

立寄參詣願文例

何之誰

私儀此度江戶表へ立歸り御供に罷越候處兼て心願之儀御座候に付木曾路通り罷越上州妙義山へ立寄參詣仕道中十七日振にて罷越申度奉願候尤道中人足何人繼立申度との趣

一京都北野天神夫より伊勢參宮東海道日數廿日振もあり

右立寄願振は先認振右之通其外は猶心次第之事

一大坂等へ立寄或は天滿天神京都愛宕山北野天神夫より伊勢參宮相州江之島弁才天鎌倉八幡へ廿二日振り願もあり此外攝州能勢妙見信州善光寺又は甲州街道罷越身延山立寄參詣願も濟

江紀着發之事

一公私共江紀往來之着發には御勘定奉行御用人御目付乃至頭支配へ着發屆をなす其例左の如し

（端作如例）私儀此度御用物引纏紀州へ罷越候に付願相濟東海道十五日振にて罷越申候尤（總領弟）同苗誰召連今日此表發足仕候云々

但御用物引纒候段は着發共認

一十四日振に候はゝ東海道極之日數に付十四日振にて到着さは認に不及

私儀此度此表へ罷越候に付去る幾日若山發足願相濟木曾路通罷越し何々へ立寄參詣仕道中日數幾日振にて今日此表へ到着との趣

一木曾路の節は御達し之喰合して人馬繼立之義御用人へ計認入相屆候事

都て江戸着發は御目付へ之屆書端書に上下何人にて何御屋敷何御門出入さ認む　御門へも屆る

一立寄ヶ所へ參詣不致日數追込候節

私儀此度此表へ罷越候に付去る幾日若山表へ出立願相濟高野山并伊勢參宮京都北野天神へ立寄參詣東海道廿日振にて可罷越之處差支之品御座候に付伊勢參宮并北野天神へは立寄不申日數追込道中十八日振にて今日此表へ到着仕候との趣

一勢州松坂通行之時同所御目付へ之屆

私儀此度紀州へ罷越候節伊勢參宮願相濟今日當所へ止宿仕候と之趣

一私儀此度紀州へ罷歸候節伊勢參宮願相濟昨日當所へ止宿仕候處今日參宮仕候に付當所發足仕候との趣

一私儀今日參宮相濟候に付今晩當所へ止宿仕候との趣

一私儀昨日當所へ止宿仕候處今日當所發足仕候との趣

一松坂止宿不致時は

私儀此度紀州へ罷歸候節伊勢參宮願相濟今日當所通行仕候と之趣

一私儀伊勢參宮相濟候に付今日當所通行仕候との趣

一他國御使　御名代被命時は發足前且歸着之節共御序之節御目見仕度旨願書を出し　御目見被　仰付又は此度は御序無之に付　御目見不被　仰付旨達しあるなり

一公務にて江紀より歸着之時は

休息引　翌日より　十五日

一家來を他國へ遣す節屆　御用人御目付へ

私召仕小者誰と申者無據用事御座候間何州何郡何村迄差遣申候尤東海道罷越し今日出立爲仕度候云々

飛脚に差遣候はゝ何々迄飛脚に差遣云々と認

一何國にても願に不及宿駕分持人足を要すれは先觸を出す

一御關所手形左之通半紙半枚に認む

覺

一侍　一人　一本差に候はゝ中間と認

右は何州何宿へ差越申候御關所無相違御通し可被下候以上

年號月日　出立日限也　紀州　何之誰　印

箱根御關所

東海道なれは箱根中仙道なれは碓氷也今切幷福島は口断にて相通由

維新後

慶應四辰年六月九日

一驛遞御役所より布告

紀伊中納言　家　來

其藩參勤之節幷平生家中通行共定賃銭人馬遣高迫て御制限も可被爲立候得共先是迄大藩之格を以通行可致事

人馬遣高定之内　大藩之分

一東海道

當日幷前後共都合三日　五十人　五十疋

平生家來往來　二十五人　二十五疋

但上り下り落合候節は上下にて五十人五十疋の筈に候事

一中仙道

當日幷前後共都合三日　二十五人　二十五疋

平生家來往來　十三人　十三疋

但上り下り落合候節は上下にて二十五人二十五疋の筈候事

一同美濃路

右中仙道同斷

明法二巳年六月十四日

一紀州村々東海道十五ヶ驛へ附屬助鄕被　仰出候に付御願左之通本居中衞等を以民部役所へ提出

此度御一新に付驛々助鄕組替被　仰出領內紀州村々は東海道藤川二川御油赤坂吉田岡崎新居池鯉鮒白須賀濱松見附袋井掛川日坂金谷等拾五ヶ驛へ從去辰五月當巳五月迄一ヶ年之間附助鄕被　仰出之趣驛遞御役所御印狀を以去十二月以來從驛々申越候に付其段爲奉畏候得共遠隔之地故人夫差出方無之悉皆金勤に相成御座候處を以成筭爲仕候得は一ヶ年分之驛高金高百石に付凡三十兩計りも相掛申候近年追々諸物騰貴下民共困窮仕別て去秋は數十年未曾有之天災穀物不登にて必至窮迫罷在種々救合等致し遣候處前件之通過分之驛馬金割當爲相納候ては流離飢餓之者も不少怨苦混亂之程も難計方今御一新に際會一夫も其處を不得者有之樣にては誠以不相濟次第に奉存候に付立替內渡等爲取計候得共近年勝手向必至窮迫之折柄に付業合難行屆種々苦慮仕候得共更に方便之品も無御座候に付甚以奉恐入候得共情實有体奉言上候通に付何卒　御聖聽被爲垂右驛馬金減少貧民共之肩を御弛め被爲成下候樣可奉願旨中納言申付候に付驛々之內概略會計出來候分別帳拾冊取添差出候此段宜奉願候以上

右へ東海道藤川初十ヶ驛人馬立辻諸入用取調書十冊外に助鄕附屬村々に凡割合金見詰畢竟書一冊都合十一冊取添差出す

明治三午年正月廿八日會計局より達

一文武官人之内私費願濟にて他所へ罷越候者罷歸候迄御役料不相渡候着發不洩樣屆出候樣

同年二月廿四日政事廳より布告

一士族扶持人等無屆にて他境へ罷越候儀不相成は從來之御規則に候處近年右躰之者間々有之趣相聞甚以不埒之至に付向後無屆にて境を越候者は御取調之上是迄家名斷絶之廉を以無役高可被召上筈候間心得違無之樣可致事

同年四月廿九日

一驛路御改正に付脇街道本藩支配所勢州松坂驛にて心得振之儀民部省へ左之通伺之處五月十八日附札之通差圖有之人足賃錢之儀是迄十倍增之處此度東海道十二倍に相成候付ては脇街道之儀如何相心得可申哉

附札 脇街道之儀は追て御規則被　仰出候迄是迄之通り可相心得事

一諸官員等旅行之人足遣幷駕籠之制限等總て御布告之通相心得候て宜御座候哉

附札 伺之通り

一馬繼之儀御廢止と相心得候て宜御座候哉

附札 馬繼之儀は不被廢定價賃錢のみ被廢候事

一助鄕組替之儀如何相心得可申哉

附札 東海道之外は追て御規則被　仰出候迄是迄之通可相心得事

明治三年年五月晦日

一驛遞之儀向後管內管外共都て御用元局々にて取扱先觸調印之儀は名草民政局にて兼て印紙受取置
可申事

同年六月十四日

一驛法見込之品伺

左之書付於東京公用人より民部省へ提出す

今般驛法御改正御布告に付ては外街道脇往還共追々御規則御立可相成候間於藩々も御旨意に基き舊習に不泥見込相認可差出旨被　仰出之趣拜承仕候當藩支配所之儀は脇往還に有之候得共本街道賃錢に准し從前之賃錢に十倍增を以繼立致させ居候處今般東海道筋賃錢十二倍增被　仰出候に付猶又同樣增方之儀每々願出有之右增方之儀は東海道に限り候段申聞候得共物價騰貴等之苦情申立再三願出候就ては右御定賃錢と相對雇入之賃錢と比較いたし見候處前段之通に追々御定賃錢相增候に付却て相對雇賃錢之方低價に相當り便利宜かと奉存候間當藩內之儀は都て御定賃錢を廢し其節々至當之賃錢を以相對雇に相定若人足共過當之賃錢を貪り候はゝ其地方々々の役人共へ申聞嚴敷取締せ候樣仕度段和歌山表より申越候間御屆申上候以上

申來之

本文之品猶又左之通伺提出之處朱書之通九月十二日前田驛遞權少佐を以差圖有之旨東京より

驛遞見込之品可申出旨被　仰出之趣を以過日於當藩も賃錢增加之儀每々願出說諭方甚以困却罷在候右驛遞之儀は何れ不日一定之御規則可被　仰出と存候得共先つ夫迄之處當藩內に限り右見

込之通相對雇に致度候間此段速に御指圖被下候樣相願候也

庚午八月八日　　和歌山藩

「書面之趣は追て改正被　仰出候に付先從前之通可相心得事」

明治三年年七月十四日

一驛遞元立賃錢伺

左之通民部省へ伺之處上ヶ紙之通答有之旨東京公用局屬申來る

去る巳年　御東幸中人馬繼立賃錢六倍五割增相改元賃錢之上へ九倍增都合十倍增御定之儀同年二月被　仰出同五月助鄕期限候處常非常之通行未定に付諸道とも御取調之上永世之良法御確定可相成候條追て御沙汰候迄最前被　仰出有之候附屬助鄕は勿論御再幸に付御規定相成候諸家人馬繼高共賃錢十倍增共是迄之通可相心得旨猶又同四月に被　仰出候前顯元賃錢と申儀は文化之度御定相成候賃錢を元に相立候儀に御座候哉此段奉伺候以上

庚午六月十四日

上ヶ紙書面之趣は正德元年五月確定有之候賃錢と可相心得事

庚午七月

明治三年年八月十日政事廳より

一旅宿標札之制

旅宿表札寸法左之通御定相成候事

勅任以上　長三尺　巾一尺
奏任以上　同二尺　巾七寸
正七位以下　同一尺五寸　巾五寸
從八位以上　同一尺五寸　巾五寸

右何れも樅板之事

右同年閏十月十五日左之通改正

勅任以上　長三尺　巾八寸
奏任以上　同二尺五寸　巾六寸
判任以上　同二尺三寸　巾五寸

請暇

請暇

一貞享御條目に無斷にして他國は不及言雖爲領内遠所へ不可參とあり故に不得止私之旅行或は病氣により湯治養生又は子弟を他國に遣す等いつれも事由を陳狀御暇を請願允許を得るの法也請暇に種々あり概ね左之如し

御暇日數定

一江紀より罷歸休息引　翌日より十五日
一江紀遠在養生御暇　同追願　九十日程

一同再々願　八九十日程
一湯治願　五廻り　一同追願
一看病引　父母妻子に限り不及願届なり　百日過共不及願　此外は願之上許容せらる
一江紀へ看病願　父母妻子に限り　百日
一同　追願　五六ヶ月より八九ヶ月程
一一日二日之道中日數延引願進退に相成候事
一立歸幷轉役等被　仰付江戸より紀州へ罷歸候節逗留翌日より五日
一江紀遠在へ無據用事にて差遣し暫く逗留之筋
日數三十四五日　安政四巳年十月廿日

他國御暇願

正德四午年四月五日
一諸士子供致參　宮願相濟候筈右に付日數極も可存哉と承候處右は大躰十二三日之旨御目付中答有
天明三年八月
一諸士妻娘養介等參　宮其外他所へ用事等にて參候儀願幷斷にも及不申哉と御目付中へ承合候處右は願斷にも不及旨併養介と有之候處男子にて有之候得は願入候旨挨拶有之候事
文化十二亥年
一隱居之輩他所へ罷越住居致候儀御目付中へ承合候所不相成旨挨拶有之候事

一病氣に付上方醫師へ療治請藥用致度抔にて彼地へ御暇にて罷越候節暫逗留と相願候儀右は日數幾日程にて候哉と問合候仁有之候に付御目付中へ承る右は湯治願日數同樣之由答あり

文政六未年

一御合力米被下有之總領子（一字不明）參　宮相（願脱カ）濟可申哉之事右は不相濟

一隱居之輩願濟にて他所へ罷越候節逗留日數右は日數限りは無之候得共年越に相成候得は暮に至り再願入候旨答有之候事

養父實方祖父攝州木津願泉寺五十回忌法要に付次男を同寺へ參詣御暇相濟

一他所役御役替被　仰付早速家內若山へ引越せ候筈之處總領殘り跡片付之上家內召連罷歸度旨願相濟

右總領病氣にて旅行難仕付暫之內彼地にて養生少にても快氣次第引拂發足爲致旨願相濟

一養子宿願之儀有之京都北野天神攝州能勢妙見へ參詣爲致度旨願相濟　厄介も同斷濟

一隱居之者江戸淺草觀音へ參詣且弟江戸に在勤無據用事に付弟居御長屋へ立寄暫く逗留爲致度旨願相濟

「○」湯治願

享保七年

一湯治願日數等極之品左之通

一總て湯治願之面々三廻りより以後は斷入申候哉と御目付中へ承り候處四廻り五廻りにても入湯

は心次第に候尤三廻りより以後入湯仕候共湯治先より斷入申品には無之旨被申出

一右之通候間自今湯治を願に幾廻りと申には及申間敷旨答あり

一右之三廻り以後致入湯候ても願等は入不申品に候哉と承合候處四廻り迄致入湯候分にては斷にも不及申五廻りも入候はゝ湯元より斷申越可然旨御目付中被申出候よし就夫爰元にて右屆相濟し參候樣致度段申出候仁有之右之品も承合候處其通に爲致可然旨御目付中挨拶有之其以後正德之比四廻迄は其通り五廻りより上入湯被致仁湯元より其品斷申越候はゝ其品御目付中へ申屆候得は可相濟旨被申出尤間合候筋も候はゝ其通り相答候樣可致旨被申出候事

一湯治願相濟候得は往來日數除五廻り迄最初之願にて相濟候夫に付湯治之場所へは譬へは二十里有之候はゝ一夜泊り之二日振にて罷越可申處元より病氣にて參り候事ゆへ三日四日振にて參り候ては如何と御目付中へ談候處右の躰之儀極りは無之いつれ養生之爲罷越候事候得は廿里程之所へ三日四日振程にて被相越度候はゝ其段發足屆端書に認被申屆候樣挨拶有之候事

同元年九月

一右四廻り迄は其通五廻りより上は入湯被致候仁元より斷入候趣に付右前之通にては紛敷候に付往來日數除五廻り迄は最初願にて相濟候儀と存候に付彌其通候哉と御目付中承候處彌右之通五廻り迄は最初願にて相濟候と之儀被申出候事

享和三年

一右日數五廻迄は何等斷にも不及最初之願にて相濟其餘は再願にて猶二廻り迄は相濟候尤今一廻り

又は二廻りと之儀願出候筈往來は右之外に候事

文化六年二月

一京都釜風呂御暇年齢差別極りは無之

一御滯府被　仰出候得は京都釜風呂湯治願相濟哉之旨問合右は容易に難願出筋之旨答あり

天保九戌年

一攝州有馬へ入湯年齢五十才以上にて無之候はゝ不相濟事

一攝州有馬へ入湯

何の誰

私儀當年五十五歳に相成候處持病痔疾罷在候に付藥用仕候へ共爾々不仕候に付此節湯治仕候はゝ可然旨醫師申候に付攝州有馬へ罷越入湯仕度右御暇之儀奉願候以上

右有馬湯治若不相應之時は京都釜風呂へ湯治候はゝ可然旨申聞に付右之方へも罷越度旨願濟醫師添書も出す

一日高湯崎龍神熊野二河村同本宮へ入湯又は塩風呂入湯して海士郡冷水浦百姓誰方へ暫逗留罷越度等之類皆同例なり

一湯治先より追願之例　同役を以て差出す

何の誰

私儀當年八十歳に罷成候處兼て心願之儀御座候間伊勢參宮仕熊野三山幷高野山へも參詣仕度奉

存候然る處兼々持病に痔疾御座候に付熊野湯峯にて暫逗留入湯仕度往來日數四十日之御暇之儀
奉願相濟罷越候處右湯峯入湯至極相應仕候に付今一廻り入湯仕度猶又御暇之儀奉願候以上

「○」御領分在へ御暇願

寛政六寅年

一熊野三山へ參詣之志有之面々は向後願差出候得は相濟候との極寛政六寅九月廿八日有之右に付大
躰日數は幾日程に候哉と問合候處往來廿五六日迄は不苦筈との趣奥御右筆より答有之事

文政元寅年

一年中に兩度之御暇願高野山願相濟又々追て御領分にて湯治願右は相濟也

同五午年

一知行所へ總領病氣に付差置有之候處此度差支之品有之に付同所を所替爲致候に付願斷入候哉と問
合候に付御目付へ問合右は向後相改最初願出候節之通取計候樣答あり尤御目付相濟候有無に不拘
旨も答あり

一御目見相濟候總領は勿論御目見不相濟總領又は退身之忰次男弟抔病氣に付爲養生御領分在鄕等へ
差遣置之儀向後御老中方へ致進達候筈候事

一熊野へ御用に付罷越候仁（詰にては無之）罷越候節御目見不相濟總領を召連罷越候儀發足之節右總領を召
連罷越段を切紙之屆へ認替相屆可然旨御目付中より答有之事

一願相濟有之在中へ御暇之方へ停止中罷越候儀不苦事
右に付病氣養生として在中へ差遣置候儀當分又は暫にても無差別進達致候方と存候事全當分にて大躰日段も前以相分り有之筋は進達不及差遣候儀御用部屋へ屆る御目見相濟候總領也右御目見不相濟子弟等は屆に不及候事
右天保二卯二月に御目付中へ承候處文政四巳に右之通相極有之候旨申出る

願文例

何の誰

私儀無據用事御座候に付有田郡何組何村誰と申者方へ罷越申度往來日數五日御暇之儀奉願候以上

月

一氣欝に付在中へ罷越歩行候はゝ可然旨醫師申聞により知行所何郡何村百姓誰方へ罷越暫逗留歩行仕度旨御暇願濟の例あり
一氣分爲養生何郡何村抱屋敷へ折々罷越暫く逗留御暇願濟あり
一兼て志願有之に付有田廣八幡日高道成寺へ參詣歸途何村百姓誰方へ立寄往來日數十日之御暇願濟あり
一菩提所何郡何村何寺へ墓參往來七日之御暇願濟あり
一無足日勤之者御用之透を見合父御免場へ罷越候節爲養生附罷越逗留御暇願濟あり
一總領除之養子厄介之叔父等病氣に付爲養生在中誰々方へ差遣置度旨願濟あり

一醫師御領分在中へ療用に罷越病人之樣子に寄難見放節は一兩日見合療治仕方兼て願候との例有

高野山參詣

一江戸より若山へ立歸御供にて罷越御用留にて若山に逗留中御用之透見合養父舊里在方へ罷越先祖之墓參且誰方へ罷越度往來五日之御暇願相濟あり

一願文例

高野山參詣願

私儀志願之儀御座候に付高野山へ參詣仕度往來六日之御暇奉願候以上

月　　　　何之誰

高野山寺院にて法事を營み又は歸途知行百姓方等へ立寄逗留致度時は其趣認入日數も記す

江戸より罷越たる役所勤之者御用留中御用之透を見合高野山へ參詣御暇願濟む

看病御暇

一諸士之家內父母妻子大病にて難見放容躰之時は看病引届をなして看護を得右之外家內之祖父母又は實父母實兄弟等他家之者大病にて看護人も無之不得止事情あれは其旨出願之上允許を得之を引越看病御暇と云細則等左の如し

看病請暇

元祿九年

一江戸に罷在候者之母於紀州大切に煩之節看病御暇之儀は總領紀州に罷在看病之御暇願候はゝ御暇可被下總領二男共一所に在江戸之時は總領斗御暇可被下候との御事

總領紀州に罷在看病仕候得は在江戸之弟共御暇不被下等弟御國に罷在總領在江戸に候はゝ御暇

可被下事此儀は時に至り可談事　但又親大切に相煩候砌紀州に總領罷在二男は在江戸にて双方分れ居候節次男看病之御暇願候はゝ御暇可被下候

正德三巳年也

寶永三戌年

一看病引願は親子妻は御目付中へ之斷にて引申也右之外は看病引不相成筈然れ共看病人も無之候得は右一類中申出御年寄衆へ申達相濟候上御目付中へ尤以下は頭支配手前にて承屆御目付中へ屆候事此極り今にこの通り也

（一本ナシ天保五午年）

一諸士他所にて勤居候筋宿元にて總領極々大病相煩候節看病願之儀御目付中へ及問合候處左之答有之候事

御目見以上江戸に相詰罷在妻子看病に罷歸候儀は不相濟勢州上方抔に相詰罷在妻子病氣に付看病に罷歸り候儀は願相濟候由答有之候事

一家內を看病之儀は屆にて相濟候事

引越看病御暇願之例規

一祖母を看病　頭役之仁也

進達　一私祖母儀病氣に罷在候處此節別て相勝不申難見放御座候に付諸勤引看病仕度奉願候以上

天保九戌年

一實母を引越看病

進達　尤御上り無之候に付御宅へ持參進達いたし有之候事

何の誰

一私實母何の誰病氣罷在候處相勝れ不申難見放御座候に付同人方へ引越看病仕度奉存候以上

一養父を抱屋敷にて引越看病　無足勤之仁也

進達

一私養父同苗誰儀願相濟當時中之島村抱屋敷に罷在同所より相勤罷在候處此節病氣相勝不申老年之儀旁難見放御座候に付私儀同所へ引越看病仕度奉願候以上

一田邊に罷在候實父を引越看病　無足與勤之仁也

私實父田邊與力何の誰父同苗誰儀此節病氣之段申越甚以無心元奉存候に付何卒暫之内御暇被下置候はゝ同人方へ罷越右病氣之樣子に寄暫看病仕度右御暇之儀奉願候以上

月

本文進達相濟御目付中へ屆る

一實母にても同斷也

一此外實家之兄病氣不勝同人總領看病候得共是亦病氣にて世話難行屆万事委賴を受無心許付暫之内右兄方へ引越看病御暇願出許可之例あり

一江戸常府之者他所親類看病之願

右近親他藩中之者病氣之處外に看病人無之難見放付罷越看病容体之節々止宿をも致し度旨願之上許可を得

看病罷越節は御目付へ届病人不相勝止宿の積なれは其趣も斷右日之內罷越御定過歸邸なれは其段屆る夜中に相成節も同斷若先方病人不勝及深更止宿之時は歸邸之上翌朝相屆不苦

一右病人追々快看病不相越時は亦御目付へ斷る

南紀德川史卷之百二十四

臣　堀内　信　編

法令制度第四

制度　三

養子

按に寛永之比迄は建國の初家士未た多からされは他所浪人さへ徵辟せらる故に諸子の子弟文武才藝あつて奉仕志願の者は二三男を不問續々新進、各家を起して分家別門年を追て增加す嗣子なくして死すれは如法斷絕或は分家より繼承せり此時に當ては殆と養子の要なし後年諸を經るに隨ひ御家中非常に增殖有限の歲入無限子弟の新進に應へからす然に寬文三年武家諸法度に初て養子の令あり曰く

跡目の儀養子は存生の內可致言上及末期雖申之不可用之雖然其父年五十以下之輩は雖爲末期依其品可免之十七歲已下之者於致養子は吟味之上許容すへし向後は同姓之弟同甥同從弟又甥從弟幷此內を以て相應之者撰へし若同姓於無之は入聟娘方之孫姉妹之子種替り之弟此等は其父の人からにより可立之自然右之內にても可致養子者於無之は達奉行所に可受差圖也縱雖爲實子筋目違たる遺言立へからさる事

於是御家にても延寶五年（淸溪公の時）右法令に准し養子之制を定め同時に爾來二三男等の新進を制限し

面々勝手に有付へく旨を合せられたり是よりしては超凡拔群の才藝等あらさる以上は二三男にして新規家を起す能はす衆多千万人總領長子なり以外に生るゝ者は他家養子に有付されは終身世に立つの道なし故に面々文武を勵み品行を愼み良家の養子たらんを競ひ又一方嗣子なき者は養子を求むるに汲々たり爾來養子之法盛に行われ永く世の通義とは成れり養子に種々の區別あり凡規の大躰を示さゝれは法文中或は通融しかたきものあらんその概略左の如し

一養子願御定年齡

總して嗣子なくして死すれは家斷絶之國法なり四十九歳迄は男女子生誕之齡期と見なしたとへ嗣子なく共養子出願に不及れ共五十歳に及ひ嗣子なく養子出願をなさすして死すれは身の落度たるにより末期養子を許されすして家斷絶に及ふ依て嗣子なき者は四十九歳の時必す養子を出願する成規也是を御定年齡といふ

一御定續養子

養子は同姓に限る則武家諸法度之通り同姓之弟又甥同又從弟迄を御定續と稱し入聟娘方之孫姉妹之子乃至實弟實甥等は同姓に准し養子に允許せらるゝを以て之を御定續に准する續きに稱するなり

一聟　養　子

男子なく女子あれは聟を取り養子となすを聟養子といふ若し娘年比に及ひ婚期を過る場合にはたとへ五十歳已下にても出願なして妨なし然る時は其事由を添書上申す四十歳已上なれは添書

に不及也

一末期養子

五十歳未滿男なく女子ある者大病に罹り回復し難き時は末期に及ひ若し相果るに於ては如何躰之者にても娘へ聟名跡被　仰付度旨本人より願出置けは死後に至り存生に申置たる內存之者有之哉と一類之者へ下問を賜ふ（御尋と稱す）此時一類より名差を願出るなり又男女共なくして同樣之場合には末期に同僚乃至支配より誰相果る上は如何躰之者にても名跡被命度旨願書を出す死後同しく下問を賜ひて御定續乃至之に准する續之名差を頭支配より出願す而して兩樣共願之通り名跡を被命名跡人は即日より養父五十日之忌服を受る也いつれも死後に係るを以て名跡被　仰付との辭令なれ共其義は養子に異なる事なし故に通して末期聟養子末期養子と稱するなり俗には急養子ともいひ慣はせり

一無緣養子

無緣之養子は制禁と雖も幕府法令にも自然右之內にても可致養子者於無之は達奉行可受差圖との寛假の法文有之　有德公御代寶永年中御定（法文不傳）以來は三四代も勤仕したる家は平士にても無緣養子被命其外一代二代之勤にては不被　仰付奥向幷家業有之者は格別に被　仰付右は三代も御奉公之者は御譜代と申所にて御定之由なれ共　公儀にては近來より一代之勤にても他人養子被　仰付儀に付御家にても右に可被准旨にて享和三亥年六月向後無緣養子可被　仰付趣を命せらる　法文末に記す

一養子自分願頭支配願之別

御定續之者を養子又は聟養子の如きは末期と雖も自分願也法制に隨ひ敢て憚らさるの義總領出奔跡又は養子戻し後再ひ養子願末期聟養子に非さる養子乃至無緣養子の如きは勝手ヶ間敷憚りありて自分には願出難き旨を以同僚等より願出之を組頭願とし又之を頭支配の願に引直して進達す願意之種類によりて種々區別或は頭役平士によつての差別もありて頗る錯雜なり逐一詳にしかたし

一身分に因て養子許否之別

御家中同士は無論御旗本（幕臣なり）諸藩其外他所者等允許と雖も農商輕輩等は許されす御家中たり共貴賤余りの懸隔あれは免されす是等之區別亦繁雜を極む故に疑敷條は前以筋々へ法規之如何んを諮詢之上出願するを例とす事最多端今解説しかたし

一養子御內意伺

重役即ち御供番頭已上且奥役之向は養子緣組願等本願書提出已前に一旦御內意伺といふを出す之を內伺と通稱せり蓋し　君邊に昵近之身柄万一他より　君聽に達する事あらんも難計又は人品の如何等　尊旨の程を奉伺の意にて役儀を重んする主義なるへし亦願意之種類等に因て成規區々なり

一養子戻し

許可を得て養子したるもの病氣にて家相續難成か或は其者內實放蕩乃至家內不和等にて不得止

實家へ差戻さんとするものは實家と熟談之上双方より願出れは允許せらる尤放蕩不和等を顯しては刑律に觸るゝを以病氣と申立る也養子戻をなしたる者は三年之間再養子出願するを不得

一伊賀已下養子代番

伊賀已下坊主同心之類は株者なるを以て父子交代繼續するを代番又は養子代番と稱し諸士之養子と趣を異にす所故は面々之希望により何人へも株式を賣買姓を冒さしめて交代するを以て也然れとも代番者續き合の成規は諸士養子之續合に准し許否せられたるなり

一養子引取

養子願許可之上は即日養父方へ可引取成規也此節養實双方より其旨頭支配御目付へ屆出る若し都合有て引取延引及ひ度向は差支之品有之を以當分實家誰方へ差置度段双方より出願允許を得て實家に差置追て引取之際は双方より本日引取之旨屆出のみにて願に不及なり

養女厄介も都て是に准す但即日引取には不限なり

一大略如斯にして從來之法令制度頗る細雜多端なり然れ共官簿既に散逸詳ならす僅に遺存の法文を左に掲け次に願書の例文を集記す交互參酌を下せは粗大躰を知るに足らん

已下婚姻初の諸制度に於けるも本義に同し編述之躰裁亦之に倣ふ逐條敢て弁せす

養子規則

延寶五年

一養子願之儀彌　公儀御條目之旨御請被成向後は親之年五十以下之輩は雖爲末期依其品御立可被成

養子は同姓之又甥（弟脱カ）又従弟迄は願次第御吟味之上御立可被遊候間同姓於無之は入聟娘方之孫姉妹之子種替り之弟右は親之人柄に寄御立可被遊此外之遠類は別て品有之者格別大躰は御立被遊間敷事

一諸士末々之子弟共迄只今は手前に養置御奉公望申儀に候へ共數事之儀に候へは悉く可被　召出樣も無之候間夫々之子共は勿論次男にても存寄次第無遠慮役人幷頭支配方へ申達指圖受何方へ成共有付可申候重役之者又は人に寄末々之子共迄被　召出も可有之候藝なと有之者は其品に寄末子にても可被　召出事

同年極

一大名衆幷御旗本之家中御年寄之家中子弟御家中へ養子願不相濟候へ共異姓にても又従弟之續迄は御尋之上願候得は相濟候也

有德公御自記政事草に

是迄常府之者實子無之他屋敷より養子致候者も有之候此末實子無之共他屋敷よりは不和成候間家中之内より養（期）（本のまゝ）等は指出可申候

享和三亥年六月御家老より御用人へ達す

一都て平士養子之儀は御定續幷聟養子之外は一代二代之勤にては他人養子は不被　仰付筈先年より之御定候得共格別之御仁惠を以て向後右躰之筋も御吟味之上他人養子可被　仰付旨被　仰出候事

件之趣組支配へも可申聞事

文化八未年

一御目見已下之者他所より養子之儀向後異姓之又従弟之續迄は相濟右より遠續柄幷妻之親類にても不相整候事

一刑小普請　改易被　仰付有之者之弟を右改易に相成候仁之弟に何某と申仁有之右何某方之弟を養子に遣候儀如何右は御目見以上へは不相濟續有之歟又は跡有之候はゝ其品書面に相認顯可願旨答あり

一小普請御醫師格之仁男子無之女子有之候處女子は先達て他家へ嫁し右之外實子無之付娘方之孫浪人何の誰と申者之忰同苗誰と申者幼年より醫業等仕相續も出來可申者に付問合候付奥御右筆へ承合候處右は不相濟旨答有之候事

同九申年

一座頭之忰之内御目見以上之養子取組之儀右は不相濟

右座頭は佐一と申七八扶持金五兩也

同　年

一御目見已上之次男三男等　御目見已下之方へ家督相續之養子に遣候節右遣し方よりも願書差出し候哉之事尤遣し方よりも願書差出候事以下役之筋養子願之儀遣し方共願書入候筋に候哉と御目付方へ問合候處右は貰方一方願之旨答有之候事

文化十酉年

一實甥を養子に自分願出候樣

異姓之甥は頭役は自分願平士は頭支配より奉願候筋に付粗例も有之候實甥之處も異姓之甥之運ひにて頭役は自分願にても可然哉と存候得共異姓之甥とは趣意も違ひ右躰例無之付奥御右筆へ承候處此方了簡之通頭役は自分願平士は頭支配より願候筋之旨挨拶有之候付右之通取計候也

同十四丑年十月

一實甥は同姓に准し候付頭役平士之無差別自分願之筈奥御右筆出候事

文政元寅年

一國造之厄介社人之悴を　御目見以下之筋之養子に願相濟候哉

右は相濟候也

同三辰年正月

一聟養子三十九歳にて願候へは別紙添願否

跡々聟養子之儀奉願候節四十歳余にても御定年齢には間も有之候へ共娘儀年比にも相成候と之別紙添有之筋粗有之候然處此度四十歳にて聟養子願出候向有之候に付右別紙添候筋にても可有之哉左候はゝ年齢大躰何歳迄は別紙添候筋との境も有之儀に候哉其品承知致度旨奥御右筆へ及內談候處右は三十九歳迄は別紙添候筈四十歳に相成候はゝ別紙添候に不及旨挨拶有之候事

文政四巳年

一御目見已下之面々末期養子願書出し置追て養子取組願書一類より差出候事候夫に付御徒格坊主次男等を右養子に遣し候節遣し方よりも願書差出し候方に可有之哉之事右は遣し方よりは願に不及

候事

同六未年

一他所勤番之仁之子弟此表にていつれそへ養子願相濟候處差支之品有之暫實家に差置追て爲引越候節右勤番之仁より届振之品御目付中へ承り候處右は此表一類より引越相濟候當日相届候筋之旨被申出候付右之段及答

同七申年

一以下役之筋男子一人女子一人有之外に男子無之筋已下役之譯を以他へ養子に遣候儀跡方有之間敷哉と問合候付與御右筆へ及内談候處右は男子一人之外男子無之候へは他へ遣候儀不相成旨答あり

同九戌年

一頭役之次男等を堺與力へ養子願右は不相濟答也

同年六月

一同心体之忰　御目見已下之厄介にいたし御目見已上之方へ養子は不相濟候事

同十亥年

一安藤之家中へ五十人組之頭之弟養子取組右は安藤にて百五十石給ひ有之勘定奉行役之者之由に付右政府へ御談申上候處右之通之役柄に候はゝ可相濟旨御挨拶あり

文政十亥年

一願書二重出し何某次男を他へ養子に遣候筈に付先方より右願差出有之右は尤遣方之儀に付前段何

茱よりは願不差出筋也尤右願不相濟內又前段何某總領へ緣組願差出候儀問合奥御右筆より及談候處右は不苦答

同年十一月

一御目見以上之子弟　御目見已下へ養子に遣候節遣し方より之願進達尤貰方よりも喰合之爲進達之

一養子之向家督被　仰付候上不埒之もの養實一類共內存願等出し候へは實家へ御戻し被遊候儀も有之候へ共右は向後內存願は御取上無之事

同十一子年十一月

一一旦他家之養子に相成候者養實一類等依賴實家相續被　仰付候はゝ其妻は養家之娘又は外より呼取候品に不拘其儘右相續之家へ召連候儀は双方より爲相伺候事

但養家之妻を其家へ殘し置又は聟養子等願出候向は是迄之通宸初より其品申出候筈候事

天保三辰年

一養子戾し候後三ヶ年不相立內養子願尤極老及ひ候に付との品認込相願候得共右は不相成旨答有之候事

同六未年

一養子に差遣候處病氣に付差戾し猶又快相成候上外へ養子に遣候年月之品

右は一と通之書面にては容易に難相濟筋之旨乍去何とそ無據品合も有之歟又は以下役田邊與力安藤之家中抔へ罷越候儀は申見振も有之旨挨拶有之候事　奥御右筆より

一右躰之者十七ヶ年も相立候上相願相濟候跡方あり

天保七申年

一養子名跡被　仰付候向養父之妻養子名跡被　仰付候以前に病死之筋は養母之名目無之親類書へも

勿論不及認出候事

同　年

一出奔いたし候仁之弟を　御目見已下之方へ養子願之儀如何

右は人に寄候儀に付其節々談吳候樣御目付中より答あり

同　年

一格式有之地士之二男　御目見已上之方へ養子に遣し候否

右秋月村秋月久兵衛門二男也難相濟旨

同　年

一養父年齡より養子年齡余丈け有之者養子に不相成

同九戌年

一養子戾し後年月不相立内末期及ひ養子願問合

何歳實子幷御定續之者も無之致養子有之候處右養子戾し候後三ヶ年不立内及末期養子奉願候儀

如何と問合右は願候ても不苦

一大御番頭以下御供番頭以上内伺は奥掛りへ可差出事然共大御番頭内伺に限り奥掛りへ差出候事

一娘方之孫姉妹之子を養子に願候儀頭役は願書差出不苦筈平士は頭支配方迄内存之書付出し其趣を頭支配より奉願候趣に取扱有之筈
一西山何某儀今亦實方之甥を養子に同役願出候付致進達候處實甥は同姓に准し候付自分願に爲致候樣被　仰聞候事
一都て養子相願候節遣方よりも向後内伺可差出筋に候得は遣方たり共可差出事尤内伺相濟表立養子願候節は是迄之通貰方計より相願候也
一御勘定奉行支配小普請にて致病死候者之方へ　御目見已上之子弟を養子に願候はゝ可相濟哉と問合候仁有之右奥御右筆へ承合候處願候て不苦旨答あり
一御目見已下養子之儀是迄百姓町人等之子弟にても相濟候儀も有之候得共向後左之通相極候事
一御目見以上以下は勿論伊賀以下御小人格好迄之子弟
一御目見已下にて致病死候者之子弟幷元貳人扶持以上にて當時致浪人罷在候者且子弟
一頭役已上幷右以下にても三百石以上之召仕譜代侍之子弟
一町在醫師之子弟
一右之外にても母方又從弟迄之續有之者
右之分は相濟其外輕き身柄之者はたとへ御奉公人之厄介に相成有之候ても當人は續無之候得は不相濟事
一養子名跡被　仰付候向養父之妻養子名跡被　仰付以前病死之筋は養母之名目無之親類書へも勿論

認出候に不及

一養子願濟即日に引越候はゝ屆に不及双方支配等有之候て追て引越候はゝ屆る筈候事

但緣組は即日引越候共屆入候事

一養子實家に暫差置度とに限り　御目付中へ談候品さきにあり

一一位樣方奥御小道具役にて致病死候者之二男を　御目見已上へ養子に遣候儀右は不相濟事

一小十人格之地士之悴を續有之　御目見已上之方へ養子相願候儀不苦　御目見已上之仁之爲には右は㔟也　但苗字帶刀　御免之悴に候はゝ不相濟

養子頭願等心覺

一總領出奔右總領之娘は孫女に付娘に御立聟養子　頭願

一嫡孫幼少に付養女へ聟養子　同斷

一總領病死嫡孫承祖　自分願

一總領病死外に實子等も無之付養子　頭願

一總領病死後娘へ聟養子　自分願

一聟養子戻し後猶又娘へ聟養子　頭願

一聟養子御尋後末期大切聟名跡　自分

慶應元丑年閏五月廿五日

一在中之者伊賀以下坊主諸同心へ養子代番等に願出候儀先年相極り候趣も候處右にて者在々人別相

減作方手張自然村作出來農業差支難澁之趣に付御定續之者にても養子代番に不相濟旨先達て相達候得共右は向後母方又從弟迄之續之者に候得は作方不差支者は取調之上相濟せ候間養子代番等願出候はゝ御勘定奉行中へ掛合可申事

支配之內株付之者へも相達候樣

同二寅年二月廿二日

一伊賀以下諸同心等代番之儀是迄は百姓町人共之忰にても相濟候得共右にては御奉公人之威光も薄く百姓町人共との境界も難相立候に付向後百姓町人共より直に代番者難相成左之通可相心得事

伊賀以下之忰等にて町人奉公致候儀無之者は代番相濟候事

百姓町人之忰にても御家中に五六年侍奉公無故障致居人品相應之者に候はゝ代番相濟候事

慶應二寅年五月十三日

一元伊賀以下諸同心等相勤當時浪人にて在町支配外屋敷長屋幷同心地に罷在町人之業致不申筋者勿論代番相濟右之子弟も同樣にて百姓町人に奉公致し無之候はゝ御家中に奉公不致共代番相濟候事

一百姓町人之子弟にても續有之養子之儀頭支配へ申出承屆其節養父手前へ引取二三年も相立尤町人之業不致筋も右養父之代番相濟候事

一在町に罷在候諸同心等之子弟町人百姓に奉公不致且在町支配外にて人別に入り不申筋者御家中に奉公不致共續有無不拘他代番共相濟候事

一頭役以上幷右以下にても三百石以上之召仕譜代侍之子弟右同樣之筋者代番相濟候事

右之外同心等相勤居候共女名前にて在町住居致し其悴在町人別に入有之候者は實子養子之無差別親之代番にても不相濟事

慶應二寅年十一月

一御家中養子相願候節輕者之子弟にても母方又從弟迄之續有之候得は相濟候得共延寶五巳年御定之通向後輕者之子弟は同姓之甥又從弟迄は相濟此外之續合にては不相濟筈に　御目見以下にても同樣之事

下ヶ紙 實甥并異姓之甥も本文同樣相濟候筈に候事

同三卯年正月廿六日

一伊賀以下諸同心等代番之品に付是迄段々被　仰出も有之候得共當時銃隊御組立之折柄老人病人等追々代番願出候付ては是迄之如く代番之途狹く候ては差支之由に付當分在中出離れ不差支分は百姓町人にても三十歲以下十六歲以上にて身躰强壯成者は代番相濟候事

一同姓之弟を養子自分願

養子願文例

何の誰

私儀當年五十歲に罷成候處男子無御座候付同姓之弟誰儀當年何十何歲に罷成申候右之者養子被仰付被下候樣仕度奉願候已上

月

右は去年四十九歳にて相願候筈御定も有之處延引相成候付申込書附添へ出す

一聟養子自分願

私儀當年四十九歳に罷成候處男子無御座女子御座候付何卒　御慈悲を以て如何躰之者ても聟養子被　仰付被下候樣仕度奉願候已上

月　　何　之　誰

一聟養子御尋に付自分願

私聟養子之儀内存奉願候處存寄之者も有之候哉と御尋被成下難有仕合奉存候何の誰何男同苗誰と申者當年何十歳に罷成申候右之者聟養子被　仰付被下候はゝ別て難有仕合奉存候尤被　仰付候儀に御座候はゝ誰儀も差越可申旨申候以上

一遣し方

私四男同苗誰儀當年何十何歳に相成申候右之者何の誰聟養子に奉願度旨申聞候付被　仰付候儀に御座候はゝ私儀も差遣申度奉存候依之御内意奉伺候以上

何　の　誰

一貰　方

私養子之儀先役之節同役共内存奉願候處存寄之者も有之候哉と御尋被成下候付何の誰弟同苗誰

何　の　誰

儀當年何十何歲に罷成申候右之者養子被　仰付被下候樣同役共より御達申上度奉存候尤被　仰付候儀に御座候はゝ誰儀も差越可申旨申聞候依之　御内意奉伺候已上

一遣　方

何の誰

私弟同苗誰儀當年何十何歲に相成申候右之者何の誰養子に奉願度旨申聞候に付被　仰付候儀に御座候はゝ私儀も差遣申度奉存候依之　御内意奉伺候以上

一養子病死孫女娘に御立聟養子

五友之間御廊下詰共

何之誰儀當年何十歲に罷成候處養子同苗誰儀當何月病死仕右之外二男無御座候就夫誰々娘御座候付右孫女を娘に御立被成下如何躰之者にても聟養子被　仰付被下候樣奉願度存念に罷在候へ共右之仕合に付自分には得不奉願候誰儀先祖已來久々御奉公相勤同人儀も久々出精相勤候者之儀に御座候間何卒　御慈悲を以右孫女を娘に御立被成下如何躰之者にても聟養子被　仰付被下候樣仕度私共內存奉願候已上

月

勤書も出る

一養子頭願

何の誰組何の誰儀當年四十九歳に罷成候處實子幷御定續之者も無御座候付養子儀奉願度存念に罷在候へ共右之仕合に付自分には得不奉願候然共誰儀曾祖父以來久々御奉公相勤同人儀も兼々出精相勤候者之儀に御座候間如何躰之者にても養子被　仰付被下候樣仕度旨小十人小普請幷小普請組頭共願出申候前段之通誰儀曾祖父以來久々御奉公相勤同人儀も兼々出精相勤候者之儀に御座候間何卒　御慈悲を以如何樣之者にても養子被　仰付被下候樣仕度私共内存奉願候已上

月

勤書も出る

一養子御尋に付頭願

小普請支配共

何の誰組何の誰養子之儀私共内存奉願候處存寄之者も有之哉と　御尋被成下難有仕合奉存候何の誰何男同苗誰と申者當何十歳に罷成申候右之者養子被　仰付被下候はゝ別て難有仕合に奉存候尤被　仰付候儀に御座候はゝ誰儀も差越可申旨申候由誰申出候段小十人小普請幷小普請組頭共申出候已上

月

一養子延引達し

何の誰

私儀養子之儀内存奉願候處存寄之者も有之候哉と　御尋被成下難有仕合奉存候未相應之者も無

御座延引仕候相應之者も御座候はゝ可申上候間宜御取扱被成下候樣仕度奉願候已上

月

右或は末期養子聟養子共認之

一双方已下役養子願　但右は極之通貫方一方より願候也

私儀忰無御座女子御座候就夫何の誰忰誰と申者當年何十歳に罷成申候右之者を聟養子に仕度奉願候尤被　仰付候儀に御座候はゝ誰儀も差越可申旨申候已上

何役　何の誰

月

右貫方計より願筋也本文養子に相成候者先方之總領に生れ有之者に候へは次留之如き別紙添出す也

何役　何の誰

別紙に奉願候何の誰忰同苗誰儀は總領にて御座候へ共右之外に男子一人御座候付右誰を差越可申旨誰申候以上

一弟を社家之方へ養子に遣

何の誰

私弟同苗誰と申者當年何十何才に罷成申候然る處西名𢌞何村何社神主何の誰病氣に付奉願實家へ御戻に相成跡神職仕候者無御座候付誰を養子に仕度旨同所社家老母初望候付私儀も差遣申度

奉願候以上

一末期聟養子自分願

何　之　誰

私儀病氣に罷在候處段々差重此節至極及大切本復之程難計旨醫師申候夫に付私儀當年二十八歲に罷成候處男子無御座女子御座候付若相果候はゝ何卒　御慈悲を以て右娘へ如何躰之者にても聟養子被　仰付被下候樣仕度奉願候已上

一末期養子御尋に付頭願

小　普　請　支　配　共

何之誰組何の誰末期養子之儀私共內存奉願候處存生に申置候內存之者も有之候哉と　御尋被成下難有仕合奉存候何の誰悴同苗誰と申者當年何十何歲に罷成申候若御尋も御座候はゝ右之者被仰付被下候樣仕度存念に御座候旨誰存生に申置候尤被　仰付候儀に御座候はゝ誰儀も差越可申旨申候由誰一類共申出候段小十人小普請幷小普請組頭共申出候已上

月

本文悴と有之付ては已下に付　可相認段可心付尤已下之儀に付頭留之通添書也

一右に付添書添振

小　普　請　支　配　共

別紙に奉願候何の誰悴同苗誰儀は總領にて御座候へ共右之外に男子何人御座候付右誰を差越

可申誰申候儀に御座候已上

月

一養子戻に付引取

何　之　誰

私何男何の誰養子誰儀肝癖之症に付養生爲仕候へ共爾々不仕次第に相募急に本復之程難計旨醫師申候由に付ては迚も往々家相續難相成樣子に付養子戻申度旨誰申聞候付私儀も引取申度奉願候以上

月

右は戻し方よりも無論出願也文例遺脱

維　新　後

明治三年年二月廿四日

一諸官人士族扶持人之子弟他向へ無緣之養子不相成

諸官人幷士族扶持人等之子弟他之管轄所へ養子に遣し候儀無緣にては不相成候事

明治三年年四月十九日

一養子存寄之者　御尋局々長官にて取計聞屆候事

養子願出候はゝ存寄之者　御尋局々長官にて取計名指願出候はゝ談達之上長官にて聞屆可取計事

屋敷拜領拜借之儀も局々にて取調談達之上聞屆可取計事

同年五月十日

一養子名指願双方より願出候事

養子名指願是迄一方之願に相成有之候得共向後双方共願出可申事

一子弟にて官人之向養子自分願文例

明治三午年五月戍兵都督より養子之儀向後双方より可願旨に極り候付此度扶持人高橋周藏厄介實弟同苗助教を山内孫輔聟養子に差遣度旨周藏より民政局へ願出承屆候旨申合有之然るに子弟にても官人は諸願當人より可相願筈被　仰出有之付養子に參候儀も當人に候はゝ當人より願はせ可然併官人迚も父兄を差置一己之願に相成ては差支之廉も可有之付凡左之振に願はせ可申哉と政事廳へ談達之處了簡無之旨差圖す

何之誰

私儀當年何歳に罷成候處此度何之誰聟養子に仕度旨申聞候付相濟候儀に御座候はゝ私儀も罷越申度奉存候尤父兄誰儀も差遣申度段申聞候間此段奉願候已上

月

總領　付總領除

一總領とは御目見以上の長男にして父の跡目家督相續人たる嗣子を稱す御供番頭以上即重役は嫡子

と唱へ御目見以下は總して倅と稱し總領と唱ふるを不得此總領初て之御目見をなせは命士に列する資格にて勤仕をなさすとも年頭初諸御禮式に出仕する事を得初て之　御目見濟さる者とは少しく差別あり

一總領養子若し病身にて往々奉仕難成と見込たる者は總領除籍を出願す之を總領除きと稱す內實放恣不品行にして訓誡を不用家相續無覺束者を表面病氣と申立總領除きをなす類往々ありたり總領を除かれたる者之名籍は誰總領除之長男何之誰と署するを例とす

一總領病死之時は二三男を總領に立て嗣子に定む病死之總領初て之御目見濟なれは出願許可を得不然は不及出願總領に立るを得養子病死之時は再ひ養子を出願す

規　則

寛延（欠）年十月

一何某妾腹に男子出生其後妻に男子出生いたし年齡余程相違いたし有之候へ共妻に出生之男子總領に相立可申哉妾腹に出生之男子二男に相立可申哉と問合候仁有之候付奥御右筆へ承合候處右は父定次第之旨挨拶有之候事

文化十酉年二月廿五日被　仰出候

一嫡子總領養子是迄角入幷前髪執候節御小姓頭へ頭支配より申出候事に候得共向後不及其儀候事

文化十二亥年十二月十二日被　仰出候

一知行御切米とも跡目寄合被　仰付候節十六歳以上にても前髪有之筋は其品御勘定奉行へ相斷候筈

天保十三寅年

一聟養子戻し後家業有之候付二男總領に被　仰付被下候樣同役添書を以願出候付奥御右筆へ及談候へ共不相濟旨被申出候付書付戻す

同十亥年

一總領出奔に付三男を總領は　御目見相濟無之付右は分て右願に不及筋之旨奥御右筆申出書付戻り來る

右之通に付ては總領　御目見否之儀申添進達いたし候筈之事

一御目見以下之筋總領次男他家へ養子に遣候處右親格式被　仰付　御目見以上に相成候付三男を總領にいたし候儀不及願自然總領に成候事

一何某總領妾腹に男子出生致有之處右何某之次男に致度旨以前は右躰之筋は願不出內にて二男にいたし有之筋も有之候へ共當時は親類書も出候儀に付右は已前之振合にいたし候ても其通り候事候へ共右之趣意挨拶も難出來由御側御用人衆被　仰聞有之候事

一總領御目見仕候已後相果候へは二男を總領に致度との願出候筈總領　御目見不仕內相果候へは二男願に不及總領に相立候筈候事

但總領　御目見濟候ても相果候已後出生之忰は願に不及總領に相立筈も候事

一總領出奔に付次男を總領に願候儀其年に願候ても相濟候哉之品問合奥御右筆へ問合候處右は三ケ年過候て願候筈との旨答あり

一御目見不相濟總領無足勤いたし居候仁病死之節二男總領願否之儀奥御右筆へ及談候處右は總領無足勤致居候ても無差別不及願に次男を總領に相立候筋之旨挨拶あり

天保七申年三月

一都て嫡子養子總領病氣等にて總領除候はゝ御供番頭以上は退身と唱へ其已下は總領除きと可申御供番頭已下は願書にも總領除き度と可相認尤養子にても差別無之事

一總領願文例　自分願

一私總領同苗誰儀病死仕候付次男同苗誰儀當年何歳に罷成候間右之者總領被　仰付被下候樣仕度奉願候以上

月

右は養子病死に付と相認ても同樣也

一總領除願文例　自分願

何の誰

一私養子同苗誰儀久々病氣に罷在色々藥用爲仕候へ共兎角爾々不仕急に全快も難仕旨醫師申聞右躰にては往々御奉公難相勤御座候に付總領除申度尤當人も右之存念に罷在候に付旁右之通仕其儘手前に差置申度奉願候已上

月

右相濟候上次男等を總領に願出る　自分願

私總領同苗誰儀病氣に付奉願總領爲除候就夫二男誰と申者當年何十歲に罷成候付右之者總領被　仰付被成下候樣奉願候已上

月

一二男三男等既に養子に遣しあるか又は改易相成候歟いつれか順次之總領難願節は其子細を記載し四男にても五男にても總領に願出候事

嫡孫承祖

總領(嗣子)又は養子病死し其者の男子即ち嫡孫を嗣子に願へは允許を得然る上は總して父子之關係となりて服忌等も父子に同し只名義は嫡孫承祖と稱するなり

一嫡孫承祖願文例

私儀當年何十歲に罷成候處總領同苗誰儀當何何月病死仕外に男子無之候付誰總領誰と申者當年何十何歲に罷成候付右嫡孫誰を承祖被　仰付被下候樣仕度奉願候已上

何の誰

月

一嫡孫病氣に付嫡孫承祖願同

私儀當年八十六歲に罷成候處總領同苗誰文政六未年病死仕候付奉願嫡孫同苗誰を承祖被　仰

何の誰

付候處右誰儀病氣罷在往々御奉公難相勤躰御座候付承祖除之儀仕度奉願相濟申候就夫誰忰誰と申者當年十四歳に罷成候右誰は嫡曾孫之儀に付承祖被　仰付被下候様仕度奉願候已上

月

養女　厄介

有縁又由緒ある女子を自家縁者等家事乃至緣組等之都合によつて養女に願ひ聟養子をなすあり又他へ嫁せしむるあり又は數名養女にするも妨けなく養子とは趣を異にす然れとも其關係は全く實父子同然にて双方之服忌も父子の通りなり

一厄介は有縁は勿論無縁と雖も由緒あれは允許を得亦家事都合によるは貧困養ひかたき爲にするも多し或は農商之子弟文武藝術熱心と雖も農商にては修學し難き爲め緣故に因み諸士の厄介となるあり厄介となれは其家に同居其苗字を冒し或は不然もあり官邊之名籍初何之誰厄介と署して元籍を離れ養子緣組等都て厄介親より請願全く家族に同し厄介の男子輕職に服し追て家を起し又は文武抜群にして更に被　召出分も往々尠からさる也

規　則

一是迄無緣之女を養女は勿論厄介に相願候儀も不相成事候へ共已來由緒有之右由緒を以申立候へは養女厄介共由緒柄に寄り願候はゝ相濟候事

文化二丑年

一以下役之子弟を同心之厄介に致し候儀如何　右は其家相續之悴に無之候へは不苦

同年十月

一已下役之子弟を同心之厄介に致候儀如何問合有之候處右は其家相續之悴にて無之候得は不苦事

文政二卯年

一御目見以下之厄介を　御目見以上へ養子に遣候儀不相濟候事

厄介は元諸士にて御暇出候者之悴也

同四巳年九月

一養女を養女に遣候儀不相濟儀左之振あり

小林五郎右衞門娘を中川七左衞門妻に緣組願相濟遣し有之候處右娘に女子壹人出生いたし候後不緣に付五郎右衞門方へ引取有之然處右出生之娘は五郎右衞門孫女之儀に付引取厄介に致し有之候處又々奉願五郎右衞門兄水野藤兵衞養女に差遣候儀願相濟候哉之事右は不濟

天保七申年

一養父之厄介を養子之厄介に願替否右は養父病死に付右厄介之人を猶又養子之代に相改願替候哉と問合す右は改て願出候筋に候旨答有之候事

同十四卯年十月

一續有之他所之者を勝手不如意に有之候譯を以厄介にいたし候儀相願相濟可申哉之事

但妻之續にては如何候哉と御目付へ承候處

右は他所者を致厄介候儀甥姪迄は願相済右より遠續之筋且妻之續にては不相済旨答あり

願文例

一娘を養女に遣す　妻之姪也

私娘は何の誰妻之姪にて御座候付引取誰養女に仕度旨申候付私儀も差遣申度奉願候以上

何の誰

月

一孫女を養女に遣　双方より

何の誰娵は私娵方之孫女にて御座候付引取私養女に仕度奉願候尤誰儀も差越可申旨申候已上

何の誰

月

私娘は何の誰娘方之孫女にて御座候付引取誰養女に仕度旨申候付私儀も差遣申度奉願候以上

月

一四男を厄介に遣

何の誰

私儀兼々勝手不如意に付四男同苗誰と申者私實兄何の誰厄介に差遣申度奉願候尤同人儀も引取厄介に可仕旨申候以上

月

一娵方之孫を厄介　娵方は已下也

何　の　誰

元町同心何之誰悴同苗誰と申者私娘方之孫にて御座候處兼々勝手不如意に罷在候付右誰を私
厄介に仕呉候樣誰申候付私方へ引取厄介に仕度奉願候以上

月

右に付別紙振左之通

別紙に奉願候元町同心何之誰悴同苗誰と申者追て外に　御目見以上之方へ養子等に奉願候儀
にては無御座候不勝手に付厄介に仕度奉願候儀に御座候以上

月

一厄介戻し　双方より

何　の　誰

私從弟女何の誰娘厄介に仕御座候處此節戻し呉候樣誰申聞候付私儀も戻し申度奉存候以上

月

私娘先達て何の誰厄介に仕御座候處此節私手前へ引取申度奉存候尤誰儀も戻し申度旨申候
以上

月

維　新　後

慶應四辰年閏四月十六日　於江戶

一子弟厄介之者他向へ養子厄介に遣候儀不相成
御家中之面々末々に至迄子弟厄介片附方之儀は兼々御世話振も有之事候得共御軍制御改革兵隊御編制之折柄に付他向へ養子又は厄介に差遣し候儀續合等有之候共追て相達候迄當分不相成筈候事

出生

諸士一般男女子出生之時は即日妻妾何比出産男女子出生右に付本日より産穢引及候旨頭支配乃至御目付へ届書を出すの法規なり總領妻出産之時其總領勤仕之身なれは無論本人より届出尚其父よりも届出尤生誕者之名前は届出る事なし
産穢明之時は産穢明に付出勤之旨届出す

一從前は戸籍之制あらさりし故人別之事甚疎濶右出生届も畢竟産穢引を主とするもの也されは出生と雖虚弱生立も計り難しとて當座に届出す數年を過き丈夫に成りたる旨にて届出る者尠からす之を丈夫成届と稱し天下公認の法にて幕府初諸侯に在ては表向き御弘めと稱せり又或は相生相剋等之俗説に拘泥特に生年を短縮前後し甚敷に至ては戸主十七歳已下にて死すれは家斷絶之恐れあるを以て父死亡之時實十三四歳なるをも十七歳と届出前髪を剃り成人を裝ふ者ありしと雖も官默許不問に付したり是皆戸籍法なきの弊害なりしか維新後に至て斷然嚴禁せられたり

丈夫成届文例

私妻に（又は私總領同苗誰妻）先達て男子出生仕候處其砌虚弱に罷在生立之程も難計候付御屆不仕候處此節丈夫に罷成候付御屆申上候以上

何の誰

維新後

明治三年年七月廿九日政事廳より

一干支五行相生相剋等之俗説に拘り生年を前後致し屆出候向も有之哉に相聞不律之事に候間向後屹度生年を屆出可申候若是迄前後之屆致し居候者は八月中改て生年を達出可申事

但是迄之儀は何等沙汰に不及候得共向後相僞候者於有之は屹度可及沙汰事

右之通に付年齡相違之筋且相違無之分共來る廿日限半紙竪四つ切へ二通り認可屆出候事

明治四未年正月晦日名草民政局出廳より

一男女子出産之節は妾腹たり共即日相屆可申事

是迄出産之男女虚弱にて生立之程難計由にて不屆出追て丈夫成達出候向も有之處向後本文之通相定候條是上屆出無之向も此節早々可屆出事

名稱

武家に於ては名稱に通稱と實名の二を用ゆ（農商亦私には實名を用ゆるあり）實名は元服之時初て命名し捧文書讀誓詞背旗等に署するのみにて平常用ゆる事なく官よりも稱せす通稱は多なく太郎二郎衞門大夫丞輔等

之上へ一二字を付し用ゆ蓋し鎌倉以來の古習なるへし醫師畫師剃髮職之者に限りては（御同朋は何阿彌と稱す）必す雅名を稱するの習ひとす（醫師は多くは何庵何齋何堂の類余は漢語熟字を用ゆ）退隱剃髮之者も多くは雅名に改めたり

一通稱は幾數回改むるも妨けなし尤請願之上也好事の輩は吉凶禍福ある毎に改むるもありて繁に堪へす又家々通り名と稱し父の家督相續すれは父祖の通稱に改むる多し彼れは誰々の家抔速知には便なれ共數世同姓名にて頗る混しやすく唯實名に照し初て誰々を識別する如き不便ありしと雖も現時公私に支障を見されは其儘行われたり

一避諱の禁ありて御歷世は無論　幕府等の諱を避け或は執政大夫の同名も避くるに至る是等に付ての改名亦多し總して改名允許を得れは頭支配御目付へ屆出るの法なり

一苗字を改むる事其理由あれは請願許可を得然れ共甚稀なり

一御中間躰輕輩及ひ農工商は總して苗字を唱ふるを不得農家之如き公事勤勞あつて苗字帶刀差許さるれは初めて苗字を稱す

一維新後明治五年五月從來通稱名乘兩樣相用候輩自今一名たるへき旨大政官令出し以來士族之輩は專ら實名（名乘也）に改め且つ一字名を付る事風靡時の流行物となれり隨て濫に改名を禁しられ忌諱初諸種繁冗の積弊を一掃して名稱之制一に歸す

改名規則

寶曆十三未年正月

一御家中平士幷以下迄も同姓名之筋は下役より遠慮可致事

一奥御醫師剃髪願名改願表御用部屋にては奥掛り聞届にて相濟候事

同

一御咎被　仰付御城下御免之者名改之節改候段屆出候はゝ其段頭支配より御目付中へ屆候事

一總て隱居又は分知相濟候面々剃髪又は薙髪等之儀願被出候節名改之儀も一所に願書に書入出し可
申筈に相極有之事

寛政十一未年正月廿八日

一御側御用人に同名之面々も有之候得共重き御役人之義に付御供番以上たり共遠慮可致事
御側御用人見習にても同樣之事

文化五辰年閏六月廿七日

一大納言樣御實名之慶の字實名に附候向も有之趣に候　公方樣　大納言樣之御實名之慶之字實名幷
名文字に付候儀憚候儀は勿論之事にて御手前　御當主樣御隱居樣御嫡子樣御實名幷御名文字　御
姫樣方御方々樣之御名文字實名幷名文字に付候儀是迄も憚罷在候事にて候へ共尚心得違無之樣
同し唱に候共文字違候分は不苦事

一太之字之儀は天明六午年相通候通に可心得事

一御頂戴之御一字は勿論憚り候事

右之通之處御役人向奥役之向々は假令文字違候共同唱之文字實名幷名文字に付候儀は心得も可有
之儀と天保六未年八月廿四日被　仰出たり

同年十月廿五日被　仰出候

一年寄衆嫡子に同し名は相改候趣に候共以來は不及遠慮事

文政五午年

一無足勤之筋名改

右は相改させ候上親より切紙にて相改させ候段相届候筈尤無足番外勤之仁にても同様也

但御數寄屋頭之總領にて見習勤之筋は願書差出候はゝ御用部屋開屆　序に御老中方へ申上る

一奥役にて隱居いたし候得は中奥之所にて取扱可申事尤表御用部屋にては名改之節も取扱振同し

一御用人支配より隱居之筋勿論御用人支配也

天保七申年二月

一御老中より隱居之向は隱居にても同名は可致遠慮事

但菊之間詰より隱居も同樣

上より頂戴之名は格別御趣意有之候て被下候筋は不及遠慮御趣意無之一と通りにて被下候筋は可致遠慮事

一改名願許可あれは即日何と改名したる旨を頭支配御目付へ切紙にて屆出る翌日屆る時は反則を以御目付より其手前を糺す

一改名之上は御勘定所御藏所御金藏等關係ある役所へ印鑑を出す江戶は御門之關係あるを以て御目付へも同斷

一御目見濟總領の改名は無足と雖も御目付へ屆る

一名改文例

私儀親之何右衞門と相改申度奉願候已上

月　何之誰

私儀名何右衞門と相改申度奉願候已上

月　何の誰

私儀剃髮仕名何と相改申度奉願候以上

月　何の誰

但蓮髮仕度共認尤總髮も認振同樣也

一苗字改文例

私儀本苗何と相改申度奉願候以上

月　何の誰

但右取扱振表御用部屋にては名改同樣也

嫁　娶

御家中嫁娶は双方より出願其許可は頭支配の申渡也御家中同士身分相敵すれは許可無論と雖も高下懸隔又は農商の如きは許されす往昔は總して簡易なりしならんも事細雜多端結局先縱類例を押して自然之規定をなしたる如し江戸は常府多きを以諸藩家中と嫁娶之者多し所記寛永寛文法令之外は近世嫁娶之制度を諸向より政事廳等へ諮詢及ひ取扱手續を示したるもの也

一婚姻願許可之上緣女引取之節は双方より頭支配御目付へ屆書出す　君家之御精進日に當れは日之内を憚り今夕引取云々と屆る又引取置追て婚姻不時は其趣を書す

一不熟にて離緣末期離緣等總して緣絶は不及願双方熟談之上屆出る下記文例の如し

規　則

一家中之諸侍共緣邊之組大たちたる者は　御意を受候樣になし江戸之御定を御受候て被　仰出候得共小身なる者迄窺申樣に相心得罷在候は左樣にてはなきよし御用番衆と長門守に申聞さるへく候だゝいなる衆之外は　御意を待申さす面々之心次第巽取よめ取可仕候大だゝいの衆も心次第に存通老中へ窺つかい可申候御小姓衆へ被　仰付候儀なとにて小身なる衆に娘持たる者御尋被成候を何も　御意なくてはならぬ事に若相心得候はぬ樣に老中心得可參候急申ものは早々つかい候樣にと可被　仰付候以上

寛永廿一年申十一月十一日

御家中緣邊被　仰付候御禮其外不寄何事爲御祝儀御樽肴上け可申樣子之事

一御老中其外宜衆は何にても輕御肴一種小き柳樽壹荷其外御肴計或は口上之御禮其人可爲相應事
一互の祝儀は猶以其身の爲相應事

寛永廿一年申極月五日

一妾を本妻に直す事　御意に不入依之物をも存たる者に御尋候へは古來よりも不可然儀とす時代に依て制禁を加へたる事も有之總て志有之者之なすへき儀にては無之候由然は御家中面々向後相意得候樣に頭衆能く組中へ可通此上にて不用者は急度可達御耳に也近代之風俗華麗輕薄を專として緣者之間も兩家之親類近族は不及言遠族迄も互に音信聘禮を往來し彼此と取持故兩家共に厄害を受事多し其品々の費一々不可書盡右之故貧家財產之不足を恥不乏家も事煩多なるを嫌ひ所詮右之厄害を請んよりは妻子を不迎かましと心得事いかにも尤也然時は風俗と云なから互に無用之事に徒費を仕候處近比愚癡之至也向後は面々其意得仕舅は娘を聟の方へ奉公に遣候樣に存万事に付て聟之家に厄介かけ不申樣に心得可申事と被思召候御家中諸士娘多持候者似合敷聟無之故年たけ候迄親之手前に掩置迷惑仕候段被　聞召及候に付て加樣之儀をも被　仰聞候はゝ向後面々其意得仕右之費を改候はゝ似合之聟も出來可有之かと思召候て如此候也右之御含を以諸事輕樣にとの思召成故先年之書付も被　仰出候也此趣能相心得候て御書付よりも輕く仕分は面々心次第也

万治三年子正月

御家中祝言道具之達

一貳百石より三百石迄長持二掉、挾箱一、葛籠一、行器壹荷、屛風一双、但いかにもそゝう成を、指樽

一荷、掉のたい一、但木地にても竹にても、但蒔繪之道具可爲無用事

一四百石より七百石迄長持三掉、挾箱一荷、葛籠一荷、屛風一双雇相成を、行器一荷、指樽一荷、衣桁一

但蒔繪之道具可爲無用事

一八百石より千四百石迄供乘物一丁、長持四掉、挾箱一荷、葛籠一荷、行器一荷、指樽一荷、食籠二つ、

屛風大小二双、衣桁一つ、但蒔繪之道具可爲無用事

一千四百石より二千四百石迄供乘物一丁、長持五掉、挾箱一荷、葛籠一荷、屛風二双、行器一荷、指樽

一荷、食籠二つ、衣桁一、但蒔繪之道具可爲無用事

一二千五百石より三千四百石迄供乘物二丁、長持六掉、挾箱一荷、葛籠一荷、屛風二双、行器二荷、指樽

食籠二、衣桁二、貝桶

一三千五百石より四千四百石迄供乘物二丁、長持六掉、挾箱一荷、葛籠二荷、屛風二双、行器二荷、指樽

食籠二、衣桁二、貝桶

一四千五百石より六千九百石迄供乘物三丁、長持七掉、挾箱一荷、葛籠二荷、屛風二双、行器二荷、指樽

食籠二、衣桁二、貝桶

一七千石より一万石迄供乘物四丁、長持九掉、挾箱一荷、葛籠二荷、屛風三双、行器二荷、指樽食籠二

衣桁二、貝桶

一油箪仕候共絹布之類可爲無用事

一八百石より千三百石迄言入之使與添之侍に引出物錢一貫文此外可爲無用事

一千四百石より貳千九百石迄　同斷　銀一枚
一三千石より六千九百石迄　同斷　銀子三枚　但道具にても右代銀程
一七千石より一万石迄　同斷　銀子五枚但同斷
一總てむこ引出物之外諸親類道具之取やり可爲無用事
「一本に此條は下小袖代付云々の上に載す」
一貳百石より千石迄上小袖表一つに付代銀六拾目
一千百石より貳千石迄上小袖表壹つに付代銀七十目
一貳千百石より四千石迄上小袖表一つに付代銀八十目
一四千百石より六千九百石迄上小袖表壹つに付代銀九十目
一七千石より一万石迄上小袖表一つに付代銀百目

聟引出物

一貳百石より貳千石迄刀にても脇差にても一腰　但新身
一貳千百石より三千石迄刀にても脇差にても一腰代金壹枚程
一三千百石より四千石迄刀にても脇差にても一腰代金貳枚程
一四千百石より七千石迄大小代金貳枚五兩程
一七千百石より一万石迄大小金三枚程
一小袖代付御定より高直成表地他國にても求申間敷事

一聟舅之方親子兄弟伯父猶子從弟あいやけ相聟こしうと右之分は祝言之時に至かるき肴にても一種宛は不苦其外親類緣者たりともかつて可爲無用事

一女之小袖表壹つの代百目より上之表商買仕間敷事

一右御定書より輕く仕候得は猶以可然事

一祝言仕候はゝ御目付中へ其日限を知せ可申事

一祝言之夜三つ目五つ目祝之尅聟舅之所へ御目付參諸道具見屆け指圖仕其品々不殘書立可申候かるき衆之祝言有之節は十人組御目付或は御徒目付或御步行目付參諸事指圖仕其品々書立可申事

万治三年子の二月廿三日

定

一娶候ものに水あひせ候事向後停止之此旨下々へも可申付事

寛文四年辰極月

一祝言之振舞御定之通り　但汁は二つ也

「右年月もなく全く覺書に記したるものか振舞定書は法令之部にあり」

「以上は國初の定法書及ひ監察府記錄に依て抄錄す」

天保八酉年

一厄介女緣組否

坊主組組格之妹を御徒格醫師之厄介にいたし奧御醫師へ緣組如何候哉と問合す右厄介願は相濟

候へ共縁組願は不濟筋之旨答有之候事

同九戌年

一養（女カ母）幼少にて養父存生中婚姻相整無之付養子之妻に致度旨願候はゝ可相濟哉右は不相濟答

同

一本家兄之方に娘一人有之別家弟之方に男子兩人有之二男を本家へ養子に遣し右娘を別家總領之妻に遣候儀右は如何右は相濟候事

一御目見以上之仁妻之續に同心之娘有之右娘を厄介にいたし御目見已下へ縁組如何右は不相濟

一配下之姉妹を一組にて無之頭へ縁組否問合候付奥御右筆へ承る右は一組にては難相濟筋候へ共組違に付相濟候旨答有之候事

一養子先妻に出生之娘を後妻之兄弟へ縁組願否之事右は難相濟筋之旨答あり

一離縁之方へ再縁願出候處右は不相濟旨答あり尤子出生無之故か

但子有之候はゝ願振に寄朝暮子か母を慕ふと申樣之願面に可相濟儀も有之

一町人之娘御目見已上之仁へ縁組否

末期に御定續之者無之付養子之儀奉願候處御尋有之候付一と通之養子奉願筈に付被　仰付候上町人某娘は養父之姪にて血脈之者に付右養子妻に縁組相濟候哉と問合候付跡方吟味いたし候へ共無之付奥御右筆へ及談候處右は町人之娘續有之候共　御目見已上之筋へ直々縁組之儀は差支候へ共一旦外へ厄介にいたし何の誰厄介女は何の誰姪にて血脈之者に付右養子之妻に縁組相願

候はゝ可相濟よし

一緣組願相濟娘を引こさせ候處延引及候に付不念書出候此者は何等に不及旨留あり

一肩衣　御免御書物方書役何の誰厄介女を御留主居番何の誰へ緣組之儀右書役之仁より願出尤右厄介女は御藥方坊主之仁之姉にて養家母方之從弟達に付先達て願相濟厄介にいたし有之との別紙も出し有之候へ共不相濟筋之旨被　仰聞有之事

一緣組願込中娘之親病死に付右は願替候樣被　仰聞願書御下けに相成追て願替に相成有之候事

一改易被　仰付候者之妹を改易に相成候者之叔父之厄介に致し置有之右妹を以下之方へ緣組相濟有之候事

右叔父は已上之仁なり改易被　仰付候仁も以上也

一右に付添書左之通いたし相濟有之候事

右叔父より　何　の　誰

別紙に奉願候私厄介女は養家父方之甥何の誰妹にて御座候へ共誰儀先達て改易被　仰付候砌御屆申上私手前へ引取罷在候者にて御座候已上

月

一總領除等之娘等に候歟又は養介女に候はゝいつれ其品別紙に相認差出候筈候事

一菊之間詰衆之家老之娘を大御番格之總領へ緣組願相濟有之也

一御　番之總領へ土佐殿之家來之妹を緣組願相濟有之也

一代々苗字帶刀　御免之百姓之娘を續無之　御目見以上へ縁組願不相濟
一御目見以上之仁實甥伊賀之者之娘を厄介にいたし　御目見以上之方へ縁組相濟
一總領末期緣絕之女子を二男總領に相成候弟へ縁組願相濟候事
一在醫師之娘等を　御目見以上之方へ縁組願右は續無之候共相濟候事
一續有之六十人者之娘を大御番之厄介に致し相濟有之處右厄介女を頭役之總領へ縁組願之儀不相濟候事
一地士大庄屋之娘を續有之頭役之仁へ厄介に願相濟有之處右厄介女を頭役之方へ縁組に難相濟平士之方へは可相濟事尤前段地士大庄屋之娘を續有之頭役之厄介にいたし追て右家之總領へ縁組右は相濟候事
一千石以上之重役之家來重召仕候者之娘を續有之候へ共平士之厄介に相成諸士之方へ縁組相濟候事
一安藤家地士にて扶持被遣無之筋之娘を御目見已上之方へ縁組は不相濟事
　但頭役已上之家來之娘平士厄介に相成候者諸士之方へ縁組は不相濟
一御目見以上之方へ御目見已下之娘を厄介にいたし有之候右厄介女を伊賀以下へ縁組之儀右は不好筋に候へ共相願候へは相濟候事
一御目見已上之娘を三人扶持取御勝手方勤之仁へ縁組願右は身柄三人扶持には候へ共元來輕き身分に候付不相濟候事
一某實子無之他家より致養子右養子引取有之候以後右養子實家之姉を某妻に願候儀右難相濟筋候事

一御目見已下之方へ所緣有之町人之娘緣組は相濟

一次男他家相續之養子に遣し養家にて何某娘を右養子之妻に緣組願相濟有之候處右緣女未不引取已前右養子病死に付末期離緣致候右りえんに逢候緣女を前段養子之實家之兄之妻に願候へは相濟也

一頭役已上之家來之娘續有之奉願平士之厄介にいたし有之筋右娘諸士續有之方へ緣組願右は難相濟右之通候付諸士之厄介にいたし以下役へ緣組右は相濟

一頭役已上之家來之娘平士之厄介に致し候儀續有之候得は相濟也

一無緣之女を養女に相願候儀不相濟勿論厄介に相願候儀も不濟尤然共由緒柄に寄又可相濟儀も可有之事

一離緣之儀是迄不申屆向も有之候へ共向後頭支配へ相屆候筈追て頭より御月番御老中へ可相達事

　緣組頭支配にて承屆候筋は其通候事御月番へ相達に不及

一他所より之緣組相願候筋は先方祿高認不出候共以來格祿共可認出事

一以下役之方より頭役之方へ緣組願は不濟

一實家之甥へ養家之妹を緣組願濟

一以下役稽古料取等之娘或は姉妹等を續有之御目見以上之厄介に致し右之者頭役之方へ緣組右は其人に寄可相濟

一厄介女緣組元同心にて出奔いたし他國にて出生之娘平士之厄介に致し御目見以下之方へ緣組願右は相濟也

一養家之妹他家にて生立候譯を以養子へ緣組願

垣屋十郎兵衛儀養父十郎兵衛妾腹に出生之娘有之處十郎兵衛病氣引中之儀に付妊身中朝倉友嶋（十郎兵衛之甥也）方へ引取出生同人手前にて生立近比十郎兵衛祖母介抱旁右祖母方へ引取有之然處當十郎兵衛妻此度病死仕前段妾腹之娘は万端行屆有之候付當十郎兵衛へ緣組右は不相成筈之旨答あり

一所緣有之百姓之娘を　御目見以上之節支配方へ相願養女に致置候筋追て　御目見以上被　仰付候上外に實子幷御定續之者も無之付右養女へ聟養子之儀相願之儀は如何と問合す

但右養女と申者先妻之妹にて自分之爲にも從弟女に候事

右御右筆へ問合候處右は養女に願候儀何年何月　承度旨申出候付其段申進候處右之通養女へ聟養子願候て相濟候筋之旨答あり

一三千石以上之家來之娘を御目見以下へ緣組は支配にて承屆候事

一此御方以下役と　左京大夫樣方　御目見以上と緣組願右は御老中方へ進達に不及　左京大夫樣御家老へ申合にも不及段も奧御右筆申出候品有之旨小普請方より申來

一目上之方へ引取置追て婚姻相整度旨緣組願書差出不相濟內右目上之仁病死に付願替候向も有之彼是班々に相成有之候付奧御右筆へ承合候處右願替候方宜との答有之候事

一御納戸御番之仁之娘緣組願申渡濟御納戸頭より御目付中へ屆候處右御書付年寄衆御渡之即日被申渡有之候右は如何之譯にて即日被申渡候哉其品被申出候樣御納戸頭へ相達候樣致度旨申出候付其段相達候處右は翌日申渡筈相極有之處全心得違即日申渡候段不念申出書付差出候事尤右は已後念

入候樣被相渡

一靑木四郎左衞門儀娘を御鉄炮奉行勝野才兵衞孫へ緣組願濟御書付今日御老中方被成御渡候處才兵衞儀去る四日より來る廿三日迄忌中に罷在候付同廿四日申渡候筈及取計就ては四郎左衞門へも同廿四日被申渡候樣にと書取大御番頭中へ申合候事

一本文申渡相濟御目付中へ相屆候節別紙は御書附之日附にて屆候事に付右之段咄し候事

一右之通に候處廿四日には才兵衞忌明に候へは可申渡筈候處停止に相成候付奥御右筆へ談見候處申渡之品に寄差別も有之候へ共緣組願濟は差急候品にも無之候間停止明後取計候樣申出候に付停止明之上申渡之事右に付大御番頭中へも其趣咄置候事

一御目付中へは御書付之日段之終にて相屆其段咄し置

天保十一子十一月廿三日

一日前宮奉行森本藏人姉を布衣以上頭役之妻に緣組願可相濟哉之儀問合候仁有之相當之例無之付奥御右筆へ問合候處難相濟筋之旨答あり

一去る子年右藏人親安藝娘を獨禮小普請持格之仁へ緣組相濟有之事

緣組願文例

初　緣　　　　何の誰　娘

初　緣　　　　何の誰へ

或は　初　緣　　　　何の誰　娘

再縁　　　　　　誰総領

何の誰へ

右之通縁組仕度奉願候尤母方へ引取置追て婚姻相整申度奉存候以上

何月　　　何の誰

右一通

何之誰へ績之品は無御座候以上　　　何の誰

月

右一通

何の誰

別紙に奉願候私娘は　何方樣へも御奉公仕候者にては無御座候以上

又は

何の誰

別紙に奉願候何の誰娘は　何方樣へも御奉公仕候者にても無御座候以上

右は双方より之願振也

再縁に候はゝ

再縁

再縁　　双方再縁に候はゝ如此

一大名衆之家來と縁組

初　縁　　　　　永井飛驒守家來
　　　　　　　　何の誰娘
初　縁　　　　　誰總領
　　　　　　　　何の誰へ

右之通緣組仕度奉願候尤引取置追て婚姻相整申度奉存候以上

　　　　　　　　何の誰
　　　　　　　　是は右に有之總領之親也
　　　　　　　　何の誰

何の誰儀は永井飛驒守殿馬廻り役にて高七十石給者にて御座候尤御家中相應之緣談も無御座候付別紙之通奉願候儀に御座候以上

　　　　　　　　右同人　何の誰

何の誰へ續之品は無御座候以上

　　　　　　　　右同人　何の誰

別紙に奉願候何の誰娘は　何方樣へも御奉公仕候者にては無御座候以上

一右御老中方等之家來と緣組にても御家中に相應之緣段も無御座候付と之別紙可認事尤格祿共相認候樣と之品は極也

一願書に誰方へ引取置追て婚姻相整度と認め相濟有之處未た引越さゝる內誰病死之時は斯々に付いつ引越させ婚姻整度と願替の願書を出候事

　右願濟申度は平服也

離縁届文例

双方より出す頭支配御目付へ届る

私總領同苗誰妻に何の誰娘を緣組願先達て相濟御座候處差支之品御座候付双方熟談之上緣絕仕候依之御屆申上候以上

何月幾日

何の誰

私娘何の誰總領同苗誰妻に緣組願先達て相濟御座候處差支之品御座候付双方熟談之上緣絕仕候依之御屆申上候以上

何月幾日

何の誰

或は願相濟先達て引取御座候處不緣に付双方熟談之上離緣仕今日誰方へ差戾し候云々

里方よりの屆も是に準す

一未期離緣之分は

何の誰 一類共

何の誰妻は何の誰娘にて御座候處誰儀末期離緣仕候旨申置候付今日誰方へ差戾し申候此段御達申候以上

月　日

引取方よりも右に準し届出す

一總領等之妻末期離縁なれは父又は養父より屆出る

維新後

明治二巳年十一月廿日政事廳より布告

一是迄縁組願等孔雀之間席並以上は進達右以下は支配々々にて聞屆候得共此度士族被　仰出候付ては都て是迄進達之分も支配々々にて聞屆候上政事廳へ可申出事

明治三午年四月廿三日政事廳より

一從來縁組之儀は双方身分に應し差許候得共向後士農工商相互に縁組不苦官人は頭支配士族は肝煎農民は郷長町人は市長にて聞屆置可申事

本文官人縁組之儀は其節々頭支配より政事廳へ上達可致事

一士農工商其他之管內へ縁組之儀は是迄之通相心得可申事

一若不縁之節は向後其品柄頭支配幷肝煎郷長市長へ申出篤と取調聞濟之上に無之候ては猥に離別不相成事

一是迄內々縁組致し來出願等無之筋も此度之被　仰出に付ては向後親類書へ認候等に相心得可申事

一婚姻は人倫之大本に付各身分に應し相當之禮儀を修め始を正しくいたし候儀は申迄も無之儀に候得共向後猶更不猥樣相心得可申候若尊長之許可を不待媒酌に不寄して聊にても姦通ヶ間敷儀有之候はゝ無用捨御咎可被　仰付尤其事之輕重に寄先前御規則之通被處嚴刑候儀も可有之候間心得違

無之樣可致事

喪　忌

按に武家喪忌の制は　東照公の御時南光坊天海神道服忌令を參酌考定する處あり　大猷公林道春に命し再ひ之を考訂せしめ給へとも未た天下に頒つに至らす後　常憲公に至り林春常に命し少しく改訂堀田正仲總裁となりて貞享元年三月三十日始て普く天下に頒布是を武家服忌令と云ふ外に公家神道の二服忌令あるを以て也（と）（一本アリ）同三年四月廿二日尙訂正增加元祿元年五月十日同五年九月廿日追加同六年十二月改正の事あり爾來追加增補枚擧すへからすと雖も大本は貞享元年の令を終始遵奉維新に至る迄も變る事なし都て　幕府の大小監察司る處にして數百年間大小諸侯初諸向より本令に明文なく疑忌之分を兩監察へ質問應答其他巨細詳記したるものを服忌令明細集と題し世に行わる依て服忌の事爰に贅せす

一抑服忌令制は一つは悲哀愁傷父母に喪する齋忌之義に基きたる如し即ち鬚髮を剃らす音曲娛樂を停止する如き是也一つは動物之死躰血液は不淨穢れ忌は敷ものとの慣習義に取れる如し即ち神事社參を禁忌し　君前殿中を憚る是也左れは齋忌と禁忌の兩義を含有したるものと雖俗習之上は多くは不淨穢れたる方にと我人共に信を置し如し故に忌御免或は忌中なから出勤を命せらるれは役柄之特權ゆへと意氣揚々榮譽と思ふの弊を免れさりし服穢產穢流產血荒踏合（ちあれふみあはせ）（病死又は自害人又忌中の家に入るもの皆觸穢とす唯水を浴すれは穢れなし但宅中に死人あれは一日穢るといふ如きは踏合といふ）の類亦服忌令の條中にして共に不淨穢れに立たる也

國忌

御歷世之大喪は國家の大事たるはいふ迄もなし一度此大變に遭遇すれは上下悲哀痛悼國中闇として暗夜の如し發喪葬儀百般之典禮儀式は一朝一夕に非す百司諸局晝夜盡瘁執掌御用人總調元となり僚屬別局を開て古規先蹤を審査調帳を製す一切の準備殆と數月を要し後發表せらるゝ次第にて多端繁雜筆し盡すへからす是等の事此編の主とする處に非れは唯國忌之概略を述せんとするも調帳一切傳らされは記載の術なし僅に停止制の一事を掲く

幕府の制　將軍家の外は薨去御他界と稱する事を不得三位已上は逝去と稱す嘗て左之布告あり

年月欠記

都て大名衆等病死之節侍從已上は卒去と唱四品已下は死去と唱候事尤此御方より御養子に被爲入候御方幷御續合之無差別本文之通り唱可申事

一停止(ちやうし)

停止とは音曲鳴物(ありもの)を遏密の義にて謹愼の總稱なり停止の内に鳴物(あり)停止普請停止の別ありて普請は土突音頭氣遣(や)りの高聲木材鋸鉄槌打の物音騷敷により停止す遊戲に非るを以日數短し鳴(あり)物は音曲を專にする芝居角力諸興行もの總て遊戲に係るものにて日數長し文武藝術及ひ職業に關する物音は普請停止解ると同時に解除す音曲等はたとへ職業と雖も鳴物解除迄は停止せらる仍て自家にて亂舞謠曲琴三味線等一切ならさるなり

停止觸は總して御目付より布告す　君上等之大喪御簾中樣御隱居御先代樣御嫡子樣には觸流しと稱し普請鳴物とも

日數を限らす上下之御家中月代鬚を剃らす万事謹愼文武藝術を廢し嫁娶を初吉禮を行わす他行物見遊參を愼む勿論なり 市在は此限に非す日數制限あり 然れ共普請鬚は概ね三十五日程月代は五十日にて許さる

尤御目見已下輕輩は差別あり

一諸公子方御實母の御喪には御續によつて停止日數差等あり原則審ならされとも概ね鳴物十日普請五日又は鳴物七日普請三日にして鳴物三日の停止には普請は不苦之例なり

一將軍家之大喪は幕府より天下停止觸出る亦觸流しにて陪臣は七日過月代剃普請は凡三十日鳴物は凡五十日なり

君上御續被爲在御忌中なれは夫に准し謹愼する事無論なり此外天下停止は時々幕府の布令に從ふ

一御三家御三卿方の喪は天下停止觸れ出る普請三日鳴物七日停止　將軍家御機嫌伺として總出仕あり　御嫡子方は普請三日鳴物五日　御簾中方は鳴物三日普請不苦と令あり然れ共尾水御兩家は御家に於ては天下停止よりは重く　三卿方御連枝方御緣家方は時々の御續によつて差別あり日數等詳ならす唯左記を存す

一停止中講釋止振之儀右は停止明後　上に御忌中內は講釋相止

但右之通候へ共其節々不達出事

天保六未年二月

一愼觸出右愼日數相立候ても　公儀御忌中其外　上に御殺生不被遊節は御家中も相愼候筈との儀古き極に有之事停止日數相立候ても前段之通　上之御忌殘り有之節は御家中も相愼候筈と有之候へ

共右は殺生計にて鳴もの音曲は不苦然れ共　上に御忌殘り有之節は御役人向宅にて鳴物音曲等は恐入候事に付御役人向に限り相愼候方にも可有之哉と政府へ相伺候所右は御役人向にても停止日數相立候はゝ音曲等は不苦旨勿論殺生之儀は御忌明まて相愼候事

同十三寅年九月七日

一是迄　尾水樣御二男樣以下御姫樣方幷御連枝樣方御嫡子方共御卒去御死去之節鳴物停止有之候へ共已來右之方御卒去等之節鳴物停止無之筈候事

右之外幕府且御家御法會に普請鳴物停止之事あり又御家中愼日と稱し　君上御精進日には婚姻祝儀音曲殺生等をなさす謹愼す典禮中年中行事の部に記す

一文政十一年九月十日普請幾日鳴物幾日と申停止の節は普請停止日數の內は武藝稽古も相愼可申內稽古も同樣責馬は不及相止事と布令あり

御家中喪忌

一父病死

御家中父病死すれは即日總領（又は養子）より左之ヶ所へ病死屆を出す

頭支配　御勘定奉行名宛　組付之外御用人　御書物方頭取　御目付

一男子無之時は一類より病死屆をなす端書に誰儀男子無之存生に願置候品も御座候間本文之通私より御屆申上候又は男子御座候へ共幼少にて生立の程も難計に付存生に願置候品も有之云々抔と認む

一御書物方頭取へ之屆は御留守方なれは御在方の同役へ飛脚書狀を以屆候樣文政十一子年九月定

一總領養子より即日定式之忌服受今日より忌中罷在旨頭支配又御用人御目付へ屆る此外へは不及

　屆無足勤致居候者は忌中引と認む

一年齡尋

右病死屆を出せは即日御目付より切紙を以嗣子之年齡幷實子養子との品且御目見濟候はゝいつ比との儀をも可申出旨申來る組付なれは頭支配へ依て私何の何歲に罷成實子にて未た初て之　御目見不仕或は何年何月初て之　御目見相濟候と返書を出す

　右は御目付より病死言上に付て也維新後改革之品末に記す

一病氣大切及病死御尋

御供番頭已上重役と稱すは病氣大切之時嗣子より父同苗誰病氣罷在處至于今朝又は何々及大切たる段御用人へ屆出の制なり然る時は即刻御用人より本人へ向け病氣及大切候段達　御聽無御心元思召旨切紙達す之を御尋と稱す依て本人名義にて　御意の趣難有仕合奉存旨返書を出す

一濟て病死屆に及ふ尚又御用人より嗣子へ宛父同苗誰病死之段達　御聽不便　思召旨　御悔之趣傳達あり亦　御意之趣誠以冥加至極難有仕合奉存候との請書を出す

　按に　有德公御自記政事鏡に家老用人は重役なれは病氣にて不勝時は安否爲御尋使を以肴一折人參貳匁可遣表役人勝手役人は是迄大病にても尋不申候へ共以來大病之時は子供か親類之內召呼人參一匁肴遣へしと御記載あり之に由て見れは病氣御尋之事は往昔より之制と見へた

り然れ共近世は重役已上に限り其他へは御尋之事なし

一勤　書

父病死より一七日之内に父一代勤務の次第を美濃紙續きへ筆し頭支配又は御用人へ出す頭支配人は之を政府へ提出す書式一定之法あるを以て不適應之分は同府にて掛紙訂正之上認直し可差出指令あり仍て一兩日中に認直し原紙と共に再呈す

右は跡目之必要に依るなり

一忌　明

父母之忌五十日を過れは私儀何月幾日より父之忌中罷在候處今日限にて明日より忌明候と頭支配御目付へ屆書出す

父に限り今日切にて明日より忌明と屆る養子に參たる者實父之忌中も同斷

一父にても隱居にならは昨日限にて今日より忌明とす

母及ひ親類等之忌中は昨日限にて今日より忌明と屆

父の忌明になり未た跡目無之內他之忌中に及ひ右忌明屆之節も今日限りと可認事

一御城附は何之忌に不拘今日切にて昨日より忌明と屆る

今日限と屆るは忌明翌日にも跡目可被　仰付も難計爲也

一忌御免及忌中なから出勤

重役已上御役人向御側向勤等は概ね定式忌半減を過れは其許忌（明日/今日）より御免被遊旨傳達あり御

用都合によりては半減已上にても御免の事あり然る時は其日より出勤全く忌明に准す尤出勤届をなす也

一役所勤等繁勤之向は常式忌日半はを過れは其許當時忌中には候へ共御用多に付今日明日より出勤可致旨上官より傳達す實は御用之繁閑に不拘一つ之習慣となれり此分は勤務上は平日通りなれ共身分に付ては尙忌中の資格なり忌中なから出勤及ひ本忌明之節共夫々へ出勤届をなす

一家族及親類之忌中

妻子兄弟等家族及ひ忌掛り親戚の忌服は總て服忌令通り之忌服を受忌中引忌明及忌御免忌中なから出勤等之事前記之例に準す

二重忌服受る時は私儀何續之忌中引仕候處何續誰何今曉病死仕候付定式之忌服受今日之當番より猶又忌中引仕候と届る

當番日に無之時は當番日之節何々猶又忌中仕候付今日之當番より出番不仕と認

二重忌一方忌明之時は何々に付何月幾日より忌中仕候處昨日限にて相濟候付今日之當番より出勤可仕處未た何續之忌中罷在候付其儘忌中引仕候と届る

前之忌中重く後之輕き節は何續誰病死仕候に付定式之忌受今日より忌中引可仕之處當時何々之忌中罷在候付分けて忌中不仕候と届る

一遠慮引

七歳未滿之男女子病死之時は七歳未滿に付今日より三日遠慮引仕候と届る

右男女子未た出生屆をなさゝれは私娘去る何年何月出生仕候處虛弱に付生立之程も難計付御屆不仕候處病氣罷在養生不相叶今曉病死仕候尤七歲未滿に付今日より三日遠慮引仕候と屆る

一江戸常府病死

病死屆初都て前記之如しと雖も御長屋住居常府は御長屋定により左之手續をなす

出家を呼讀經せしむる時父同苗誰病死に付今夕且那寺より出家何人參り今夜中讀經爲仕候間何所御門へ元御通し可被下と　御目付へ屆る

葬送之時何々病死に付今日何時何寺へ葬送仕候間何處火用心番所前幷何處御門前通り何處掃除門出候樣尤出家何人供之者何人幷日雇之者何人今日何時何御門入掃除門出切に相成候間入帳面消候樣且又供女何人掃除門出何御門入候間元御通し可被下と　御目付へ屆る

此時且那寺に無之寺院へ葬送すれは且那寺何處何寺へ葬送可致處存生に申置候品も有之に付本文之通何處何寺へ葬送と端書に認入る

又改宗の時には何宗何處何寺且那にて御座候處父存生に申置候品も有之付致相對此度何宗何寺且那に相成本文之通何寺へ葬送と認む

通用御門は死人通行不成付邸中所々に掃除門あり不淨門とも稱す平素は締切此屆により御小人押明けに來る火用心番所御門は番所なる故其前通行を斷る也

寺參詣御暇

葬送之時及ひ折々參詣御暇願といふを出す書式左之如し

旦那寺　　何所　何寺

私父同苗誰病死明日葬送仕候間其節右之方へ罷越申度御暇奉願候以上

月　日　　何の　誰

忌中佛參には當時忌中には候得共折々右之方へ罷越申度御暇奉願と認む

右即刻許可を得五十日忌中日々佛參不苦尤其節々今日御暇之方何寺へ罷越との旨御目付へ屆るなり

一父に不限家族又は親類之葬送忌中に佛參之時も都て是に準す

但し折々參詣願は嗣子及嫡孫承祖に限る

喪忌に關する布告

天明八申年七月十八日被　仰出

一忌中之者火事急事之節役所勤致候內　御目通へ罷出候儀不苦旨寶永八年被　仰出有之候付彌右被仰出候通相心得御供幷役所之面々　御殿中は勿論　御目通へ罷出候ても不苦

但御供に相立候儀は其節々御用達御目付へ差圖受可相勤事

文化元子年

一忌中なから發足江戶表へ立歸り御供に罷越候儀五十人組之頭問合す右は不苦

同十一戌年

一忌中に飾手桶長屋下へ出候儀　御着城之節は不苦

同十四丑年三月

一重役已上當主病死葬送之節高張爲持候儀問合右は不相成旨御目付中被申出併大寄合已上にても大躰は不相成筋候へ共右はいつとなく爲持來り有之旨物語あり候事

同年十二月十二日被　仰出

一忌中之者出火非常之節御供幷役所勤之向殿中は勿論御目通へ罷出候儀は其節々御用人御目付差圖を受可相勤旨天明八申年相極有之右は御供幷役所勤之外にても出殿可致向は右同樣相心得可申事

一御清之節出火非常之節有服之者出殿いたし候儀不苦事

御目通へ罷出候儀は憚可申候得共時宜に應し御目通へ可罷出儀も可有之其節々樣子に寄御用人御目付より差圖可致儀も可有之事

支配有之面々支配へも相達候樣

文政七申年

一御忌中之御家老盃に付長保寺へ燈籠御獻備否右は無用被成候樣答申上る尤右忌　御免有之候得は獻備被成候樣及御答候事

同八酉年

一都て支配有之向忌中に相成候節配下之儀に付進達書等政府へ差出候儀は仲間を以差出候へ共御用部屋御目付へ掛合諸届等は如何可有之哉と之儀問合す右は懸合諸届等は不苦乍併忌中には配下申渡は不致極に付右は同役を以申渡其段同役より誰忌中に付拙者より申渡候と之趣にて又は忌中之

仁より拙者忌中に付誰を以申渡候と之趣にて兩樣之内に申届候樣答あり

天保二卯年

一忌中内實父方伯母を見舞に罷越候儀且同人致病死候はゝ見送り候儀如何と問合す右は了簡無之旨

政府より答あり

同十三寅年

一何某稽古料被下候に付右親御禮廻勤可致處忌中に付右如何いたし可申哉と問合右は忌明之上廻勤

可致樣及答

一忌産穢　御免之向御手前　御家父樣方　御靈前初へ之御名代相勤候否之儀未た聢と不極候に付御

談之上極る右は不相勤筈候事

一御表樣より忌　御免有之候へは分て　一位樣より忌　御免無之候共西濱御殿へ罷出候儀不苦候事

一急事幷送式之節高張出し候儀平頭之無差別出候ても不苦事

一江戸詰之仁母看病にて罷歸居候處右母病死候處自分も病氣罷在しはらく養生致度旨願込有之仁右

母を葬送之節見送り候儀如何と問合右不相成答

一表御用部屋配下之内乍忌中出勤之儀其節々政府へ御談申上候へ共

父母は　三七日　其外　親類　半減

右過候得は分て不及談御用人にて取計候樣と之品被　仰聞有之事

慶應元丑年七月晦日

一御家中之子弟等稽古料被下有之向死失改名且他家へ養子被　仰付候品親々より直に御勘定奉行へ
相屆可申事

同二寅年二月十六日

一御家中之内病死致候を不致發表御宛行其儘戴居候筋粗有之趣相聞候右躰之義無之樣毎々被　仰出
も有之處不正之至如何之事候以來は御取調之上其品に寄跡式不被　仰付又は格祿減少可被　仰付
儀も可有之候條心得違無之樣可致事

右は有間敷事と雖も多人數之内閑散之職にて小身薄祿貧困之者は父之所務忽ち減削生計難立を憂
へ其死を秘し病中に裝ふ者も往々不尠後世法亦寛に流れ執法者知らざる分に見過し敢て其秘を發
くを憚るの傾きあり故に此發令に至る

慶應三卯年正月廿六日御目付より

一御目見以上以下父病死之節男子有無幷實子養子且年齡等之品分けて承りに遣し不申候間支配幷取
次支配は勿論夫々身分取扱元へ屆有之候はゝ左之品取調早々御申越候樣

誰實子又は養子　何　の　誰　年齡

初て　御目見相濟候否

一無足勤幷稽古料又は御銀等被下有之筋者其品月日等委細　但有無共

一養子に候はゝ被　仰付候年月日

但被　仰付候後改名致候はゝいつ比改候との事

一男子無之筋者名跡願之趣

維新後

明治二巳年五月廿九日

一御目見以上以下之面々病死之節は右屆書端書へ總領忰名前實子との品幷年齡且無足勤致候筋は其品をも左之振に相認支配々々より右屆書を以政事府へ可申出事

故誰 總領養子 何役 何の誰 何何歲

右は大改革御目付廢役に付て也

服穢忌

服穢とは總して忌服あるを穢れたるものとし神社は都て禁するの習ひ也故に紅葉山上野兩御宮東照宮御豫參御參詣和歌御宮御神事及ひ御參詣等之節有服產穢之者は御前邊は勿論出殿御供御名代共不相成之を殿中服忌御改めと稱す　伊勢大廟日光御宮に關する儀も同然なり服忌御改之原則傳はらす

文政二卯年十一月五日被　仰付候

一御清定之內　御宮へ御名代被遣候節御清之儀向後左之通御改正被遊候事

御宮御平月十七日

前日暮六時より御精進當朝六時より御清御遙拜相濟候後御清解暮六時打候後御精進解

一服穢之者當朝六時前退出後尅御用有之者は御清解迄部屋に扣罷在其日出殿候者も御清解を相待候に不及罷出是また部屋に扣罷在候筈

一御在江戸之節上野　御宮御在國之節和歌　御宮へ　御名代被遣候節共右之通候事
御清とは　若山之御潔齋をいふ　御參詣なき時は　御名代被遣　御清之間にて御遙拜被爲在

同十一子年
一御神事之處同日夕御着城に付御城にて服御改之儀問合候處右は御旅中之御儀に付　御留守方之通り服御改は無之答

産穢忌

妻出産之時は血穢れの義を以て服忌令面之通り七日間出勤を憚り届書を出して引籠る之を産穢引と稱す産穢　御免産穢なから出勤之事都て忌中に於けると同し
此他流産踏合の穢れあり服忌令に委し

文化十四丑年九月七日被　仰出
一産穢忌御免之向御城へ之御使は不相成御城へ之御供之儀御玄關迄は不苦營中へ上り候御供之儀は不相成筈　御豫參御供之節芝上野は勅額御門迄之御供は不苦筈右より内へ入候ては不相成筈紅葉山は更に不相成事其外は都て平常之通り
上使之節上使衆へ出會且目通へ罷出候儀不苦
尾水樣へ之御使幷御供老中方へ之御使等も不苦候事

流行病禁忌

寶曆十辰年五月

疱瘡痲疹水痘看病人幷同居之者

右自今　兩御屋敷共　御殿中遠慮仕候に不及尤未　御疱瘡御痲疹御水痘不被遊候　御姫様御子様方之　御前へ罷出候ても不苦との御事被　仰出候事

一御守殿方幷御內證向共右同斷遠慮に不及筈

安永四未年二月

一疱瘡痲疹水痘病人看病人御屋敷幷奥向遠慮之筈

一疱瘡病人は相見候日より三十五日過候はゝ肥立次第罷出可相勤

一痲疹水痘病人は三番湯掛候はゝ御番等可相勤

一疱瘡痲疹水痘看病人は三番湯掛候はゝ罷出番可相勤

但病家棟へたて看病不致候はゝ不及遠慮同棟之者看病不致候共遠慮仕候筈

一江戶御長屋住居之者は同棟にても御長屋壁を隔候はゝ不及遠慮

一御醫師之儀は病家へ見廻療治仕候はゝ行水仕衣服等相改候上は遠慮に不及

右之通遠慮可仕表向は不及遠慮

天明三卯年三月

一奥向之面々疱瘡痲疹水痘病人幷看病人　御殿へ罷出候儀は不相成儀被　仰出有之候得共自今不及遠慮筈

但於若山　御下屋敷義は是迄之通り相心得候様

享和三亥年五月

一疱瘡麻疹水痘看病人　御嫡子樣御座敷向幷　出御之節　御目通へ罷出候儀三番湯相濟候迄は差扣候振合に候得共向後不及其儀に御座敷向幷御姫樣方　御目通へ罷出候儀も右同樣之事

一疱瘡麻疹水痘致候當人より差上物等も已來無構差上可申候　御嫡子樣御座敷向幷表向にても　御目通へ罷出候義遠慮可仕候　御姫樣方御座敷向幷　御目通へ罷出候儀も遠慮可仕候

六畜食穢

牛　馬　百五十日但合火五日　　豚犬羊鹿猿猪七十日　合火同斷　但猪鹿合火一日

羚羊狼兎狸五日合火一日　　鷄五日　合火當日　玉子は魚と同し

一二足食穢　五辛に同し

一五辛前日暮六時より遠慮

大蒜（たひさん）はほひろ　茖葱（かくそう）ひともし　韮葱（きうそう）にら　蘭葱あさつき　興渠（とうお）くれなひ　此内興渠は古來より知不申候

右之日數不過内は　御宮へ不罷出候

合火とは食穢品を烹炙したる同火にて烹炙したる食品を飲食したるを云

出家願

寛文五年の法令により法令の部に記す出家希望之者は諸士の子弟と雖も出願の上允許を得百姓町人も向々へ出願を要す猥りに出家する事を得す

細　則

一御家中之面々末々共幷百姓町人之子弟厄介等出家之願相濟候はゝ其段頭支配より寺社奉行へ相屆候筈

一御家中之面々より出家望候子弟有之尤右望候親中奥役等にて內伺可差出御役柄に候とも內伺出候儀表御用部屋にては留記不相見候事依て爲見合記す

一出家願文例

何の誰

私厄介同苗誰儀何の何月改易被　仰付候處同人悴誰儀其節幼少に付私方へ差置御座候右之者何十何歲に(十三歲歟)罷成候然所兼々病身にて出家望罷在候付此節何宗何寺へ差遣出家爲仕度奉願候何寺儀も弟子に可仕旨申候尤類族にても無御座候已上

月

義　絶

家族又親戚之內兼々不心得不行跡にて父兄親戚之意見訓誡を用ひす更に改心せさる者は父兄又は親戚より義絕屆と云を出せは公認を得て除籍無關係となりたとへ本人犯罪所罰せらるゝ事あり共父兄親戚に連累を及さゝる也農商等にては勘當と稱する事あれ共士類には勘當を許されすその實は勘當に同き也然れ共父兄の恥辱本人の浮沈に關すを以容易には處分に及はす百方懲戒を施したる上万不

得止に出るものとす

文政元寅年十二月九日布告

一都て改易追放被　仰付候者又は致出奔候者へは是迄其親類より義絶いたし候事候得共右は致通路間敷事に付向後義絶達に不及事

本文之通に付是迄致義絶有之向歸參被　仰付候節和談之義分て相達不及候事

一是迄存寄等之品にて目上之親類を致義絶候儀も有之候得共右は向後可致遠慮事

但目上之親戚より致義絶候はゝ目下之者よりも通路不致との義可相達候事

維新後

明治二巳年五月十二日布告

一兼々不心得にて父兄幷身寄之者度々意見を加へ候得共更に改心之色無之剩へ出奔致し候者無據義絶除帳之儀願出情實取調させ之上聞置候儀も有之哉に候得共父子兄弟骨肉之親は終世可絶之理無之處右等容易に差許候儀大に風俗を害し不宜事に付向後義絶除帳禁止可致事

出奔

出奔立退は御國を見限るに當り不屆至極或は申分等於有之ては飽迄御吟味あるへき筈古へは往々追手を差向召捕又は打果を被命たり故に當主出奔は一類子弟出奔は父兄より不取敢行衛尋方を屆出彌不知に至て出奔を屆出命を待つの法也書置躰の物も無之と認むるは申分あつての事に無之を証するならん屆出之順序左之如し

私弟同苗誰儀昨幾日風と御門外へ罷出候處今朝に至り罷歸不申候付今明日之内心當り之所々相尋申度奉存候仍之御屆申上候以上

右之通支配へ差出尋之儀承屆候旨御目付より申越候段支配より達す

私弟同苗誰儀去る幾日御門外へ罷出候處罷歸不申候付昨日迄相尋候得共相見不申候付猶又今明日中心當之所々相尋申度奉存候との趣

右同樣相濟

私弟同苗誰儀去る幾日御門外へ罷出候處罷歸不申候付昨日迄心當之所々相尋候得共相見不申出奔仕候儀と奉存候尤書置躰之者も無御座との趣

右に付差扣申込書付出す　但右は江戸の例也若山も之に准す

一隱居之父出奔　安政四巳年於江戸

四月廿三日

私父隱居同苗又三郎儀病氣に付先達て願相濟武州世田ヶ谷横根村百姓乙右衛門と申者之方へ爲養生罷越居候處昨廿二日乙右衛門宅罷出今朝迄罷歸不申旨同人方より申越候右は途中病氣之程も難計御座候間今明日中心當り之所々相尋申度奉存候との趣

右之通支配方へ相屆候はゝ御目付中へ談に相成今明日中尋之儀被承屆候旨同役中被申聞候段支配方より達可有之事

私父隱居同苗又三郎儀去る廿二日出養生先世田ヶ谷百姓乙右衛門宅罷出不罷歸候付昨日迄心當り之所々相尋候得共見當り不申候付尚又今明日中心當之所々相尋申度奉存候との趣

右之通屆候はゝ前段同樣相濟む
四月廿七日
私父隱居同苗又三郎儀云々以下同文言也
右都て前條同斷也
四月廿九日
私父隱居同苗又三郎儀病氣に付先達て願相濟武州世田ヶ谷横根村百姓乙右衞門と申者方へ爲養生罷越居候處去る廿二日同人宅罷出罷歸不申候付昨日迄心當り之所々并近在等相尋候得共相見不申出奔仕候儀と奉存候尤書置躰之者も無御座候との趣
右之通支配へ屆候はゝ進達相成候事
一出奔立歸り
私弟同苗誰儀去る何年何月幾日風と御門外へ罷出罷歸不申候付心當り之所々相尋候得共行衞相知不申出奔仕候處今朝私居御長屋へ立歸候付取押始末相尋候處病氣違亂之躰に相見へ一向始末相分り不申候付召捕番人附置候との趣
右之通屆右立歸之仁取計振之儀御目付中へ達す其節右は彌心を附固め置候樣同役中より申來之而して後立歸候誰儀兄手前にて先押込置候樣年寄衆被　仰聞候旨御目付中より申來る
一姉女子出奔も都て右に准候事
何　之　誰
一出奔之姉引取願
私姉先達て出奔仕候付其段御屆申上候儀に御座候然處同人儀兼て病身にて折々違亂之躰に相成

候儀も御座候處右病氣にて前後不相辨家出仕候趣にて當時御領分在中に罷在候由然る處近頃相
煩介抱可仕者も無御座及渴候故之仕合に相成此節別て後悔仕罷在候由內々手寄之者より申越候
一旦出奔仕候者之儀に付奉願候儀は甚以奉恐入候へ共件之通之樣子に御座候付可相成儀に御座
候へは私方へ引取養生爲仕度奉願候以上

一出奔之父他所にて病死知らせ來る時之屆 於江戶

私父隱居同苗又三郎先達て致出奔候處同人病氣之由にて且那寺青山久保町持法寺へ今朝罷越候
付早速手當いたし候得共養生不相叶病死致し候段右寺より申來候付定式之忌服今日より忌中罷
在候との趣

維新後

明治二巳年五月廿九日執政より布告

一御家中之面々末々に至迄當主幷子弟厄介等家出いたし候得は一類且父兄等より行衞相尋彌不見當
上へ出奔屆差出候振合にて彼是之內日合相立手後れ相成甚不都合に有之殊に近來脫籍人之儀に付
ては　天朝追々被　仰出之趣も有之右躰之者は早速引戾し方取計不申候ては不相成儀に付向後
家出いたし候者有之候はゝ右行衞御尋被成下候樣との儀早々可申出候はゝ右尋方上より御取計可
被成下候間前段從　天朝被　仰出之御趣意篤と相畏り心得違不申樣可致事
件之通候得共彌不見當出奔屆差出候節は其者之年齡認込不洩樣公用局へも可相屆事
五月廿九日

打捨及異死

御條目に下人及介斬戮者先組頭へ可相達との條ありて不逞之子弟及慮外不禮及ひたる下人等は手打不苦は從來之法により往々其事あり然る時且邸宅前等に異死人ある節は速に頭支配御目付可達法也左に近例を示す打捨は明治三年二月禁止せらる法令の部に詳也

一寶暦六子年七月西村彌兵衛總領亂心致し手向に付打捨候旨屆出る

一寬政八辰年某悴先達て出奔之處立歸不屆之品相違成儀等申掛難差置昨夜手打致したる旨屆出る
　右は御日柄之處暫時も其儘難差置仕合に付御日柄と乍存打捨恐入迷惑差扣罷在度旨申込をなしたるに不及其儀と指令あり

一文化四卯年十一月十三日某次男誰用事有之今日より若山へ罷越今夜海士郡吉原村へ立歸之節坂田領切迫邊何者とも不知無刀之者棒を以手向候付不得止事打捨尤打留候所は吉原村にて候旨頭へ申屆る
　右續合之者服忌は無差別定式之通り受之

一天保四巳年七月廿二日武部尙齋總領誰畑屋敷町何と申者借家に罷在何と申者兼て慮外之品有之其儘難差置付家主何と申者宅へ罷越右同所に打捨候旨屆出る
　右御用番年寄衆へ申達し御目付へ屆る

一異死屆之文例
　右打捨たる死骸を宅へ引取たるを以御目付より手前相糺し不念書差出す

以切紙啓上仕候今日夕七時比親同苗誰屋敷構外に異死之者有之由に付早速家來差遣爲致見分候處年齡何十何才計之男女手疵にて有之候哉相果有之候尤いつれ之者とも相知不申候依之御屆申上候以上

尙々右に付番人附置申候

右御用番年寄衆へ達し御目付より死骸片付させ候間いつれにても立合候樣差圖す

宗旨改

耶蘇宗門（切支丹宗と云）は天下之大禁にして御家御條目第二條に耶蘇宗門に疑敷者有之は早々可申出とあり依て御家中初國中一般之宗門改を毎年春季擧行の事往古より之法度とす御家中の宗門は毎歲三月に面々各々より寺社奉行宛之誓文狀寺手形を組付之者は頭支配へ僚屬之者は長官へ出す頭支配長官は自己責任之一紙誓文狀に仕替へ寺社奉行へ出し其余は悉く直接寺社奉行へ出し上下微賤に至る迄一人も洩るゝ事なからしむ

在町之改めは國中の寺院各派各宗に於て其檀下の男女八歲已上之者を一人每に呼寄せ切支丹宗門に無之哉改宗せさるやを改め証印を取る之を判改め又は判押とも云各寺院よりは改濟を寺社奉行に達す如斯一國之改め結了すれは寺社奉行より之を執政に上達而して國中一人も切支丹宗門に無之旨を幕府の寺社奉行へ達せらるゝ成規なり數百年之慣行深く人心に入て習俗風をなし令せすして行われし也

一右之如しと雖も別に類族と稱する者あり其義詳ならされ共按に島原亂の記に宗門をころひ云々の語あり蓋し一旦切支丹宗に入り後悔して宗を轉したる義ならん島原亂後宗門の改甚嚴重と雖も悔悟自首訴人等は其罪を被宥とあれは一旦宗族に入りて悔悟改宗したる者を類族と稱せしか此類族なる者若山にも少分ありて代々類族の家とし宗門改にも類族たる事を証する迄にて別に變りたる事なく幕府へも類族之者は先年吟味之通相違無之旨を被達分なり思ふに類族の家は寺社奉行の官簿に登記し万一復宗等なさんやを監査せしめしならん依て類族者の死失改名進退去就は特に寺社奉行に屆出しむ亦儀式的のみにして固より勤務交際に妨けなき也

誓文狀案

就切支丹宗門御改一札之事 用紙美濃

一私親祖父之代勿論拙者幷何々に至迄切支丹宗門少之內も不罷成候代々何宗にて何所何寺旦那にて御座候則右寺より各へ直手形可參候何々も同宗同寺之旦那にて御座候

一召仕之者旦那寺之手形取請狀にも寺請之儀爲書男女八歲以上堅相改親祖父之代其身妻子に至迄切支丹宗門に少之內も不罷成候若於僞は日本之神しゆらめんとの可蒙御罰と誓紙爲致候年を重罷在候者は先年之誓紙之通無相違由手形取置申候此以後召抱候者も右同前相改可申候

支配有之面々は左之文言を加筆

一何々支配之面々右同前に致吟味其身妻子は不及申下々に至迄相改させ誓文狀寺手形取置申候

類族之者有之は左之通

一右支配之內切支丹類族之者は先祖宗門先年御吟味相濟候通相違無御座候旨手形取置申候

右之趣於僞は切支丹しゆらめんと日本之神可蒙御罰者也

年號何年支三月　　　　何之誰書判

寺社奉行連名殿

寺手形

宗旨證文之事　口上

一何の誰と申仁幷何々共代々何宗にて當寺爲旦那事紛無御座候爲後日依て一札如件

年號何年支三月　　　　所書　何寺印

寺社奉行連名殿

享保四亥年三月極る

一類族之者他國へ參候節は頭支配より寺社奉行中へ届候筈

同年

一類族之輩御役人にて支配離れ候へは寺社奉行中へ届候事

同十三申年二月

一御用部屋物書類族小島文左衞門儀江戸へ參候付右届之品寺社奉行中へ聞合候處右文左衞門何月幾日此表發足候と之儀御用達より寺社奉行中へ届候筈之旨返事中參有之事

同十四酉年

一浦上七郎兵衞妻女子出生に付寺社奉行中へ届候處女子は類族に不出筋候間自今替品届に不及旨此

已後男子出生に候はゝ無滯屆候樣申來七郎兵衛儀は類族也

享保十五戌年

一竹中兵藏母類族之處此度剃髮いたし名も改度旨願出候に付寺社奉行中へ承合候處總て類族之者名改之儀は願入候事然共女儀之事は内分にて剃髮法名唱候儀は其通之事候兵藏母類族に付て之諸屆は是迄之通俗名を以屆候樣にと答あり

年月不知

一類族之者名改願之節は右支配より御年寄衆へ相達候前に寺社奉行中へ申遣答之由且又名之儀先祖之名にて無之候へは不相濟品には無之右總て屆け筋之儀十四ヶ條之趣前々之通にて相改り候品にては無之由申來

箇條定書

一宗旨并旦那寺を替候事

一養子取遣之事

一出家に成事

一他國へ參事

一緣付之事

一諸士并下人にても江戶へ參事

一名字并名を替る事

右七ヶ條は前以可相斷事

一死　去

一出　生

一町と在郷へ住所を替申事

一夫婦離別之事

一町人と奉公人とは不申及總て家業家職を替事

一奉公人主人手前出替之事

一欠落之事

右七ヶ條は其時節委細可相斷事

一類族之者死去之節は改等入申事候間其節寺社奉行中へ具に承合可有作略事

一類族之者縁組願相濟申渡之節寺社奉行中へ相屆尤婚儀相濟候節類族之番人より判取之證文差出させ候事

天保二卯年五月

一類族之筋之子弟他家へ養子に遣候節右願不差出已前寺社奉行中へ相屆之儀極之通候就夫貰方ゟも同樣相屆之儀に候哉と同役中へ承合候處右は遣方ゟ談有之儀に付貰方よりは分て不及談旨答あり

一享保八卯年稽古料取廣瀨忠太夫病死に付右家より宗(文〔門カ〕)狀いつれへ可差出哉との儀問合尤外に一類も且支配も無之由忠太夫之弟より問合其段御目付中へ及談候處右之通支配も無之候はゝ右之弟

より表御用部屋へ差出候筋之旨答あり
一右之通候處寶暦六子三月廿四日佐野兵大夫弟に稽古料取同苗又市と申仁有之然處右兄兵太夫追放
被　仰付候に付右又市より宗門狀出振問合候に付評議之上前段同樣宗門狀は又市より表御用部屋
へ出させ有之候事
嘉永六丑年三月御目付より答
一誓文狀寺手形三月中に差出候極に候事
但三月に病死いたし候共誓文狀寺手形差出候後に候はゝ分けて認直しに不及事
維　新　後
慶應四辰年三月八日於江戶布達
一誓文狀寺手形之儀追て相達候迄は差出に不及事
右は幕府瓦解によつて也
明治二巳年三月執政より布達
一宗門狀認振之儀以來左之通可相認事
切支丹宗門御改之儀彌相守召仕之者に至迄遂僉儀不審成者無御座候尤何宗何寺且那にて各へ直
手形可參候
右之趣於僞は日本之神可蒙御罸者也
何何年何三月

一明治三年年七月神祇官へ伺之上士民の神葬を許さる該神葬の者は何村何神社氏下にて切支丹類族には無之との誓紙を取り可改との事法令の部に記する如し

何の誰　殿

御藥拜領願

一烏犀圓拜領之儀三度目迄は自分願四度目よりは同役願に相成候筈尤四度目願よりは矢張最初之通奥御醫師添書可出事

一烏犀圓拜領之儀に付頭有之向は右願書頭より切紙にて御用人へ差出候儀不相成いつれ自分に罷出書付可差出事

一右御藥拜領いたし候へは御禮廻勤可致事

文化元子年

一右御藥御供番頭已上頂戴之節は奥御醫師之添書には不及候事

天保十二丑年

一烏犀圓拜領之儀頭有之面々は頭より右願書を差出候儀大御番頭より談有之候得共右は不整候事

一右御醫師之添書に印形無之候はゝ差支候との品右同年に極あり

拜領

何の誰

一私儀麻痺之症相煩候に付烏犀圓拜領仕度奉願候已上

昭和七年十二月五日印刷
昭和七年十二月十八日發行

南紀德川史 自第百十六卷 至第百廿四卷

No. 396

第十三回配本

編輯者 堀内信

和歌山市宇須町三百七十八番地
發行者 山崎順平

和歌山市新堀四丁目三番地
印刷者 福本芳太郎

和歌山市新堀四丁目三番地
印刷所 福本印刷所

和歌山市宇須町三百七十八番地
發行所 南紀德川史刊行會
振替口座大阪四五八五二番